

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第6集

九州大学筑紫キャンパス遺跡群
(御供田遺跡)

総括報告書 2

—古墳時代・古代・中世編—



2021

九州大学埋蔵文化財調査室

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第6集

九州大学筑紫キャンパス遺跡群
(御供田遺跡)

総括報告書 2

—古墳時代・古代・中世編—



2021

九州大学埋蔵文化財調査室

表紙について

表紙は、九州大学のシンボルカラーであるワインカラーに、九州大学馬出キャンパスや箱崎キャンパスの調査で出土した食器に施されていた「九」をあしらって図案化したものである。

(デザイン担当：石井若香菜)

序 文

九州大学では、1978年に春日原地区埋蔵文化財調査室を設置し、春日原キャンパス（現、筑紫キャンパス）の施設整備による埋蔵文化財調査を実施してきた。2000年には春日原地区埋蔵文化財調査室は、全学を対象とする九州大学埋蔵文化財調査室に改組したが、2007年に春日原地区キャンパスの施設整備が終了したところから、一時閉鎖となった。この間、56次に渡る発掘調査を実施し、1998年までに5冊の発掘報告書を刊行してきた。しかしながら、すべての発掘報告書の刊行が終了していなかったところから、調査室閉鎖後間もなく、1名の学術研究員を雇用して、春日原地区埋蔵文化財調査の未整理資料の整理を続けてきた。2015年には、箱崎キャンパス売却予定地の埋蔵文化財調査が必要となり、九州大学埋蔵文化財調査室を再整備し、箱崎キャンパスの埋蔵文化財調査を実施することとした。この状況にあたって、春日原地区の埋蔵文化財整理事業を終了する必要性が生まれた。このため、整理調査のための特別予算を2016年度から2020年度まで獲得し、整理調査を実施してきた。

この整理調査事業に伴い、2020年3月に『九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）総括報告書1－縄文・弥生時代編－』を刊行した。この度は、その続編である『九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）総括報告書2－古墳時代～中世編－』を刊行することとなった。昨年刊行した前編と併せて九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）の全容を明らかにすることができた。さらに本編では、全体のまとめを行い、縄文時代から中世に至る九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）の歴史的な位置づけを行った。

本編も、前編同様に、九州大学埋蔵文化財調査室運営委員会の方々にお手伝いいただき、その専門分野から分担執筆をお願いした。執筆いただいた各位に感謝申し上げたい。また、この5年間に渡って、総括報告書のための整理調査にあたられた石川健学術研究員（現、九州大学埋蔵文化財調査室助教）にも感謝申し上げたい。まさに、九州大学の考古学関係者が一丸となって本総括報告書を完成させてと言っても過言ではないであろう。さらに、事務にあたられた九州大学統合移転推進本部にも深甚の謝意を表すところである。

ここに『九州大学埋蔵文化財調査室報告 第6集』として九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）総括報告書第2分冊が刊行され、春日原地区埋蔵文化財調査事業が終了したことになる。九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室設置以来40年以上が経ち、本事業が終了することに感慨深いものを感じるとともに、九州大学として筑紫キャンパスの埋蔵文化財保護事業の責務を果たしたと思われる。

令和3（2021）年1月5日

九州大学埋蔵文化財調査室長
宮本 一夫

例 言

1. 本書は1979年11月から1998年9月まで九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室が実施した九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）における埋蔵文化財発掘調査の古墳時代から中世にかけての総括報告書である。
2. 発掘調査は九州大学春日原地区埋蔵文化財調査委員会のもと九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室が実施した。
3. 本総括報告書の作成にあたり、出土遺物の再整理をおこなった。参加者は以下のとおりである。青山伸枝、石木晴香、石丸千恵、犬山真弓、岩谷幸恵、瓜阪文太、遠藤望、岡本眞理奈、尾座本洋子、小名眞理子、坂口由美子、白川城子、菅田泰子、高崎浩子、富田文代、富田麗子、西田めぐみ、野田勝彦、濱古賀美和、前浦弘毅、前原吉信、前田典美、丸野明奈、毛利瑞穂、山口弥生、吉田雄紀 また、雨天の際などは箱崎キャンパスの発掘調査作業員の方々にも整理業務に参加していただいた。
4. 出土遺物の実測は、石木晴香、尾座本洋子、遠藤望、濱古賀美和、石川健が行った。遺物図面の製図は菅田泰子、尾座本が担当した。遺物実測の一部と製図は株式会社パスコにも業務委託した。また、遺構図の製図は株式会社パスコに業務委託した。遺物写真は『奴国の南』作成時に撮影したものに加え、一部を今回撮影した。なお、図60-335は辻田淳一郎氏より御提供いただいた。
5. 本書に使用した2万5千分の1地形図は、国土交通省国土地理院が発行した『福岡南部』、『太宰府』、『不入道』である。
6. 巻末に掲載した出土遺物観察表における土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修（1967）『新版標準土色帖』を使用した。
また観察表には西健一郎氏刊行『九州大学埋蔵文化財調査報告—九州大学筑紫地区遺跡群—』第1冊～第3冊掲載資料との対応関係が確認できたものについては上記報告書掲載挿図番号・遺物番号を記載した。ただし、西氏により報告された資料のうち全てが今回の整理作業において確認されたわけではない。一方、今回新たに報告した資料も少なからず存在する。それらについては対応関係の記載をしていない。
7. 本書で使用する遺構記号は、以下の通りである。
SD：溝、SK：土坑、SB：住居跡、SX：その他。なお、遺構番号については、西氏による報告書との対応関係を把握できるよう、調査時の番号をそのまま踏襲した。
8. 本書Ⅰ～Ⅱ・Ⅴは石川が執筆した。Ⅲ、Ⅳは著名論文とし、Ⅲ-1を石田智子（鹿児島大学法文学部）、Ⅲ-2を上條信彦（弘前大学人文社会科学部）、田中克典（同・農学生命科学部）、伊藤 茂・安 昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林絃一・Zaur Lomtadize（パレオ・ラボ AMS年代測定グループ）、Ⅲ-3を九州文化財研究所が執筆した。Ⅳ-2を辻田淳一郎（九州大学大学院人文科学研究院）、Ⅳ-3を田尻義了（九州大学アジア埋蔵文化財研究センター）、Ⅳ-4を宮本一夫（九州大学埋蔵文化財調査室長）、Ⅳ-5を坂上康俊（九州大学大学院人文科学研究院）、Ⅳ-6および7を岩永省三（九州大学総合研究博物館）、Ⅳ-8を谷直子（九州大学埋蔵文化財調査室）、Ⅳ-1・9を石川が執筆した。
9. 本書に掲載した調査記録および出土遺物はすべて、九州大学埋蔵文化財調査室が収蔵保管する。今後、教育研究の場で積極的に活用されることが期待される。
10. 本遺跡群の今回の整理・報告作業にあたって、以下の方々から格別のご指導、ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。
石木秀啓、小澤佳憲、加藤友康、亀田修一、川尻秋生、黒濱玉恵、寺井誠、舟山良一、矢越葉子、山路直充、山村信榮、吉村武彦（敬称略、五十音順）
また、本業務を行うにあたり統合移転推進部統合移転推進課の皆様をはじめ、埋蔵文化財調査委員会・埋蔵文化財運営委員会の諸先生方には大変お世話になった。記して感謝申し上げたい。
11. 本書の編集は石川が行い、宮本が監修した。

目次

序文

例言

| | | |
|-----|------------------------------|---|
| I | 筑紫キャンパス遺跡群と周辺の遺跡（古墳時代～古代・中世） | 1 |
| II | 調査の結果 | |
| 1 | 調査概要 | 7 |
| 2 | 古墳時代から古代・中世の遺構と遺物 | 7 |
| 1. | エリアⅠ | 7 |
| | 1) 住居跡 2) 土坑 3) 井戸 4) 溝 | |
| | 5) その他の出土遺物 | |
| 2. | エリアⅡ | 53 |
| | 1) 住居跡 | |
| | 2) その他の出土遺物 | |
| 3. | エリアⅢ | 85 |
| | 1) 住居跡 | |
| | 2) その他の出土遺物 | |
| 4. | エリアⅣ | 91 |
| | 1) 住居跡 | |
| | 2) 推定灰原出土遺物 | |
| | 3) 溝 | |
| | 4) その他の出土遺物 | |
| | 5) 出土地不明遺物 | |
| III | 理化学分析の結果 | |
| 1 | 九州大学筑紫地区遺跡出土土器の胎土分析 | 石田 智子 135 |
| 2 | 出土炭化米の形質・DNA・年代 | 上條信彦・田中克典・伊藤 茂・安 昭炫・佐藤正教・ 廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadze 145 |
| 3 | 出土木製品の保存処理 | 株式会社 九州文化財研究所 保存科学研究室 153 |

IV 考察

| | | |
|-------------------------------|-------|-----|
| 1 古墳時代から古代・中世にかけての遺構の時期と分布の推移 | 石川 健 | 163 |
| 2 筑紫地区遺跡群出土石釧をめぐる諸問題 | 辻田淳一郎 | 173 |
| 3 筑紫地区遺跡群出土須恵器生産関連遺物の位置づけ | 田尻 義了 | 181 |
| 4 鉄器からみた筑紫キャンパス遺跡群 | 宮本 一夫 | 185 |
| 5 筑紫キャンパス遺跡群出土文字資料の再検討 | 坂上 康俊 | 193 |
| 6 筑紫キャンパス遺跡群出土瓦の意義 | 岩永 省三 | 209 |
| 7 官道とその周辺の土地利用 | 岩永 省三 | 216 |
| 8 筑紫キャンパス出土の木製品 | 谷 直子 | 229 |
| 9 瓦器焼成遺構関連遺物について | 石川 健 | 239 |

| | |
|------------|-----|
| V 調査の成果と課題 | 247 |
|------------|-----|

| | |
|-------|-----|
| 遺物観察表 | 251 |
|-------|-----|

写真図版

報告書抄録

挿図目次

| | | |
|---|-------------------------|----|
| I 筑紫キャンパス遺跡群と周辺の遺跡（古墳時代～古代・中世） | 図16 SK303出土遺物（S=1/4） | 16 |
| 図1 九州大学筑紫キャンパス遺跡群と御供田遺跡（S=1/10000, 舟山編2017より一部改変） | 図17 10F区 SK430 | 17 |
| 図2 九州大学筑紫キャンパス遺跡群内の調査区および旧地形（S=1/6000） | 図18 SK430出土遺物（S=1/4） | 17 |
| 図3 周辺の遺跡（S=1/50000） | 図19 10F区 SK436 | 18 |
| II 調査の結果 | 図20 SK436出土遺物（S=1/4） | 18 |
| 図4 エリアI・遺構配置図（古墳時代以降）（S=1/750） | 図21 10F区 SK442 | 18 |
| 図5 8C区 SB106 | 図22 SK442出土遺物（S=1/4） | 19 |
| 図6 SB106出土遺物（S=1/4） | 図23 11E区 SK533 | 20 |
| 図7 8D区 SB109 | 図24 SK533出土遺物（S=1/4） | 20 |
| 図8 SB109出土遺物（S=1/4） | 図25 11E区 SK534 | 20 |
| 図9 10F区 SB409 | 図26 SK534出土遺物（S=1/4） | 20 |
| 図10 SB409出土遺物（S=1/4） | 図27 11E区 SK535 | 21 |
| 図11 8E区 SK205 | 図28 SK535出土遺物（S=1/4） | 21 |
| 図12 SK205出土遺物（S=1/4） | 図29 11E区 SK542 | 22 |
| 図13 9C区 SK224・SK225 | 図30 SK542出土遺物（S=1/4） | 23 |
| 図14 SK224・SK225出土遺物（S=1/4） | 図31 11F区 SK544 | 24 |
| 図15 10D区 SK303 | 図32 SK544出土遺物（S=1/4） | 24 |
| | 図33 11F区 SK546 | 25 |
| | 図34 SK546出土遺物（S=1/4） | 26 |
| | 図35 11F区 SK548 | 27 |
| | 図36 SK548出土遺物（1）（S=1/4） | 28 |
| | 図37 SK548出土遺物（2）（S=1/4） | 29 |

| | | | | | |
|-----|---------------------------------------|----|------|--|-------|
| 図38 | 8C区 SE101 | 29 | 図88 | SB228出土遺物 (S=1/4) | 72 |
| 図39 | SE101出土遺物 (S=1/4) | 30 | 図89 | 8H区 SB203 | 73 |
| 図40 | 8E区 SE301 | 31 | 図90 | SB203出土遺物 (S=1/4) | 74 |
| 図41 | SE301出土遺物 (S=1/4) | 32 | 図91 | 7・8H区 SB207 | 74 |
| 図42 | 10F区 SE401 | 33 | 図92 | SB207出土遺物 (S=1/4) | 75 |
| 図43 | SE401出土遺物 (1) (S=1/4) | 34 | 図93 | 8H区 SB225 | 76 |
| 図44 | SE401出土遺物 (2) (S=1/4) | 36 | 図94 | SB225出土遺物 (S=1/4, 石器:S=1/3) | 77 |
| 図45 | SE401出土遺物 (3) (S=1/4) | 37 | 図95 | 8H区 SB226 | 78 |
| 図46 | SE401出土遺物 (4) (S=1/4) | 38 | 図96 | SB226出土遺物 (S=1/4) | 79 |
| 図47 | 10G区 SE402, SE403 | 39 | 図97 | エリアII東部 遺構配置図 (S=1/750) | 80 |
| 図48 | SE402出土遺物 (S=1/4) | 40 | 図98 | エリアIIその他の出土遺物 (1) 2I区溝及び 包含層出土瓦 (S=1/5) | 81 |
| 図49 | SE403出土遺物 (S=1/4) | 41 | 図99 | エリアIIその他の出土遺物 (2) H.7調査I区 溝, 4I区溝及び包含層出土瓦 (S=1/5) | 82 |
| 図50 | 11G区 SE502 | 41 | 図100 | エリアIIその他の出土遺物 (3) 4I区溝及び 包含層出土瓦 (S=1/5) | 83 |
| 図51 | SE502出土遺物 (S=1/4) | 42 | 図101 | エリアIIその他の出土遺物 (4) エリアII出土 軒丸瓦と鬼瓦 (S=1/5) | 84 |
| 図52 | 8・9-C・D区 SD101 | 43 | 図102 | エリアIII北部 遺構配置図 (S=1/750) | 85 |
| 図53 | SD101出土遺物 (1) (S=1/4) | 43 | 図103 | 6L区 SB001 | 86 |
| 図54 | SD101出土遺物 (2) (S=1/5) | 44 | 図104 | SB001出土遺物 (S=1/4) | 87 |
| 図55 | 7・8・9-B・C区 SD108 | 45 | 図105 | エリアIII南部 遺構配置図 (S=1/750) | 88 |
| 図56 | SD108出土遺物 (1) (S=1/4) | 45 | 図106 | SX302B出土遺物 (S=1/4) | 88 |
| 図57 | SD108出土遺物 (2) (S=1/4) | 46 | 図107 | SX302C出土遺物 (S=1/4) | 89 |
| 図58 | SD108出土遺物 (3) (S=1/4) | 47 | 図108 | エリアIIIその他の出土遺物 SX302及び5N整 地層出土瓦 (S=1/5) | 90 |
| 図59 | SD108出土遺物 (4) (S=1/5) | 48 | 図109 | エリアIV北部 遺構配置図 (S=1/750) | 92 |
| 図60 | エリアIその他の出土遺物 (1) SD316出土石鈿 (S=1/2) | 49 | 図110 | エリアIV南部 遺構配置図 (S=1/750) | 93-94 |
| 図61 | エリアIその他の出土遺物 (2) SD307出土瓦 (S=1/5) | 50 | 図111 | 12H区 SB413 | 95 |
| 図62 | エリアIその他の出土遺物 (3) SD408出土瓦 (S=1/5) | 51 | 図112 | SB413出土遺物 (S=1/4) | 95 |
| 図63 | エリアIその他の出土遺物 (4) SX303出土瓦 (S=1/5) | 52 | 図113 | 12H区 SB414 | 96 |
| 図64 | エリアII西部 遺構配置図 (S=1/750) | 53 | 図114 | SB414出土遺物 (S=1/4) | 97 |
| 図65 | 7G区 SB204 (A) | 54 | 図115 | 13N区 SB701 | 98 |
| 図66 | SB204 (A) 出土遺物 (S=1/4) | 55 | 図116 | SB701出土遺物 (S=1/4) | 98 |
| 図67 | 7G区 SB205 (B) | 56 | 図117 | 13N区 SB702 | 99 |
| 図68 | SB205 (B) 出土遺物 (S=1/4) | 56 | 図118 | SB702出土遺物 (S=1/4) | 99 |
| 図69 | 7G区 SB210 | 57 | 図119 | 13N区 SB703 | 100 |
| 図70 | SB210出土遺物 (S=1/4) | 57 | 図120 | SB703出土遺物 (S=1/4) | 100 |
| 図71 | 7G区 SB212 | 58 | 図121 | 13N区 SB705 | 101 |
| 図72 | SB212出土遺物 (S=1/4) | 59 | 図122 | SB705出土遺物 (S=1/4) | 102 |
| 図73 | 7G区 SB215 | 60 | 図123 | 11I区 SX402 | 103 |
| 図74 | SB215出土遺物 (S=1/4) | 60 | 図124 | SX402出土遺物 (1) (S=1/4) | 104 |
| 図75 | 7G区 SB216 | 61 | 図125 | SX402出土遺物 (2) (S=1/4) | 105 |
| 図76 | SB216出土遺物 (S=1/4, 石器:S=1/3) | 62 | 図126 | SX402出土遺物 (3) (S=1/4) | 106 |
| 図77 | 7G区 SB217 | 63 | 図127 | SX402出土遺物 (4) (S=1/4) | 107 |
| 図78 | SB217出土遺物 (S=1/4) | 64 | 図128 | SD623木製品出土状況 | 108 |
| 図79 | 7H区 SB208 | 65 | 図129 | SD623出土遺物 (S=1/4) | 109 |
| 図80 | SB208出土遺物 (S=1/4) | 66 | 図130 | SD701・SD702 | 110 |
| 図81 | 7H区 SB209 | 67 | 図131 | SD702出土遺物 (S=1/4, 石器:S=1/3) | 111 |
| 図82 | SB209出土遺物 (S=1/4) | 67 | 図132 | SD701出土遺物 (1) (S=1/4) | 113 |
| 図83 | 7H区 SB213 | 68 | 図133 | SD701出土遺物 (2) (S=1/4) | 114 |
| 図84 | SB213出土遺物 (S=1/4) | 69 | 図134 | SD701出土遺物 (3) (S=1/4) | 115 |
| 図85 | 7G・H区 SB214 | 70 | 図135 | SD701出土遺物 (4) (S=1/4) | 116 |
| 図86 | SB214出土遺物 (S=1/4) | 71 | 図136 | SD701出土遺物 (5) (S=1/4) | 117 |
| 図87 | 7H区 SB228 | 72 | | | |

| | | | | | |
|-------|--|---------|------|--|---------|
| 図137 | SD701出土遺物 (6) (S=1/4) …………… | 118 | IV 2 | 筑紫地区遺跡群出土石釧をめぐる諸問題 | |
| 図138 | SD701出土遺物 (7) (S=1/4) …………… | 119 | 図169 | 九州出土腕輪形石製品の分布 …………… | 176 |
| 図139 | SD701出土遺物 (8) (S=1/5) …………… | 120 | 図170 | 宮崎県板平遺跡出土車輪石片 (S=1/1) …… | 176 |
| 図140 | SD701出土遺物 (9) (S=1/5) …………… | 121 | | | |
| 図141 | SD701出土遺物 (10) (S=1/5) …………… | 122 | IV 3 | 筑紫地区遺跡群出土須恵器生産関連遺物の位置 づけ | |
| 図142 | SD701出土遺物 (11) (S=1/5) …………… | 123 | 図171 | 須恵器生産関連木器 (1~3 : S=1/4・4・5 : S=1/2) …………… | 182 |
| 図143 | SD701出土遺物 (12) (S=1/5) …………… | 124 | IV 4 | 鉄器からみた筑紫キャンパス遺跡群 | |
| 図144 | SD701出土遺物 (13) (S=1/5) …………… | 125 | 図172 | 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土鉄器 (1) …………… | 186 |
| 図145 | SD701出土遺物 (14) (S=1/5) …………… | 126 | 図173 | 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土鉄器 (2) …………… | 187 |
| 図146 | SD701出土遺物 (15) (S=1/5) …………… | 127 | 図174 | 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土鉄器 (3) …………… | 188 |
| 図147 | エリアIV・その他の出土遺物 (1) SD417出土 瓦 (S=1/5) …………… | 128 | 図175 | 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土鉄器 (4) …………… | 189 |
| 図148 | エリアIV・その他の出土遺物 (2) 11M 区出土 瓦 1 (S=1/5) …………… | 129 | 図176 | エリアIV出土鉄滓分布図 …………… | 191 |
| 図149 | エリアIV・その他の出土遺物 (3) 11M 区出土 瓦 2 (S=1/5) …………… | 130 | 図177 | SX001・002出土鉄滓と SD701出土埴塼 …… | 192 |
| 図150 | エリアIV・その他の出土遺物 (4) 11M 区出土 瓦 3 (S=1/5) …………… | 131 | | | |
| 図151 | エリアIV・その他の出土遺物 (5) 12-14・KL 区 SX001,SX002出土瓦とエリアIV出土軒平瓦 (S=1/5) …………… | 132 | IV 5 | 筑紫キャンパス遺跡群出土文字資料の再検討 | |
| 図152 | エリアIV・その他の出土遺物 (6) 12-14・KL 区 SX001,SX002および周辺出土遺物 (権 S=1/2, そのほか S=1/4) …………… | 133 | 図178 | 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器 (1) (S=1/3, 写真は任意) …………… | 193 |
| 図153 | その他の出土遺物 出土地不明鬼瓦 (S=1/5) …………… | 134 | 図179 | 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器 (2) (S=1/3, 写真は任意) …………… | 194 |
| | | | 図180 | 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器 (3) (S=1/3, 写真は任意) …………… | 195 |
| III 1 | 九州大学筑紫地区遺跡出土土器の胎土分析 | | 図181 | 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器 (4) (S=1/3, 写真は任意) …………… | 196 |
| 図154 | 分析対象遺跡と地質環境 …………… | 135 | 図182 | 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器 (5) (S=1/3, 写真は任意) …………… | 197 |
| 図155 | 分析対象資料実測図 (S=1/6) …………… | 136 | 図183 | 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器 (6) (S=1/3, 写真は任意) …………… | 198 |
| 図156 | 主要成分のハーカー図 …………… | 138 | 図184 | 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器 (7) (S=1/3) …………… | 200 |
| 図157 | 微量成分のハーカー図 1 …………… | 139 | 図185 | 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器 (8) (S= 写真は任意) …………… | 201 |
| 図158 | 微量成分のハーカー図 2 …………… | 140 | 図186 | 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器 (9)・ヘラ書き須恵器 (S=1/3) …………… | 202 |
| 図159 | La と Cr の相関 …………… | 141 | 図187 | 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器 (10)・ヘラ書き須恵器 (S= 写真は任意) …… | 203 |
| | | | 図188 | 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土木簡 (S=1/3 : 写真は任意) …………… | 206 |
| III 2 | 出土炭化米の形質・DNA・年代 | | | | |
| 図160 | 暦年較正結果 …………… | 147 | IV 7 | 官道とその周辺の土地利用 | |
| 図161 | 周辺における弥生時代前期中葉~中期前半の粒 型・粒大 …………… | 148 | 図189 | 官道土橋遺構 SX301断面図 (S=1/80) …… | 217 |
| 図162 | 6G 区398掘立柱建物跡 P-1出土米写真 …… | 152 | 図190 | 九大筑紫キャンパス周辺の関連遺跡 …… | 219-220 |
| | | | 図191 | 筑紫キャンパス遺跡群出土丸軋・硯 …… | 225 |
| III 3 | 出土木製品の保存処理 | | | | |
| 図163 | 試験方法 a : 試料24-0010と試験方法 b : 試料24- 0018の実験経過 …………… | 157 | IV 8 | 筑紫キャンパス出土の木製品 | |
| 図164 | 試験方法 c : 試料24-0007と試験方法 d : 試料24- 0013の実験経過 …………… | 159 | 図192 | 出土木製品 (1) (1~3 : S=1/8・4~10 : S=1/4) …………… | 230 |
| 図165 | 試験方法 a-d : 試料24-0008 の実験経過 …… | 160 | 図193 | 出土木製品 (2) (S=1/4) …………… | 231 |
| IV 1 | 古墳時代から古代・中世にかけての遺構の時期 と分布の推移 | | | | |
| 図166 | 古墳時代の遺構分布 (S=1/2000) …… | 164-165 | | | |
| 図167 | 古代の遺構分布 (S=1/2000) …………… | 168-169 | | | |
| 図168 | 古代末~中世の遺構分布 (S=1/2000) …… | 170-171 | | | |

| | | | | | |
|---------------------|-------------------------------------|-----|------|---|-----|
| 図194 | SE401井戸材出土状況 | 233 | 図199 | 土器焼成遺構関連遺物（1）棒状土製品 | 241 |
| 図195 | SE401井戸材（1）（S=1/8） | 234 | 図200 | 土器焼成遺構関連遺物（2）焼け歪み瓦器椀（1・2）・熔着土器片（3・4）・焼成粘土塊（5・6） | 242 |
| 図196 | SE401井戸材（2）（S=1/8） | 235 | 図201 | 土器焼成遺構関連遺物（3）再利用器台・大形円柱状支脚 | 243 |
| IV 9 瓦器焼成遺構関連遺物について | | | 図202 | 岡山市三手向原遺跡1号窯復元図（岡山市教育委員会2001より転載） | 244 |
| 図197 | 10・11-F・G区 瓦器焼成窯道具出土遺構（S：1/1000） | 240 | | | |
| 図198 | エリアIにおける棒状土製品出土傾向（上）と遺構内出土遺物の組合せ（下） | 240 | | | |

表 目 次

| | | | | | |
|----|---------------------|-----|-----|-------------------------|-----|
| 表1 | 分析対象資料観察表 | 136 | 表8 | 6G区398掘立柱建物跡P-1出土米の計測結果 | 151 |
| 表2 | 元素測定結果 | 137 | 表9 | 九州大学木製品保存処理 試験方法一覧 | 162 |
| 表3 | 出土米の粒型と粒大の分類基準 | 145 | 表10 | 九州出土腕輪形石製品一覧 | 177 |
| 表4 | 粒型・粒大の組み合わせ | 145 | 表11 | 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土鉄器 | 190 |
| 表5 | PCR増幅に使用したプライマー | 146 | 表12 | 遺物観察表 | 236 |
| 表6 | 測定試料および処理 | 147 | | | |
| 表7 | 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 | 148 | | | |

I 筑紫キャンパス遺跡群と周辺の遺跡 (古墳時代～古代・中世)

1 筑紫キャンパス遺跡群

筑紫キャンパス遺跡群は総括報告書1において述べたように大野城市と春日市にまたがる御供田遺跡の一部を構成する遺跡群である。この御供田遺跡の立地をみると春日市側の牛頸山から連なる丘陵先端部および段丘部と大野城市側の平野部とによって構成されているものといえる（大野城市教育委員会2015）。筑紫キャンパス遺跡群はその内おもに丘陵部と段丘上に位置している（図1・2）。そして、このような遺跡群の立地を旧地形と照合してみると、北西部は段丘上に位置しており、そのほかの遺跡群の大部分が位置する丘陵部には複数の谷が入り組み、複雑な地形をしていることがわかる。そのため、総括報告書1で述べたように、遺跡群内を旧地形に基づき大きくエリアIからエリアIVに区分した（図2）。本報告においてもこのような旧地形によるエリア区分に基づき報告を行う。

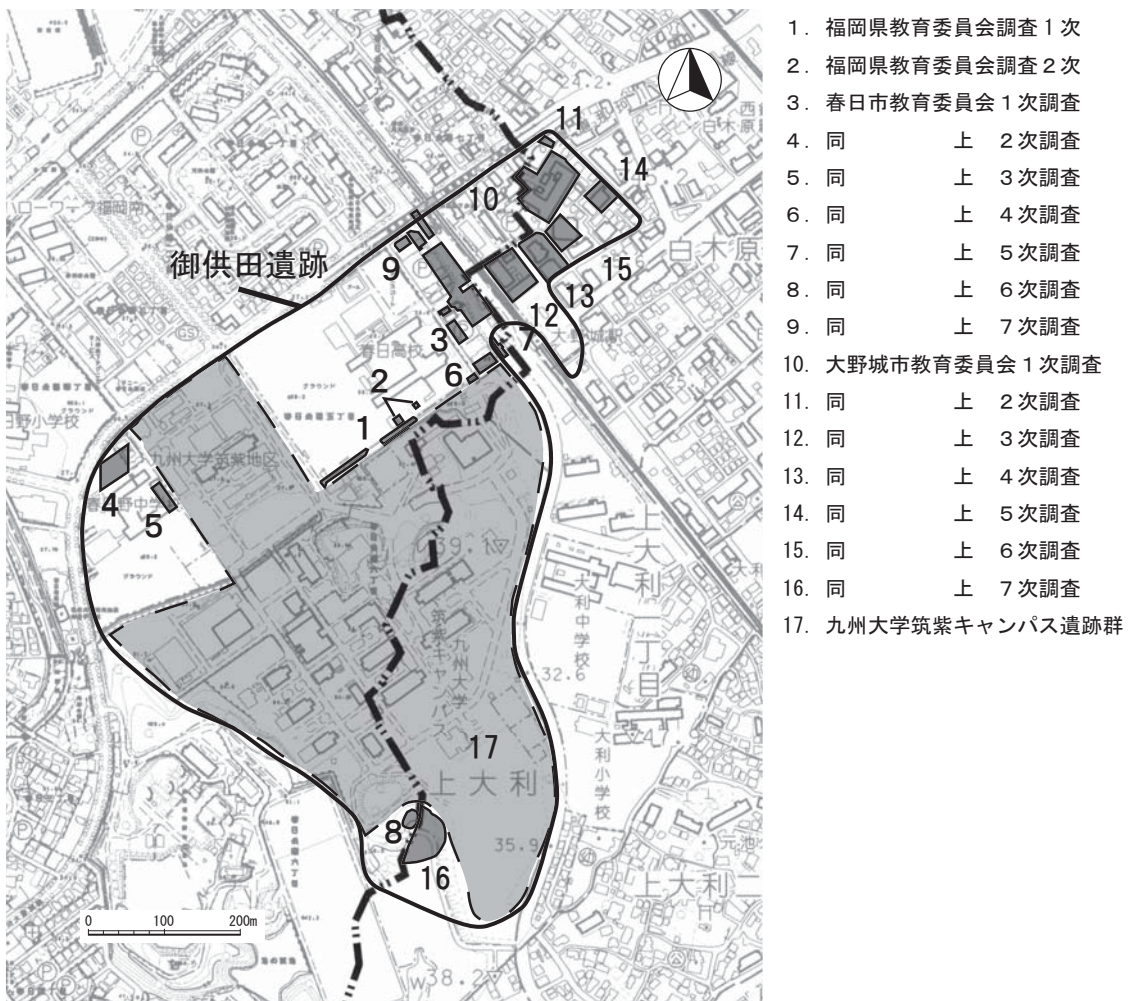


図1 九州大学筑紫キャンパス遺跡群と御供田遺跡 (S=1/10000, 舟山編2017より一部改変)



図2 九州大学筑紫キャンパス遺跡群内の調査区および旧地形 (S=1/6000)

2 筑紫キャンパス遺跡群周辺の古墳時代～古代・中世にかけての遺跡 (図3)

筑紫キャンパス遺跡群周辺の古墳時代前半期の古墳としては、御笠川中流域東岸地域月隈丘陵の西斜面に位置する御陵古墳群があり、4世紀中頃から5世紀前半の割竹形木簡や箱式石棺を主体部とする小円墳群が確認されている(大野城市教育委員会1984b)。また笹原古墳では竪穴式石室を主体部とした直径約30mの円墳が調査されている。墳丘では葺石が確認されたほか壺形埴輪が出土し、石室内からは三角板革綴短甲・冑、鉄剣や鉄鎌などが出土している。出土遺物から5世紀前半に築造されたものとされる(大野城市教育委員会1985)。笹原古墳に近接して帆立貝式前方後円墳の成屋形古墳が位置する。5世紀後半の古い段階に位置づけられる(太宰府市教育委員会1998)。

後半期の周辺の古墳をみると、那珂川中・上流域では5世紀後半に野藤1号墳(春日市教育委員会2000a)、5世紀末から6世紀初頭に位置づけられる貝徳寺古墳(那珂川町教育委員会1987)が春日丘陵の周辺に位置する。つづく6世紀前半には獣形鏡、素環頭太刀や馬具類などを出土した日拝塚古墳(春日市教育委員会1981; 中山他1930)が築かれる。また、筑紫キャンパス遺跡群からほど近い位置にある瑞穂遺跡では、このような前方後円墳ではないが前期初頭の方形周溝墓が確認されている(大野城市教育委員会)。

上記の前方後円墳に加え、5世紀後半以降は牛頸川流域の河岸段丘上に竪穴系横口式石室あるいは初期横穴式石室を埋葬主体とする牛頸塚原古墳群が形成される(大野城市教育委員会1995)。那珂川中・上流域にも井河1号墳(那珂川町教育委員会1983)、カクチガ浦古墳群(那珂川町教育委員会1990)などが分布している。

6世紀後半以降群集墳が急増する時期には、那珂川上流域では東岸の観音山山麓に観音山古墳群

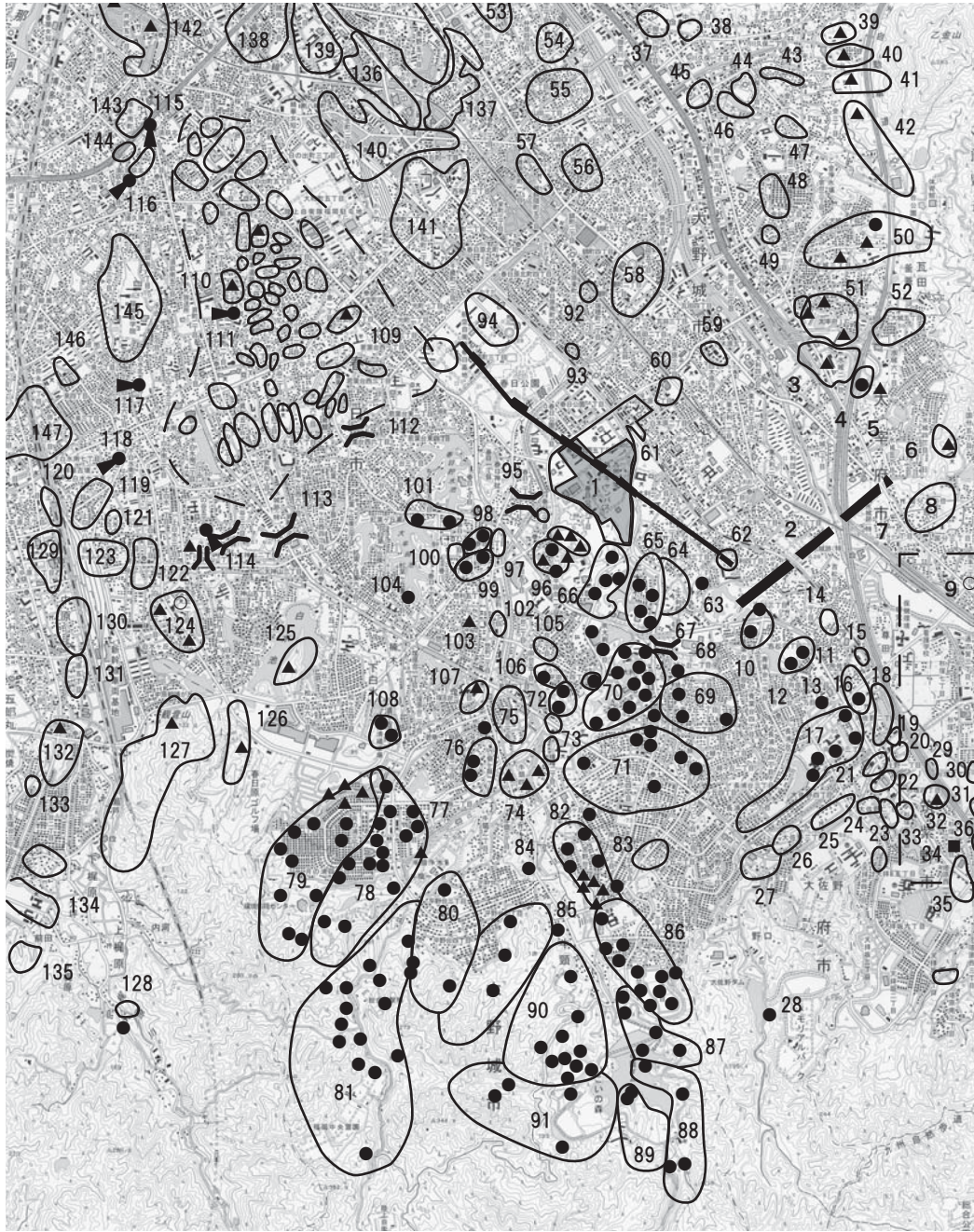


図3 周辺の遺跡 (S=1/50000)

- | | | | |
|--------------------------|------------|-----------|-----------|
| 1 九州大学筑紫キャンパス遺跡群 (御供田遺跡) | 2 水城跡 | 3 成屋形古墳群 | 4 裏ノ田遺跡 |
| 5 裏ノ田古墳 | 6 陣の尾遺跡群 | 7 国分松本遺跡 | 8 筑前国分尼寺 |
| 9 松倉瓦窯跡 | 10 神ノ前窯跡群 | 11 尊田窯跡 | 12 篠振遺跡 |
| 13 長浦窯跡 | 14 原口遺跡 | 15 久郎利遺跡 | 16 日焼遺跡群 |
| 17 宮ノ本遺跡群 | 18 前田遺跡 | 19 川上久保遺跡 | 20 雛川遺跡 |
| 21 フケ遺跡 | 22 尾崎遺跡 | 23 脇道遺跡 | 24 殿城戸遺跡 |
| 25 京ノ尾遺跡 | 26 カヤノ遺跡 | 27 長ヶ坪遺跡 | 28 野口遺跡 |
| 29 井ノ尻遺跡 | 30 杉塚大坪遺跡 | 31 剣塚遺跡 | 32 埴安神社古墳 |
| 33 和久堂城跡 | 34 杉塚廃寺 | 35 脇田遺跡 | 36 唐人塚遺跡 |
| 37 塚口遺跡 | 38 御陵前ノ椽遺跡 | 39 善一田古墳群 | 40 王城山古墳群 |
| 41 古野古墳群 | 42 原口古墳群 | 43 松葉園遺跡 | 44 森園遺跡 |
| 45 ヒケシマ遺跡 | 46 中ノ寺尾遺跡 | 47 薬師の森遺跡 | 48 銀山遺跡 |
| 49 原門遺跡 | 50 雉子ヶ尾遺跡 | 51 釜蓋原古墳群 | 52 釜蓋原遺跡 |
| 53 仲島遺跡 | 54 川原田遺跡 | 55 御笠の森遺跡 | 56 村下遺跡 |
| 57 雑餉隈遺跡 | 58 石勺遺跡 | 59 原ノ畑遺跡 | 60 後原遺跡 |
| 61 御供田遺跡 | 62 谷川遺跡 | 63 出口遺跡 | 64 上園遺跡 |
| 65 本堂遺跡群 | 66 梅頭遺跡群 | 67 上大利水城跡 | 68 谷蟹窯跡 |
| 69 大浦窯跡群 | 70 野添遺跡群 | 71 平田窯跡群 | 72 華無尾遺跡群 |
| 73 屏風田遺跡 | 74 塚原遺跡群 | 75 日ノ浦遺跡群 | |

I 筑紫キャンパス遺跡群と周辺の遺跡

| | | | | | |
|----------------|-------------------|---------------|-------------|--------------|------------|
| 76 畑ヶ坂遺跡群 | 77 月ノ浦1号窯跡 | 78 小田浦遺跡群 | 79 後田遺跡群 | 80 大谷窯跡群 | |
| 81 石坂窯跡群 | 82 東浦窯跡 | 83 中通遺跡群 | 84 城ノ山窯跡群 | 85 原窯跡・原浦窯跡群 | |
| 86 ハセムシ窯跡群 | 87 道ノ下窯跡群 | 88 長者原窯跡群 | 89 笹原窯跡群 | 90 井手窯跡群 | |
| 91 足洗川窯跡群 | 92 駿河遺跡 | 93 原ノ口遺跡 | 94 立石遺跡 | 95 春日水城跡 | 96 春日平田北遺跡 |
| 97 惣利北遺跡 | 98 惣利遺跡 | 99 惣利東遺跡 | 100 惣利西遺跡 | 101 惣利窯跡群 | 102 円入遺跡 |
| 103 惣利古墳 | 104 大牟田窯跡 | 105 春日平田遺跡群 | 106 春日平田西遺跡 | | |
| 107 塚原古墳群 | 108 浦ノ原窯跡群 | 109 須玖遺跡群 | 110 赤井手遺跡 | 111 竹ヶ本古墳 | 112 小倉水城跡 |
| 113 大土居水城跡 | 114 天神山水城跡 | 115 御陵遺跡群 | 116 野藤1号墳 | 117 下白水大塚古墳 | |
| 118 日拝塚古墳 | 119 辻田遺跡 | 120 柏田遺跡 | 121 上白水西遺跡 | 122 天神の木遺跡 | 123 門田遺跡 |
| 124 ウトグチ遺跡群 | 125 白水池古墳群 | 126 西浦古墳群 | 127 観音山古墳群 | | |
| 128 地別当遺跡群・窯跡群 | 129 中原・ヒナタ遺跡群 | 130 中原・塔ノ元遺跡群 | | | |
| 131 カイ子遺跡群 | 132 エゲ古墳・カクチガ浦古墳群 | 133 炭焼古墳群 | 134 平蔵遺跡群 | 135 梶原ハル遺跡群 | |
| 136 麦野B遺跡 | 137 麦野C遺跡 | 138 笹原遺跡群 | 139 三筑遺跡 | 140 南八幡遺跡群 | 141 雑餉隈遺跡群 |
| 142 井尻B1号墳 | 143 寺島遺跡 | 144 笹抜遺跡 | 145 弥永原遺跡群 | 146 弥永遺跡群 | 147 警弥郷B遺跡 |

(那珂川町教育委員会1982, 1986, 1988, 1992, 2003b) が分布するほか、西岸にも片縄山古墳群(那珂川町教育委員会2003a)などが形成される。御笠川中流域では月隈丘陵上の堤ヶ浦古墳群(福岡市教育委員会1987)、持田ヶ浦古墳群(福岡市教育委員会1971, 1996)、乙金山・大城山山麓には乙金古墳群(大野城市教育委員会1984a)、王城山古墳群(福岡県教育委員会1977)、古野古墳群(福岡県教育委員会1977)などが形成される。これらの那珂川や御笠川流域の古墳群に加え、牛頸川流域には胴ノ元古墳(大野城市教育委員会1993)、後田・小田浦古墳群(大野城市教育委員会1992b)、中通古墳群(大野城市教育委員会1980)などが形成される。また、これらの牛頸須恵器窯跡群と同じ丘陵上の古墳群に加え、須恵器窯跡廃絶後に墓として使用された窯跡が確認された梅頭遺跡(大野城市教育委員会2008d)なども認められる。

古墳時代の集落遺跡は周辺では御笠川中流域左岸の微高地上に位置する原ノ畑遺跡(大野城市教育委員会2001)で古墳時代初頭の古式土師器が多量に出土している。また御笠川中流域右岸の仲島遺跡(大野城市教育委員会1992a)では前期の溝に加え、後期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが確認されている。石勺遺跡の東側に隣接する瑞穂遺跡では前期の竪穴建物跡がこれまで6基確認されている(大野城市教育委員会2011:2012:2014a)。また牛頸川流域では上園遺跡(大野城市教育委員会1986, 1987)で5世紀後半および6世紀中ごろから後半の住居跡などが確認されている。上園遺跡の東に隣接する出口遺跡(大野城市教育委員会1989)では6世紀末から7世紀初頭の竪穴住居1軒が調査されている。また、牛頸塚原遺跡群(大野城市教育委員会1995b)や牛頸日ノ浦遺跡(大野城市教育委員会1994)では古墳時代後期から奈良時代を中心とする集落が調査されている。牛頸川西岸では春日市の惣利西遺跡(春日市教育委員会1985)で6世紀後葉から7世紀前半の竪穴住居が多数調査されており、住居跡内からは須恵器を主体とする遺物が出土しており、その中には焼け歪みや熔着したものも含まれる。須恵器生産にかかわる集団の集落の様相を把握するうえで重要な遺跡である。また、惣利西遺跡から南に位置する畑ヶ坂遺跡では7世紀中葉前後の竪穴建物跡が確認されている(大野城市教育委員会2019)。惣利北遺跡(春日市教育委員会1986)では7世紀後半の竪穴住居跡が3軒、掘立柱建物跡1棟以上が調査され、牛頸産の把手付中空円面硯などが出土している。惣利西遺跡の牛頸川をはさんだ対岸に位置する円入遺跡(春日市教育委員会1986)では5世紀代および6世紀中ごろから後葉の竪穴住居跡が7軒検出されている。

6世紀中ごろ以降は、牛頸山北麓の低丘陵上に須恵器生産の窯跡群が形成される。須恵器生産の操業当初は、この丘陵北端部から操業が開始されており、野添遺跡群(福岡県教育委員会1970)や本堂遺跡群(大野城市教育委員会2008c)でこの時期の窯跡や灰原が確認されている。その後窯跡の分布

が拡大していき、7世紀後半以降窯場が牛頸山のほうへと広がってゆく。8世紀代に窯跡の分布範囲は最大となりまた窯数も最も多くなる。その後9世紀前半頃に牛頸窯跡群での須恵器の生産は終焉を迎える（大野城市教育委員会2008a）。

牛頸窯跡群は6世紀中頃以降9世紀前半頃まで操業を続けるが、その間7世紀後半ごろには大宰府が成立すると考えられている。この時期には大宰府を防衛する施設として水城、大野城、基肆城が築かれる。合わせて近隣には上大利水城跡（大野城市教育委員会1995a）・大土居水城跡（春日市教育委員会2000b）・天神山水城跡などの小水城が数か所で確認されている。また、大宰府からは、水城の東門と西門を官道が通っているが、本遺跡群周辺でも谷川遺跡や池田遺跡（大野城市教育委員会1998）、先ノ原遺跡（春日市教育委員会2012）や春日公園内遺跡（春日市史編さん委員会1995）などで水城西門から鴻臚館へと至る官道とその側溝とみられる遺構が確認されている。また、近隣でこのような官道沿いの遺跡としては本堂遺跡群があるが、8世紀代の寺院跡と推定される掘立柱建物跡が確認されている（大野城市教育委員会2008b）。

牛頸窯跡群の操業が終焉した後は、周辺では小水城周辺遺跡（大野城市教育委員会1995c）で11世紀中ごろから12世紀前半の掘立柱建物他の遺構が確認されている。また、上園遺跡（大野城市教育委員会2014b, 2017）でも11世紀後半から12世紀前半の掘立柱建物や溝が確認されている。

文献

- 大野城市教育委員会1980『中通遺跡群』（大野城市文化財調査報告書第4集）
 大野城市教育委員会1984a『乙金古墳群－北支群－』（大野城市文化財調査報告書第11集）
 大野城市教育委員会1984b『御陵古墳群』（大野城市文化財調査報告書第13集）
 大野城市教育委員会1985『笹原古墳』（大野城市文化財調査報告書第15集）
 大野城市教育委員会1986『上園遺跡Ⅰ』（大野城市文化財調査報告書第18集）
 大野城市教育委員会1987『上園遺跡Ⅱ』（大野城市文化財調査報告書第21集）
 大野城市教育委員会1989『出口遺跡』（大野城市文化財調査報告書第28集）
 大野城市教育委員会1992a『仲島遺跡X』（大野城市文化財調査報告書第34集）
 大野城市教育委員会1992b『牛頸後田・小田浦古墳群』（大野城市文化財調査報告書第36集）
 大野城市教育委員会1993『牛頸洞ノ元古墳』（大野城市文化財調査報告書第38集）
 大野城市教育委員会1994『牛頸日ノ浦遺跡群』（大野城市文化財調査報告書第42集）
 大野城市教育委員会1995a『水城跡Ⅰ』（大野城市文化財調査報告書第43集）
 大野城市教育委員会1995b『牛頸塚原遺跡群』（大野城市文化財調査報告書第44集）
 大野城市教育委員会1995c『小水城周辺遺跡Ⅰ』（大野城市文化財調査報告書第45集）
 大野城市教育委員会1998『谷川・池田・池ノ上遺跡』（大野城市文化財調査報告書第51集）
 大野城市教育委員会2001『瑞穂・原ノ畑遺跡』（大野城市文化財調査報告書第57集）
 大野城市教育委員会2008a『牛頸窯跡群－総括報告書Ⅰ－』（大野城市文化財調査報告書第77集）
 大野城市教育委員会2008b『牛頸本堂遺跡群Ⅵ－第1・9・12・16・17次調査－』（大野城市文化財調査報告書第80集）
 大野城市教育委員会2008c『牛頸本堂遺跡群Ⅸ－第14次調査－』（大野城市文化財調査報告書第83集）
 大野城市教育委員会2008d『梅頭遺跡群Ⅳ－第4次調査－』（大野城市文化財調査報告書第86集）
 大野城市教育委員会2011『瑞穂遺跡2』（大野城市文化財調査報告書第95集）
 大野城市教育委員会2012『瑞穂遺跡3・横峰遺跡Ⅰ・ハザコ遺跡』（大野城市文化財調査報告書第105集）
 大野城市教育委員会2014a『瑞穂遺跡4－第9次調査－』（大野城市文化財調査報告書第116集）
 大野城市教育委員会2014b『上園遺跡3－第5・6・7次調査－』（大野城市文化財調査報告書第121集）
 大野城市教育委員会2015『御供田遺跡3』（大野城市文化財調査報告書第132集）
 大野城市教育委員会2017『上園遺跡6－第10次調査－』（大野城市文化財調査報告書第160集）
 大野城市教育委員会2019『畑ヶ坂遺跡1－第4次調査－』（大野城市文化財調査報告書第170集）

I 筑紫キャンパス遺跡群と周辺の遺跡

- 大野城市教育委員会『瑞穂遺跡（第7・8次調査）』（大野城市歴史資料展示室解説シート考古 No.60）
- 春日市教育委員会1981『国指定史跡日拝塚古墳・環境整備事業に伴う調査』（春日市文化財調査報告書第8集）
- 春日市教育委員会1985『春日地区遺跡群Ⅲ』（春日市文化財調査報告書第15集）
- 春日市教育委員会1986『春日地区遺跡群Ⅳ』（春日市文化財調査報告書第16集）
- 春日市教育委員会2000a『野藤遺跡』（春日市文化財調査報告書第27集）
- 春日市教育委員会2000b『大土居水城跡』（春日市文化財調査報告書第28集）
- 春日市教育委員会2012『先ノ原遺跡－1～3次調査－』（春日市文化財調査報告書第63集）
- 春日市史編さん委員会1995『春日市史 上』春日市
- 太宰府市教育委員会1998『成屋形古墳』（太宰府市の文化財第38集）
- 那珂川町教育委員会1982『観音山古墳群』（那珂川町文化財調査報告書第8集）
- 那珂川町教育委員会1983『井河古墳群』（那珂川町文化財調査報告書第10集）
- 那珂川町教育委員会1986『観音山古墳群Ⅱ』（那珂川町文化財調査報告書第14集）
- 那珂川町教育委員会1987『貝徳寺古墳』（那珂川町文化財調査報告書第16集）
- 那珂川町教育委員会1988『観音山古墳群Ⅲ』（那珂川町文化財調査報告書第17集）
- 那珂川町教育委員会1990『カクチガ浦遺跡群』（那珂川町文化財調査報告書第23集）
- 那珂川町教育委員会1992『観音山古墳群Ⅳ』（那珂川町文化財調査報告書第30集）
- 那珂川町教育委員会2003a『片縄山古墳群』（那珂川町文化財調査報告書第61集）
- 那珂川町教育委員会2003b『観音山古墳群Ⅵ』（那珂川町文化財調査報告書第63集）
- 中山平次郎・玉泉大梁・島田寅次郎1930「日拝塚」『史蹟名勝天然記念物調査報告書』第5輯 福岡県、15-26頁
- 福岡県教育委員会1970『野添・大浦窯跡群』（福岡県文化財調査報告書第43集）
- 福岡県教育委員会1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅸ
- 福岡市教育委員会1971『持田ヶ浦古墳群1・2号調査報告』
- 福岡市教育委員会1987『堤ヶ浦古墳群発掘調査報告書』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第151集）
- 福岡市教育委員会1996『堤ヶ浦古墳群2』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第445集）

II 調査の結果

1 調査概要

以下で古墳時代以降中世までの主要な遺構および遺構出土遺物について報告する。Iで述べたように、キャンパス内の調査域を旧地形に基づき4エリアに区分した。このエリア区分に沿って、住居跡、土坑、井戸、溝などのその他遺構の順に報告する。古墳時代以降の主だった遺構は、エリアIからエリアIVまですべての範囲にわたって分布しており、エリアIやエリアIIに比較的偏って遺構が分布していた弥生時代までの様相とは若干異なる。

エリアI(図4)では、住居跡はあまり認められず、土坑や井戸などが分布している。また、SD101などの古代の官道に関連すると推定されている溝がエリア内を南東から北西にかけて縦断している。

エリアIIは東側に向かって延びる丘陵の西側と東側に調査区が広がる。エリアIの東に隣接する調査範囲では住居跡が多く分布しており、丘陵南斜面に位置する平成10年度調査区(第56次調査区)や丘陵東側先端部に位置する調査区(第16次、41次、平成7年度調査区I区およびII区)からは瓦を多く出土した包含層や溝などが検出されている。またこのエリアからは木簡も出土している。

エリアIIIはキャンパスの南東部に位置しているが、エリア内の北西部第2次調査区で住居跡SB001が1基のみであるが検出されている。さらにその東側に位置する第15次調査区からは古代官道の土橋遺構が検出されており、その南側に位置するSX302(B)・(C)とされる性格不明の遺構からは少量ではあるが瓦が出土している。

エリアIVはキャンパス南西部の範囲で、現在の航空自衛隊の敷地に隣接する丘陵部に位置する。ここからはエリア内北西部の45次調査区およびエリア内の最も南西に位置する第46次調査区で住居跡がまとまって分布する。これらの他には第45次、46次調査区の丘陵斜面や谷部から須恵器製作道具であるタタキ板や当て具などが出土した溝であるSD623、墨書土器や燈明皿、瓦などが多く出土したSD701が検出されている。さらにこれらの調査区の東側に位置する第29次調査・11I区ではSX402(推定須恵器灰原)が調査され、第40次調査・11M区では瓦がまとまって出土する溝などが検出されている。また、このエリアIVでは第45次調査区12・13K区周辺から時期は不明であるが権・鉄滓・鞆の羽口などの遺物も出土している。

2 古墳時代から古代・中世の遺構と遺物

1. エリアI(図4)

1) 住居跡

8C区 SB106(図5)

8C区中央部で調査区の南壁にかかって検出された掘立柱建物で、西にSD108が近接しており、SE101が南に位置する。また、南東に34.5m離れてSB109が位置する。略南北方向に主軸をとる2間

II 調査の結果

× 1 間の3.92×2.84m が検出された。掘方は略方形をとるものが主で、SP3のみ不規則な形態をとる。検出面で SP1は44×48cm、深さ12cm、SP2は48×52cm、深さ15cm、SP3は52×84cm、深さ12cm、SP4は48×48cm、深さ28cm、SP5は40×44cm、深さ16cmをはかる。心々間は SP1-SP2間2m、SP1-SP3間3.2m、SP3-SP4間2.0m、SP4-SP5間2.0mをはかる。

【遺物】(図6)

1・2・3は弥生土器である。1・2は甕形土器口縁部で、3はミニチュア土器の底部で底径は4.6cmに復元可能である。

4は土師器の椀で口径は13.3cmに復元できる。

8D区 SB109 (図7)

8D区東部に位置する掘立柱建物である。すぐ西側にSD109およびSD101が位置している。また、北西に34.5m離れてSB106が位置する。略東西方向に主軸をとる2間×2間の総柱建物4.0×3.8mが検出された。掘方は方形に近いものに加え不正形のものが見られる。検出面で SP1は1.0×1.0m、深さ24cm、SP2は1.0×1.2m、深さ24cm、SP3は0.96×1.1m、深さ38cm、SP4は0.76×1.0m、深さ42cm、SP5は0.84×0.84m、深さ40cmをはかる。SP6は0.88×1.0m、深さ40cm、SP7は1.1×1.2m、深さ40cm、SP8は0.84×0.64m、深さ20cm、SP9は1.16×1.1m、深さ40cmである。

心々間は SP1-SP2間1.96m、SP1-SP9間2.04m、SP2-SP3間1.72m、SP3-SP4間1.84m、SP4-SP5間2.2m、SP5-SP6間1.88m、SP6-SP7間1.72m、SP7-SP9間1.4mである。

【遺物】(図8)

出土遺物のうち実測可能な資料は弥生土器に限られる。5・6・7は甕形土器の口縁部片で内側にわずかに突出が見られる。8は二重口縁壺の口縁部である。口縁部の屈曲は明瞭である。

10F区 SB409 (図9)

10F区中央部やや東寄りの部分に位置する。西方向にSK442が位置する。遺構の北西部は攪乱によって削平を受けている。また、西部は調査区の境界にあたり未調査であるが、西側の隣接調査区からは遺構の続きは検出されていないため、遺構の北西部から西側部分にかけては不明である。残存部分は東側に鋭角に張り出した不正形を呈している。南北の短軸方向で3.6mをはかり、東西の長軸方向で最大3.36mが遺存する。遺構の深さは最大で14cmで、床面はほぼ水平である。

【遺物】(図10)

18以外は須恵器で、出土土器はいずれも小片である。9・10・11・12は杯蓋である。9と10はかえりが明確で、11と12は口縁端部がわずかに屈曲するにとどまる。13・14は杯B類の身で高台は小さい。15は小形甕口縁部片、16および17は脚部片である。18は土師器椀で、高台部分および口縁端部を欠損する。

2) 土坑

8E区 SK205 (図11)

8E区の東部分に位置する。南側に旧河川SX303が位置する。平面形は北東-南西方向に軸をとる楕円形を呈する。長軸は1.52m、短軸は1.08mをはかる。断面はすり鉢状を呈し、深さは中央部で最も深くなり最大28cmである。

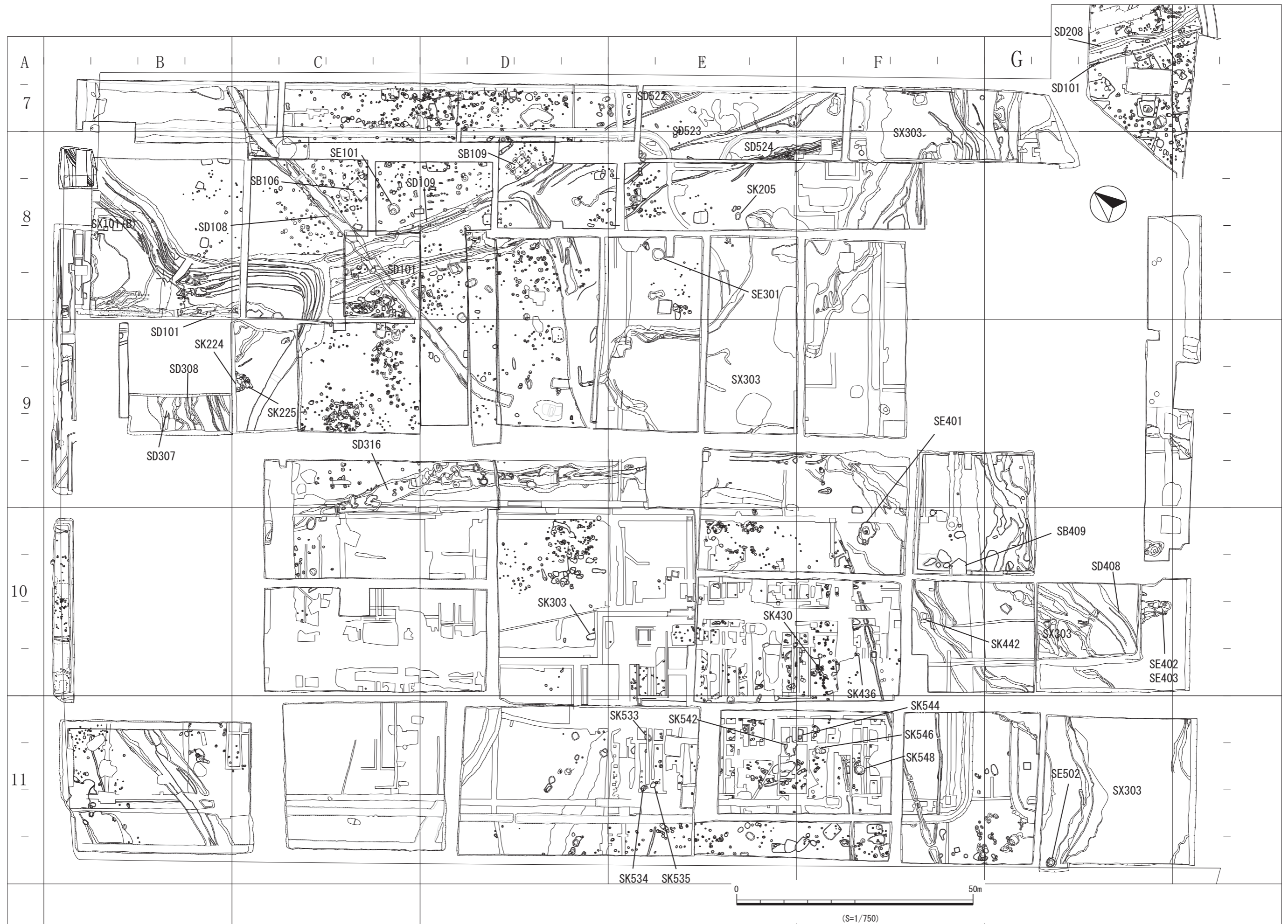


図4 エリアI・遺構配置図(古墳時代以降)(S=1/750)

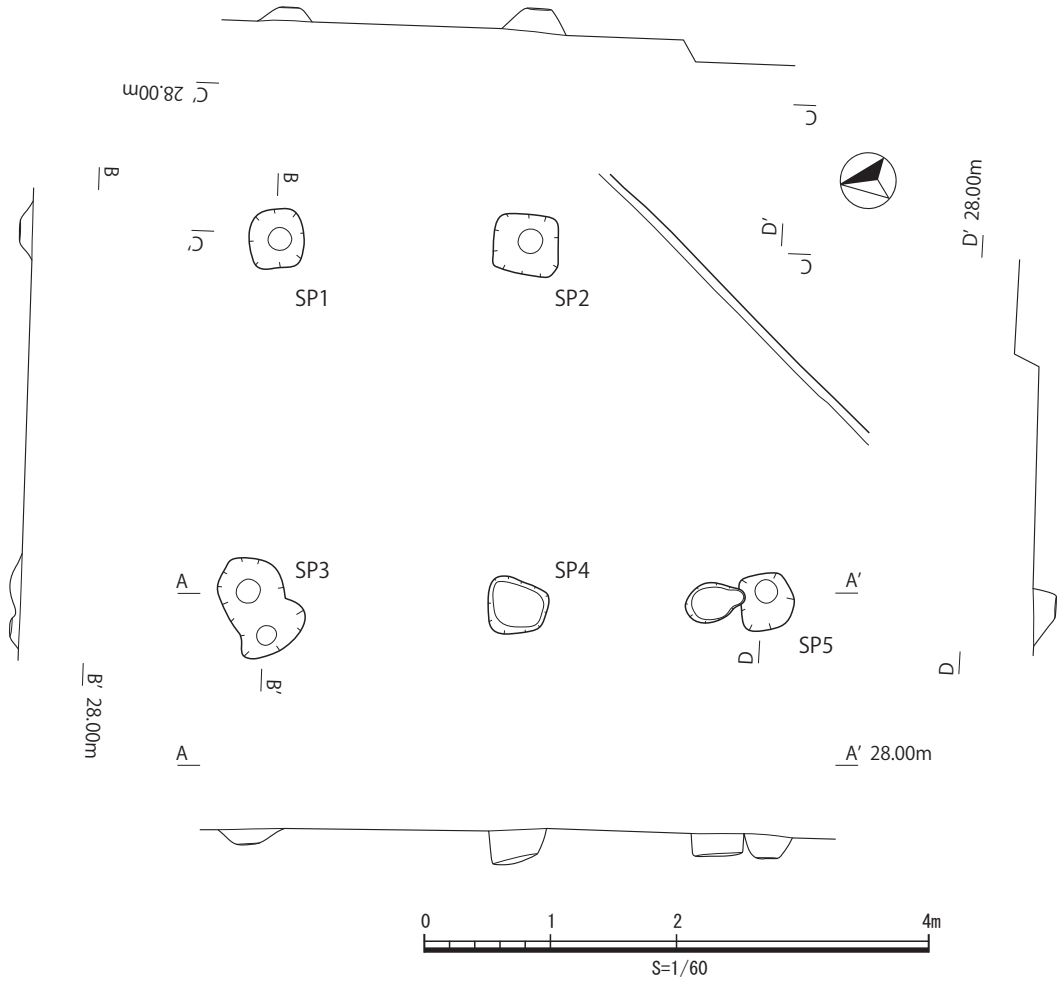


図5 8C区 SB106

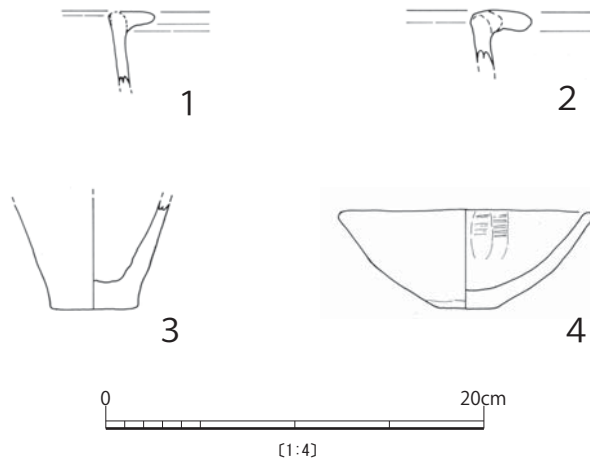


図6 SB106出土遺物 (S=1/4)

II 調査の結果

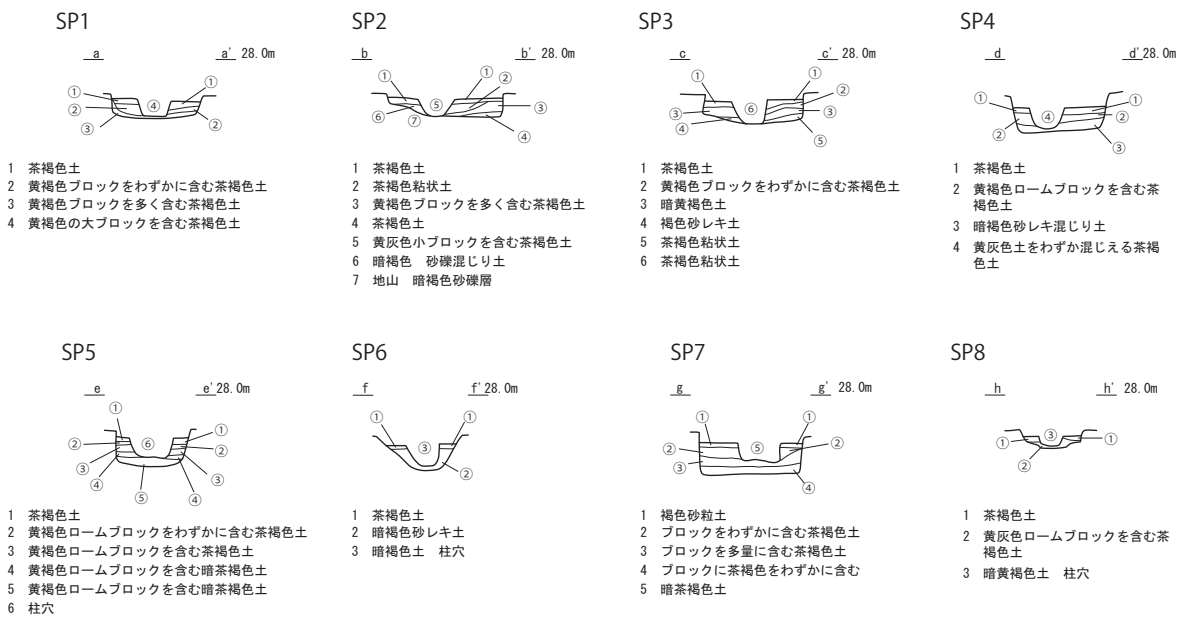
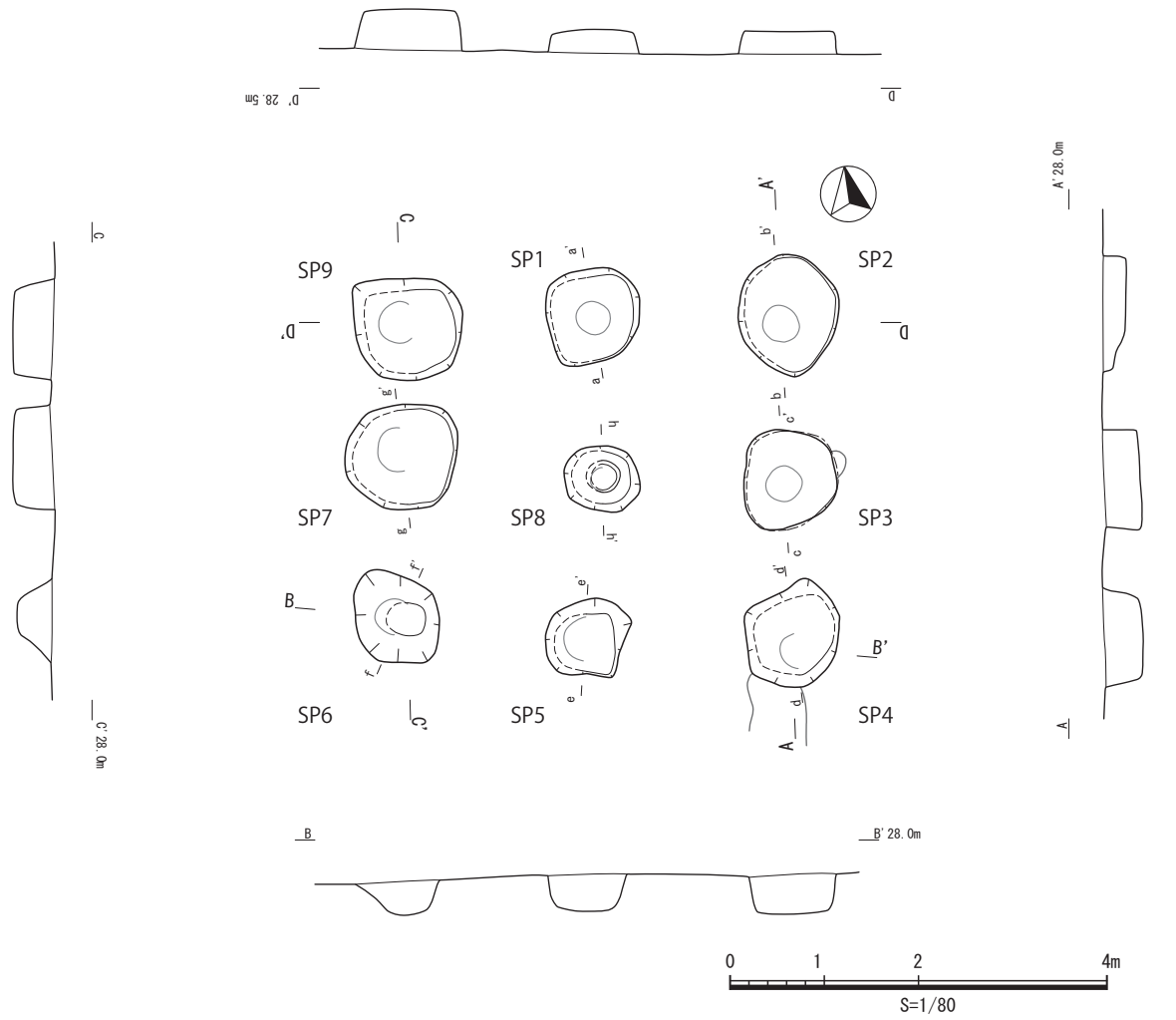


図7 8D区 SB109

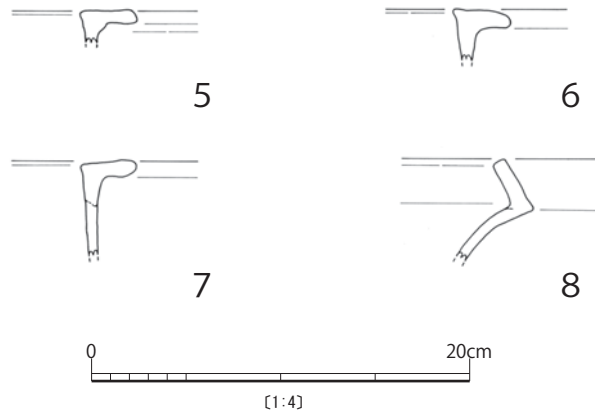


図8 SB109出土遺物 (S=1/4)

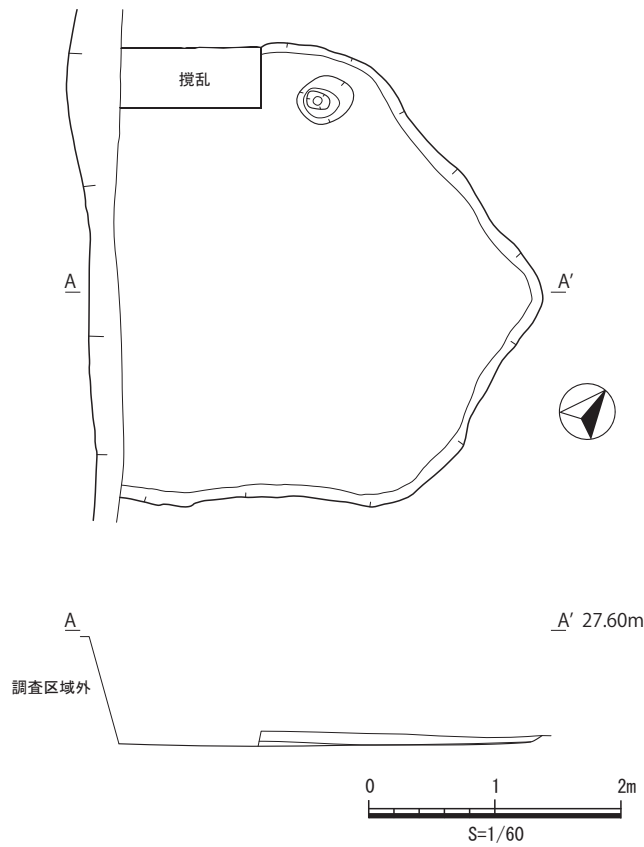


図9 10F区 SB409

【遺物】(図12)

実測可能な資料は19のみである。土師器の杯身で口径13.2cm、底径8.2cmである。胎土は精良で、底部外面に板状圧痕が残る。

9C区 SK224 (図13)

9C区北西部の調査区境界に位置する。東にSK225が接して位置し、さらに東側にはSD101が位置する。遺構の北西部は調査区外で、また遺構の東側はSK225が重複しているため遺構の平面形態

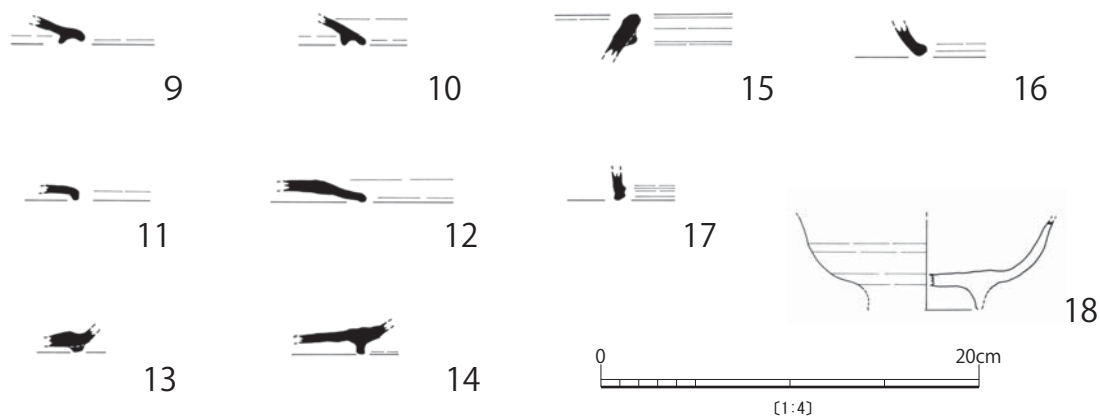


図10 SB409出土遺物 (S=1/4)

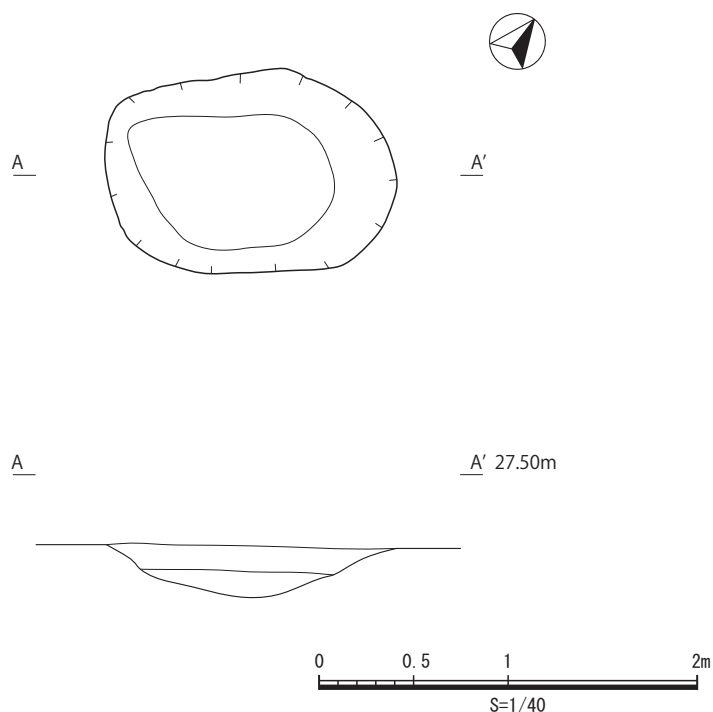


図11 8E区 SK205

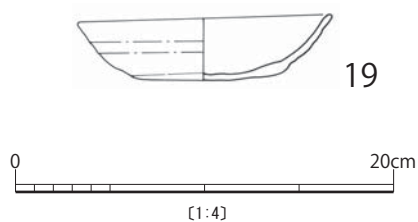


図12 SK205出土遺物 (S=1/4)

は不明である。北西-南東方向で2.0mが残存する。遺構の南西部で段がつくが、床面はほぼ水平である。

【遺物】(図14)

20と21は弥生土器である。20は口縁部内面がやや張り出す鋤形口縁の甕形土器で、口径35.6cmに復元できる。21は壺形土器である。22から25は須恵器の杯身である。いずれも体部が外側に直線的に開く形態で、胎土は精良である。26は残存長が3.4cmの鞆羽口小片で、外面が二次被熱を強く受けている。

9C区 SK225 (図13)

SK224の東に重複する土坑であるが、遺構北部が一部攪乱によって失われており、残存部分も堀方が波打っており平面形は不明である。残存部分の断面から複数の遺構が重複している可能性がある。北東-南西方向で2.28mほどをはかる。遺構は深さ24cmほどが残存する。

【遺物】(図14)

27と28は弥生土器で27は逆「L」

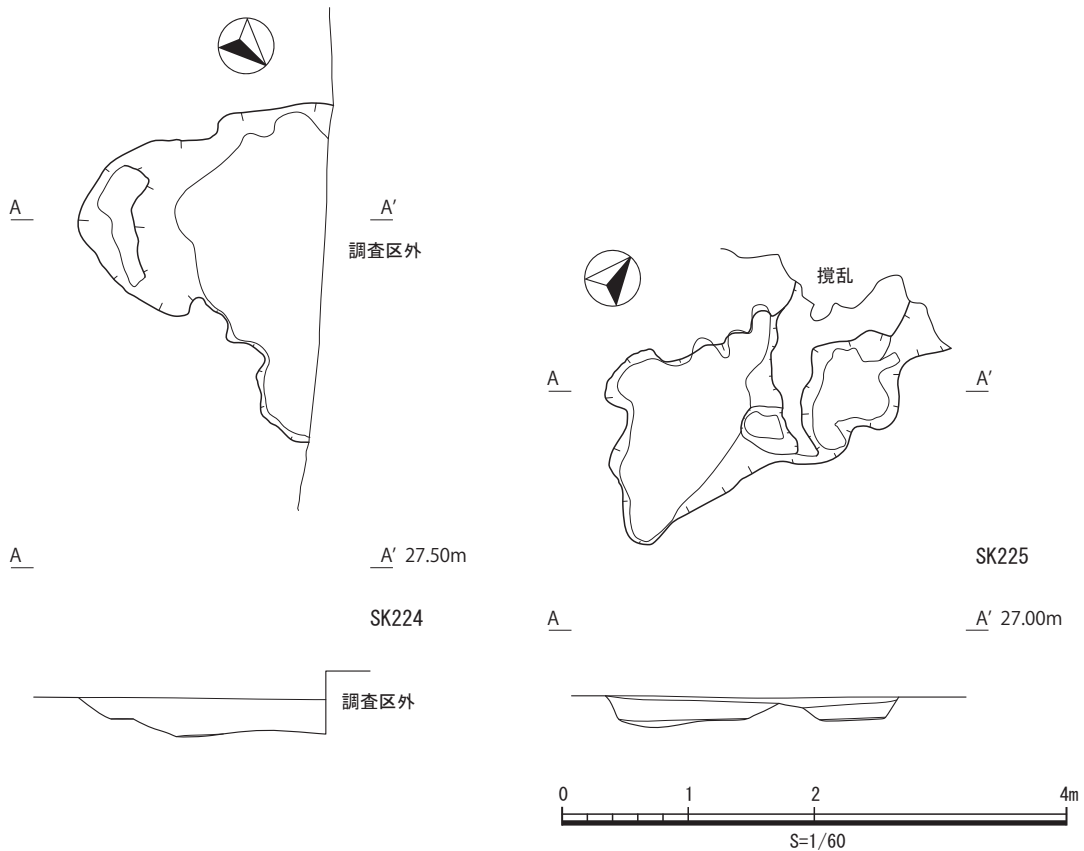


図13 9C区 SK224・SK225

字形口縁の甕形土器、28は甕棺で内面に大きく張り出す口縁部である。29と30は土師器である。29は小皿の破片で、30は杯身であろう。31から33は須恵器で、31は杯Bの身で底径7.8cmに復元できる。高台は底部端につけられる。32と33は杯A身の底部で立ち上がりが外側に直線的に開き、器高が低い。

10D区 SK303 (図15)

10D区南部、10E区との境界近くで検出されている。遺構の南東部は攪乱によって消失している。北西部分は上場が弧状を呈しており、おそらく長楕円形ないしは長方形プランを呈するものと推測される。長軸は略北西-南東方向で最大で1.94m遺存し、短軸方向で最大1.4mをはかる。土坑の深さは遺構検出面から最も深いところで8cmである。床面はほぼ水平である。

【遺物】(図16)

34は弥生土器の器台脚部片で脚部径は12.4cmに復元可能である。35は土師器で椀形の器形を呈するものと推定される。36は瓦器椀で底径は8.0cmほどに復元でき、胴部最下部に糸切り痕が残る。

10F区 SK430 (図17)

10F区西部に位置する。西側にはSK544、SK548、SK542が位置する。遺構は略北東-南西方向を

II 調査の結果

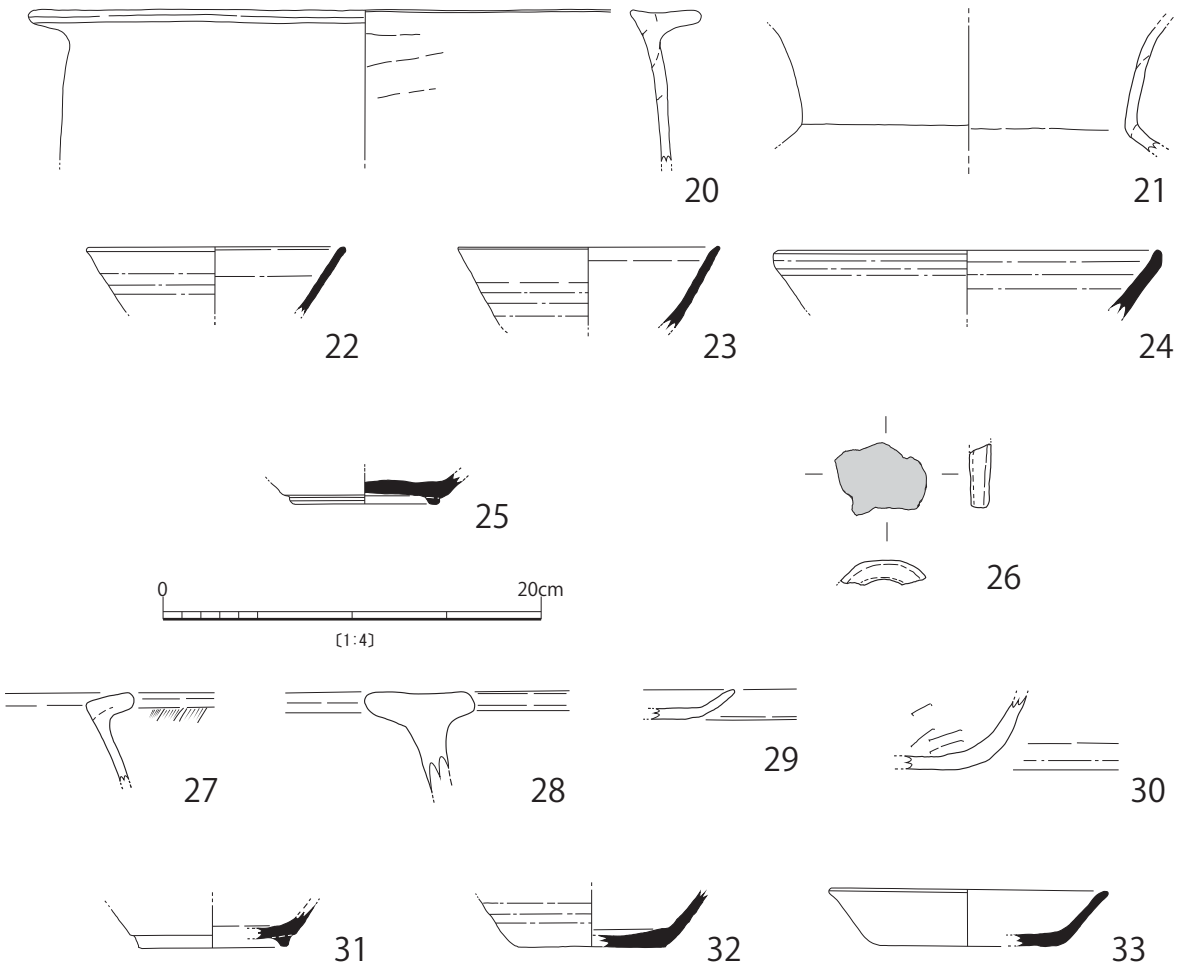


図14 SK224・SK225出土遺物 (S=1/4)

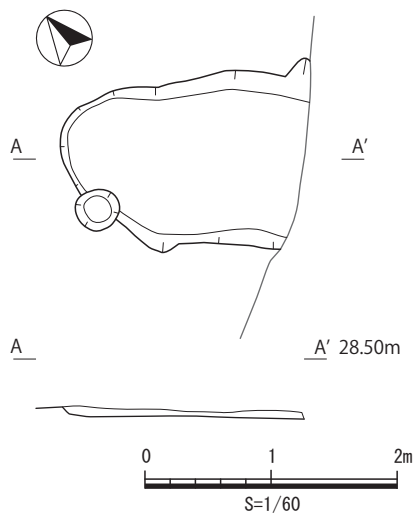


図15 10D区 SK303

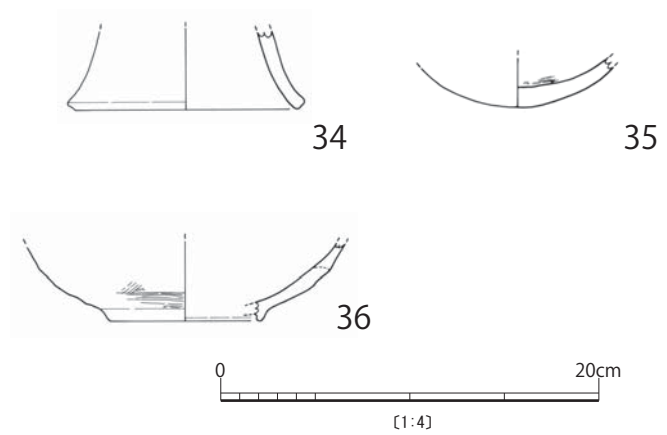
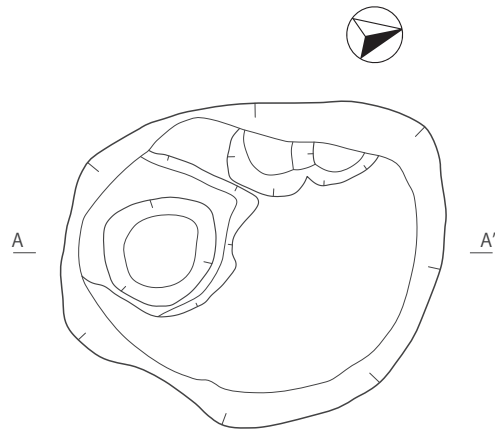


図16 SK303出土遺物 (S=1/4)

長軸とする不正方形を呈し、土坑南西隅が一段深くなる。長軸方向で1.0m、短軸方向で0.9mを測る。遺構の深さは東側の一段高い部分で24cm、土坑南西隅の一段深くなる部分で38cm残存する。

【遺物】(図18)

37は本遺構出土遺物のうち唯一実測可能であった土器である。瓦器碗であるが高台は非常に小さい。胎土は精良で口径15.0cm、底径7.2cmに復元可能である。底部外面に板状圧痕がみられる。



10F区 SK436 (図19)

10F区西部に位置する。東方向にはSK442、西側にはSK542、SK544、SK546などが位置する。遺構の北西側は攪乱によって遺存しない。残存部分は不正形の長楕円を呈する。長軸方向で残存長0.96mをはかり、短軸方向で最大0.6m残存する。遺構の深さは最大で8cmで、床面は土坑中央部で一段深くなる。

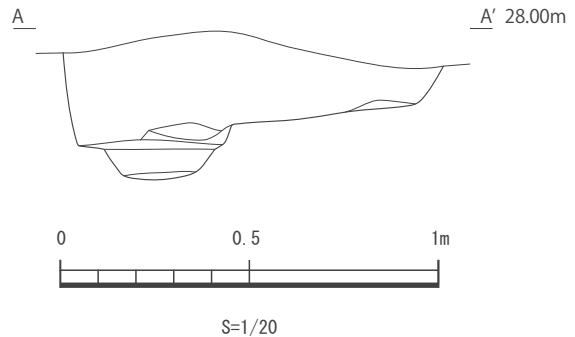


図17 10F区 SK430

【遺物】(図20)

38は土師器碗で高台部分が焼け歪みでゆがむ。口径は14.2cmである。39も土師器碗の底部である。底径8.7cmである。いずれも胎土は精良である。40は瓦器碗で、口径15.0cm、底径6.4cmに復元可能で、高台は高くしっかりしている。41は風炉片である。

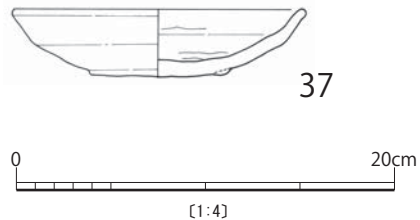


図18 SK430出土遺物 (S=1/4)

10F区 SK442 (図21)

10F区中央部やや南寄りに位置する。東方向にSB409が位置し、西側にはSK436が位置している。遺構の南西部は攪乱によって削平されており遺存しない。残存部分は不正方形を呈しており、北側に不規則にやや張り出す。北東-南西方向で1.6m、北西-南東方向で最大1.76mが残存する。遺構の深さは最大で28cmで、緩やかに壁が立ち上がり、床面はほぼ水平である。

【遺物】(図22)

42から60は瓦器碗である。42・43・44は胴部中位の屈曲がさほど顕著ではない。45から53は胴部下半に屈曲部が比較的明瞭にみられ、口縁部付近の器壁がやや厚みを持つ。52・53や56は胴部下半部に放射状に指圧痕が残る。47・51・53などは底部外面に板状圧痕がみられる。61と62は土師器の杯である。61は焼け歪む。62の底部には高台のついていた痕跡が残る。63は棒状土製品である。端部は大き

II 調査の結果

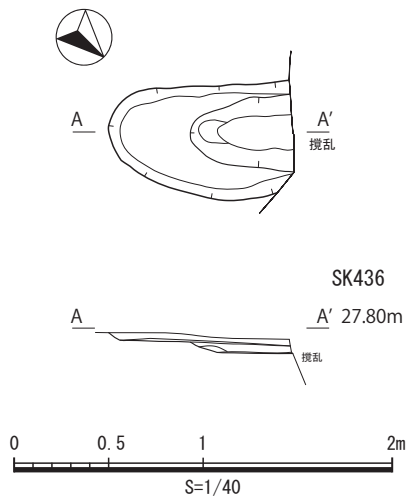


図19 10F区 SK436

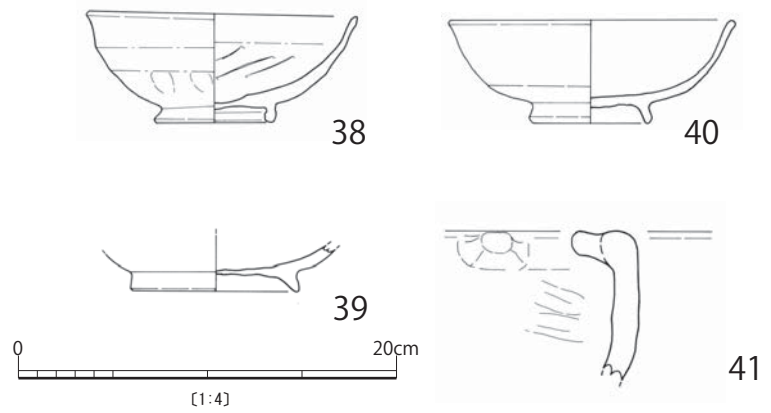


図20 SK436出土遺物 (S=1/4)

くすぼまりややとがり気味になる。断面は扁平な形態で緩いアーチ状をしており、中央部で最も厚くなる。

11E区 SK533 (図23)

11E区北部に位置する。南西方向にはSK535が位置する。遺構の中央部は攪乱によって削平されており遺存しない。残存部分は不正形の方角を呈し、本土坑と重複する別遺構と推測される土坑の一部が南側にわずかに残存している。南北の長軸方向で1.5m、東西の短軸方向で最大1.3mが残存する。

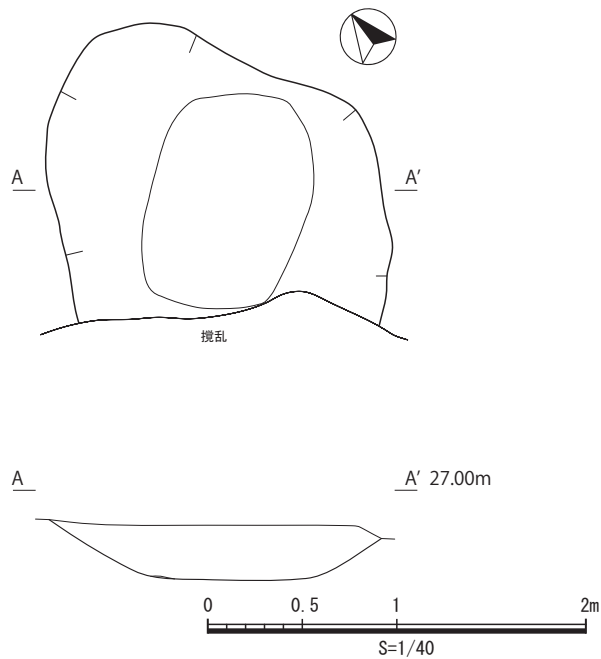


図21 10F区 SK442

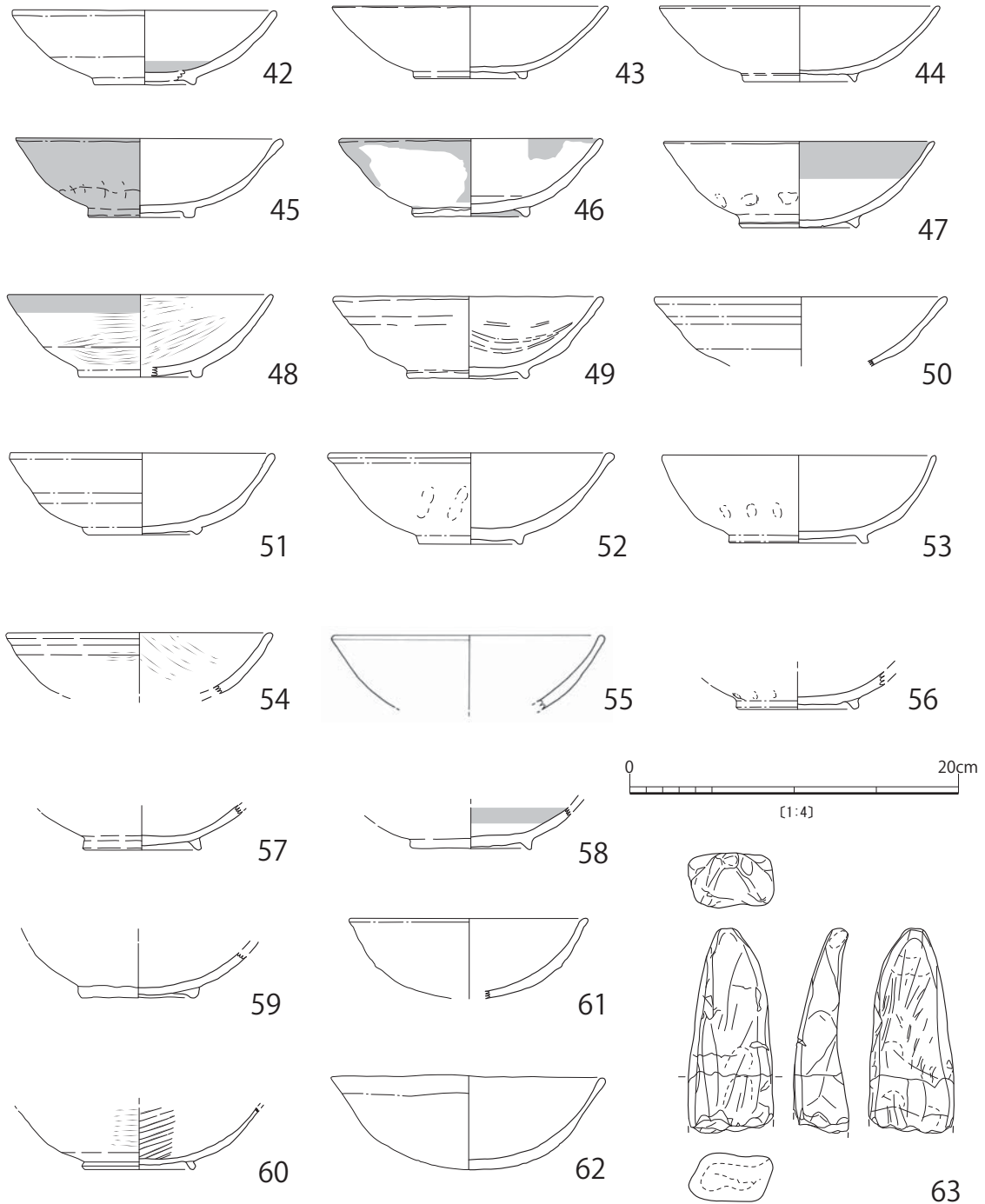


図22 SK442出土遺物 (S=1/4)

遺構の深さは最大で34cmで、床面は土坑中央部がかく乱のため不明であるが、残存部はほぼ水平である。

【遺物】(図24)

64から67は須恵器である。64は杯Gの蓋で口径10.3cmに復元できる。65・66と67も杯蓋で、見受けのかわりがはっきりしており、口径は10cm以上になる。68は土師器の高杯脚部である。胎土は精良でナデで丁寧に仕上げる。残存高は6.2cmである。

II 調査の結果

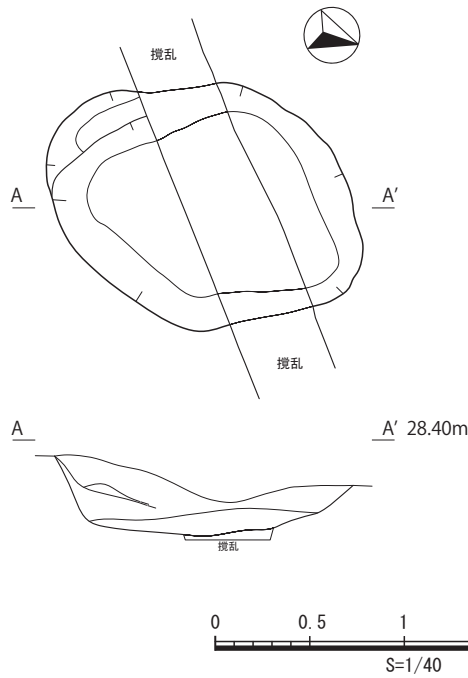


図23 11E区 SK533

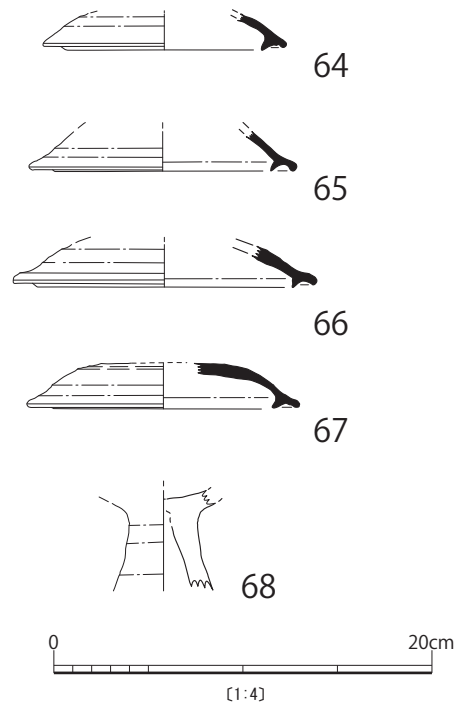


図24 SK533出土遺物 (S=1/4)

11E区 SK534 (図25)

11E区に位置する。北東方向にはSK533が、東側にはSK535が位置する。遺構は複数の土坑が重複しているものと推測され、東側に半円形の張り出しがみられるが、本土坑は隅丸長方形を本来呈していたものと考えられる。長軸は略東西方向で1.5m、短軸の南北方向は0.96mである。遺構の深さは最大で22cmで、床面は土坑南西側と南東側の2か所で凹凸がみられるが、それ以外の土坑北側部分はほぼ水平である。

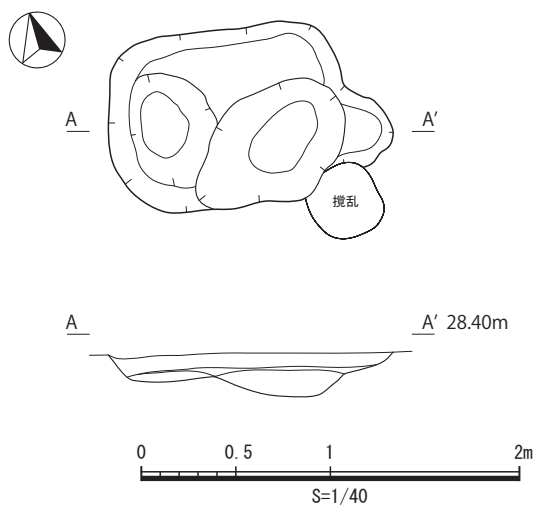


図25 11E区 SK534

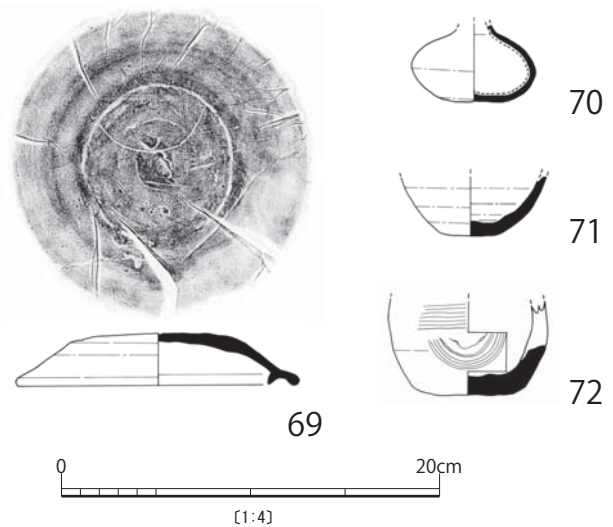


図26 SK534出土遺物 (S=1/4)

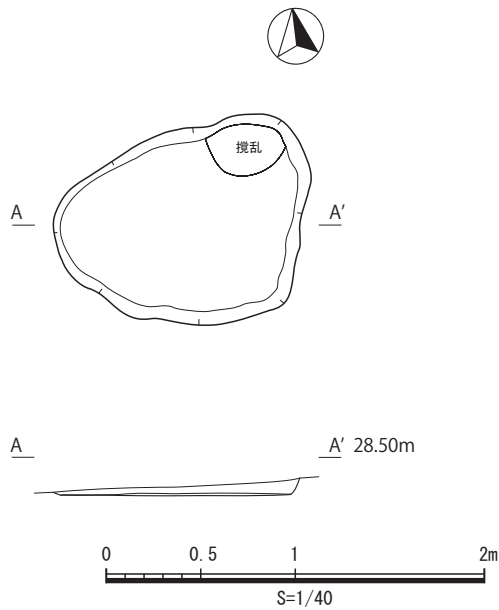


図27 11E区 SK535

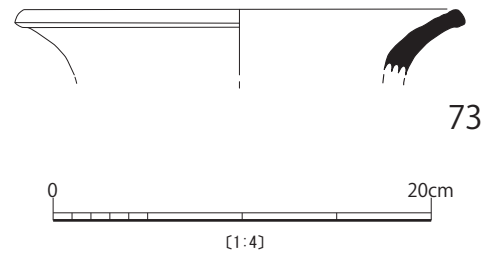


図28 SK535出土遺物 (S=1/4)

【遺物】(図26)

69から72はいずれも須恵器で、69は杯蓋でつまみはつかず、口縁部のかえりがある。口径は12.0cmである。70は小形の壺で胴部最大径は6.5cmほどである。71は底部付近の破片で器種は明確ではないが甗の可能性はある。胎土は精良である。72は甗で、注口部に同心円のカキメがみられる。底径は3.3cmである。

11E区 SK535 (図27)

11E区に位置し、北西方向にSK534が近接して位置する。また、北東方向にはSK533が位置する。平面プランはいびつな不正形を呈している。長軸は略東西方向で1.3m、短軸の南北方向は最大で1.06mをはかる。遺構の深さは最大で8cmと浅く、床面はほぼ水平である。

【遺物】(図28)

遺物は須恵器の甗が出土している。口径は23.8cmに復元でき、残存高は3.4cmである。

11E区 SK542 (図29)

11E区東側に位置し、遺構の南東部が一部11F区にかかる。すぐ東側にはSK544、南東方向にはSK546が位置する。平面形は複数の遺構が重複しているためか、不正形を呈する。また、遺構の北東側は攪乱によって一部失われている。北東-南西の長軸では最大4.4m、北西-南東の短軸方向では最大2.76mをはかる。遺構の深さは最大で24cm、最も浅いところで6cmである。床面はほぼ水平である。

【遺物】(図30)

74は弥生土器で、器高12.6cmほどの小形壺である。口縁部内面が小さく突出する。

75から78は土師器の皿である。75・76は口径が10.2-10.6cmの比較的小形の皿で、77、78は口径が13-14cmほどのやや大きな口径の皿である。

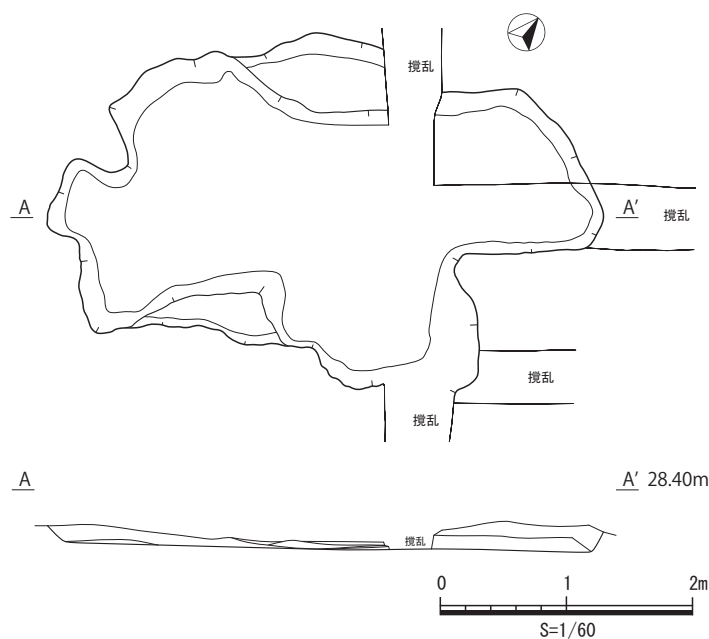


図29 11E区 SK542

79から91は瓦器碗である。土器のサイズは比較的規格的で口径は16.0-18.0cm、器高は5.0-7.0cm弱前後に収まる。胎土はいずれも精良である。79・82・85・88・87などは胴部下部、高台近くの部分に糸切り痕がわずかに認められ、80には胴部下半部分に放射状に指圧痕が残る。また、81や91は高台内の底部外面に板状圧痕がみられる。

92は青磁碗である。口径は16.0cmに復元できる。

11F区 SK544 (図31)

11F区北側、11F区との境界に接して位置し、すぐ西側にはSK542が位置する。また、南側にはSK546が位置する。遺構の北西側及び南西部が攪乱のため遺存しない。また、土坑の中央部にはやや不正な円形の落ち込みがみられる。残存部から平面形は隅丸の長方形になるものと推測される。北東-南西方向の長軸では最大2.7m、北西-南東の短軸方向では最大1.14mが残存する。遺構の深さは土坑中央部の円形の落ち込み部分で最大で20cm、そのほかの部分12-14cmである。床面は中央のくぼんだ部分以外はほぼ水平である。

【遺物】(図32)

93から97は瓦器碗である。口径は16.0-17.0cmほどである。94・95・97などは胴部外面下半部の高台近くの部分に糸切り痕がわずかに残る。98は弥生土器の甕底部片である。99は土師器の器台である。残存高は19.3cmで受部および脚裾部ともに二次被熱によるススが付着しており、使用時あるいは再利用時に被熱をしている。

11F区 SK546 (図33)

11F区北側に位置し、北西側にはSK542、北側にはSK544、南側にSK548が位置する。

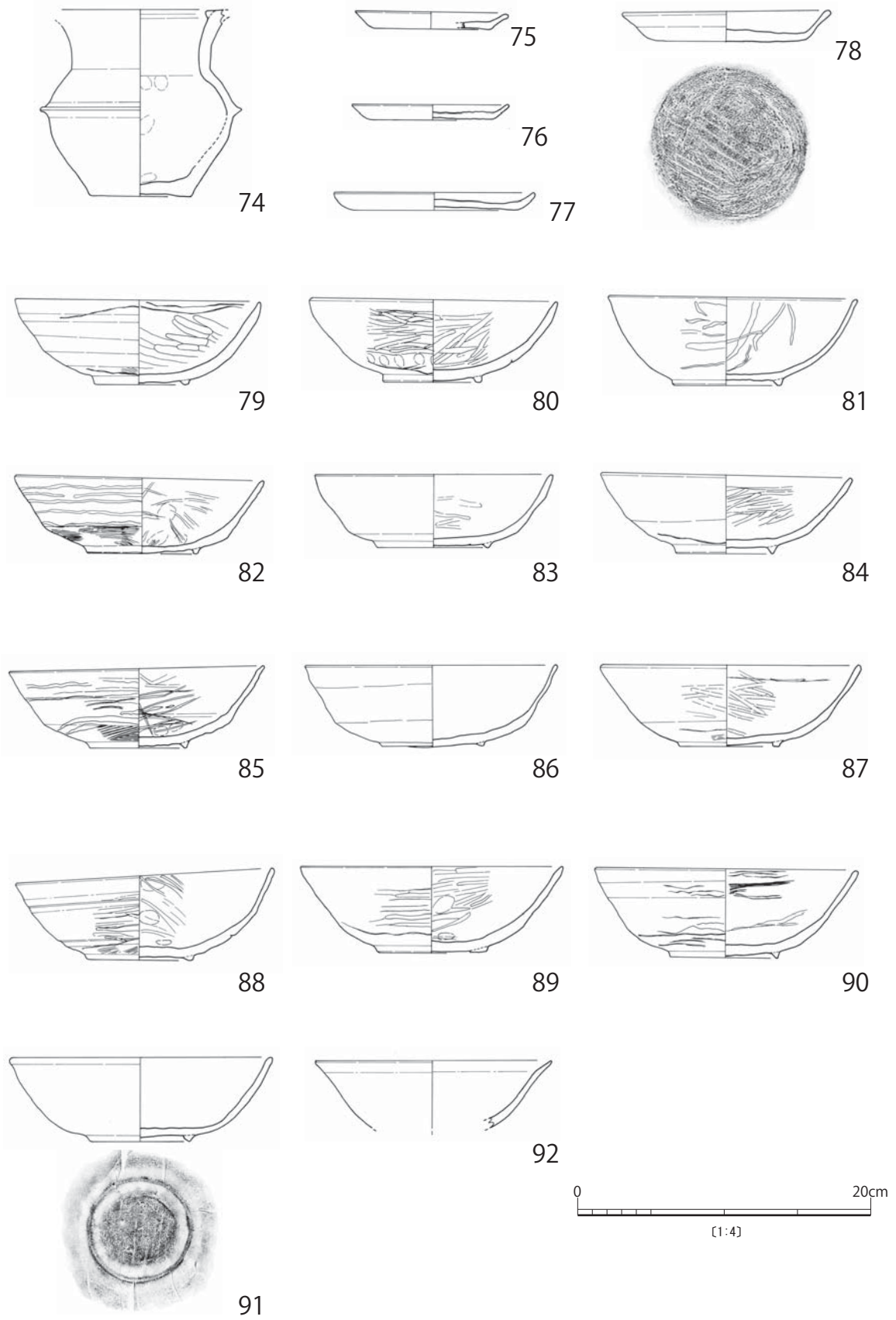


図30 SK542出土遺物 (S=1/4)

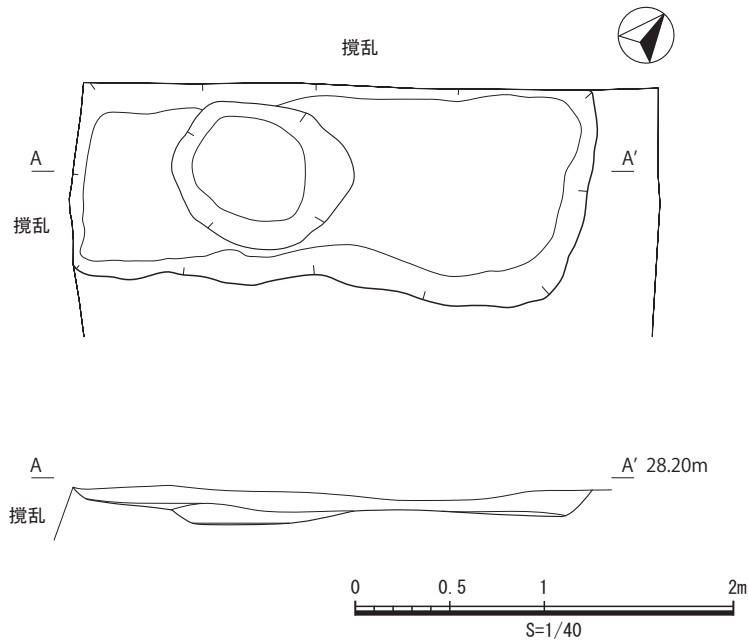


図31 11F区 SK544

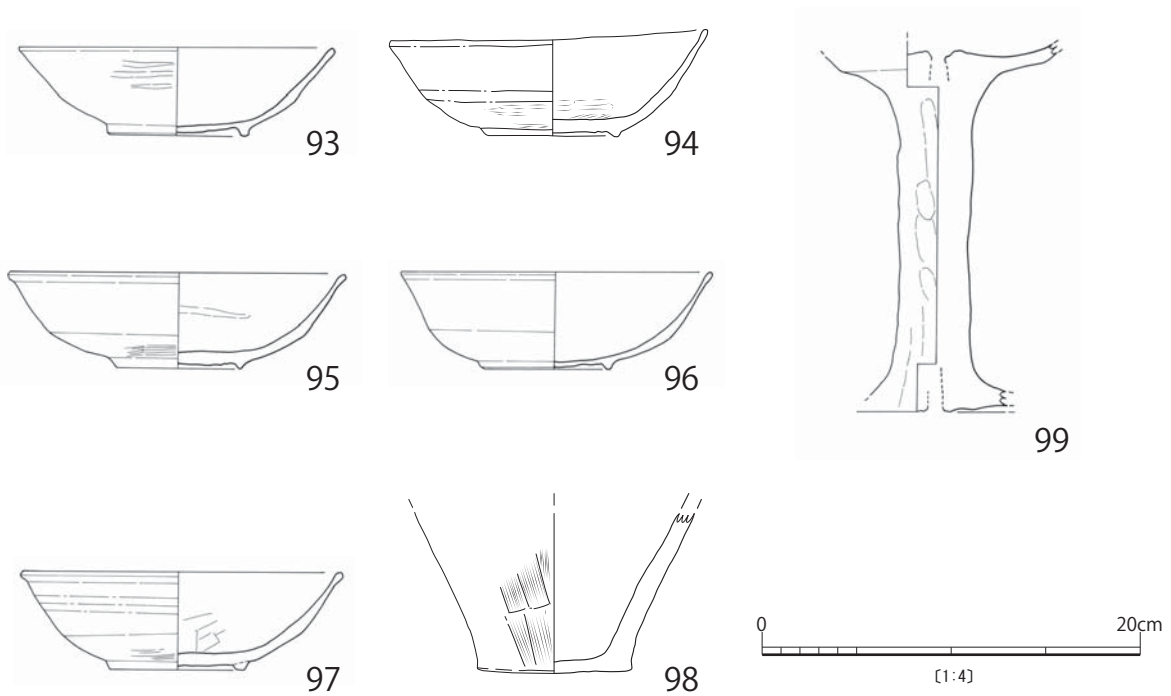


図32 SK544出土遺物 (S=1/4)

本土坑の南東部は他の土坑を切っている。平面形は南東部がやや張りだした不正方形を呈する。北西-南東方向で1.36m、北東-南西方向は1.44mをはかる。遺構の深さは最大で28cm遺存する。床面は

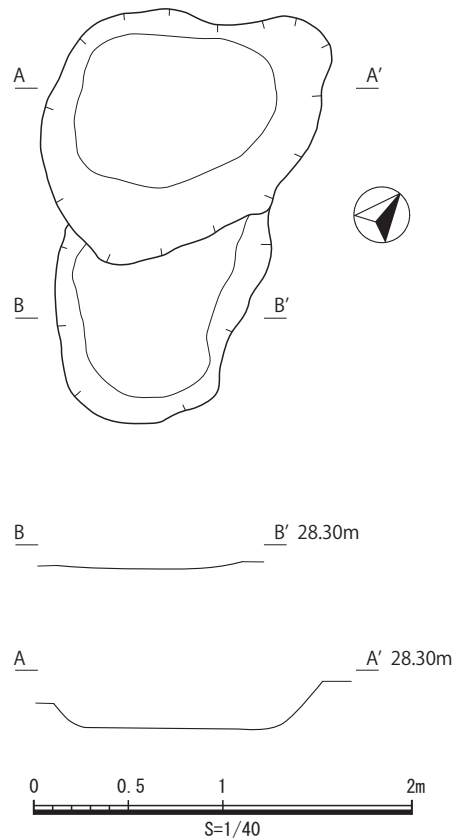


図33 11F区 SK546

ほぼ水平である。

【遺物】(図34)

100から108は土師器である。100から102は小形の皿で、いずれも口径が9cm以下で、胎土は精良である。103は燈明皿で、104は瓦器の小皿である。100・102・103の底部外面には板状圧痕がみられる。105から107は土師器の杯身である。107には瓦器にもみられる胴部下半の放射状指圧痕が残る。108は底径が11-12.0cmの土師器皿である。焼成時に大きく焼け歪んだためか器形が大きくゆがんでいる。

109から117は瓦器碗である。口径は15.0-18.0cmの範囲に収まる。112・116・117の底部外面には板状圧痕が残る。また、112と117は外面胴部下端部に放射状に指圧痕が残る。

118から120は棒状土製品で、118は残存長16.8cm、最大厚5.1cm、最大幅5.9cmである。砂粒を多く含む胎土を用い、指おさえで成形した後ナデで仕上げる。

11F区 SK548 (図35)

11F区中央部やや北寄りの場所に位置し、北から北西方向にかけてはSK542、SK544、SK546が位置する。平面形は略円形を呈するが、土坑の南側が一段高くなっており、西側も段がつく。北東-南西方向で最大2.12m、北西-南東方向は最大2.22mをはかる。遺構の深さは最大で40cm遺存し、土坑

II 調査の結果

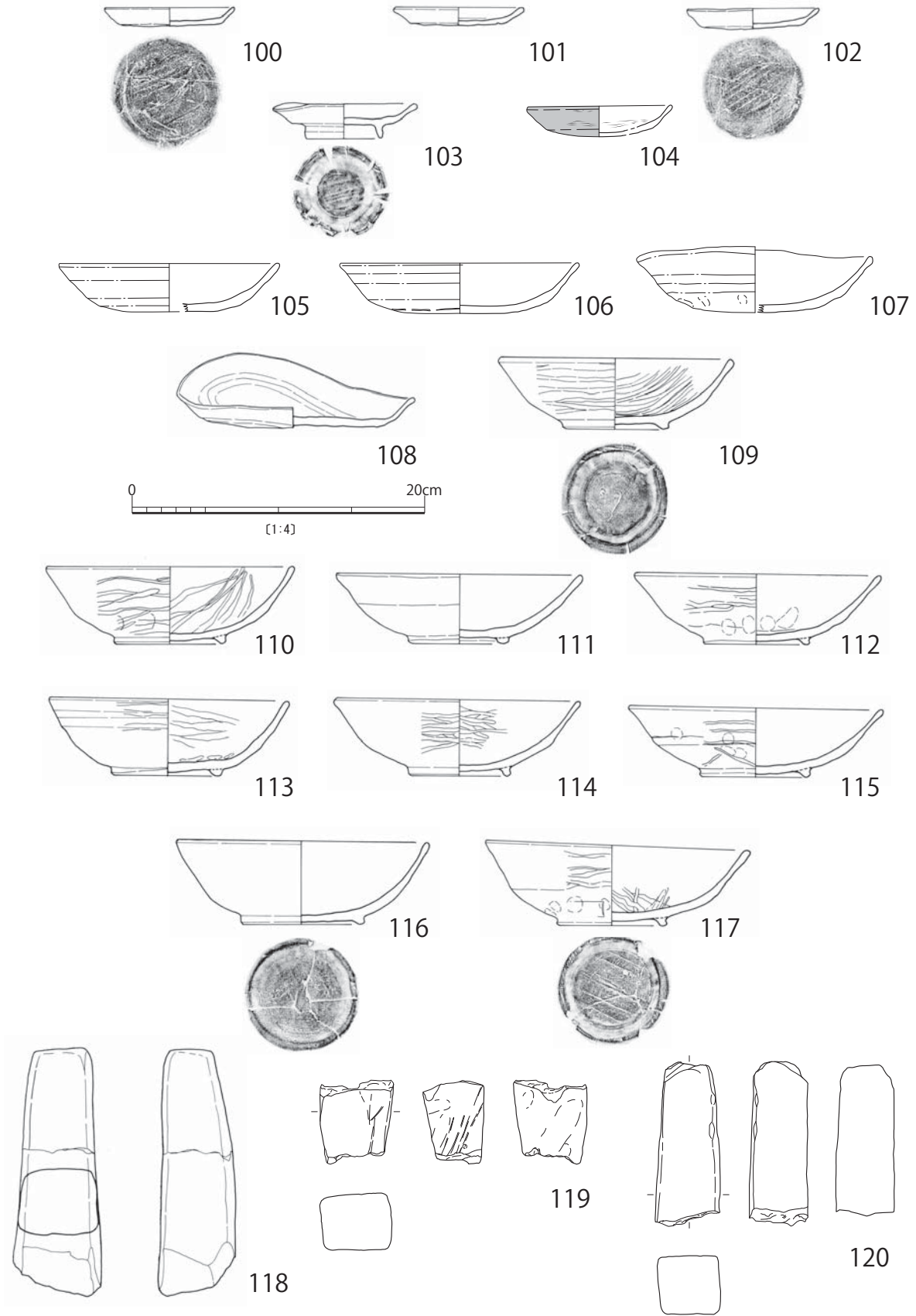


図34 SK546出土遺物 (S=1/4)

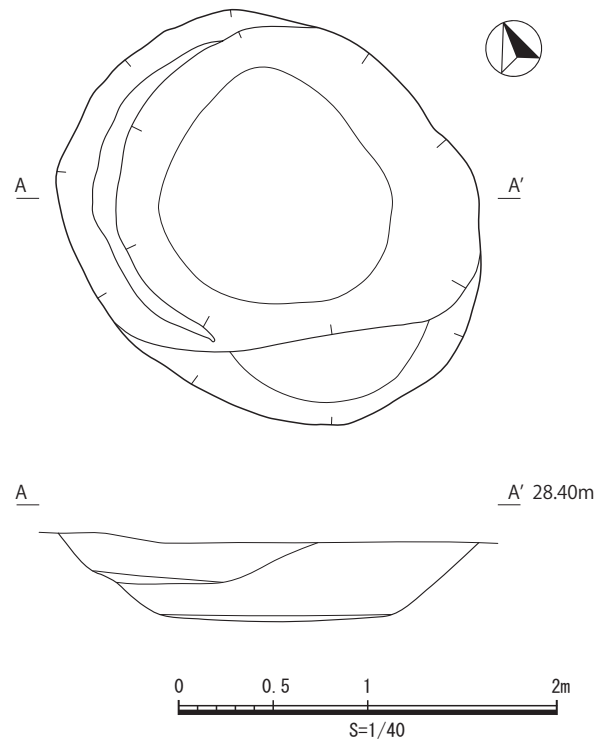


図35 11F区 SK548

西側の一段高い部分は24cmの深さである。床面は上記のように遺構西側及び南側で一段高くなるが、中央部の床面はほぼ水平である。

【遺物】(図36・37)

121から125は土師器の小皿である。121と125は底部外面に板状圧痕が残る。126以外の口径はいずれも9.0-9.4cmほどである。126のみ他の小皿よりもやや大きく口径10.1cmに復元でき、底部からの立ち上がりも瓦器焼成の小皿に多くみられる器形に似てやや丸味を帯びる。127・128・129は土師器の杯である。いずれも胴部中位の粘土接合部で屈曲する器形である。129はやや深い器形で底部はヘラ切である。

130から144は瓦器の椀である。130および132などは胴部中位の粘土接合部での屈曲がさほど明瞭ではない。そのほかの瓦器椀は胴部中位ないは下半部の粘土接合部で屈曲部があり、屈曲部上の体部は器壁がいったん薄くなり、口縁部で再度器壁に厚みが出る。また、131・135・140などは胴部屈曲部下位を中心に放射状の指圧痕が廻る。133は胴部下半部に糸切り痕がわずかに残る。141・142・143は焼け歪みのため器形の変形が著しい資料である。145と146は棒状土製品で、145は断面が湾曲しアーチ状の形態を呈する。146は扁平で端部が丸くすぼまる。

3) 井戸

8C区 SE101 (図38)

II 調査の結果

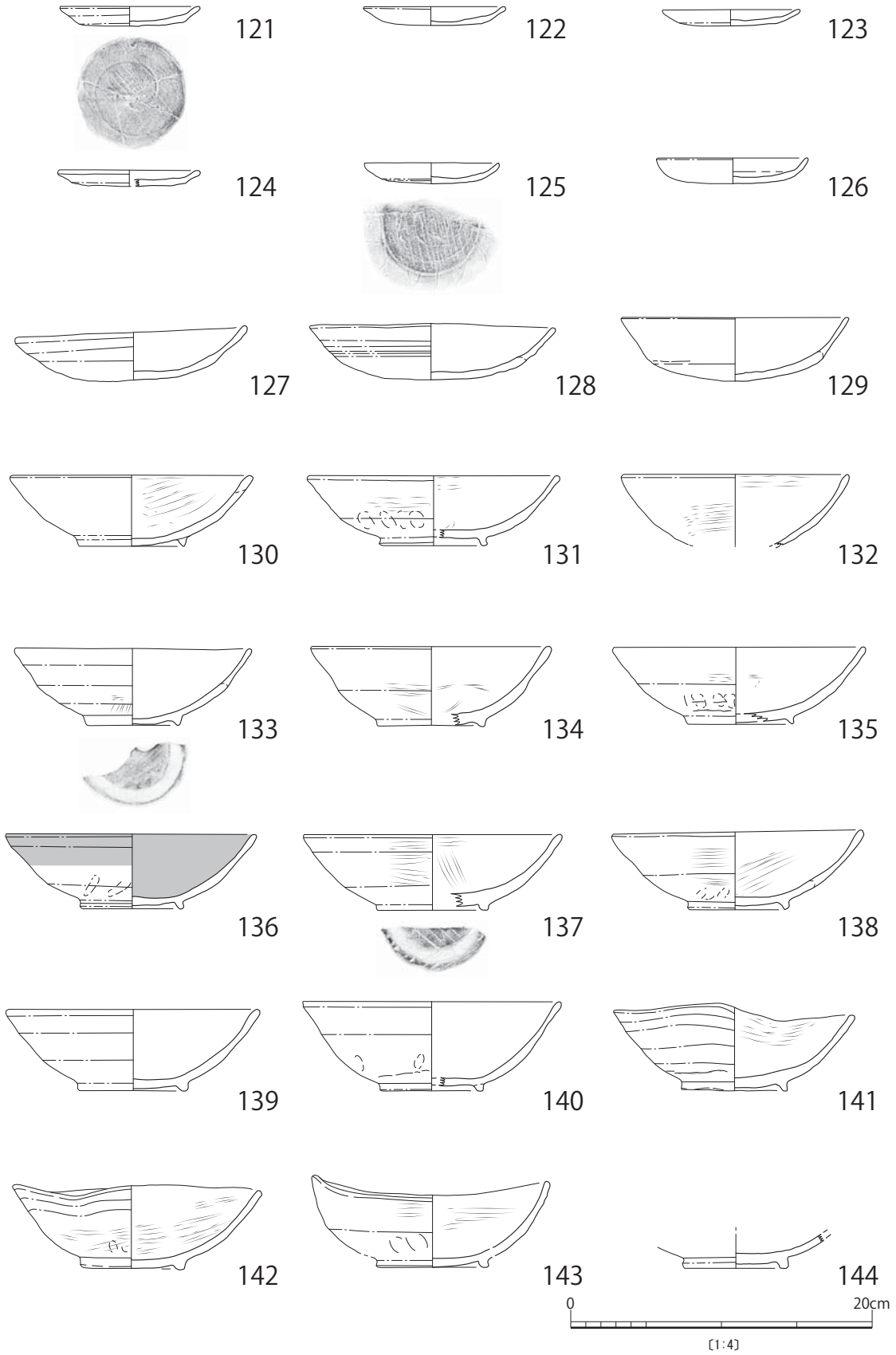


図36 SK548出土遺物(1) (S=1/4)

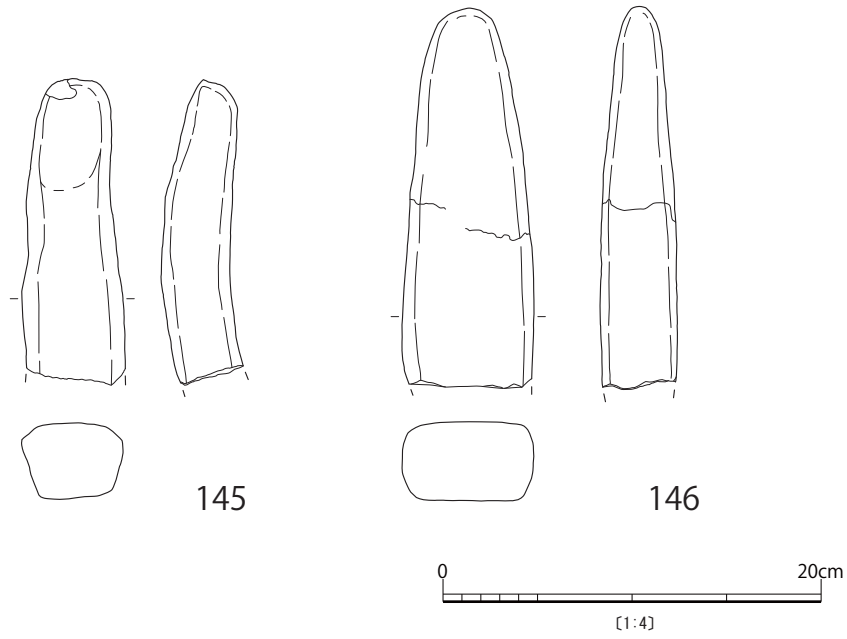


図37 SK548出土遺物(2) (S=1/4)

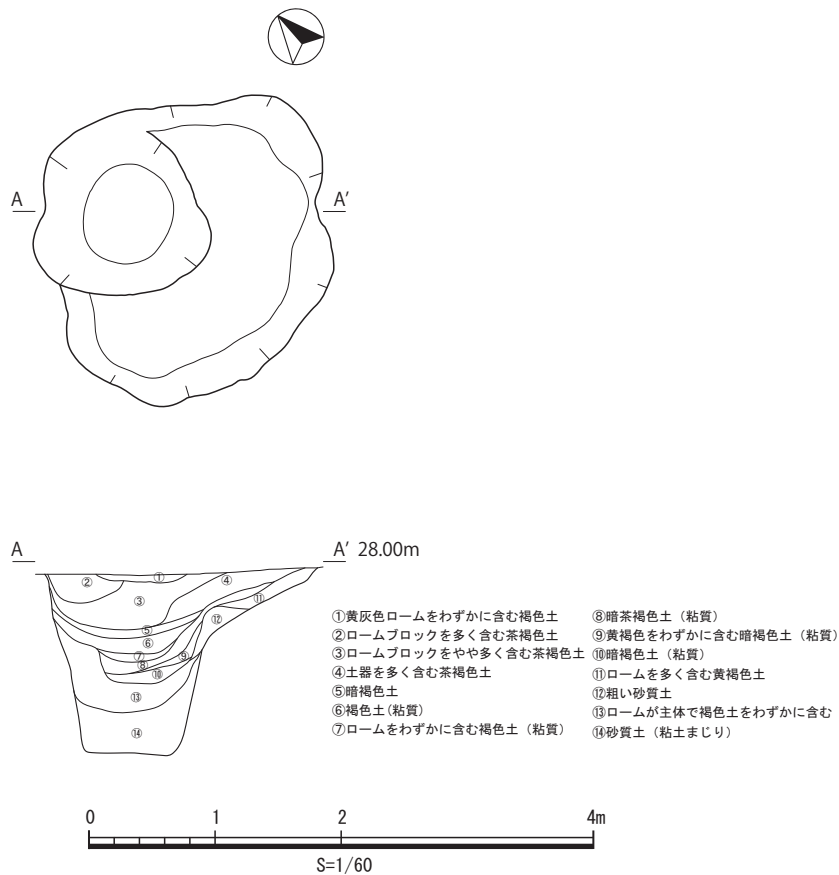


図38 8C区 SE101

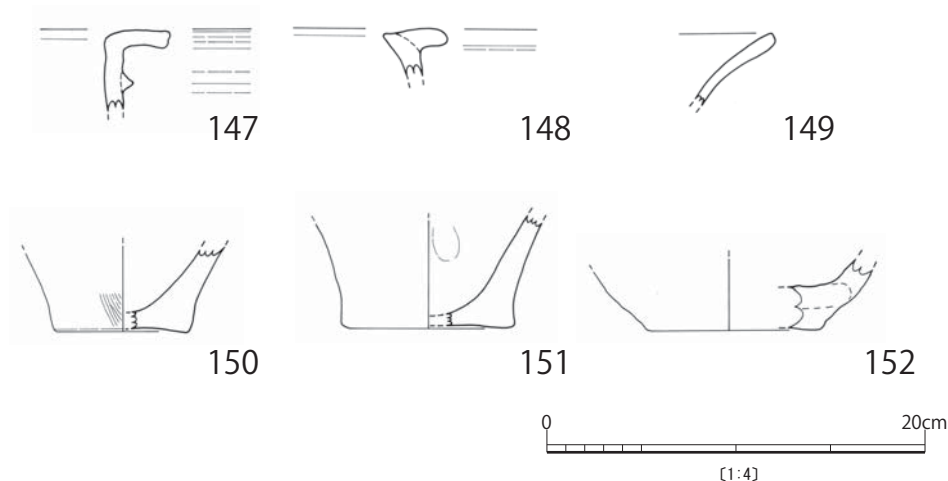


図39 SE101出土遺物 (S=1/4)

8C区中央東寄りの場所に位置し、南西方向にSD101が近接して位置する。平面形は南東部が円弧を描くややいびつな形を呈するが、遺構の北西隅が深くっており、東側および南側は残存部の中位から緩やかに立ち上がる。遺構の規模は、北西－南東方向、南西－北東方向でともに最大2.4mをはかる。北西隅の深く掘りこまれている部分は最大幅1.2mで、遺構の深さは最大で144cmが遺存する。底面はほぼ水平である。

【遺物】(図39)

147から151は弥生土器で、147と148は甕形土器口縁部である。147は緩く口縁部が逆L字形に屈曲し、口縁下に三角突帯がつく。148は口縁部の内側がわずかに突出する。149は高杯の口縁部片と推測される。150および151は甕形土器の底部片で、底径はそれぞれ7.0cmと9.7cmに復元できる。152は縄文土器の深鉢形土器底部である。底径は9.2cmに復元できる。

以上の遺物はいずれも破片が小さく、また当遺構の上層から出土している。

8E区 SE301 (図40)

8E区西寄りの場所に位置し、東方向にSK205が位置する。平面形は北西部がやや広がる不正円形を呈し、中央部が深くなっている。遺構の規模は北西－南東方向で2.6m、北東－南西方向で最大2.64mをはかる。遺構は深さ72cmでいったん段がつき、中央部がさらに深く掘りこまれており、220cmの深さで再度段がつき最深部に至る。遺構検出面からの最深部の深さは最大で2.44mで、底面はやや南東方向に傾斜する。

【遺物】(図41)

153から157は土師器である。153は盤、154は壺、155は高杯の脚部、156は甕あるいは甑の把手、157は甕である。

158から166は須恵器である。158・159は高台のつく杯Bの身で、高台は外側に向いてつく。159は底部外面にヘラ記号がみられる。160は小形の壺形土器で、胴部上半部にカキメを施す。161から163は頸部から上を欠損するが胴部最大頸部が緩く屈曲する短頸壺である。164・165は長頸壺で、165にはややしっかりした高台がつく。166は鉢で、体部はバケツ形を呈し、底部は丸みを帯びる。底径は16.2cmである。

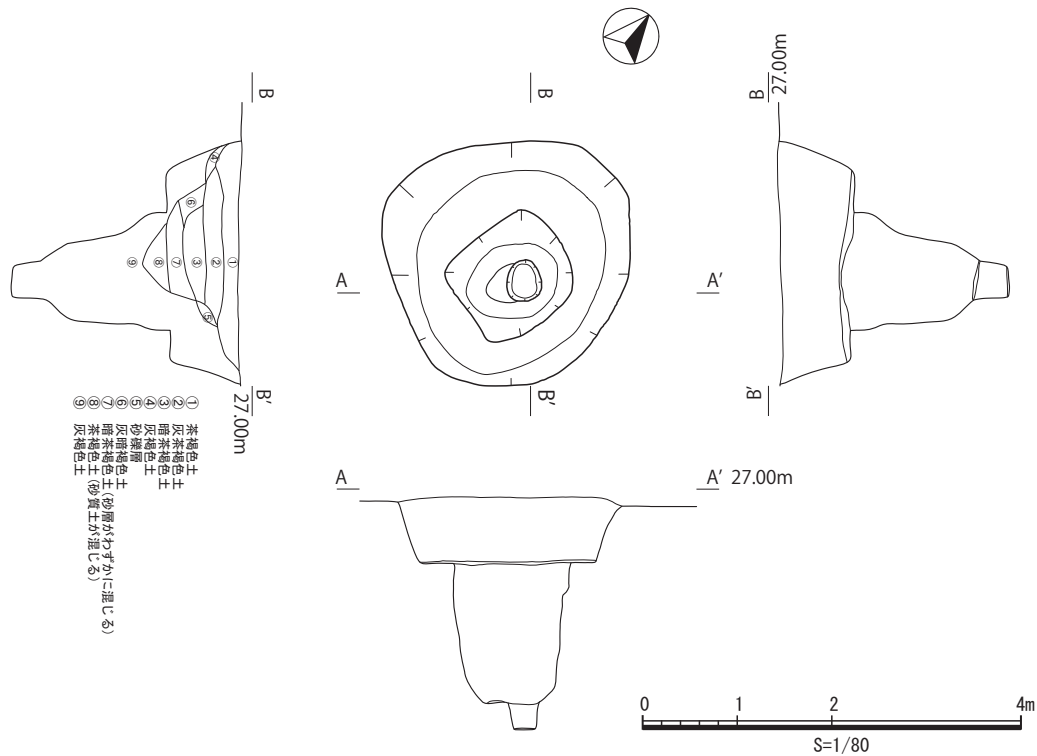


図40 8E区 SE301

10F区 SE401 (図42)

10F区の北部に位置する。南にはSX303が南西から北東方向へ位置している。またこの旧河川であるSX303を挟んで南に63mほど離れたところにはSE402、SE403が位置している。遺構は略東西方向に長くこの長軸方向で5.06m、略南北方向の短軸方向は東側の最もふくらむところで3.64m、西端部近くで2.52mである。中央部やや東よりの最も膨らむ部分で最も深く掘りこまれており、検出面からの深さ160cmをはかる。この遺構中央部の深く掘りこまれた部分は東西幅1.4m、南北幅1.8mで、深さは遺構検出面から底部までは160cmであるが、深さ140cmほどで段がついている。遺構の西側にも径80cmほどの円形の土坑状の落ち込みがあるが、こちらは遺構検出面からの深さは64cmと浅い。

遺構の南東から北西に向かって井戸枠と考えられる板材が出土している。これらの井戸枠の板材は北東-南西方向に3.0mから3.6m幅にわたって直線的に配置されており、3列の単位がそれぞれ80cmから1.0mほどの間隔をあけて出土している。最も西側の板材列および真ん中の板材の列には、それらに直行する北西-南東方向に約1.6mから2.4mの長さのわたって板材や部材が並んだ状態で出土している。

【遺物】(図43-46)

167から170は土師器の小皿、171から177は瓦器焼成の小皿である。土師器小皿は口径が10cm以下で器高も1.5cm以下に収まる。167は底部に回転糸切り痕がみられる。168と169の底部には板状圧痕が残

II 調査の結果

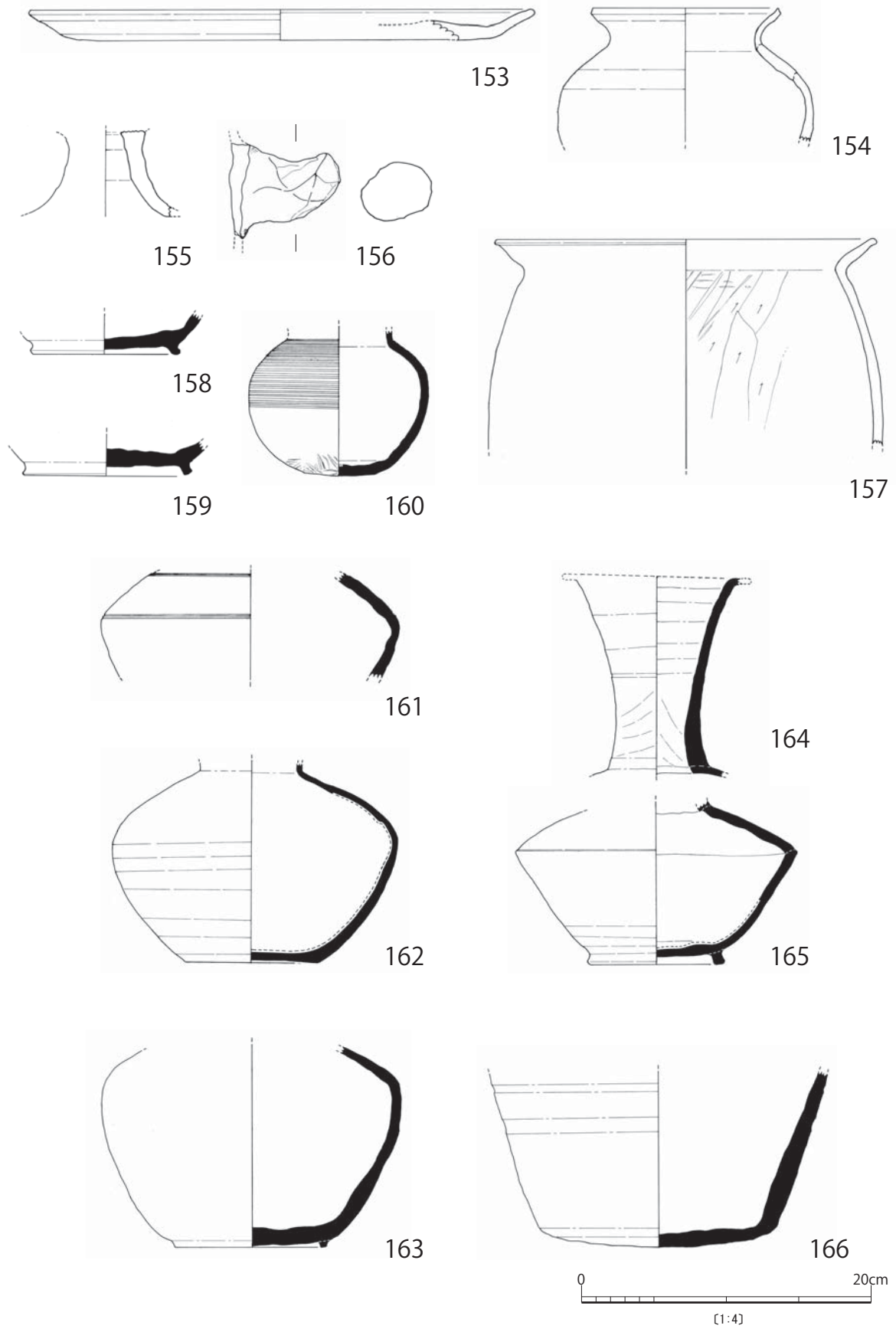


図41 SE301出土遺物 (S=1/4)

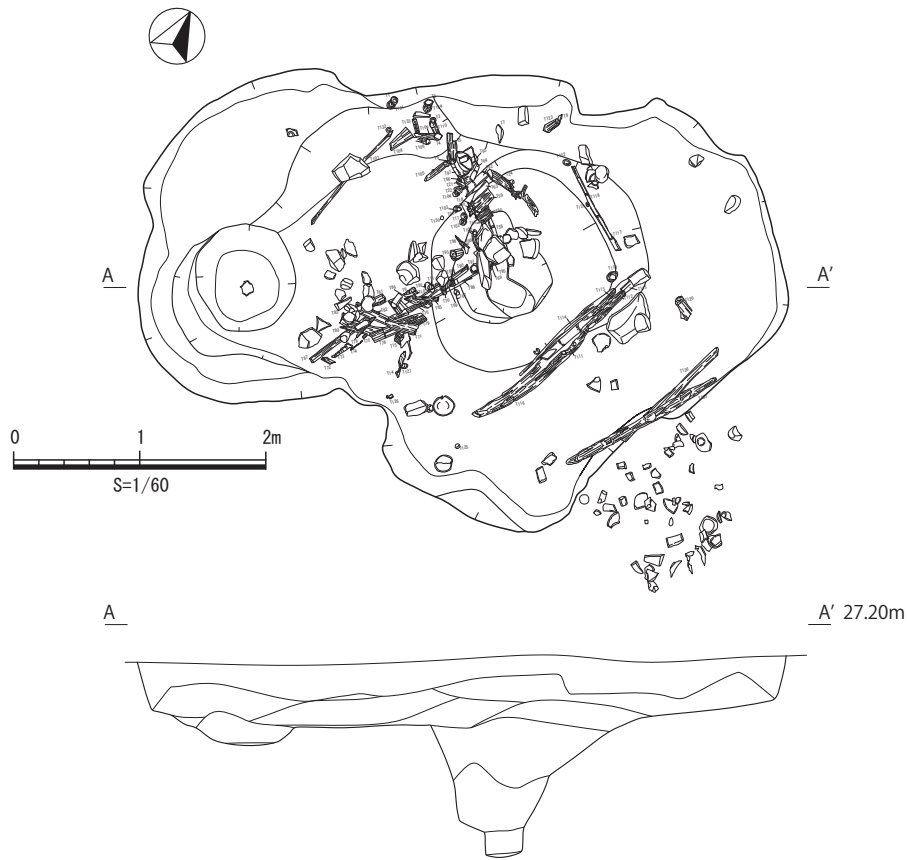


図42 10F区 SE401

る。瓦器焼成の小皿である171や172は器面に炭素の吸着がみられる。172は内面に線刻が描かれる。175は胴部最下部に糸切り痕が残る。172は胴部中位に瓦器椀のような屈曲部がみられる。口径は171や177が9.4cmと9.5cmに復元でき10cm以下であるが、そのほかの資料は10cm以上の口径に復元できる。

178と179は土師器の高台付小皿である。178は高台から屈曲する胴部を経て口縁に至る器形である。179は高台からそのまま口縁が開く。

180から184は土師器で丸底の杯である。180の底部外面には板状圧痕が残る。181は底部に回転糸切り痕がみられる。184は胴部下半部に放射状の指圧痕が残る。

185は黒色土器A類の椀で底径が8.5cmに復元できる。186から198、200から204は瓦器椀で、199は土師器の椀である。186から196は胴部中位の粘土接合部の屈曲部から上部は器壁が一端うすくなり口縁部で厚くなる。190の内面には重ね焼きの痕跡がみられる。191や196は焼け歪み、とくに196は器形のゆがみが著しい。またこの196の胴部下端部には糸切り痕が残る。197から204の瓦器椀や土師器椀は器形がやや深い。197の高台直上部には糸切り痕がみられ、204の高台には板状圧痕がみられる。197・200は焼け歪みによる器形のゆがみが著しい。

205から208は白磁椀の小片である。205は口径17.5cmに復元できる。209は土師器の甕底部で底径

II 調査の結果

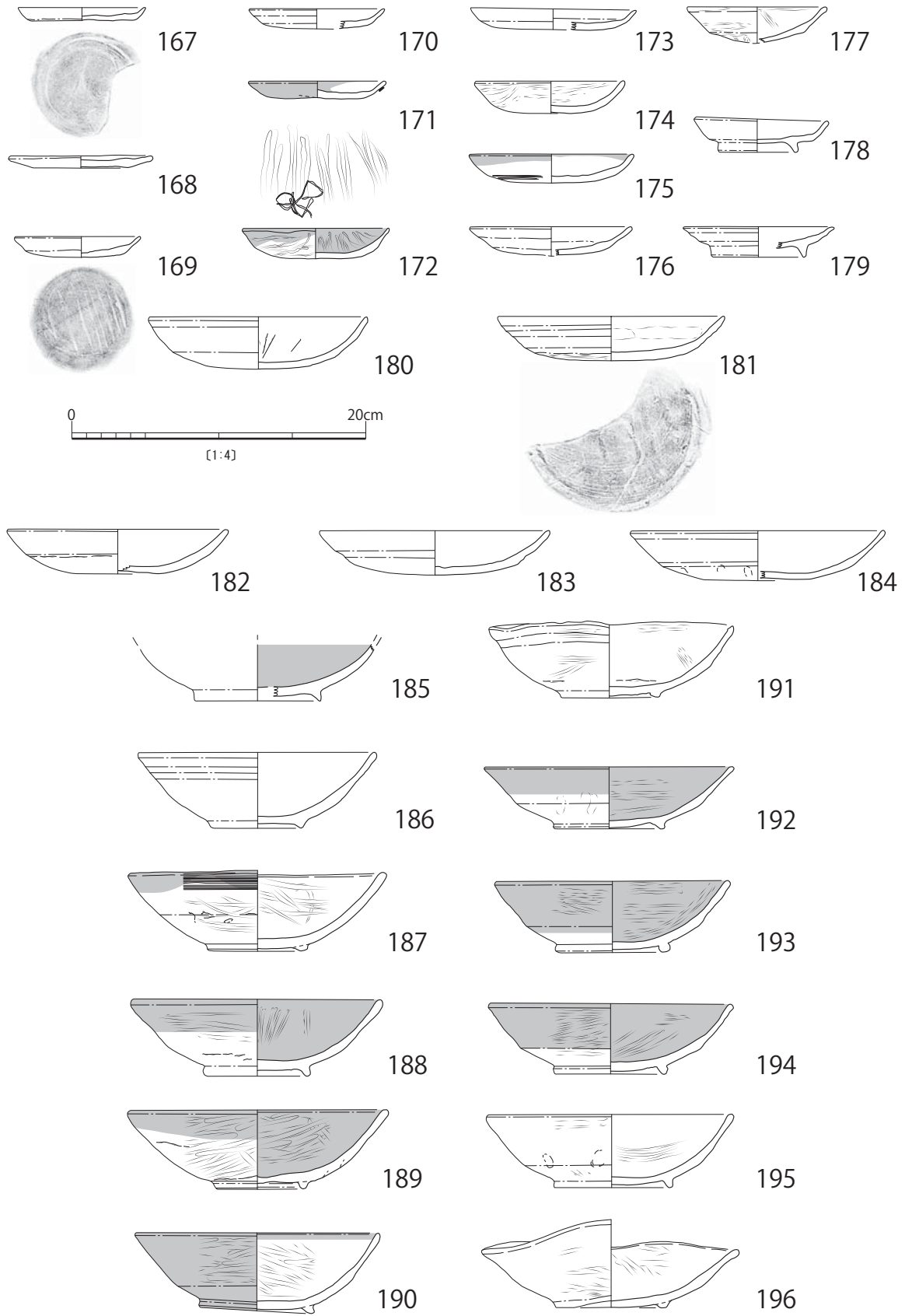


図43 SE401出土遺物 (1) (S=1/4)

13.2cmに復元できる。

210と211は器台の脚部であろう。211は受部内・外面および脚部が部分的に二次的に被熱しススが付着している。212は大形の円柱状土製品である。213は二次的被熱によって表面が劣化した円柱状の形態を呈する土製品である。214と215は棒状土製品で、214は端部がすぼまり、断面は方形に近い厚みのある形態である。216から227も同様に棒状土製品である。216から221は断面の形態が方形に近く厚みを持つ。216や218、219などは端部が丸味を持ってすぼまる。217は端部が丸味を持たず面をなす。残存状況が必ずしも良好な資料ばかりではないが、218・219・220・221などをみる限り後述のような断面の形態が明瞭なアーチ状を呈するものはみられない。また、219や221の破断面には粘土を巻いて棒状に成形したような痕跡が残る。220には表面に向かい合う円弧状の浅い圧痕が残る。このような弧状の圧痕は217にもみられる。222から227は棒状土製品の幅に対して厚みがうすく扁平な形態を呈する。また、222・224・225など断面がアーチ状を呈する。225には中央部に「X」字形の刻みが施されている。この扁平な形態をした土製品のなかにも223や226・227の破断面にみられるように粘土を巻いて棒状にした痕跡がみられるものがある。また、使用の痕跡であるススの付着については外面にみられるものが多いが、224は破断面にもススが付着している。

10G 区 SE402/SE403 (図47)

10G 区南部、10H 区との境界付近に位置する。西側には旧河川である SX303が近接して位置する。平面形は南東部と北西部の2ヶ所で不正円形を呈し、その間がすぼまる。本来2つの遺構が重複している可能性が推定される。南東側は北東-南西軸で2.14mをはかり、北西側の不正円形は北東-南西軸で1.4mをはかる。双方にまたがる北西-南東方向では3.86mをはかる。南東部不正円形は深さが84cmまで緩やかに壁が傾斜し、そこから中央部がすり鉢状に14cmほどくぼむ。北西部の不正形の掘り込みは検出面からの深さが94cmで、南東部の掘り込み部検出面からは140cmの深さをはかり、遺構底面は北西側に緩やかに傾斜する。

調査時に遺物が SE402と SE403の2つの別遺構として取り上げられており、本来2つの別の井戸として調査されている可能性がある。しかし、北西部と南東部の掘り込みそれぞれいずれが SE402、あるいは SE403であるのかは原図に記録がなく不明である。遺物報告においては、2つの遺構名が付された SE402と SE403は出土遺構別に分けて報告している。

【遺物】(図48・49)

228から259は SE402出土である。228から230は須恵器の杯蓋で228は口縁部をわずかにおりかえすが、229と230は口縁部を折り曲げずそのまま端部にいたる。つまみはボタン状の小さなつまみがつく。231から240は杯 B の身で、231から233は高台部分がやや高く外側に向く。それ以外は高台が低く、体部が直線的に外側に開く。241から244は高台のつかない杯 A の身である。体部が直線的に開く。245と246は皿である。247と248は盤で、底部から短く体部が立ち上がる。249と250は盤の底部が丸みを帯び膨らんだ器形である。249の体部下端には糸切り痕がみられる。251は須恵器の鉢で胴部下半部にタタキがみられる。

252から258は土師器である。252は杯蓋の小片で口縁部を折り曲げる。内外面とも炭素が付着している。253は杯身片で残存高2.9cmである。254と255は低い高台のつく杯身で、体部が直線的に開く。256は土師器の盤である。257はやや口径の大きな杯身で、258も杯身であるが双方とも底部が丸みを帯びる。259は黒色土器 A 類の杯である。

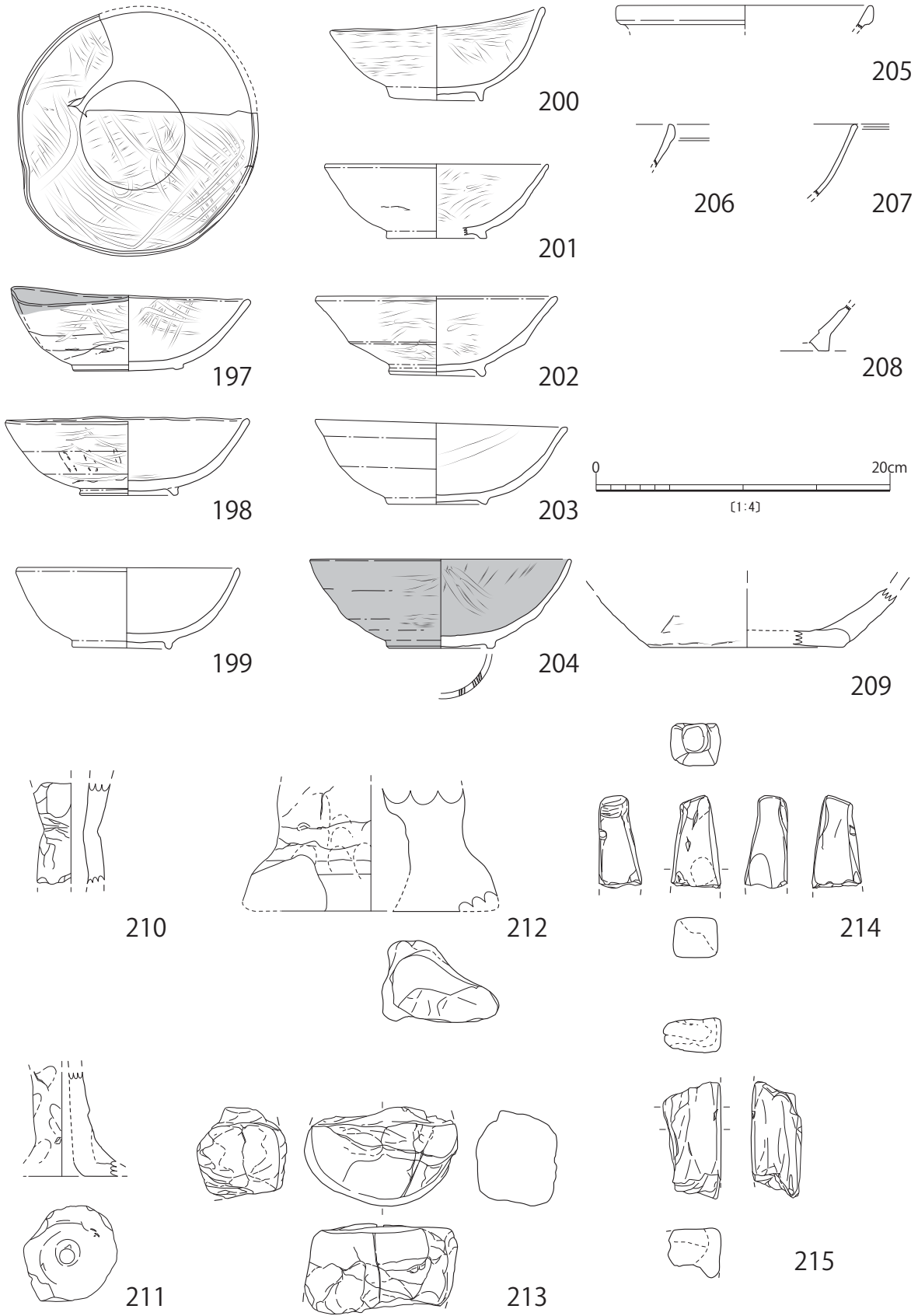


図44 SE401出土遺物(2) (S=1/4)

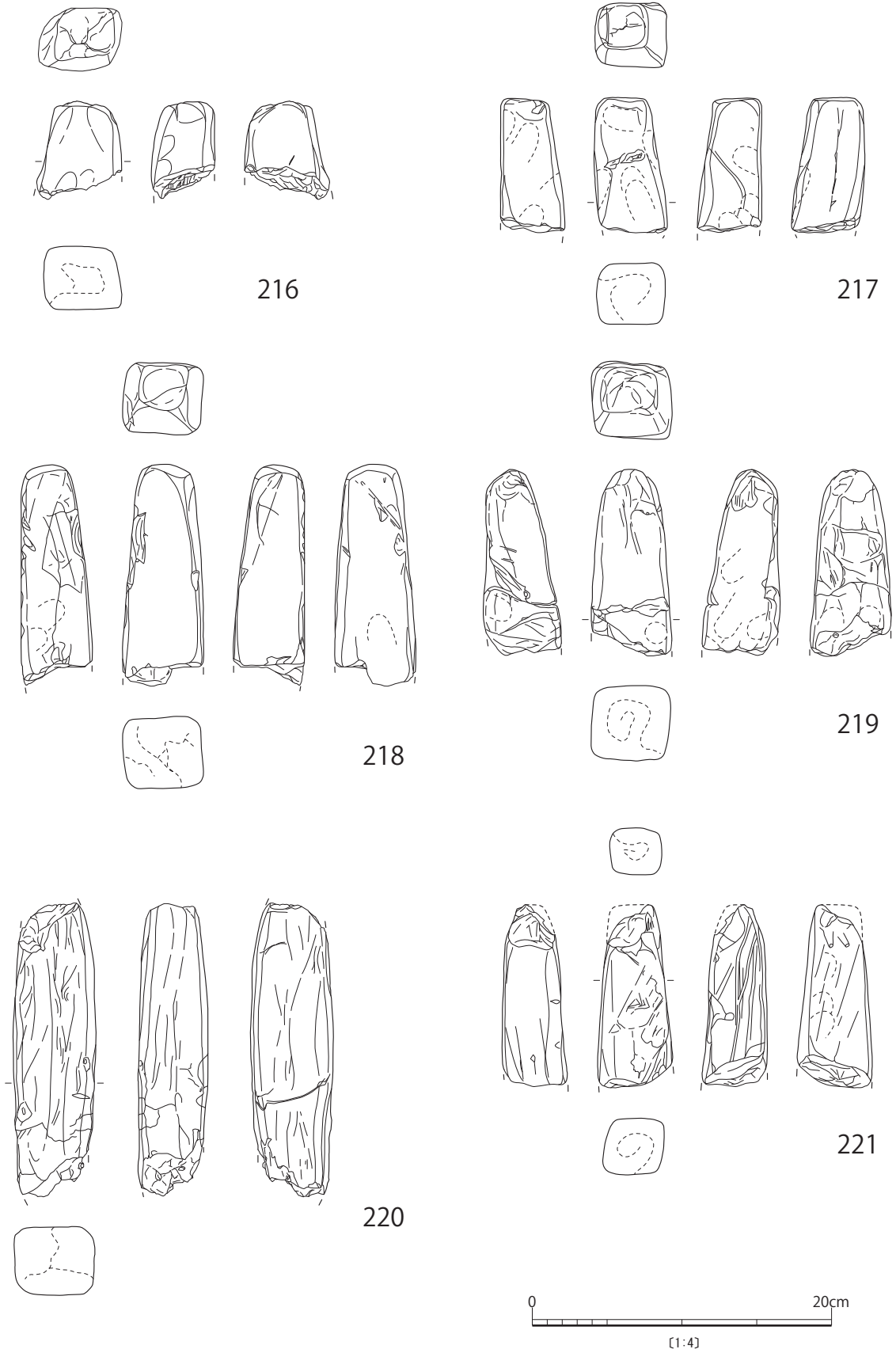


図45 SE401出土遺物 (3) (S=1/4)

II 調査の結果



図46 SE401出土遺物(4) (S=1/4)

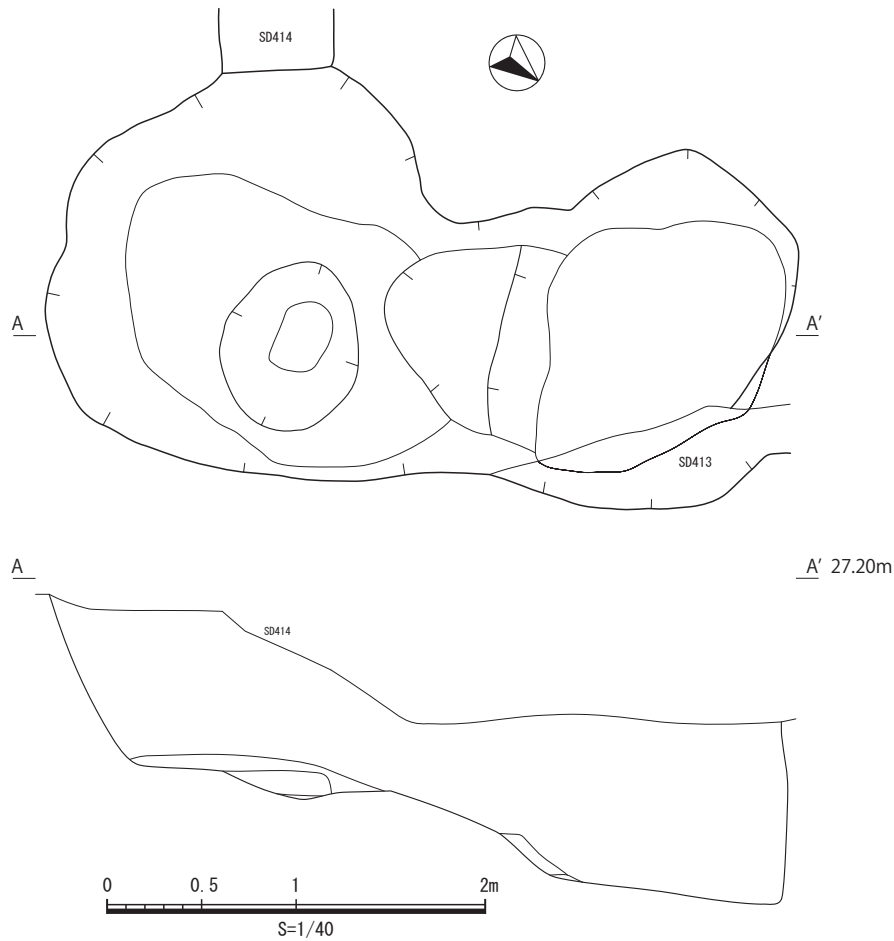


図47 10G区 SE402, SE403

260と261はSE403出土の土器で、260は土師器杯Aの身である。口径は13.5cmをはかる。261は水瓶で、胴部外面はタタキの後ナデで、底部付近はケズリである。残存高は22.4cmである。

11G区 SE502 (図50)

11G区西部、エリアIの調査区西側の境界に接して検出されている。南側には旧河川であるSX303が近接して位置する。平面形は不正形を呈し、土坑の中央部が深くなっている。北西-南東方向で2.2m、北東-南西方向で最大2.1mをはかる。遺構は20cmほどの深さまでは緩やかな壁面であるが、そこから100cmの深さまではほぼ壁面が垂直に落ち、いったん段がつく。中央部はそこからさらにほぼ垂直に深くなり、最深部の深さは最大2.88mをはかる。底面はほぼ水平である。

【遺物】(図51)

262は土師器の杯で、口径15.0cmである。内面に工具痕が残る。263と364は瓦器椀である。263は胎土精良で内外面ミガキを施す。焼け歪みにより器形がかなり歪んでいる。265は滑石製の石鍋片で、外面のノミによるケズリが明瞭にみられる。

II 調査の結果

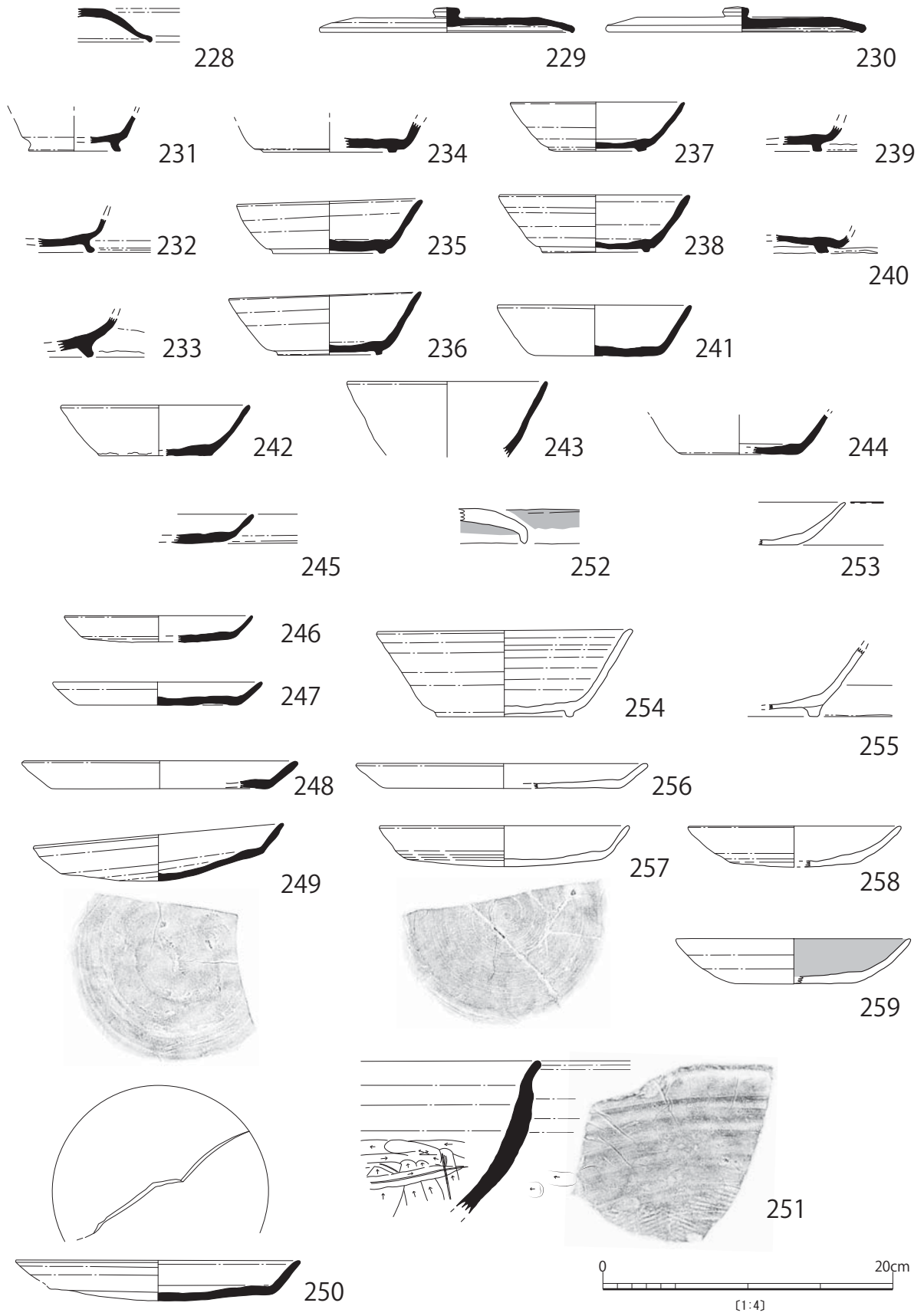


図48 SE402出土遺物 (S=1/4)

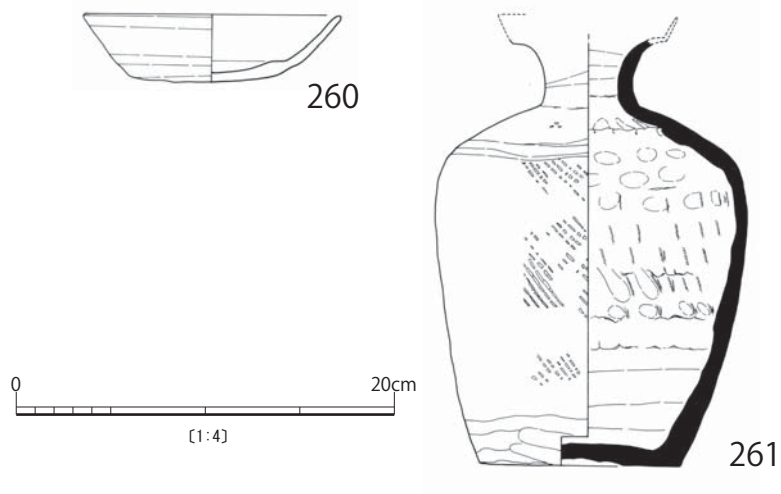


図49 SE403出土遺物 (S=1/4)

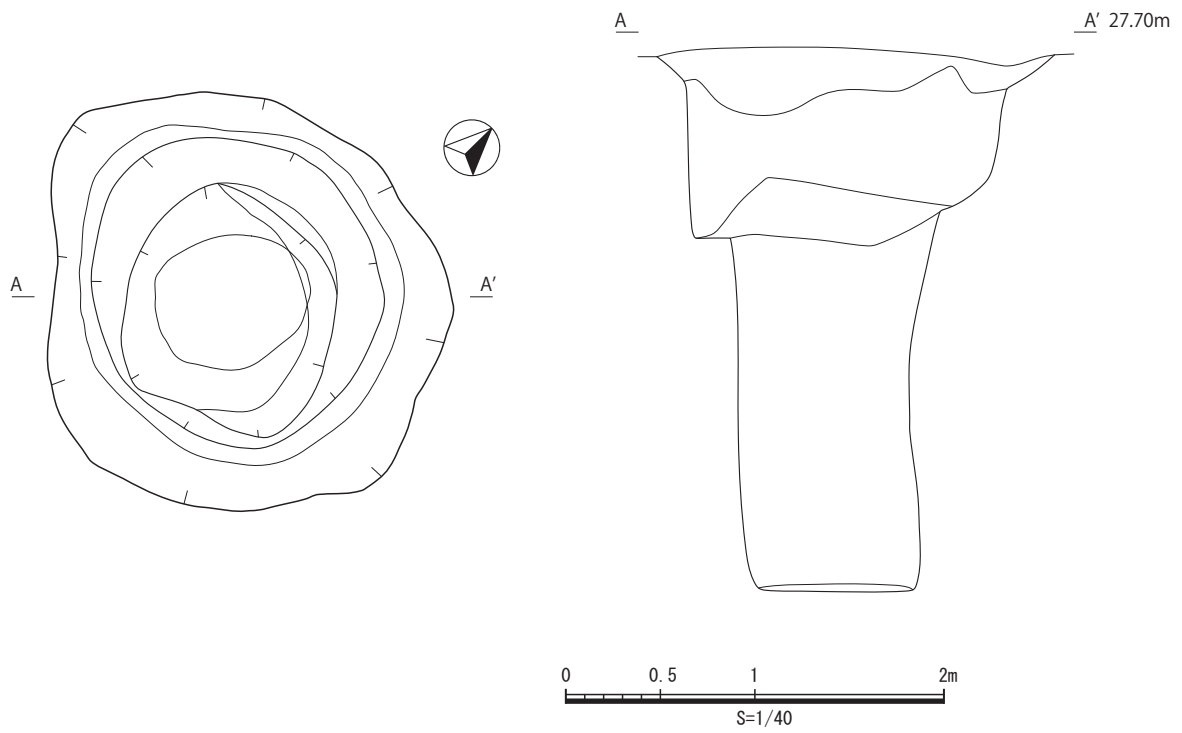


図50 11G区 SE502

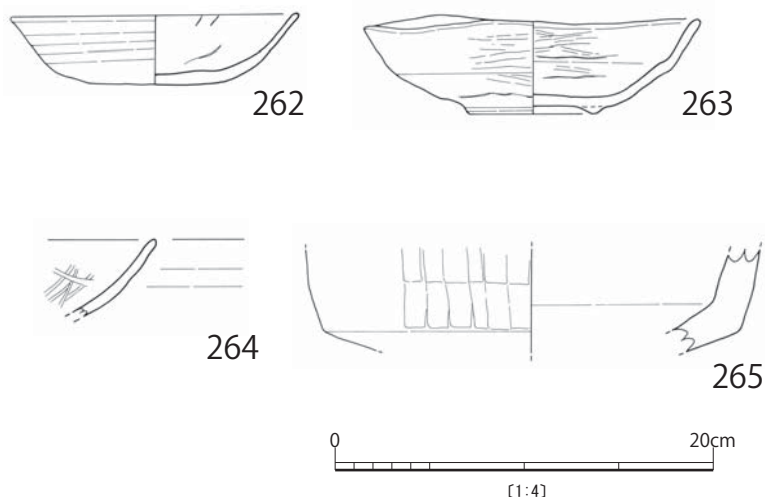


図51 SE502出土遺物 (S=1/4)

4) 溝

SD101 (図4・図52)

SD101は8B区調査区西壁沿いから8C区にかけて、および8C区から8D区の範囲で略南東-北西方向に検出されている溝である。SD101として調査された遺構は、上記のように8B区西側から8C区西側に沿った部分と、8C区中央西より部分の範囲から8D区にかけての部分で検出されているものの、双方はつながっていない(図4)。そのため、図52ではより南側の溝部分のみを示している。このようにSD101は途中で途切れている部分があるが、8B区から8C区までSD101として調査された溝の全長は約92mで幅は最も広い部分で6m、深さは1.27mである。

また、このSD101の南東方向の延長線上には8E区SD524が位置しており、さらに南東方向のエリアIIの7G区にはSD101が調査されている(図4)。8B区で検出されているSD101の北端部から7G区のSD101までは直線距離で約244mである。また、このSD101の東側にはSD109が位置している。このSD109の南東方向には7・8E区SD523が位置しており、さらに南東方向の延長線上ではやや西に外れるものの7G区SD208が位置する。

【遺物】(図53・54)

266から279は須恵器である。266と267は杯蓋で、266は扁平な宝珠形つまみがつき、267は委縮した身受けのかえりがつく。268は杯Aの身で口径は13.0cmに復元できる。269から275は高台のつく杯Bの身である。269と270は高台が比較的高く外側に向く。271から275は低い高台が底部端からやや内側につく。276は高杯の脚部で残存高は4.1cmである。277は横瓶で焼成がやや良くないが胎土は精良である。器高は15.8cm、口径は7.1cmである。278と279は甕の口縁部片である。278は口径21.0cmに復元でき、279は口径23.0cmに復元できる。

280は土師器の把手である。281と282は黒色土器A類の椀である。283は白磁椀で口径が16.0cmに復元でき、284は青磁椀の底部で高台を作り出す。

285から288は瓦である。285と286は円筒桶作りの可能性のある平瓦である。凸面は格子目叩きで、凹面はすり消しが施されている。285の狭端面には糸切り痕が残る。287と288は格子叩きの丸瓦で、いずれも側面に分割面がみられる。

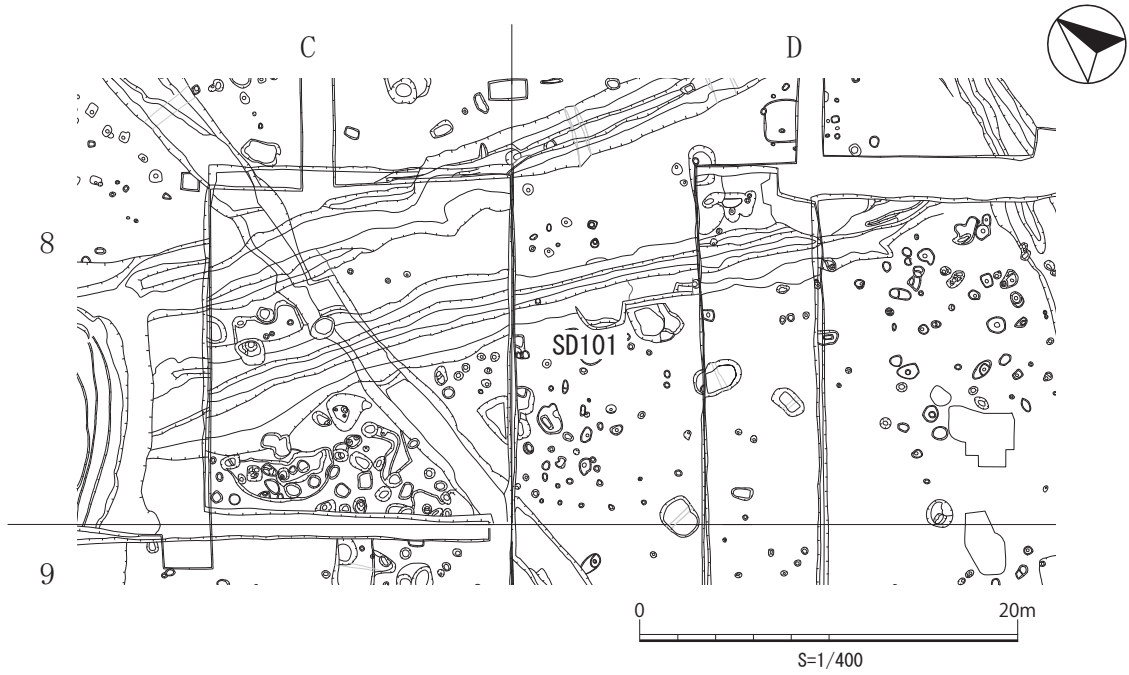


図52 8・9-C・D区 SD101

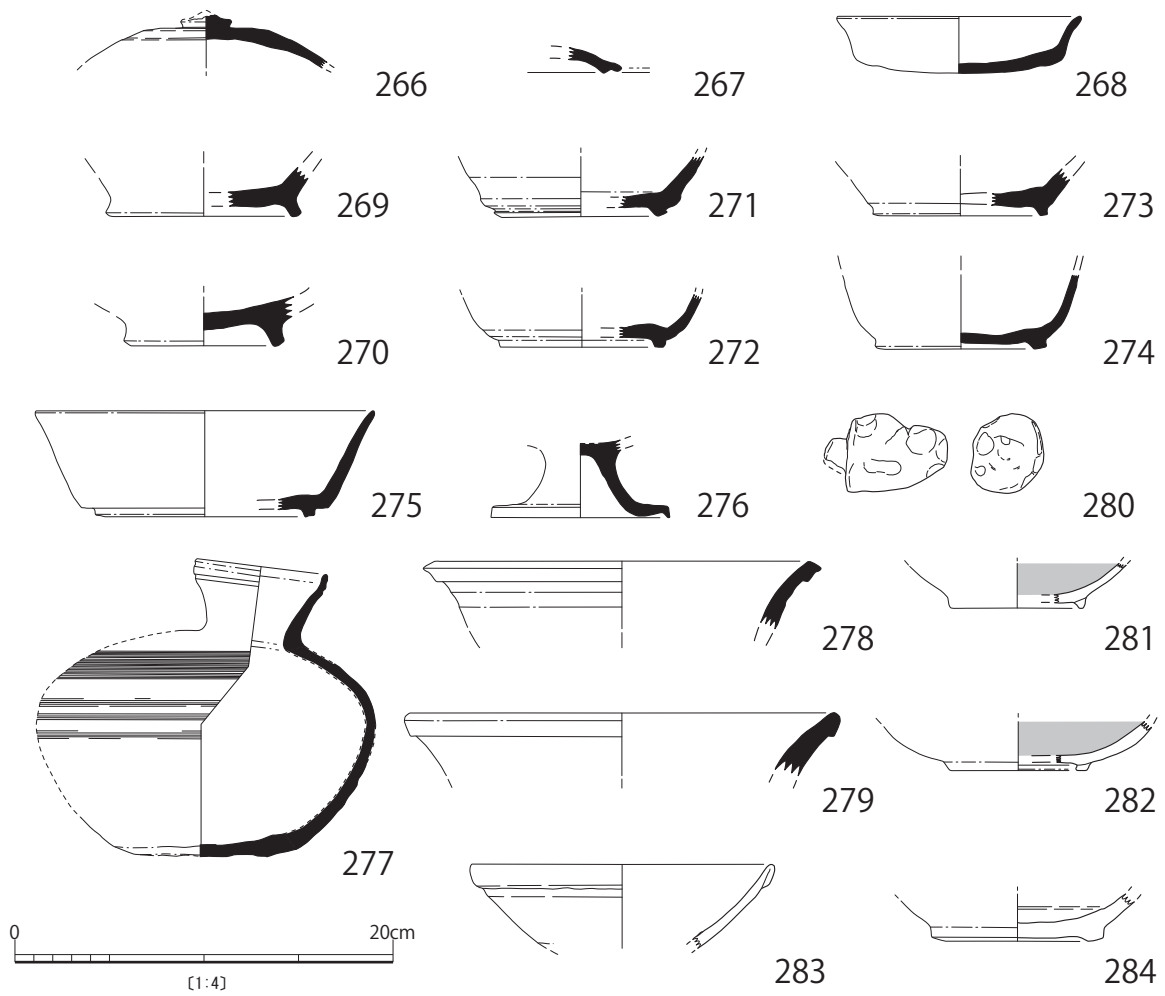


図53 SD101出土遺物(1) (S=1/4)

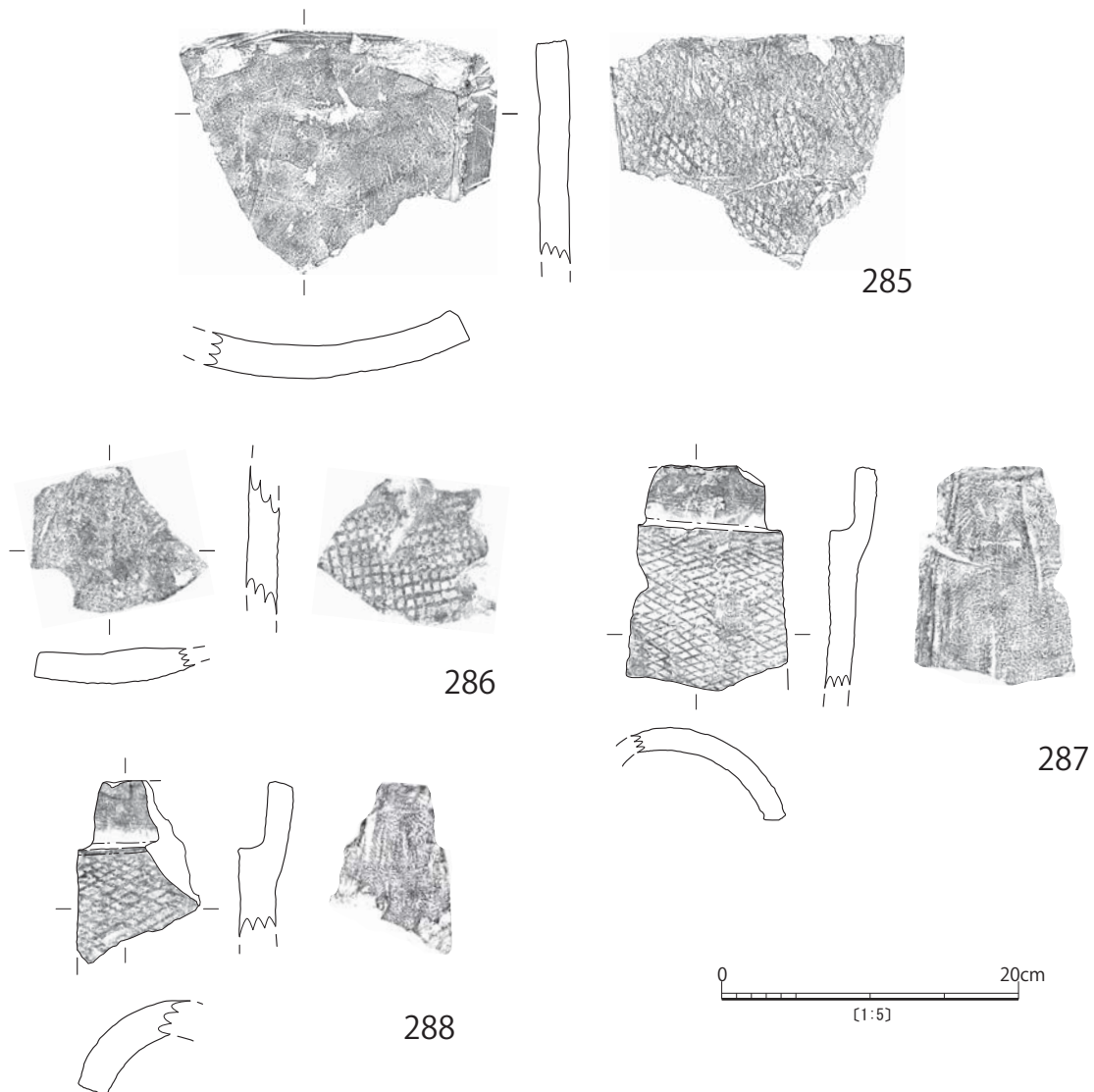


図54 SD101出土遺物（2）（S=1/5）

SD108（図55）

7B・C区から8C区、9D区にかけて略南北方向に流れる溝である。上記のSD101とは8C区で交差する。溝の北側は調査区外に延びてゆくようであるが、南端は9D区中央部でおわる。溝の長さは約90m、幅は2.6mほどで、深さは深い所で56cmである。

【遺物】（図56-59）

289から295は土師器である。289から291は小形の甕である。292から294は甕で、292は口縁部が外反し、293は胴部から緩く口縁部が外方に立ち上がる。294は胴部から一端すぼまり口縁部が短く立ち上がる。295は甕で口縁端部に刻みがつく。外面はハケメで内面は縦方向のヘラケズリである。口径は24.7cm、底径は17.7cmに復元でき、器高は29.5cmである。

296から330は須恵器である。296から298は杯Hの蓋で296は器高が高く口縁部がやや反る。口径は

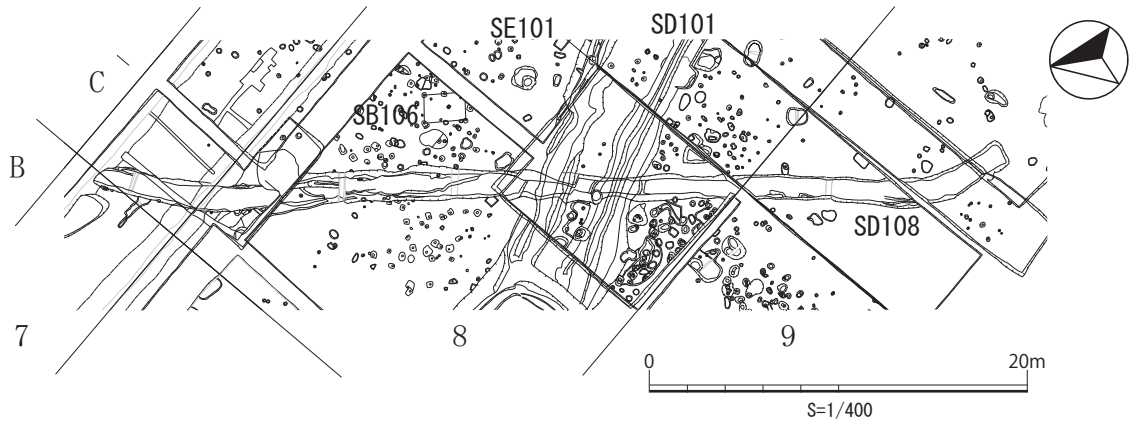


図55 7・8・9-B・C区 SD108

いずれも10cm内外の小形である。297と298の天井部外面にヘラ記号がみられる。299から302は杯Hの身で、いずれも受部径10.5cm内外の小形である。301は外面にヘラ記号がみられる。303から311は杯Gの蓋で、見受けのかえりがつく。受部径はいずれも9-10cmほどである。303・306・309・311などの天井部外面にヘラ記号がみられる。311はヘラ記号に加え天井部に圧痕が認められる。312から315は杯Gの身である。312は口縁部が外反気味に立ち上がる。313は底部外面にヘラ記号がみられる。

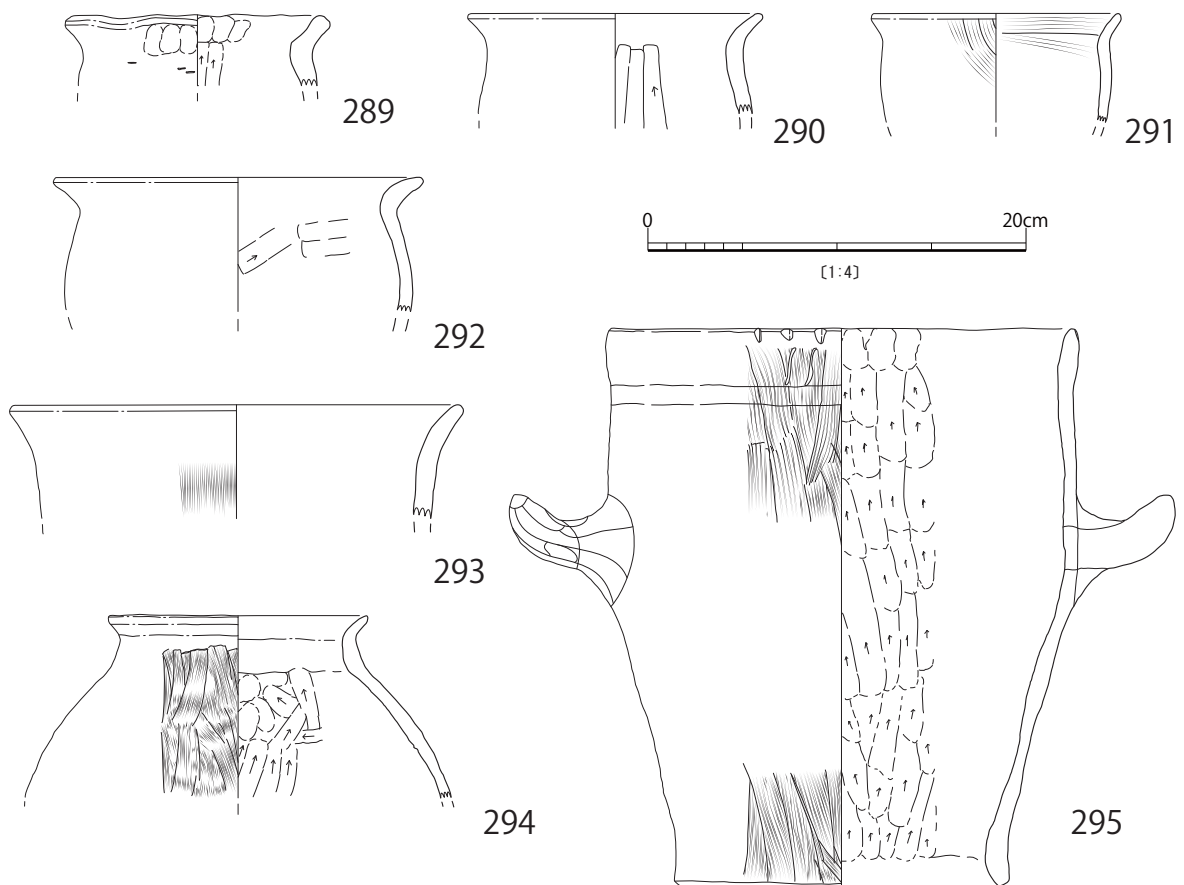


図56 SD108出土遺物(1) (S=1/4)

II 調査の結果

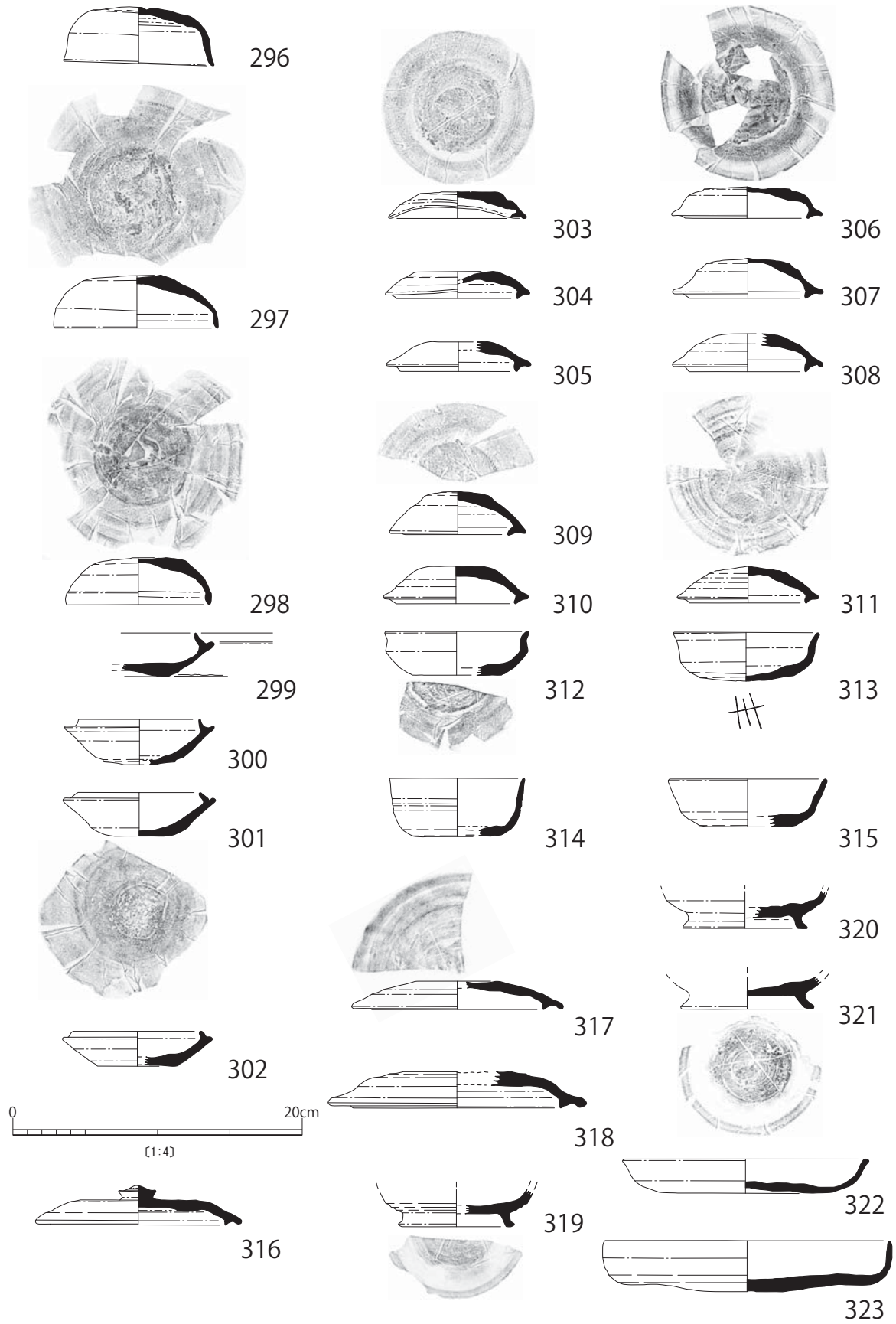


図57 SD108出土遺物(2) (S=1/4)

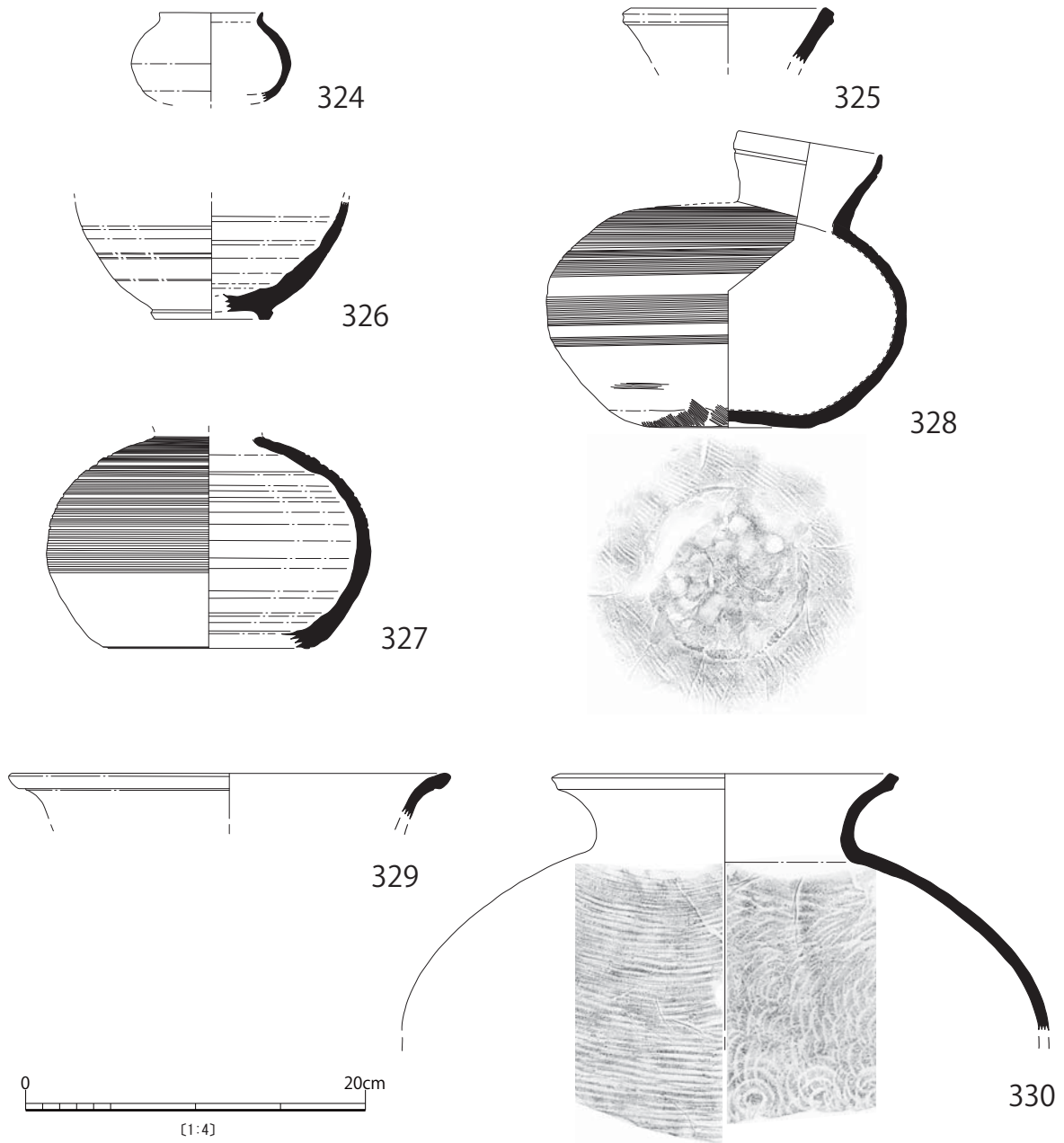


図58 SD108出土遺物（3）（S=1/4）

316から318は杯Bの蓋でかえりがある。316は宝珠形つまみがつく。317は天井部外面にヘラ記号がみられる。319から321は杯Bで比較的高い高台が外に向かってつく。319と321は底部外面にヘラ記号がみられる。322と323は盤である。322は口径17.1cm、323は20.0cmに復元できる。324は小形の無形壺で口径は6.1cmに復元できる。325は小形の甕の口縁部である。326は瓶の底部で底径は7.2cmに復元できる。胎土は精良で低い高台がつく。327と328は平瓶である。328は器高17.4cmで、口径8.7cm、底部外面に指頭圧痕が多数ついているほか、ヘラ記号がみられる。329と330は甕である。329は口径25.9cm、330は20.4cmに復元できる。

II 調査の結果

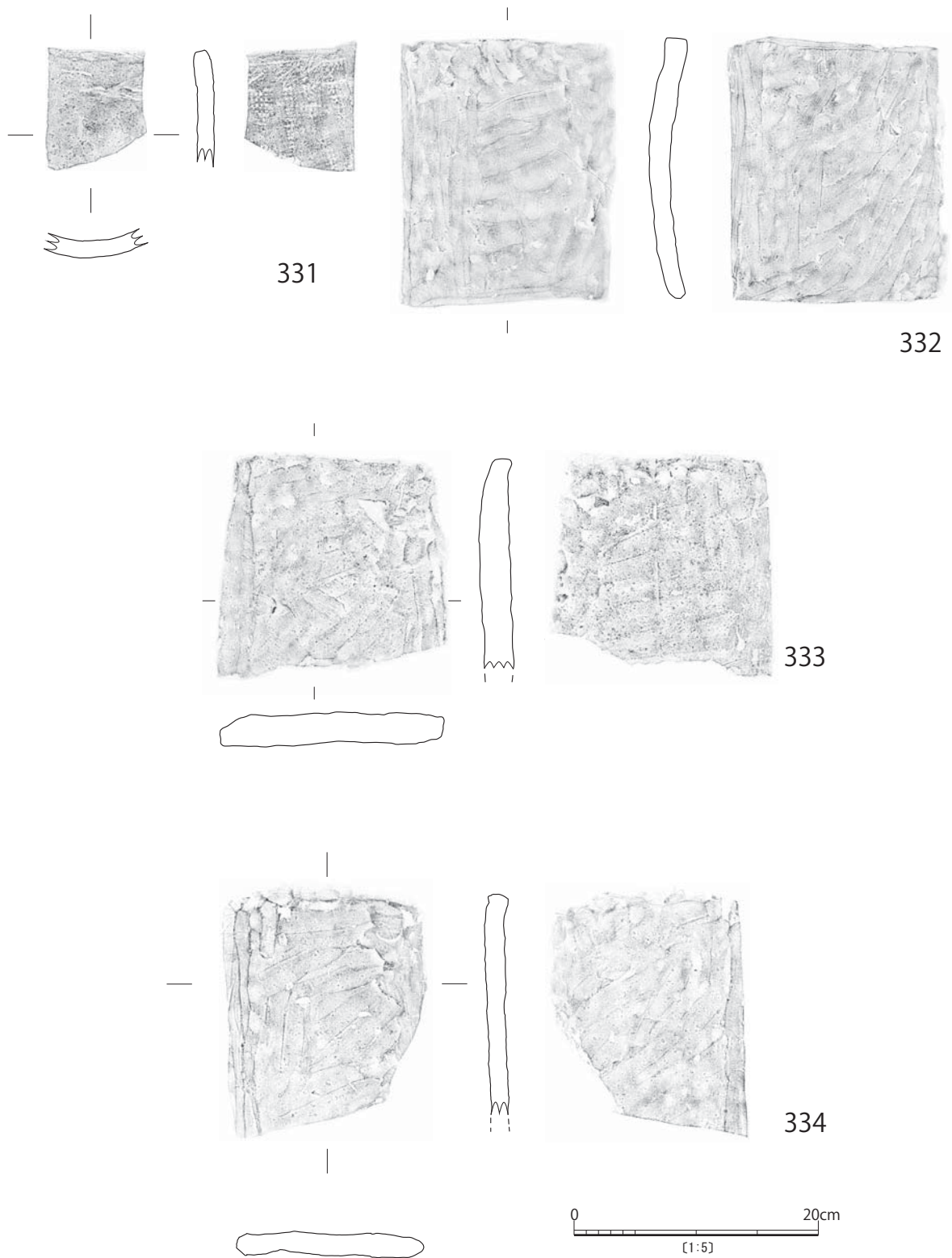


図59 SD108出土遺物(4) (S=1/5)

331から334は初期の瓦である。331は須恵質の平瓦と推定されるもので凸面タタキ、凹面は粗いナデで仕上げる。332・333・334は凹面、凸面の別が不明瞭であるが、いずれの面も粗いナデ調整であ

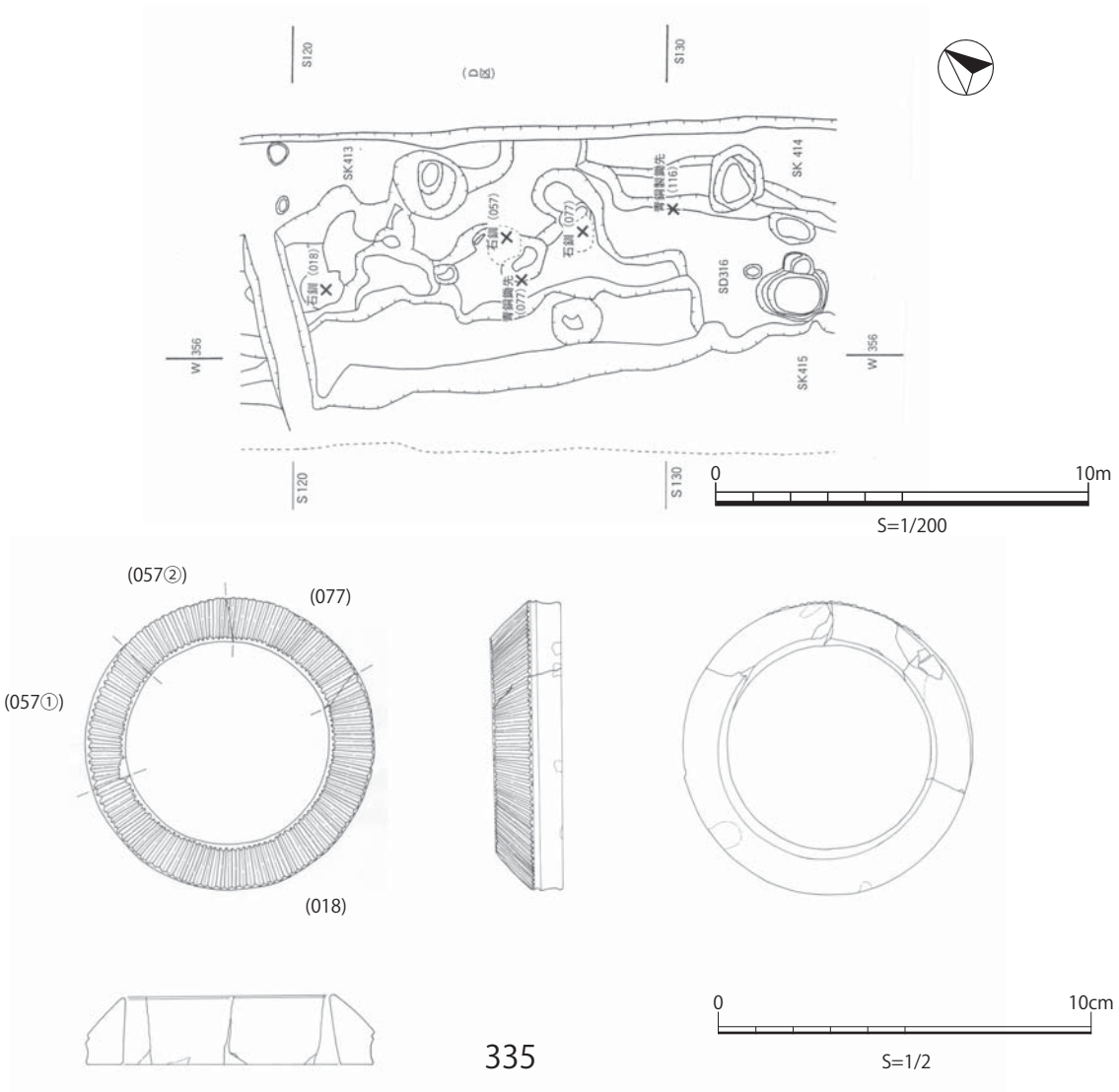


図60 エリアIその他の出土遺物（1）SD316出土石釧（S=1/2）

る。側面の近くをヘラケズリで面取りしており、334のみ側面近くの端部にハケメ状の糸切り痕と思われる痕跡がわずかに残る。

5) その他の出土遺物（図60-63）

SD316（図60）

10C区から9C・D・E区にかけて略北西-南東方向に流れる長さ約80m、最大幅6mほど、深さ40-60cmの溝である。この溝の上層から全体で7mほどの範囲に3箇所に分かれて石釧が出土している。

石釧は全体で大きく4片に分かれているが、ほぼ完形の状態に復元されている。長径7.8cm、高さ1.9cmで、内孔は上面径が5.4cm、下面径が5.8cmである。重量は57.4gであり、石材は緑色凝灰岩である。外面上段斜面には櫛状の縦方向の溝を全体に施し、上段と下段の間に凹線が1本めぐり、下段は匙面となる。

II 調査の結果

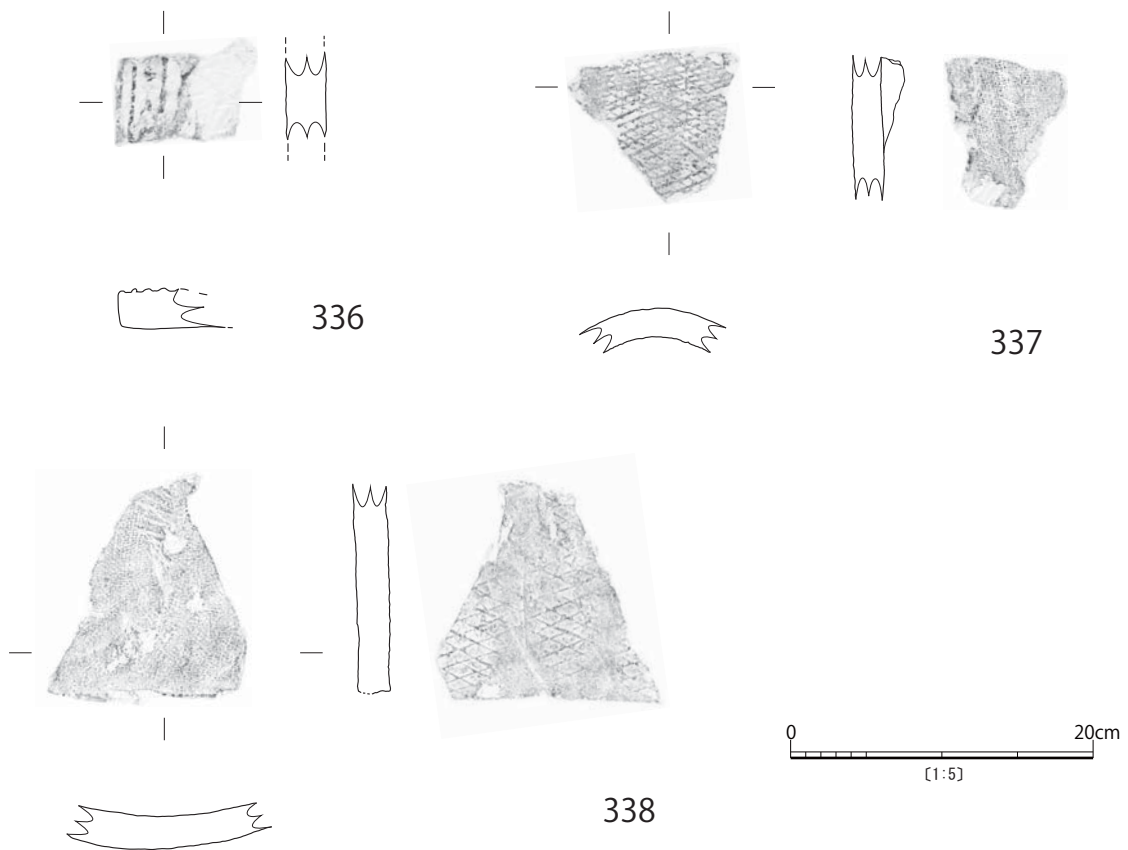


図61 エリアI その他の出土遺物 (2) SD307出土瓦 (S=1/5)

SD307 (図4・図61)

SD307は9B区の中央部から南東側に位置する調査区で検出された。北東-南西方向に流れる溝で長さ約7m、最大幅6mほどである。

336から338はSD307から出土した瓦である。336は鬼瓦の端部で外区に珠文が3個みられる。337は丸瓦の小片で凸面は格子目叩きである。338は平瓦で凹面は布目圧痕、凸面は目の粗い格子目叩きで一定の間隔で粗いすり消しを施す。

SD408 (図4・図62)

10G区の中央部を略南北に流れる溝で旧河川であるSX303のすぐ東脇に位置する溝である。339から344の瓦がこの溝から出土した。339から341は平瓦である。339は縄目叩きの一枚作りで、凹面・凸面双方に糸切り痕が残る。340と341は円筒桶作りの可能性がある格子目叩きの平瓦である。342から344は丸瓦である。342は平行叩きで、343と344は格子目叩きである。いずれも側面に分割面がみられる。

SX303 (図4・図63)

345と346はSD408の西側を流れる旧河川であるSX303から出土した丸瓦である。345は縄目叩きの行基葺き瓦で、凸面に糸切り痕が残る。346は格子目叩きの丸瓦で、両側面に分割面がみられる。

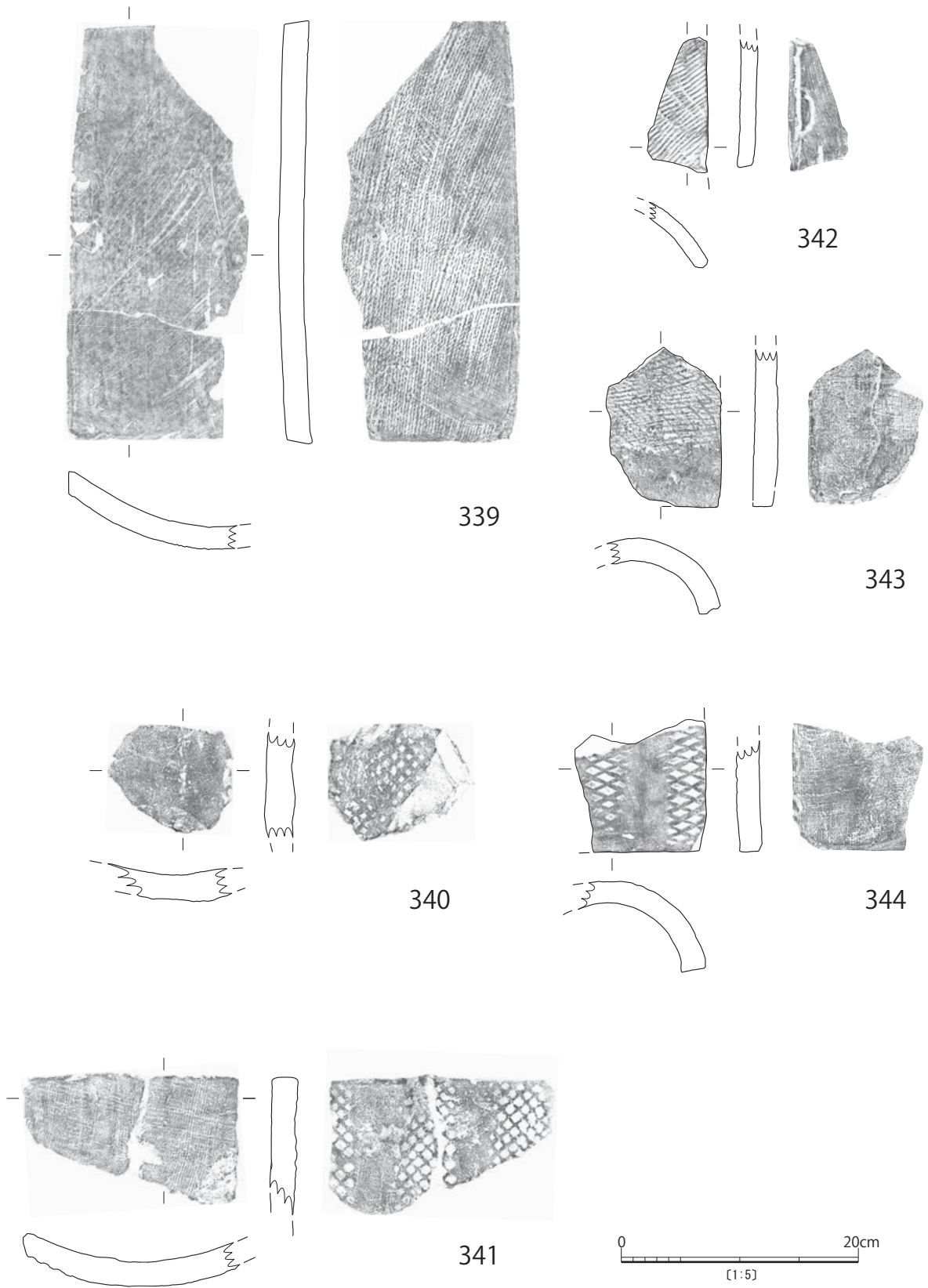


図62 エリアI その他の出土遺物 (3) SD408出土瓦 (S=1/5)

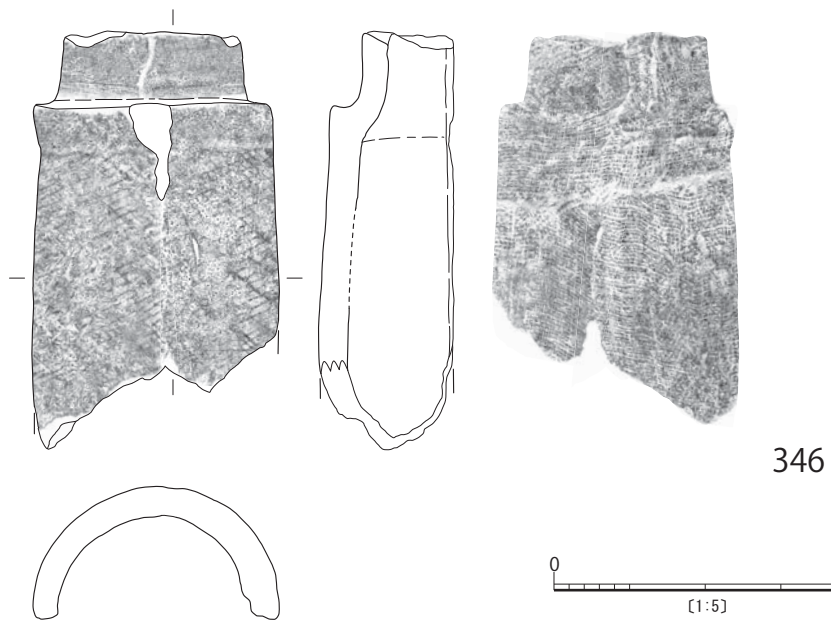
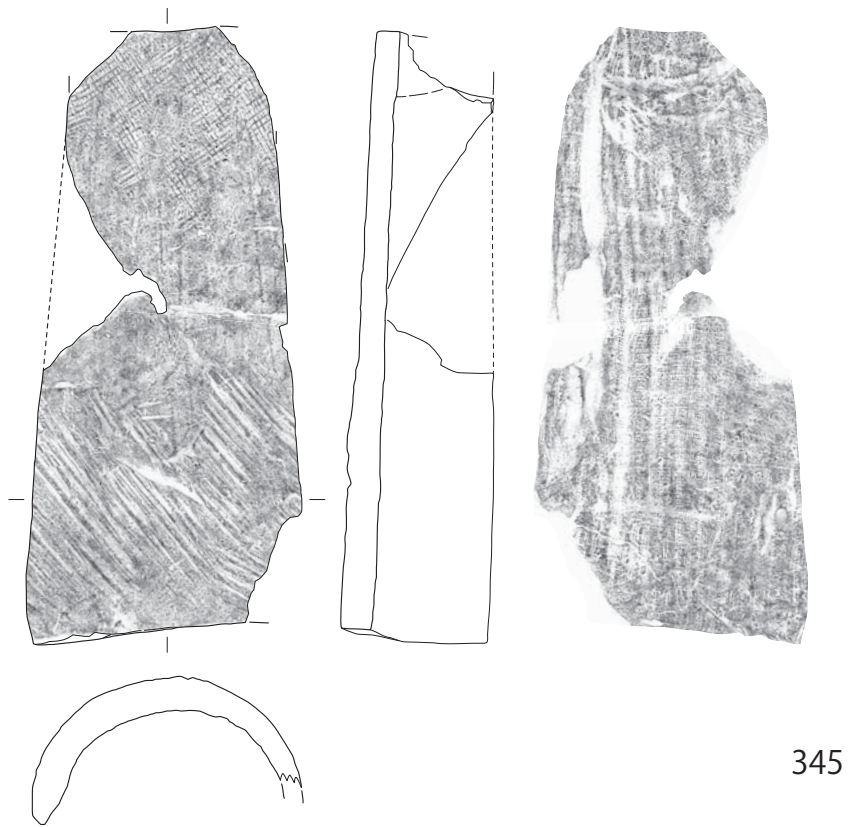


図63 エリアIその他の出土遺物(4) SX303出土瓦(S=1/5)

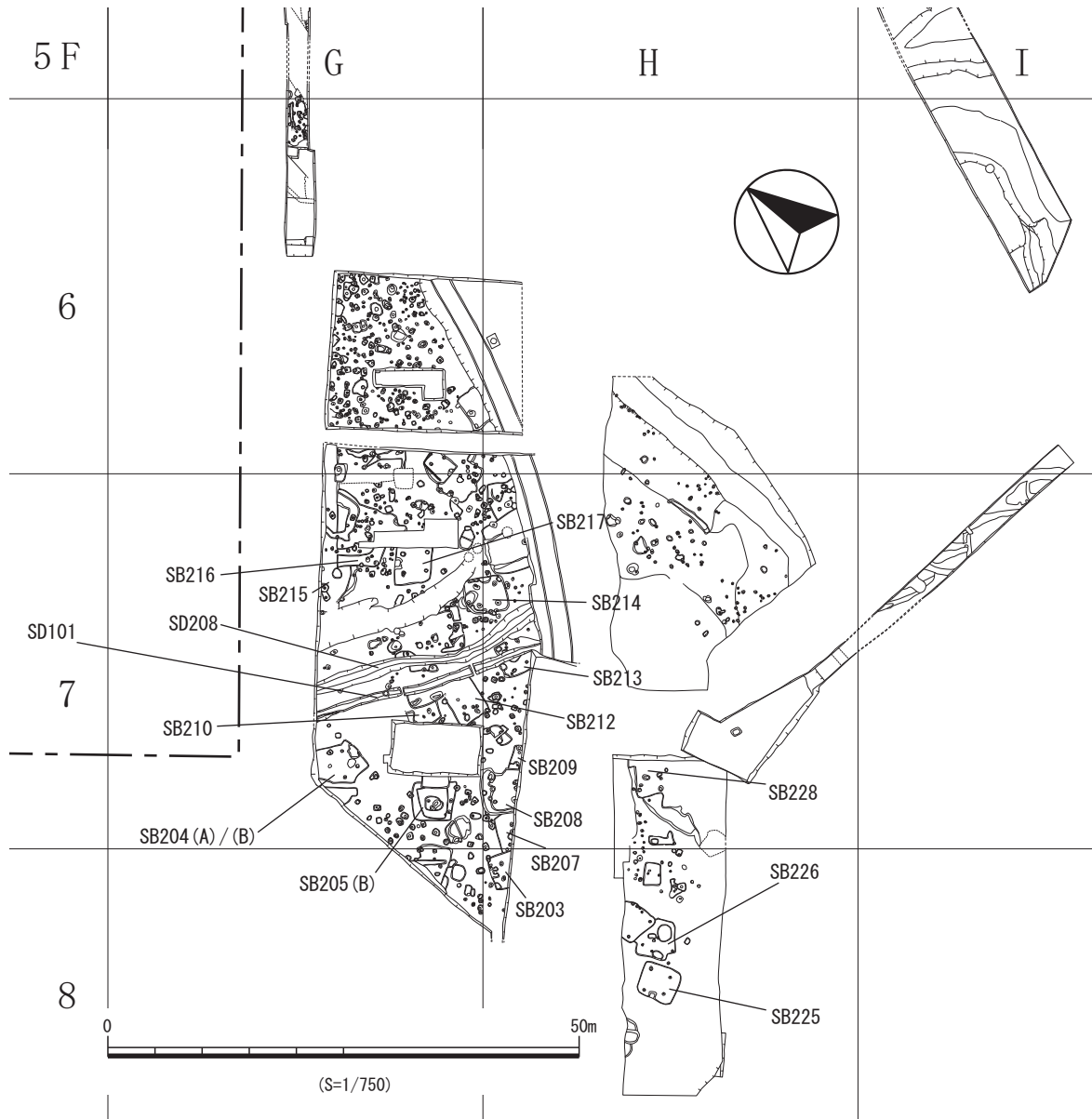


図64 エリアII西部 遺構配置図 (S=1/750)

2. エリアII (図64・図97)

1) 住居跡

7G区 SB204 (A) (図65)

7G区のやや南寄りに位置する。南にはSB205が位置している。本住居跡は調査区の西側壁にかかって検出されており、SB204 (A) とSB204(B)2軒の住居跡が重複しているものとして調査されている。遺構の重複関係については不明であるが、柱穴は軸がSB204A とほぼ一致しており、SB204 (A) に伴うものと判断できる。また、遺物はSB204 (A) から出土している。そのためSB204 (A) を中心に報告する。

204 (A) は略東西方向に主軸をとる住居跡で平面形は残存部分から方形を呈するものと推定される。しかし遺構の南西隅が明確ではない。規模は東壁が3.8m、南壁が2.4m 残存する。東壁にカマドが設

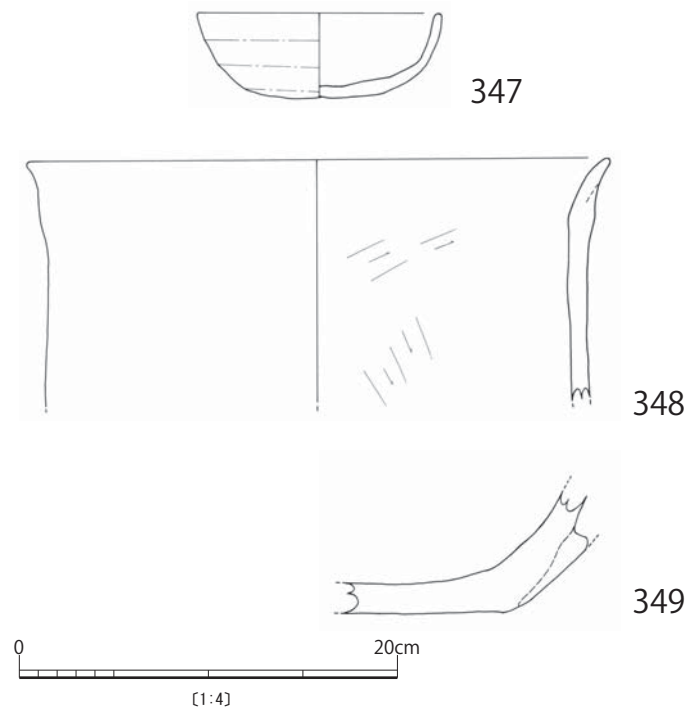


図66 SB204 (A) 出土遺物 (S=1/4)

7 G 区 SB205(B) (図67)

7 G 区の南隅で検出されている。弥生時代の住居跡として報告した SB205 (A) を切って作られている。北東壁は SB206 によって切られており残っていない。北東-南西方向に主軸をとると考えられるが北東壁がやや長い台形状の平面を呈する。規模は北西壁が3.08m、南西壁が2.2mをはかり、南東壁が3.2m 残存する。中央に複数の土坑が検出されているが本住居跡との関係は不明である。床面はほぼ水平で検出面から20cmの深さである。

【遺物】(図68)

350から352は須恵器の杯蓋で350は床面出土である。いずれも小片で口径等の復元は不能である。352の口縁部内面には段がわずかにつく。353は土師器の小形甕の胴部片である。354は白磁碗の口縁部片で住居跡覆土からの出土であるが、小片であることなどから混入の可能性が高いであろう。

7 G 区 SB210 (図69)

7 G 区の南部分に位置する。すぐ東には SB212 が位置している。遺構の北側は SB211 によって切られており残っていない。また、南西部分は調査区外のため不明である。また、住居跡の北西部はカマドが遺存していることから西側の壁にカマドが設置されていたものと考えられるが、西側壁は検出されていない。規模は他の住居跡による削平などのため不明であるが、北東壁は1.7m 残存する。残存部分の中央やや東寄りに深さ32cmのピットが検出されており、本住居跡に伴う柱穴の可能性があろう。床面は遺構検出面から浅い部分で6cm、最大10cmの深さで、南東に向かってやや低くなる。

【遺物】(図70)

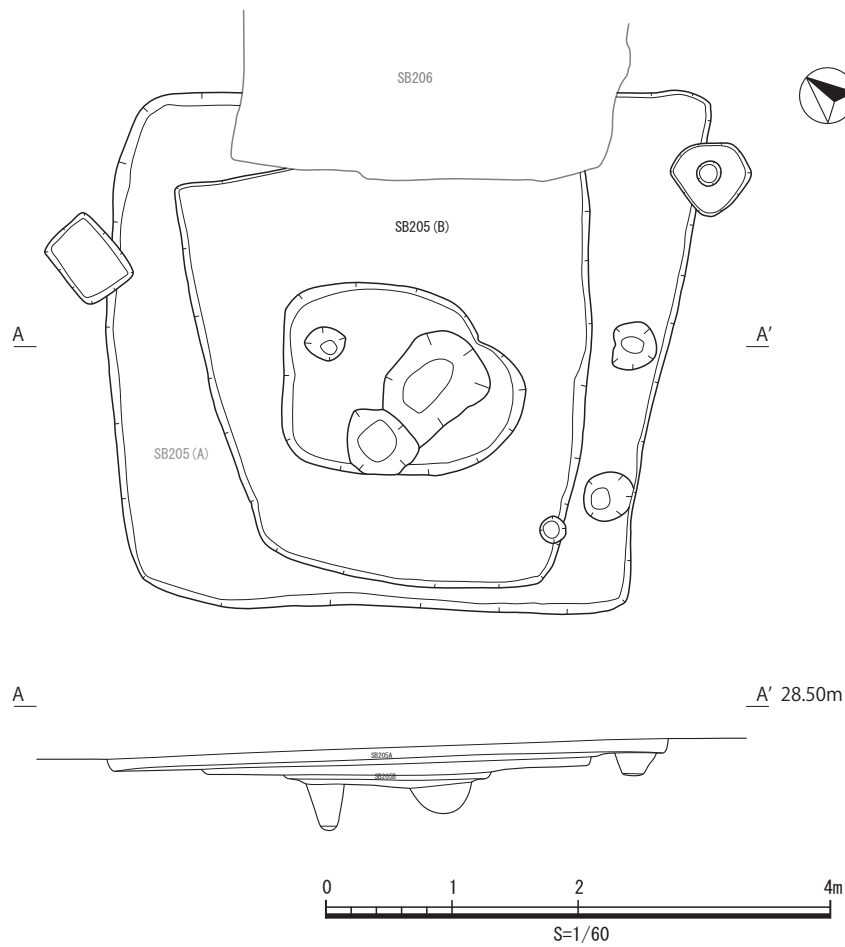


図67 7G区 SB205 (B)

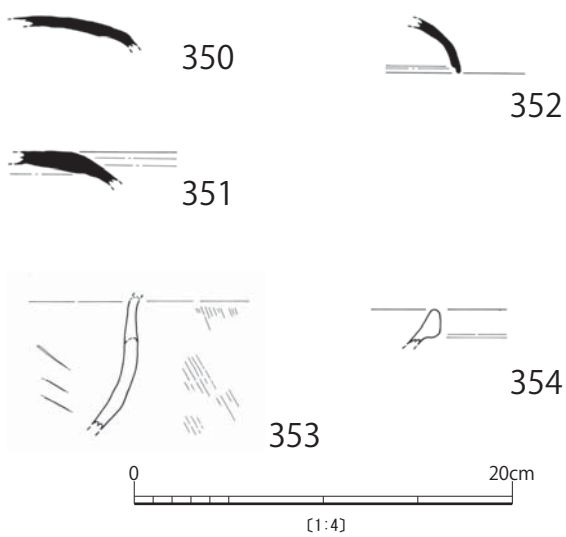


図68 SB205 (B) 出土遺物 (S=1/4)

355から358は須恵器である。355・356・357は杯身で、いずれも床面出土である。355は口縁部が厚く端部がやや肥厚し、器形も全体に幅広な形態を呈する。356は口縁部が端部に向かって細くなり、357は口縁部がやや反る。358は甕の頸部屈曲部で、頸部最大径は17.0cmに復元できる。外面胴部上端部にタタキがみられる。

7G区 SB212 (図71)

7G区の南隅で検出されており、遺構の南東隅が7H区にかかる。遺構の北側はSD101により消失しており、南西隅は調査区外のた

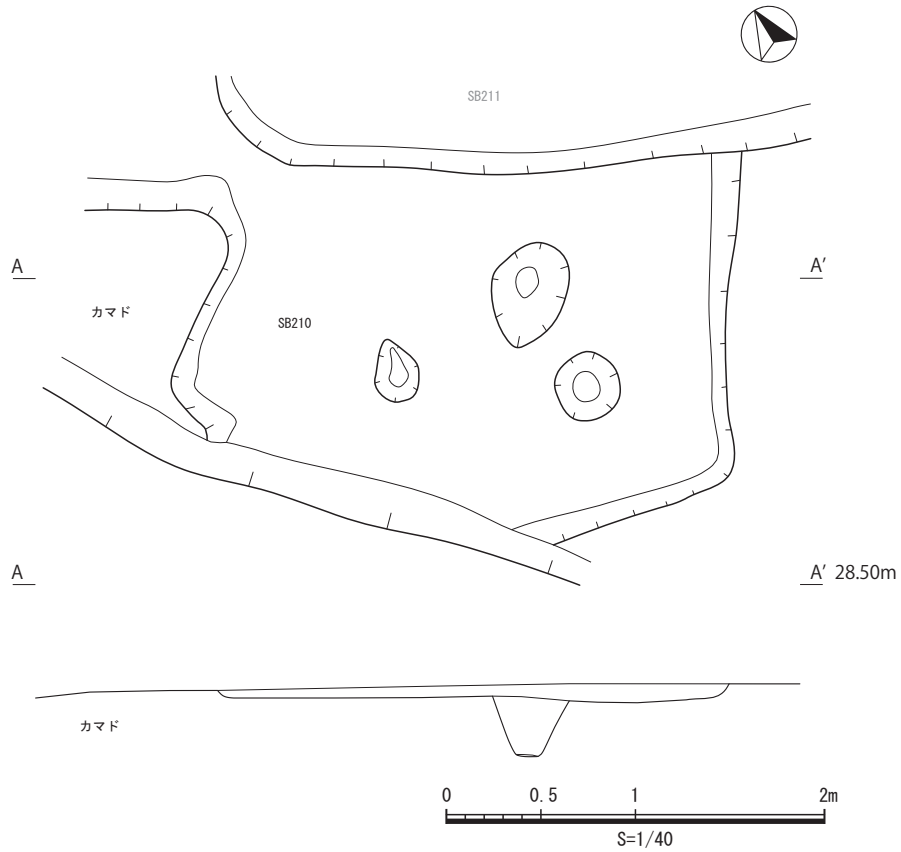


図69 7G区 SB210

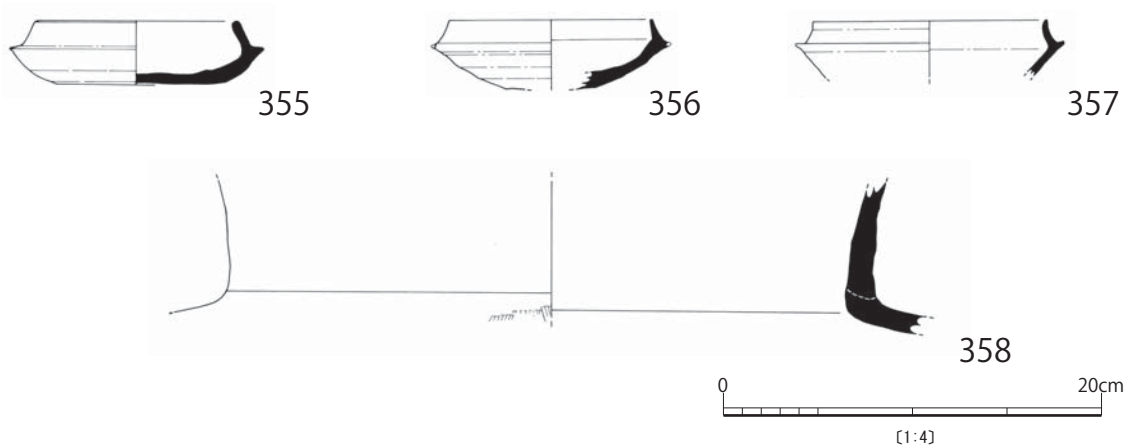


図70 SB210出土遺物 (S=1/4)

め不明である。残存部分から主軸を略南北方向にとる長方形プラント考えられる。規模は南壁が2.88m、東壁4.0mが残存する。住居跡内に複数のピット、土坑が検出されているが柱穴ははっきりしない。床面は遺構検出面から16cmほどの深さでほぼ水平である。

【遺物】(図72)

359から361は弥生土器で、359は甕形土器の口縁部で、口縁部が下垂し内面が突出する。360は甕形

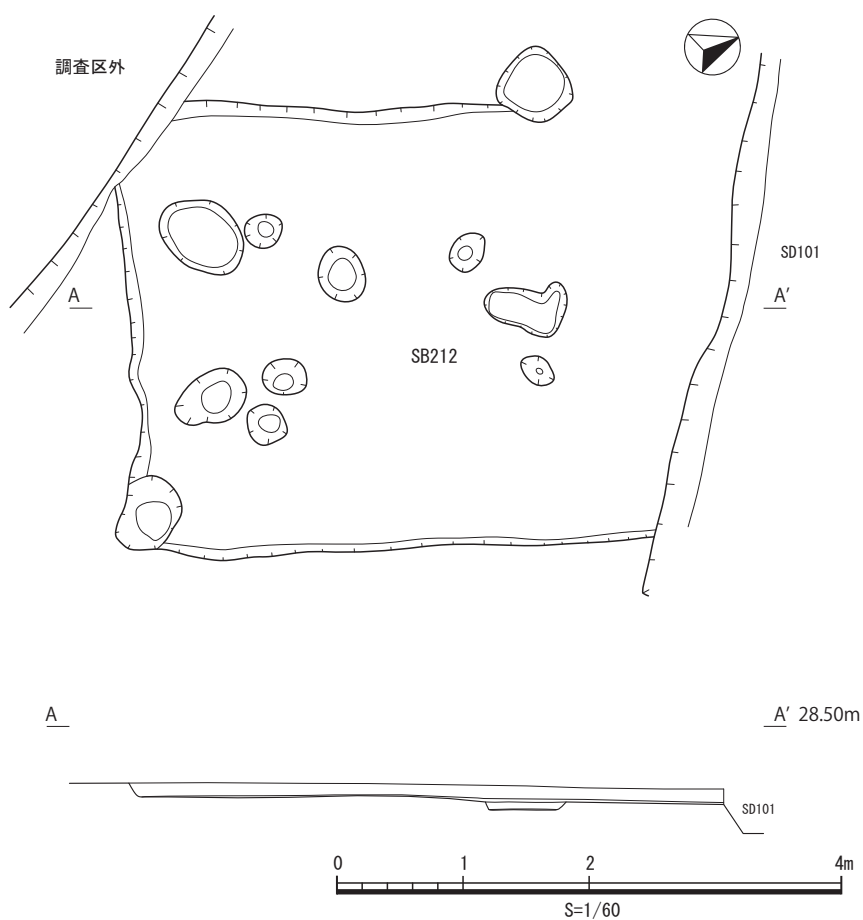


図71 7G区 SB212

土器底部で底径8.1cmに復元できる。361は壺形土器底部で底径9.2cmに復元できる。

362から367は床面出土の土師器である。362から364は椀形土器で、364は口径13.5cmである。365・366・367は小形の甕で、366と367は同一個体である。口径は365が11.5cm、366が11.6cmに復元できる。369から372も床面出土の土師器である。369は370と同一個体の甕で口径27.6cmに復元できる。371は甕あるいは甕の把手、372は甕である。甕は口径25.4cmに復元できる。

368は床面出土の須恵器の甗である。口径11.2cmに復元でき、器高は11.4cmである。口縁部・頸部および胴部最大頸部に波状文を施す。

7G区 SB215 (図73)

7G区中央やや北よりのところで検出されている。遺構の北東部はSB216によって切られており消失している。また、北西部分は調査区外のため未調査である。そのため、遺構の平面形態や主軸方向など詳細は不明である。遺構の残存部分のうち北東側は一段高くなっており、遺構検出面からの深さは24cmである。床面の深さは遺構検出面から32cmで、床面はほぼ水平である。

【遺物】(図74)

373から376は土師器である。373は杯身の小片、374は器種不明である。375は壺底部片で底径6.4cm

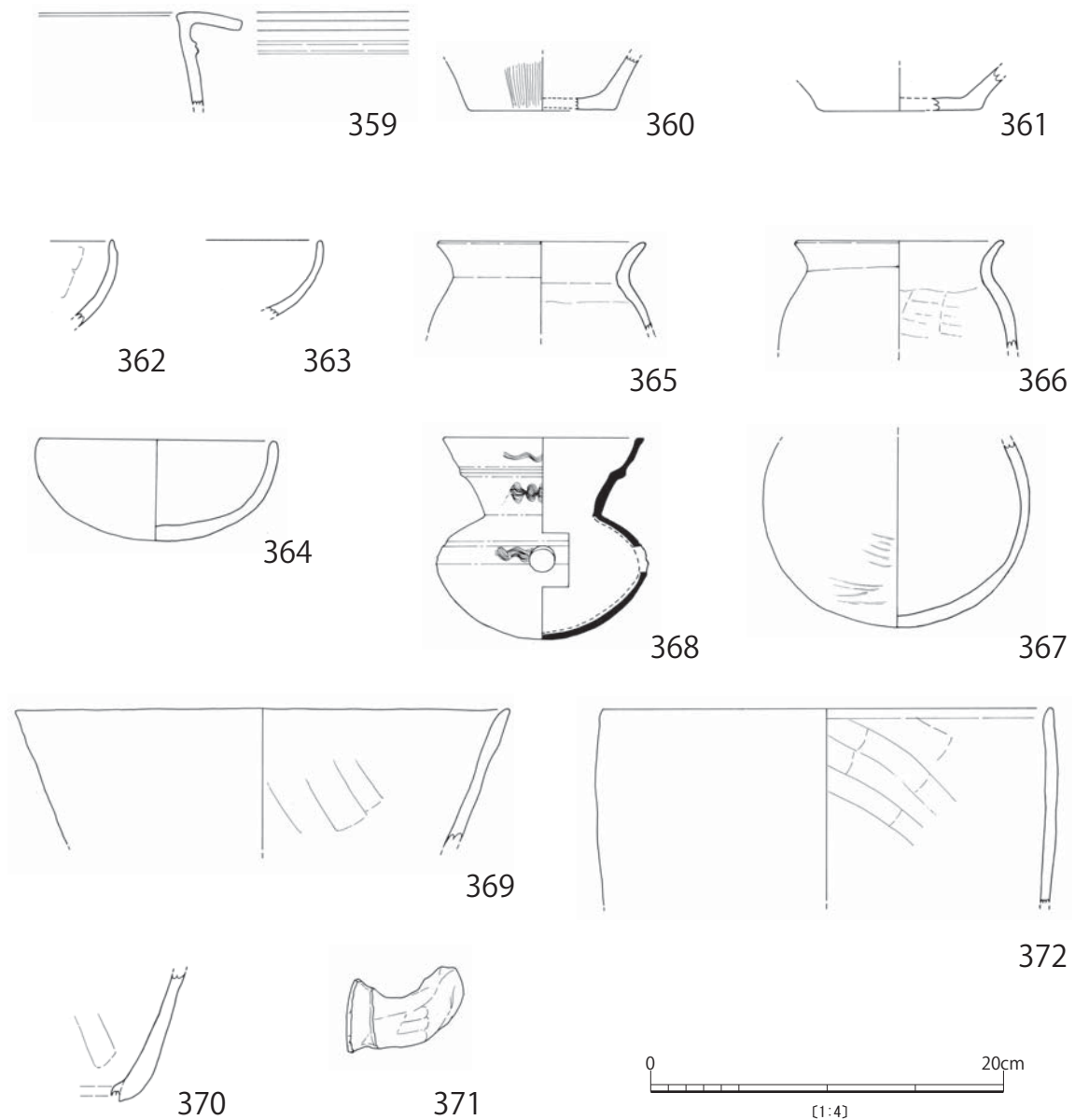


図72 SB212出土遺物 (S=1/4)

である。376は小形の甕である。外面にハケメがのこる。377は須恵器で、高台のつく杯Bの身である。口径は13.6cm、高台径は10.1に復元できる。高台はやや低く外に向く。

7G区 SB216 (図75)

7G区東部分で検出されている。南にSB217が位置する。遺構の北東部分は溝状のSK210と重複している。また、南東部分は攪乱により消失している。さらに住居跡の南西壁からやや北よりの範囲は浅い溝状にくぼんでいる。床面上には多くのピットが検出されているが住居跡との関係は不明である。南東壁東側、攪乱脇の部分が南東方向に張り出すが、残存部分から略北西-南東方向に主軸をとる方形プランを呈するものと考えられる。南西壁は4.2m 残存する。北東壁は北側がやや膨らんでおり不

II 調査の結果

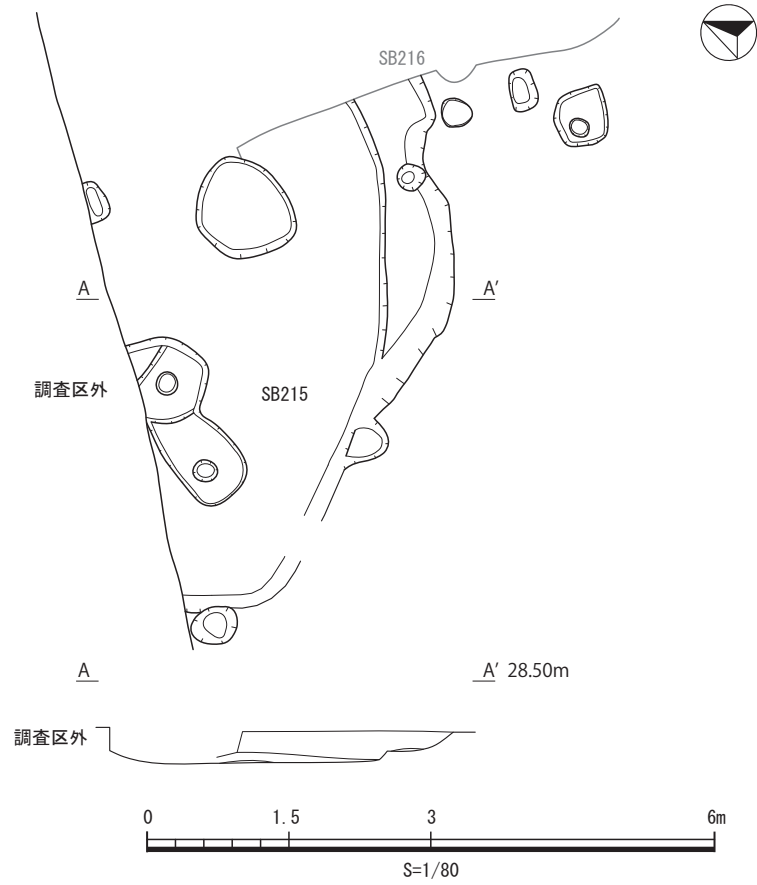


図73 7G区 SB215

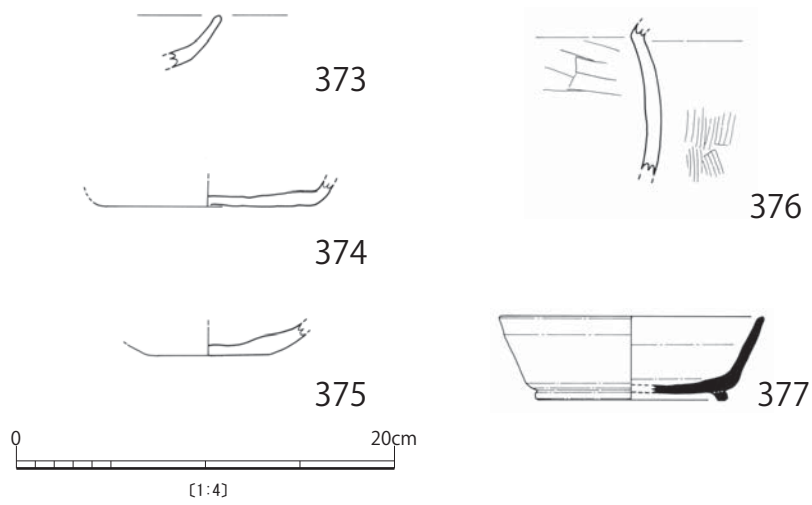


図74 SB215出土遺物 (S=1/4)

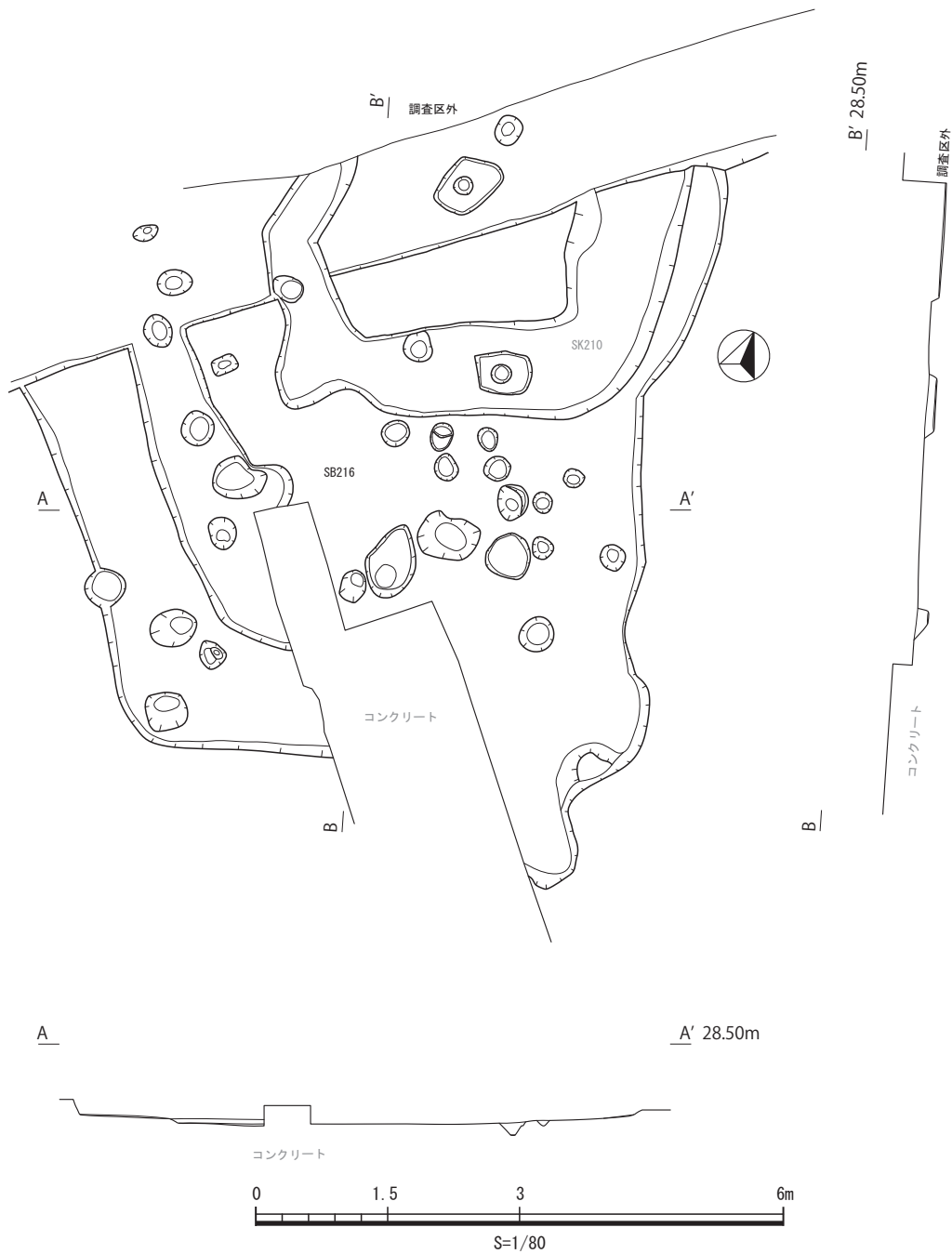


図75 7G区 SB216

明確であるが、このふくらみはSK210の立ち上がりの可能性があるため、その南側までをこの住居跡の壁面と考えると4.2mが残存している。床面は遺構検出面から12cmほどの深さである。

【遺物】(図76)

378から383は弥生土器である。378・379・380は甕形土器の口縁部から胴部片で、378・380は口縁部内面が突出し、380は端部がやや下垂する。379は逆「L」字に屈曲する口縁を持つ。381は甕形土器の底部片である。382・383は壺形土器の底部で、383は外面丹塗りである。384は土師器の小形甕の

II 調査の結果

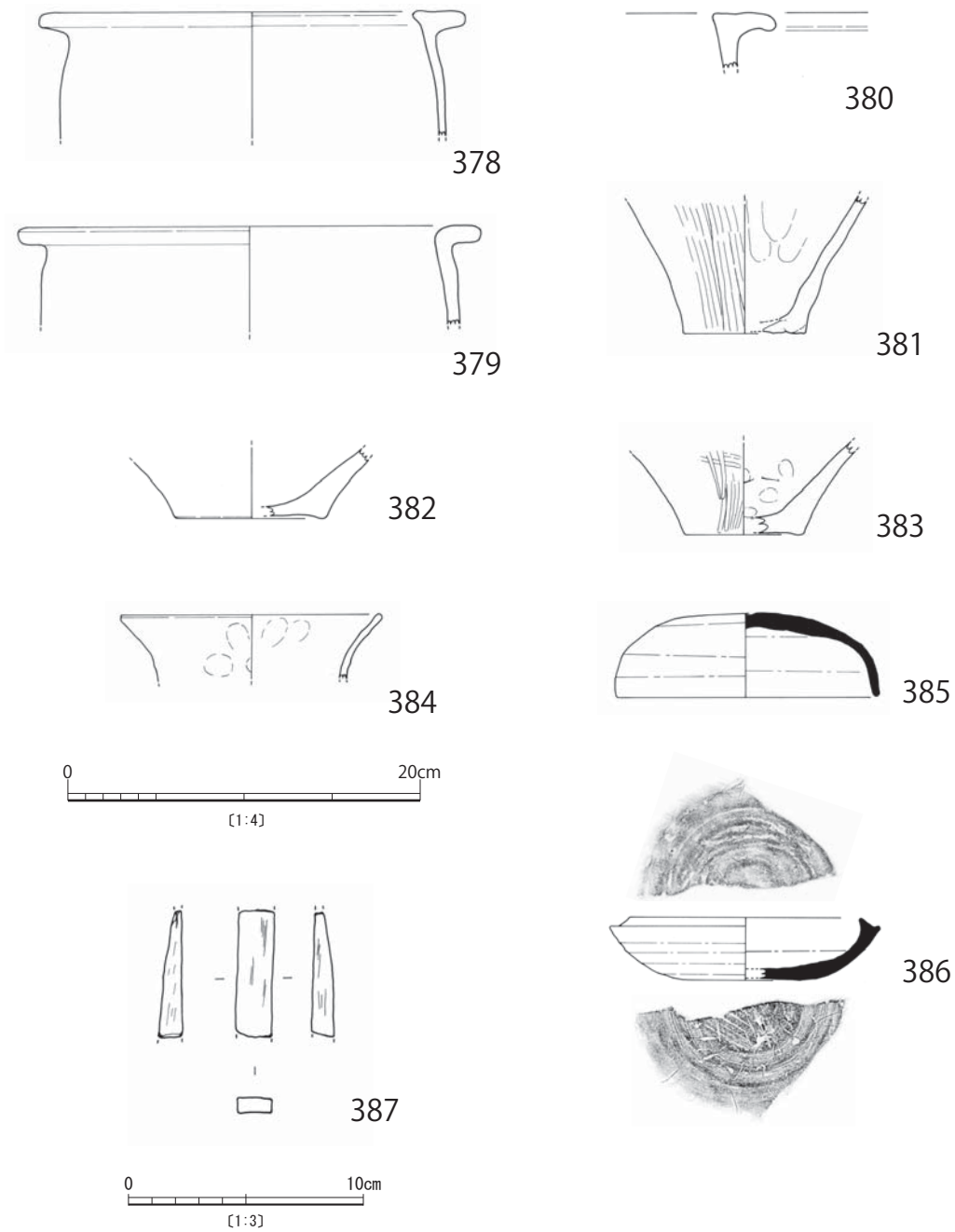


図76 SB216出土遺物 (S=1/4, 石器 : S=1/3)

可能性がある。口径は14.6cmに復元できる。

385と386は須恵器の蓋杯である。385は口径14.8cm、386は15.0cmに復元可能である。386は外面に板状圧痕がみられ、内面には当て具痕がのこる。387は石器で砥石である。残存長5.3cm、最大幅1.5cm、最大厚0.6cmである。

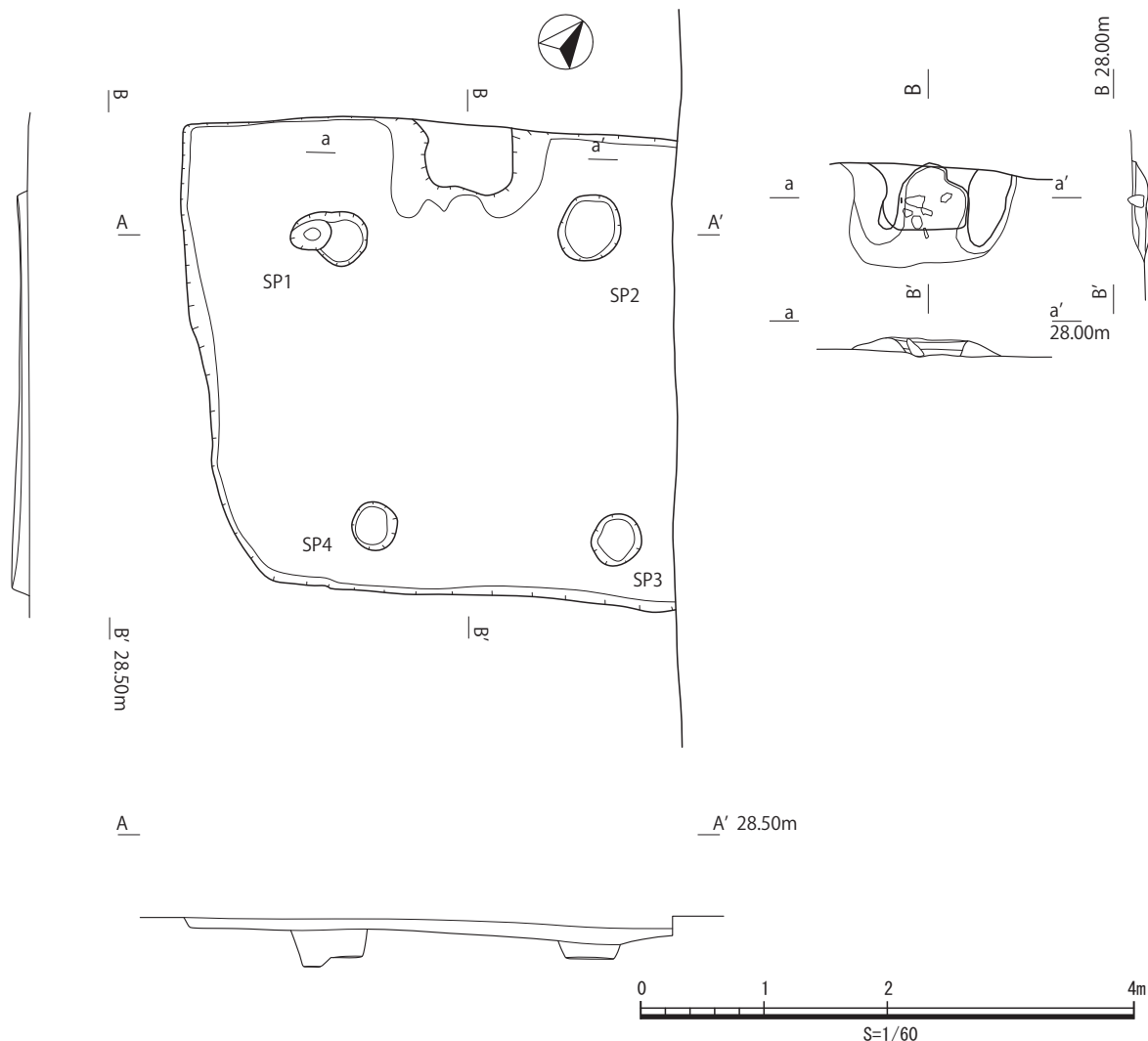


図77 7G区 SB217

7G区 SB217 (図77)

7G区東部分、SB215やSB216の南東側で検出されている竪穴住居跡である。遺構の北東部分は攪乱によって消失している。住居跡の主軸は略北西-南東方向をとる。北西壁は4.0m 残存し、南東壁は3.4m 残り、やや北西壁が長い。南西壁は3.5mをはかる。このような残存状況から平面形態は南東壁が北西壁に比べやや短い台形状を呈するものと推測される。

住居跡北西壁にはカマドが検出されており、床面上には主柱穴と考えられる4基のピットが検出されている。カマドは幅1.3m、最大長88cm、床面から12cmほどが遺存する。主柱穴間は主軸方向で2.4m、主軸と直行する方向で2.0mをはかる。柱穴はいずれも略円形である。柱穴の床面からの深さは北西隅のSP1が22cm、北東隅のSP2が18.5cm、南東隅のSP3が6cm、南西隅のSP4が13cmである。床面は遺構検出面から最大で12cmの深さで、床面はやや東側に傾斜するがほぼ水平である。

【遺物】(図78)

388および389は弥生土器で、388は高杯の口縁部片、389は甕形土器底部である。

390から399は須恵器である。そのうち390から397は蓋杯である。390・396は焼け歪みが著しく、396は底部付近の器壁がおおきくゆがむ。397は熔着片が胴部にみられるとともに器形がゆがむ。また、

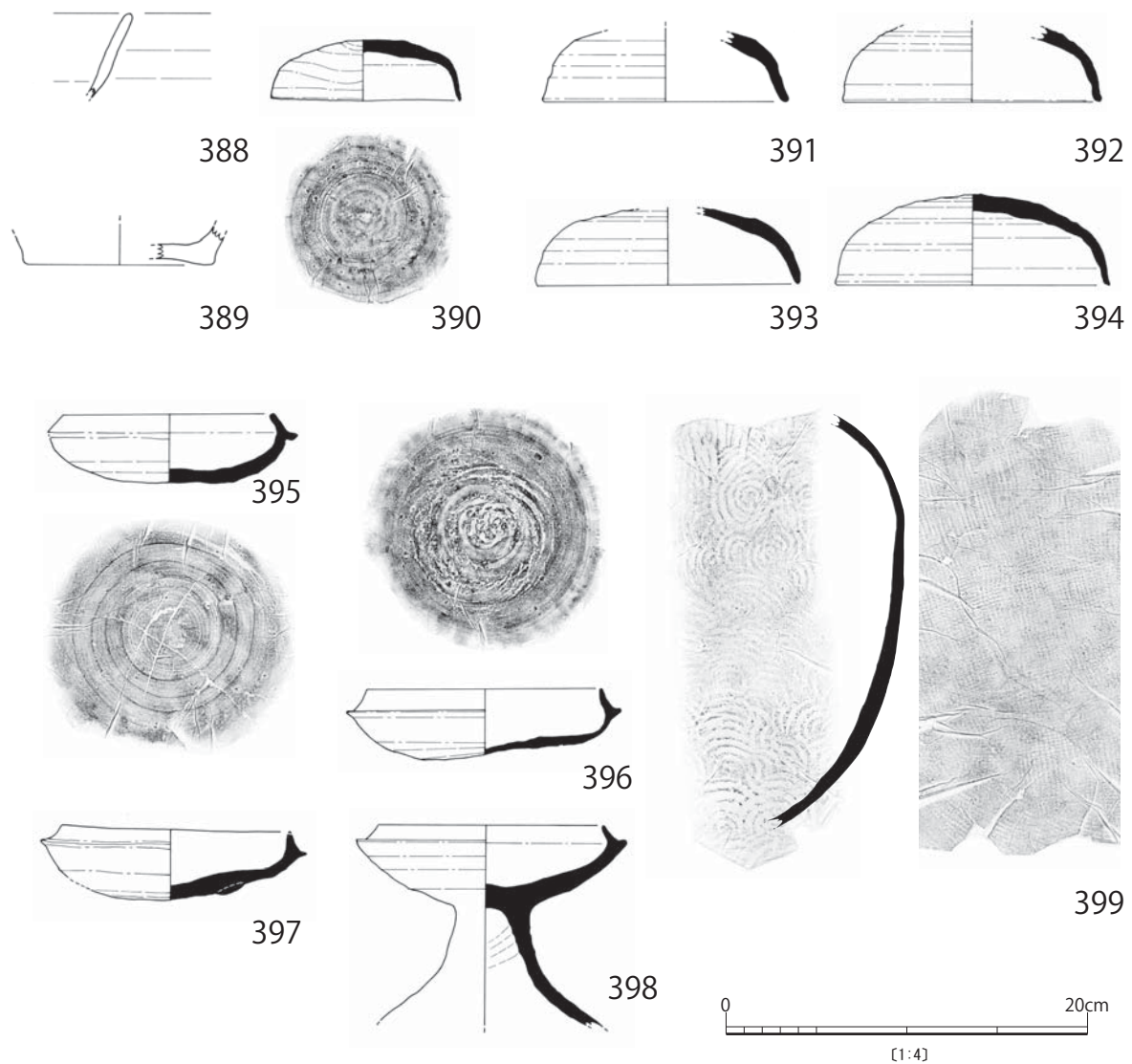


図78 SB217出土遺物 (S=1/4)

395はかえり部分が打ち欠きのためか1/6程しか残存しない。398は高杯で口径は12.3cmに復元できる。399は甕の胴部である。内面の当て具痕は残存部の中央部分がナデのためかやや不明瞭になる。

7H区 SB208 (図79)

7H区西隅に位置し、北東側にSB209、南西側にSB207が一部重複して位置している。本住居跡がSB209、SB207を切って構築されている。遺構の東部分は未調査のため不明であるが、北東壁にカマドがつく。住居跡の北西壁および南西壁に沿って深さ24cmほどの浅い溝状の掘りくぼめた部分が廻る。規模は北東壁が4.2m、南西壁が3.0m 残存しており、北西壁4.8mをはかる。住居跡内に複数のピットが検出されているが、支柱穴は不明である。カマドは幅約1.68m、長さ1.4mで床面から24cmほどが残る。床面は遺構検出面から16-20cmの深さで、中央部がやや高くなるがほぼ水平である。

【遺物】(図80)

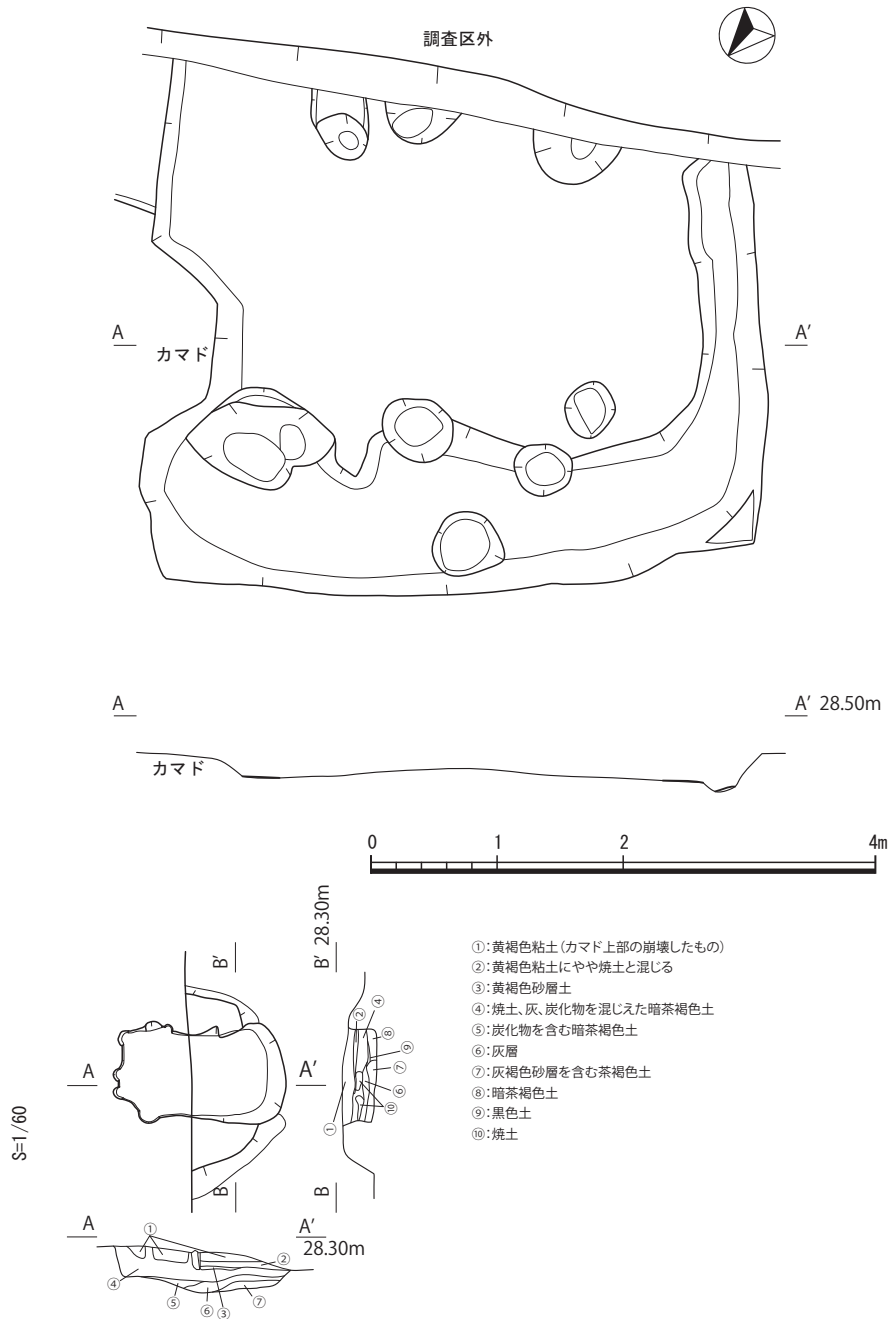


図79 7H区 SB208

400から402は土師器で、400は椀の口縁部、401と402は甕の口縁部である。402は口径16.2cmに復元可能で、胴部上端部がハケメ調整である。

403から412は須恵器である。そのうち403から406は杯蓋である。403は口縁部内面に沈線状の窪みがあり、天井部と体部の境近くに沈線を持つ。404と405はいずれも丸みをもった器形を呈するが、405は口縁端部内面に段を有する。407から409は杯Hの身である。口縁部径はそれぞれ408が11.0cm、409が11.8cmに復元できる。410は高杯の蓋と推定される小片である。外面にカキメが施されている。411は高杯の身の部分で、口縁部の受部に蓋の破片が熔着している。412は段を持つ短脚の高杯脚部で、

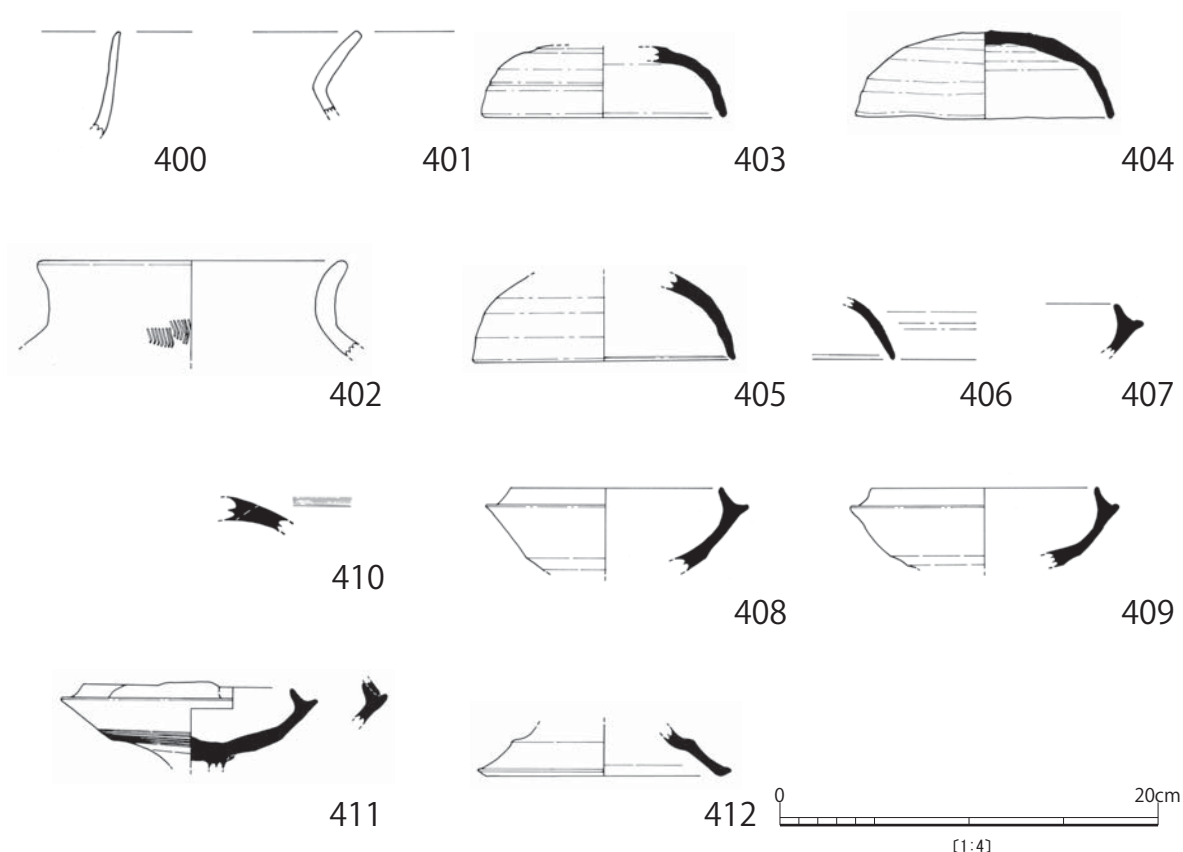


図80 SB208出土遺物 (S=1/4)

脚部径は13.4cmに復元できる。

7H区 SB209 (図81)

7H区西隅に位置しており、南側のSB208に住居跡の南側を切られる。また、遺構の東側は未調査区のため不明である。北東壁は0.75m、北西壁は2.5m 残存する。遺構の北東部には深さ30cmほどの土坑が検出されており、その南西部にも深さ14cmのピットが検出されている。また、南西側も20cmほどの深さのすり鉢状の不整形の土坑中にピットが検出されている。これらの2つのピットが本住居跡に伴う柱穴の可能性も否定できないが、遺構の全体像が不明のためはっきりしない。

【遺物】(図82)

413は須恵器で、甕の口縁部片である。口縁部は外傾し端部が外方に折れる。頸部との境に段を持ち、頸部上端部に波状文が施される。口径は13.8cmに復元できる。414は土師器の小形甕で、口縁部が外傾し、内面胴部上端部にユビオサエの痕がのこる。口径は13.4cmに復元できる。415は土師器の把手で外面をハケメ調整後、把手を貼付ける。

7H区 SB213 (図83)

7H区西部分に位置し、SB212が西側に位置する。遺構の中央部はSD101によって消失しており、東部分は調査区外のため不明である。残存部分から主軸を略東西方向に取る方形プランと考えられる。

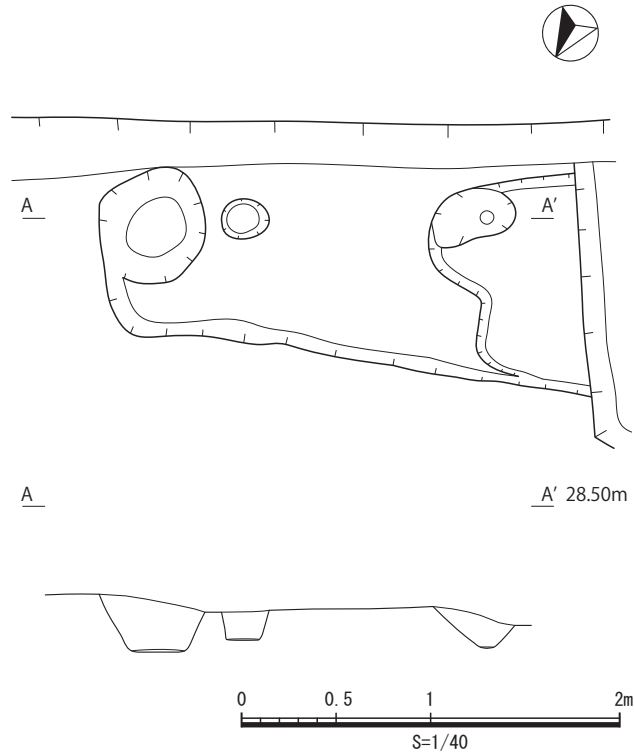


図81 7H区 SB209

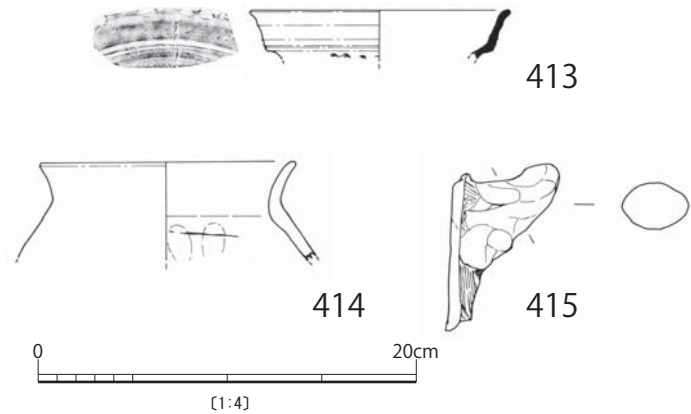


図82 SB209出土遺物 (S=1/4)

西側壁はSD101の南側部分が西に少し膨らむが約3.6mをはかる。南壁は2.3m 検出されており、北壁は1.8m が残る。床面は遺構検出面から浅いところで8cm、深い部分で16cmの深さである。

【遺物】(図84)

416から428は土師器である。416は碗の小片で、417は杯蓋、418は杯身であるが、底部外面が剥離している。口径13.8cm、底径7.9cmに復元できる。419から421は高杯の脚部で、いずれも脚裾部に段を持つ。422と423は底部からそのまま口縁部に至る鉢である。口径は422が13.5cm、423が14.4cmである。424と425は小形の甕である。426は壺であろう。外面にハケメ、内面底部付近はユビオサエで、胴部

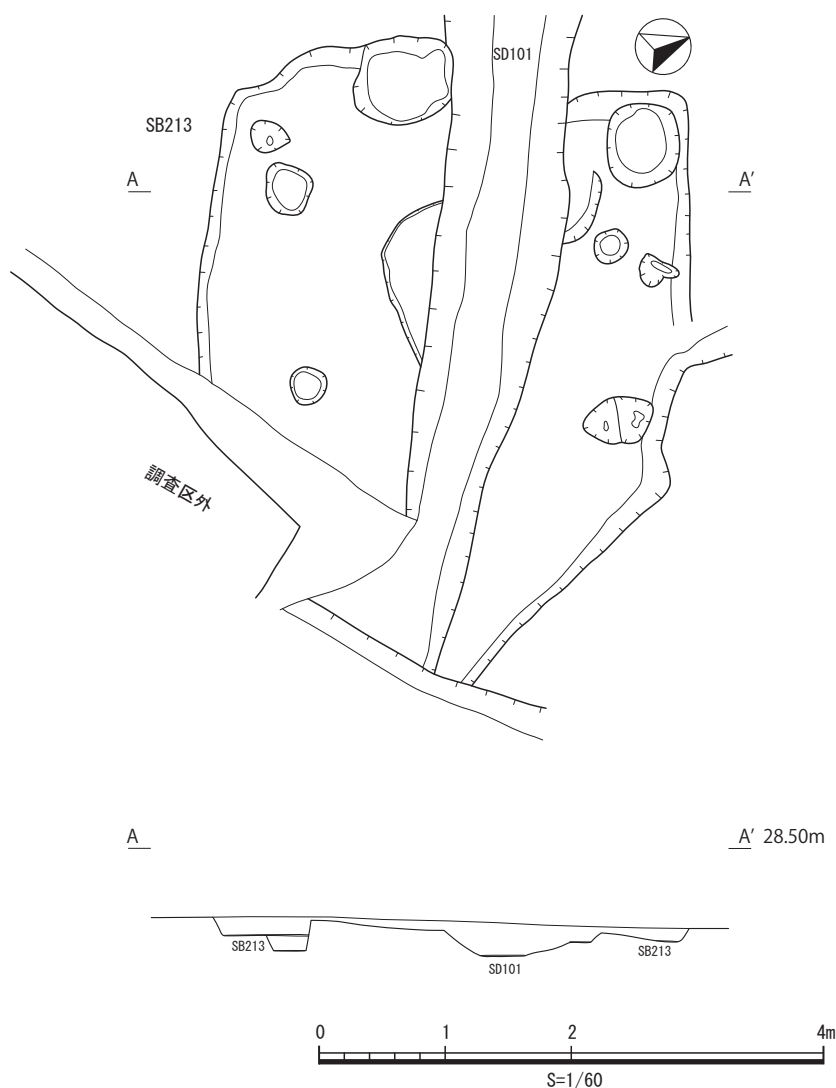


図83 7H区 SB213

はケズリである。胴部最大径は19.1cmに復元できる。427は須恵器の形態を模した甕の口縁部である。口径は25.0cmに復元できる。調整は内外面とも器面の荒れのため不明である。428は土師器の把手である。外面はハケメ、内面はケズリを施す。

429から435は須恵器である。429・430・431・432は杯Hの蓋である。429は焼け歪みにより器表面に亀裂が入る。口縁端部に段がつく。430は底部と体部の境に沈線が残る。433と434は杯Hの身である。433の底部外面にはヘラ記号がみられる。435は無蓋高杯の杯部である。胴部屈曲部から口縁部がゆるく外に開く形で、口径は16.0cmに復元できる。

7G・H区 SB214 (図85)

7G区と7H区にまたがって検出されている住居跡である。住居跡の北隅は流路状の遺構によって削平されており残っていないが、北東-南西に軸をとる隅丸方形を呈する。住居跡北東壁中央部にカマドがつく。北東壁は3.5m、北西壁3.1mが残存し、南東壁は3.4m、南西壁は4.0mをはかる。カマ

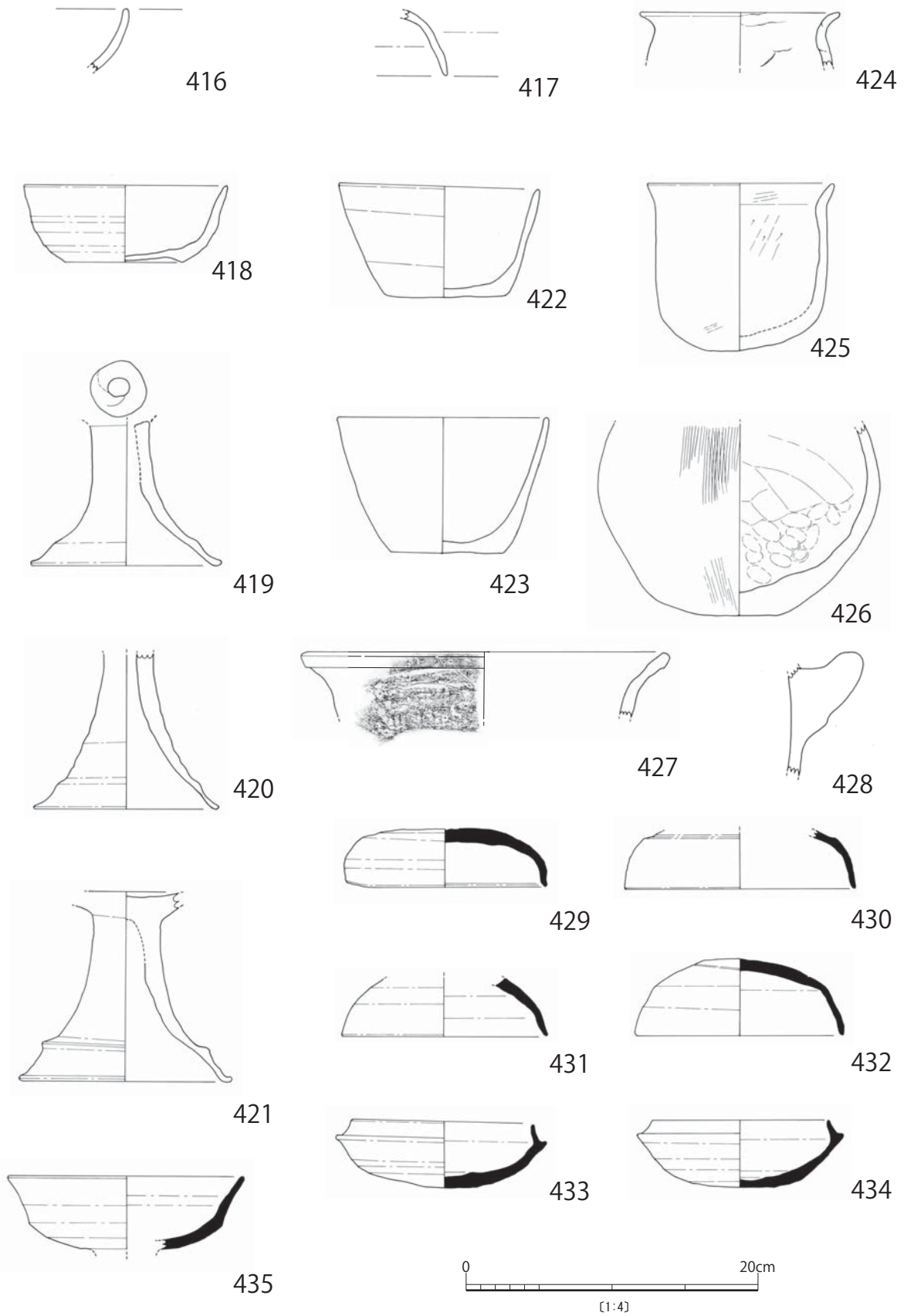


図84 SB213出土遺物 (S=1/4)

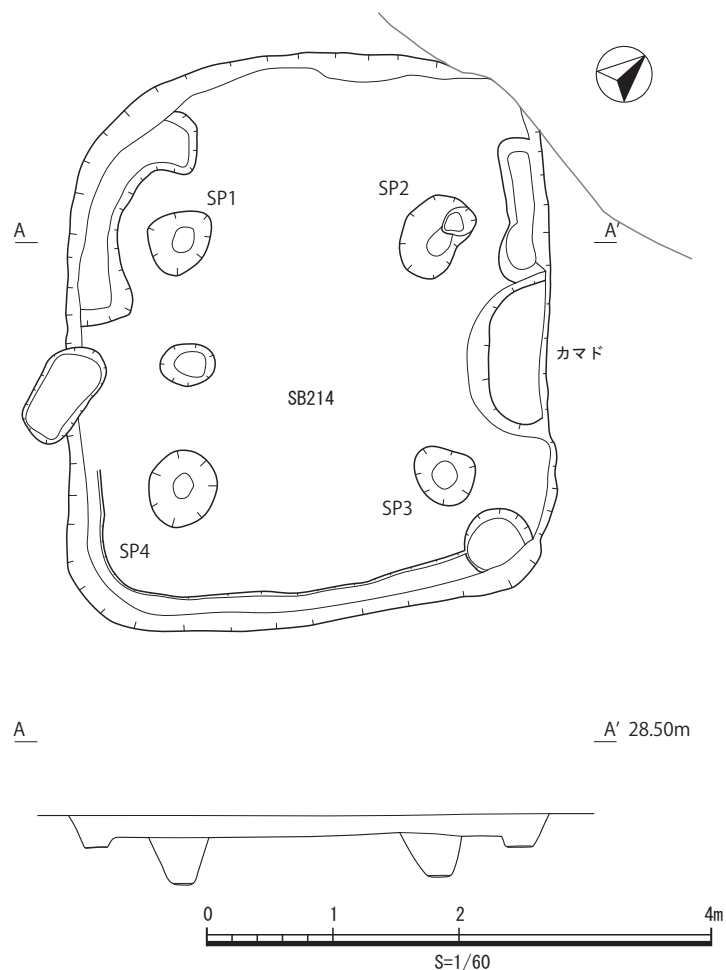


図85 7G・H区 SB214

ドは幅1.36m、長さ64cmである。床面に4か所主柱穴が検出されている。柱穴間は北東-南西の主軸方向で2.1-2.2m、主軸と直行する方向で1.8-2.0mである。北西隅の柱穴 SP1は深さ44cm、北隅の柱穴 SP2は34cm、南東隅の柱穴 SP3は57cm、南隅柱穴 SP4は53cmの深さである。床面は遺構検出面から20cmの深さで、ほぼ水平である。

【遺物】(図86)

436から438は土師器で、436は床面出土の椀である。胴部下半は横方向のケズリであるが、胴部上半から口縁部外面はヨコナデ、内面は丁寧なナデを施す。口径は13.4cmに復元できる。SB228 から出土した土器片と接合する。437は甕で、胴部と頸部の境界の粘土の継ぎ目で外面が隆起する。口縁部から頸部が内外面ともナデ、胴部は外面ハケメ調整で、内面はケズリである。438も甕であるが、カマド内から出土している。胴部外面がタテ方向ハケメ、内面は口縁部下がヨコハケ、胴部は縦方向のケズリである。

439から446は須恵器である。そのうち439と440、441は床面出土の杯H蓋である。439の口縁部内面には沈線状の段がつく。口径は13.0cmである。440は焼け歪みが激しく、天井部に土器片が熔着している。442と443は杯Hの身で、443は床面出土である。口径は442が12.8cm、443が12.5cmに復元できる。444は短脚の高杯で杯体部にカキメが施され、脚部下半部に段がつく。445は床面出土で、短脚

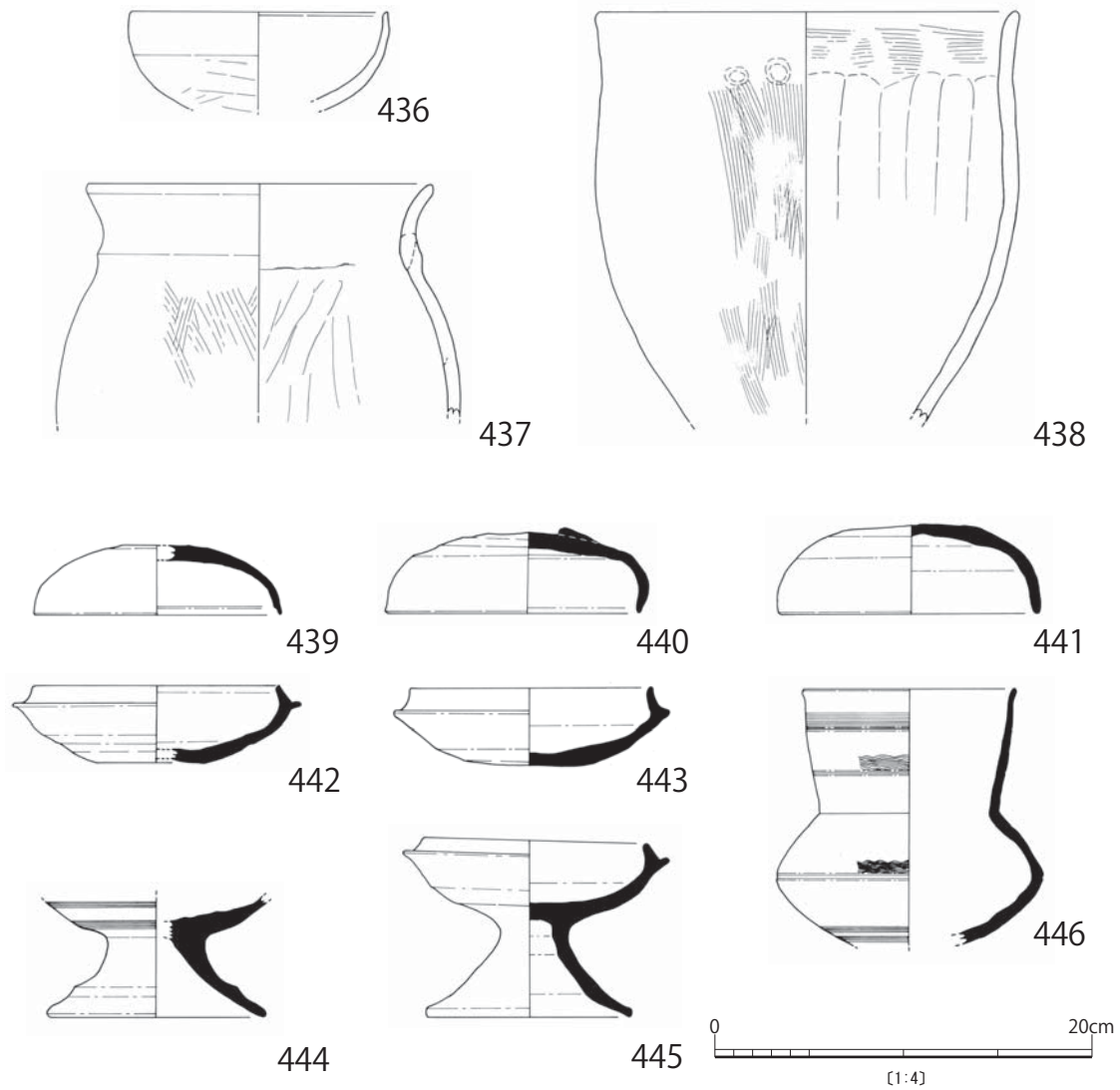


図86 SB214出土遺物 (S=1/4)

の有蓋高杯である。446は床面から出土した長頸壺あるいは脚台付の長頸壺である。胴部最大径部で屈曲する扁平な胴部に頸部から口縁部がやや外傾して立ち上がる。頸部中位と胴部最大径部に波状文が施される。口径11.0cm、胴部最大径14.0cmに復元できる。

この他に本住居跡からはU字形鋤先も出土している。詳細についてはIV-4で検討されているのでそちらを参照されたい。

7H区 SB228 (図87)

7H区西部に位置する。調査区の北東壁にかかって検出されている。南西方向にSB225、SB226が位置しており、北西方向にはSB203、SB207、SB208、SB209などが位置する。住居跡の北東部が調査区外であり、また南西部も南西壁が途中から検出されておらず、南東壁も把握されていない。一方北西壁は4.0m残存しており、また、調査区境界付近で北西に68cmほど張り出している。この張り出した部分では一部焼土が検出されておりカマドの一部が残存していた可能性がある。このような残存部分の状況から主軸を略北西-南東に取る方形の住居跡であったものと推定される。床面には複数

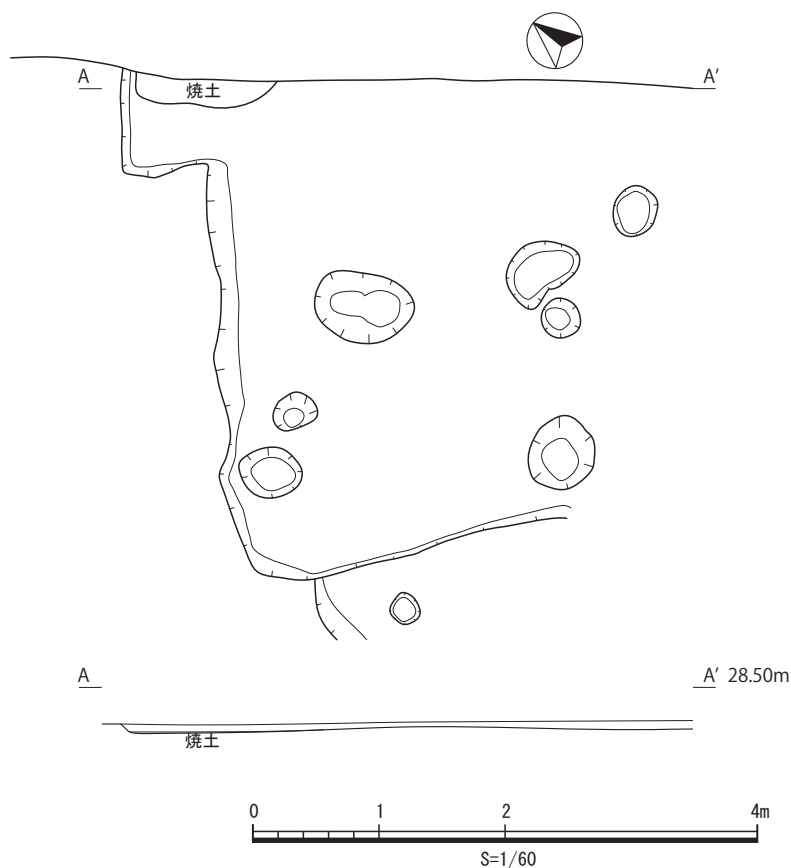


図87 7H区 SB228

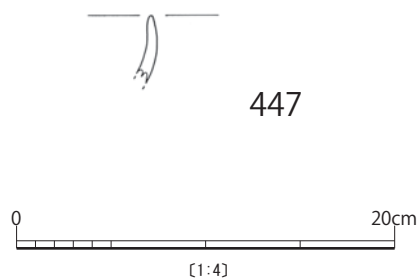


図88 SB228出土遺物 (S=1/4)

のピットが検出されているが、住居跡全体の残存状況がよくないこともあり、主柱穴などは不明である。床面は遺構検出面から8cmほどの深さであり、床面はほぼ水平である。

【遺物】(図88)

報告遺物は1点で、447は土師器碗の小片である。外面調整は器面の風化のため不明であるが、内面はナデ仕上げである。また、このほかにも先に報告したSB214床面出土土師器436と接合する碗の破片が出土している。

8H区 SB203 (図89)

8H区北隅に位置する。調査区の南壁にかかって検出されており、北東に隣接するSB207を切る。主軸は北西-南東方向で平面形は方形を呈していると推定されるが、住居跡の南東部分は調査区外のため調査されていない。北西壁は3.4mをはかり、北東壁は2.6mが残存する。カマドが北西壁に作られており、幅1.04m、長さ0.8mをはかり、床面から20cmほどが残存する。カマドの南東側に主柱穴が2基検出されており、柱穴間は1.52mをはかる。柱穴の深さは、SP1、SP2ともに床面から40cmである。床面は検出面から16cmの深さでほぼ水平である。

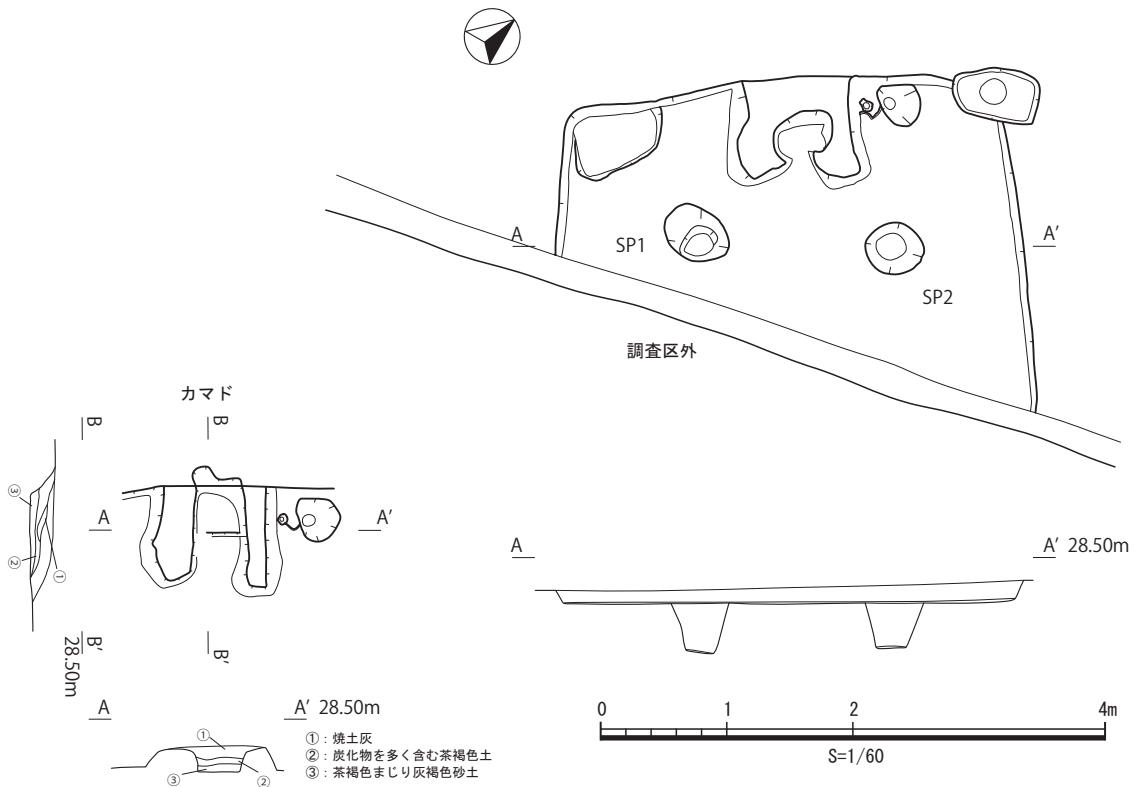


図89 8H区 SB203

【遺物】(図90)

448から451は土師器である。448はカマド内より出土した高杯で口径は21.0cmに復元でき、残存高は13.2cmである。杯部は浅く胴部中位から口縁が大きく広がる。脚部内面に絞り痕が認められる。449は床面出土の小形甕で、胴部と頸部の境界内面に粘土接合痕が残る。口径は13.0cmである。450は甕の底部片でカマド内から出土している。451は甕あるいは甑の把手である。外面はハケメ、内面調整はケズリである。

452から456は須恵器である。452と453は杯Hの蓋で、453は口縁部内面に沈線状の段がつき、天井部と体部の境が明瞭である。口径15.4cmに復元できる。454は杯身の小片である。455は高杯の脚部で、脚裾部で大きく屈曲し端部は丸みを持って肥厚する。456は小形甕の口縁部片で、胎土は精良である。

7・8H区 SB207 (図91)

7H区の西隅と一部8H区北隅にかかりながら位置しており、調査区の南壁にかかって検出されている。そのため住居跡の東側は不明である。また、本住居跡の北部分はSB208によって、また南西部分はSB203によって切られており残存しない。住居跡の規模は不明であるが、西側壁は3.6mが残存し、北側壁は1.0mが残る。残存部分から平面は方形を呈するものと推測される。床面は検出面から4cmほどの深さで、ほぼ水平である。

【遺物】(図92)

457は手づくね土器の椀で、底部からやや内湾しながら口縁部にそのまま至る形態である。口径は

II 調査の結果

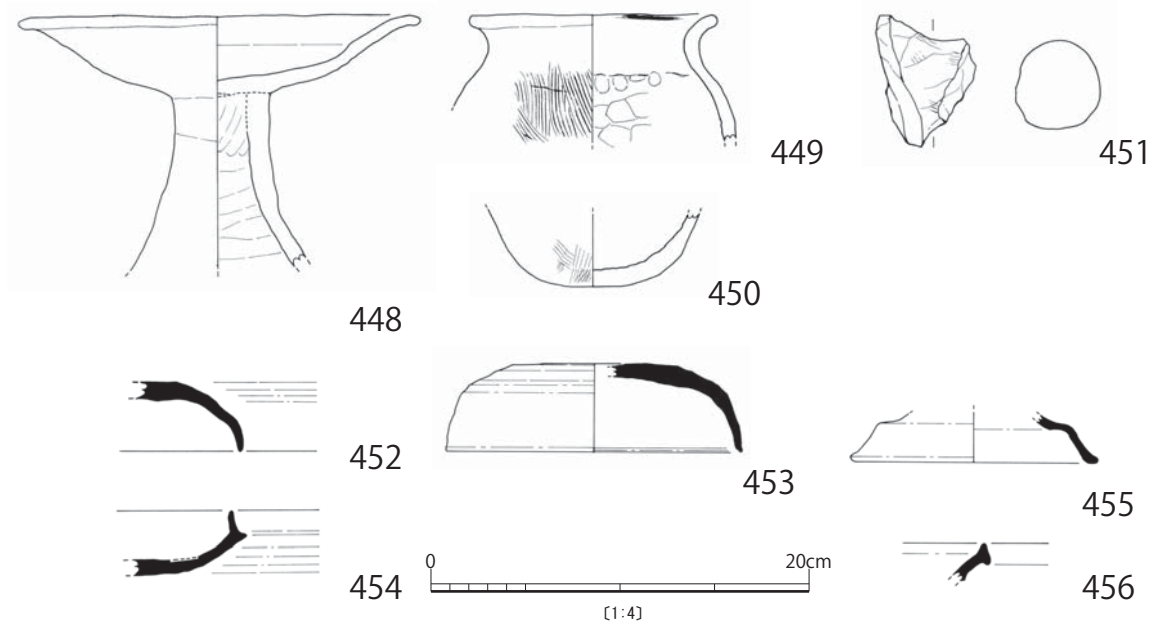


図90 SB203出土遺物 (S=1/4)

5.2cm、底径4.4cmに復元できる。458と459は甕で、459は胴部から頸部ですぼまり口縁部に向かって外反する。外面はナデ調整で、口縁部内面はナデ、胴部内面は横方向のケズリの後にナデで仕上げる。460は把手で外面はハケメの後ナデで、内面はケズリである。461は底部から大きく口縁が開く形をした甌である。

462から472は須恵器である。そのうち462と463は杯Hの蓋で、462は口縁部内面に沈線状の段がつく。口径は13.5cmに復元可能である。463は口縁部内面にわずかに段があり、口縁外面にヘラ傷がめ

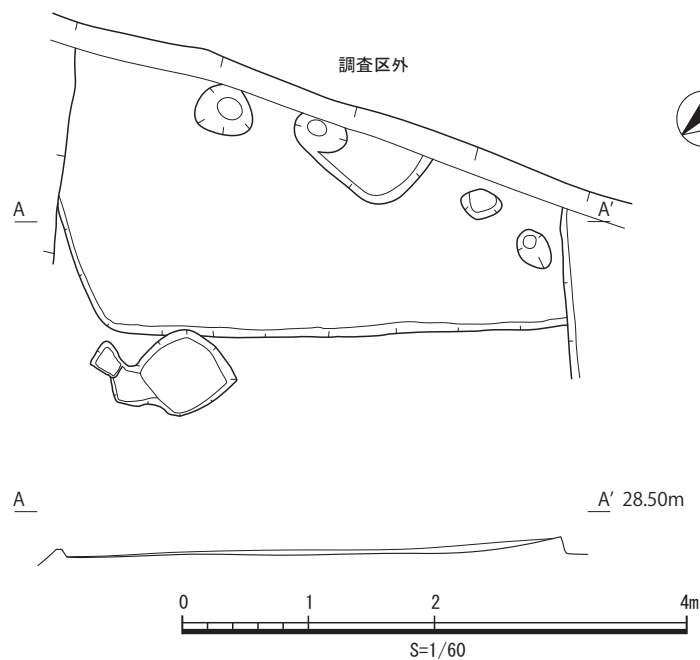


図91 7・8H区 SB207

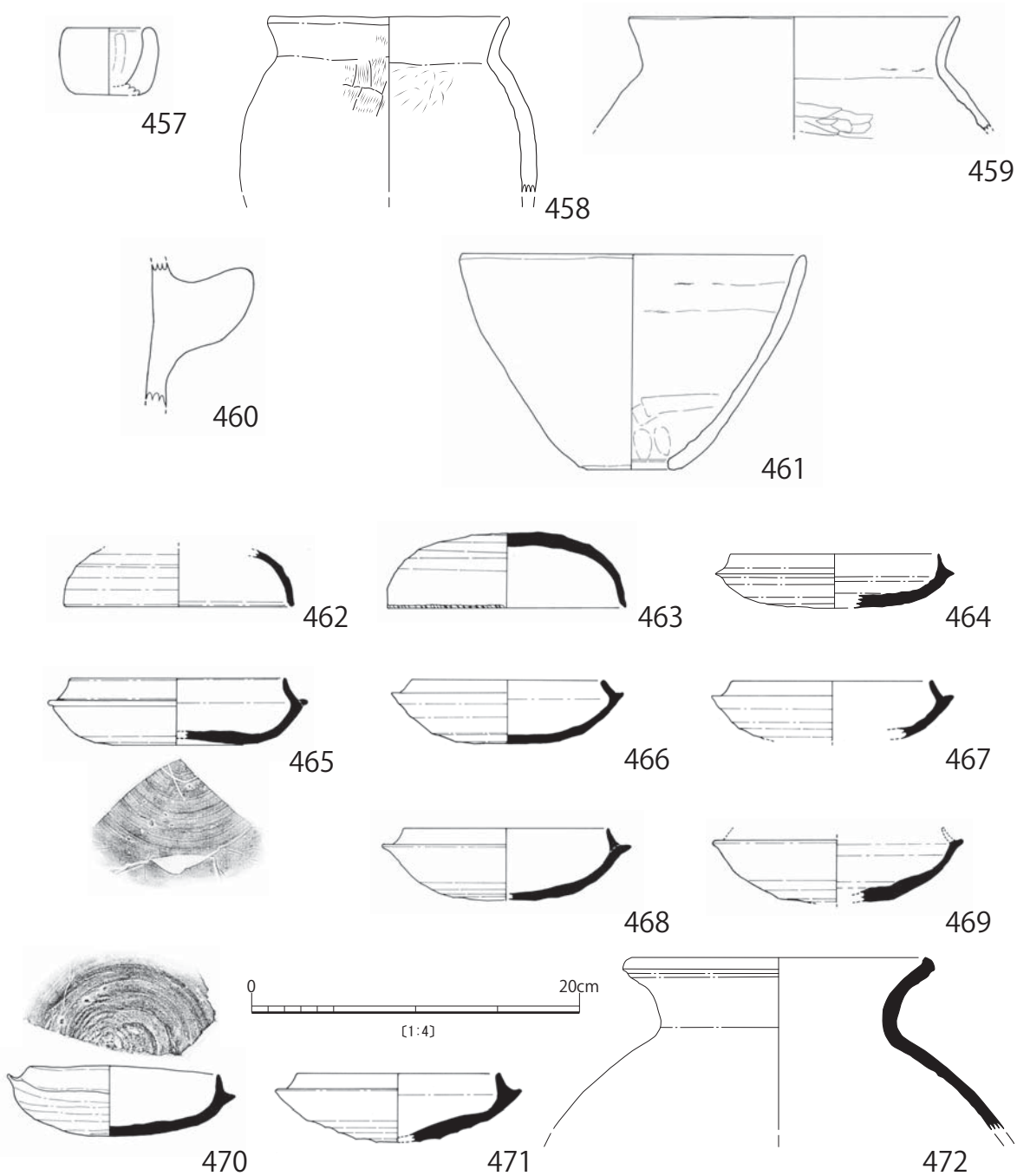


図92 SB207出土遺物 (S=1/4)

ぐる。口径14.5cmである。464から471は杯Hの身である。465は体部がやや扁平で底部が広く、底部外面にヘラ記号がみられる。口径は13.0cmに復元できる。466は内傾するややしっかりした口縁部がつく。焼け歪みにより器壁に亀裂がみられる。467は床面出土の杯身で口径12.0cmに復元できる。470は焼け歪みが著しい。底部内面に当て具痕が残る。472は床面出土の甕で口径19.0cmに復元できる。

8 H区 SB225 (図93)

8 H区の中央部で検出された竪穴住居跡である。北東方向にSB226が位置する。略東西方向に主軸

II 調査の結果

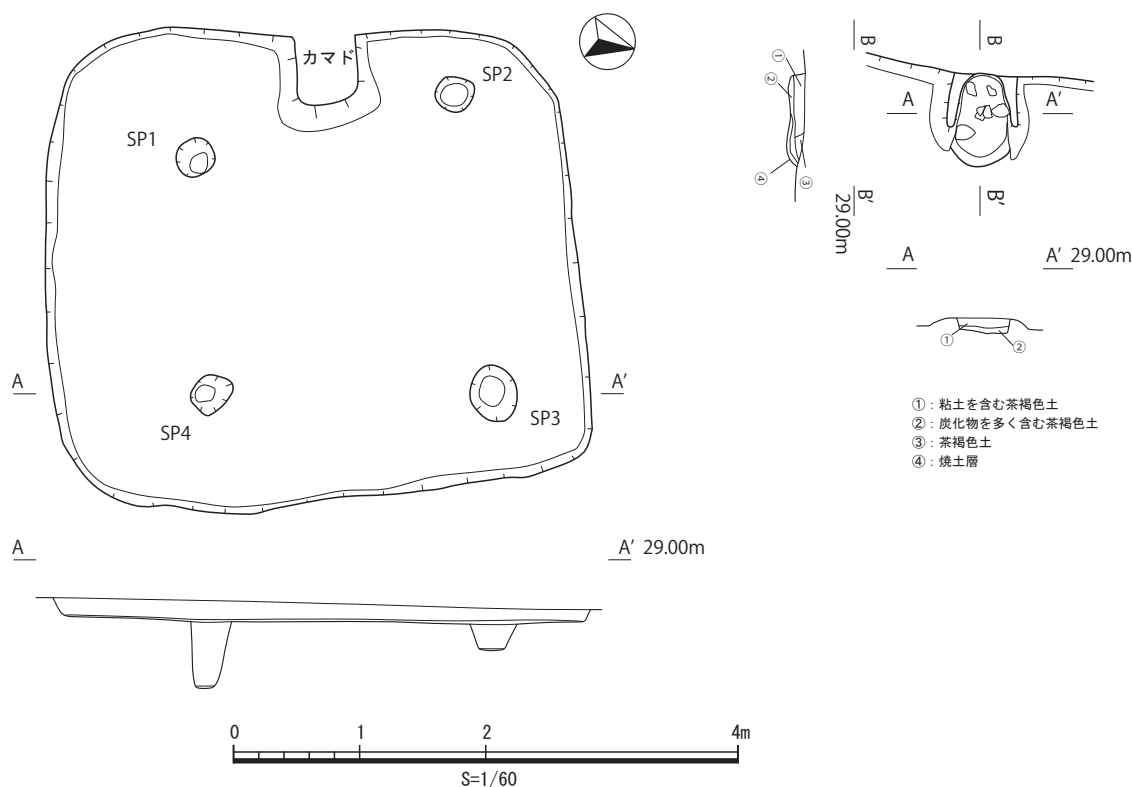


図93 8H区 SB225

をとる隅丸方形のプランを呈する。西側壁は3.0m、東壁は4.0m、北壁2.8m、南壁3.2mをはかる。住居跡西壁中央部にカマドが作り付けられる。カマドの幅は80cm、最大長72cm、床面から12cmほどが残る。床面には支柱穴と考えられるピットが4基検出されている。北西隅のSP2がやや西側にずれているが、柱穴間は主軸方向で南側のSP1-SP4間1.88m、北側のSP2-SP3間2.4mをはかる。主軸と直行する南北方向では西側のSP1-SP2間が2.0m、東側SP3-SP4間2.24mをはかる。柱穴の床面からの深さは、SP1が50cm、SP2が19cm、SP3が22cm、SP4が55.5cmをはかり、南側のSP1とSP4が北側の柱穴SP2およびSP3に比べかなり深い。床面は遺構検出面から16cmほどの深さで、ほぼ水平である。

【遺物】(図94)

473と474は弥生土器で、473は口縁部が「く」字形に外反する甕形土器である。474は支脚で中央に小さな円孔があく。

475から479は土師器である。475は杯の小片で底部外面に板状圧痕がみられる。476は小形の甕である。477は甕口縁部片、478は把手である。479はカマド内から出土した甕で、口縁部から頸部は内外面ともナデ、胴部外面はハケメ、内面は横方向のケズリである。口径は20.2cmに復元できる。

480から486は須恵器で、480から485まではすべて杯Hの蓋で、いずれも口縁部内面に沈線状の段ないしはその退化したものがつく。483は焼け歪みが激しく器形がかなり歪んでいる。口径は484が15.8cmに復元でき最も大きく、482は13.0cm、485は14.0cmに復元可能である。486は高杯の脚部でやや

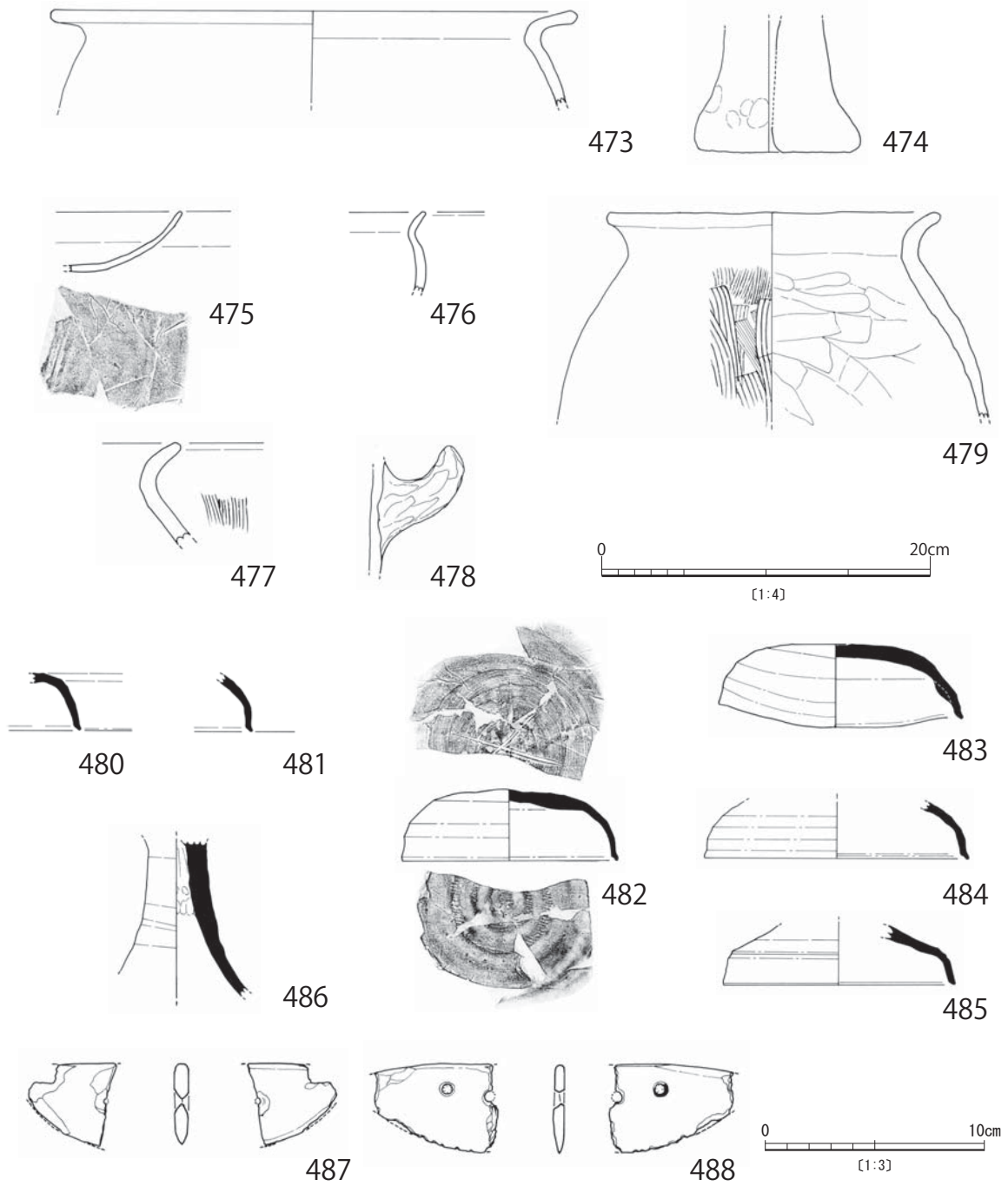


図94 SB225出土遺物 (S=1/4, 石器 : S=1/3)

焼きが甘い。残存高は9.5cmである。

487と488は住居跡覆土から出土した石庖丁である。

8 H区 SB226 (図95)

8 H区の中央部やや北よりの範囲で検出された竪穴住居跡である。南西方向にSB225が位置し、北方向にSB203やSB207が位置する。遺構の北部分がSB227により残存しない。南西部分は西に張り出

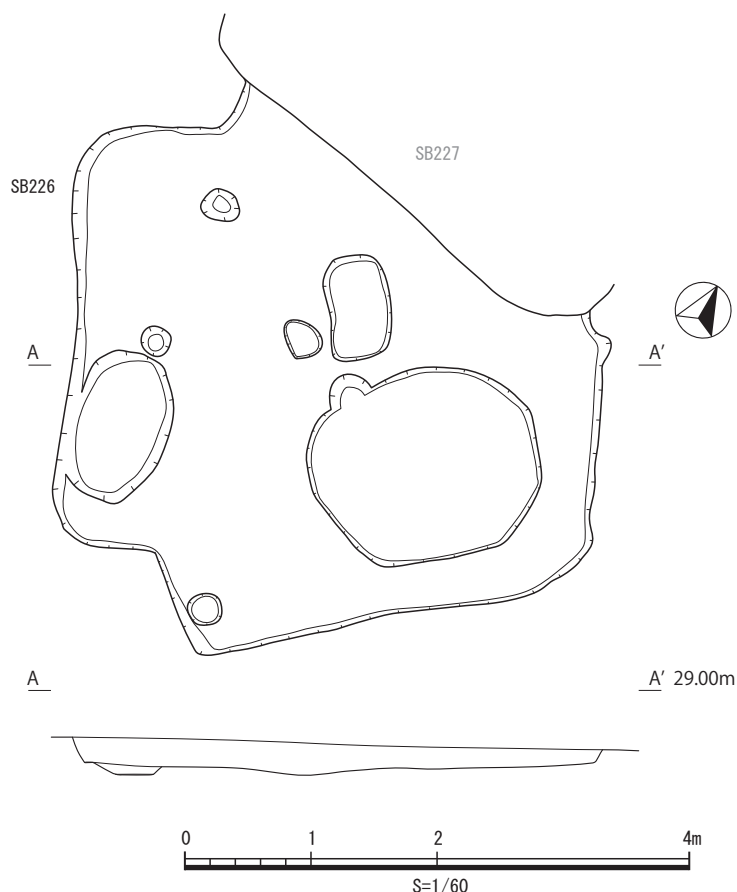


図95 8H区 SB226

したような形態をしており、南東側の壁は北東壁、南西壁に対してやや傾いた方向で検出されている。平面形態は不明である。南西側壁は3.2mをはかり、この壁に対して斜めに検出されている南東壁は3.2mをはかる。北東側の壁は2.0mが残存する。床面には複数の土坑やピットが検出されているが、住居跡との関係は不明である。床面は最も深い部分で遺構検出面から25cmの深さで、中央部から東側にかけてやや高くなる。

【遺物】(図96)

489から503は土師器である。489・490・491・492は椀で、492以外は床面から出土している。口径は492が12.1cmで最も小さく、490が14.0cmで最も大きな口径である。外面はハケメの後ヘラミガキや丁寧なナデで仕上げる。内面もヘラミガキやナデ仕上げである。491は底部外面にヘラ記号のような線刻がみられる。493と494は小形壺で精良な胎土を使用しており、調整も内外面ともミガキで仕上げている。口径は493が10.7cm、494が10.0cmに復元できる。494は床面出土である。495と496は壺で、床面出土の495は胴部から頸部で屈曲し口縁部が開く器形である。496は胴部から短い口縁部がやや外形気味に立ち上がる。497は小形の甕の小片で内外面ともナデで仕上げる。498はやや細長い砲弾型の器形を呈する作りの粗い甕である。口径17.0cm、胴部最大径は16.4cmに復元できる。499と500はともに床面から出土した甕である。499は内外面ともケズリの後ナデで仕上げる。口径は20.8cmに復元できる。500は内外面ともハケメの後一部ナデを施す。口径は26.0cmに復元可能である。501と502は把手で、503は甕の底部片である。

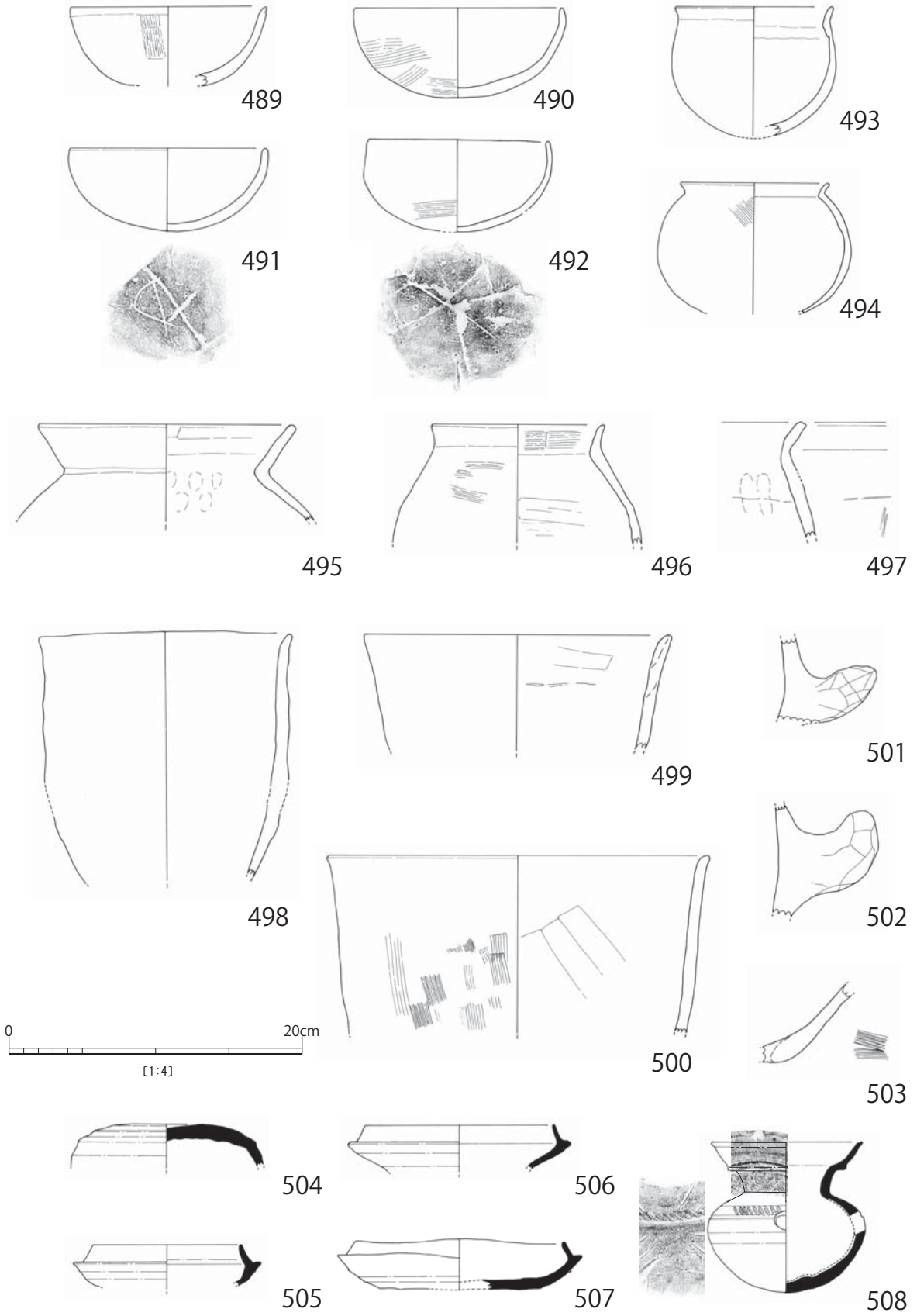


図96 SB226出土遺物 (S=1/4)

II 調査の結果

504から508は須恵器である。504は杯Hの蓋で、天井部が平たく体部との境界に段がつく。505、506および507は杯Hの身で、505と506は細い内傾する口縁部がつくが、507はやや厚みのあるしっかりした口縁部がつき、器形も扁平である。また、この杯身は焼け歪みが激しく器形がゆがみ体部に熔着片がみられる。507の口径が最も大きく14.0cmに復元でき、505の口径は10.0cm、506の口径は12.8cmに復元ができる。508は床面から出土した甗で口径14.0cm、胴部最大径10.7cmに復元でき、器高は10.2cmをはかる。口縁部は頸部から屈曲し外面に段を持ち外反する。口縁端部内面には沈線状の段がわずかに残る。頸部に波状文、胴部上位に刺突文を廻らす。

2) その他の出土遺物 (図97、図98-101)

509と510はエリアIIの東部(図97)に位置する2I区の溝遺構(遺構原図に遺構名が記載されてお

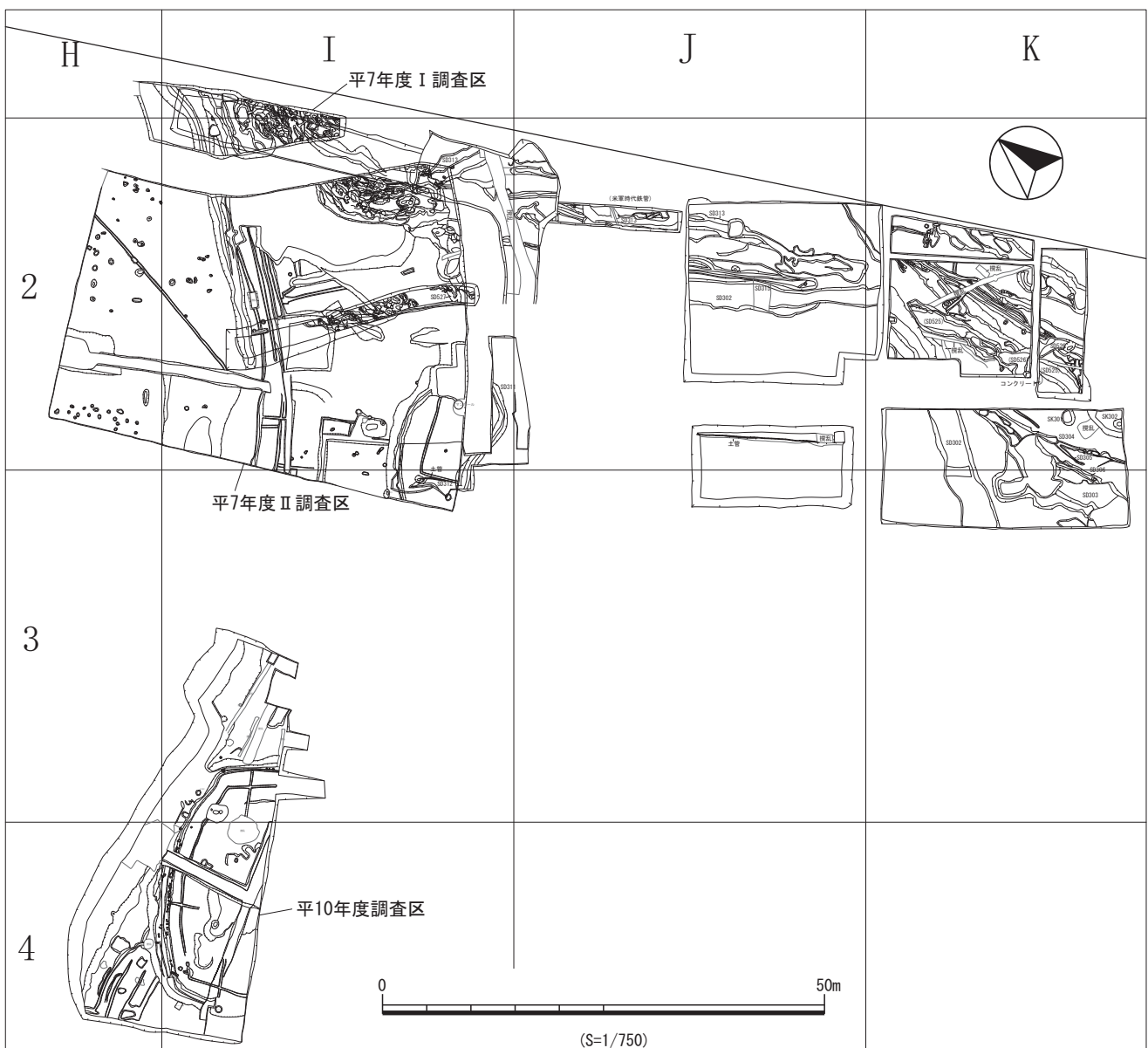


図97 エリアII東部 遺構配置図 (S=1/750)

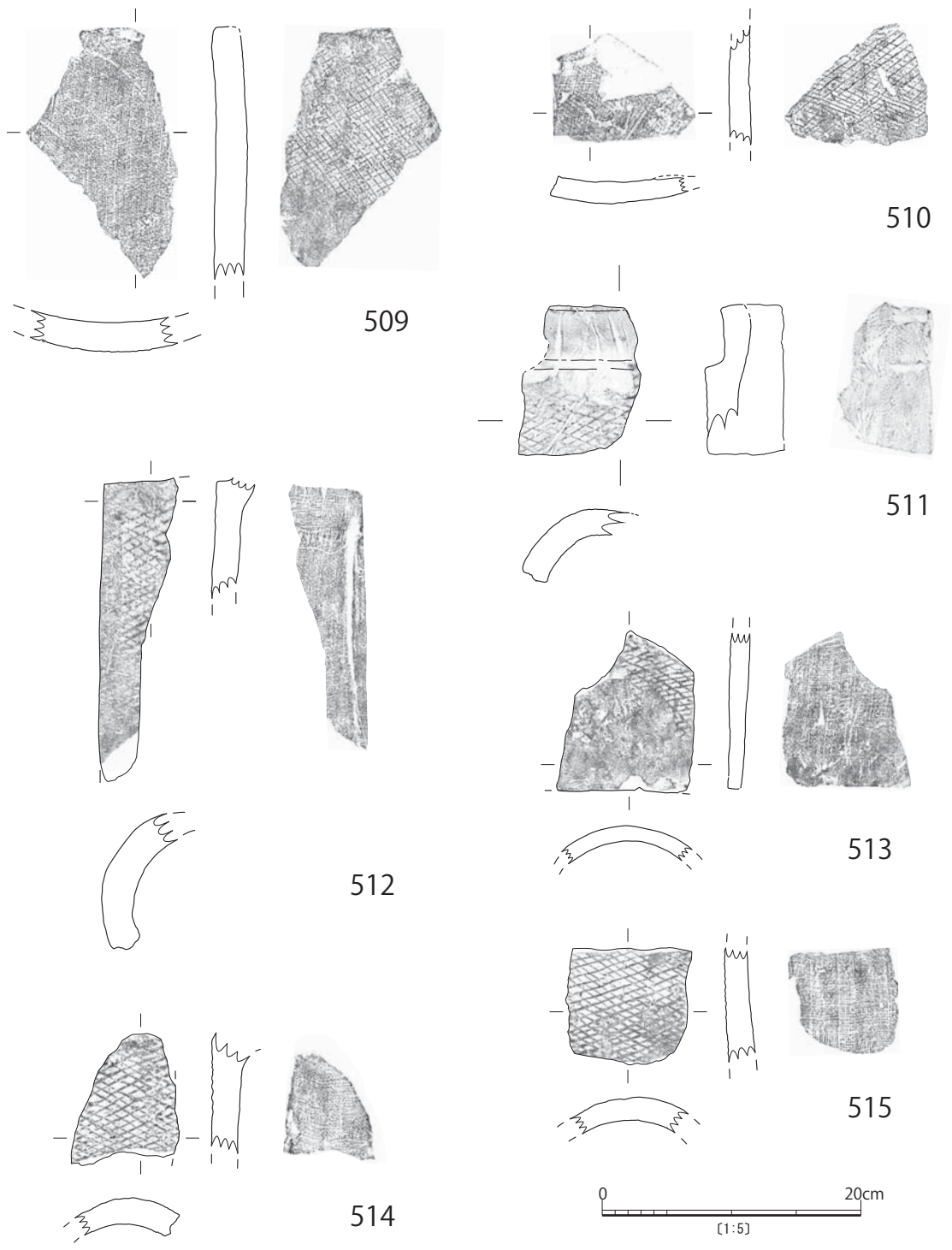


図98 エリアⅡその他の出土遺物（1） 2Ⅰ区溝及び包含層出土瓦（S=1/5）

らず場所は特定不能）から出土した格子目叩きの円筒桶作りと考えられる平瓦である。510の凹面には分割突帯とみられるくぼみがみられ、側面に分割面がある。511から513は2Ⅰ区の溝及び包含層から出土した格子目叩きの丸瓦である。511と512の側面には分割面がみられる。

514と515は同エリアⅡの2Ⅰ区周辺出土であるが、平成7年度に調査されたⅠおよびⅡ調査区（図

II 調査の結果

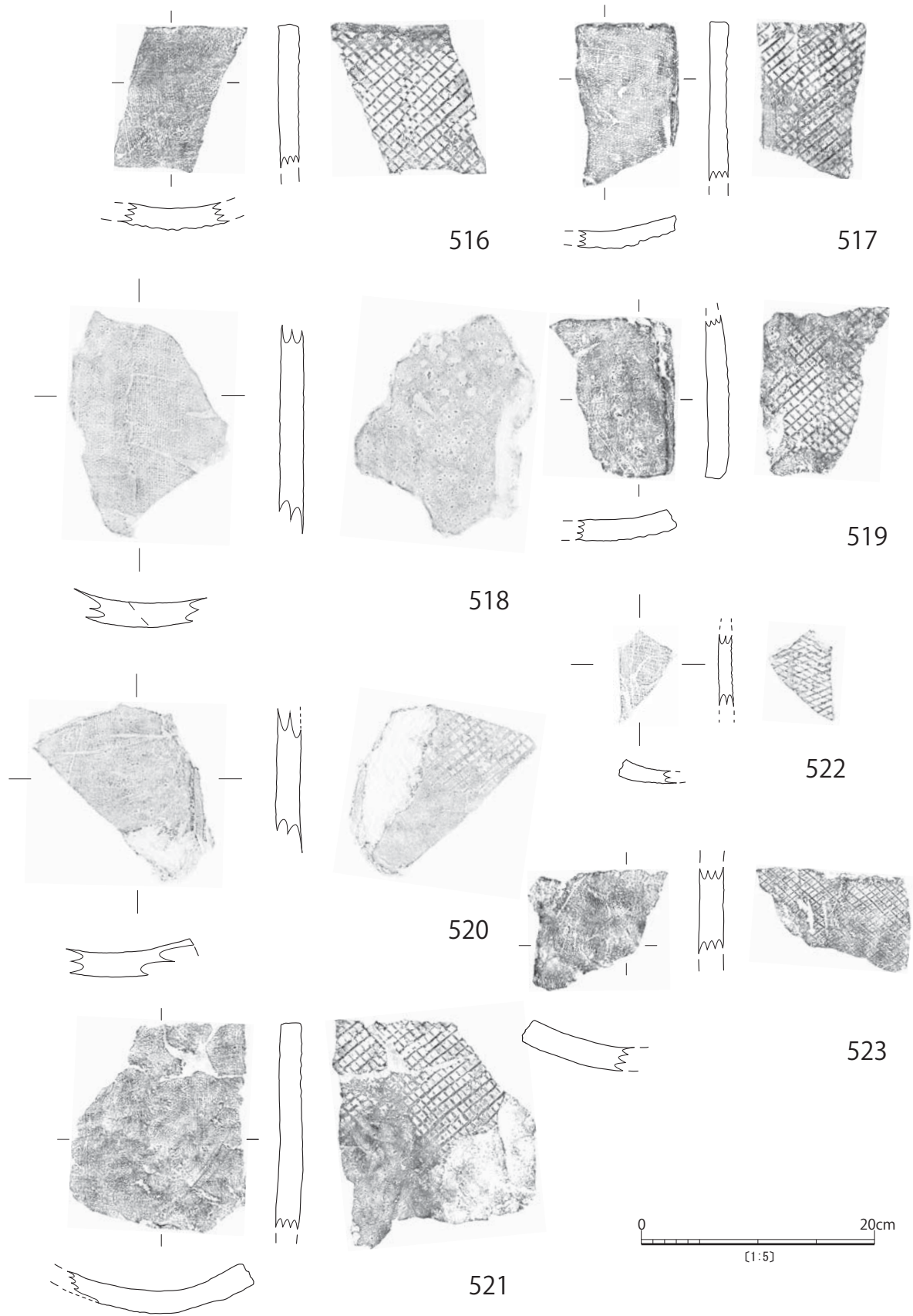


図99 エリアIIその他の出土遺物(2) H.7調査I区溝, 4I区溝及び包含層出土瓦(S=1/5)

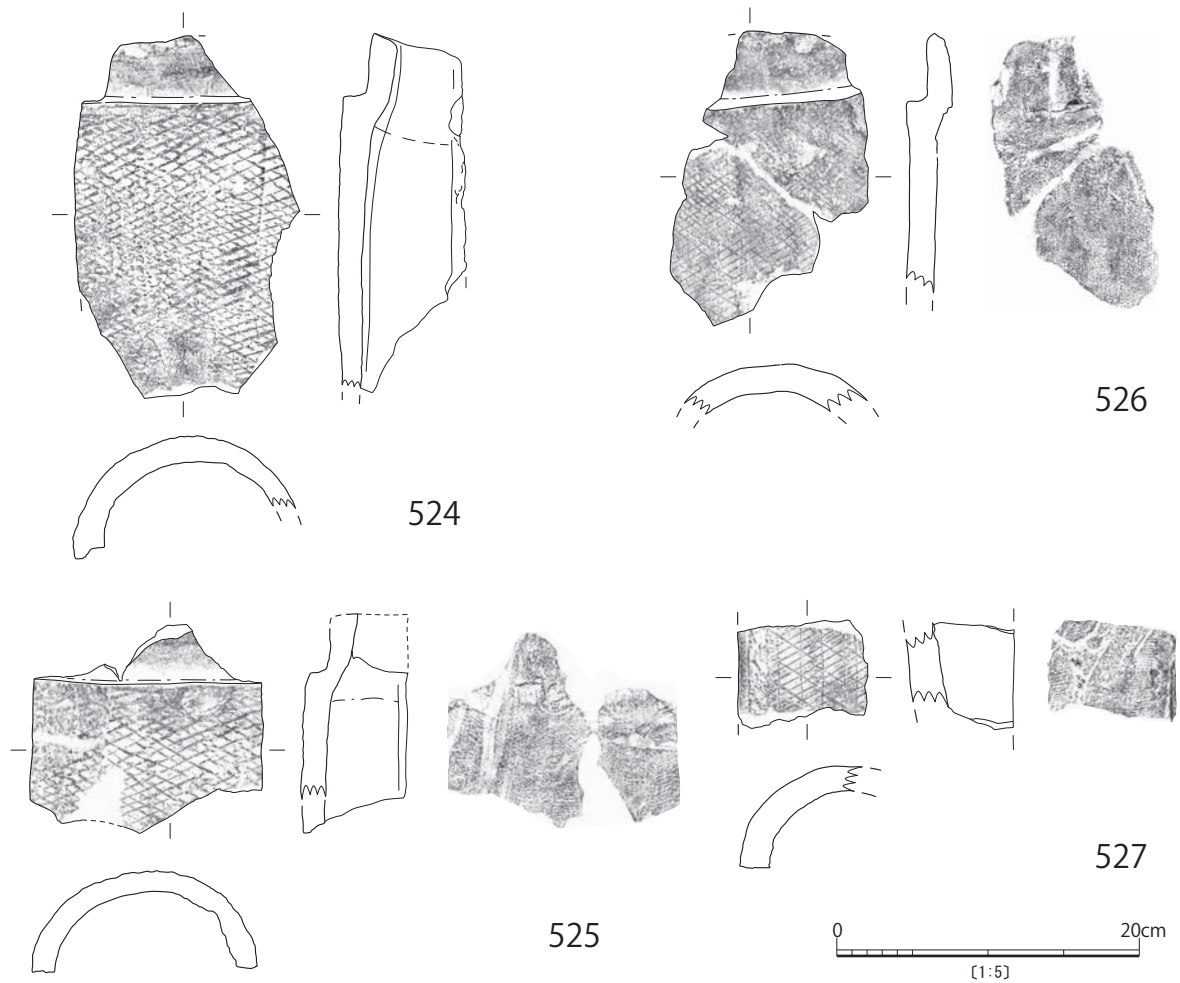


図100 エリアII その他の出土遺物 (3) 4I区溝及び包含層出土瓦 (S=1/5)

97)のうち北側の調査区であるI調査区から出土した瓦である。いずれも格子目叩きの丸瓦で、514の側面には分割面がみられる。

516から520は格子目叩きの平瓦である。518と520には粘土継ぎ目がみられ、517の凹面には分割突帯がみられる。また、この517の他に519と520の側面には分割面があり、円筒桶作りである。

521から529は、同じくエリアIIの平成10年度調査区4I区から出土した瓦である。521から523は格子目叩きで、円筒桶作りの平瓦である。521と523は格子目叩きの後その一部をすり消している。また、これら3点はいずれも側面に分割面がみられる。厚さは521と523が2.1cmで、522は1.5cmである。524から527は格子目叩きの丸瓦である。524・525・527の側面には分割面がみられ、527の凹面には分割突帯が残る。

528と529は軒丸瓦で、いずれも平成10年度調査の4I区で出土している。528は中房の連子2個、内区に6個の素弁がみられる。529は中房の連子は欠損しているが、内区に5個の素弁がみられ、外区にコマ状の尾がついた珠文がめぐる。530と531は平成7年度調査区I区から出土した鬼瓦である。530は鼻の部分が剥離したもので、531は右眉が剥離したものである。

また、このエリアIIの北部の調査区からは木簡が出土している。詳細についてはIV-5の出土文字

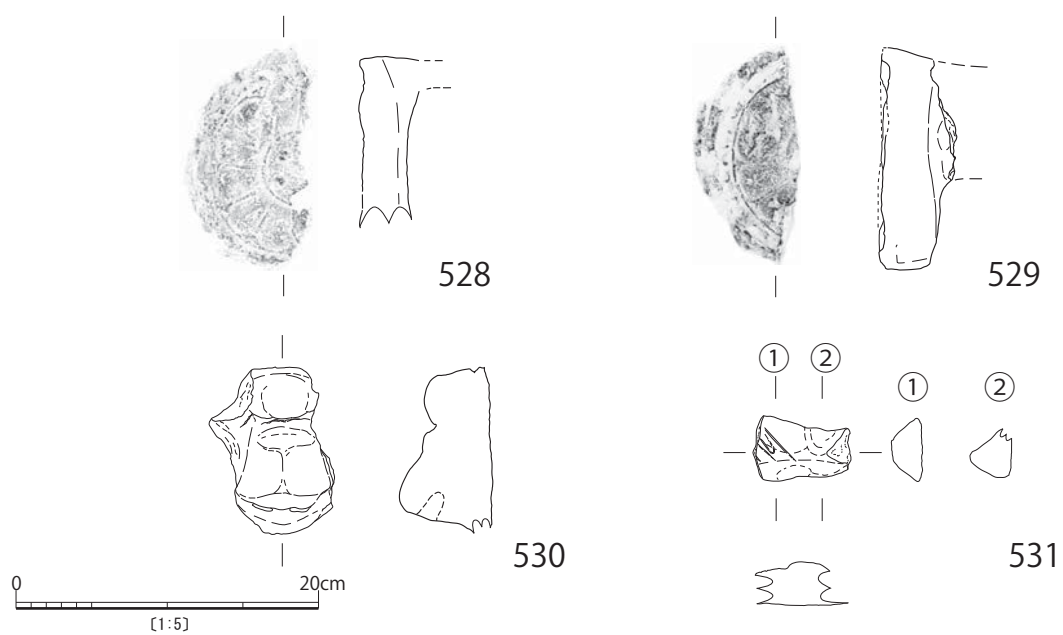


図101 エリアⅡ その他の出土遺物（4） エリアⅡ 出土軒丸瓦と鬼瓦（S=1/5）

資料の再検討についての節において報告・考察している。

3. エリアⅢ (図102)

1) 住居跡

6L区 SB001 (図103)

6L区中央部やや東寄りで検出された竪穴住居跡である。付近には谷部の包含層に向かって検出されたSD001がみられる以外遺構は検出されていない。住居跡の南東部分は攪乱のため残っておらず、規模は不明である。しかし、残存部分のうち住居跡の北西壁にカマドが作り付けられており、略北西-南東方向に主軸をとる方形プランを呈するものと考えられる。北西壁は4.7mをはかり、北東壁は2.2m、南西壁は1.64mが遺存する。カマドは幅1.0m、最大長60cmをはかり、床面から最大20cmほどが残る。床面は遺構検出面から24cmほどの深さで、ほぼ水平である。

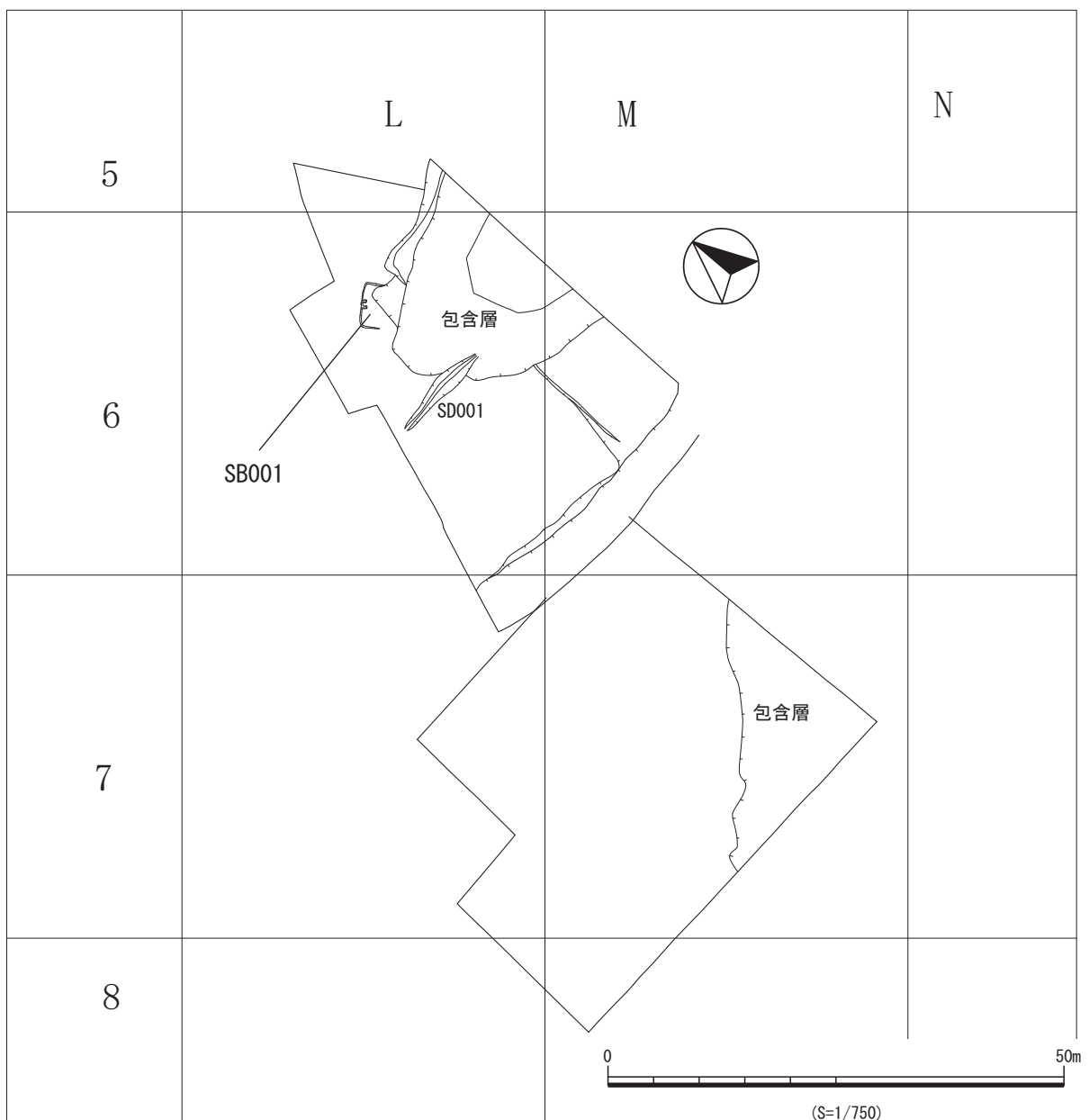


図102 エリアⅢ北部 遺構配置図 (S=1/750)

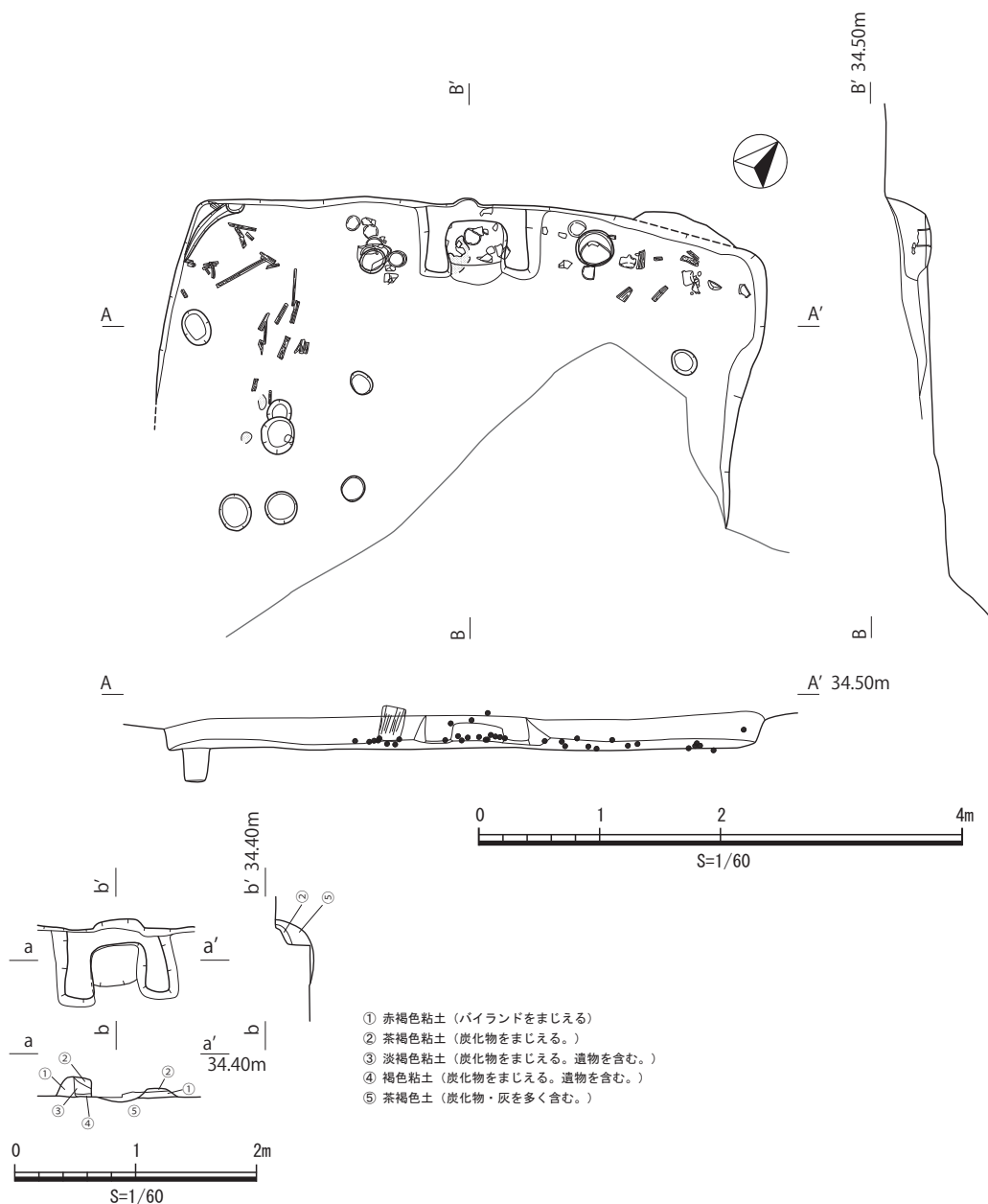


図103 6L区 SB001

【遺物】(図104)

532から542までは須恵器である。532・533・534は杯Hの蓋で、いずれも天井部と体部の境がなく丸みを持つ器形である。532と533の2点はカマド内出土で、天井部外面にヘラ記号がみられる。いずれも焼け歪みにより器形がゆがむため正確な口径は不明であるが、534は口径13.3cmに復元できる。535から539は杯Hの身である。539以外の4点の底部外面にはヘラ記号がみられる。540と541は高杯の蓋でつまみの中央部がわずかにくぼむ。口径はいずれも14.4cmである。542は胴部からそのまま口縁に至る器形の椀である。底部外面にヘラ記号がみられる。また焼け歪みのため器形が楕円形にゆがむ。

543と544は土師器である。543は小形の甕で外面はハケメ、内面は縦方向ケズリである。544は甕で口径19.0cm、胴部最大径28.0cm、器高37.4cmである。外面ハケメ、内面はヘラケズリである。

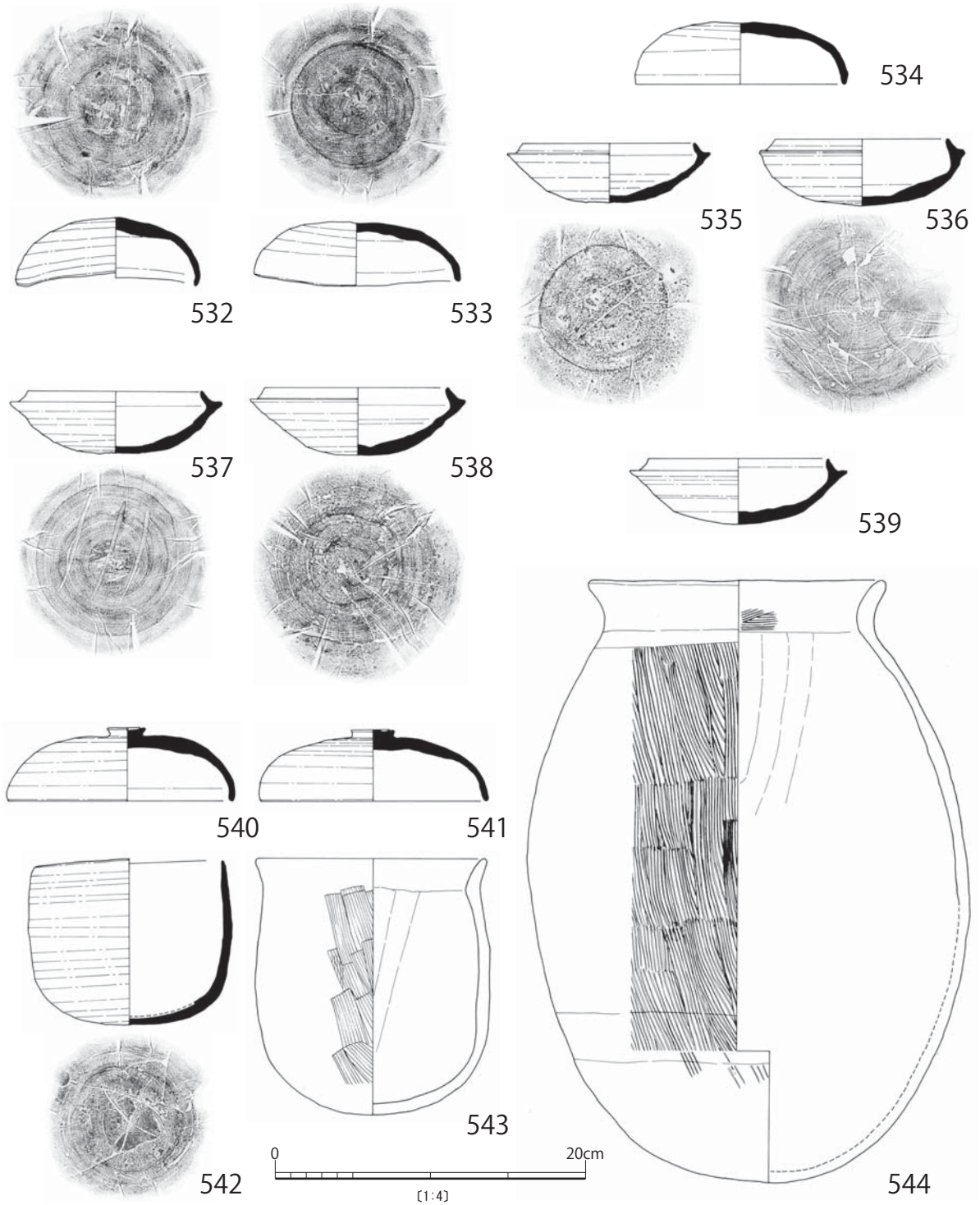


図104 SB001出土遺物 (S=1/4)

2) その他の出土遺物 (図105-108)

SX301 (図105)

5・6-N・O区で検出された盛り土遺構で、略北西-南東方向に軸をとる。北東-南西方向の幅は検出部分中央部で約27m、最も西側の調査区壁際で約43.5m、長さは検出部分中軸上で約50mをは

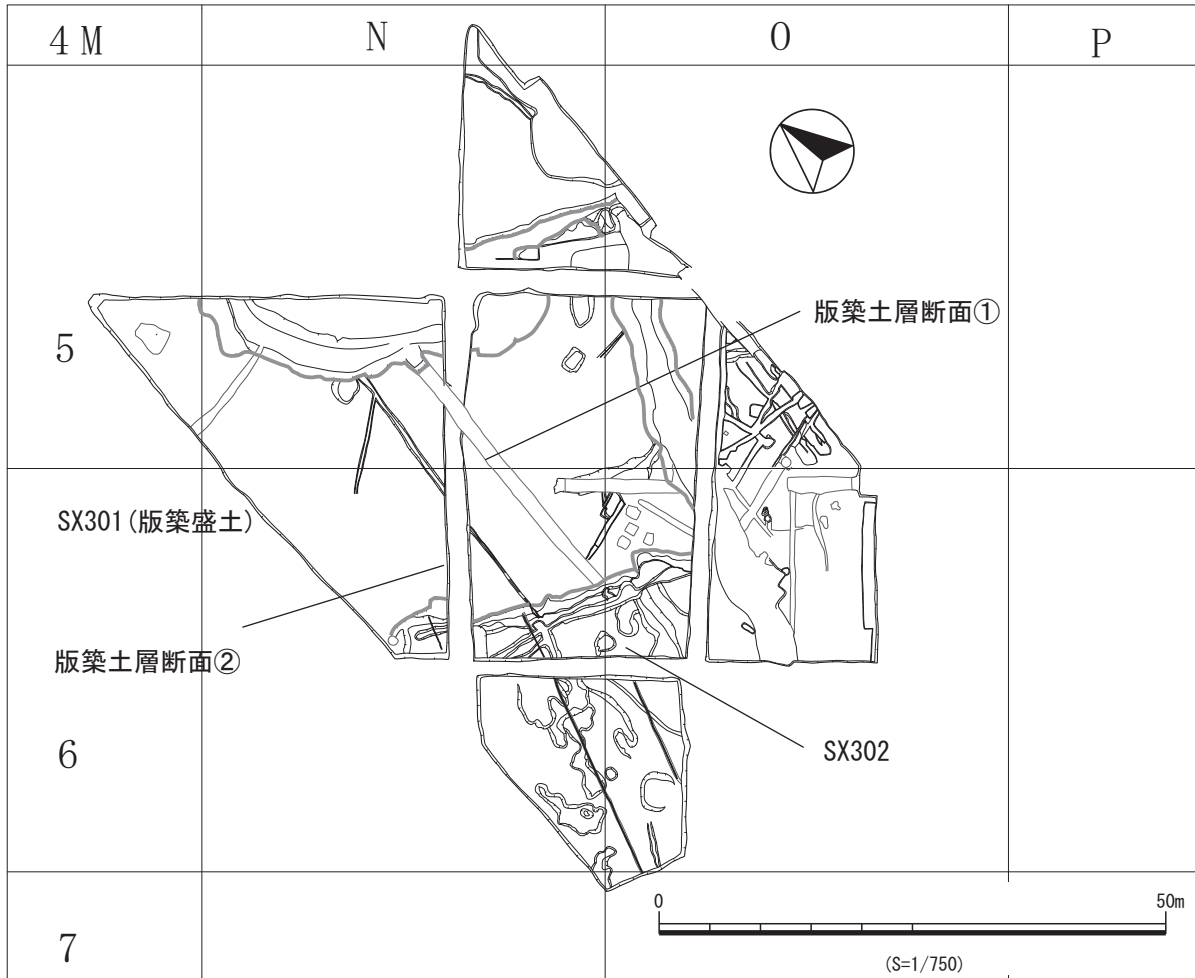


図105 エリアⅢ南部 遺構配置図 (S=1/750)

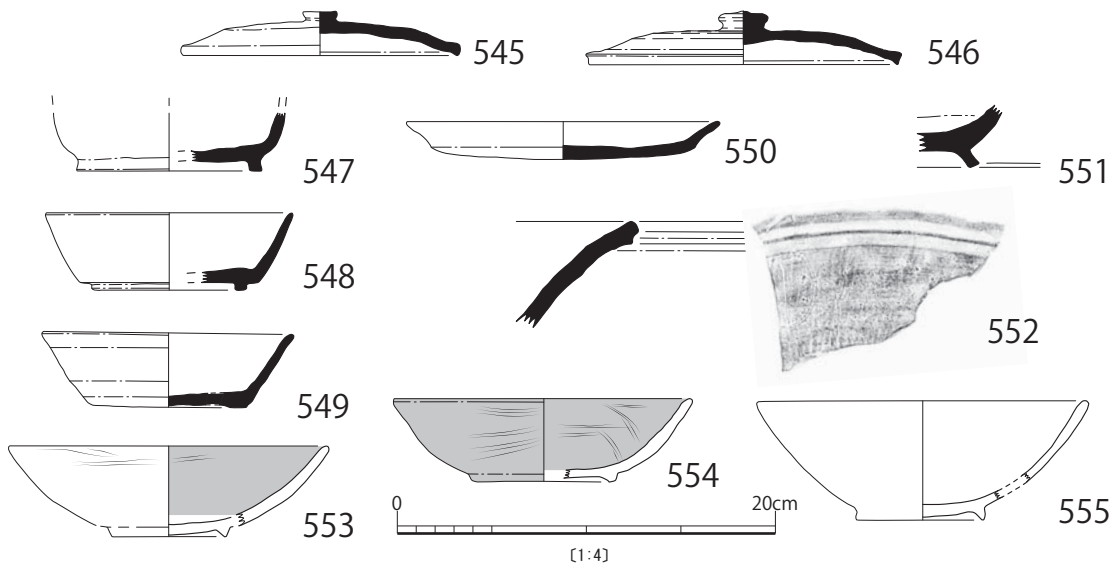


図106 SX302B 出土遺物 (S=1/4)

かる。土層断面は図105中の2ヶ所で記録されている。その内の1つである南北方向のトレンチ西壁の断面（Ⅳ-7・土層図①）を図版3に示している。詳細な構築工程についての復元はⅣ-7で検討

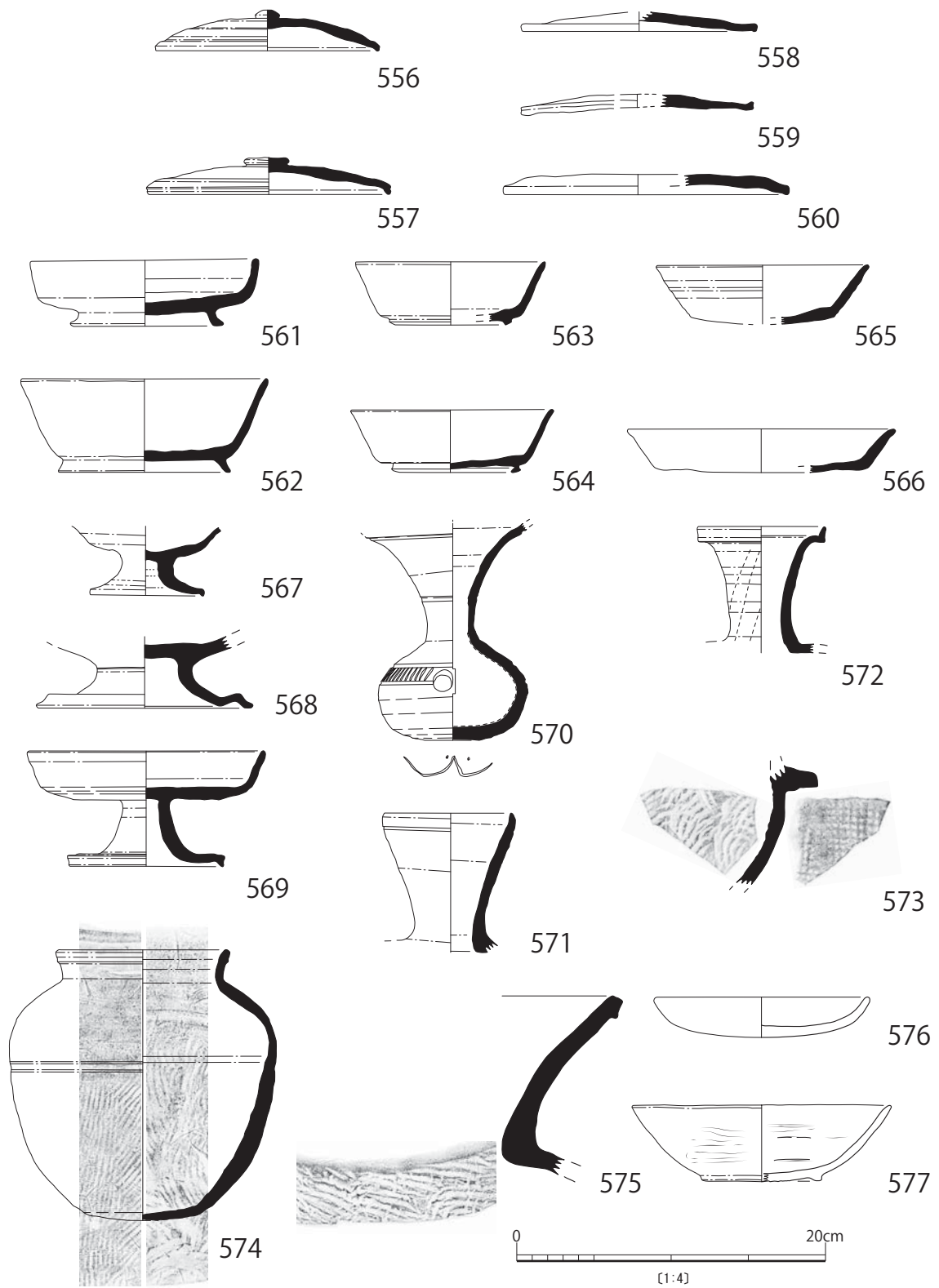


図107 SX302C 出土遺物 (S=1/4)

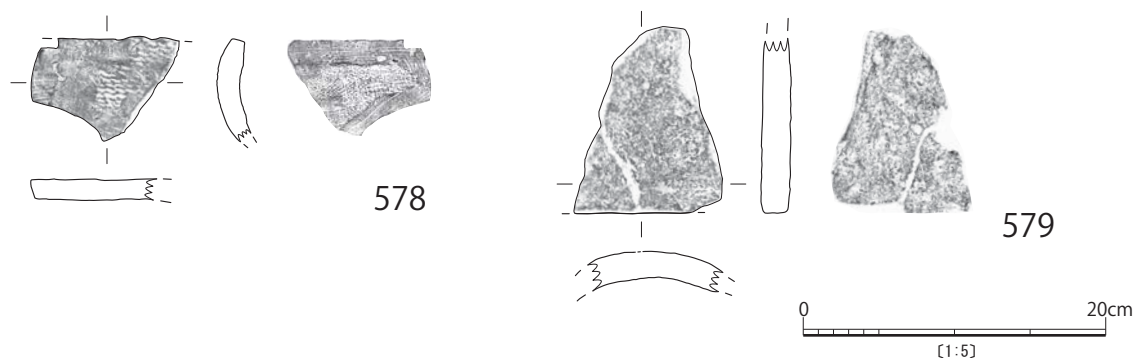


図108 エリアIIIその他の出土遺物 SX302及び5N 整地層出土瓦 (S=1/5)

しているのものでそちらを参照されたい。当該遺構からの出土と明確にわかる遺物はみつからなかった。

SX302他 (図106-108)

SX301の版築盛り土遺構の南西部分はSX302として調査されている。調査時にSX302BとSX302Cに区分して遺物は取り上げられているが、双方の遺物分布には大きな相違は見られず、出土層位による別であるのかについても記録がなく判然としない。そのためSX302BとSX302Cがどのような区分であるのかは不明であるが、以下では一応SX302BとSX302Cに分けて出土遺物の報告を行う。

SX302Bとして取り上げられている遺物は545から555で、そのうち545から552までは須恵器である。545と546はボタン状のつまみがつく杯蓋で、口縁端部は折り返していた名残がわずかに残る。547と548は杯Bの身で、547は低い高台がやや外側を向いてつく。548は底部端からやや内側に低い高台がつく。549は杯Aの身で、体部が外方に直線的に開く器形を呈する。550は盤で底部からやや湾曲しながら口縁にいたる。口径16.6cm、底径12.0cmに復元できる。551は高台付の瓶の底部と思われる小片である。552は甕で頸部外面にヘラ記号がみられる。553・554・555は瓦器椀で、低い高台に胴部の屈曲がみられない体部がつく。554は内外面ともに炭素がよく吸着している。

556から577はSX302Cから出土した遺物で、556から575は須恵器である。556から560は杯蓋である。556はボタン状の低いつまみがつき、口縁端部をわずかに折り曲げる。557は扁平な宝珠形のつまみがつき、口縁端部を折り曲げる。558と560は口縁端部の折り曲げが痕跡的に残る形態である。561から564は杯Bの身である。561は体部が低く、高い高台が外方に向いてつく。562は高い高台が外側に向いてつき、体部は直線的に開く。563と564は底部端からやや離れた部分に低い高台がつく。565は杯Aの身で底部がやや丸みを帯びる。566は盤で、口径17.4cmに復元でき、器高は2.9cmである。567・568・569は高杯で、いずれも低い脚部が開く。570は壺で、胴部がやや扁平な形態をしており、口径が胴部最大径よりも大きい。底部外面にヘラ記号がみられる。571は瓶の口縁部から頸部である。572は瓶子の頸部である。外面にシボリ痕がみられる。573は把手付の小形甕の小片と思われる。外面はタタキで内面には当て具痕がみられる。574は甕で口径10.8cmに復元でき、器高17.8cmである。575は大甕の破片である。576は土師器の皿で底部から緩やかに口縁が立ち上がる。口径14.0cmに復元できる。577は瓦器椀で低い高台がつき屈曲部のない体部が立ち上がる。

578はSX302出土で、縄目叩きの面戸瓦である。579は5N区整地層から出土した格子目叩きの丸瓦である。

4. エリアⅣ (図109・110)

1) 住居跡

12H区 SB413 (図111)

エリアⅣ北部12H区の西部で検出された竪穴住居跡である。東にはSB414が位置する。遺構の西側および南側は攪乱によって消失する。住居跡の主軸は略東－西方向をとる。北側壁は3.2m 残存し、東側壁は2.9m 残る。

住居跡東壁にはカマドが検出されており、床面上には支柱穴と考えられる4基のピットが検出されている (SP1-SP4)。カマドは幅80cm、最大長1.32m が遺存する。支柱穴間は主軸方向で1.6m、主軸と直行する方向で東側の SP1－SP2間が1.80m、西側の SP3－SP4間で1.6m をはかる。柱穴はいずれも略円形である。柱穴の床面からの深さは SP1が40cm、SP2が3 cm、SP 3が7 cm、SP4が23.5cmである。

床面は遺構検出面から最大で10cmの深さで、床面はほぼ水平である。

【遺物】 (図112)

580は小形の甕であろう。内外面ともハケメの後ナデを施す。口径は11.5cm、胴部最大径11.4cmに復元でき、器高は7.3cmである。

12H区 SB414 (図113)

12H区の中央部で検出された竪穴住居跡である。西にはSB413が位置する。遺構の北側は攪乱によって遺存せず、西側の壁は確認されていない。住居跡の主軸は略東－西方向をとる。東壁は5.32mをはかり、北側は1.4m ほどが遺存する。

住居跡東壁にはカマドが検出されており、床面上にはピットが多数検出されているが、柱穴と考えられるのはSP1の1基である。カマドは幅1.00m、最大長1.24m、床面から10cmほどが遺存する。カマド中央部は床面を10cmほど掘りこむ。柱穴と推定される SP1は径55cmほどの略円形で、床面からの深さ40cmである。

床面は遺構検出面から最大で32cmの深さで、床面は南壁際の長楕円形の土坑部分で浅くくぼむが、それ以外はほぼ水平である。

【遺物】 (図114)

581から584は土師器の椀で、584のみカマド内から出土している。581はSB413から出土した土器片と接合している。585はカマド内から出土した土師器の小形甕である。口縁部外面はナデ、胴部外面はハケメで、内面はナデ仕上げである。内面には板状の工具痕が残る。586は土師器の甕で、口径18.8cm、器高30.2cmである。カマド内出土である。587と588はいずれもカマド内出土の甕で同一個体の可能性が高い。胴部外面はケズリの後ナデ、内面は上部がハケメ、下部がケズリの後ナデである。胴部最大径は32.0cmに復元できる。

13N区 SB701 (図115)

エリアⅣ南部13N区の中央部 (図110) で検出された竪穴住居跡である。遺構の東側にはSB702やSB703が、南側にはSB705が位置する。遺構の南側および東側は消失する。住居跡の主軸は略東－西方向をとる。西壁は3.36m 残存し、北壁は3.1m ほどが検出されている。

住居跡の西壁にはカマドが検出されており、床面上には支柱穴と考えられる2基のピットが検出さ



図109 エリアIV北部 遺構配置図 (S=1/750)

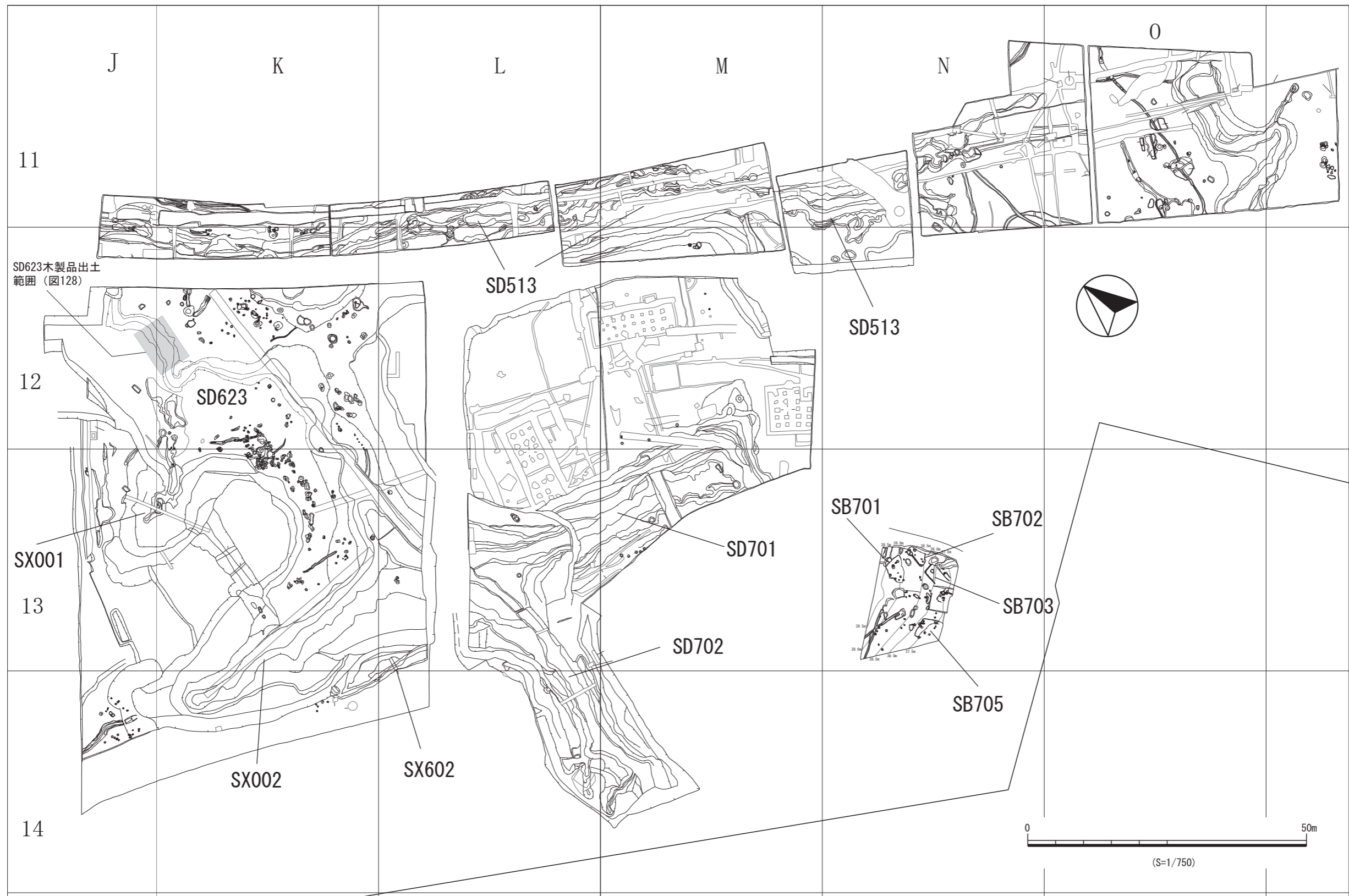


図110 エリアIV南部 遺構配置図 (S=1/750)

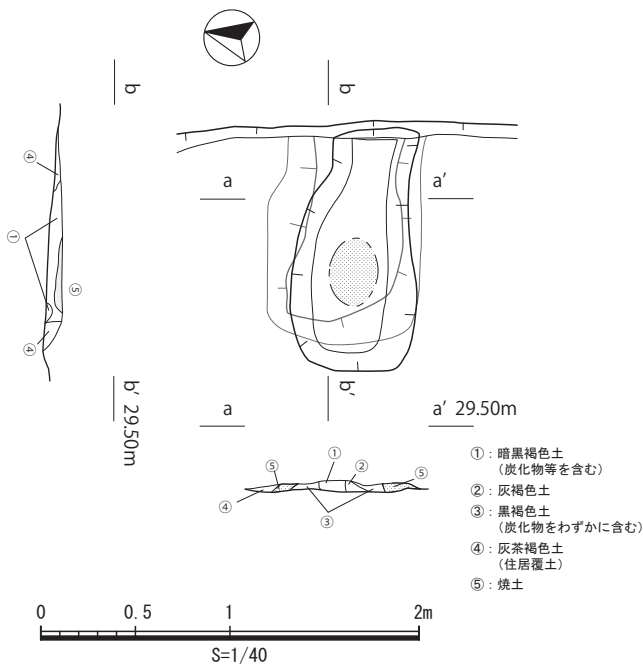
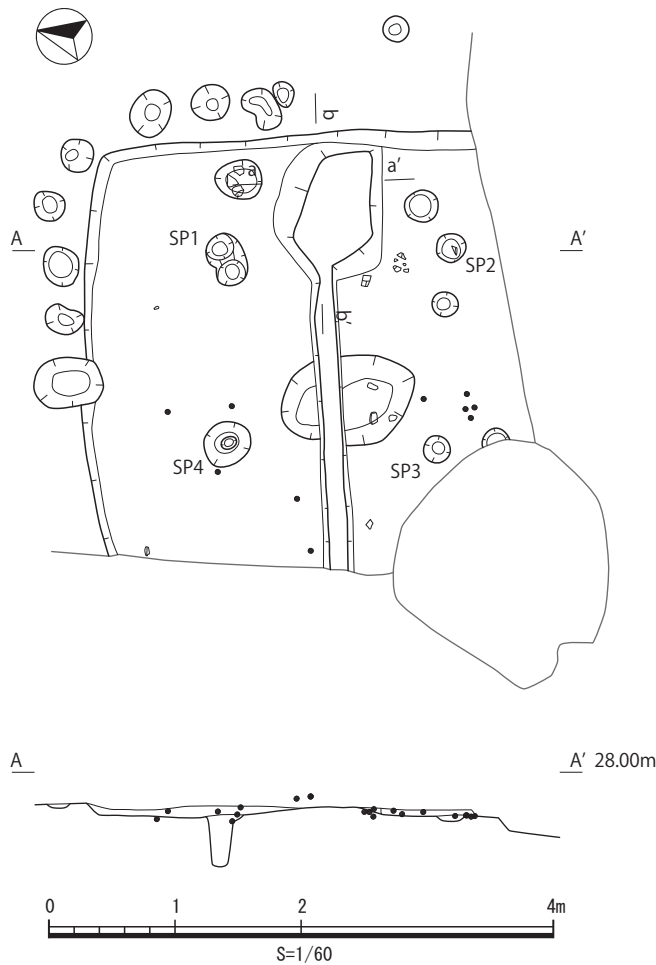


図111 12H区 SB413

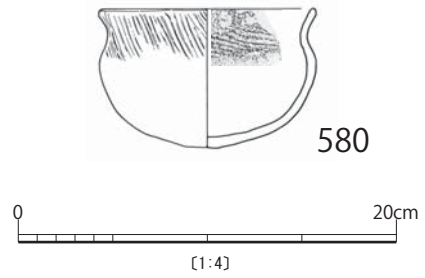


図112 SB413出土遺物 (S=1/4)

れている (SP1-SP2)。カマドは幅94cm、煙道部も含めると最大長78cmが遺存し、住居の西壁を56cm西側に掘りこみ煙道を作っている。支柱穴間は2.2mをはかる。柱穴は、SP1が径約40cmの略円形、SP2は径48cmの略円形である。柱穴の床面からの深さはSP1が20cm、SP2が28cmである。

床面は遺構検出面から最大で48cmの深さで、床面はほぼ水平である。

【遺物】 (図116)

589から595は須恵器である。589は杯Hの蓋で天井部は丸みを帯びる。590は杯Hの身で口縁部はやや厚みがある。591と592も杯Hの身で、591は受け部径が12.0cmに復元できる。592は口径に対して器高が低い。593は椀で底部内面の凹凸が顕著である。口径は9.5cmに復元でき、器高は5.3cmである。594は長脚の有蓋高杯で、脚部外面にカキメを施す。口径は14.1cm、受け部径16.2cm、残存高は19.3cmである。595は甕で、焼成がややあまい。胴部外面は擬格子タタキで、内面に当て具痕がみられる。口径は22.0cmである。596は土師器の小甕である。外面は風化による荒れがひどく調整は不明だが、

II 調査の結果

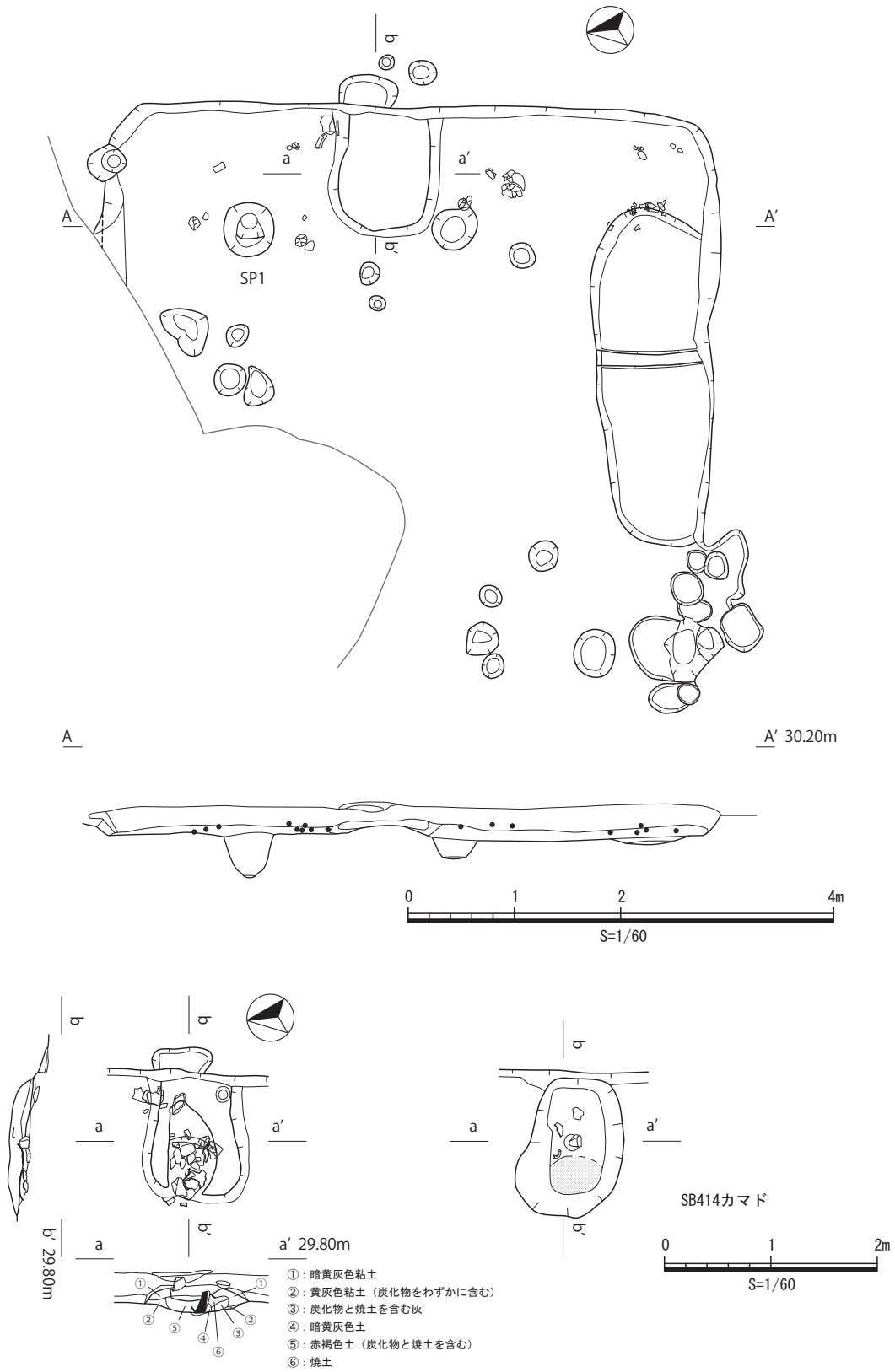


図113 12H区 SB414

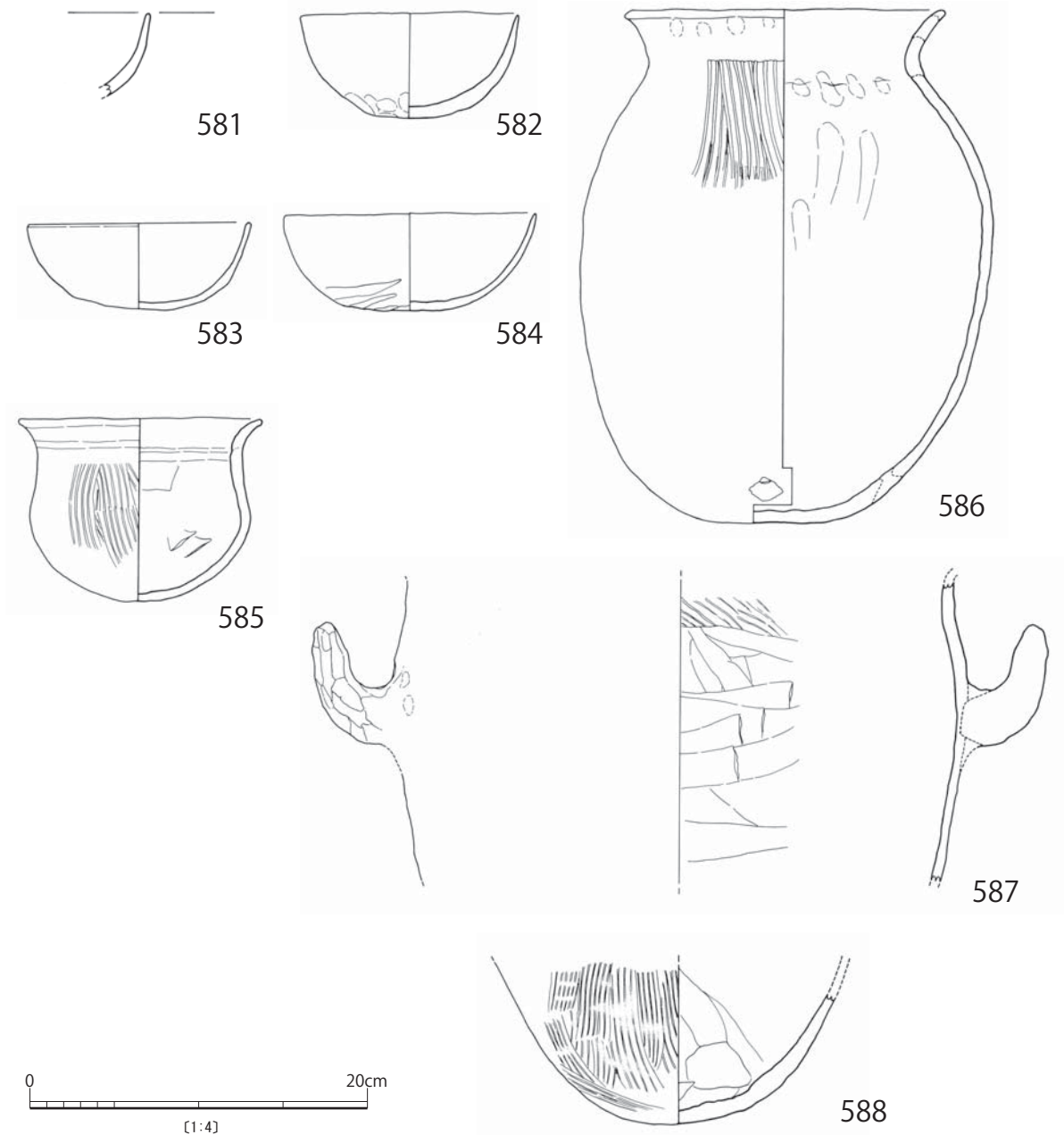


図114 SB414出土遺物 (S=1/4)

内面はケズリである。

13N区 SB702 (図117)

13N区の中央部で検出された竪穴住居跡である。調査区の東壁にかかって検出されており、遺構の東側は未調査である。住居跡の西壁は2.68mで、北壁は80cm、南壁は84cmのみ検出されている。住居跡南西隅近くには径28cm、深さ27.5cmのP1が位置しており、住居跡北壁側の調査区境界際には48×56cm、深さ23cmのP2が位置している。これらのピットが住居跡の柱穴の可能性はあるが、大部分が未調査のため不明である。

II 調査の結果

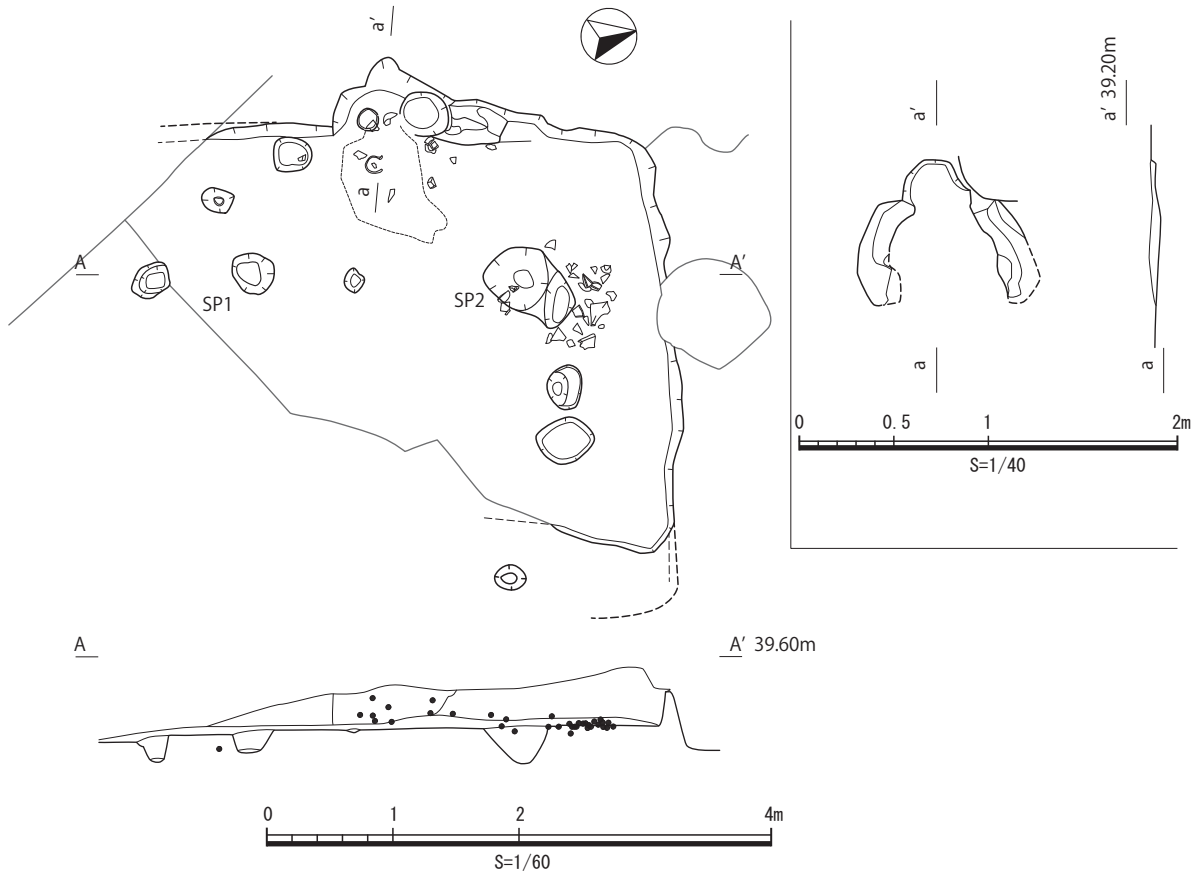


図115 13N区 SB701

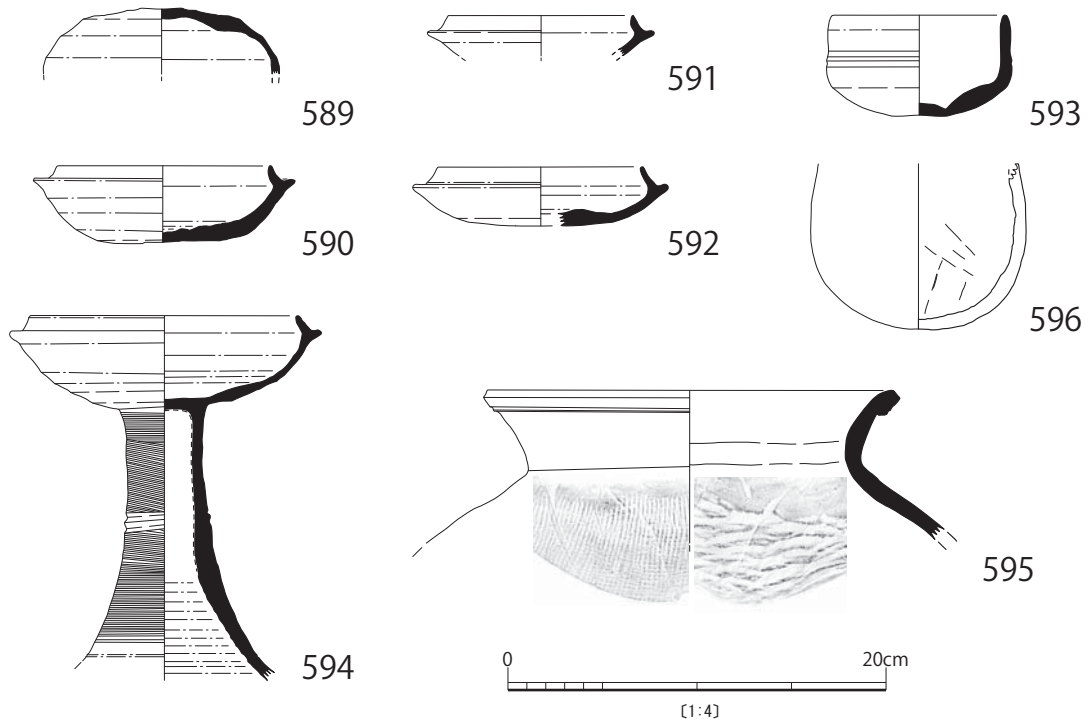


図116 SB701出土遺物 (S=1/4)

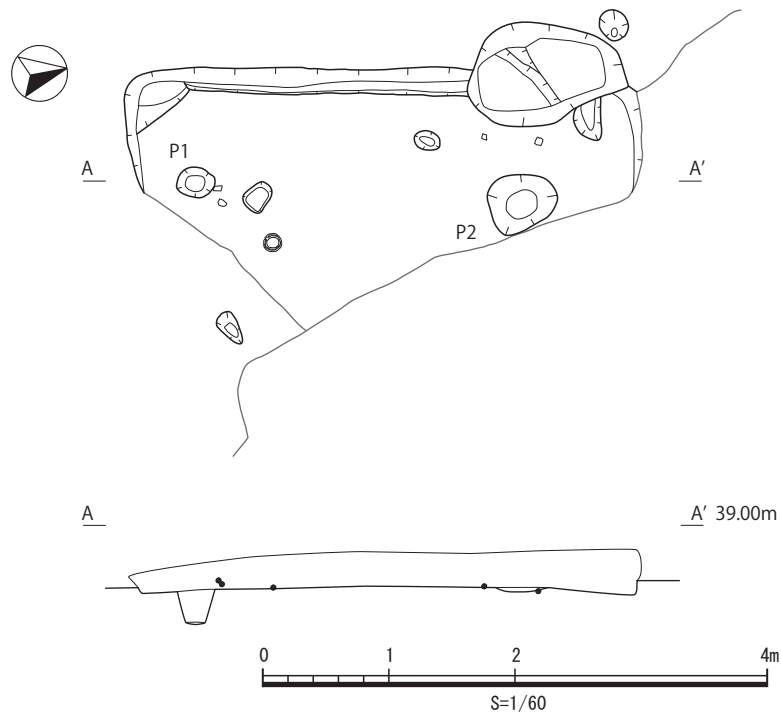


図117 13N区 SB702

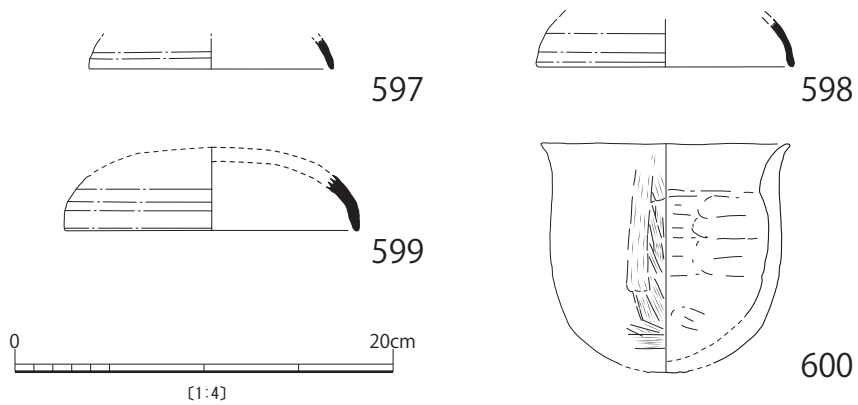


図118 SB702出土遺物 (S=1/4)

床面は遺構検出面から最大で36cmの深さで、床面はほぼ水平である。

【遺物】(図118)

597・598・599は須恵器で杯Hの蓋である。いずれも口縁部の小片である。600は土師器の小形甕で、胴部の上端部で器壁がやや肥厚し、弱く外反する口縁にいたる。外面はハケメ、内面はケズリである。口径13.0cmに復元でき、器高は12.0cmである。

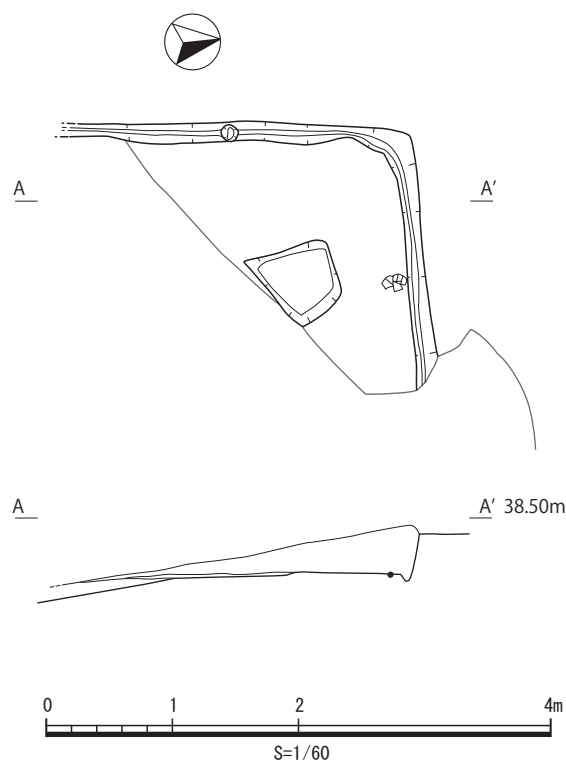


図119 13N区 SB703

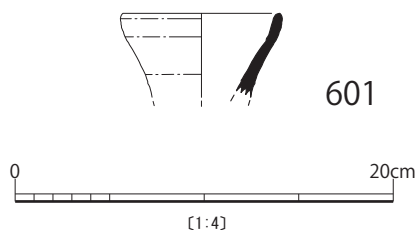


図120 SB703出土遺物 (S=1/4)

13N区 SB703 (図119)

13N区で検出された竪穴住居跡である。住居跡の北西隅のみが残存しており、他の部分は消失している。住居跡の北壁は1.8mが残存しており、西壁は2.7mが残る。北壁および西壁沿いに幅16cm、床面からの深さ5cmの溝がめぐる。残存部分中央部には台形の浅い土坑が検出されているが、住居跡との関係は不明である。

床面は遺構検出面から最大で40cmの深さで、ほぼ水平である。

【遺物】(図120)

601は平瓶の口縁部である。口径は9.5cmに復元でき、残存高4.4cmである。内外面ナデ仕上げである。

13N区 SB705 (図121)

13N区の西部で検出された竪穴住居跡である。調査区の南壁にかかって検出されており、遺構の南側は未調査である。また、西側壁は確認されておらず不明である。住居跡の主軸はカマドの位置から略南—北方向をとるものと推定できる。北壁は3.32mである。東壁は3.6m、西壁は1.2mほどが検出されている。そのため平面形は南北の主軸方向にやや長い長方形のプランを呈するものと想定される。床面には複数のピットが検出されているものの、支柱穴等については不明である。

北壁の中央やや東寄りにカマドが検出されている。最大幅1.1m、最大長66cmが残る。住居跡北壁

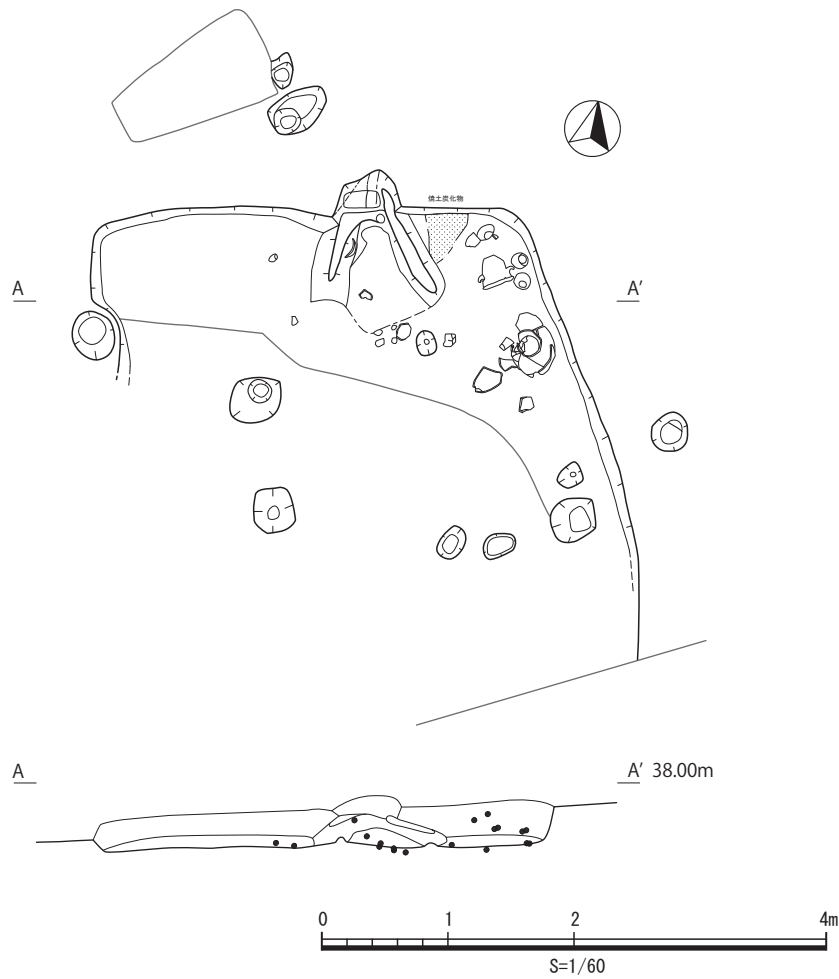


図121 13N区 SB705

を28cmほど北に掘りこみ煙道を作る。床面は遺構検出面から25.5cmの深さで、ほぼ水平であるが、北壁側が全体的にやや高い。

【遺物】(図122)

602は土師器で、丸底の小形甕である。内面調整は縦方向のケズリである。603から608は須恵器である。603から605は杯Hの蓋である。603と604は平坦な天井部からやや屈曲して体部がつく。いずれも天井部外面にヘラ記号がみられる。606は体部から口縁部に向かって緩やかに開く器形を呈する椀である。口縁部下外面にカキメが施される。口径は16.0cmに復元できる。607は甑であるが、焼け歪みのため器形が大きくゆがむ。口縁部下位の外面にカキメを施し、胴部外面把手より上部はハケの後ナデであり、胴部下半部はタタキの後ナデである。608は甕で、頸の部分で強くすぼまる。焼成はあまく器面の風化が激しい。頸部外面下端部に工具痕が残り、頸部中位にはヘラ記号がみられる。

2) 推定灰原出土遺物

11I区 SX402 (図123)

11I区中央部で略南北方向に検出された。南北方向で約20.8m、東西方向で最大幅約6mの範囲に

II 調査の結果

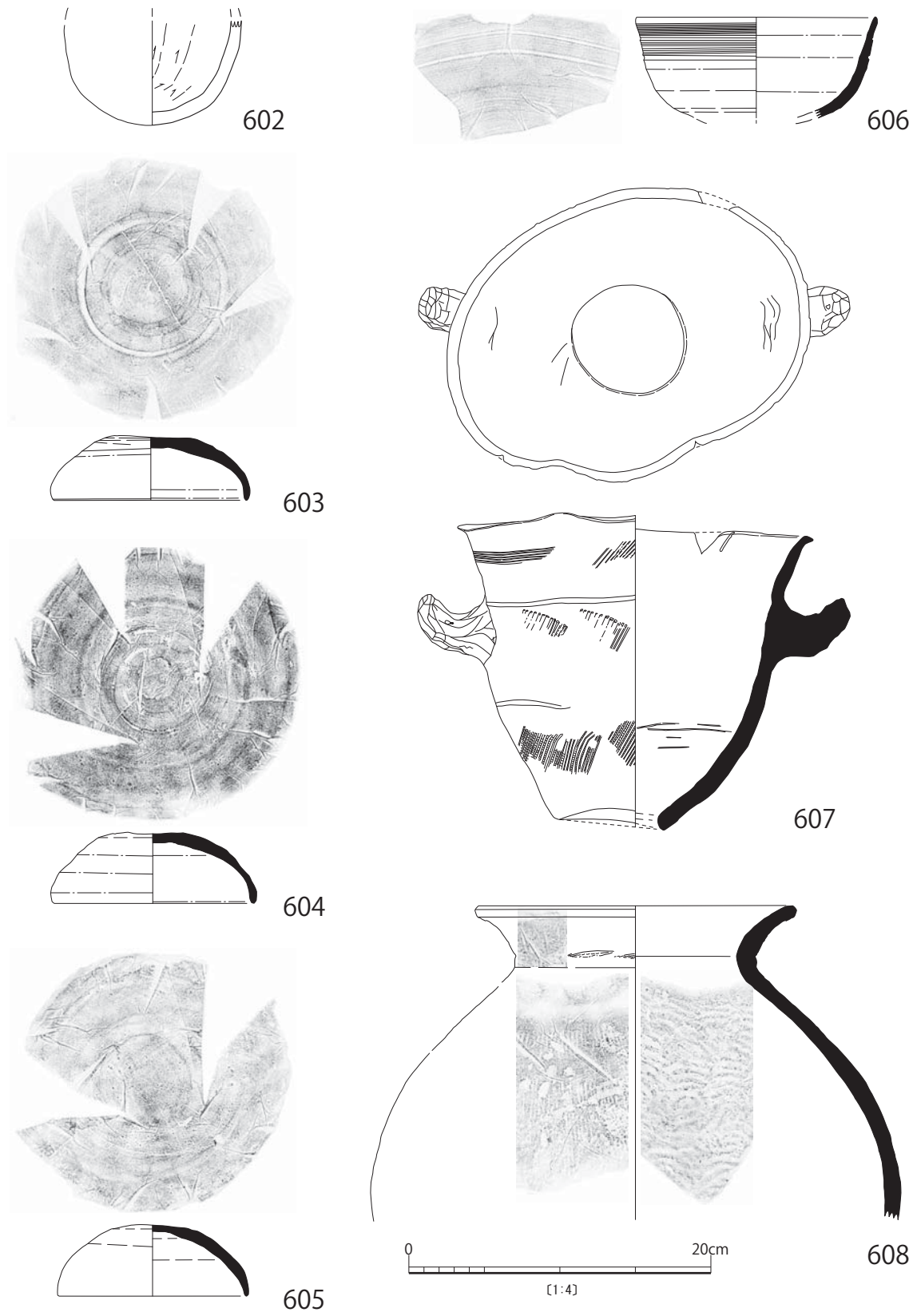


図122 SB705出土遺物 (S=1/4)

遺物が広がっている。

【遺物】(図124-127)

609から637は須恵器である。609と610は杯 H の蓋である。609は器高が3.5cmと低く復元口径は14.8cmでやや扁平な器形である。体部と天井部の境は浅い凹線状に痕跡的に残る。610は口径が11.6cmとやや小さくドーム状の器形を呈する。611は杯 H の蓋と身が熔着した資料である。杯身の底部内面に当て具痕が残る。杯蓋の口径は14.5cmである。612から616は杯 H の身である。612は底部がやや大きく深い器形である。口縁端部はやや肥厚する。614と615は底部から屈曲して体部がつき、やや厚みのある口縁部が直立する。613と616は体部と底部が一体化しており、口縁部は内傾する。616の底部外面にはヘラ記号がみられる。617は甕の口縁部内面に杯 H の蓋と身が合わせ口の状態で熔着したものである。甕の口径は16.3cm、杯蓋の口径は13.0cmに復元可能である。618は杯蓋で口縁端部を折り返す。619は扁平な宝珠形つまみがつく蓋で口縁端部がわずかに折れる。外面にヘラ記号がみられる。620も扁平な宝珠形つまみがつく蓋だが、焼け歪みが顕著である。621は扁平なつまみがつく杯蓋である。622から625は杯 B の身である。622と623は高台がやや高く、外方に向かって付く。624と625は低い高台が底部端からやや離れて付く。626から628は蓋で、626は口径が8.6cmと小さく中央のくぼむ扁平なつまみがつく。短頸壺の蓋であろう。627と628は外面にカキメがみられ、628には高さのある

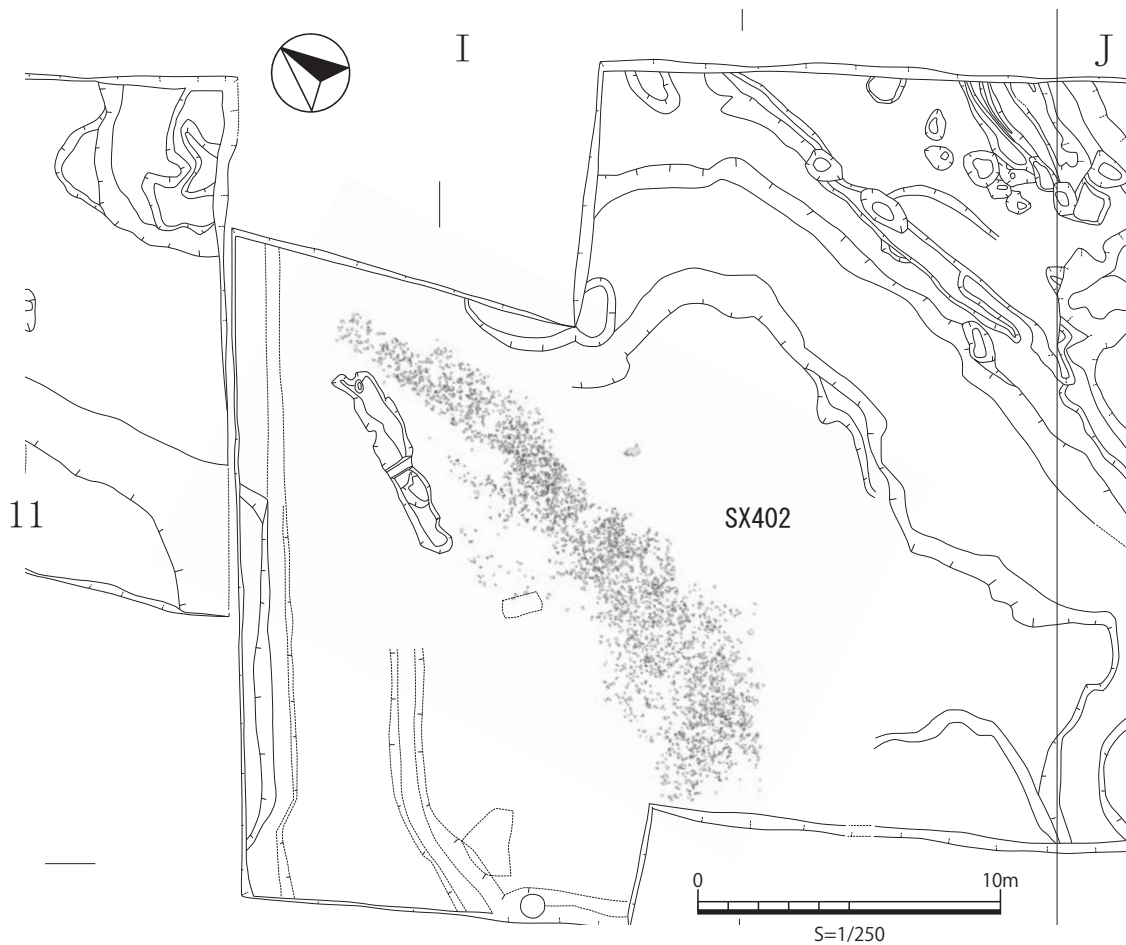


図123 111区 SX402

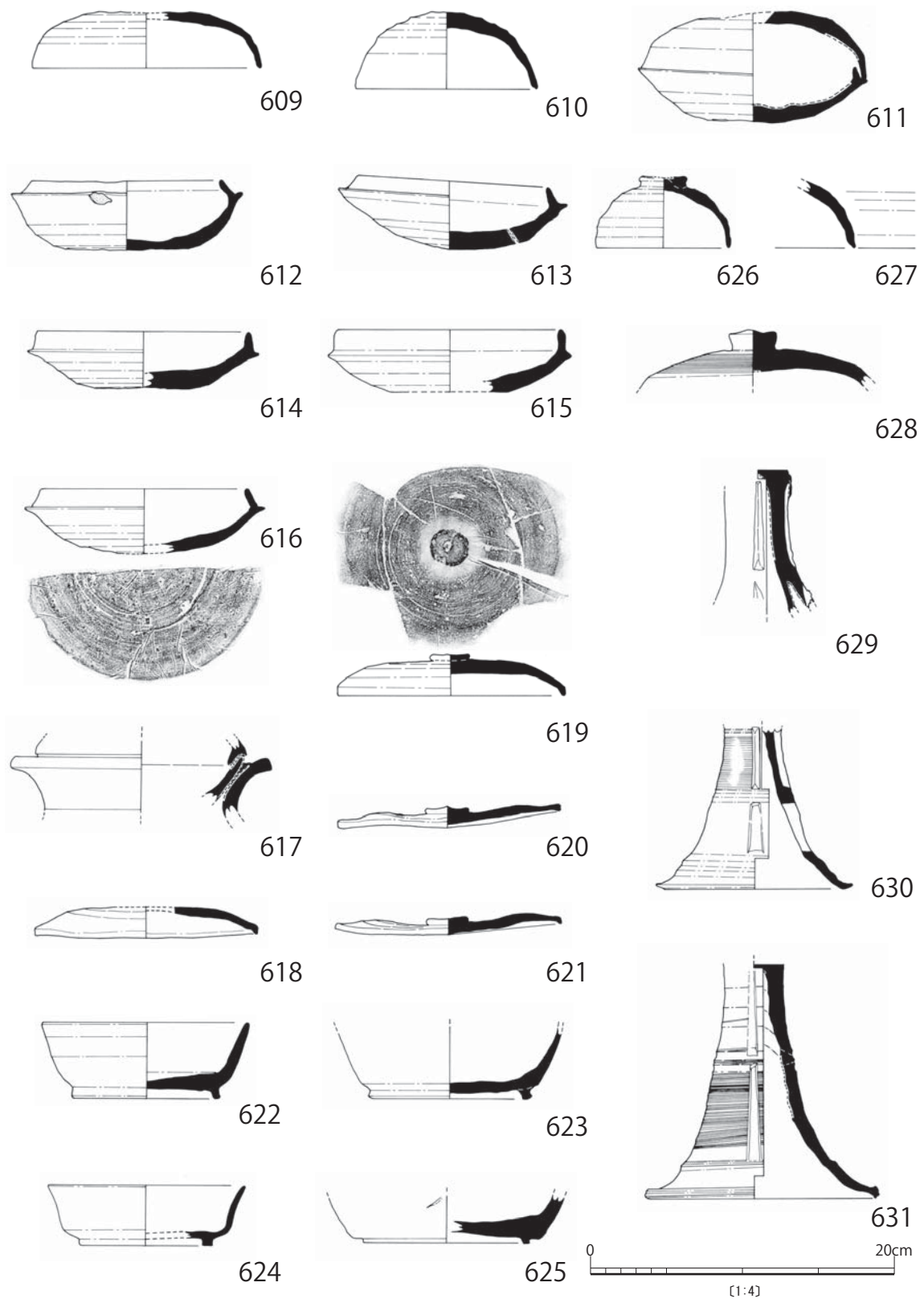


図124 SX402出土遺物（1）（S=1/4）

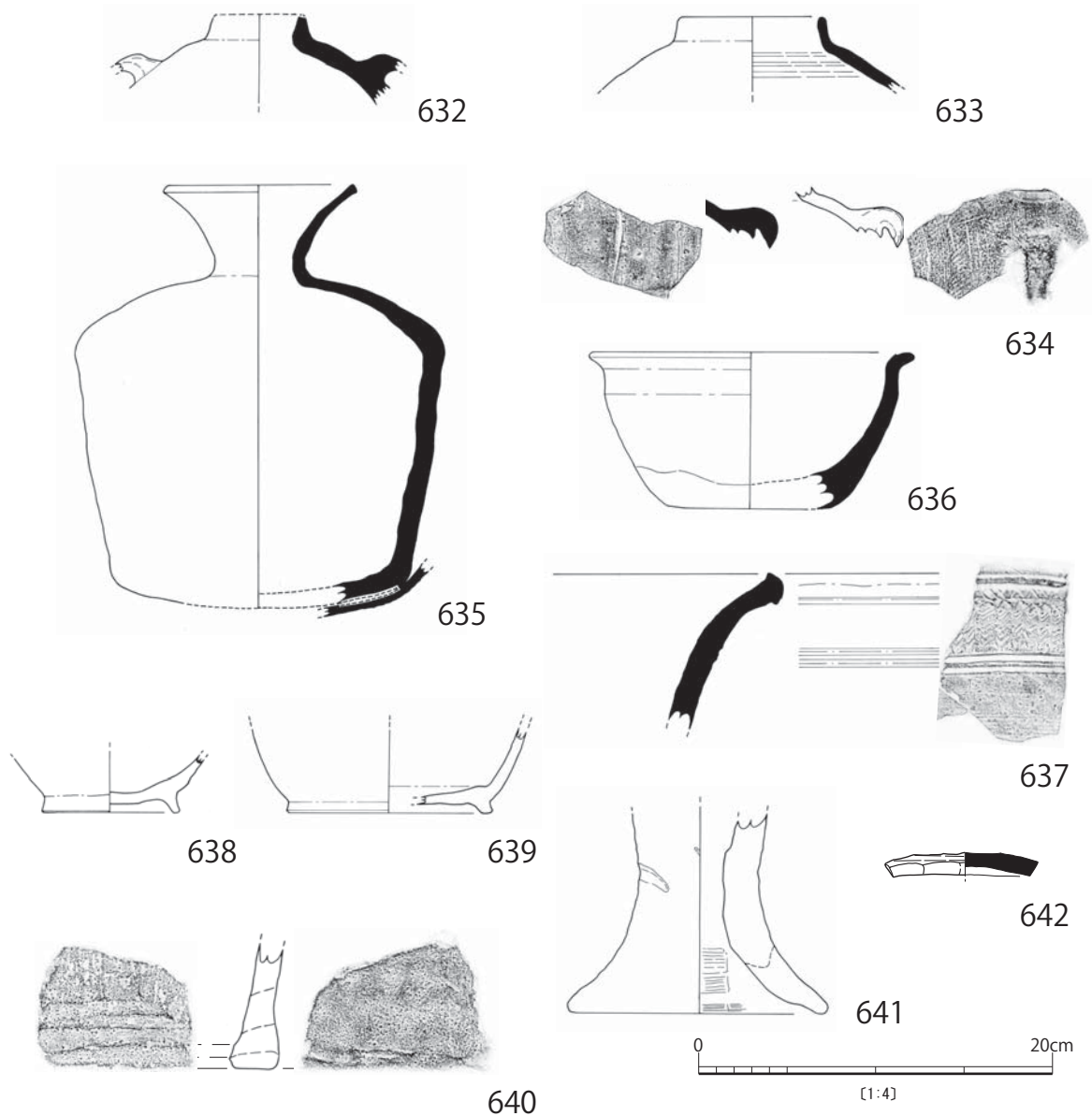


図125 SX402出土遺物（2）（S=1/4）

しっかりした宝珠形つまみがつく。有蓋高杯の蓋である。629から631は高杯の脚部でいずれも長脚である。629は焼け歪みが顕著で器壁が裂けている。貫通しない透かしが2段施されている。630は上下2段の透かしのうち上段は貫通せず、下段は貫通する。脚部中位にカキメが施される。631は貫通する2段の透かしがみられ、脚裾部に段がつく。

632は口縁部が短く立ち上がる提瓶で、633は短頸壺、634は胴部の小片で器種は不明であるが、632と同様に提瓶の可能性があろう。635は横瓶であるが、通常の横瓶に比べ胴部の張りが非常に弱く肩部で屈曲して直線的に底部にいたる。底部には甕の破片が熔着している。口径は10.7cm、胴部の最大幅は20.6cmに復元でき、器高は23.4cmほどである。636は鉢で、口縁部が強く外反する。637は甕の口縁部片で、口縁部と頸部に沈線文が施文され、その間に波状文が施される。

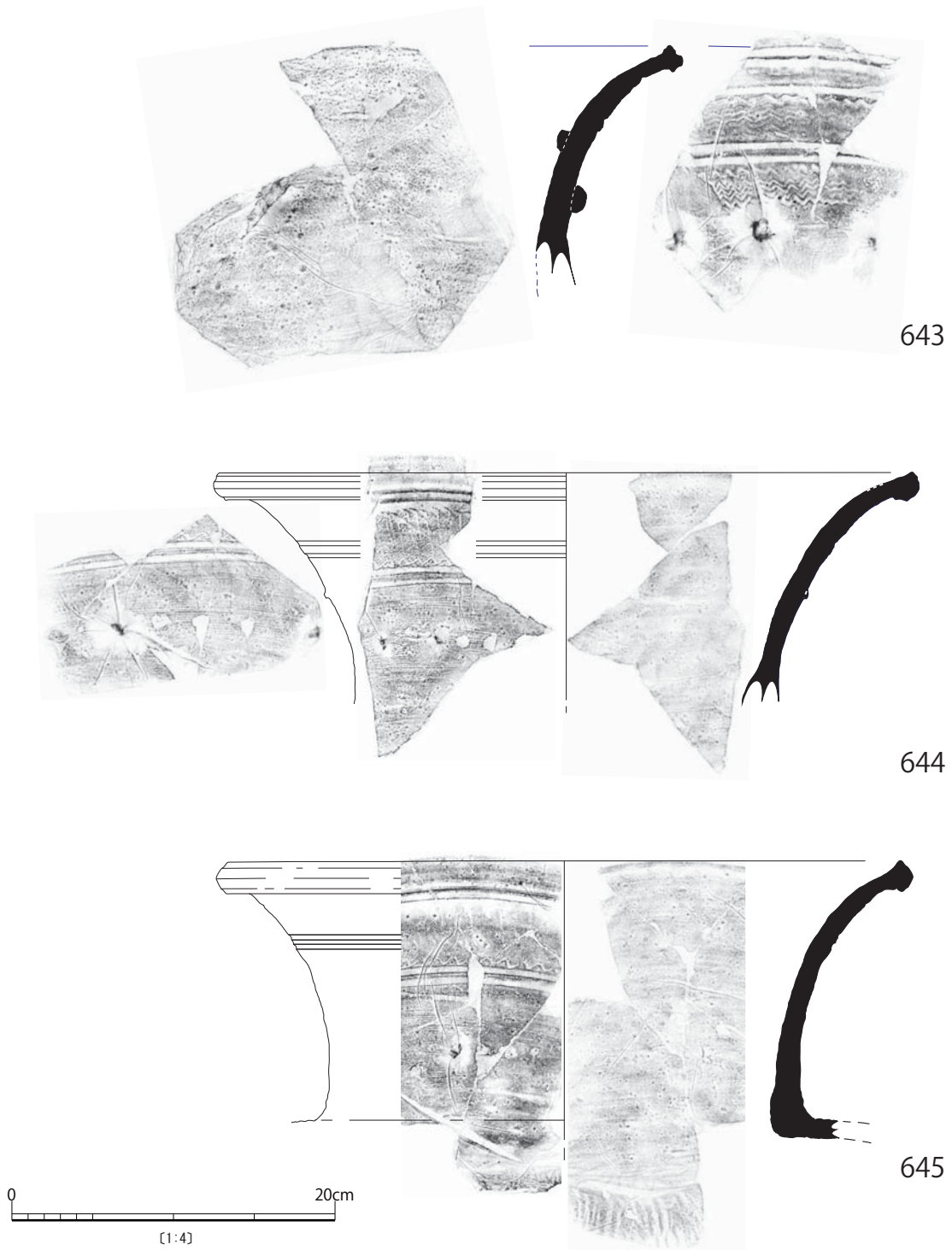


図126 SX402出土遺物 (3) (S=1/4)

638から641は土師器ないしは土師質の土製品である。638と639は高台のつく杯身で、いずれも高台が外に向いてつく。640は器種不明であるが脚部の破片である。外面は縦方向のケズリの後ナデ、内面は端部が横方向のケズリでその上は縦方向のケズリを施す。641は支脚である。内面の脚裾部はハケの後ナデである。642は須恵器片である。杯の天井部ないしは底部片であろう。端面が複数の切離

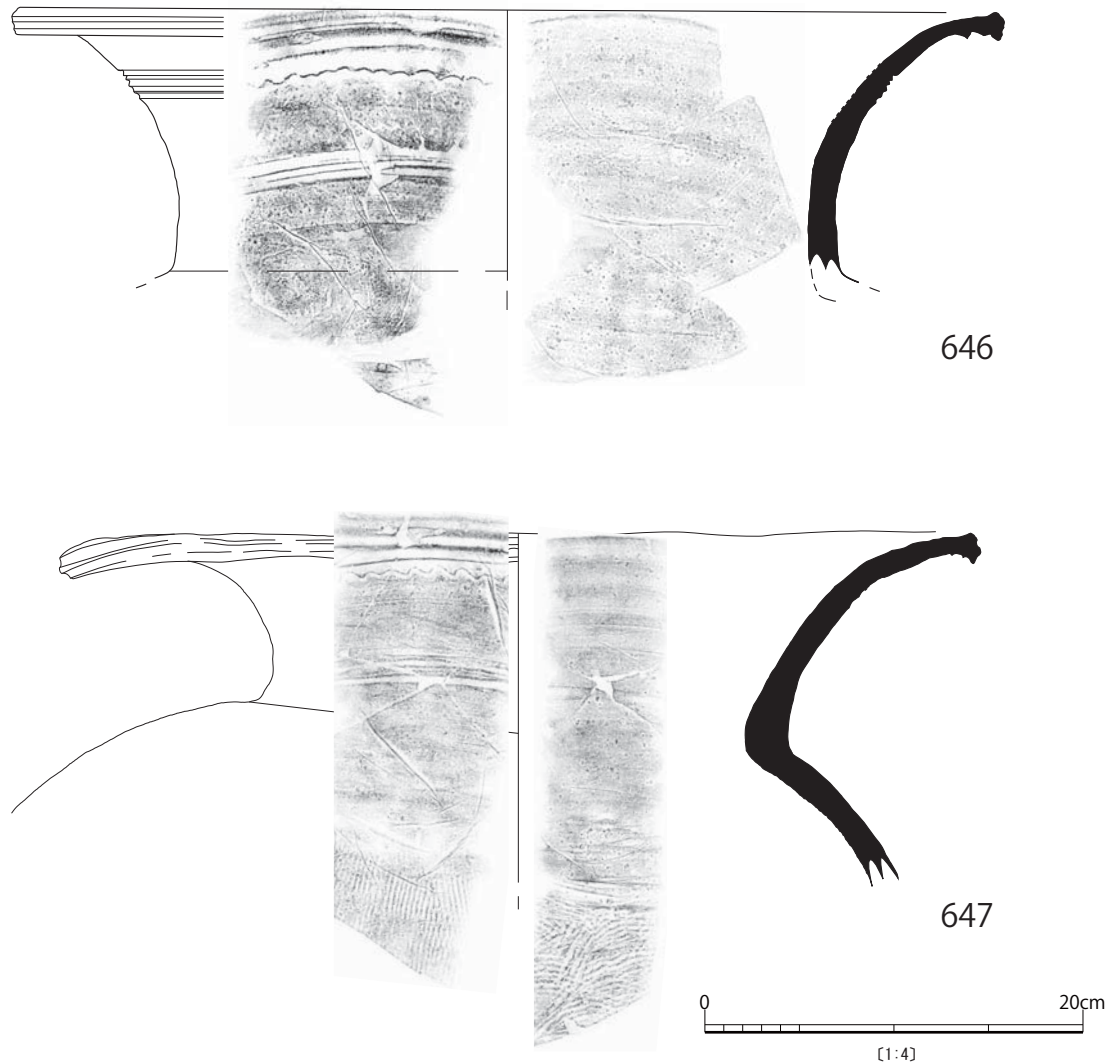


図127 SX402出土遺物 (4) (S=1/4)

による面をなしており、焼成前に他の部分から略円形に切り抜かれている。このことから、いわゆる切削物と推定される。

643から647は須恵器の大甕である。643は頸部が沈線によって区画され沈線間に粗い波状文が施される。波状文の下位には横走する円形の突起列がつく。内面には熔着土器片がみられる。644も沈線によって頸部が上下2段に区画され、上段には波状文が施文される。中段にはカキメが施されたのち、小円錐形の横走突起がつく。多くの突起は剥離している。645も上の2点と同様に沈線によって頸部が上下2段に区画されている。上段に粗い波状文、下段にカキメが施される。さらに下段にはカキメの後、円錐形の横走突起がつく。646は沈線による頸部の区画のうち上段の上部に粘土紐状の波状の小さな突出が形成される。口径は52.2cmに復元できる。647は口径48.5cmに復元できるが、焼け歪みにより口縁部と肩部が大きくゆがむ。頸部は沈線により2段に区画されており、カキメが施される。上段はカキメの後、口縁部直下に粗い波状文が一条施される。



図128 SD623木製品出土状況

3) 溝

SD623 (図110・128)

12・13-J・K・L区で検出された溝である。13L区から12J区へと略南北方向に途中蛇行しながら流れる。溝の北端部から北側は未調査区へと続くが、南側が13L区のどこまでか不明である。13L区調査区壁際から12J区調査区壁際までは直線距離で最大約69mである。この溝の北部分、12J区から12K区にまたがる範囲で、木製タタキ板や当て具などと須恵器がまとまって出土している。

【遺物】(図129)

648から664はSD623から出土した須恵器である。そのうち648から652は杯Hの蓋である。651と652は天井部と体部の境界が凹線状のくぼみにより痕跡的に残るが、その他は丸みを持った器形を呈する。653から659は杯Hの身である。653はやや深い器形で厚みのある口縁が内傾する。底部外面に

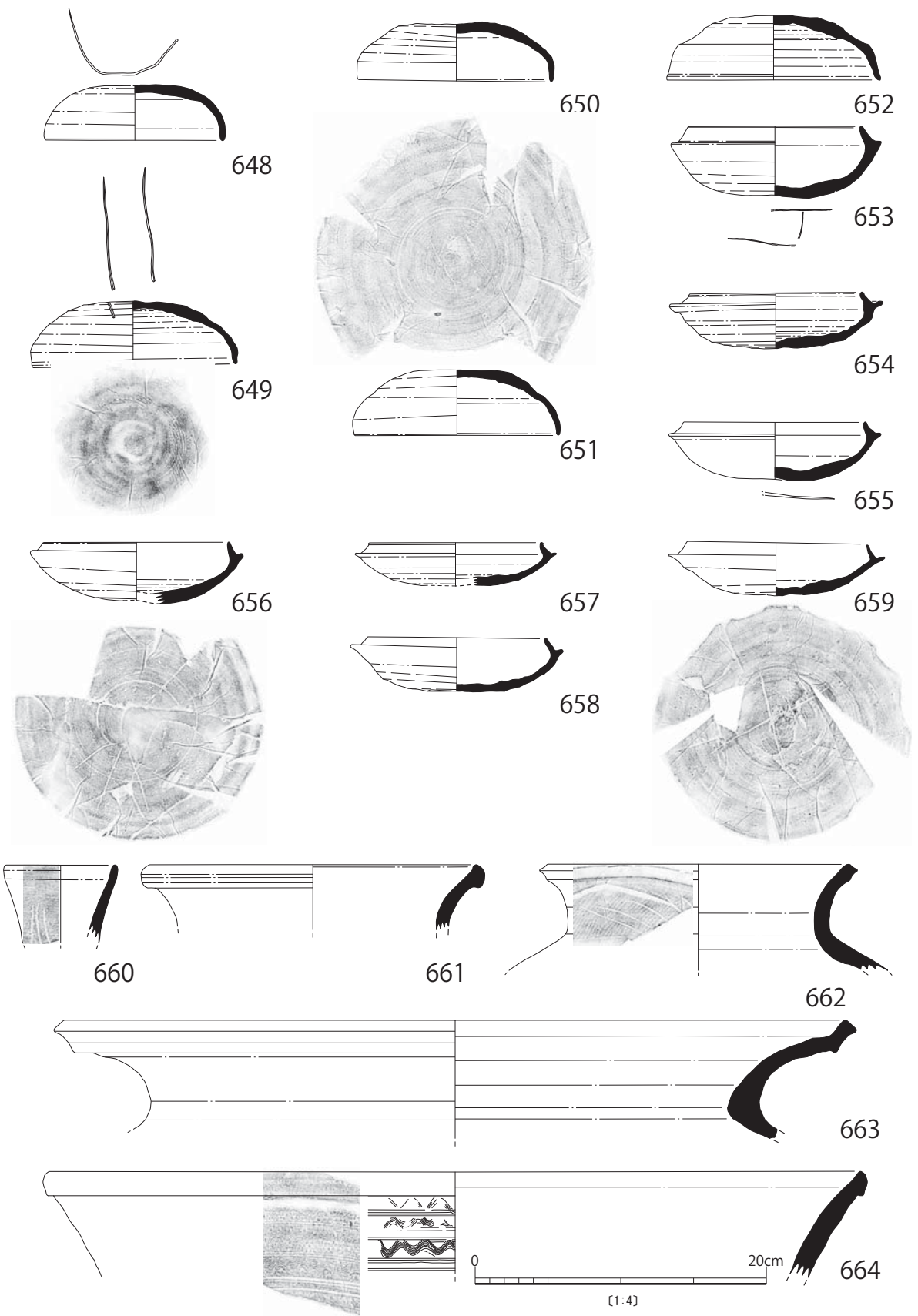


図129 SD623出土遺物 (S=1/4)

II 調査の結果

ヘラ記号がみられる。654から659はそれに比べ器高が低く浅い器形である。660は横瓶の口縁部で、外面にヘラ記号がみられる。661から664は甕である。662は頸部外面に連続斜線が施され、ヘラ記号がみられる。664は頸部に沈線文が施され、その間に細線の波状文が施文されている。663は口縁部が頸部から屈曲して外方に傾く、いわゆる二重口縁大甕と呼ばれる口縁部形態をしている。口径は53.7cmに復元できる。

この他にもSD623からは須恵器生産の際に使用されたと考えられる木製タタキ板や当て具などの木製工具が出土している。詳細な検討がIV-3で行われているのでそちらを参照されたい。

SD702 (図130)

SD702は13・14-L・M区で検出された溝で、略南北方向に流れ、北端部は東から流れるSD701や

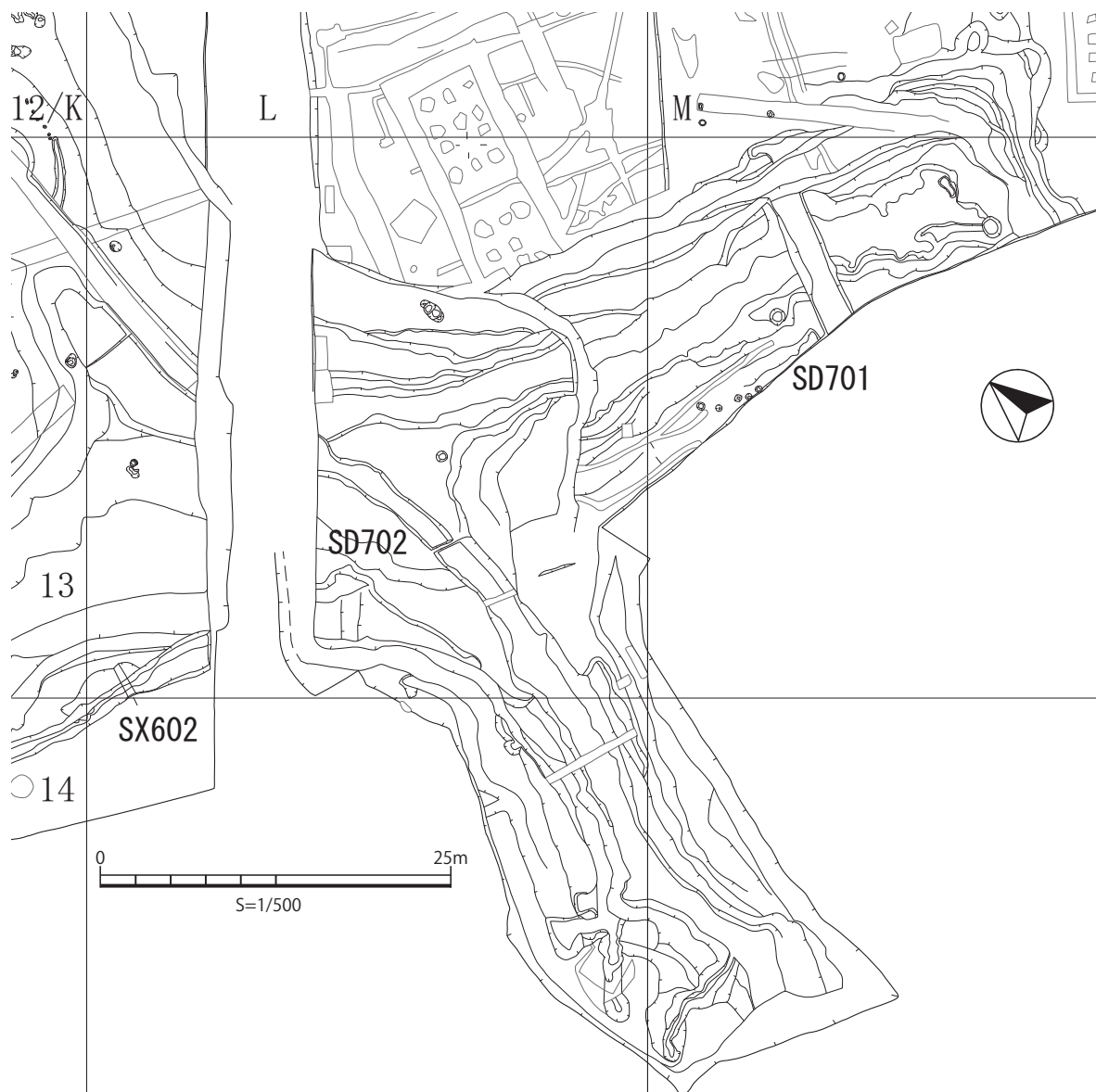


図130 SD701・SD702

北側に位置する SD623 とつながる。14M 区の溝南端部から 13L 区の調査区壁際までは約 50m をはかる。

【遺物】 (図131)

665 から 677 は SD702 から出土した須恵器で、678 は同溝出土の石器である。665 から 668 は杯 H の蓋で、いずれも天井部と体部が一体化し丸みを持った器形である。665 と 666 は天井部外面にヘラ記号がみられる。669 から 673 は杯 H の身である。いずれも底部と体部の境界は不明瞭で一体化している。669 は短く口縁が内傾し、671 はやや肥厚し内傾する口縁部がつく。672 と 673 は先細りの口縁が内傾する。669 と 671、673 の底部外面にはヘラ記号がみられる。674 は小形の短頸壺で、底部外面にヘラ記号

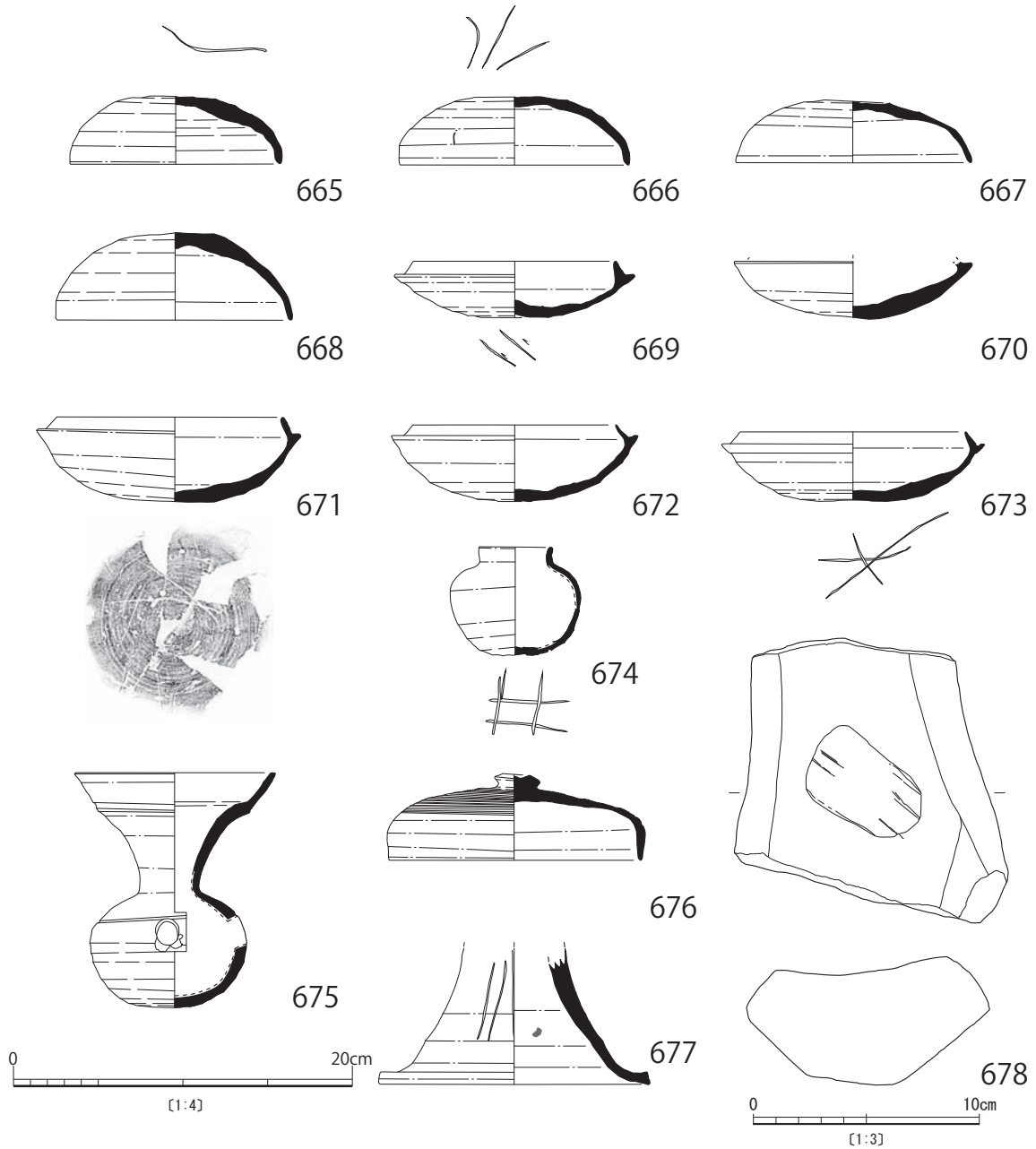


図131 SD702出土遺物 (S=1/4, 石器:S=1/3)

II 調査の結果

がみられる。675は口縁部が大きく開き、頸部との境に段がつく甗である。口径は11.8cm、胴部最大径は9.2cmで、口径が胴部最大径よりやや大きい。676は高杯の蓋で、中央がくぼむつまみがつく。天井部にはカキメが施される。677は高杯の脚部で、外面にヘラ記号がみられる。脚部内面に土器の熔着片がみられる。678は花崗岩製の砥石で中央部に砥面がみられる。残存長12.7cm、残存幅12.0cmである。

SD701 (図130)

12・13-L・M区で略東西方向に検出された溝である。南から流れるSD702と13L区中央部でつながるものと考えられる。13M区の溝東端から13L区のSD702とつながると想定される調査区西壁までの全長は約49mである。溝の東端部付近で幅は約9mをはかる。

【遺物】(図132-146)

679から708は土師器である。679は杯蓋でつまみはなく、口縁部の折り曲げもない。680から685は杯Aの身である。680・681・682は器面内面にススが付着している。またこれらのうち682には内面に墨痕もみられる。686から690は高台のつく皿で、686は口径が小さく8.9cmである。687・688・689はそれぞれ13.0cm、16.0cm、16.2cm、690は21.0cmに口径が復元でき、サイズに変異がみられる。691から693は高台のつく鉢である。691は胴部から口縁部が外湾してつき、端部が小さく折れる。692も口縁部が屈曲し、端部がわずかに上にはねあがる。693は胴部からそのまま開いて口縁部にいたる。これら3点はいずれも精良な胎土を用いており、外面は回転ナデと回転ヘラケズリ、内面もナデで丁寧に仕上げている。694は小形の皿、695は燈明皿であろう。696は器種不明であるが、残存部分の中心に鏝状の突起がめぐる。精良な胎土を用い、ナデで仕上げる。底径は7.8cm、残存高は6.0cmである。697と698は盤である。698は高台がつき、口径は27.5cmに復元できる。699はやや外に向く高台がつく底部である。700は高い高台がつく椀であろう。高台径は19.5cmに復元できる。701は三足土器の脚部である。残存高は12.8cmである。702は低い高台のつく小壺で、胴部から内側に屈曲して肩を持ち口縁部にいたる。703は高台のつく鉢で、胴部上端部で一端屈曲し、直線的な短い口縁がつく。内外面にススが付着している。704から708は甕で、口縁部が外反する形態を呈する。705は胴部外面上半をヨコナデ、下半を回転ヘラケズリで、内面はヨコナデで仕上げる。707は短い把手のつく甕である。708の外面はハケ、口縁部内面はハケ、胴部はヘラケズリで、口径31.6cmに復元できる。

709から776は須恵器である。709は杯Hの蓋で、天井部外面にヘラ記号がみられる。710と711は杯Hの身で710の底部外面にはヘラ記号がみられる。711は焼け歪みにより器形が大きくゆがむ。712から729は杯蓋である。712から716は小さなつまみがつき、器高がやや高く膨らみをもつ蓋である。口縁端部は712が痕跡的に小さく折り曲げているが、そのほかは体部からそのまま口縁にいたる。717から724はつまみの形態には各種あるが、器高がやや低く扁平な形の蓋である。717は扁平な宝珠形のつまみがつき、口縁端部を折り曲げる。718は扁平なつまみがつき、720はボタン状のつまみがつくが、双方とも口縁端部を短く折り曲げる。719と721・722などはボタン状の小さなつまみがつき口縁端部は折り曲げず、体部からそのまま口縁部にいたる。724はつまみが外れているが、天井部外面に板状圧痕が残る。この圧痕は剥離したつまみ貼付け部分にも連続しており、つまみを取り付ける前に板状の圧痕がついている。725はボタン状の小さなつまみのつく蓋であるが、ほぼふくらみのない水平な器形をしている。外面に板状圧痕がみられる。726から729はつまみのつかない杯蓋である。726以外は口縁端部を短く折り曲げる。

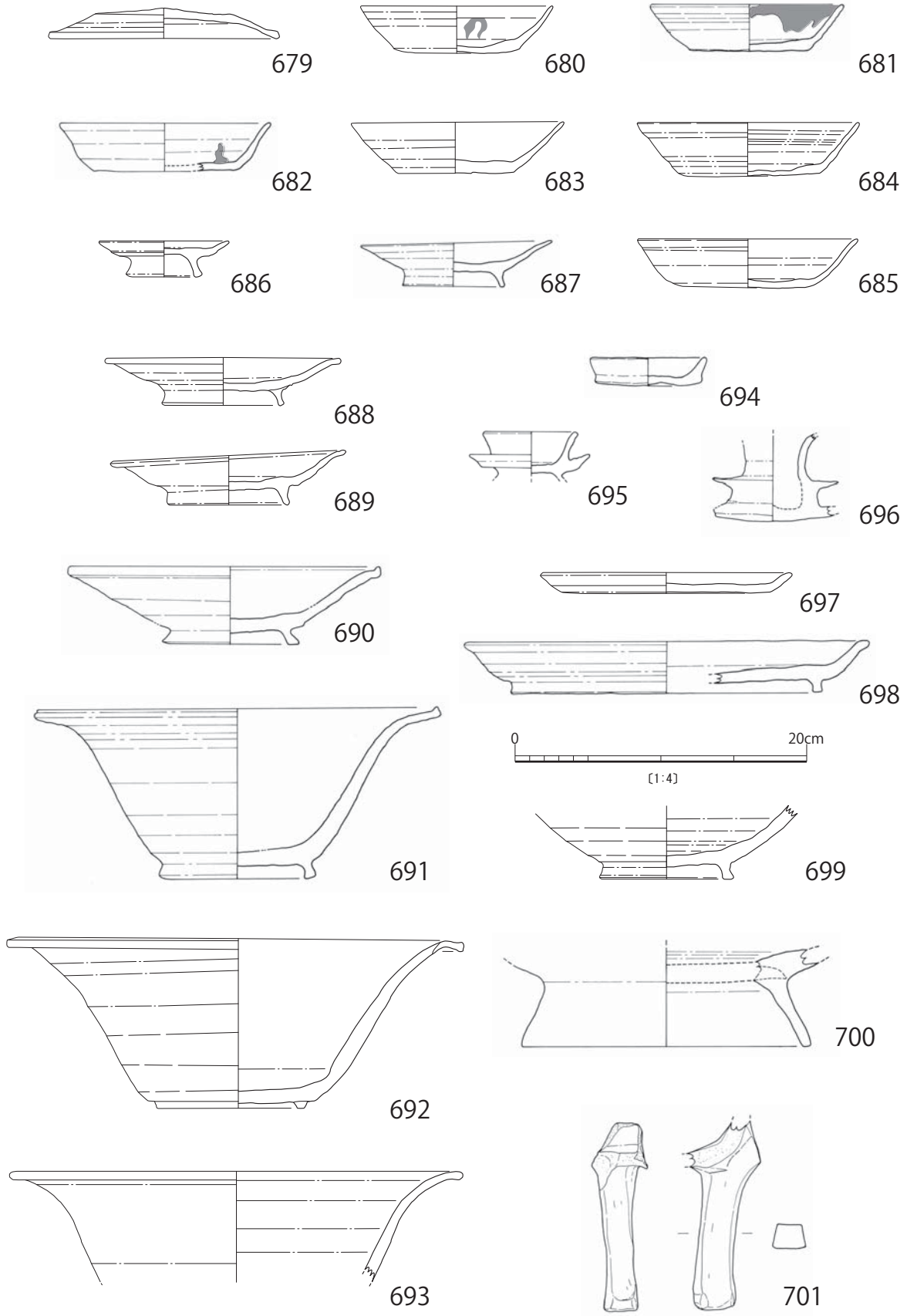


図132 SD701出土遺物(1) (S=1/4)

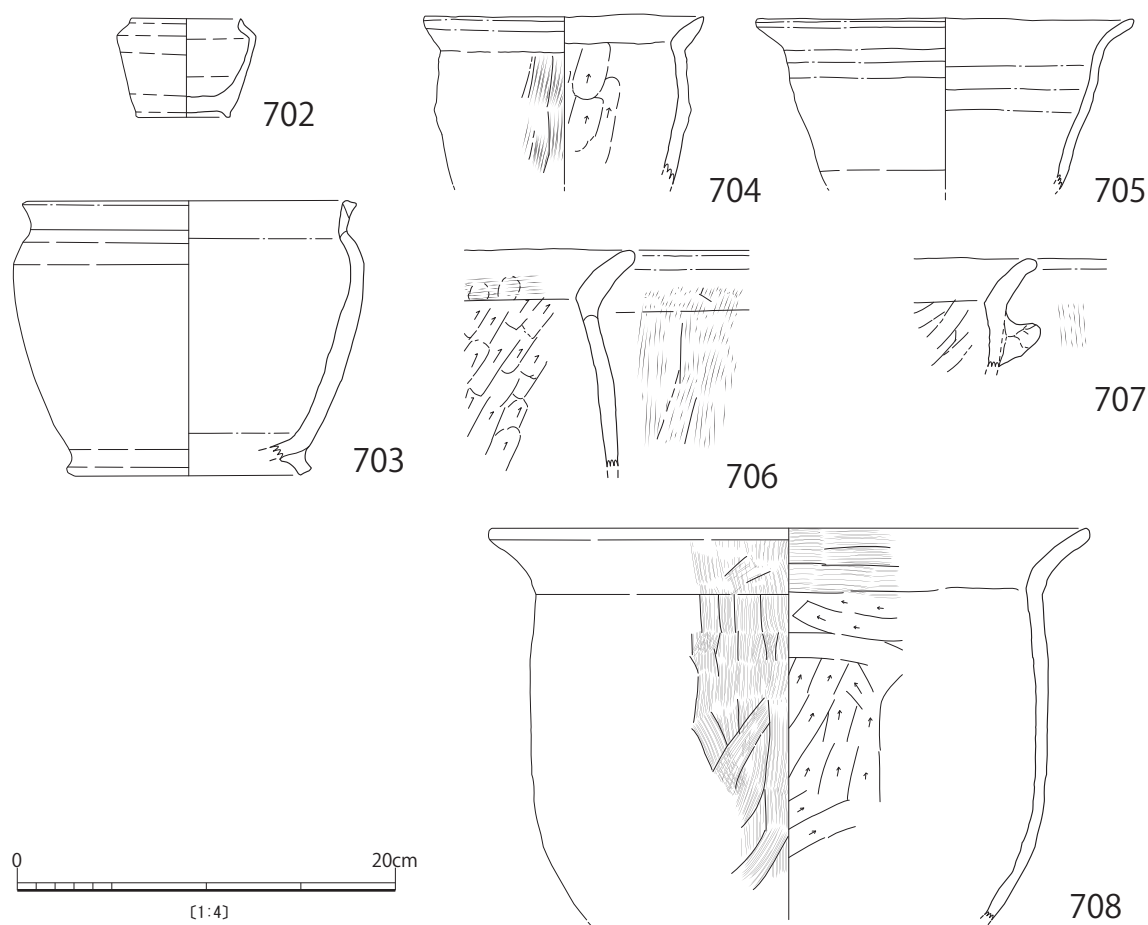


図133 SD701出土遺物(2) (S=1/4)

730から742は杯Bの身である。いずれも高台は低く外に向かってつくものが多く、730や734は底部端に高台がつくが、それ以外は底部端から少しはなれた内側に高台がつく。器形は体部から直線的に外に開く。734は高台に圧痕がつく。743と744は小形の椀であろう。743は口径7.5cmに復元でき、器高は2.9cmである。744は口径が10.6cmと小さい。内面にススが付着している。745から751は杯Aの身である。底部から直線的に口縁部へと開く器形が多い。748は底部に圧痕がつく。752から759は盤である。755から758は体部が大きく外に開く。また、756は口縁端部に沈線状の段がめぐる。759は高台付の盤で、口径は20.6cm、器高は3.7cmである。760と761は鉄鉢で、760は短く内傾する口縁部で底は丸い。761は口縁部がゆるく内湾し、尖底気味になる。762は底部から直線的に口縁部が開く形態の甑で、胴部中位に把手がつき口縁部が肥厚し、段をなす。底部には高台がつく。口径28.5cm、器高22.8cm、底径18.5cmである。

763は口径5.5cm、器高3.7cmの小形の壺である。764と765は燈明皿で、764は低い高台付の皿の上やや外に開く筒状の器がつく。765は体部から外反する口縁部をもつ把手付の形態である。766と767は低い脚部のつく高杯で、体部から短い口縁部が垂直にたつ形態を呈し、766は口縁端部が短く外に屈曲する。768は高台付の長頸壺で、胴部最大径部が屈曲し、頸部からそのままゆるやかに外反して

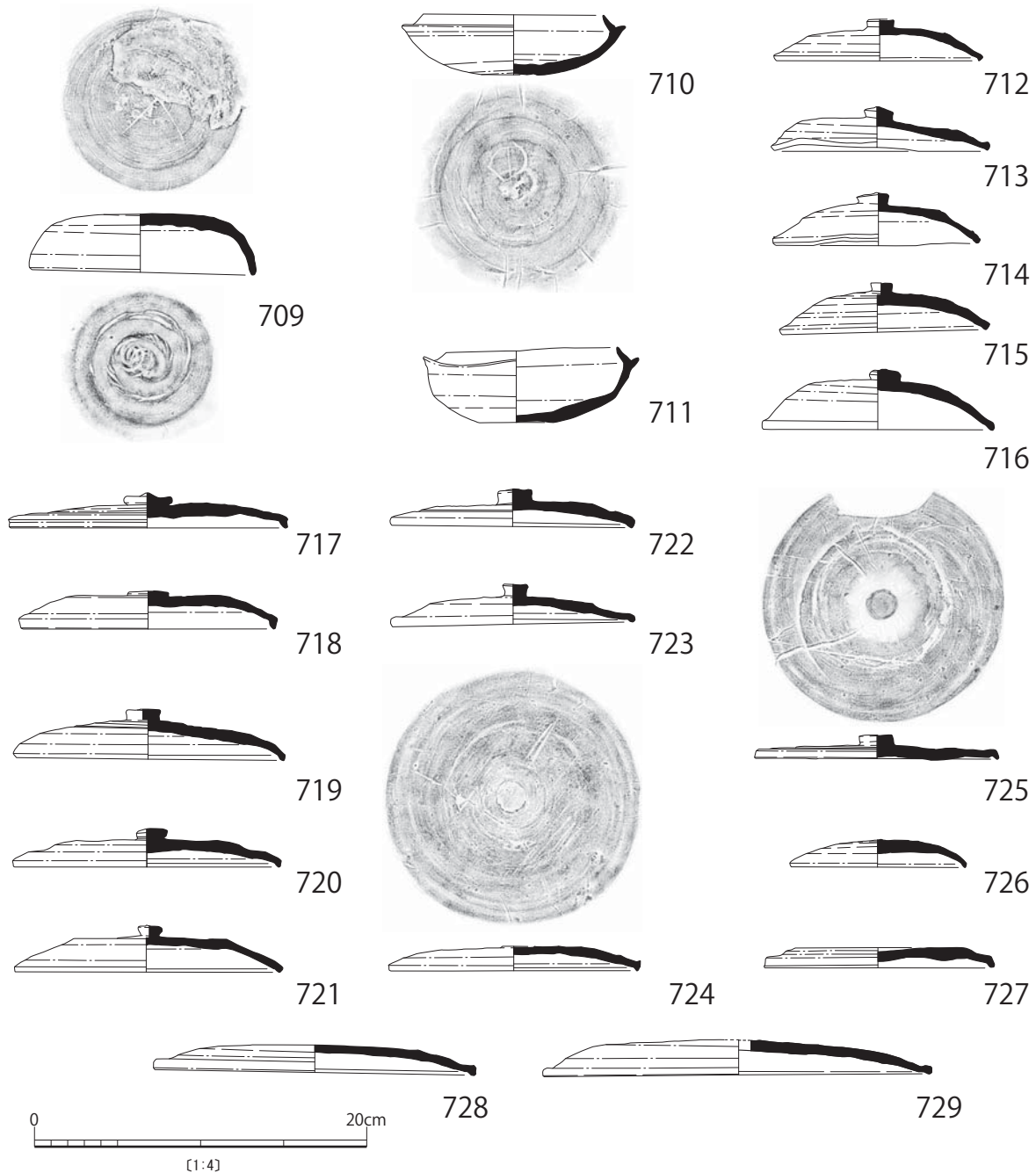


図134 SD701出土遺物 (3) (S=1/4)

口縁部にいたる。769も同様の形態の長頸壺であろう。770は高台付の短頸壺である。高台部分に土器片の熔着がみられる。771から774は瓶子である。771と772は小形の瓶子で、器高は771が10.1cm、772が9.3cmである。773は体部を指でなでて面を形成しており、横断面が隅丸の方形に近い形態をしている。775と776は甕である。775は口径20.9cmに復元でき、胴部外面にタタキ、内面に当て具痕がみられる。776は甕の胴部であるが、器壁が非常に薄く7mm程の厚さで、外面は平行タタキ、内面は当て具痕が残る。外面のタタキは非常に目が細かい。胴部最大径は43.6cmに復元できる。

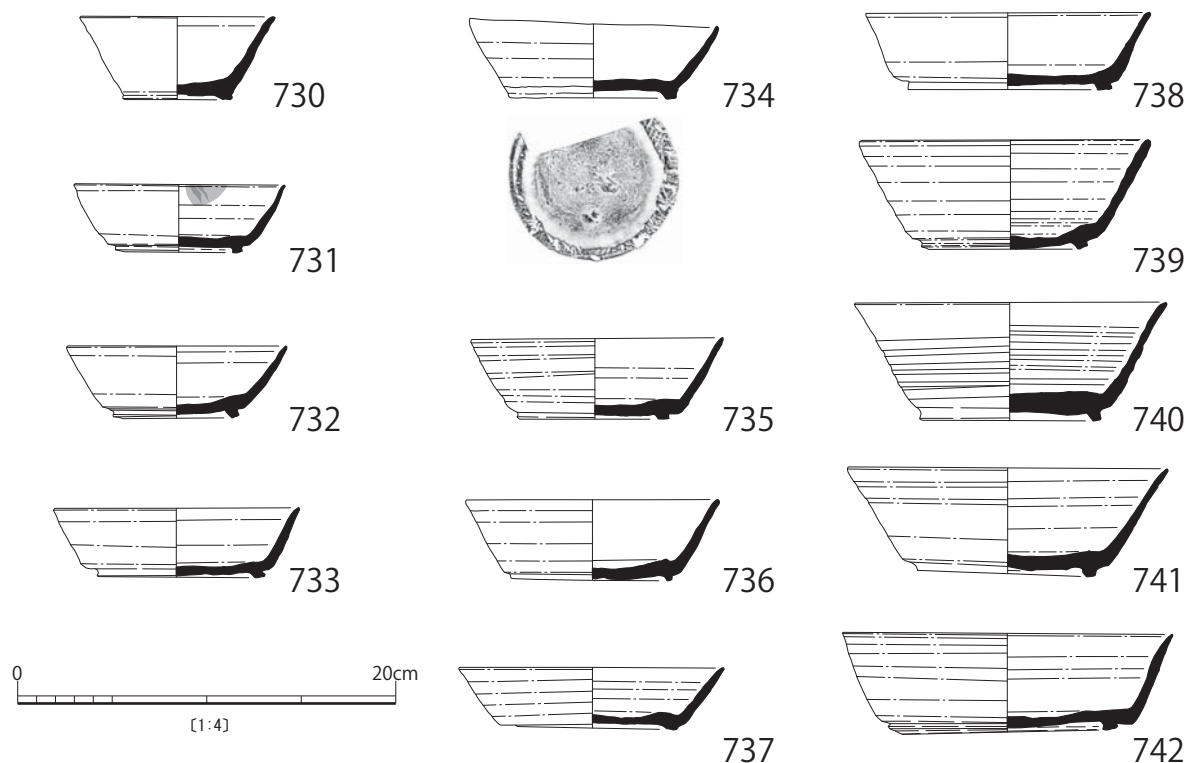


図135 SD701出土遺物（4）（S=1/4）

777から779はるつぼである。777は底部の破片で、内面に滓が付着し、外面は多くの細かな亀裂が入る。778は内面が二次被熱により青灰色や赤紫色になり、滓が付着する。底部が大きくくぼんでいるが、本来は粘土が充填されていたものが脱落した可能性がある。779は口縁部分外面に滓が付着し、器壁の劣化が著しい部分がみられる。

780から799はSD701から出土した瓦である。そのうち780から791は縄目叩き、一枚作りの平瓦である。これらの平瓦は厚さにいくつかの変異がみられる。780は厚みが1.7cmと2cmに満たない厚みである。凹面、凸面ともに糸切り痕が残る。781は厚さ2.4cmで凹面に糸切り痕がのこる。782は最も厚い部分で2.3cmをはかる。凹面に糸切り痕が残る。783は最大厚が2.4cmで、凹面、凸面に糸切り痕が残る。784は厚みが3.1cm、785は2.4cm、786は3.0cmである。785の凹面には糸切り痕が残る。786の凹面は丁寧なナデで仕上げる。787は厚さ2.9cmをはかり、全長は41.8cmである。凹面に糸切り痕が残る。788は最大で3.9cmの厚みがあり、凹面に丁寧なナデを施す。789は4.0cmの厚みをはかる。凹面は布目圧痕の一部がナデ消されている。790と791は上記の瓦同様に分厚い瓦で全形のほほわかる資料である。790は厚みが3.7cmで、全長が37.4cmである。791は最大厚2.9cm、全長38.3cmをはかる。この791の凹面には糸切り痕が残る。

792と793は縄目叩きの平瓦であるが、凹面にいずれも模骨痕が認められ模骨桶で作った瓦である。792は凸面広端面に粘土継ぎ目がみられる。最大厚は792が2.1cm、793は2.0cmである。794は縄目叩きの丸瓦である。全長39.4cmで最大厚は2.5cmである。

795から797は格子目叩きの円筒桶作りの平瓦である。796の側面には分割面がみられる。798と799は格子目叩きの丸瓦で、799は格子目叩きの一部をすり消している。側面には分割面がみられる。

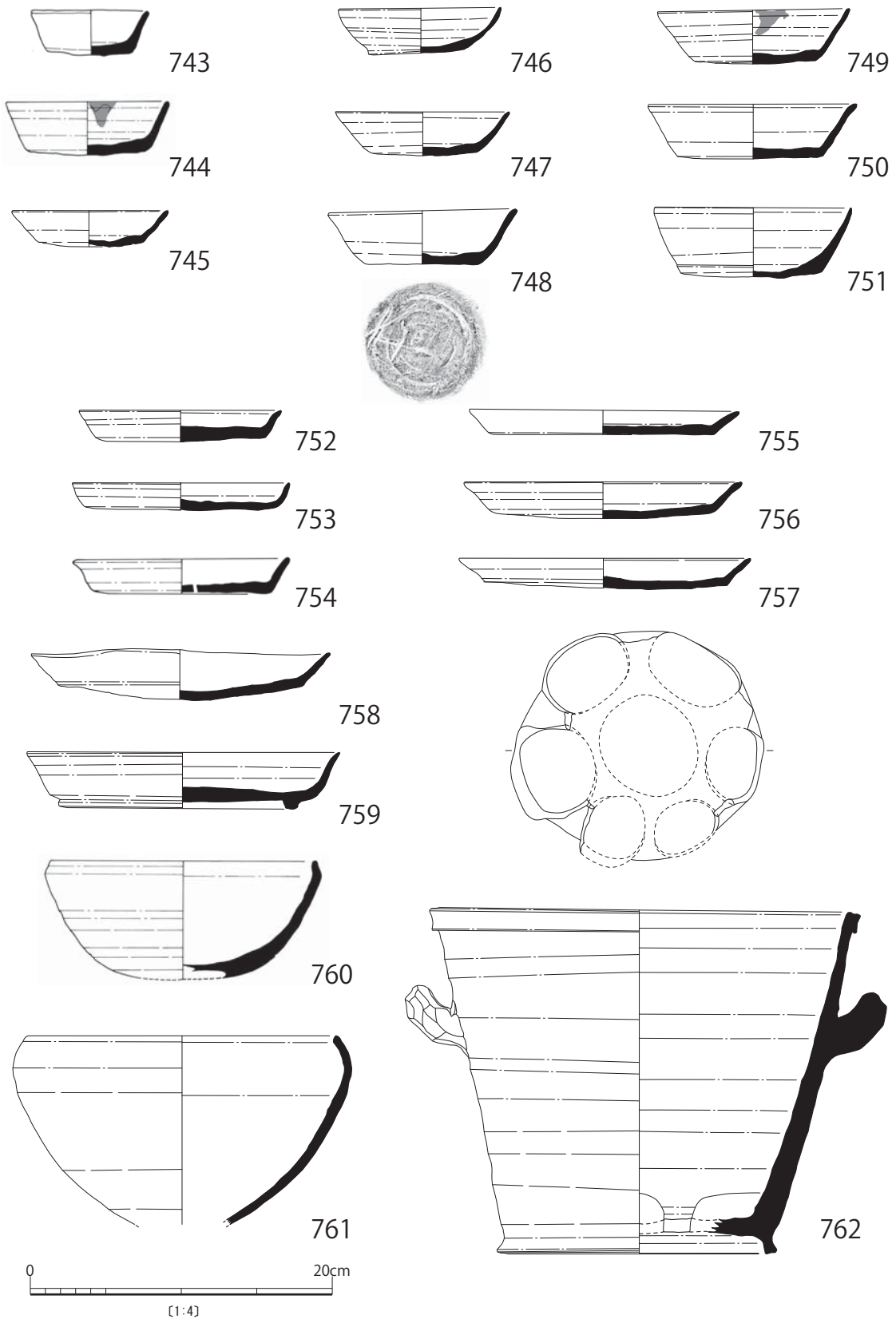


図136 SD701出土遺物 (5) (S=1/4)

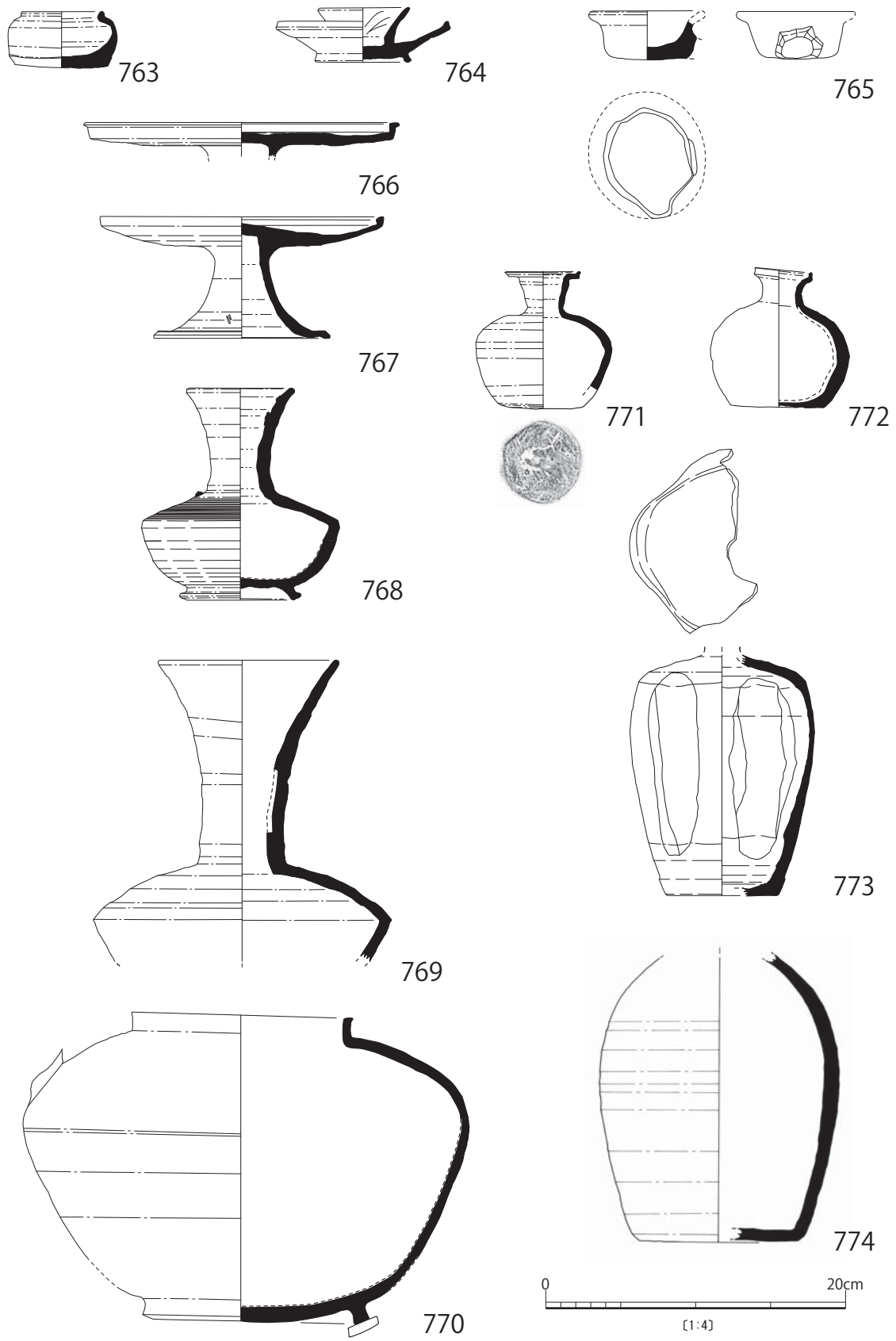


図137 SD701出土遺物 (6) (S=1/4)

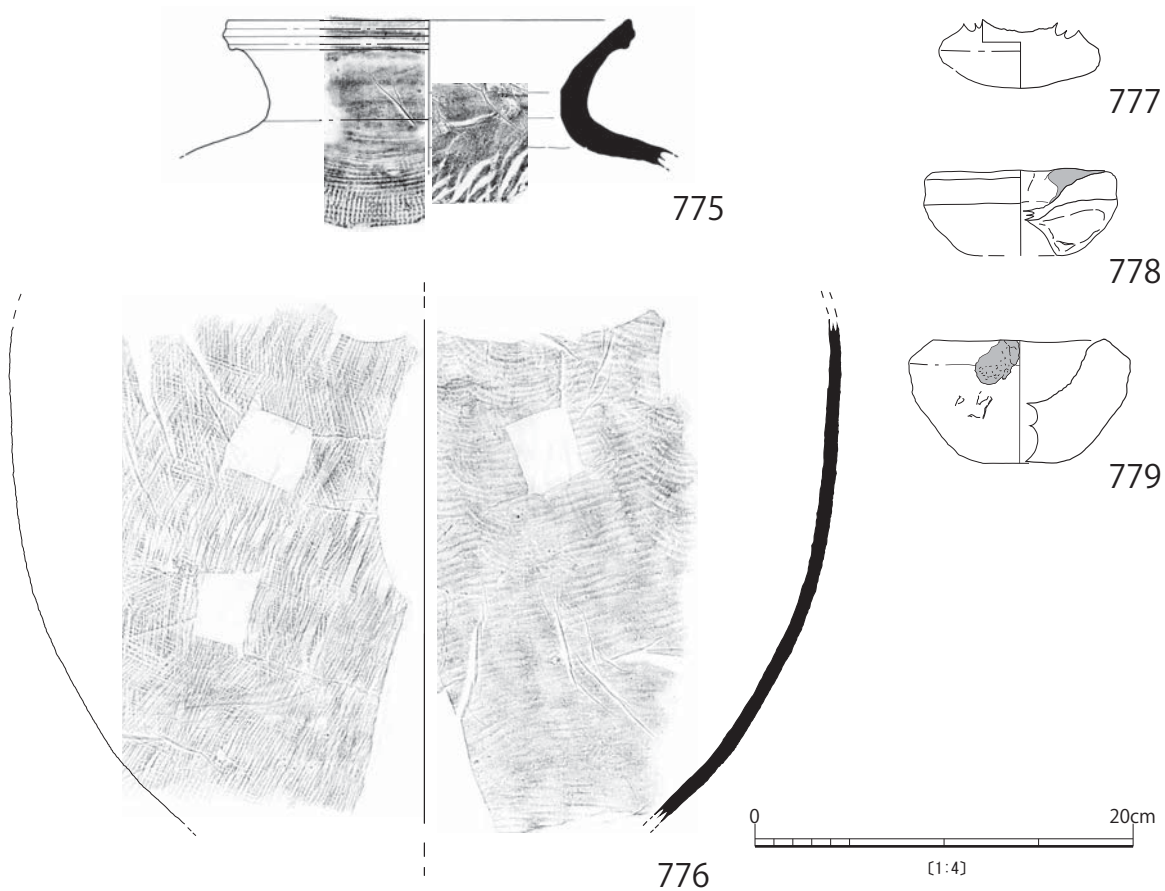


図138 SD701出土遺物（7）（S=1/4）

これらの遺物の他に、SD701からは墨書土器も多量に出土している。詳細な報告・考察がIV-5でなされている。そちらを参照されたい。

4) その他の出土遺物（図147-152）

エリアIVではSD701が検出された調査区以外からも瓦が比較的多く出土している。その中でもSD701の東側の丘陵を挟んだ谷に位置する11M区から瓦が多く出土している。さらに、SD701から北西方向の丘陵斜面である第45次調査区（高エネ調査区）のSX001とSX002を中心とした範囲（図110）、エリアIVの北部に位置する第29次調査区で検出されているSD417（図109）からも瓦が出土している。以下調査地ごとにみてゆく。

SD417（図109, 図147）

800から804は14-G・H区で検出されたSD417から出土した瓦である。いずれも円筒桶作りの格子目叩き平瓦である。800は側面に分割面がみられる。厚さは最大で1.5cmである。801の凹面は器面の風化が著しく詳細は不明であるが、凸面の格子目叩きはすり消されている。広端面に糸切り痕が残り、側面には分割面がみられる。厚さは最大で2.2cmをはかる。802は最大厚1.7cm、803は厚さが最大で2.5cmをはかる。804は厚さが最大で2.0cmである。凹面には分割突帯が残り、側面には分割面がみられる。

II 調査の結果

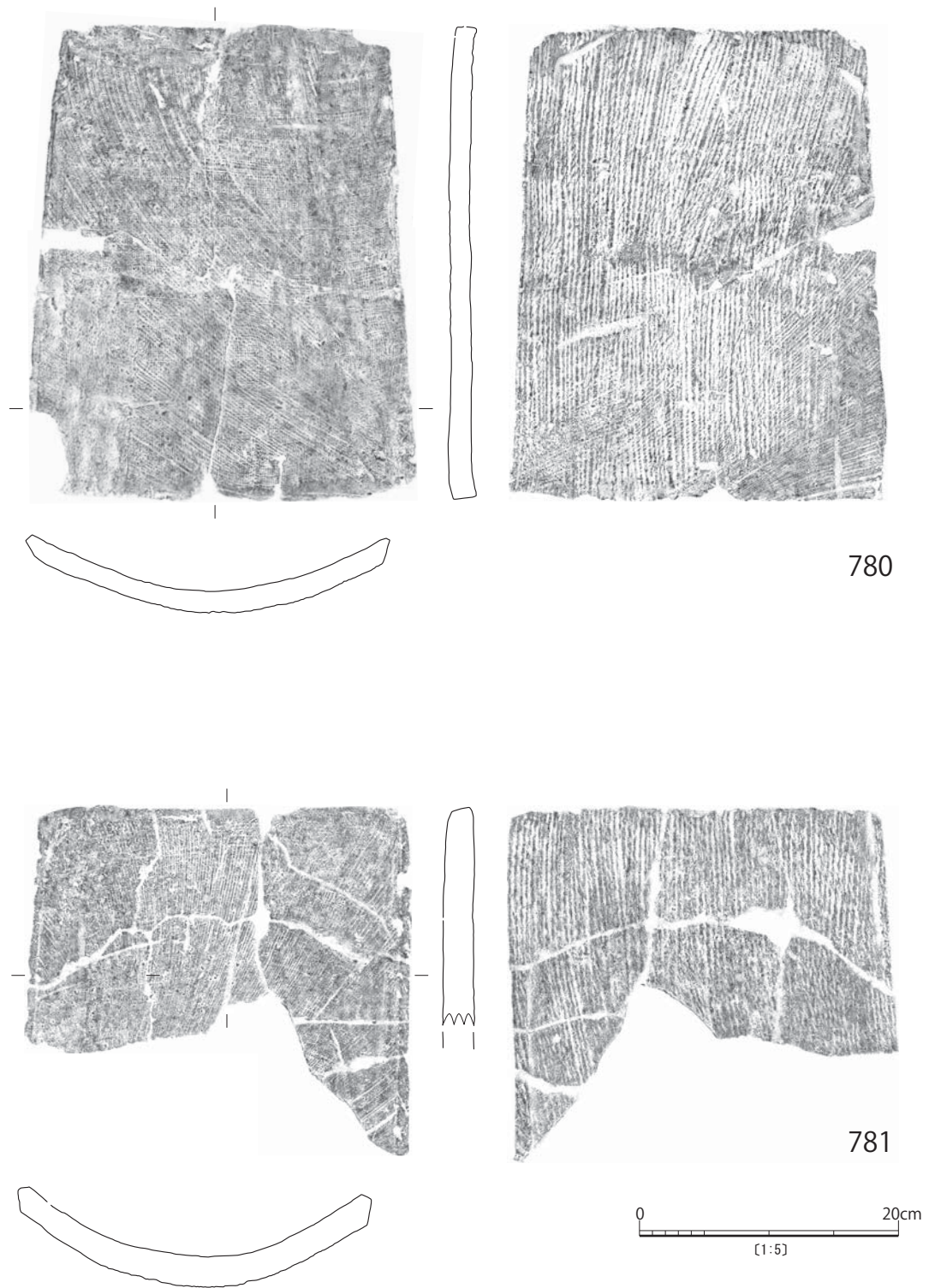


図139 SD701出土遺物(8) (S=1/5)

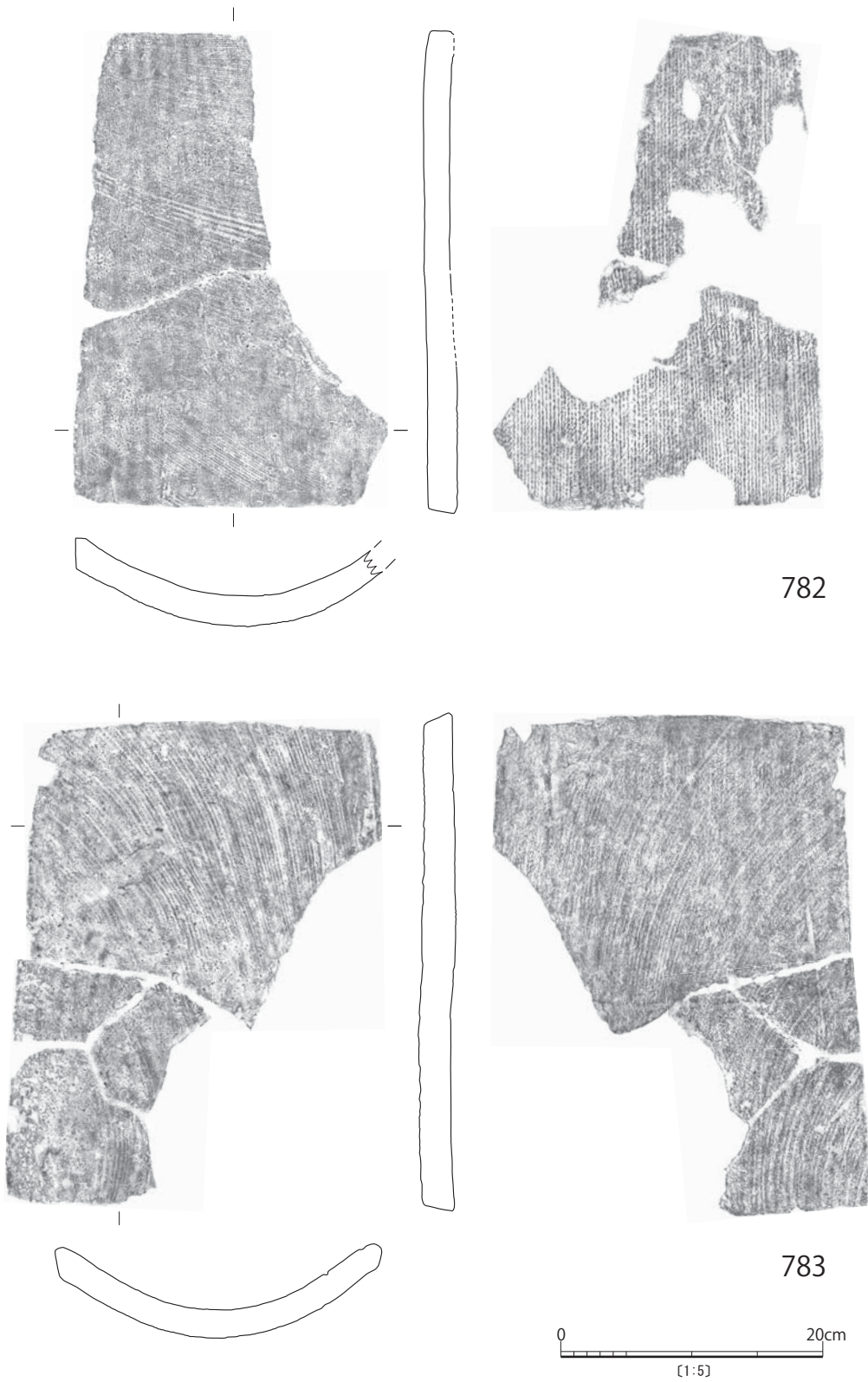


図140 SD701出土遺物(9) (S=1/5)

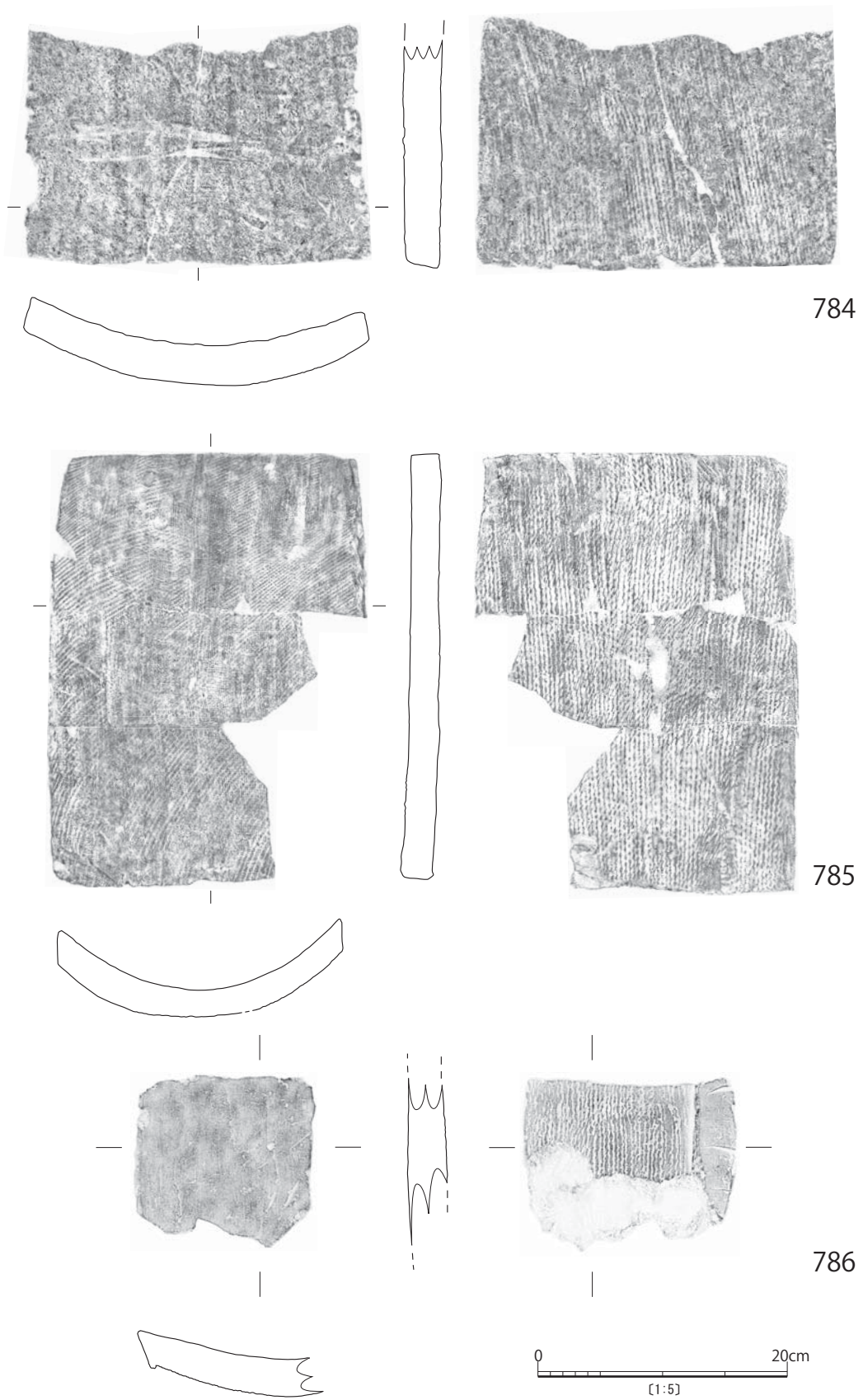


図141 SD701出土遺物 (10) (S=1/5)

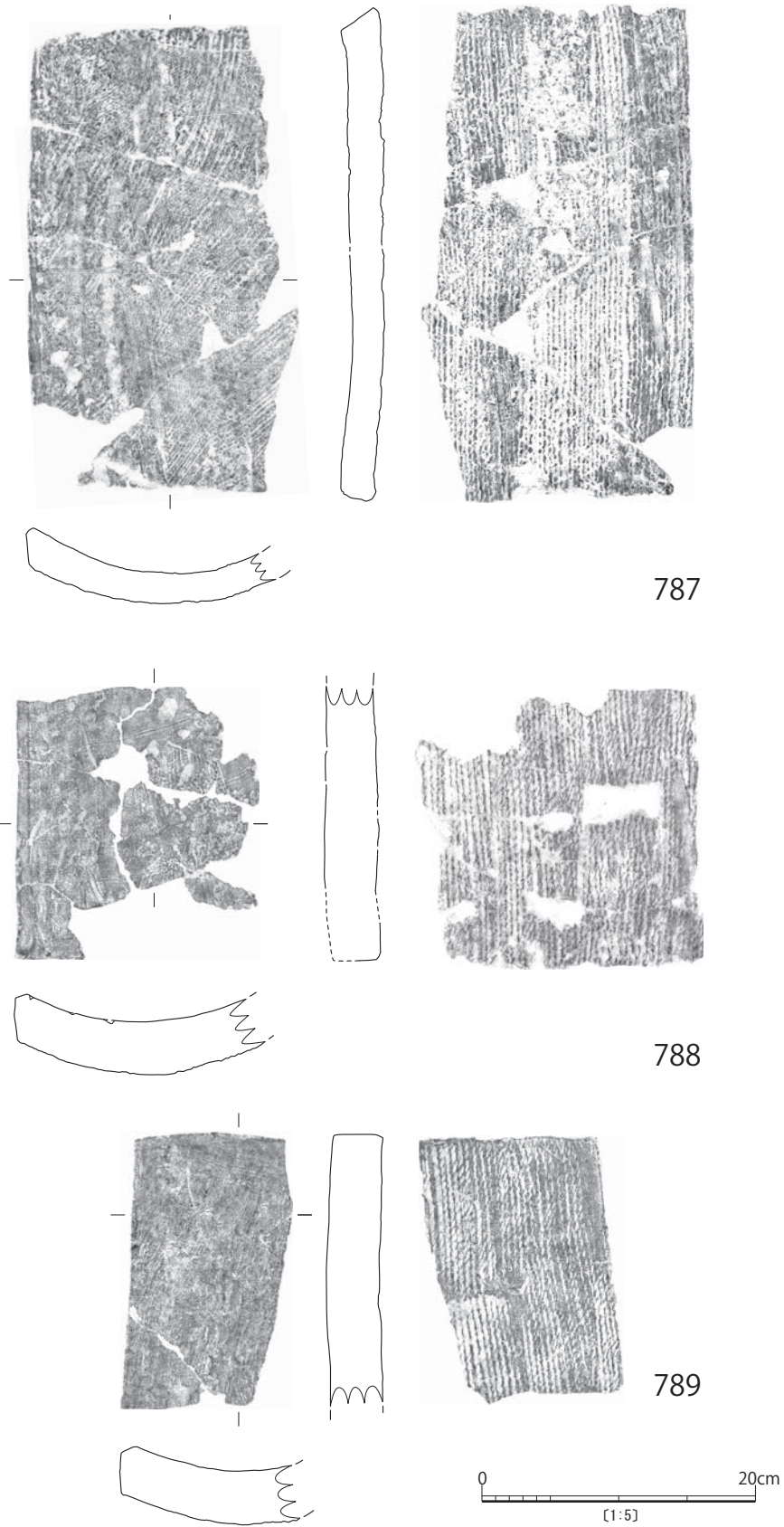


図142 SD701出土遺物(11) (S=1/5)

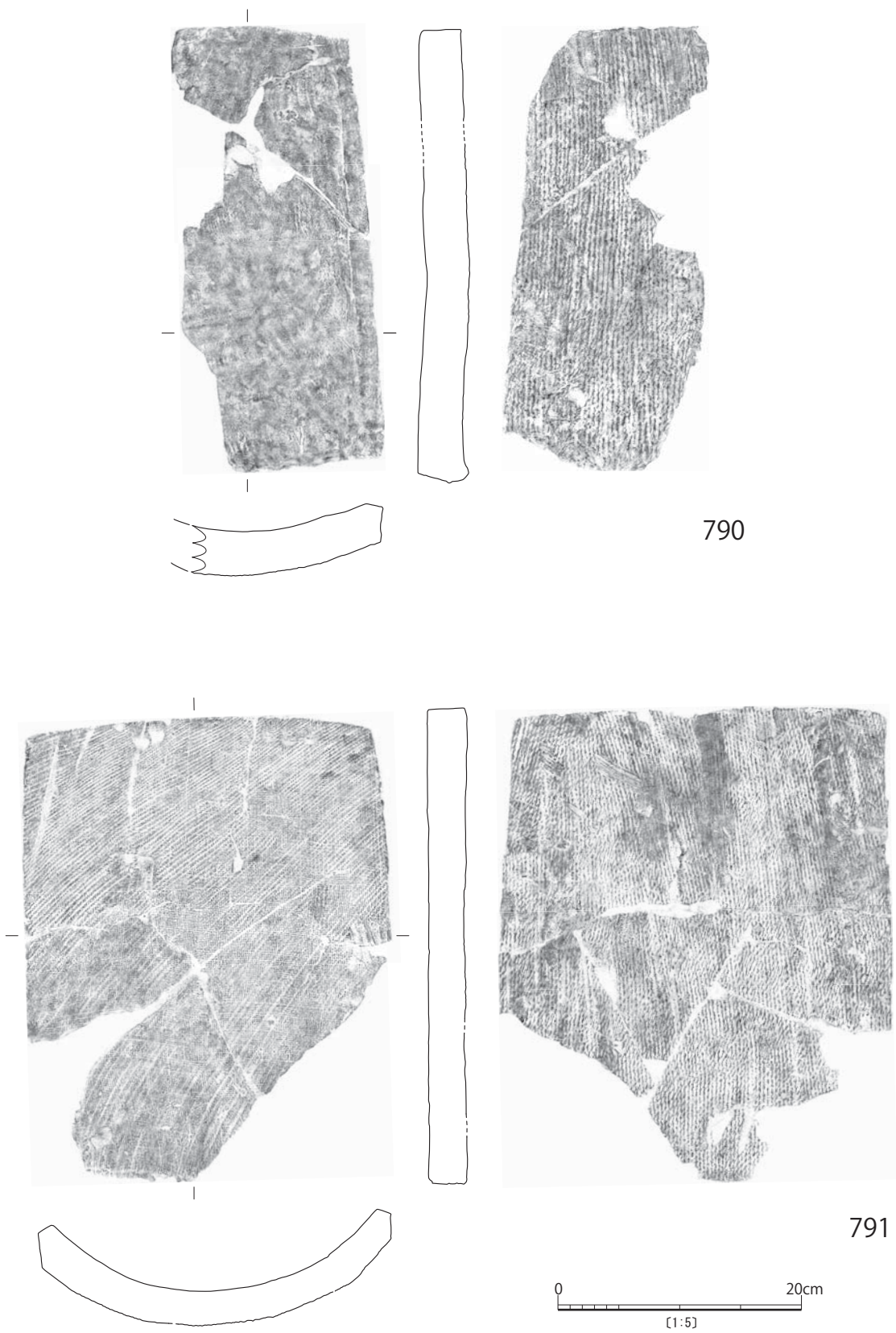


図143 SD701出土遺物 (12) (S=1/5)

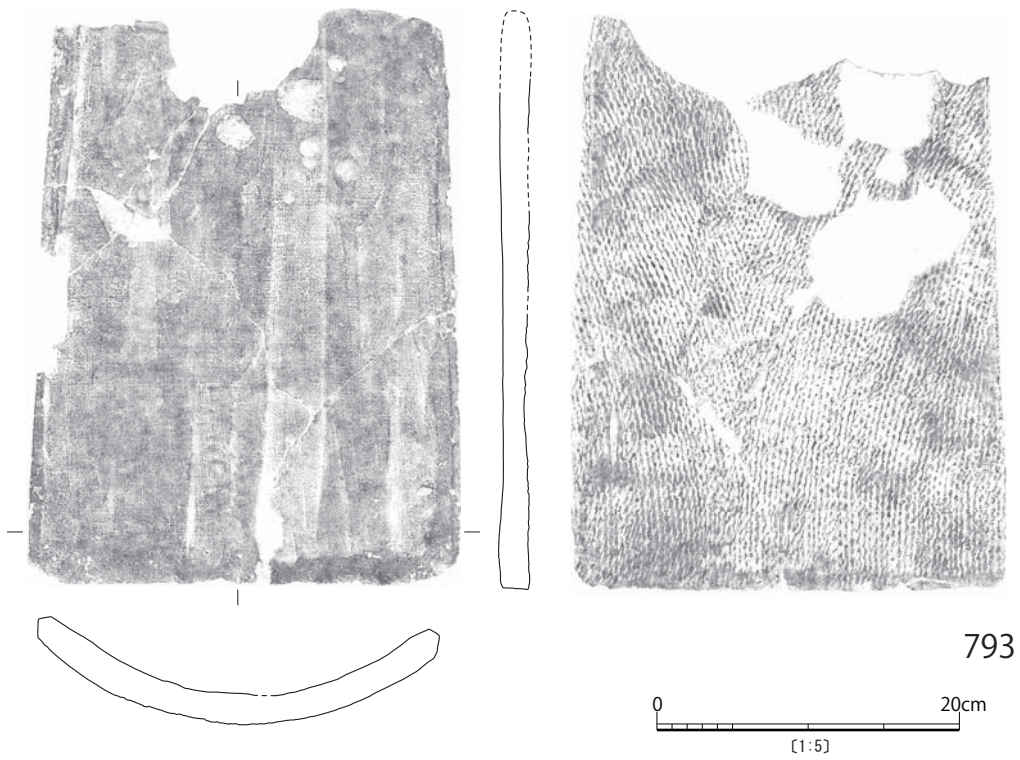
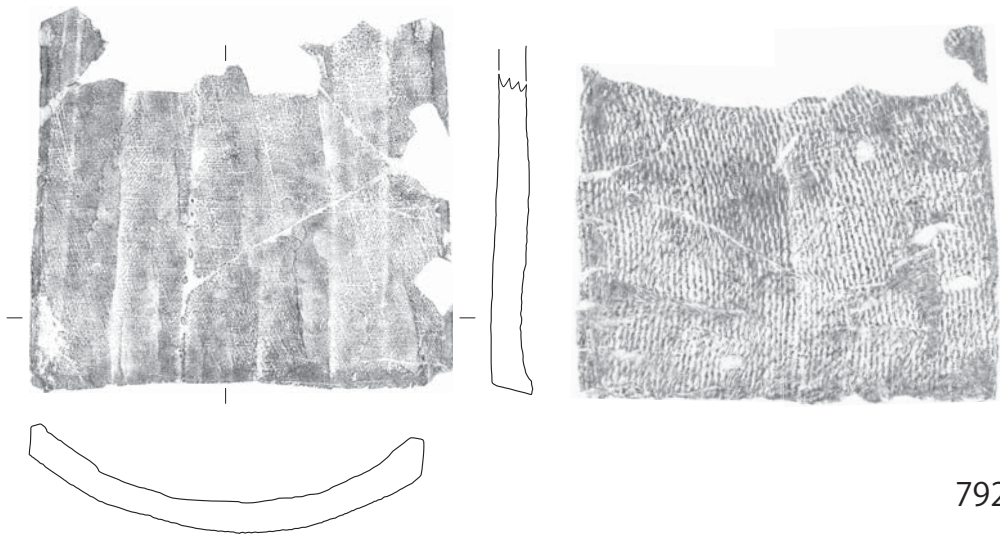


図144 SD701出土遺物 (13) (S=1/5)

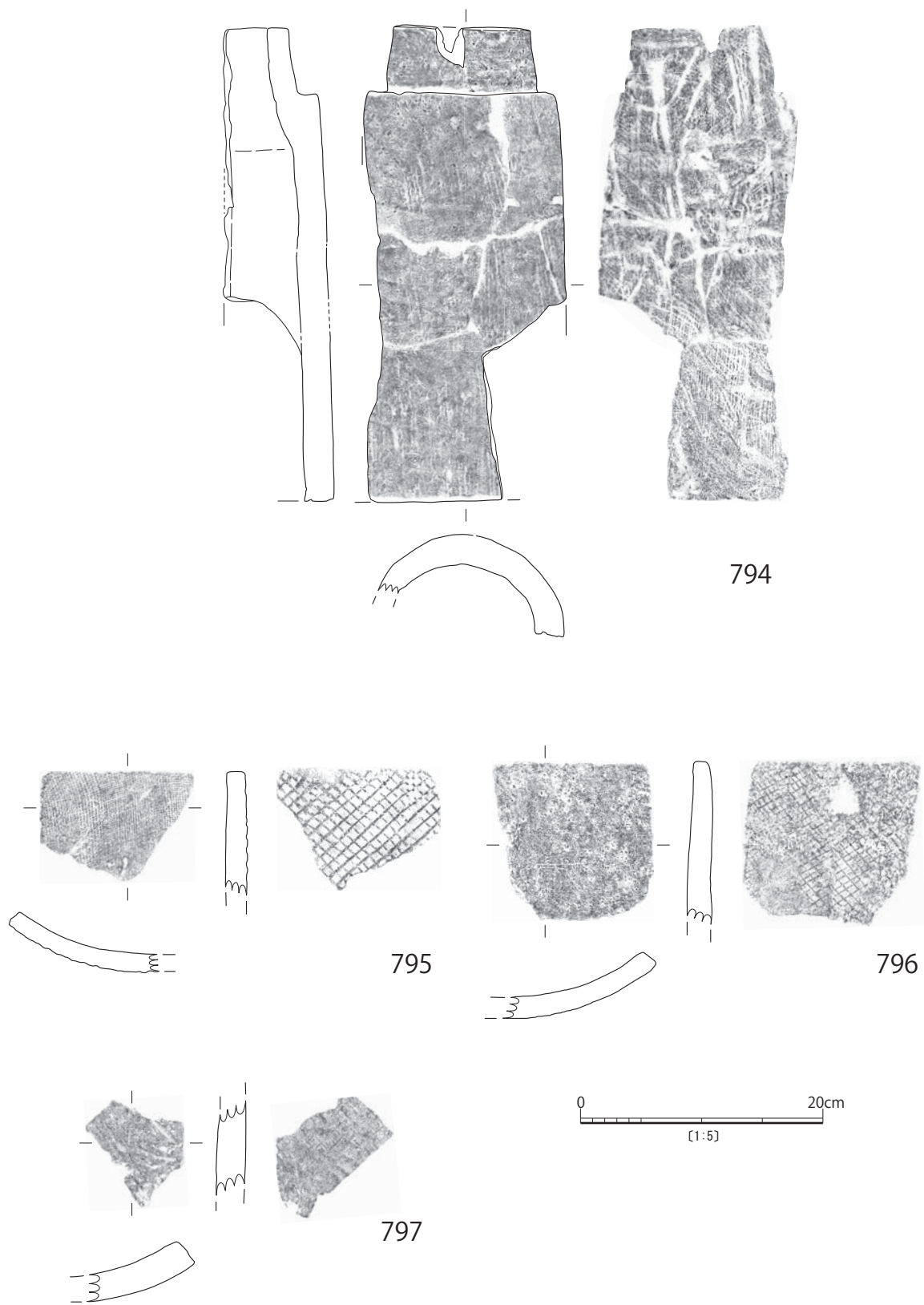


図145 SD701出土遺物 (14) (S=1/5)

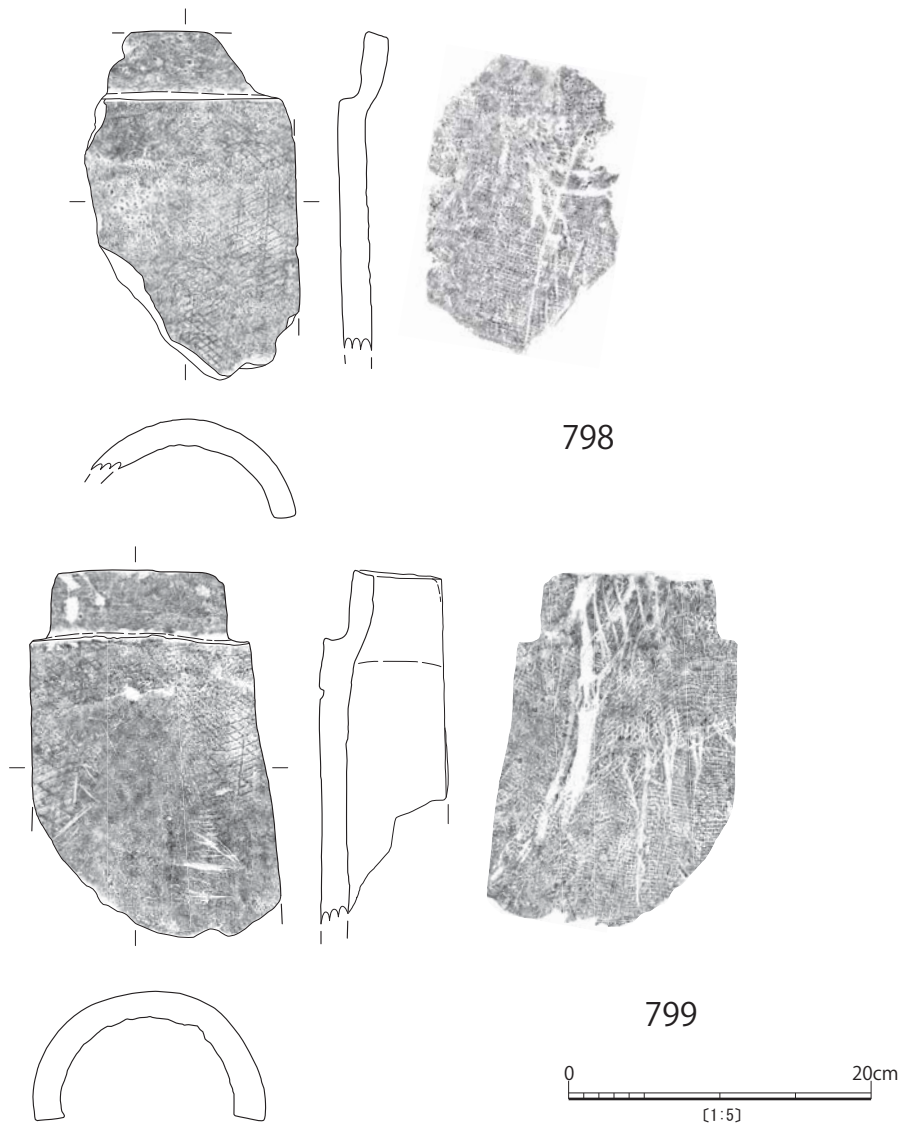


図146 SD701出土遺物 (15) (S=1/5)

11M区 SD513 (図110, 図148-150)

SD701の東側に位置する11M区の溝であるSD513からも瓦がまとめて出土している。SD513は11・12-L・M・N区にわたってほぼ南東-北西方向に流れる溝であるが、瓦は11M区を中心に出土している。

805から810はこの11M調査区から出土した瓦である。805から808は縄目叩き、一枚作りの平瓦である。805、806は最大で2.0~2.4cmほどの厚みとなる。805は全長37.8cm、広端面の最大幅27.4cm、最大厚2.4cmである。806は全長37.4cm、最大幅28.5cm、最大厚2.0cmである。双方とも凹面、凸面両面に糸切り痕が残る。807と808も2.0cm以上の厚みを持つ瓦である。807は凹面・凸面に糸切り痕が残り、全長37.4cm、厚さ2.4cmである。808は凹面に糸切り痕が残り、全長37.1cm、最大厚2.3cmである。809と810は縄目叩きの丸瓦である。両資料とも凹面に糸切り痕が残る、両側面に分割面がみられる。809は全長38.5cm、最大幅17.4cm、最大厚1.5cmである。810は全長36.8cm、最大幅16.2cm、最大厚1.5cmである。

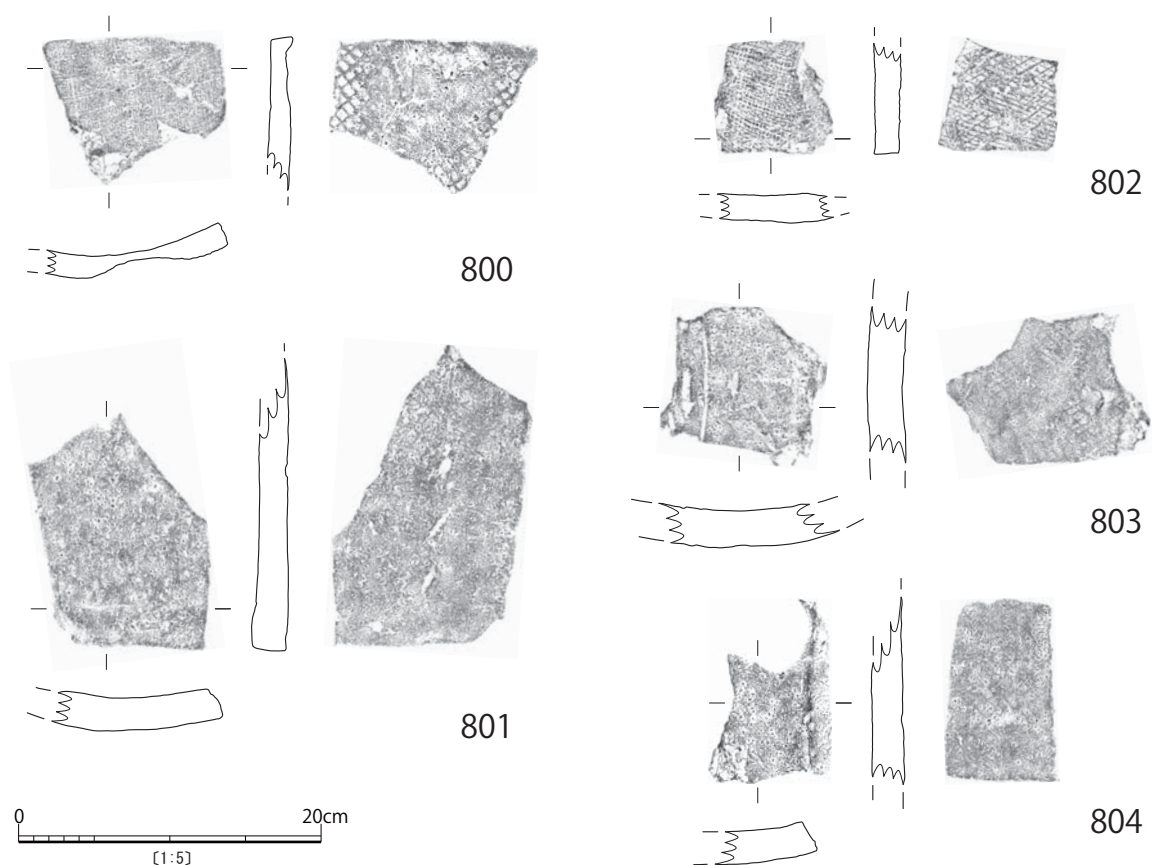


図147 エリアⅣ・その他の出土遺物（1） SD417出土瓦（S=1/5）

12～14-K・L区 SX001・SX002周辺出土遺物（図110、図151・152）

811から815は第45次調査区（高エネ調査区）から出土した瓦である。811は縄目叩きの平瓦で、凹面に模骨痕がみられる。812と813は格子目叩き・円筒桶作りの平瓦で、812は凹面に糸切り痕と分割突帯がのこり、側面には分割面がみられる。813の凹面には分割突帯と粘土継ぎ目がみられ、側面には分割面がみられる。814は縄目叩きの丸瓦であるが凸面の縄目叩きをナデ消している。815は格子目叩きの丸瓦で、格子目叩きの一部をすり消す。

816から818はエリアⅣから出土した軒平瓦である。いずれも左から右に偏行する唐草文で、上外区は素文、下外区は珠文を配す。816と817は段顎である。818は軒平瓦上部の破片であるが部分的に平瓦部分が残し、残存長・残存幅ともに12.0cmである。

819から826はエリアⅣ・SX001、SX002およびその周辺から出土した瓦以外の遺物である。819は12K区から出土した須恵質の権状製品で、花卉半球形あるいは笠型の金属製権衡器を模倣した形態で低い台がつく。紐には穴が開き台部は面取りがなされている。高さ3.7cm、最大幅3.1cm、裾部幅は2.1cm、重さ36.2gである。820から823は12K区、13L区、13J区から出土した鞆羽口の小片である。820は端部付近の破片で二次被熱により表面がかなり劣化している。821の端部も二次被熱により器面の劣化がみられ、またわずかに滓が付着している。822は器壁の劣化が著しく、内外面ともに灰青色を呈す

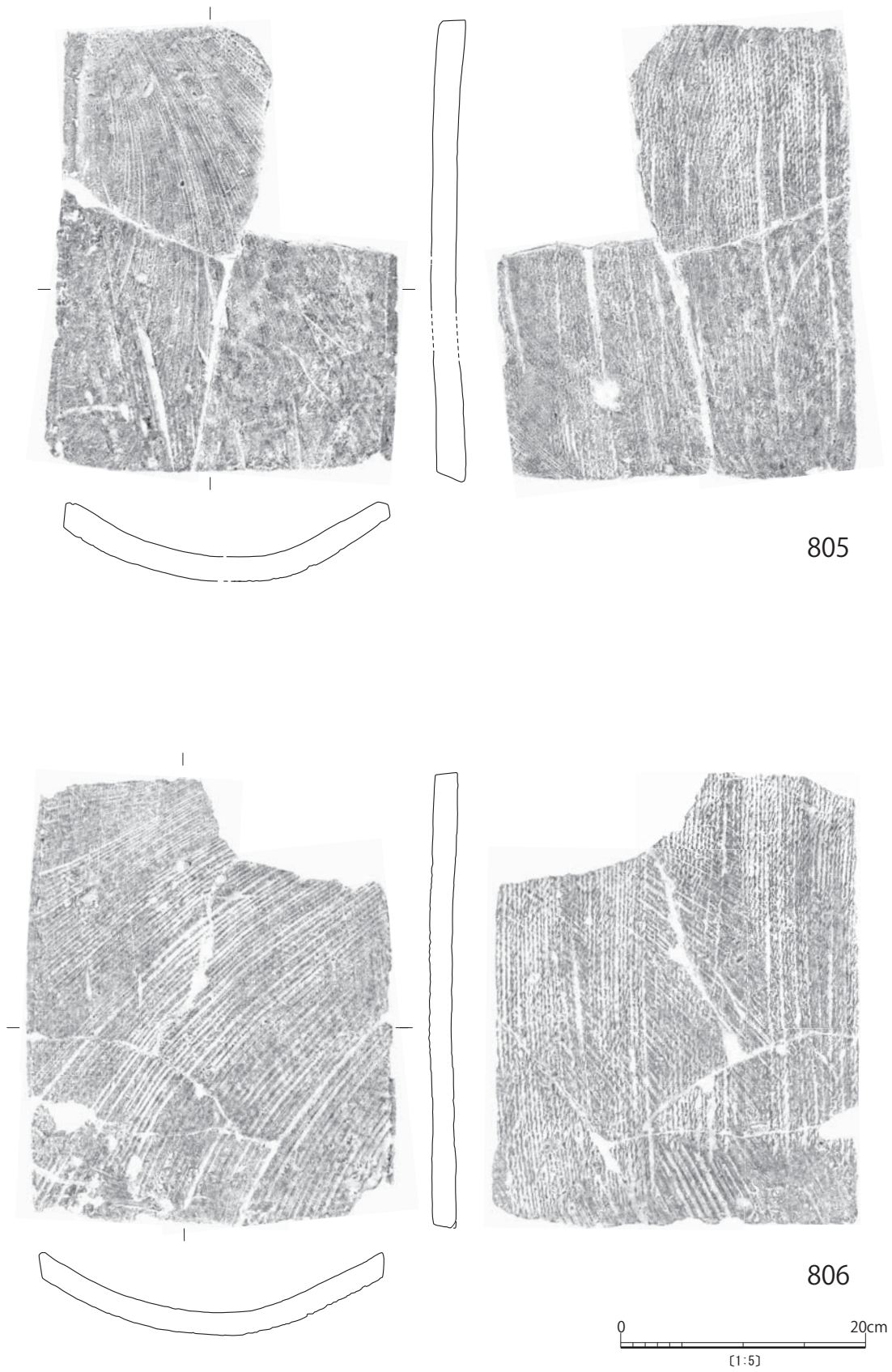


図148 エリアIV・その他の出土遺物(2) 11M区出土瓦1 (S=1/5)

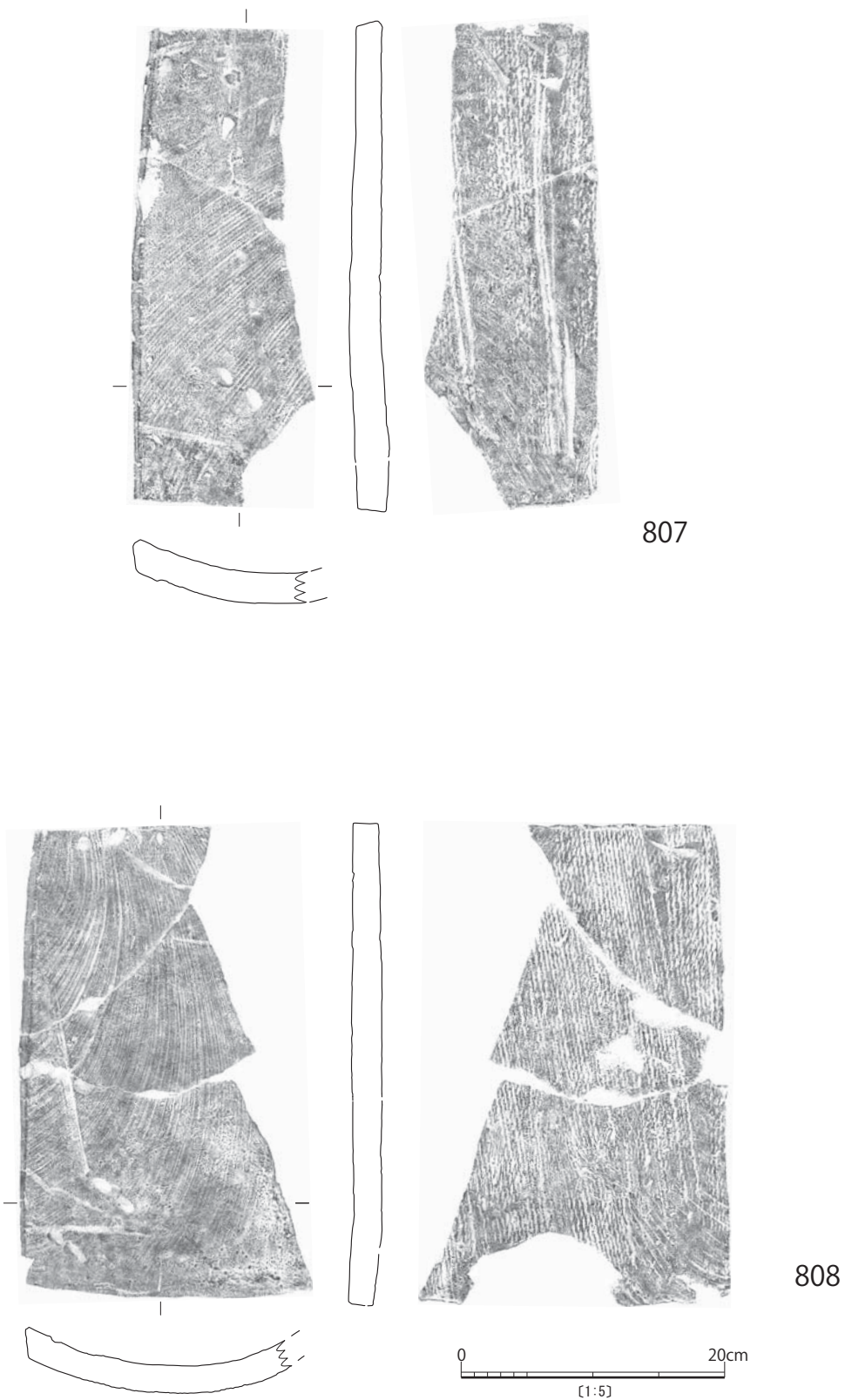


図149 エリアIV・その他の出土遺物 (3) 11M区出土瓦2 (S=1/5)

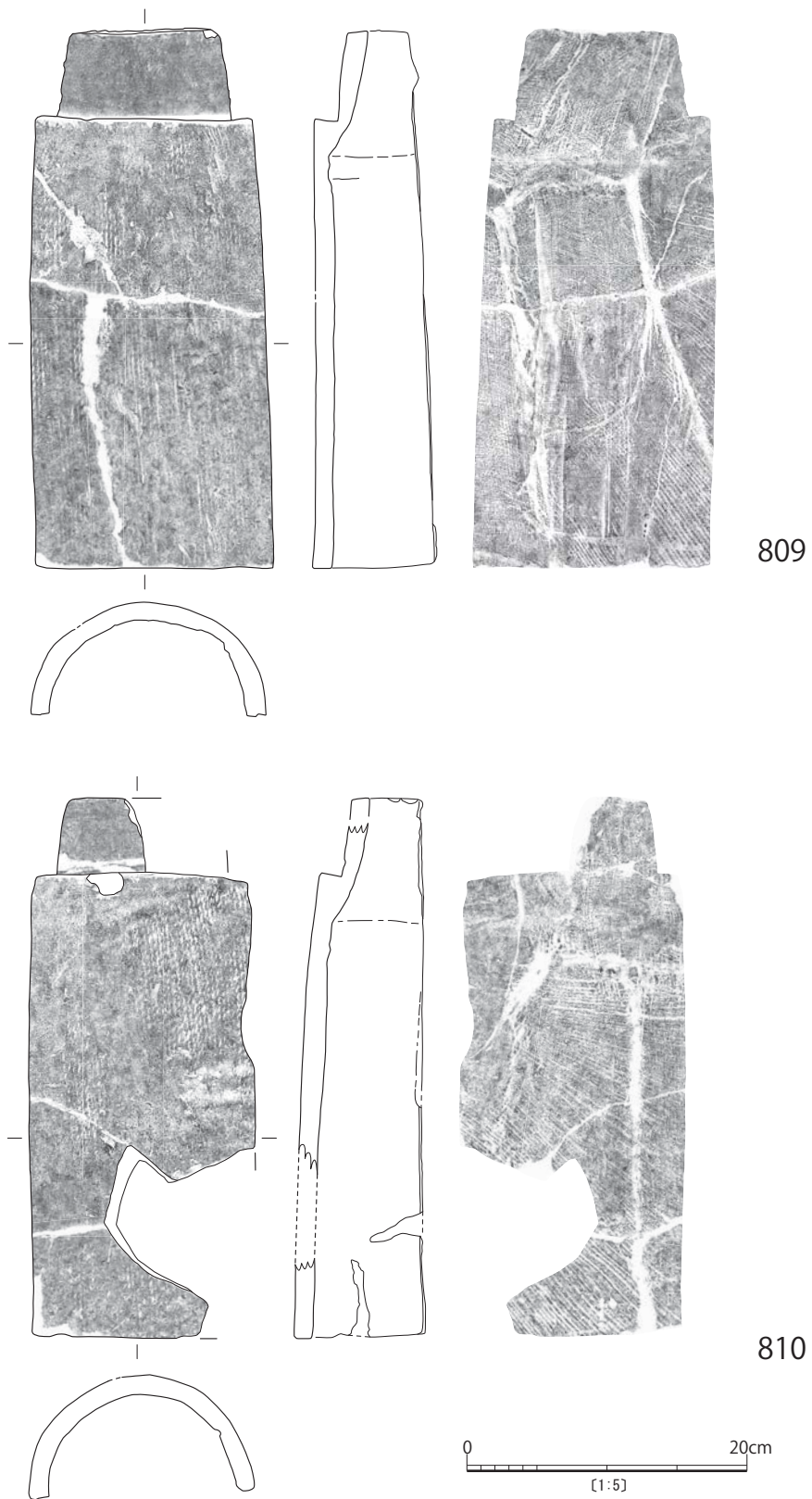


図150 エリアⅣ・その他の出土遺物（4） 11M区出土瓦3（S=1/5）

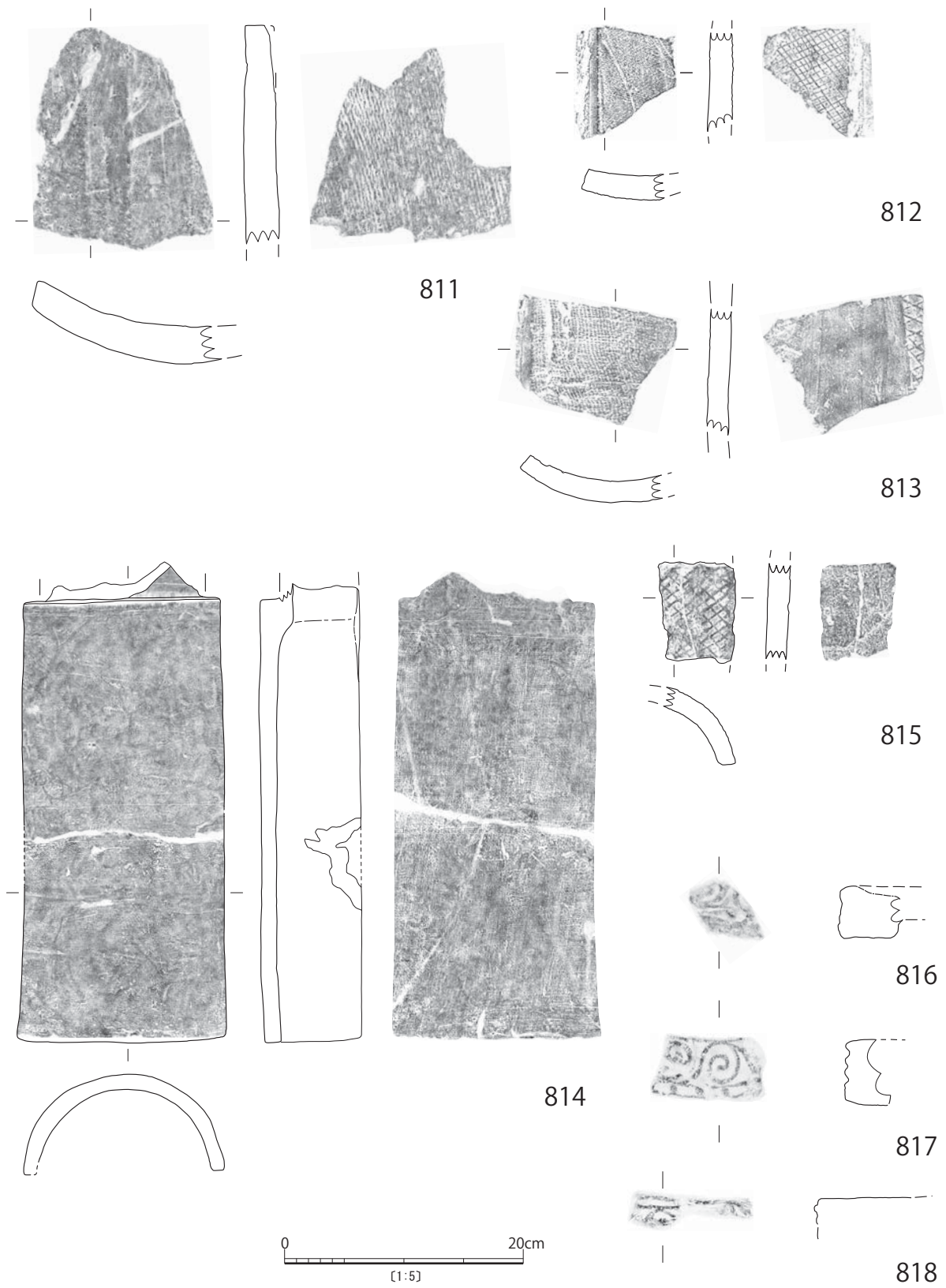


図151 エリアIV・その他の出土遺物（5）
 12-14・KL区 SX001, SX002出土瓦とエリアIV出土軒平瓦（S=1/5）

る。823は端部の外面に滓が付着しており、内面は赤色化している。824から826はSX001とSX002から出土した鉄滓である。824は残存長7.4cm、残存幅7.1cm、残存高4.2cmの椀形滓である。825は残存長9.5cm、残存幅7.3cm、残存高6.4cmの椀形滓である。826も椀形滓であるが平面形で一方の端部はややとがり気味であるが、他方は方形に張り出すような形であることから、この部分が排滓口付近に相当するものと推測される。残存長23.5cm、残存幅8.6cm、残存高4.1cmで重量は363グラムである。これらの椀形滓はいずれも磁性はあるものの非常に弱い。これらの他にも椀型滓を含め多数の鉄滓がSX001およびSX002から出土している。今回の整理で把握できた資料の総重量は10.6kgである。これらの鉄滓の分布についてはIV-4で検討されているのでそちらを参照されたい。

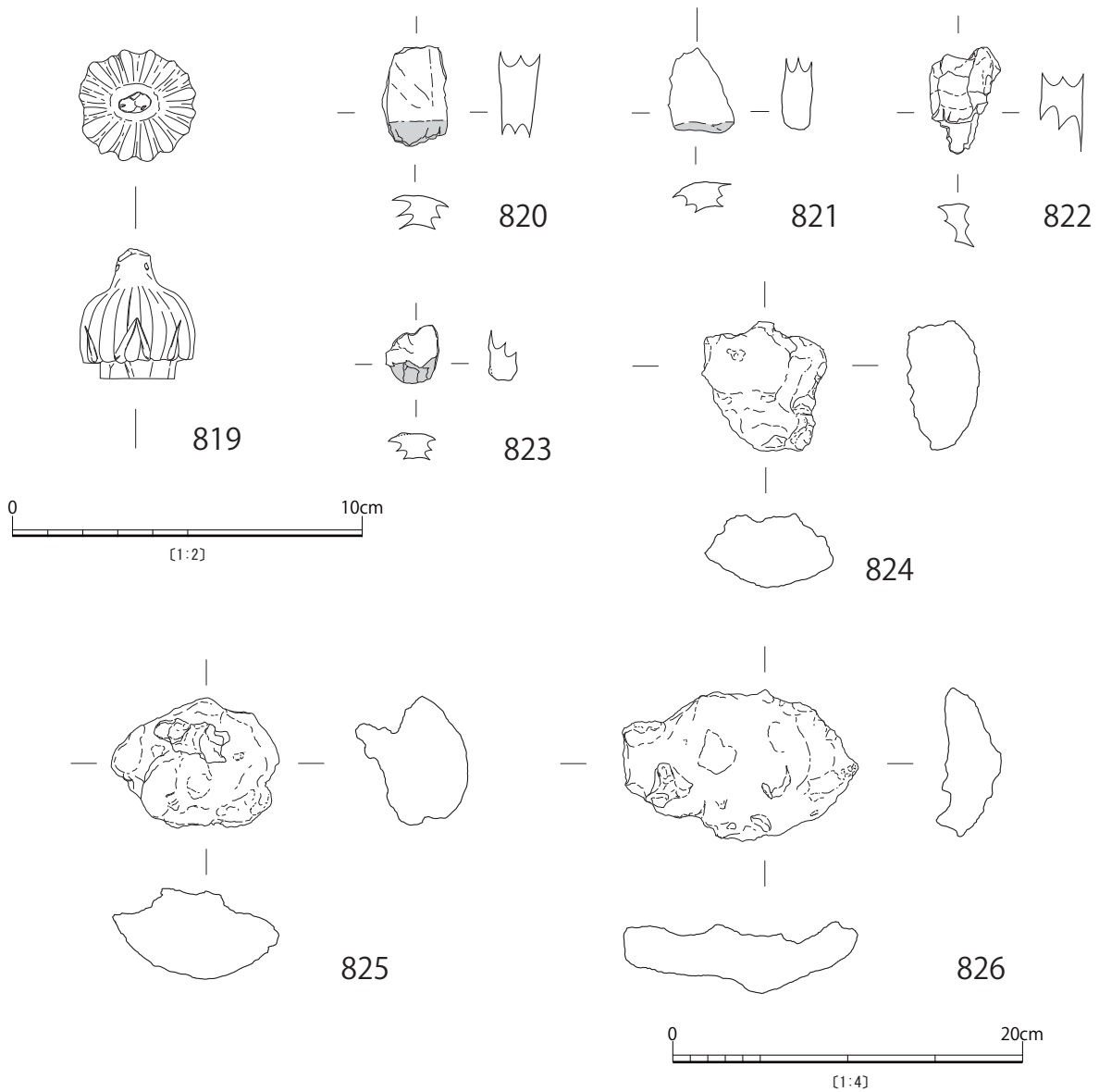


図152 エリアⅣ・その他の出土遺物（6）
12-14・KL区SX001, SX002および周辺出土遺物（権 S=1/2, そのほか S=1/4）

II 調査の結果



図153 その他の出土遺物 出土地不明鬼瓦 (S=1/5)

5) 出土地不明遺物 (図153)

827と828は出土地の不明な鬼瓦片である。827は鬼瓦端部で界線のない外区には竹管押圧で珠文を配す。828は右眉上側の額部力瘤の破片である。頭髪がへら描きで表現される。

Ⅲ 理化学分析の結果

1 九州大学筑紫地区遺跡出土土器の胎土分析

石田 智子

1. はじめに

九州大学筑紫地区遺跡は弥生時代～古代を中心とする長期にわたる遺跡であり、多数の土器が出土した。本稿では、九州大学筑紫地区遺跡出土土器を対象に実施した胎土分析の結果を報告する。特に、同一遺跡で出土した弥生土器と須恵器を分析することで、物質の特徴から土器製作技術や原材料を検討することが目的である。

2. 資料と方法

(1) 対象遺跡の立地と地質環境 (図154)

福岡平野は、花崗岩を主体とする地質帯および沖積地で構成される地域である。九州大学筑紫地区遺跡は春日丘陵から派生した段丘上に位置する。福岡平野には御笠川と那珂川が北流する。牛頸川が発する背振山地、御笠川が発する宝満山および周辺の四王寺山地は、早良花崗岩で構成される。御笠川と那珂川の中の沖積地には、阿蘇-4火砕流堆積物がまばらに分布する。

(2) 対象資料 (図155、表1)

対象資料は、九州大学筑紫地区遺跡(略称:QKS)で出土した弥生土器・須恵器である。

8B区SK101土坑(西編, 1992, 1993)出土の弥生土器4点は、遠賀川以西系須玖式土器の鋤形口縁の甕である。QKS01~03は中型、QKS04はやや大型である。時期は、弥生時代中期前葉~中葉(須玖I式古段階~新段階)に相当する。石英を多量に含む。なお、SK101土坑からは、日常生活で用いられる器種だけでなく、特殊器形の土器や小型土器、赤彩土器も多数出土する点が特徴である(石田

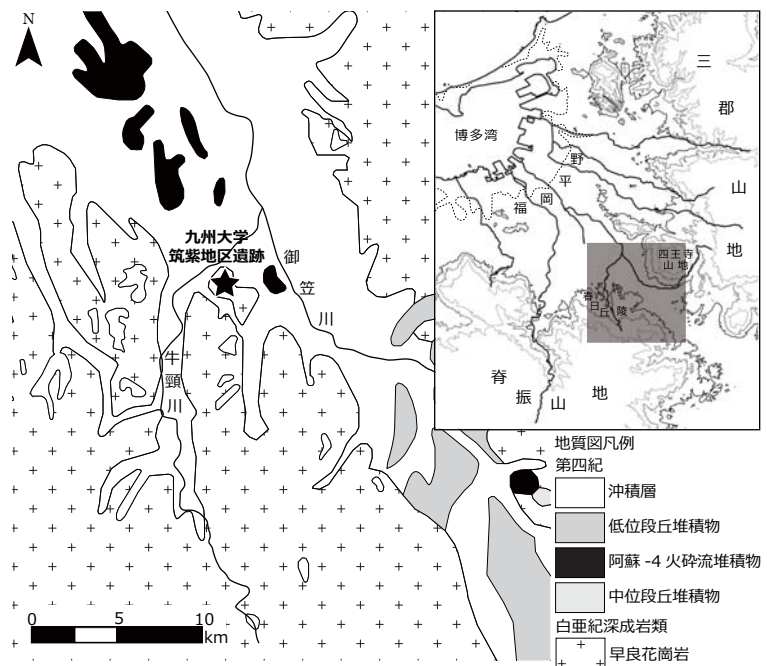


図154 分析対象遺跡と地質環境

表1 分析対象資料観察表

| SampleID | 遺構名 | 種類 | 器種 | 口径 (cm) | 器高 (cm) | 胎土 | | | | 色調 | | 調整 | | 焼成 | 備考 | |
|----------|------------------|------|----|------------|------------|--------|--------|--------|--------|-----|--------------------|-------------------|-------|----|------|------|
| | | | | | | 石英 | 長石 | 金雲母 | 赤色粒子 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| | | | | | | 量 (mm) | 量 (mm) | 量 (mm) | 量 (mm) | | | | | | | |
| QKS01 | 8B区 SK101 | 弥生土器 | 甕 | [26.0] | 6.0+ | ◎ 1~3 | ◎ 1~3 | - | - | 1 | にふい橙 Hue5YR7/4 | 橙 Hue7.5YR7/6 | ナテ | ナテ | 良好 | |
| QKS02 | 8B区 SK101 | 弥生土器 | 甕 | [30.4] | 5.5+ | ◎ 1 | ◎ 1 | ◎ 1≤ | - | - | 灰黄褐 Hue10YR6/2 | にふい黄橙 Hue10YR7/3 | ナテ | ナテ | やや不良 | 器面摩滅 |
| QKS03 | 8B区 SK101 | 弥生土器 | 甕 | [33.0] | 7.5+ | ◎ 1~5 | ◎ 1~5 | - | - | △ 1 | にふい赤褐 Hue5YR5/3 | にふい赤褐 Hue5YR5/3 | ナテ | ナテ | 良好 | 器面摩滅 |
| QKS04 | 8B区 SK101 | 弥生土器 | 甕 | [48.0] | 10.2+ | ◎ 1~5 | ◎ 1~5 | ◎ 1~5 | ◎ 1~3 | - | にふい褐 Hue7.5YR6/3 | にふい橙 Hue7.5YR7/4 | ナテ | ナテ | 良好 | |
| QKS05 | 11I区灰原 SX402 | 須恵器 | 杯蓋 | [13.6] | 3.6+ | - | - | △ 1~2 | - | - | 灰 HueN5/0 | 灰 HueN6/0 | 回へ+回ナ | 回ナ | 良好 | |
| QKS06 | 11I区灰原 SX402黒色粘土 | 須恵器 | 杯蓋 | [15.0] | 3.8+ | - | - | △ 1 | - | - | 灰黄 Hue2.5Y6/2 | オリーブ灰 Hue2.5GY6/1 | 回へ+回ナ | 回ナ | 良好 | 当て具痕 |
| QKS07 | 11I区 SX402黒色粘土 | 須恵器 | 甕 | - | 6.5+ | - | - | △ 1 | - | - | 暗オリーブ灰 Hue2.5GY4/1 | 黄灰 Hue2.5Y6/1 | 回ナ | 回ナ | 良好 | 波状文 |
| QKS08 | 7M区包含層 | 須恵器 | 杯蓋 | [15.0] | 3.3+ | - | - | △ 1 | - | - | 灰 HueN4/0 | 灰 HueN6/0 | 回ナ | 回ナ | 良好 | |
| QKS09 | 7M区包含層 | 須恵器 | 杯蓋 | [15.0] | 3.3+ | - | - | △ 1 | - | - | 灰 HueN4/0 | 灰 HueN6/0 | 回へ+回ナ | 回ナ | 良好 | |
| QKS10 | 7M区包含層 | 須恵器 | 甕 | - | 12.8+ | - | - | △ 1 | - | - | 灰 HueN4/0 | 灰 HueN5/0 | 回ナ | 回ナ | 良好 | 波状文 |

〔復元値〕 復元値+ ●：非常に多量/◎：多量/○：並/△：少量/・：微量/-：なし

回へ：回転ヘラケズリ/回ナ：回転ナテ

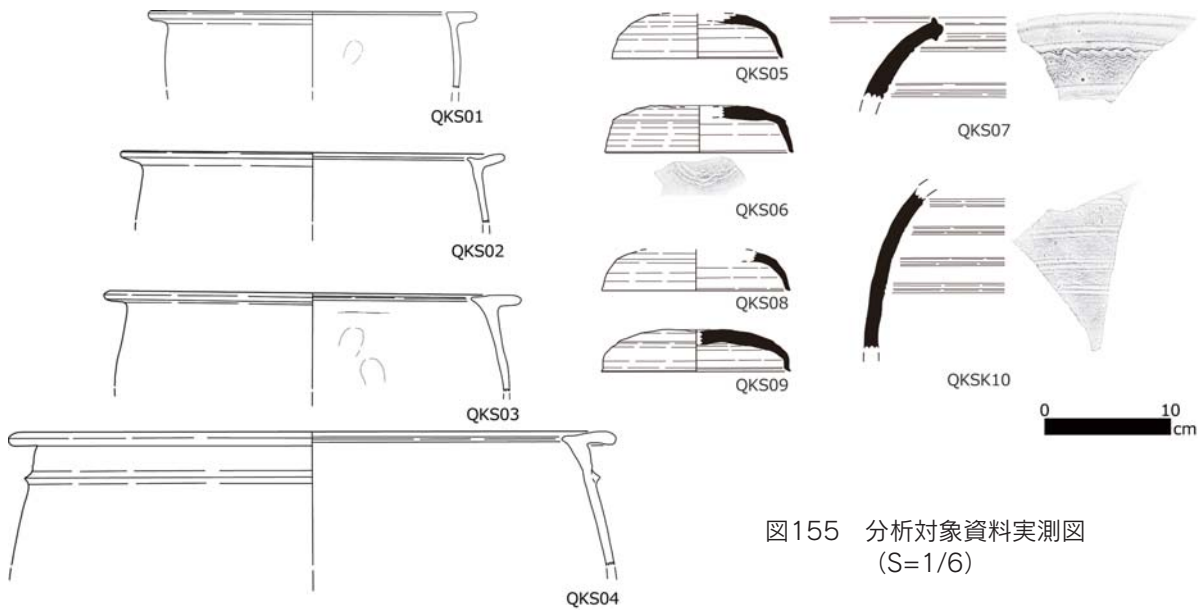


図155 分析対象資料実測図 (S=1/6)

2009)。今回の分析では、基本的な器種である無塗彩の甕を選定した。

九州大学筑紫地区遺跡は、牛頸窯跡群の上大利グループの周辺部にあたる。須恵器6点¹⁾を分析した。11I区SX402から出土した杯蓋2点(QKS05・06)および甕1点(QKS07)は、いずれもⅢB期に相当する。QKS06は、内面に当て具痕が残る。SX402は、多量の須恵器片が堆積することから灰原と考えられ、窯壁の破片も多く出土することから、須恵器窯の存在が想定できる。近くの溝SD623から須恵器製作木製用具(叩き具・当て具・篋)がまとめて出土したことから、須恵器生産の場であった可能性は高い。また、古墳時代の住居跡が確認されている7M区の包含層から出土したⅢB期の杯蓋2点(QKS08・09)および甕1点(QKS10)も分析に用いた。いずれの須恵器も、1mm程度の長石を少量含む。甕2点(QKS07・QKS10)は頸部破片で、波状文が施されている。

(3) 分析方法

資料の観察・実測・全体写真撮影・実体顕微鏡写真撮影などの考古学的記録を作成した後、2cm四方程度の試料を採取し、内外面の風化部分や自然釉を研削してから、洗浄した。まず、水道水を用いて5分間超音波洗浄、続いてイオン交換水を用いて2度超音波洗浄を行った。次に、110℃で48時間以上乾燥させた。乾燥した土器は、タンゲステン製乳鉢を用いて粗く粉碎した。須恵器は多検体試料精密粉碎機(安井器械社製マルチビーズショッカー)で細砕した。得られた粉末試料約6gを秤量済

表2 元素測定結果

| | QKS01 | QKS02 | QKS03 | QKS04 | QKS05 | QKS06 | QKS07 | QKS08 | QKS09 | QKS10 |
|--------------------------------|---------|---------|---------|---------|---------|--------|--------|---------|--------|--------|
| (wt%) | | | | | | | | | | |
| SiO ₂ | 60.62 | 55.16 | 58.64 | 55.04 | 61.34 | 60.91 | 62.76 | 61.88 | 61.41 | 61.31 |
| TiO ₂ | 0.77 | 0.87 | 0.59 | 0.88 | 0.92 | 0.81 | 0.82 | 0.82 | 0.82 | 0.87 |
| Al ₂ O ₃ | 20.75 | 23.65 | 20.58 | 19.59 | 25.24 | 25.04 | 24.73 | 24.90 | 25.15 | 26.08 |
| Fe ₂ O ₃ | 4.19 | 4.64 | 4.30 | 7.00 | 4.93 | 4.67 | 5.04 | 5.36 | 4.64 | 4.84 |
| MnO | 0.10 | 0.09 | 0.10 | 0.05 | 0.05 | 0.06 | 0.04 | 0.05 | 0.05 | 0.04 |
| MgO | 0.33 | 0.84 | 0.43 | 0.47 | 0.54 | 1.11 | 0.86 | 1.06 | 1.06 | 0.76 |
| CaO | 0.67 | 0.80 | 0.36 | 0.78 | 0.69 | 0.66 | 0.59 | 0.56 | 0.58 | 0.54 |
| Na ₂ O | 1.93 | 1.65 | 0.64 | 1.55 | 1.81 | 1.92 | 1.41 | 1.78 | 1.88 | 1.48 |
| K ₂ O | 2.61 | 2.15 | 2.63 | 2.45 | 2.10 | 2.58 | 2.91 | 2.67 | 3.45 | 2.46 |
| P ₂ O ₅ | 2.48 | 2.41 | 2.95 | 4.01 | 0.03 | 0.08 | 0.05 | 0.06 | 0.07 | 0.03 |
| H ₂ O ⁻ | 4.16 | 6.49 | 6.41 | 5.92 | 2.00 | 1.89 | 1.25 | 1.67 | 0.76 | 1.51 |
| H ₂ O ⁺ | 1.05 | 1.16 | 2.04 | 0.63 | 0.02 | 0.17 | 0.02 | 0.03 | 0.04 | 0.02 |
| Total | 99.65 | 99.91 | 99.67 | 98.39 | 99.68 | 99.89 | 100.48 | 100.85 | 99.90 | 99.94 |
| (ppm) | | | | | | | | | | |
| V | 49.05 | 75.40 | 57.89 | 97.13 | 65.83 | 67.78 | 74.37 | 77.17 | 70.24 | 74.57 |
| Cr | 30.07 | 31.92 | 29.99 | 51.60 | 1719.77 | 575.81 | 982.55 | 1443.77 | 523.97 | 987.21 |
| Co | 6.20 | 9.78 | 8.23 | 7.24 | 9.01 | 9.90 | 9.68 | 11.24 | 9.87 | 9.33 |
| Ni | 8.42 | 17.19 | 12.13 | 20.36 | 12.62 | 21.84 | 16.68 | 23.59 | 20.64 | 13.67 |
| Cu | 13.91 | 22.98 | 12.27 | 133.05 | 20.27 | 18.69 | 15.59 | 21.91 | 20.55 | 20.32 |
| Zn | 71.63 | 161.87 | 99.26 | 113.89 | 89.98 | 136.92 | 97.20 | 126.41 | 131.29 | 102.74 |
| Ga | 30.33 | 33.10 | 28.74 | 27.12 | 34.05 | 34.25 | 32.10 | 34.29 | 35.08 | 33.77 |
| Rb | 122.80 | 120.87 | 122.63 | 145.09 | 110.51 | 132.19 | 134.45 | 140.26 | 160.56 | 123.22 |
| Sr | 270.71 | 242.56 | 157.99 | 252.90 | 148.41 | 169.64 | 146.16 | 153.92 | 158.79 | 132.90 |
| Y | 26.25 | 24.36 | 19.01 | 24.79 | 29.45 | 21.95 | 21.34 | 21.57 | 22.93 | 20.88 |
| Zr | 286.80 | 314.60 | 264.59 | 243.57 | 328.12 | 329.22 | 338.84 | 322.30 | 327.96 | 321.89 |
| Nb | 36.93 | 27.76 | 23.29 | 22.06 | 30.68 | 25.01 | 23.50 | 25.54 | 26.17 | 23.21 |
| Ba | 1139.09 | 1048.86 | 1088.51 | 1448.54 | 436.46 | 535.73 | 543.18 | 543.48 | 548.02 | 514.43 |
| La | 42.85 | 38.77 | 39.41 | 29.39 | 47.93 | 42.16 | 41.43 | 41.80 | 44.07 | 36.99 |
| Ce | 86.41 | 87.03 | 81.76 | 58.36 | 91.65 | 93.36 | 88.06 | 90.42 | 92.58 | 79.44 |
| Nd | 32.93 | 35.18 | 27.81 | 26.02 | 36.33 | 32.07 | 28.68 | 31.51 | 31.44 | 27.80 |
| Sm | 4.87 | 3.77 | 0.82 | 4.13 | 5.48 | 6.02 | 3.53 | 4.82 | 4.72 | 4.40 |
| Pb | 34.50 | 28.89 | 25.88 | 26.10 | 30.04 | 30.01 | 27.03 | 29.72 | 29.21 | 28.20 |
| Th | 15.91 | 16.83 | 16.37 | 13.17 | 12.73 | 16.25 | 13.39 | 14.76 | 14.54 | 13.02 |

みの磁製るつぽに計りとり、110℃の恒温乾燥機で12時間乾燥させた。次に、880℃のマッフル炉で2.5時間強熱乾燥させた。得られた減量分をそれぞれ、H₂O⁻およびH₂O⁺とした。

乾燥後の粉末から、ガラスビード試料を作成した(中野・角縁ほか, 2009)。ガラスビード作成には、融剤はLi₂B₄O₇=20%、LiBO₂=80%の混合試薬(Johnson-Matthey社製 Spectro flux 100B)、剥離剤は無水ヨウ化リチウムを用いた。まず、電子天秤を用いて試料1.8000gと融剤3.6000g(混合比=1:2)を正確に秤量しメノウ乳鉢で混合した。混合後、粉末を残らず白金るつぽに移し、ビードサンプラーを用いてガラスビードを作成した。ビードサンプラーの融解条件は、予備加熱は800℃で60秒、本加熱は1200℃で180秒、揺動加熱は1200℃で330秒(揺動)で行なった。揺動中に剥離剤をマイクロスパテル1杯分加えた。溶融後、白金るつぽから試料を取り出せない場合は、剥離剤をマイクロスパテル1杯加え、再溶融させた。ガラスビード試料を用いて、各元素の測定を行った。九州大学大学院比較社会文化研究院設置の波長分散型蛍光X線分析装置(W-XRF:リガク製ZSX primus II)を用いて、主要10元素[SiO₂・TiO₂・Al₂O₃・Fe₂O₃・MnO・MgO・CaO・Na₂O・K₂O・P₂O₅] (wt%) および微量19元素[V・Cr・Co²⁺・Zn・Ga・Ni・Cu・Rb・Sr・Y・Zr・Nb・Ba・La・Ce・Nd・Sm・Pb・Th] (ppm) を測定した。分析結果が表2である。測定条件の詳細は、中野・角縁ほか(2009)および中野・小山内ほか(2012)を参照されたい。

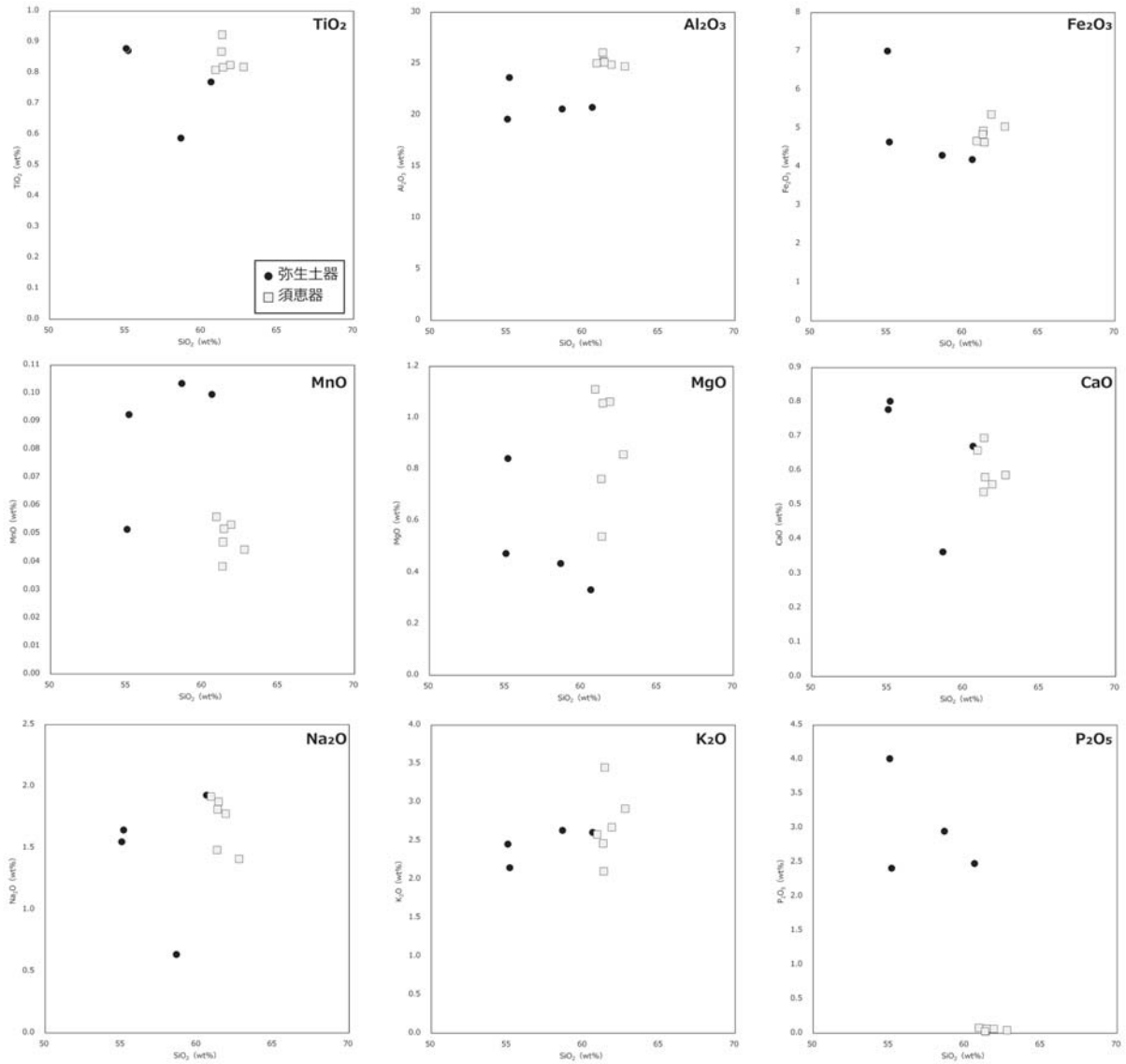


図156 主要成分のハーカー図
縦軸は各主要成分の重量%、横軸は SiO₂含有量 (wt%)。

3. 分析結果および考察

(1) 弥生土器と須恵器の比較

①全体の傾向

ハーカー図（図156～158）の元素分布をみると、いずれの元素でも、弥生土器と須恵器は異なる分布を示す。弥生土器の分析値は分布範囲が大きい、須恵器の分析値はまとまる傾向がある。これは、原材料や素材調整の均質度の違いが分析値として表れたものと考えられる。つまり、須恵器の生産体制が、生産単位や原材料確保、素地土調整などの点でより集約化した段階であることを示唆する（石田，2015）。

松本建速は、粘土の種類を判別する基準として Mn（マンガン）濃度に着目し、0.05wt%以上は褐色系粘土、0.05wt%以下は灰白色系粘土を用いたことを指摘した（松本，2011）。九州大学筑紫地区

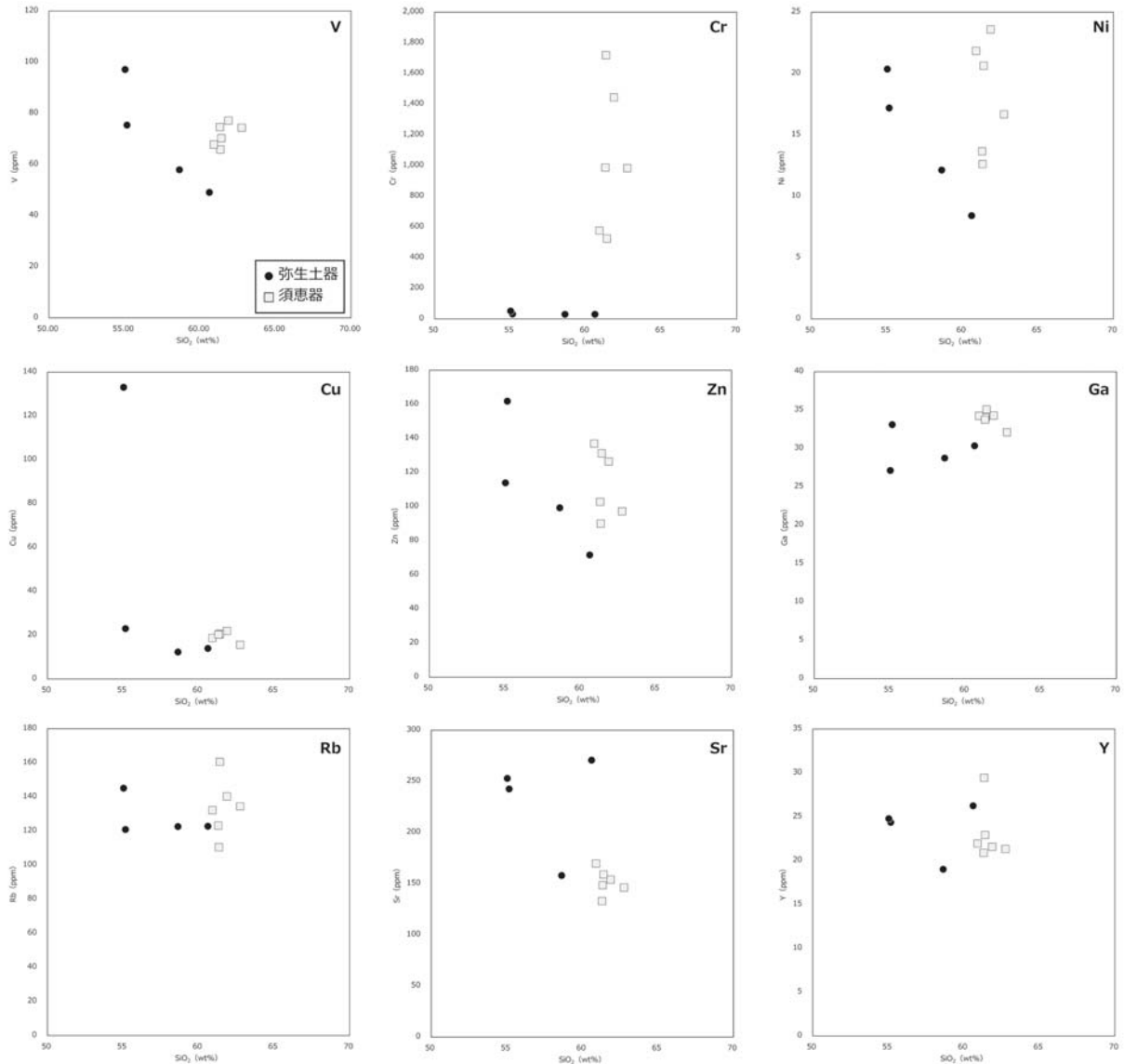


図157 微量元素のハーカー図1
縦軸は各微量元素の含有量 (ppm)、横軸はSiO₂含有量 (wt%)。

遺跡出土土器の場合、弥生土器は0.05wt%以上、須恵器は0.05wt%以下にプロットされる。そのため、弥生土器は褐色系粘土、須恵器は灰白色系粘土を用いており、両者で粘土が使い分けられている。粘土の採掘場所も時代に応じて変化したと考えられる。

②埋没環境との関係

須恵器と比べて、弥生土器はP（リン）とBa（バリウム）を多量に含む。Pは土壤中のFe（鉄）やAl（アルミニウム）と強く結合して難溶性の化合物となるため保存性が高く、このようなPの性質を利用して、過去の地表における生命活動の有無の判定が可能となる（竹迫，1993）。埋蔵文化財資料を分析する際には、埋没環境の影響を考慮する必要がある。特に器表面が多孔質な低火度（600～800℃）焼成土器はP・Ca（カルシウム）・Baが吸着しやすいことが指摘されている（Duma，1972；松本，2002）。九州大学筑紫地区遺跡から出土した弥生土器の場合も、埋没時に周辺土壌から

III 理化学分析の結果

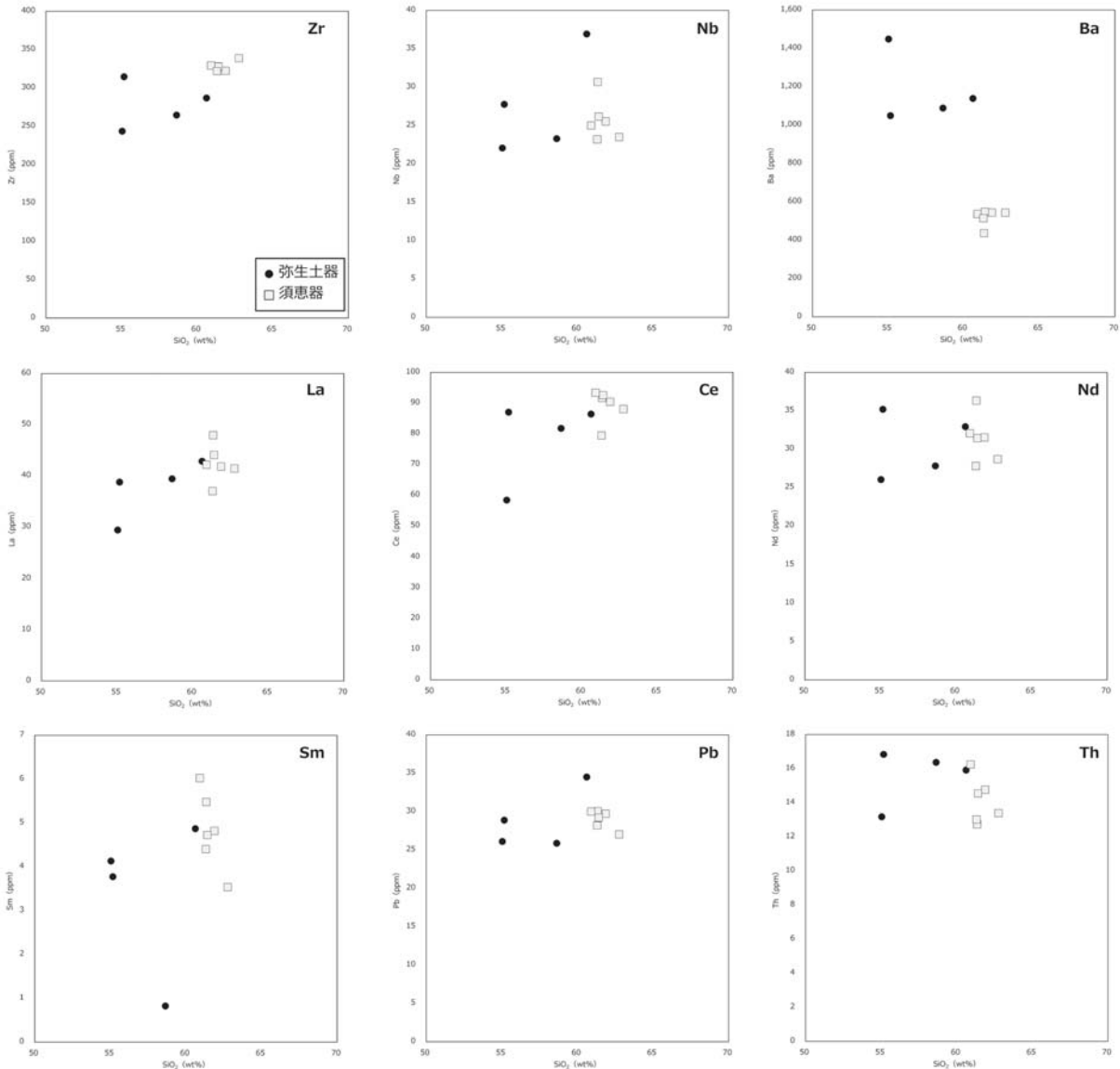


図158 微量元素のハーカー図2
縦軸は各微量元素の含有量 (ppm)、横軸は SiO₂含有量 (wt%)。

P・Baが吸着した可能性がある。遺跡が所在する春日丘陵は、アジア太平洋戦争前は果樹園や畑地として利用されていた(岩永・田尻編, 2009)。後世に利用した肥料等の化学成分が土器胎土の分析結果に影響している可能性も否定できない。そのため、土器の原材料や粘土の採取地点を把握することを目的として土器胎土の化学組成を検討する際には、埋没環境や地下水などの影響を受けない元素に着目することが望ましい。

近年、土器のリン含有率に基づいて粘土採取地を検討する研究成果が発表された(神野・安達ほか, 2020)。神野恵らは、平城京から出土した奈良時代後半の須恵器3点・土師器4点の含有元素を定量分析したところ、P₂O₅およびCaOの値が須恵器に比べて土師器は高いことから、これらの元素が肥料成分に由来する可能性が高いことを指摘した。参考に、平城京跡内の現代の水田耕土についても、地点と深度を変えて採取した土壌サンプルを同様の方法で測定している。結果として、土師器には田土、須恵器には山土³⁾が使用された可能性が高く、粘土選択や採取地が異なることを提起した。

須恵器に比べて、弥生土器や土師器がP・Caなどの特有の元素を多量に含む理由については、粘土採取地や焼成技術の違い、埋没環境の影響などの複合的な要因が関わると考えられる。分析点数をさらに増やして検討する必要がある。

③焼成諸条件と元素の関係

弥生土器と比べて、須恵器が多量に含む元素がCr（クロム）である。陶磁器の釉薬の研究を参照すると、第1遷移元素（Sc・Ti・V・Cr・Mn・Fe・Co・Ni・Cu・Zn）が着色に用いられることが多い（高嶋, 1996, p. 218）。また、酸化焰／還元焰の焼成雰囲気、還元濃度や還元開始温度などの焼成諸条件が、完成品の色調に大きく影響する（高嶋, 1996, p. 231）。これは、釉薬だけでなく、素地に含まれる微量元素とも関係する発色メカニズムであると考えられる。

三辻利一は、焼成実験の結果、焼成効果が元素化学組成（Si・K・Ca・Fe・Rb・Sr）に影響しないことを指摘した（三辻・脇田ほか, 1978；三辻, 1983, 2012, 2013など）が、その他の微量元素は十分に検討していない。焼成効果の影響については、薄片観察やX線回折分析による鉱物結晶構造変化からみた土器焼成温度推定（大沢・二宮, 1983）の脈絡で検討されることが多かった。今後は、さらに焼成実験を行い、焼成諸条件に応じた元素化学組成変化や、それにとまう発色メカニズムを検討する必要がある。結果によっては、原材料（粘土）、酸化焰焼成土器（弥生土器・土師器など）、還元焰焼成土器（須恵器・瓦など）を、統一判別基準で区分する妥当性を問い直すことになる。

(2) 周辺遺跡出土土器との関係

①弥生土器

弥生土器の分析結果について、九州大学筑紫地区遺跡から10km圏内にある久保園遺跡および那珂遺跡出土土器のデータ（石田ほか, 2012）を参照して述べる。

那珂遺跡（略称：NAK）は、那珂川と御笠川の間には散在する阿蘇-4火砕流堆積物からなる台地上に位置する。第130次調査SK14土坑から出土した弥生時代中期中頃～後半の甕3点を分析した。久保園遺跡（略称：KBZ）は、三郡変成岩類が貫入する月隈丘陵の西側斜面にある。第4次調査F区SD091溝砂層から出土した弥生時代中期後半の甕4点を分析した。なお、遺跡間距離は、九州大学筑紫地区遺跡-那珂遺跡は約7.2km、九州大学筑紫地区遺跡-久保園遺跡は約8.4km、那珂遺跡-久保園遺跡は約4.0kmである。

同一地域内においても、基本的に遺跡ごとに元素分布がまとまる。特に明瞭な違いを示すLa（ランタン）とCrの相関を図159に示す。KBZとQKSは集中度が高い。Laをはじめとする希土類元素は那珂川上流域を中心とする背振山地の早良花崗岩に、Crは三郡山地の苦鉄質片岩に濃集して分布する（今井ほか, 2004, 2010；柚原, 2010）ことから、土器の元素組成は遺跡が立地する地質環境を反映している。つ

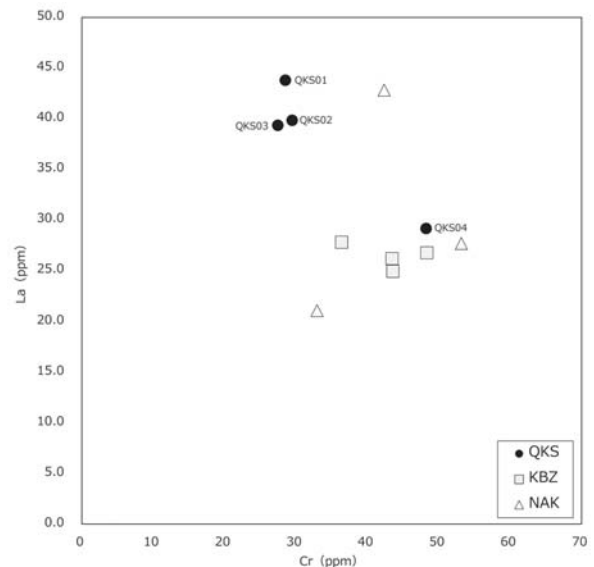


図159 LaとCrの相関

まり、近隣で採取可能な原材料を使用して土器を製作したと考えられる。また、近接する遺跡においても、地質環境ごとに特有の元素に着目すれば差異を析出することが可能となる見通しを得た。

ただし、QKS04はやや異なる値を示す。近隣集落間のヒトやモノの移動の結果持ち運ばれた土器の可能性もある。分析点数を増やすとともに、土器の形態や調整などの各属性をより詳細に観察することで、遺跡ごとの違いをさらに検討することが必要である。

一方で、NAKは特定の集中を示さず、分布がばらつく。那珂遺跡は福岡平野における中心的な遺跡であるため、ヒトの動きの集約点として近隣集落間または集落内で土器が頻繁に行き交った可能性がある。あるいは、御笠川・諸岡川の合流地点および那珂川に挟まれた台地上に遺跡が位置するため、複数の河川上流域に由来する地質構成物質が土器に含まれている可能性もある。非常に複雑な状況が推測されるため、大規模集落遺跡出土土器を分析する際には、資料の選定基準を明確にし、遺跡の性格や立地条件を考慮した検討が重要になる。現時点では分析点数が少ないため、詳細は不明である。

②須恵器

牛頸窯跡群の一部として、九州大学筑紫地区遺跡が所在するエリアでも須恵器生産が行われた。牛頸産須恵器は、編年、工人系譜、窯構造の変化、製作技法と器形的特徴、生産体制などの論点を中心に議論されてきた(石木, 2012)。肉眼観察で須恵器の産地を推定する際は、法量・形態的特徴・調整方法・色調・ヘラ記号の位置などの属性の複数の特徴を組み合わせて産地を判断するが、牛頸窯跡内では製作技術の点で顕著な地域的特徴をもたない(石木, 2012; 木村, 2012)。

そこで重要な役割を果たすのが胎土分析である。牛頸産須恵器の胎土分析は、三辻利一による一連の研究(三辻, 1997, 2003, 2007, 2012)が実施されており、総括報告書で成果が整理された(石川, 2008)。現段階では、同一の窯跡群内における窯間の相互識別は困難である集団として牛頸群をまとめ、他の窯跡群の母集団との相互識別を検討することで、牛頸産製品の伝播を追跡することが有効であると述べられている(三辻, 2003)。

牛頸産須恵器の生産・流通に関わる諸問題をさらに検討するために、地球科学的分析を用いた高精度胎土分析を進めている⁴⁾(石田, 2015)。分析の結果、粘土・須恵器・土師器類・弥生土器の元素値はそれぞれの種類ごとにまとまることになった。混和材など的人為的調整や焼成諸条件など、土器製作工程に関わる多様な要因が分析値に影響すると考えられる。また、須恵器を分析した結果、遺跡、時期、器種に応じた差異を析出した。今後さらに分析点数を増やすことで、牛頸窯跡群内における窯間の相互識別ができるようになる可能性は高い。

4. おわりに

九州大学筑紫地区遺跡出土土器を対象とした胎土分析は、第一歩を踏み出した段階である。現在はデータが少ないため言及できることは限られるが、弥生土器と須恵器の差異の析出、時空間の解析精度の高さについては見通しを得ている。数多くの遺跡が密集するエリアに位置しており、長期間にわたる多量の資料を有する遺跡であることから、周辺地域の調査成果も参照することで、当地で暮らしていた人びとの生活や社会に迫ることができる資料になる。これからの分析点数の増加とさらなる研究の深化を期待する。

本研究は、JSPS 科研費12J05912、15K21215、18K12556の成果の一部である。

註

- 1) QKS06は報告書掲載第319図21、QKS07は第321図3と同一資料である(西編, 1994)。その他の須恵器は未報告資料である。九州大学筑紫地区遺跡出土土器の分析にあたっては、石川健(九州大学埋蔵文化財調査室)、田尻義了(九州大学アジア埋蔵文化財研究センター)の両氏にご協力いただいた。
- 2) Co(コバルト)は試料粉碎時の器具からの影響が想定される(Rice, 1987, p. 421)ため、分析結果の解析からは除外する。
- 3) 神野恵ら(神野ほか, 2020)は、須恵器に含まれる黒色粒子を電子顕微鏡で観察した結果、木質片や種実などの植物遺存体が炭化した亜炭が確認されたことから、須恵器の材料が丘陵地帯で採取される亜炭を含む山土であることを指摘した。
- 4) 須恵器の胎土分析にあたっては、上園遺跡第13次調査で出土した資料を提供いただき、九州大学筑紫地区遺跡出土須恵器と比較した。九州大学筑紫地区遺跡と上園遺跡は約700mしか離れておらず、非常に近接した場所に位置する。分析に用いた上園遺跡の資料は、須恵器5点、須恵器焼成不良品1点、赤焼土器1点、土師器1点、粘土6点である。上園遺跡の発掘調査報告書が未刊行であるため、本稿ではデータの詳細は述べず、結果の一部を報告する。概要については、石田2015で発表した。上園遺跡出土須恵器・粘土の分析にあたっては、早瀬賢・石木秀啓(大野城市教育委員会)の両氏にご協力いただいた。

文献

- Duma, G., 1972. Phosphate content of ancient pots indication of use. *Current Anthropology*, 13 : 127-130.
- 石田智子2009「北部九州弥生時代中期の土器祭祀－九州大学筑紫地区8B区SK101土坑の位置付け－」(岩永省三・田尻義了編)『奴国の南－九大筑紫地区の埋蔵文化財』平成20年度九州大学総合研究博物館公開展示・九州国立博物館トピック展示図録、九州大学総合研究博物館、福岡、64-83頁
- 石田智子2015「土器生産体制解明における高精度元素分析の有効性」『平成27年度九州考古学会総会研究発表資料集』: 107-108
- 石田智子・米村和絃・足立達朗・中野伸彦・小山内康人・田中良之2012「那珂川・御笠川流域における弥生土器および粘土の胎土分析」『久保園遺跡4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1148集、福岡市教育委員会、福岡、371-376頁
- 石川健2008「Ⅶ. 自然科学的分析の成果」(舟山良一・石川健編)『牛頭窯跡群総括報告書Ⅰ』大野城市文化財調査報告書第77集、大野城市教育委員会、福岡、159-175頁
- 石木秀啓2012「筑紫の須恵器生産と牛頭窯跡群」『古文化談叢』67 : 23-54
- 今井登・寺島滋・太田充恒・御子柴(氏家)真澄・岡井貴司・立花好子・富樫茂子・松久幸敬・金井豊・上岡晃・谷口政碩2004『日本の地球化学図』産業技術総合研究所地質調査総合センター、茨城
- 今井登・寺島滋・太田充恒・御子柴(氏家)真澄・岡井貴司・立花好子・池原研・片山肇・野田篤・富樫茂子・松久幸敬・金井豊・上岡晃2010『海と陸の地球化学図』産業技術総合研究所地質調査総合センター、茨城
- 岩永省三・田尻義了編2009『奴国の南－九大筑紫地区の埋蔵文化財』平成20年度九州大学総合研究博物館公開展示・九州国立博物館トピック展示図録、九州大学総合研究博物館、福岡
- 神野恵・安達智彦・神屋道也・金田明大・村田泰輔・田中秀弥・降幡順子2020「須恵器と土師器の粘土採取地に関する基礎研究」『日本文化財科学会第37回大会研究発表要旨集』: 180-181
- 神野恵・村田泰輔・金田明大2020「須恵器の墨ほかしは「炭」ほかし」『奈良文化財研究所紀要2020』: 20-21
- 木村龍生2012「九州の古墳時代須恵器の生産と流通」『生産と流通』九州考古学会・嶺南考古学会第10回合同考古学大会発表資料集 : 51-59
- 松本建速2002「浜中2・種屯内遺跡出土土器の胎土分析」『先史学・考古学研究』13 : 1-15
- 松本建速2011「化学成分からみた縄文～平安時代の土器の胎土」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』15 : 31-48
- 三辻利一1983『古代土器の産地推定法』、ニューサイエンス社、東京
- 三辻利一1997「牛頭石坂窯出土土器の蛍光X線分析」『牛頭石坂窯跡－E地点－』大野城市文化財調査報告書第49集、大野城市教育委員会、福岡、25-29頁
- 三辻利一2003「牛頭窯跡群の須恵器の化学的特性」『牛頭本堂遺跡群Ⅰ』大野城市文化財調査報告書第61集、大野城市教育委員会、福岡、30-32頁
- 三辻利一2007「梅頭1号窯跡出土須恵器の化学特性」『牛頭梅頭遺跡群Ⅰ』大野城市文化財調査報告書第60集、大野城市教育委員会、福岡、68-71頁

Ⅲ 理化学分析の結果

- 三辻利一2012「薬師の森遺跡10・20次調査出土須恵器試料の蛍光 X 線分析」『乙金地区遺跡群5』大野城市文化財調査報告書第102集、大野城市教育委員会、福岡、55-61頁
- 三辻利一2013『新しい土器の考古学』、同成社、東京
- 三辻利一・脇田宗孝・円尾好宏・喜多孝行・新浜夕起子1978「須恵器産地分析に関する基礎研究（第5報）－須恵器焼成による化学組成への影響について－」『古文化財教育研究報告』7：51-59
- 中野伸彦・角縁進・小山内康人・米村和絃・桑原義博2009「低希釈率ガラスビードを用いた主成分・微量・軽希土類元素の定量」『比較社会文化』15：1-15
- 中野伸彦・小山内康人・足立達朗・米村和絃・吉本紋・Nugroho SETIAWAN 2012「蛍光 X 線分析装置・レーザー溶出型誘導結合プラズマ質量分析計を用いた低希釈率ガラスビードの主成分・微量・希土類元素の迅速定量分析」『比較社会文化』18：81-94
- 西健一郎編1992『九州大学埋蔵文化財調査報告（第一冊）』、九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室、福岡
- 西健一郎編1993『九州大学埋蔵文化財調査報告（第二冊）』、九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室、福岡
- 西健一郎編1994『九州大学埋蔵文化財調査報告（第三冊）』、九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室、福岡
- 大沢真澄・二宮修治1983「胎土の組成と焼成温度」（加藤晋平・藤本強・小林達雄編）『縄文文化の研究5 縄文土器Ⅲ』、雄山閣出版、東京、20-46頁
- Rice, P. M., 1987. *Pottery Analysis : A Sourcebook*. University of Chicago Press, Chicago.
- 高嶋廣夫1996『陶磁器釉の科学（第二版）』、内田老鶴圃、東京
- 竹迫絃1993「リン分析法」『第四紀試料分析法2研究対象別分析法』、東京大学出版会、東京、38-45頁
- 柚原雅樹2010「福岡県内の地球化学図」『福岡大学研究部論集 C：理工学編』2：91-107
- 脇田浩二・井川敏恵・宝田晋治編2009『20万分の1日本シームレス地質図 DVD 版』数値地質図 G-16、産業技術総合研究所地質調査総合センター、茨城

図版出典

図154：20万分の1日本シームレス地質図（脇田ほか編2009）、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ（標高）、国土交通省発行の国土数値情報（河川・海岸線）を使用し、ArcGIS9.3.1および Adobe IllustratorCS6で作成。図155：筆者実測。図156～159および表1・2：筆者作成。

2 出土炭化米の形質・DNA・年代

上條信彦、田中克典、伊藤 茂・安 昭炫・佐藤正教
廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadize

1. 形状分析試料と分析方法

九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）の出土米100粒について粒形質分析を実施した。出土地点は6G区398掘立柱建物跡のP-1であり、遺構内の採取された種子の入った土壌をフルイによって選別したものである。なお、分析結果は田中・上條（2014）で公表しており、本稿ではその際検討できなかった属性の検討、周辺遺跡との比較を加えた。また、時期については、田中・上條（2014）では、出土地点より古代と推定されたが、後述のように年代測定をした結果、弥生時代中期初頭のものだと判断された。

形状分析の方法は、100粒を任意で選び出したのち、イネ種子1粒ごと200mmのマクロレンズ（Ai AF Micro-Nikkor 200mm f/4D IF-ED, (株)ニコン）を装着したカメラ（FinePix S1 Pro, フジフィルム (株)）で撮影した。種子の長さとお幅をImage J 1.47（National Institute of Mental Health, USA）を用いて計測した。分析属性は、種子長と種子幅から、粒型（長幅比）と粒大（長幅積）を算出した。なお、粒大と粒型、集団内の平均、標準偏差および集団間の有意差検定はEXCEL 統計 ver. 7.0（(株)エスミ）により実施した。粒型、粒大の組み合わせ基準および呼称は佐藤敏也の分類（佐藤, 1971）に従った（表3）。

2. 形状分析の結果（表4・8・図162）

観察の結果、100粒全てがイネであった。種皮や糊が付着しておらず全て胚乳（玄米）の状態であった。

種子長と種子幅はそれぞれ 4.33 ± 0.26 mmおよび 2.41 ± 0.17 mmで、それぞれ正規分布を示す。長幅の相関係数は0.251と弱い相関がある。種子長と種子幅との比（粒型）は1.38~2.25の範囲にあり、それに基づくと粒型は、中短粒51%、長短粒36%を占め、短長粒、短短粒、長円粒が10%以下となる。また、種子長と種子幅の積（粒大）は7.94~12.53の範囲にあり、その値に基づくと粒大は、小型が92%と主体的であり、極小型、中型と続く。また、粒型と粒大を組み合わせると、正規分布を示し中短粒の小型44%、長短粒の小型36%の2タイプが主体となる。

表3 出土米の粒型と粒大の分類基準

| 粒型 | 長幅比 | 粒大 | 長幅積 |
|----|-----|-----------|---------------|
| 長粒 | 長 | 2.60-3.60 | 極大 20.00以上 |
| | 中 | 2.30-2.60 | 大 16.00-20.00 |
| | 短 | 2.00-2.30 | 中 12.00-16.00 |
| 短粒 | 長 | 1.80-2.00 | 小 8.00-12.00 |
| | 中 | 1.60-1.80 | 極小 8.00以下 |
| | 短 | 1.40-1.60 | |
| 円粒 | 長 | 1.20-1.40 | |
| | 中 | 1.00-1.20 | |
| | 短 | 1.00以下 | |

*佐藤（1971）の一部を改変した。

表4 粒型・粒大の組み合わせ

| 粒型 | 粒大 | | | | | 計 | |
|----|----|----|----|---|----|-----|----|
| | 極小 | 小 | 中 | 大 | 極大 | | |
| 長粒 | 長 | — | — | — | — | — | |
| | 中 | — | — | — | — | — | |
| | 短 | — | 8 | 1 | — | — | 9 |
| 短粒 | 長 | — | 36 | — | — | — | 36 |
| | 中 | 1 | 44 | 6 | — | — | 51 |
| | 短 | — | 3 | — | — | — | 3 |
| 円粒 | 長 | — | 1 | — | — | — | 1 |
| | 中 | — | — | — | — | — | — |
| | 短 | — | — | — | — | — | — |
| 計 | 1 | 92 | 7 | — | — | 100 | |

3. DNA 分析の方法

現生イネの DNA や異物による汚染を排除するために、DNA 分析には弘前大学人文社会科学部の古 DNA 実験室を利用した。分析の手順・方法は田中克典ほか（2015）に依拠した。分析では、種子遺存体の母系や多様性を分析するために、4つの DNA マーカーを用いた（表5）。これらのうち、葉緑体ゲノムの DNA マーカーは2つで、*petN* と *trnC* との遺伝子間領域 (*petN-trnC*) にある挿入または欠失、および *rpl14* と *rpl16* との遺伝子間領域 (*rpl14-rpl16*, PS-ID) にある単純反復配列 (Nakamura et al, 1997 ; Tanaka et al, 2010 ; 石川ほか, 2014) である。これらはイネにおいて品種群を同定できる¹。核ゲノムの DNA マーカーは、イネ第6染色体領域に座乗する欠失マーカー (IDJ6, 花森ほか, 2011) およびイネ第7染色体領域に座乗する種皮色関連遺伝子 (*Rc*) の挿入マーカーである (Furukawa et al, 2007)。前者はイネにおいて温帯ジャポニカと熱帯ジャポニカとインディカとを区分する。後者は、赤色種皮イネ (*Rc*) と褐色種皮イネ (*rc*) とを区分する。マーカーを挟む4つの領域を PCR 増幅して塩基配列を解析するために、公開されているイネ葉緑体ゲノムおよび核ゲノムの塩基配列 (accession No. AY522330, NC_008399, NC_008400) に基づいて、Primer 3により特異的プライマーセットを設計した。これらのプライマーセットによって増幅される産物の期待サイズは100 bp 以下とした。なお、IDJ6については挿入断片の有無を確認するために、挿入領域にリバースプライマー (R2) を設計して、フォワードプライマー (F) との PCR 増幅を試みた。

分析対象は形態分析を行った粒のうち表6 試料番号1～20番目に相当する20粒である。

表5 PCR 増幅に使用したプライマー

| ゲノム | 遺伝子 ¹ 名 | プライマー配列 | | 位置 (bp) ¹ | | アニーリ ング温度 (°C) | 多型 タイプ | 期待サイズ (bp) ² | | | |
|---------|--------------------------------|--|-------------------------|----------------------|---|----------------------|-----------|-------------------------|--------------|--------------|-------|
| | | Forward (F), Reverse (R) Primer (5' to 3') | | | | | | イン ディカ | ジャポニカ 熱帯型 | ジャポニカ 温帯型 | |
| 葉緑体 | <i>petN</i> <i>-trnC</i> | F | ATCAGTTCAAAGAATTTACTC | 17,758 | – | 17,778 | 55 | 挿入 ・欠失 | 107 | 75 | 75 |
| | | R | TATTTATACTTAATGCTCCCC | 17,832 | – | 17,812 | | | | | |
| | <i>rpl14</i> - <i>rpl16</i> | F | TCAATTTCTTCGGTTAGAAATA | 77,753 | – | 77,732 | 58 | 単純反 復配列 | 97 | 94 | 94 |
| | | R | GAAAGAAATATTGTCTTTCCAG | 77,660 | – | 77,681 | | | | | |
| 核 第6染色体 | 遺伝子間 領域 | F | TGACCGTTCTGTAGCAGTG | 9,043,039 | – | 9,043,058 | | 挿入 ・欠失 | | | |
| | | R1 | CCAGTTTAATGTTTTTCATTGCC | 9,043,136 | – | 9,043,113 | 52 | | 349 | 349 | 98 |
| | | R2 | GATTTTCCGTTTTCCCGTCC | – | – | – | 57 | | 102 | 102 | 非増幅 |
| | | | | | | | | | | | |
| 第7染色体 | <i>Rc</i> | F | CAGAAACACCTGAATCAAGGG | 6,100,183 | – | 6,100,203 | 55 | 挿入 ・欠失 | 85/99 | 85/99 | 85/99 |
| | | R | TCTCTTTCAGCACATGGTTG | 6,100,267 | – | 6,100,248 | | | | | |

¹遺伝子名および位置はデータベースにて登録されている cv. 'Nipponbare' の葉緑体ゲノム配列 (accession No. NC_001320, NC_008155)、イネ第6染色体 (No. NC_008399) およびイネ第7染色体 (NC_008400) の配列を参照した。

²イネ第6染色体における遺伝子間領域において、上段および下段のアニーリング温度や期待サイズは、それぞれF1とR1およびF1とR2のプライマーセットで PCR 増幅した際の条件である。赤色種皮および褐色・白色種皮のイネにおいて、*Rc* 領域の期待サイズはそれぞれ85 bp および99 bp である。

4. DNA 分析の結果

葉緑体ゲノムの2つの領域ならびに核ゲノムの2つの領域について、それぞれの特異的プライマーセットで PCR 増幅したが、期待サイズの DNA 断片は認められなかった。以上から、本遺跡の出土米は、利用した試料において標的とした DNA 領域が劣化していたとみられる。

5. 年代測定の方法

出土イネ1粒（試料番号1）を、パレオ・ラボ AMS 年代測定グループに依頼し、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

測定試料の情報、調製データは表6のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C 年代、暦年代を算出した。

表6 測定試料および処理

| 測定番号 | 遺跡データ | 試料データ | 前処理 |
|-----------|--|------------------|--|
| PLD-31493 | 採取地：福岡県 九州大学筑紫地区 試料 No.KYUS1 備考：21 | 種類：炭化米 状態：dry | 超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N） |

6. 年代測定の結果

表7に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C 年代を、図160に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C 年代は AD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C 年代（yrBP）の算出には、¹⁴C の半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C 年代がその¹⁴C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C 濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴C の半減期5730 \pm 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C 年代の暦年較正には OxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された¹⁴C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

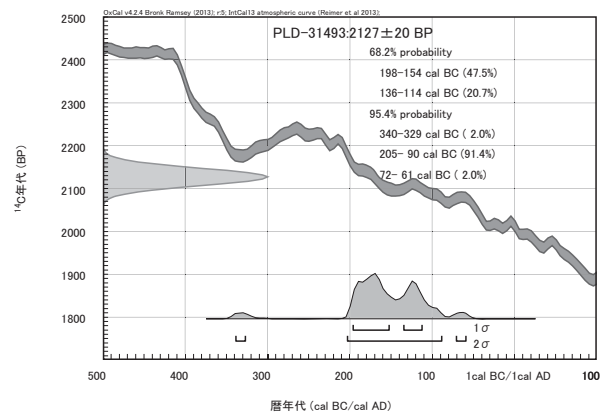


図160 暦年較正結果

表7 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

| 測定番号 | $\delta^{13}\text{C}$ (%) | 暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$) | ^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$) | ^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲 | |
|--------------------------|---------------------------|-------------------------------|--|--|---|
| | | | | 1 σ 暦年代範囲 | 2 σ 暦年代範囲 |
| PLD-31493 試料 No.KYUS1 | -26.46 \pm 0.15 | 2127 \pm 20 | 2125 \pm 20 | 198-154 cal BC (47.5%) 136-114 cal BC (20.7%) | 340-329 cal BC (2.0%) 205- 90 cal BC (91.4%) 72- 61 cal BC (2.0%) |

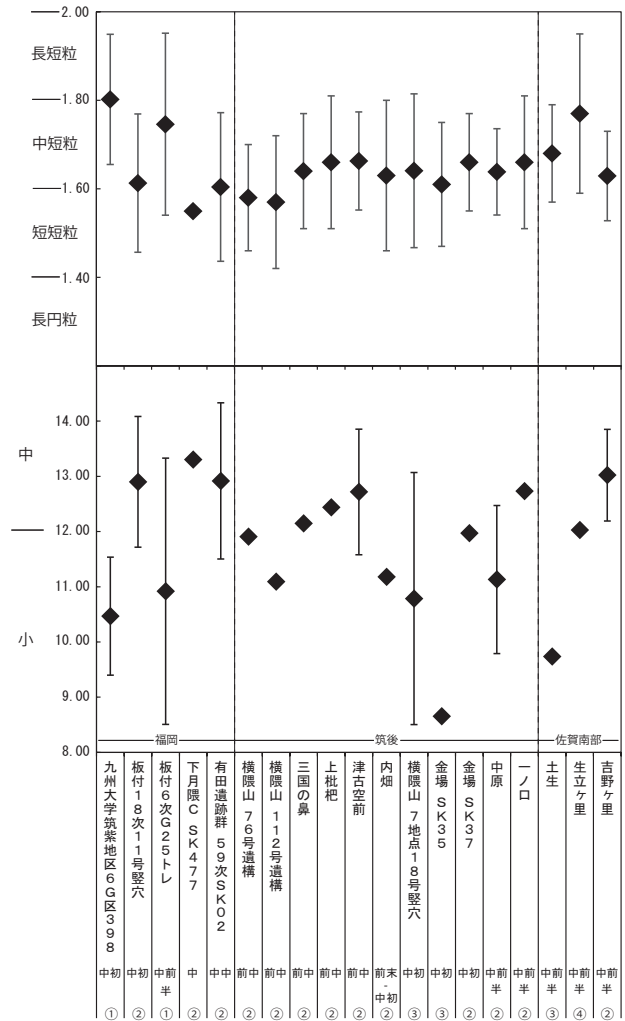
7. 周辺遺跡との比較からみたイネの特徴

本分析の結果とこれまでの分析結果との比較を行い、本遺跡出土米の形質的特徴を述べたい。図161は弥生時代前期中葉～中期前半の福岡・筑後・佐賀南部の3地域における16遺跡19試料の粒型・粒大平均、および標準偏差を示したものである（和佐野, 1993；佐藤ほか, 2005；和佐野, 2009；小泉ほか, 2018；小泉ほか, 2019）。なお図中のバーは標準偏差を示し、イネ形態のばらつき程度を表す。

上條 (2018) では、粒型1.7, 粒大11.0を基準に、粒型1.7以上, 粒大11.0未満の長粒・小型米が多いパターン①と、粒型1.7未満, 粒大11.0以上の円粒, 中型米が多いパターン②、粒型1.7未満, 粒大11.0未満の円粒・小型米が多いパターン③、粒型1.7以上、粒大11.0以上の長粒・中型米が多いパターン④の4区分した。

パターン化した結果、弥生時代中期の福岡地域では、夜臼期から展開し始めるパターン①と、前期中葉から増加するパターン②が展開することが分かっている。パターン①は、須玖I式期の板付遺跡第6次G-25トレンチでみられる。そのほかは、19試料中13試料(約7割)がパターン②であり、福岡・筑後の平野部ではパターン②の形態的特性を持つ品種を中心に水田による安定的な生産活動がうかがえる。

本分析結果は、粒型平均1.8、粒大平均10.47であり、パターン①に属す。同じパターン①がみられた板付遺跡は同時期かつ同じ御笠川流域にある。この点で上條 (2018) の結果を支持する。そのほか、地域差が出てくるのも特徴で、中期初頭以降、筑後地域の三国丘陵や佐賀南部ではパターン③が出現する。よって、パターン①がある本結果は福岡平野、



津古空前・吉野ヶ里：和佐野1993、窪居10次・下月隈C：佐藤ほか2005、中原・板付6次・板付18次・有田遺跡群59次・横隈山7地点：小泉ほか2018、その他：和佐野2009、九州大学筑紫地区：本結果。丸数字は上條(2018)におけるパターン。バーがないものは、文献記載がなく不明。

図161 周辺における弥生時代前期中葉～中期前半の粒型・粒大

なかでも御笠川流域の特徴として捉えられるかもしれない。

次に標準偏差が示すばらつき程度をみると、本結果は粒型0.15、粒大1.07で前期に比べるとばらつきは縮小する。上記19試料の平均は粒型0.14、粒型1.46なので、粒型は平均に近く、粒大はより小さいといえる。よってばらつきからみても、形質の特徴にかなりまとまりがあり、比較的画一性の高い形質のイネが栽培されていたといえる。

DNA の分析結果では、炭化や酸化により劣化し、その検出には至らなかった。なお本結果と同じパターン①である前期末の綾羅木郷遺跡出土イネ（長短粒～中短粒、小～極小型）からは、熱帯ジャポニカと判定された DNA が検出されている（小泉ほか2018）。この点から本例に多い長短粒の小型米には、熱帯ジャポニカが含まれると推察される。

このように、本結果は同時期の福岡平野の特徴と一致し、弥生時代のイネ粒形質の共通性を知ることができる。また形質の画一性や、ばらつきの小ささからは比較的形質がそろった品種のイネが選択的に栽培されていたことをうかがわせる。

註

1. 2014年分析時点での見解である。現在では PS-ID のみでは品種群を同定できないので、別のマーカーも用いられている。

文 献

- Bronk Ramsey, C., 2009. Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51(1) : 337-360.
- Furukawa T, Maekawa M, Oki T, et al., 2007. The Rc and Rd genes are involved in proanthocyanidin synthesis in rice pericarp. *Plant Journal* 49 : 91-102.
- 花森功仁子・石川智士・齋藤 寛 他 2011 「DNA の欠失領域を用いた栽培イネ *Oryza sativa* L. の熱帯ジャポニカ型と温帯ジャポニカ型の識別マーカーの作出と登呂 I 期遺跡から出土した炭化種子への応用」『東海大学紀要 海洋学部「海－自然と文化」』 9 : 19-25
- 石川隆二・宇田津徹朗・松田隆二・田淵宏明・田中克典・上條信彦 2014 「イネ種子の形態および DNA 配列からみた東北における水稲農耕受容の検討」『考古学と自然科学』 67 : 57-72
- 上條信彦2018 「水稲農耕定着段階における九州出土米の粒形質変異」『九州考古学』 93 : 1-21
- 上條信彦・小泉翔太2019 「九州大学所蔵出土米の形態分析」（宮本一夫編）『東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究』九州大学大学院人文科学研究科考古学研究室 福岡、164-198頁
- 小泉翔太・田中克典・上條信彦2018 『日本の出土米Ⅲ 佐藤敏也コレクションの研究2』弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター 弘前
- 小泉翔太・上條信彦・田中克典2019 『日本の出土米Ⅳ』弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター 弘前
- 松本 豪 1994 「日本の稲作遺跡と古代米に関する研究」"Bulletin of the University of Osaka Prefecture." Ser. B, Agriculture and life sciences. 61. 2章 : 145-165.
- Mutou C, Tanaka K, Ishikawa R., 2014. DNA extraction from rice endosperm (Including a protocol for extraction of DNA from ancient Seed samples). In: Henry RJ, Furtado A, (Ed.), *Cereal Genomics: Methods and Protocols, Methods in Molecular Biology* vol. 1099. Springer Science, Business Media, New York : 7-15.
- Nakamura I, Kameya N, Kato Y, et al.,1997. A proposal for identifying the short ID sequence which addresses the plastid subtype of higher plants. *Breeding Science* 47 : 385-388.
- 中村俊夫2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」（日本先史時代の14C 年代編集委員会編）『日本先史時代の14C 年代』日本第四紀学会 東京 : 3-20
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J., 2013. IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age

Ⅲ 理化学分析の結果

Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon* 55(4) : 1869-1887.

佐藤敏也1971『日本の古代米』雄山閣出版 東京

佐藤洋一郎・柴内佐知子・那須浩郎2003「第6次調査出土のイネ種子およびその他の植物遺体の分析」『下月隈C遺跡V』（福岡市埋蔵文化財調査報告書839）福岡：205-210

田中克典・上條信彦2014『日本の出土米Ⅰ』弘前大学人文学部北日本考古学研究センター 弘前

田中克典・上條信彦・佐藤洋一郎2015『日本の出土米Ⅱ 佐藤敏也コレクションの研究』六一書房 東京

Tanaka K, Honda T, Ishikawa R., 2010. Rice archaeological remains and the possibility of DNA archaeology: examples from Yayoi and Heian periods of Northern Japan. *Archaeological and Anthropological Sciences* 2 : 69-78.

和佐野喜久生2009「炭化米の粒形質の変異分布と古代日本稲作の起源」『日本考古学』28 : 23-40

表8 6G区398掘立柱建物跡P-1出土米の計測結果

| 番号 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 粒型 | | 粒大 | | 備考 | 番号 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 粒型 | | 粒大 | | 備考 |
|----|------------|-----------|------|-----|-------|----|----|-----|------------|-----------|------|-----|-------|---|------|
| | | | 長幅比 | 型 | 長幅積 | 型 | | | | | 長幅比 | 型 | 長幅積 | 型 | |
| 1 | 3.95 | 2.11 | 1.87 | 短長粒 | 8.33 | 小 | | 51 | 5.10 | 2.31 | 2.21 | 長短粒 | 11.78 | 小 | |
| 2 | 4.46 | 2.65 | 1.68 | 中短粒 | 11.82 | 小 | | 52 | 4.30 | 2.34 | 1.84 | 短長粒 | 10.06 | 小 | 一部破壊 |
| 3 | 4.35 | 2.48 | 1.75 | 中短粒 | 10.79 | 小 | | 53 | 4.46 | 2.65 | 1.68 | 中短粒 | 11.82 | 小 | |
| 4 | 4.59 | 2.48 | 1.85 | 短長粒 | 11.38 | 小 | | 54 | 3.98 | 2.45 | 1.62 | 中短粒 | 9.75 | 小 | |
| 5 | 4.66 | 2.65 | 1.76 | 中短粒 | 12.35 | 中 | | 55 | 4.08 | 2.35 | 1.74 | 中短粒 | 9.59 | 小 | |
| 6 | 4.63 | 2.41 | 1.92 | 短長粒 | 11.16 | 小 | | 56 | 4.59 | 2.62 | 1.75 | 中短粒 | 12.03 | 中 | |
| 7 | 4.29 | 2.11 | 2.03 | 長短粒 | 9.05 | 小 | | 57 | 4.63 | 2.62 | 1.77 | 中短粒 | 12.13 | 中 | |
| 8 | 4.59 | 2.55 | 1.80 | 短長粒 | 11.70 | 小 | | 58 | 4.18 | 2.31 | 1.81 | 短長粒 | 9.66 | 小 | |
| 9 | 4.25 | 2.11 | 2.01 | 長短粒 | 8.97 | 小 | | 59 | 4.66 | 2.38 | 1.96 | 短長粒 | 11.09 | 小 | |
| 10 | 4.29 | 2.52 | 1.70 | 中短粒 | 10.81 | 小 | | 60 | 4.25 | 2.65 | 1.60 | 中短粒 | 11.26 | 小 | |
| 11 | 4.15 | 2.31 | 1.80 | 中短粒 | 9.59 | 小 | | 61 | 4.49 | 2.55 | 1.76 | 中短粒 | 11.45 | 小 | 一部破壊 |
| 12 | 3.98 | 2.45 | 1.62 | 中短粒 | 9.75 | 小 | | 62 | 4.66 | 2.45 | 1.90 | 短長粒 | 11.42 | 小 | |
| 13 | 4.18 | 2.59 | 1.61 | 中短粒 | 10.83 | 小 | | 63 | 4.39 | 2.42 | 1.81 | 短長粒 | 10.62 | 小 | |
| 14 | 4.39 | 2.55 | 1.72 | 中短粒 | 11.19 | 小 | | 64 | 4.63 | 2.62 | 1.77 | 中短粒 | 12.13 | 中 | |
| 15 | 4.29 | 2.24 | 1.92 | 短長粒 | 9.61 | 小 | | 65 | 3.98 | 2.31 | 1.72 | 中短粒 | 9.19 | 小 | |
| 16 | 4.86 | 2.52 | 1.93 | 短長粒 | 12.25 | 中 | | 66 | 4.32 | 2.52 | 1.71 | 中短粒 | 10.89 | 小 | |
| 17 | 4.39 | 2.24 | 1.96 | 短長粒 | 9.83 | 小 | | 67 | 4.18 | 2.14 | 1.95 | 短長粒 | 8.95 | 小 | |
| 18 | 4.46 | 2.38 | 1.87 | 短長粒 | 10.61 | 小 | | 68 | 4.29 | 2.55 | 1.68 | 中短粒 | 10.94 | 小 | |
| 19 | 4.35 | 2.45 | 1.78 | 中短粒 | 10.66 | 小 | | 69 | 4.12 | 2.35 | 1.75 | 中短粒 | 9.68 | 小 | |
| 20 | 4.25 | 2.52 | 1.69 | 中短粒 | 10.71 | 小 | | 70 | 4.29 | 2.45 | 1.75 | 中短粒 | 10.51 | 小 | |
| 21 | 4.35 | 2.52 | 1.73 | 中短粒 | 10.96 | 小 | | 71 | 4.08 | 2.38 | 1.71 | 中短粒 | 9.71 | 小 | |
| 22 | 4.18 | 2.35 | 1.78 | 中短粒 | 9.82 | 小 | | 72 | 4.43 | 2.45 | 1.81 | 短長粒 | 10.85 | 小 | |
| 23 | 4.15 | 2.35 | 1.77 | 中短粒 | 9.75 | 小 | | 73 | 4.18 | 1.97 | 2.12 | 長短粒 | 8.23 | 小 | |
| 24 | 4.15 | 2.55 | 1.63 | 中短粒 | 10.58 | 小 | | 74 | 4.63 | 2.55 | 1.82 | 短長粒 | 11.81 | 小 | |
| 25 | 4.32 | 2.62 | 1.65 | 中短粒 | 11.32 | 小 | | 75 | 4.73 | 2.41 | 1.96 | 短長粒 | 11.40 | 小 | |
| 26 | 4.73 | 2.48 | 1.91 | 短長粒 | 11.73 | 小 | | 76 | 4.32 | 2.38 | 1.82 | 短長粒 | 10.28 | 小 | |
| 27 | 4.76 | 2.52 | 1.89 | 短長粒 | 12.00 | 小 | | 77 | 3.98 | 2.59 | 1.54 | 短短粒 | 10.31 | 小 | |
| 28 | 4.59 | 2.41 | 1.90 | 短長粒 | 11.06 | 小 | | 78 | 4.69 | 2.08 | 2.25 | 長短粒 | 9.76 | 小 | |
| 29 | 4.76 | 2.52 | 1.89 | 短長粒 | 12.00 | 小 | | 79 | 4.01 | 2.55 | 1.57 | 短短粒 | 10.23 | 小 | |
| 30 | 4.22 | 2.69 | 1.57 | 短短粒 | 11.35 | 小 | | 80 | 4.15 | 2.52 | 1.65 | 中短粒 | 10.46 | 小 | |
| 31 | 3.71 | 2.14 | 1.73 | 中短粒 | 7.94 | 極小 | | 81 | 4.39 | 2.38 | 1.84 | 短長粒 | 10.45 | 小 | |
| 32 | 4.35 | 2.31 | 1.88 | 短長粒 | 10.05 | 小 | | 82 | 3.95 | 2.35 | 1.68 | 中短粒 | 9.28 | 小 | |
| 33 | 4.12 | 2.45 | 1.68 | 中短粒 | 10.09 | 小 | | 83 | 4.01 | 2.14 | 1.87 | 短長粒 | 8.58 | 小 | |
| 34 | 4.42 | 2.04 | 2.17 | 長短粒 | 9.02 | 小 | | 84 | 4.39 | 2.48 | 1.77 | 中短粒 | 10.89 | 小 | |
| 35 | 4.32 | 2.18 | 1.98 | 短長粒 | 9.42 | 小 | | 85 | 3.67 | 2.25 | 1.63 | 中短粒 | 8.26 | 小 | |
| 36 | 4.25 | 2.41 | 1.76 | 中短粒 | 10.24 | 小 | | 86 | 4.22 | 2.35 | 1.80 | 中短粒 | 9.92 | 小 | |
| 37 | 4.32 | 2.65 | 1.63 | 中短粒 | 11.45 | 小 | | 87 | 3.98 | 2.41 | 1.65 | 中短粒 | 9.59 | 小 | |
| 38 | 4.35 | 2.48 | 1.75 | 中短粒 | 10.79 | 小 | | 88 | 4.35 | 2.25 | 1.93 | 短長粒 | 9.79 | 小 | 一部破壊 |
| 39 | 3.95 | 2.38 | 1.66 | 中短粒 | 9.40 | 小 | | 89 | 4.49 | 2.28 | 1.97 | 短長粒 | 10.24 | 小 | |
| 40 | 3.88 | 2.82 | 1.38 | 長円粒 | 10.94 | 小 | | 90 | 3.95 | 2.35 | 1.68 | 中短粒 | 9.28 | 小 | |
| 41 | 4.15 | 2.48 | 1.67 | 中短粒 | 10.29 | 小 | | 91 | 4.69 | 2.62 | 1.79 | 中短粒 | 12.29 | 中 | |
| 42 | 4.29 | 2.18 | 1.97 | 短長粒 | 9.35 | 小 | | 92 | 4.25 | 2.35 | 1.81 | 短長粒 | 9.99 | 小 | |
| 43 | 4.01 | 2.31 | 1.74 | 中短粒 | 9.26 | 小 | | 93 | 4.16 | 2.25 | 1.85 | 短長粒 | 9.36 | 小 | |
| 44 | 4.22 | 2.01 | 2.10 | 長短粒 | 8.48 | 小 | | 94 | 4.73 | 2.65 | 1.78 | 中短粒 | 12.53 | 中 | |
| 45 | 4.29 | 2.35 | 1.83 | 短長粒 | 10.08 | 小 | | 95 | 4.60 | 2.42 | 1.90 | 短長粒 | 11.13 | 小 | |
| 46 | 4.63 | 2.41 | 1.92 | 短長粒 | 11.16 | 小 | | 96 | 4.49 | 2.48 | 1.81 | 短長粒 | 11.14 | 小 | 一部破壊 |
| 47 | 4.39 | 2.07 | 2.12 | 長短粒 | 9.09 | 小 | | 97 | 4.22 | 2.31 | 1.83 | 短長粒 | 9.75 | 小 | |
| 48 | 4.46 | 2.48 | 1.80 | 中短粒 | 11.06 | 小 | | 98 | 4.32 | 2.55 | 1.69 | 中短粒 | 11.02 | 小 | |
| 49 | 4.52 | 2.52 | 1.79 | 中短粒 | 11.39 | 小 | | 99 | 4.66 | 2.52 | 1.85 | 短長粒 | 11.74 | 小 | |
| 50 | 4.56 | 2.55 | 1.79 | 中短粒 | 11.63 | 小 | | 100 | 4.18 | 2.48 | 1.69 | 中短粒 | 10.37 | 小 | |

Ⅲ 理化学分析の結果

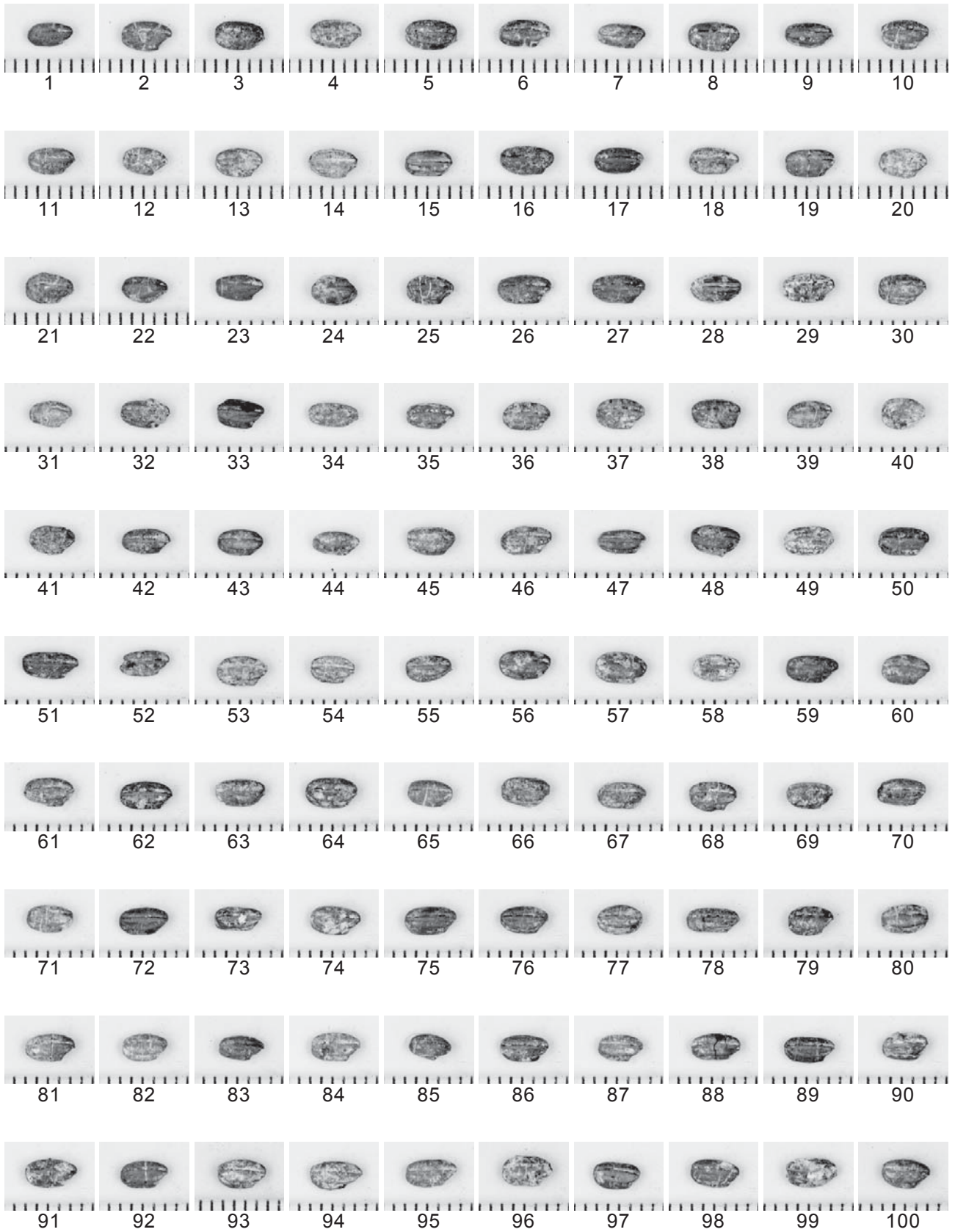


図162 6G区398掘立柱建物跡P-1出土米写真

3 出土木製品の保存処理

株式会社 九州文化財研究所 保存科学研究室

1. はじめに

今回は長期に冷蔵庫で保管され、脆弱性が顕著な木製品を預かり保存処理の可能性を検証した。

既存の出土木製品に対する保存処理方法では、処理に至るまでの保管方法や処理後の保管設備等多くの問題点を抱えており、完璧な手法は未だ開発されていない。本研究で行う保存処理方法のアクオシロキサン法は、熱や水に強く長期間変質しない特性を持つ有機ケイ素化合物（高分子シロキサンとシラン）を用いた手法でこれまでに行われていない方法である。しかし、どのような出土遺物に適しているかは検証中であり、また処理後どのような変化が生じるかも経過観察が必要である。そこで、本研究では、長期間水に浸漬して冷蔵庫で保管された脆弱な木質遺物へアクオシロキサン法を用いた保存処理技術の開発実験を行った。現段階では本開発実験は完成してはいないが、これまでの実験経過とその結果を報告する。

2. 出土遺物と保存処理方法

2-1. 対象遺物

本実験で用いたサンプルは昭和59年度春日原地区高エネ調査区より出土された木製品である。出土後、水に浸漬させた状態で冷蔵庫に約30年間保管されていた。

地中に埋蔵されている木製品は、酸素が極度に欠乏している状態のため腐朽菌による劣化が抑えられると考えられているが、長期間土中の中に埋没している間に、細胞壁が微生物により損傷したり、加水分解等の化学変化を起こすため木材の機能的強度は低下している。また、出土される木製品は、その土中環境によって劣化が少なく形状を保持しているものから、腐朽や分解が進み全く原形を留めていないものまで種々である。当然、分解の進んだものは出土後乾燥すると変形や損傷が著しく生じる（岩崎・樋口 1969）。

出土木製品の一次的な保管方法としては水中保管法が一般的であるが、保管水の蒸発・減少、保管水内での微生物繁殖による木製品の腐朽が危惧される。そのため、保管水の水位管理や微生物の繁殖を防ぐために保管液に防菌・防黴剤を添加するなどが行われている（服部・吉田 2004）。

埋没された状況では、土の重さによって大きな圧力がかかっても、埋蔵物にそれに対する応力が働く。また、土は無数の粒子が押しあっている状態であり、そこにかかる鉛直方向の荷重はあらゆる方向へ分散される。これらのことから、土圧によって埋蔵物が押しつぶされずその形状を保つことができると考えられる。しかし、出土された瞬間に圧力から解放されることで形状が保持できなくなることがある。さらに、酸素に触れることで変色や微生物による破壊などの問題が生じることがある。

今回預かった遺物は、冷蔵庫で水中保管されてはいたもの、保管液は水道水で防腐剤や防黴剤は添加されていない状況であった。したがって、木材そのものの老化に加え、低温放置による木繊維の破壊、微生物による生物劣化の影響など厳しい条件にさらされているといえる。預かった時点での状態は、すでに繊維はほぐれ、分解が著しく進んだ状況であった。

2-2. 使用薬剤

- ・エチレングリコール変成トリシロキサン (KD) : KD100, KD300, KD400
- ・アルコキシシラン (YT8, YT16)
- ・ウレタン樹脂 (酢酸ブチルで5倍希釈)

薬剤の役割について

- ・エチレングリコール変成トリシロキサン (KD100)
細部まで浸透でき、遺物の細部に入り込んだ水を押し出すことができるため、YT の浸透を助ける機能を有する。また、水の表面張力を小さくする性質があるため、遺物内の水分は生命活動に利用することのできない水へと変換される。そのため、KD100には、防腐、防黴、防虫など生物劣化に対する防腐剤や防虫剤としての機能も有する可能性があるといえる。
- ・エチレングリコール変成トリシロキサン KD300及び KD400 : 分子量が大きいため、浸透速度は遅い。あらかじめ分子量の小さな KD100 を浸透させておくことで浸透しやすくなる。また、水分を取り込むのは速いが、水分を押し出す速度は遅いため、遺物に変形する可能性があるものに関しては、高分子の KD を混合し、脱水速度を調整する。
- ・アルコキシシラン (YT)
耐水剤としての機能がある。しかし、単独では浸透力がないため、あらかじめ KD100 を混合する必要がある。また、先に KD100 のみを浸透させておくと、KD100 との混合液は浸透しやすくなる。水と反応しシラノールを生成することができ、遺物内で重合してポリシロキサンになることで遺物内に KD をとどめる。

2-3. 基本となる手順

(1)水に浸漬

- ・サンプルが完全に水に浸るようにする。

(2)一次浸漬

- ・容器にサンプルを設置する。
- ・ゆっくりと容器に一次浸漬液を入れ、温度30～40℃の環境下で浸漬する。

※一次浸漬液はサンプルによって条件を変える。

- ・浸漬液の状況 (YT16の重合的なものの形成状態) を観察しながら、取り上げ時期を判断する。

(3)二次浸漬

- ・容器にサンプルを設置する。
- ・ゆっくりと容器に二次浸漬液 (KD100 : KD300 = 1 : 2) を入れ、常温～40℃の環境下で浸漬する。

※二次浸漬液の割合に関しては、この割合より KD300が多くなると、遺物粘性が高まり遺物に負荷がかかる恐れがあり、KD100が多くなると水をとらえた KD 自身が遺物の中にとどまりにくくなるのが既に解っている。

- ・遺物の状況により取り上げ時期を判断する。

※二次浸漬液からの取り上げ時期は以前の実験から同じ条件のサンプルにおいて約2ヶ月以上の浸漬に関してはそれほどサンプルによって差がなかったことが解っているため、最低2ヶ月の浸漬を行い、状況を見て延長していくこととした。

(4)乾燥

- ・可能であれば二次浸漬液から取り上げ後、表面を軽く拭き取り、余分な薬剤が無くなるまで放置する。

3. 予備試験

3-1. 試験方法

24-00016のサンプルを使用して、薬剤の割合を変えて下記8種類の浸漬液で一次浸漬液の検討に関する予備試験をした。

- ① KD100 : YT16=1 : 1
- ② KD100 : YT8=1 : 1
- ③ KD100浸漬後 KD100 : YT16に浸漬
- ④ KD100浸漬後 KD300を追加
- ⑤ KD100 : KD300 : YT16=1 : 1 : 2
- ⑥ KD100 : KD300 : YT8=1 : 1 : 2
- ⑦ KD100 : KD400 : YT16=1 : 1 : 2
- ⑧ KD100 : KD400 : YT8=1 : 1 : 2

二次浸漬液は KD100 : KD300=1 : 2とした。

3-2. 予備試験の結果

- ・遺物の状態にもよるが、シロキサン KD300及び KD400への浸漬時間によって遺物が退色する場合がある。
- ・YT8を使用する場合、YT16を使用した場合のように重合状態を目視で判断出来ないため取り上げのタイミングが困難である。
- ・YT8を使用した場合、低分子のため木繊維内での定着がしにくく処理状況が不十分になる可能性があるが、比較的劣化の小さな物に関してはYT16よりも適している可能性もある。
- ・どのような処理をおこなっても、本来の遺物の状態が脆弱ということも有り、表面のべたつきは抑えることはできなかった。

以上のことから、本試験では一次浸漬液におけるシロキサンとシランの薬剤配合、表層のべたつき防止方法の検討を行うこととした。また、比較的低分子のシロキサン（KD100）を用いた出土後から処理にいたるまでの保管液の可能性の検討も行う事とした。

※残りの24-00016の遺物については未処理である。

4. 試験方法

4-1. 一次浸漬条件と強度について

予備試験の結果から以下のとおり一次浸漬条件を変え遺物との強度について検討した。（ ）の中の番号はサンプル番号である。

Ⅲ 理化学分析の結果

- a. 一次浸漬液のシロキサン (KD) とシラン (YT) を最初に混合するという条件で、薬剤の割合を変えて違いを検討した (24-0010, 24-0017)。
- b. 一次浸漬液のシロキサン (KD) とシラン (YT) を混合せず、始めに KD100 に浸漬した後、YT16 を加えるという条件で、薬剤の割合を変えて違いを検討した (24-00008a, 24-00006, 24-00018)。
- c. 一次浸漬液のシロキサン (KD) とシラン (YT) を混合せず、始めに KD100 に浸漬した後、KD300 と KD400 を追加していき最後に YT16 を塗布するという条件で、薬剤の割合を変えて違いを検討した (24-0007, 24-0008c,d)。
- d. 一次浸漬液のシロキサン (KD) とシラン (YT) を混合せず、始めに KD100 に浸漬した後、KD300 と KD400 を追加していき YT16 を使用しない条件で、薬剤の割合を変えて違いを検討した (24-0008b, 24-0013)。

※二次浸漬液は同じ条件のものとし、浸漬期間は最低約2ヶ月とした。

4-2. 表層のべたつきについて

どの処理液においてどの結果においても、べたつきが強くあるため、べたつきを抑える方法として下記の実験を行った。

- ①予備試験の結果より一次浸漬液は b の条件で行い、二次浸漬液は通常とおり KD100 : KD300 = 1 : 2 を用いた。二次浸漬から取り出した後、水へ浸漬させ、浸漬時間後の表層のべたつき状況を確認した (遺物番号24-0015)。水に浸漬後の状況によって再浸漬、もしくは YT16 の塗布を行った。
- ②二次浸漬後、表層にウレタン樹脂を塗布し、べたつき状況を確認した (遺物番号24-00008, 24-0010, 24-0017, 24-0018)。

4-3. 出土後の保管液としてのシロキサン (KD100) の可能性

出土後保管液として KD100 が有効であるか検討した。水に浸漬していた遺物を取り出し、KD100 に浸漬させ約10ヶ月後保存処理を行った。保存処理方法としては以下の条件で行った。

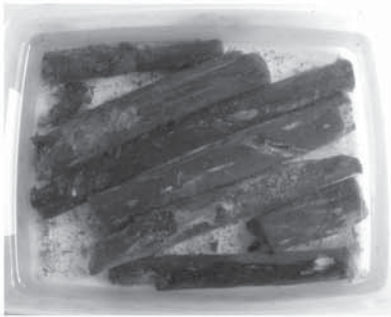
- a. 一次浸漬液のシロキサン (KD) とシラン (YT) を最初に混合したものに浸漬させ、その後二次浸漬液 (KD100 : KD300 = 1 : 2) に浸漬させた (24-0012)。
- b. 一次浸漬液のシロキサン (KD) とシラン (YT) を混合せず、始めに KD100 に浸漬した後、KD300 を追加したものに浸漬させ、YT16 を使用しない条件で行った (24-0009)。

5. 結果

5-1. 一次浸漬条件と強度について

- a. シロキサン (KD) とシラン YT16 を最初に混合した場合、水分を取り込んだ KD と YT が反応し白いゲル状のものを形成する。この白いゲル状のものが出来始めたときが、一番良い取り上げ時期であった。しかし、この時期に取り出さないと遺物に付着し除去するのが困難である。また、遺物を破壊する恐れが有る事が解った。ただし、遺物中の含水率が低いと YT16 であっても白色にならず取り出すタイミングの判断は困難である。これらのことから、埋蔵物の木製品を処理するとき、シロキサンとシランを最初に混合して処理を行うことは難しいといえる。

24-0010



預かり時



KD100浸漬 1 週間

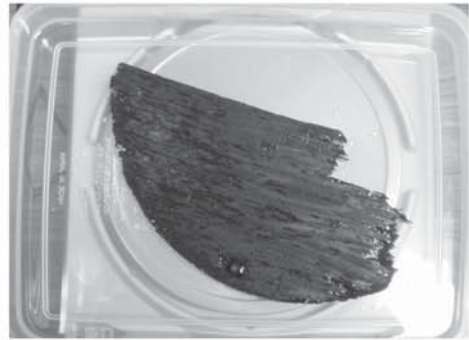


一次浸漬 5 日後



終了

24-0018



預かり時



KD100浸漬 2 週間後



二次浸漬



終了

図163 試験方法 a : 試料24-0010 と試験方法 b : 試料24-0018 の実験経過

- b. 一次浸漬液のシロキササン (KD) とシラン (YT) を混合せず、始めに KD100を浸漬した後、KD300と KD400を追加していき最後に YT16を加える場合、遺物の強度によって、分子量の大きなシロキササンの量を調整しないと、遺物内部まで薬剤が浸透しないことがわかった。また、うまく薬剤が浸透しても、数ヶ月後に割れや退色などが生じたことから、遺物の強度は見た目や触った状態での硬さだけではなく、木部細胞の分解状況も影響していると考えられる。ただし、aのように取り上げ時期を見逃すことは少なかった。
- c. 始めに KD100に浸漬した後、KD300と KD400を追加していき最後に YT16を塗布する場合表層だけ耐水処理された状況であり内部まで処理されたとは考えにくい。
- d. 処置を行ったが、どのような方法でも、遺物は退色する傾向が見られた。したがって、今回預かった遺物において、アクオシロキササン法は適した保存処理方法ではないと考えられる。

5-2. 表層のべたつきについて

べたつきを抑えるために表層にウレタン樹脂を塗布したが、遺物のべたつきを抑えることは出来なかった。また、再度水に浸漬した場合は、べたつき感は変わらず、薬剤が流れ出すことが確認された。

5-3. 出土後の保管液としてのシロキササン (KD100) の可能性

KD100の中で保管する事で一次的に形状は保持できるが、処理後 YT16使用に関わらず重量減少が著しい。長期的な KD100への浸漬は遺物の変形を招く場合があると考えられる。

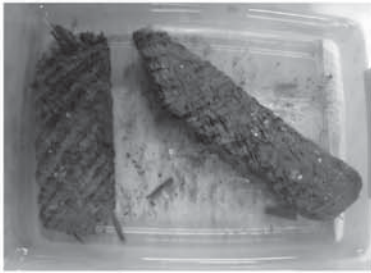
6. 考察

一次浸漬液は最初にシロキササン (KD) とシラン (YT) を混合してしまうと、取り上げ時の判断が難しく、判断を誤ると薬剤と遺物内の水分で形成されたゲル状の物に遺物が破壊される恐れがあることが解った。一次浸漬液は、シロキササンの中でも分子量の小さい物 (KD100) に、時間を空けて分子量の大きな物 (KD300や KD400) へゆっくり加えていき、最後にシラン (YT) を加える方が、ゲルの形成時期を見逃さないと考えられる。

しかし、どのような手順で処理を行っても、遺物表層のべたつきと半年後の遺物の退色が生じた。処理後、表層のべたつきを抑えるために、表層に希釈したウレタン樹脂を塗布しても、べたつきは消えず、退色が生じた。また、水に浸漬してもべたつきは取れず、長時間水に浸漬させたものは表層が一部乾燥し処理が不十分な状況になった。遺物を割り、内部を顕微鏡観察や分析を行って見ないと詳しい事は解らないが、本実験以外にこれまでに行った「出土後すぐに処理したもの」、「常温で数か月保管したものを処理したもの」、さらに「比較的劣化の少ないものを処理したもの」に関しては、退色が生じていないことから、遺物の退色原因として以下の理由が考えられる。

1. 出土されてから保存処理を行うまでに約30年経過しており、木材の繊維が老化や劣化したことで、空隙が大きく薬剤が細胞内の水分を捉えてもそのままとどまることができず、水分と色素成分が一緒に流出した。

24-0007



預かり時



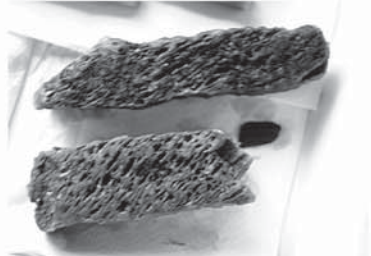
KD100浸漬1か月後



KD400添加1週間後



乾燥後ウレタン樹脂塗布



4か月後退色

24-0013



預かり時



KD100浸漬



KD100に同量のKD300を追加



終了

図164 試験方法c:試料24-0007 と試験方法 d:試料24-0013 の実験経過

24-0008



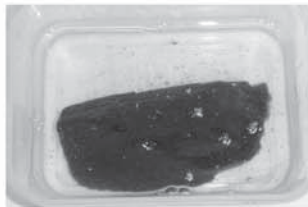
預かり時



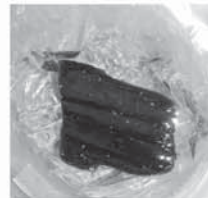
KD100浸漬2週間後



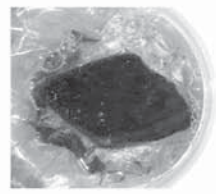
a) KD100に同量のYT16を追加



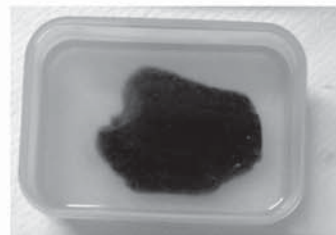
b) KD100に同量のKD300を追加



c) KD100に同量のKD300を追加



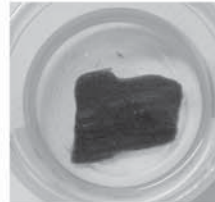
d) KD100に1/2のKD300と1/2KD400を追加



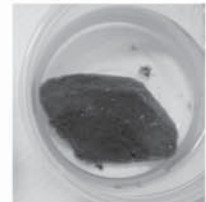
二次浸漬 a



b



c



d



終了

図165 試験方法 a-d: 試料24-0008 の実験経過

2. 冷蔵庫の奥で水道水による水中保管された。そのため、保管水中での微生物繁殖による木製品の腐朽が生じ、さらに低温保管により木材の繊維や細胞が破壊されてしまったため、薬剤が細胞内でとどまることができず流出し、色素成分も一緒に流出した。
3. 地中に埋蔵された状態で受ける土圧によって埋蔵物が押しつぶされずその形状を保っていたが、今回預かった遺物は高含水率で埋没していたため、出土された瞬間に圧力から解放されることで形状が保持できなくなり出土時に細胞の破壊が生じた。さらに、酸素に触れることで変色や微生物による破壊などの問題が生じた。

また、べたつきの問題については、べたつきの度合に関しては遺物の状態によるが、どのような遺物であってもべたつきは生じた。べたつきを抑える方法を今後検証する必要がある。

今回預かった遺物のように劣化や老化の進んだ脆弱性の著しい木製品の保存処理は、アクオシロキサン法によっても難しいことが解った。

ただ、既存の他の保存処理技術をもってしても今回のような「木材」としての本質的な要素を喪失した脆弱性の著しい遺物に対しては、十分な保存処理は困難であると考えられる。

参考文献

- 岩崎友吉・樋口清治1969『木製品の保存処置（第1報）－平城宮跡出土木簡等について－』、東京文化財研究所報告書、1-20頁
- 服部哲郎・吉田正道2004『プロピレングリコールを用いた出土木製品仮保管法に関する研究』、東京学芸大学紀要4部門、No.56：179～189

表9 九州大学木製品保存処理 試験方法一覧

| 目的 | 遺物番号 | 1次浸漬 (シロキサン充填強度調整) | | 強度調整 | シラン膜形成 | 二次浸漬 (除水) | べたつき調整 | |
|---------------------------------------|-----------|------------------------------------|----------------------------|-----------------|---------------------------|------------------|-------------------------|-------------------|
| 予備試験 | 24-0016① | KD100 : YT16= 1 : 1 | | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | — |
| | 24-0016② | KD100 : YT8= 1 : 1 | | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | — |
| | 24-0016③ | KD100 | KD100 : YT16 | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | — |
| | 24-0016④ | KD100 | KD300 | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | — |
| | 24-0016⑤ | KD100 : KD300 : YT16= 1 : 1 : 2 | — | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | — |
| | 24-0016⑥ | KD100 : KD300 : YT8= 1 : 1 : 2 | — | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | — |
| | 24-0016⑦ | KD100 : KD400 : YT16= 1 : 1 : 2 | — | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | — |
| | 24-0016⑧ | KD100 : KD400 : YT8= 1 : 1 : 2 | — | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | — |
| 強度調整2 | 24-0008① | KD100 | YT16 (KD100と同量) | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | ウレタン塗布 |
| | 24-0008② | KD100 | KD300 (KD100と同量) | | — | — | KD300を追加 (KD100と同量) | ウレタン塗布 |
| | 24-0008③小 | KD100 | KD300 (KD100と同量) | | YT16塗布 | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | ウレタン塗布 |
| | 24-0008④小 | KD100 | KD300+KD400 (KD100の1/2) | | YT16塗布 | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | ウレタン塗布 |
| KD100浸漬 保管での状態 変化 | 24-0018 | KD100 | YT16 (KD100と同量) | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | ウレタン塗布 |
| | 24-0017 | KD100 : YT16= 1 : 1 | — | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | ウレタン塗布 |
| 強度調整3 | 24-0007① | KD100 | — | KD100:KD400=2:1 | KD100 : YT16 =1 : 1に浸漬 | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | ウレタン塗布 |
| | 24-0007② | KD100 | — | KD100:KD400=2:1 | KD100 : YT16 =1 : 1に浸漬 | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | ウレタン塗布 |
| 出土後の保管 方法の検討 KD100に浸漬 保管の可能性 | 24-0012① | KD100 | YT16 (KD100と同量) | | — | KD100浸漬 へ長期浸漬 | KD100 : KD300 =1 : 2 | |
| | 24-0012② | KD100 | YT16 (KD100と同量) | | — | KD100浸漬 へ長期浸漬 | KD100 : KD300 =1 : 2 | |
| | 24-0012③ | KD100 | YT16 (KD100と同量) | | — | KD100浸漬 へ長期浸漬 | KD100 : KD300 =1 : 2 | |
| | 24-0012④ | KD100 | YT16 (KD100と同量) | | — | KD100浸漬 へ長期浸漬 | KD100 : KD300 =1 : 2 | |
| | 24-0009① | KD100 | KD300 (KD100と同量) | | — | KD100浸漬 へ長期浸漬 | — | — |
| | 24-0009② | KD100 | KD300 (KD100と同量) | | — | KD100浸漬 へ長期浸漬 | — | — |
| | 24-0013 | KD100 | KD300 (KD100と同量) | | | | | |
| | 24-0014 | KD100 | KD300 (KD100と同量) | | | | KD300を追加 (KD100と同量) | |
| | 24-0011 | KD100 | KD300 (KD100と同量) | | | | KD300を追加 (KD100と同量) | |
| べたつき調整 1 (水浸漬 時間差) | 24-0015① | (水浸漬) 未処理 (control) | — | | — | — | — | — |
| | 24-0015② | KD100 (control) | — | | — | — | — | — |
| | 24-0015③ | KD100 | YT16 (KD100と同量) | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | 水浸30分 |
| | 24-0015④ | KD100 | YT16 (KD100と同量) | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | 水浸1時間 |
| | 24-0015⑤ | KD100 | YT16 (KD100と同量) | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | 水浸2時間 |
| | 24-0015⑥ | KD100 | YT16 (KD100と同量) | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | 水浸3時間 |
| | 24-0015⑦ | KD100 | YT16 (KD100と同量) | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | 水浸6時間 |
| | 24-0015⑧ | KD100 | YT16 (KD100と同量) | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | 水浸7時間 |
| | 24-0015⑨ | KD100 | YT16 (KD100と同量) | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | 水浸6時間 YT16塗布 |
| | 24-0015⑩ | KD100 | YT16 (KD100と同量) | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | (control) |
| べたつき調整 2 (ウレタン塗布 回数) | 24-0010① | KD100 | YT16 (KD100の1/2) | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | 10倍希釈ウレ タン塗布 |
| | 24-0010② | KD100 | YT16 (KD100の1/2) | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | 8倍希釈ウレ タン塗布 |
| | 24-0010③ | KD100 | YT16 (KD100の1/2) | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | 5倍希釈ウレ タン塗布 |
| | 24-0010④ | KD100 | YT16 (KD100の1/2) | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | 10倍希釈ウレ タン2回塗布 |
| | 24-0010⑤ | KD100 | YT16 (KD100の1/2) | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | 10倍希釈ウレ タン3回塗布 |
| | 24-0010⑥ | KD100 | YT16 (KD100の1/2) | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | 10倍希釈ウレ タン4回塗布 |
| | 24-0010⑦ | KD100 | YT16 (KD100の1/2) | | — | — | KD100 : KD300 =1 : 2 | 10倍希釈ウレ タン浸漬 |

IV 考察

1 古墳時代から古代・中世にかけての遺構の時期と分布の推移

石川 健

1. 古墳時代 (図166)

古墳時代の遺構は、古墳時代前期の石釧が出土したSD316と古墳時代後期の住居跡を中心とした遺構に大きく分けることができる。SD316はエリアⅠの9・10-C・D・E区にかけて検出された溝で、弥生時代中期から古墳時代前期にかけて形成されている。石釧はこの溝の上層から4ヶ所に分かれて出土している。詳細な検討・位置づけはⅣ-2においてなされている。本遺跡群総括報告書Ⅰで述べた通り本遺跡群ではエリアⅡを中心に弥生時代後期後半から終末にかけての住居跡が複数認められた。このような住居跡から出土する土器には弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての土器も含まれる。また、詳細な報告はできなかつたもののSX303からは古墳時代前半期の遺物も多数出土している(西1994, p.431)。このようなことから古墳時代以降も本遺跡群での人間活動が継続していたものと推測される。

続く古墳時代中期については明確な遺構を確認できなかった。古墳時代後期になると住居跡を中心とした遺構が、エリアⅡ・エリアⅢ・エリアⅣに分布し、エリアⅠには土坑や溝が分布する。また古墳時代後期の可能性がある井戸(SE101)もこのエリアにみられる。

まずエリアⅠにはSK533とSK534が11E区に分布する。また須恵器の甕のみの出土で時期を明確にしづらいが隣接するSK535も後期の遺構の可能性が高い。また、8C区のSE101も弥生土器が中心に出土した井戸であるが、須恵器の小片がみられることからこの時期の井戸の可能性もある(西1993, p.243)。こららの他に、この時期の溝としてはSD108が7・8・9-B・C・D区に位置する。牛頸窯跡群の須恵器編年(舟山2008)のⅤ期の遺物・遺構は本遺跡群ではあまりみられないが、この溝からはⅣBからⅤ期の須恵器が多く出土する。この溝からは神ノ前2号窯跡出土瓦(酒井1979)と類似した特徴がみられる初期瓦も複数出土している。

後期にはその他にキャンパス内複数の範囲で住居跡が分布している。そのうちの一つはエリアⅡ西部の第9次調査区内7・8-G・H区に、SB209・SB203・SB225・SB226・SB205(B)・SB212・SB217・SB213・SB214・SB207・SB208・SB216・SB210などが分布する。さらに土師器のみの出土のため時期は判然としないがSB204とSB228もほぼ同じ時期の住居跡と推定される。住居跡の時期はⅢB期からⅣA期を中心としている。加えて、一部の住居跡からはⅣB期の須恵器も出土している。そのため、6世紀後半を中心とした時期に居住が行われていたもので、一部7世紀前葉ごろまで使用されていた居住域であろうと考えられる。

エリアⅢではSB001が1基検出されている。出土須恵器からⅣA期の時期と考えられる。さらに、エリアⅣにも複数基の住居跡が分布するが、エリアⅣ内北部域である第29次調査区と最も南に位置する第46次調査区に分布が分かれる。第29次調査区12H区ではSB413とSB414の2基が検出されている。

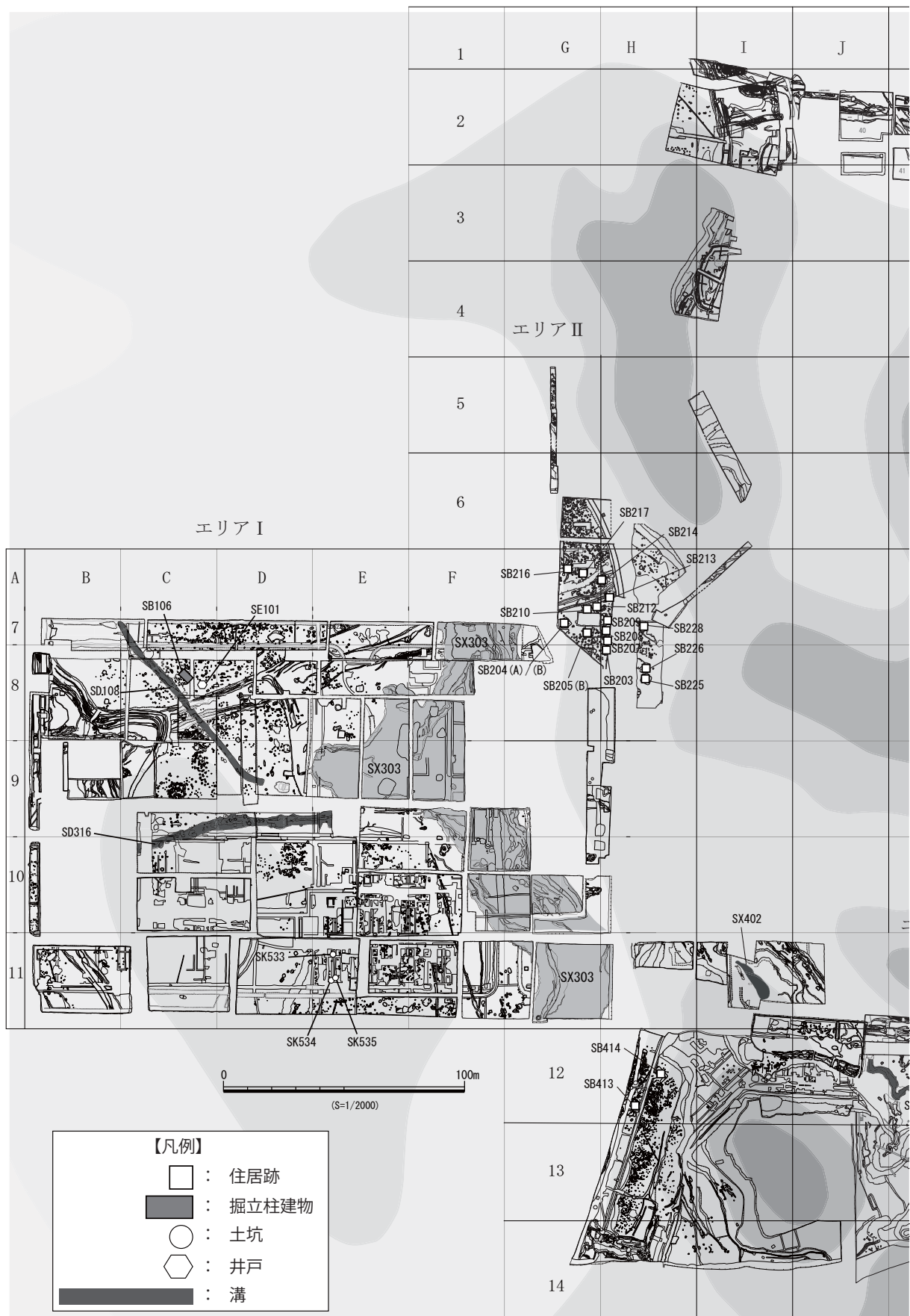
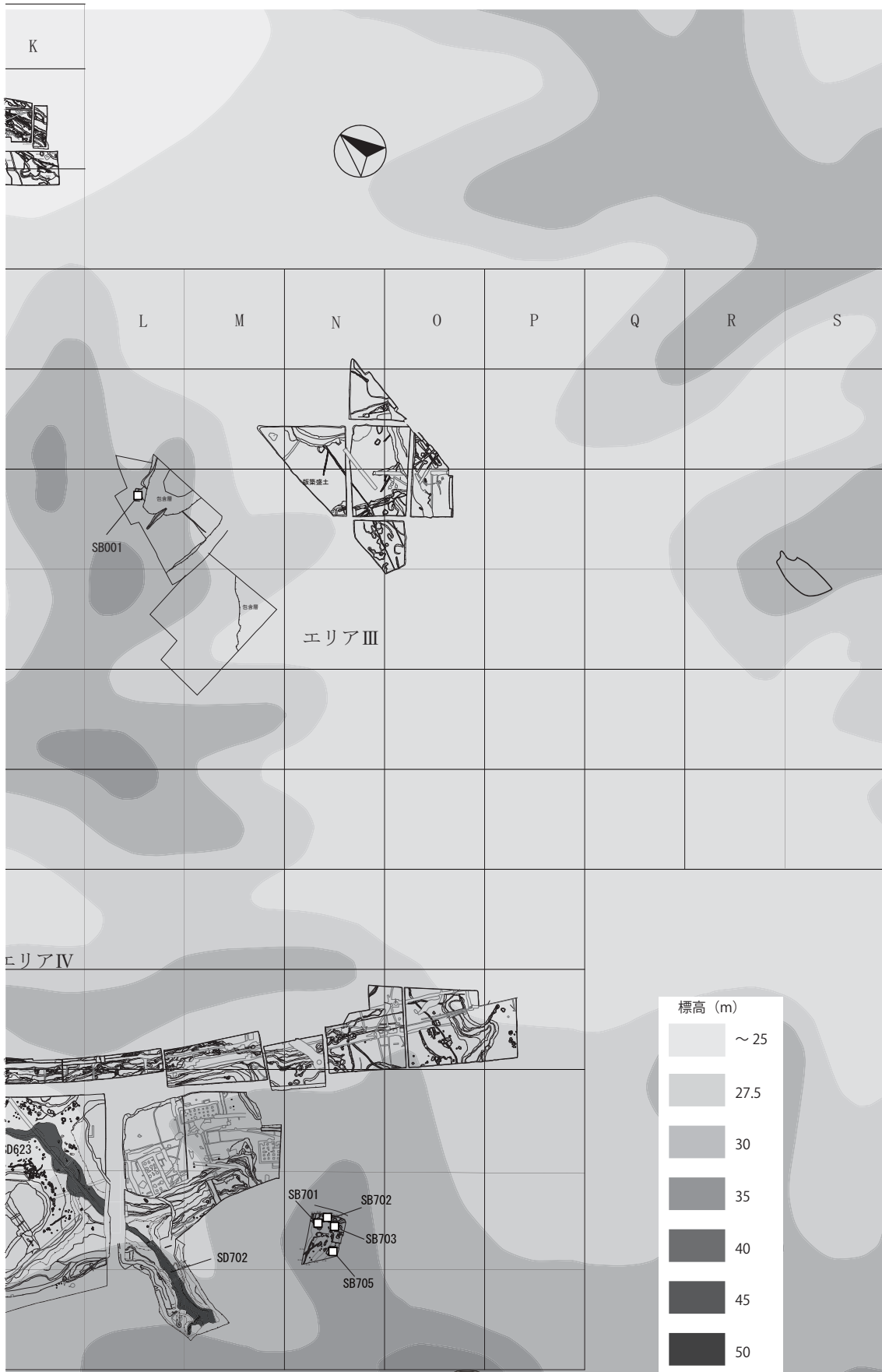


図166 古墳時代の遺構分布 (S=1/2000)

1 古墳時代から古代・中世にかけての遺構の時期と分布の推移



SB413は出土土器が非常に少なく時期の特定は難しいが、SB414出土土器と接合する土器片があることからSB414と近接した時期と考えられる。SB414からは土師器が出土しているが、時期はエリアⅢやエリアⅣの他の調査区で検出された住居跡とさほど異ならない時期、すなわち6世紀後半ごろと推測される。第46次調査区13N区からはSB701、SB702、SB703、SB704、SB705が調査されているが、遺物が出土しているSB701、SB702、SB703、SB705においては、ⅢB期の特徴を持つ須恵器が一部含まれるが、多くはⅣA期の須恵器が出土している。

このほかにエリアⅠでは掘立柱建物（SB106）が調査されている。しかし、出土遺物は弥生土器が主で時期を決めづらい。この掘立柱建物の時期については、上記のSD108と長軸がそろうことから古墳時代後期の建物と推定されている（西1993, p.241）。

以上の住居跡の様相をみると、エリアⅣ北部域のSB413とSB414など一部の住居跡以外は、6世紀後半から末、ないしは7世紀前葉までの住居跡が多く、かつ住居跡内出土土器の中に須恵器が多く含まれているという特徴がみられる。しかも、焼成時の焼け歪みにより器形が大きくゆがんだ須恵器や、熔着片のみられるものなどがかなりの住居跡から出土している。このように須恵器が中心となって出土する住居跡としては、近隣遺跡では惣利西遺跡（春日市教育委員会1985）がある。本遺跡群でも上記のように焼け歪みの著しいものを含む少なくはない量の須恵器が広い範囲の居住施設から出土しており、また後述のように須恵器生産が遺跡群内の複数ヶ所で行われていた可能性が高いことを考慮するならば、少なくとも一部の住居跡は須恵器生産に携わる集団と関係した居住施設である可能性が高いであろう。

これらに加え、古墳時代後期には須恵器生産に関わる遺構・遺物がエリアⅣを中心にして検出されている。エリアⅣ・SD623は第46次調査区に位置しており、谷に沿って南から北方向に検出されている。この溝からは須恵器生産に使用された当て具とタタキ板などが出土しており注目される（詳細はⅣ-3参照）。また、出土須恵器はⅣ期を中心とするが、1点のみⅧ期に属する二重口縁大甕（図129:663）が出土している。類似の甕は牛頸窯跡群内では石坂E-3号窯跡（石木1997）から出土しており、肥後の工人との関わりが指摘されている（石木2007）。また、このSD623の南側にはSD702が位置しており、Ⅳ期を主とする須恵器が出土している。このSD702はSD623と一連の溝であろう。

さらに11I区で灰原と推定されるSX402が検出されている。出土遺物にはⅢB期からⅣ期にかけての須恵器と、Ⅶ期に下る須恵器がみられる。また、今回報告できなかった資料にはⅢA期の遺物もみられる（西1994, pp.492-496）。そのためSX402は古墳時代後期と一部は古代においても形成されたものと考えられる。本キャンパス遺跡群は牛頸窯跡群の最北端に位置する。ところが、後世の削平のため敷地内で須恵器の窯跡は全く検出されなかった。しかし、SX402以外にもエリアⅡやエリアⅢなどの調査区で須恵器窯跡に由来すると考えられる窯壁片が出土している。また、焼け歪みの著しい須恵器も各エリアで少なからず認められる。このような状況証拠から、本来は須恵器の窯跡が複数のエリアにまたがって存在していた可能性が高く、牛頸須恵器窯跡群を構成する須恵器生産の地であったということはいえるであろう。

2. 古代（図167）

古代にはエリアⅠで住居跡として調査された遺構が1基みられる。10F区のSB409からはⅥ期とⅦ

期の須恵器小片が出土している。遺構の形状は不正形をしており柱穴等も検出されていないため住居跡であるかどうか不明な点もある。このほかにエリア I では 8E 区に SE301 が位置する。Ⅶ期の須恵器が中心であることから 8 世紀代の井戸と考えられる。溝としては、SD101 から古代の土器が出土している。主にⅥ期からⅦ期にかけての須恵器が出土するが、平安時代前期の瓦や古代末から中世にかけての磁器も出土している。加えて掘立柱建物である SB109 もエリア I ・ 8D 区に位置する。出土した遺物は弥生土器のみであるが、総柱建物でありまた至近の距離に SD101 が位置していることなどから官道に関連する奈良時代の遺構と推定されている（西1993, p.249）。エリア II では 7G 区 SB215 からⅦ A 期の須恵器が出土しており、8 世紀前半頃の遺構であろう。エリア III には版築盛土の SX301 と SX302B ・ C が分布する。SX301 出土の遺物は確認できていない。しかし、その南西側の SX302B ・ C でⅦ期からⅧ期を中心とする須恵器が出土しており、また瓦器碗もわずかにみられる。そのため、SX301 もほぼ同じ時期幅にわたり存続していたものと推定される。遺構の性格については IV - 7 で詳細な検討が行われているのでそちらを参照されたい。エリア IV では SD701 を古代の主たる遺構として挙げるができるであろう。この溝からはⅦ期を中心とした須恵器が出土する。また後述のように縄目叩きの平瓦を中心に瓦が大量に出土している。このほかに土師器も出土しているが、中でも高台付の鉢（図132：691-693）は丁寧なつくりであるが、周辺では太宰府市の筑前国分尼寺跡（狭川1995）や観世音寺（岡寺2007）や田川市天台寺跡（田川市教育委員会1990）など寺院に関連する遺跡で類例が認められる（狭川1995）。この溝からはその他にも墨書土器や硯なども出土しており、周辺には寺院跡があったものと推定されている（岩永・田尻2009）。上記の精製の高台付鉢もこのような SD701 周辺の施設の性格を考えるうえで参考となる資料であろう。さらに、この SD701 の北西方向には谷状の地形の SX001 と SX002 があり、その周辺から権状製品が出土している。近隣では 8 世紀代に使用されたとされる金属製の権が大宰府条坊跡 200 次調査で出土しており、大宰府条坊跡の他の調査でも複数金属製権が出土している（小鹿野2003）。また、SX001 と SX002 からは時期は不明ながら鞆の羽口や鉄滓も出土している。

古代にはこの他に、キャンパス内各所の溝を中心として奈良時代と平安時代の瓦が出土している。エリア I では、縄目叩きの瓦および格子目叩きの瓦が南西部の 10G 区 ・ SD408 やエリア I 南部一帯を流れる旧河川の SX303 から出土している。また、格子目叩きの瓦は上記の SD101 や SD307 から出土しており、SD307 からは平瓦や丸瓦に加え鬼瓦片が出土している。エリア II からも平成 7 年度調査区や平成 10 年度調査区などこのエリアの東部域から格子目叩きの瓦や鬼瓦片が出土している。エリア III では SX302 から縄目叩きの面戸瓦などが少数出土している。エリア IV には SD701 と SD513 を中心として奈良時代から平安時代にかけての瓦が多く出土する。これら 2 つの溝からは縄目叩きの瓦が多く出土する。さらにこれら溝の北側の谷状の範囲である SX001 と SX002 からも縄目叩きの瓦、格子目叩きの瓦の双方が出土する。このほかにエリア IV の北端部 ・ 14 - G ・ H 区の SD417 からは格子目叩きの瓦が出土している。これらの出土瓦の意義については IV - 6 にて詳細な考察が行われている。

3. 古代末から中世（図168）

古代末から中世にかけての遺構としてはエリア I 南西部の微高地周辺に多くの土坑や井戸が分布する。これらの遺構からは瓦器を中心として棒状土製品その他、瓦器や土師器の焼成に関わると推定される遺物が多く出土する（詳細は IV - 9 参照）。瓦器は 11 世紀末から 12 世紀前半のものが中心であろう。

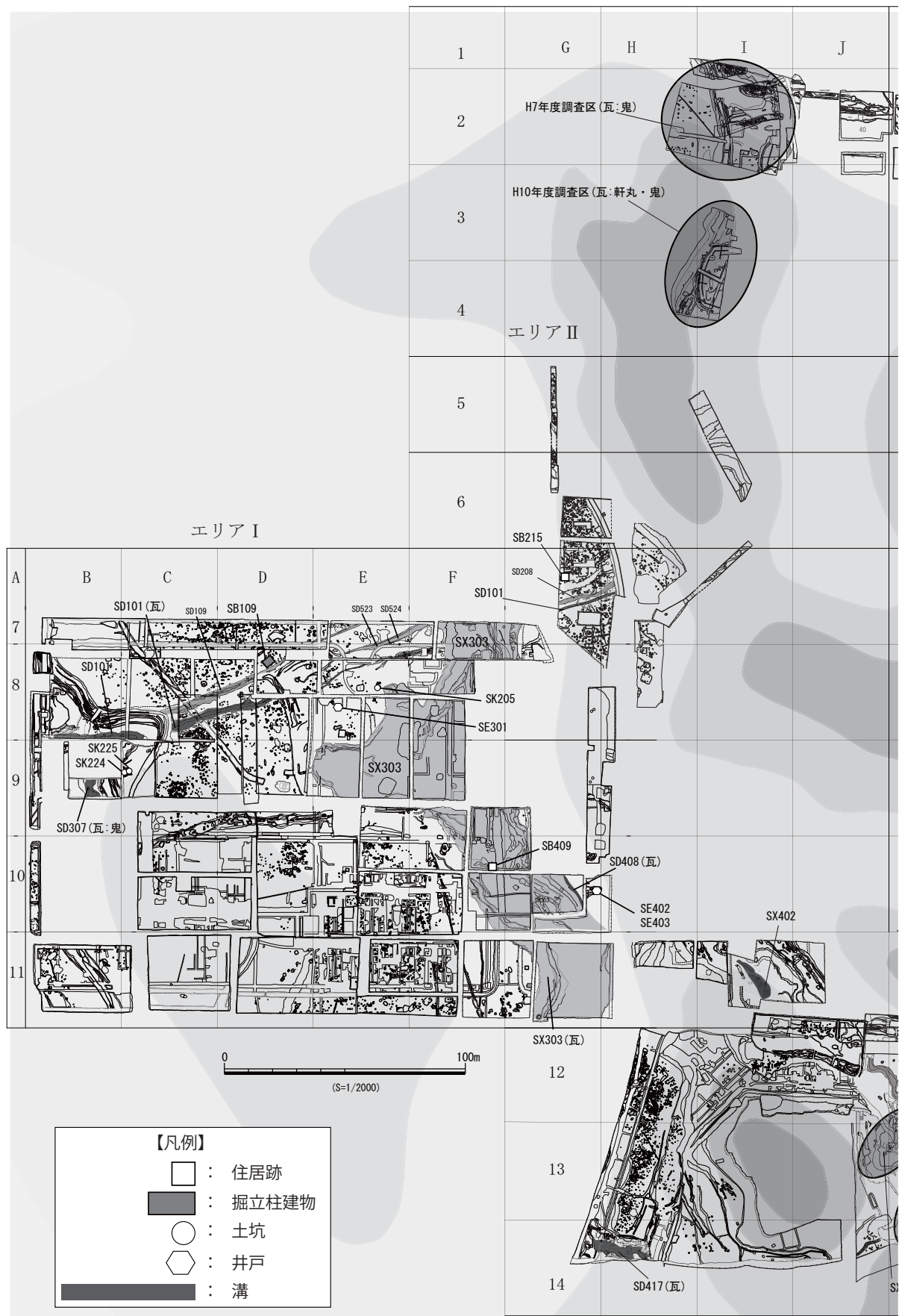


図167 古代の遺構分布 (S=1/2000)

1 古墳時代から古代・中世にかけての遺構の時期と分布の推移

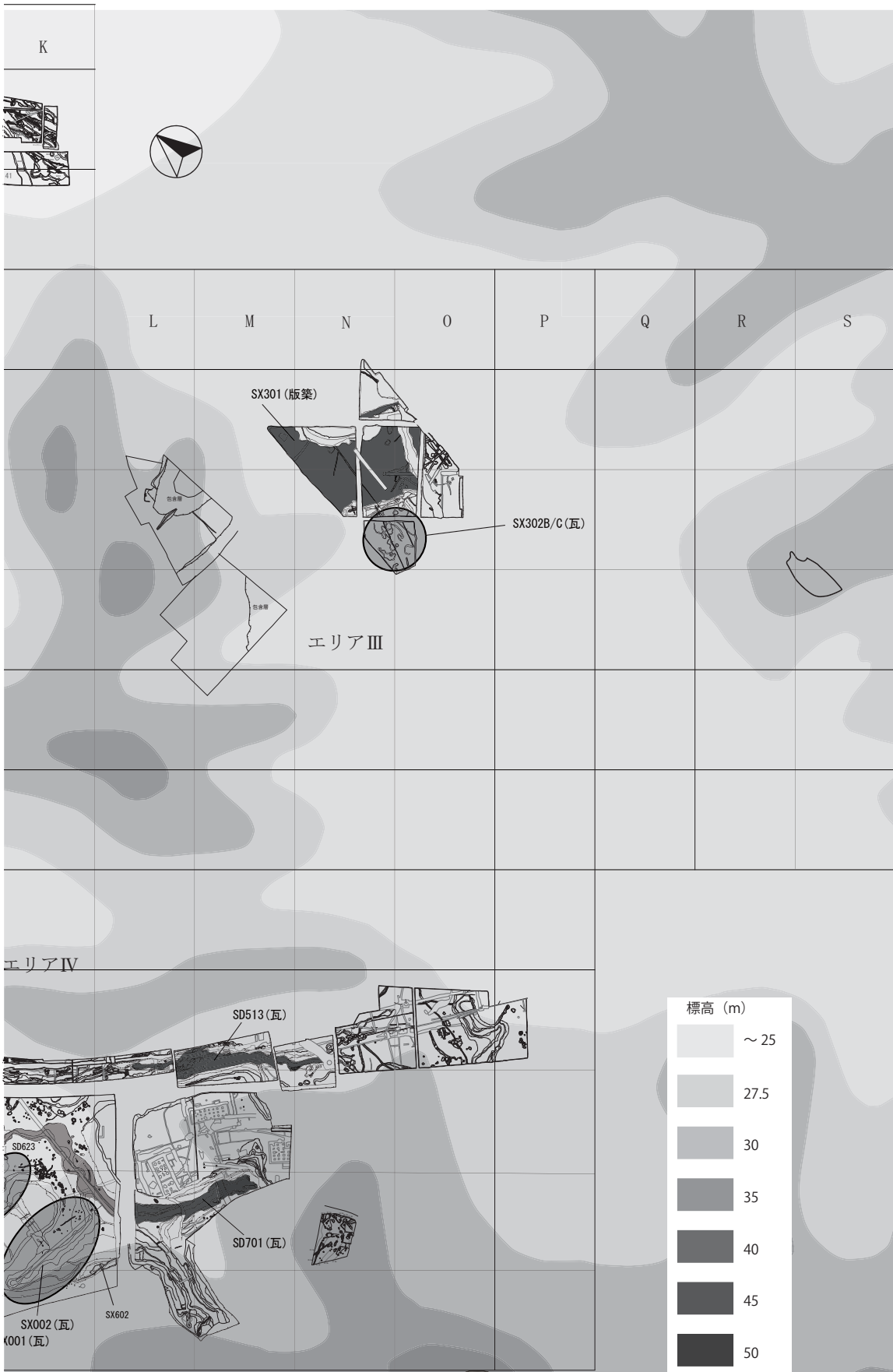
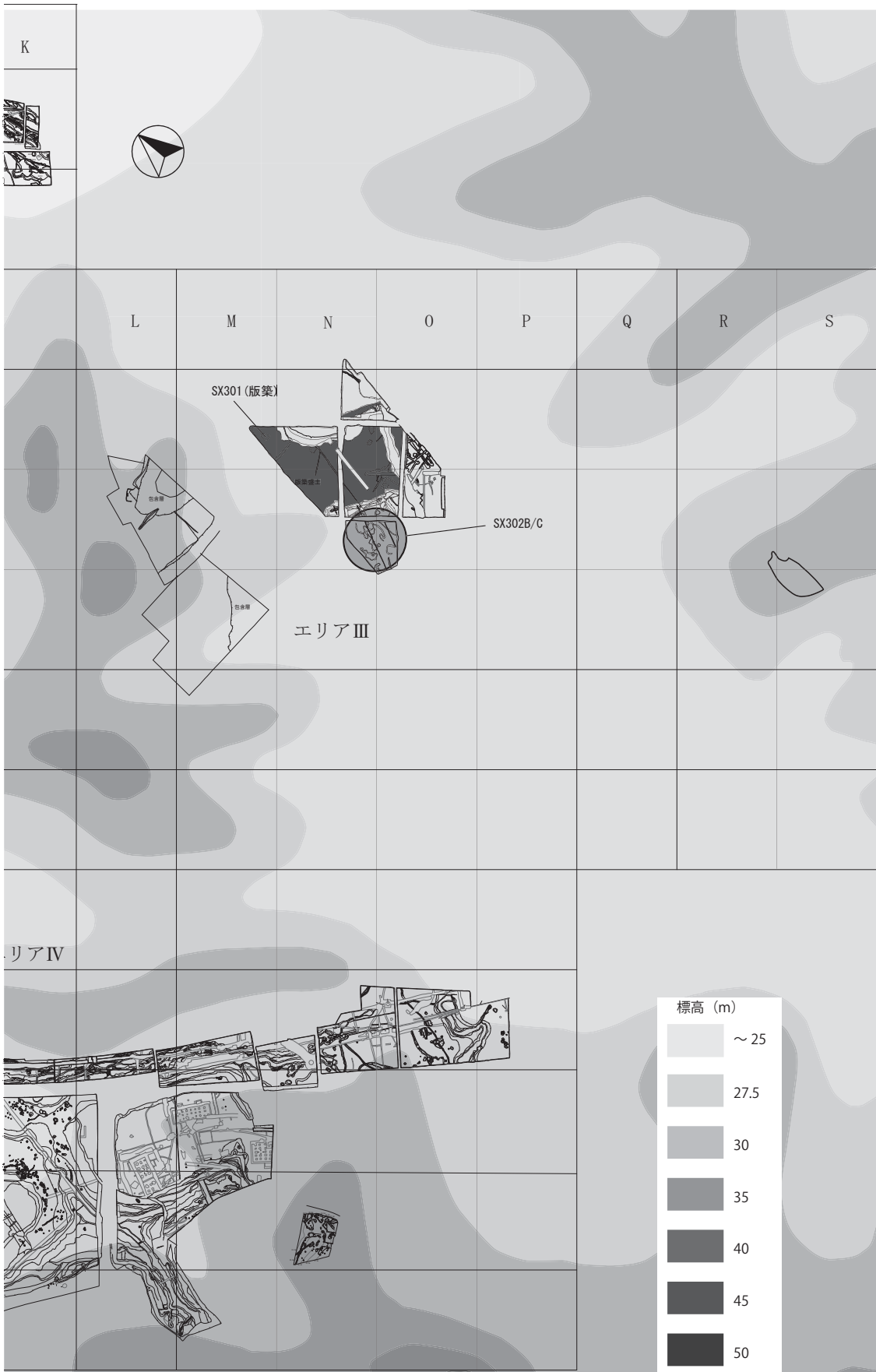




図168 古代末-中世の遺構分布 (S=1/2000)



IV 考察

わずかにみられる二次被熱を受けた器台の既存の編年（山本・山村1997；山村2000）による年代観とも整合する。

これら瓦器や土師器などの土器焼成に関わると考えられる遺構の他に、エリア I ではSD101でIV類の白磁などがみられることから12世紀ごろまでこの溝が継承されていたものと推定される。このことと符合するようにエリアⅢのSX302B・Cでも瓦器碗が出土しており、古代官道が少なくともこのころまでは何らかの形で継続して使用されていたのであろう。

文献

- 石木秀啓1997『牛頸石坂窯跡－E地点－』（大野城市文化財調査報告書第49集）大野城市教育委員会
- 石木秀啓2007「牛頸窯跡群と九州の須恵器生産体制 8世紀以降を中心として」『国立歴史民俗博物館研究報告』第134集：299-353
- 岩永省三・田尻義了2009『奴国の南』九州大学総合研究博物館 福岡
- 岡寺良2007『観世音寺－遺物編1－』九州歴史資料館
- 小鹿野亮2003『大宰府条坊跡第200次発掘調査』（筑紫野市文化財調査報告書第75集）筑紫野市教育委員会
- 春日市教育委員会1985『春日地区遺跡群Ⅲ』（春日市文化財調査報告書第15集）
- 酒井仁夫1979『神ノ前窯跡』（太宰府町文化財調査報告書第2集）
- 狭川真一1995『筑前国分尼寺跡Ⅲ－第4・8・9・13・17次調査－』（太宰府市の文化財第25集）
- 田川市教育委員会1990『天台寺跡：上伊田廃寺』（田川市文化財調査報告書第6集）
- 西健一郎1993『九州大学埋蔵文化財調査報告－九州大学筑紫地区遺跡群－（第二冊）』九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室
- 西健一郎1994『九州大学埋蔵文化財調査報告－九州大学筑紫地区遺跡群－（第三冊）』九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室
- 舟山良一2008「V. 出土遺物の検討 1. 須恵器の編年」『牛頸窯跡群－総括報告書I－』（大野城市文化財調査報告書第77集）大野城市教育委員会、41-82頁
- 山村信夫2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』太宰府市教育委員会
- 山本信夫・山村信榮1997「中世食器の地域性－10九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集：237-310

2 筑紫地区遺跡群出土石釧をめぐる諸問題

辻田淳一郎

1. はじめに

本稿は、1982年に九州大学筑紫地区遺跡群（御供田遺跡）から出土した石釧（以下、筑紫地区石釧）の位置づけをめぐる諸問題について検討するものである。この問題については、以前2009年の図録『奴国の南』において、「九州出土の腕輪形石製品」と題して検討しており（辻田2009、以下前稿）、本稿はそれから約10年が経過した現時点において、その後の研究動向をふまえ、上記石釧の位置づけについて再度検討を行うことを課題とする。具体的な論点としては、1）集落出土の腕輪形石製品をめぐる問題、2）腕輪形石製品の生産・流通をめぐる問題の2つの観点から、筑紫地区出土石釧について考えてみたい。なお、前稿との重複を避けるため、遺跡文献以外の参考文献については、新たに追加したもののみとさせていただいた。全体の参考文献も含め、あわせて前稿を御参照いただければ幸いである。

2. 前稿の概要と2010年代の研究動向

（1）前稿の検討結果の概要

前稿において、九州出土の腕輪形石製品を集成し、検討した結果は以下の7点に整理できる。

- 1）九州の腕輪形石製品は、向野田古墳や免ヶ平古墳などのものを除くと殆どが緑色凝灰岩製であり前期後半段階の製品が大半を占める。
- 2）九州出土事例は石釧が主体であり、腕輪形石製品3種の共伴事例は沖出古墳の事例に限定される。
- 3）古墳副葬品の一部では伝世などの長期使用の可能性が認められる。
- 4）前期前～中葉という、比較的早い段階から集落や溝での儀礼的廃棄や穿孔・懸垂事例などがみられることから、これらの石釧などの意味づけは厳密に固定化されていたわけではなく、当初から比較的柔軟な使用形態が可能なものであったと考えられる。
- 5）古墳副葬品の入手経路や流通形態については、九州のような遠隔地での入手という点で、生産地との直接交渉による入手といった可能性以外にも、近畿の上位層による選択的配布という可能性も含めて考えていく必要がある。ただし、これが近畿周辺も含めて列島全体に普遍化できるのかどうかについては課題である。
- 6）沖ノ島遺跡の出土品には超大型品が含まれないが、これについては石製品の製作時期・最終的な「奉獻」の時期が前期末以降である点に起因する可能性もある。
- 7）九大筑紫地区遺跡群出土の石釧は、古墳時代前期前半において、製作・入手時期からさほど時間をおかずして溝状遺構に廃棄されたものと考えられる。

前稿では、これらに加えて南九州で分布がみられない、もしくは少ないことを挙げていたが、後述のように宮崎県日向市板平遺跡から車輪石の破片が出土していること、また宮崎平野部周辺での未調査古墳の多さという点（河村2010）などをふまえ、上記では割愛した。上述の7項目については、大枠で現在も大きな変更はないものと考えているが、以下これらにも関わるその後の研究動向について

検討したい。

(2) 2010年代の研究動向

筆者が前稿を上梓した2009年以降の研究動向で注目されるのは、まず2010年に『古代学研究』187号に掲載された、「特集・古墳時代における腕輪形石製品の生産と流通」である。集落遺跡出土資料・生産遺跡出土資料の増加をふまえて行われたシンポジウムでは、蒲原宏行氏により研究史と課題の整理が行われた上で、山陰・北陸における生産遺跡の動向や、集落遺跡での廃棄のあり方、腕輪形石製品の石材と変遷観などをめぐって議論が行われた（蒲原2010他）。この中で、高橋幸治氏により集落関連遺跡出土腕輪形石製品が集成され、各地の資料との比較検討が可能となりつつある（高橋2010a・b）。このシンポジウムでは、石材の分類と石材産地・製作時期との関連について注目されているが、伊藤雅文氏（2010）、北山峰生氏（2010）、北條芳隆氏（2013）や石井友菜氏（2019）らの議論においても、分類・編年と石材産地や生産から古墳での副葬や集落での廃棄に至る過程との間をどのように説明するかという点が課題として論じられている。

また河村好光氏が『倭の玉器』を上梓し、腕輪形石製品の生産遺跡の動向とともに、古墳副葬品としてのあり方について議論を深めている（河村2010・2014・2015）。河村氏も含めた各氏の議論においては、初期の碧玉製品の生産が当初は山陰で行われ、後に北陸西部（片山津上野遺跡など）で生産が行われたとする点については大枠で共通しながら、北陸西部での生産の開始時期を前期の早い段階とみるかどうかについていくつかの意見がある。また河村氏は、近畿地域の政治権力が腕輪形石製品の生産・流通に果たした役割について、従前の自身の見解より評価を高めつつ、特に前期後半段階において、「初期倭政権は、碧玉製品の需給関係をみる限り、畿内首長連合に参画する諸首長が、それぞれの場面で公的機能を担うネットワークとして存在するものであった」と捉えている（河村2010：p.217）。またこれに関連して河村氏は、福岡県沖出古墳や同沖ノ島、佐賀県谷口古墳などの腕輪形石製品の分布について、これらが北陸産と想定されながら、同様の製品が山陰地域で見られないことから日本海沿岸交易による供給が考えがたいこと、あわせてこれらが「畿内を経由して運ばれたとみるべきである」としている（河村前掲：pp.203-205）。近畿地域の政治権力が腕輪形石製品の生産・流通に果たした役割については、いわゆる「配布論」から「独自入手」まで幅があるのが特徴であるが（蒲原2010・2019；北條2013）、河村氏（2010）の理解は、前稿での筆者の認識と一致するものである。

他方、問題となるのは前期前半段階の資料についてであり、生産量が多いと想定される一方で古墳で副葬される製品の数は少ないというずれがあること（北山2010）、逆に集落遺跡出土資料は製作と廃棄の間にそれほど時期差がないことが注目されている（蒲原2010）。筑紫地区の石釧はまさにこうしたあり方に関わる資料である。また腕輪形石製品の創出に際しての山陰・北陸の製作地・石材産地としての役割と近畿地域の政治権力による関与自体は積極的に評価しつつ、流通のあり方を鏡と同様とみるかどうかについては慎重な立場もみられる（蒲原2010・2019；北條2013；石井2019）。装身具としての玉類の流通が鏡と共通したあり方とみられる（谷澤2020）のに対して、それらと腕輪形石製品とはどのように重なるのか、重ならないのかという点が課題ともいえよう。

九州出土の腕輪形石製品については、筆者の前稿をはじめとする集成を補足し、各種型式分類の成果を反映させた渕ノ上隆介氏の研究（2014）や、沖ノ島出土資料とそれを含めた九州出土資料の再検討を行った小田富士雄氏の研究（2017a・b）などが挙げられる。

以上のような研究動向を念頭に置く場合、筑紫地区石釧の位置づけという点についてあらためて考

えるべき問題は、古墳時代前期前半段階における製作地とそこからの搬入ルートという点、そして集落遺跡での廃棄事例という点である。この2点について、以下で再度検討したい。

3. 筑紫地区出土石釧の位置づけをめぐる諸問題

(1) 九州出土腕輪形石製品の概観 (図169・表10)

表10は、前稿の資料に佐賀県唐津市の大岩西遺跡 B 区箱式石棺から出土した1点と、宮崎県日向市板平遺跡から出土した車輪石片1点の計2点を追加したものである。前者は人骨の右手首付近から出土しており、左手首には貝輪が装着されていた(佐賀県教育委員会編2002)。腕輪形石製品は副葬位置として頭部付近が最も多く、腕部付近への副葬事例は九州・中部瀬戸内・近畿・関東などに多いことが指摘されており(蒲原2019;三浦2020)、本事例もそうしたあり方として理解されよう。全般的な傾向として、碧玉製品が東九州に偏っており、集落遺跡から出土するものが多いこと、古墳副葬品は前期後半のものが多いといった資料状況は変わっていない。

(2) 集落出土腕輪形石製品の位置づけをめぐる

宮崎県板平遺跡は集落遺跡であり、緑色凝灰岩製の車輪石片は隣接する谷部の包含層から出土している。残存率は約1/5である(図170)。これについては、「第2次調査報告で指摘された遺跡付近に存在していた前期古墳の崩壊によるものという想定に加えて、4世紀後半代における塩見川流域の勢力伸長過程のなかで入手され、それが板平遺跡にも首長層との関係性を示す品に姿を変えて分与(分割)された可能性も指摘しておきたい」(宮崎県埋蔵文化財センター2011:p.144)と報告されている。南健太郎氏も、他の集落遺跡出土資料と同様の分割後の廃棄の可能性を想定している(南2011)。

前稿でも論じたように、九州では、筑紫地区石釧と同様に、こうした破碎後の廃棄とみられる事例あるいは穿孔した事例などが多いのが特徴である。またこうした事例は、前述のように奈良盆地周辺でも纏向遺跡などで前期前半段階から存在することが知られるようになった(高橋2010a・b;福辻2010)。奈良県天理市平等坊・岩室遺跡では、鋳形石の上半分のみが土坑に廃棄された状態で検出されており、共伴した土器から布留式古相から中相にかけての時期幅に収まることが指摘されている(青木2010)。また滋賀県で北陸との交通の要衝とみられるいくつかの集落遺跡でもこうした腕輪形石製品の廃棄事例が知られる(近藤2010;細川2014)。これらの事例が重要であるのは、九州における集落遺跡出土の腕輪形石製品などが、例えば列島の周辺地域・縁辺部における少数事例といったあり方でなく、むしろ古墳時代前期前半段階で、近畿地域も含めて列島で広く認められる現象であることを示している点である。こうした成果により、筑紫地区石釧についても、前期前半段階における集落(溝状遺構)での破碎後廃棄事例の一つとして理解することが可能であるものと考えられる。

筑紫地区石釧のような出土状況が、上記のような意味で、従来考えられていたよりは比較的一般的に認められる事例であるとした場合、あらためて問題となるのは、本石釧の製作地と、福岡平野で廃棄されるまでの経路・経緯という点である。以下、この問題について考えてみたい。

(3) 腕輪形石製品の生産・流通と九州出土資料

近年の研究動向においても問題となっているのは、腕輪形石製品の流通が、従来考えられていたような「政治的」「配布」と考えることができるかどうか、それを生産遺跡および古墳副葬品の組成の



図169 九州出土腕輪形石製品の分布

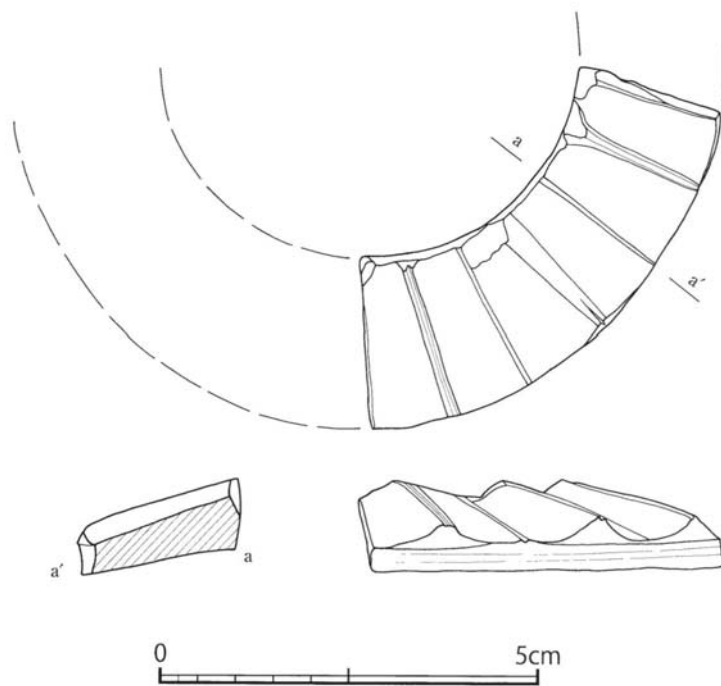


図170 宮崎県板平遺跡出土車輪石片 (S=1/1)

表10 九州出土腕輪形石製品一覧

| 番号 | 県名 | 出土遺跡名 | 遺跡概要 | 出土遺構 | 出土状況・状態 | 種類 | 材質 | 文献 |
|-----|----|----------------|-----------------|---------------------|-------------------------------------|-----|-------------------|-----------------------------|
| 1 | 福岡 | 沖ノ島5・6号遺跡付近 | 祭祀遺跡 | | C号巨岩西側、二次的埋納 ([再奉納])か | 鍬形石 | 緑色凝灰岩 | (3) |
| 2 | 福岡 | 沖ノ島16号遺跡 | 祭祀遺跡 | | 完形 | 石釧 | 緑色凝灰岩 | (1) |
| 3 | | | 祭祀遺跡 | | 破片 | 石釧 | 緑色凝灰岩 | |
| 4 | 福岡 | 沖ノ島17号遺跡 | 祭祀遺跡 | | 完形・表面を上にして、鏡 の間に挟まって出土 | 車輪石 | 緑色凝灰岩 | (2) |
| 5 | | | 祭祀遺跡 | | 完形 | 車輪石 | 緑色凝灰岩 | |
| 6 | | | 祭祀遺跡 | | 完形・裏面を上にして出土 | 石釧 | 緑色凝灰岩 | |
| 7 | 福岡 | 沖ノ島18号遺跡 | 祭祀遺跡 | | 完形・「鏡と等しい水平面 にならんでいた」 | 石釧 | 報告書では 「碧玉(真岩)」 | (2) |
| 8 | 福岡 | 推定沖ノ島18号遺跡 | 祭祀遺跡 | | 完形 | 車輪石 | 緑色凝灰岩 | (3) |
| 9 | 福岡 | 推定沖ノ島18号遺跡 | 祭祀遺跡 | | 完形 | 石釧 | 緑色凝灰岩 | (3) |
| 10 | 福岡 | 伝・飯氏 | | | 破片 | 車輪石 | 緑色凝灰岩 | (4), 原田1961 |
| 11 | 福岡 | 九州大学筑紫地区遺跡 | | 溝状遺構・ SD316 | 4片に破砕 | 石釧 | 緑色凝灰岩 | (5), 川村(1988), 北條(1994a) |
| 12 | 福岡 | 沖出古墳 | 前方後円墳・ 68m | 竪穴式石槨・舟 形石棺 | 盗掘のため原位置を保たず | 鍬形石 | 緑色凝灰岩 | (6) |
| 13 | | | | | | 鍬形石 | 緑色凝灰岩 | |
| 14 | | | | | | 鍬形石 | 緑色凝灰岩 | |
| 15 | | | | | | 車輪石 | 緑色凝灰岩 | |
| 16 | | | | | | 車輪石 | 緑色凝灰岩 | |
| 17 | | | | | | 石釧 | 緑色凝灰岩 | |
| 18 | 石釧 | 緑色凝灰岩 | | | | | | |
| 19 | 佐賀 | 谷口古墳 | 前方後円墳・ 77m | 東石室・長持形 石棺 | 棺内副葬(副葬位置に複数 説あり) | 石釧 | 緑色凝灰岩 | (7) |
| 20 | | | | | | 石釧 | 緑色凝灰岩 | |
| 21 | | | | | | 石釧 | 緑色凝灰岩 | |
| 22 | | | | | | 石釧 | 緑色凝灰岩 | |
| 23 | | | | | | 石釧 | 緑色凝灰岩 | |
| 24 | | | | | | 石釧 | 緑色凝灰岩 | |
| 25 | | | | | | 石釧 | 緑色凝灰岩 | |
| 26 | | | | | | 石釧 | 緑色凝灰岩 | |
| 27 | | | | | | 石釧 | 緑色凝灰岩 | |
| 28 | | | | | | 石釧 | 緑色凝灰岩 | |
| 29 | 石釧 | 緑色凝灰岩 | | | | | | |
| 30 | 佐賀 | 大岩西遺跡B区 ST-080 | 墓地 | 箱式石棺 | 人骨・手首部 | 石釧 | 緑色凝灰岩 | (19) |
| 31 | 佐賀 | 朝日 ST06号墳 | 前方後円墳・ 24m以上 | 箱式石棺(南側 棺) | 4片に破砕・上斜面4対、側 面に1対の計10個の補修孔 | 石釧 | 緑色凝灰岩 (凝灰質真岩) | (8) |
| 32 | 長崎 | 原の辻遺跡 | 14調査区 | | 破片 | 石釧 | 碧玉 | (9) |
| 33 | 長崎 | 伊志呂遺跡 | 表採 | | 破片 | 石釧 | | (9) |
| 34 | 熊本 | 津袋大塚古墳 | 円墳・32m | 舟形石棺 | 破片 | 車輪石 | | 小田1986 |
| 35 | 熊本 | 向野田古墳 | 前方後円墳・ 86m | 竪穴式石槨・舟 形石棺 | 棺内副葬 | 車輪石 | 碧玉 | (10) |
| 36 | 大分 | 都野原田遺跡 | 集落 | 25号竪穴(前期 前葉)・検出面 | 1/4片, 赤色顔料塗布, 一 端破断面研磨, 穿孔1 | 石釧 | 黒色頁岩 | (11) |
| 37 | | 都野原田遺跡 | 集落 | 34A号竪穴(前 期中葉) | 一端破断面厚減, 穿孔1 | 石釧 | 緑色凝灰岩 | |
| 38 | 大分 | 七ツ森B号墳 | 前方後円墳・ 47m | 箱式石棺 | 男女計2体, 現在破片の状 態 | 石釧 | | (12), (13) |
| 39 | 大分 | 野間3号墳 | 前方後円墳・ 50m? | 箱式石棺 | 棺内副葬・頭位 | 石釧 | 碧玉 | (14) |
| 40 | 大分 | 免ヶ平古墳 | 前方後円墳 | 第1主体・竪穴 式石槨 | 1点頭位, 残り1点ずつそれ ぞれ右手・左手の位置に副 葬 | 石釧 | 碧玉 | (15) |
| 41 | | | | | 石釧 | 碧玉 | | |
| 42 | | | | 第2主体・箱式 石棺 | 腕部副葬・女性人骨 | 石釧 | 碧玉 | (16), 北條 1994a |
| 43 | | | | | | 石釧 | 碧玉 | |
| 44 | 大分 | 猫塚古墳 | 前方後円墳 | 箱式石棺 | 男性2体 | 鍬形石 | 緑色凝灰岩? | (17) |
| 45 | | | | | | 鍬形石 | 緑色凝灰岩? | |
| 46 | 宮崎 | 板平遺跡 | 集落 | 谷部 | 包含層中・破片 | 車輪石 | 緑色凝灰岩 | (20), (21) |
| 参考1 | 福岡 | 沖ノ島16号遺跡 | 祭祀遺跡 | | 完形 | 石釧 | 滑石 | (2) |
| 参考2 | | | 祭祀遺跡 | | 破片 | 石釧 | 滑石 | |
| 参考3 | | | 祭祀遺跡 | | 破片 | 石釧 | 滑石 | |
| 参考4 | | | 祭祀遺跡 | | 完形 | 石釧 | 滑石 | |
| 参考5 | | | 祭祀遺跡 | | 欠損 | 石釧 | 滑石 | |
| 参考6 | 福岡 | 沖ノ島19号遺跡 | 祭祀遺跡 | | 欠損 | 石釧 | 滑石 | (2) |
| 参考7 | 福岡 | 飯盛谷B遺跡 | 方形周溝墓 | | 一部欠損, 2孔ずつの穿孔 が3ヶ所に | 石釧 | 滑石 | (18) |

双方の観点からどのように説明できるかという点である（蒲原2010；北條2013；三浦2012・2020；石井2019）。筆者は、こうした腕輪形石製品の「授受」が鏡や玉類のそれと同じ機会や同様の方法で行われたのかどうかに関心を持って検討を行ってきた。この点では前期後半にそうした方式へと集約していくことは一定程度共通理解となりつつあるものとみられる（河村2010・2014；三浦2012；北條2013など）。

前期前半については、碧玉製品（北條氏〔2013〕の「材質1」）から緑色凝灰岩（同「材質2」）への材質の変化と製作地の北陸西部への集中という点が明らかになり、この流通の実態をどう考えるかが問われている。腕輪形石製品（材質1）の出現時期は奈良県桜井茶臼山古墳や滋賀県雪野山古墳の段階であり（北山2010）、筆者の古墳編年という前期前半の「I期新相」である。同時期に出現する器物として、大型倭製鏡の中心的系列群（内行花文鏡系・方格規矩四神鏡系・鼈龍鏡系）が挙げられる。これらは近畿周辺の大規模前方後円墳などに分布が集中しており、初期の腕輪形石製品とも共伴することから、前期後半に一般化する方式に先駆けて鏡・玉類と同じ機会に授受が行われた可能性が高い。これは奈良盆地周辺の大規模モニュメント造営や葬送儀礼への参加などを通じて、近畿地域の政治権力を核としたネットワークに各地域の集団が参加することを相互に承認することを意味するものと考えているが、筆者はこうした授受のあり方を「参向型1類」としてモデル化している（辻田2019）。前期後半の腕輪形石製品の授受については、九州出土資料も含めて、基本的にこうしたあり方で説明できるものとする。このような見方は、三浦俊明氏（2012）が指摘する、鍬形石や大型車輪石を上位に格付けする形での威信財授受という理解とも重なっている。

他方で、材質2の緑色凝灰岩を用いて北陸西部で生産が開始された前後の時期の腕輪形石製品については、必ずしも古墳副葬品に限定されず（鏡と共伴するとは限らない）、集落遺跡での廃棄事例が一定数存在することから、例えば「交換」や「交易」など、鏡などの授受とは別の機会や形式で流通が行われたと考えることも可能であろう。上述の三浦氏も、小型の腕輪形石製品の一部が「中央政権からの配布」を経由しない形で「各地の首長間の交換などを通じて消費地へ直接流通した可能性」を認めつつ、「その独自の流通は、腕輪形石製品の階層構造に抵触しない範囲で小規模に行われていた」可能性を論じている（三浦2012：p.25）。その上で、先にみた河村好光氏（2010）の見解を参考にすれば、材質2の腕輪形石製品が、製作地である北陸西部を分布中心として山陰や中部以東などに地理勾配を伴って分布するような状況は認められないことから、筆者はその場合でも奈良盆地周辺などがそうした流通の「場」として機能した可能性が高いものとする。奈良盆地や琵琶湖周辺において集落遺跡での出土事例が増加していることは、それらの流通の経路や消費のあり方とともに、前期前半段階において、古墳副葬品としてあらわれるような威信財的性格を持つ腕輪形石製品と、集落での儀礼などに用いられるような腕輪形石製品の両者が併存していたことを示している。そうしたあり方が、前期後半にかけて、北陸西部と東日本などにおいて北陸産の石材とそれを用いた大量生産が行われつつ、鏡や玉類と同様の性格をもった古墳副葬品としての比重が高まるといって変遷していったものとする考え方ができる。前期前半はいわばそうした意味での過渡的様相と考えられる。

4. 結語

以上、2010年代の研究動向をふまえて、筑紫地区遺跡群出土石釧に関連する諸問題について検討してきた。当該石釧は、出土遺構の時期が古墳時代前期前半であることから、上述の石材2の緑色凝

灰岩を用いて北陸西部で製作された初期の製品とみられ、古墳副葬品とは別の形で近畿地域を經由して北部九州に流入した後、集落で廃棄されたものと考えられる。そして、そうした集落での廃棄自体が近畿地域周辺でも行われる一般的なものであり、古墳時代前期前半段階における腕輪形石製品の多義的な性格を示すものと考えた。そして古墳時代前期後半にかけて、九州でも威信財的性格を付与された腕輪形石製品が増加し、鏡や玉類とともに入手された後、副葬されるようになるものと想定された。これをもって九州出土の腕輪形石製品全般の説明を行うことができたとはいえないが、少なくとも列島の周辺地域の様相というよりは、他地域とも共通したあり方がよく認められることを再度確認しつつ、個別資料の各地域への流入形態や流入時期も含めて今後の課題としておきたい。

【追加参考文献】

- 青木勘時2010「天理市平等坊・岩室遺跡の鍬形石出土土坑について」『古代学研究』187
- 石井友菜2019「材質と製作技術からみた腕輪形石製品の生産に関する一考察－大阪府柏原市茶臼塚古墳の分析事例から－」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』64
- 伊藤雅文2010「腕輪形石製品生産モデルの素描」『古代学研究』187
- 大賀克彦2013「玉類」『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社 東京
- 小田富士雄2017a「沖ノ島祭祀遺跡発見の石製腕飾」『古文化談叢』79
- 小田富士雄2017b「続・沖ノ島祭祀遺跡発見の石製腕飾」『古文化談叢』79
- 蒲原宏行2010「腕輪形石製品研究の歩みと課題」『古代学研究』187
- 蒲原宏行2019『弥生・古墳時代論叢』六一書房 東京
- 河村好光2010『倭の玉器－玉つくりと倭国の時代－』青木書店 東京
- 河村好光2015a「製作技術からみた鍬形石の型式と編年」『石川考古学研究会々誌』58
- 河村好光2015b「三角縁神獣鏡と腕輪形碧玉製品」『古代学研究』205
- 北山峰生2010「古墳時代前期における石製品の生産動向」『古代学研究』187
- 近藤広2010「近江における石製腕輪類の流通と問題」『古代学研究』187
- 高橋幸治2010a「腕輪形石製品の流通－集落出土品を中心に－」『古代学研究』187
- 高橋幸治2010b「集落関連遺跡出土の腕輪形・宝器類石製品集成表」『古代学研究』187
- 谷澤亜里2020「玉からみた古墳時代の開始と社会変革」同成社 東京
- 辻田淳一郎2009「九州出土の腕輪形石製品」（岩永省三・田尻義編）『奴国の南』九州大学総合研究博物館 福岡
- 辻田淳一郎2019『鏡の古代史』角川選書 東京
- 福辻淳2010「桜井市内の集落出土の腕輪形石製品」『古代学研究』187
- 北條芳隆2013「腕輪形石製品」『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社 東京
- 瀧ノ上隆介2014「腕輪形石製品」『古墳時代の地域間交流2』九州前方後円墳研究会
- 細川修平2014「腕輪形石製品の意味を考えるために」『滋賀県文化財保護協会 紀要』27
- 三浦俊明2012「古墳時代前期における石製品の流通」『石川県立歴史博物館紀要』24
- 三浦俊明2020「腕輪形石製品の副葬配置とその地域性」『古代学研究』225
- 南健太郎2011「南九州における車輪石の拡散」『琵琶湖と地域文化 林博通先生退任記念論集』

【表10・九州腕輪形石製品出土遺跡文献】

- (1) 宗像神社復興期成会1958『沖ノ島』宗像神社復興期成会
- (2) 宗像神社復興期成会1961『続沖ノ島』宗像神社復興期成会
- (3) 第三次沖ノ島学術調査隊1979『宗像 沖ノ島』宗像大社復興期成会
- (4) 前原市立伊都歴史資料館1997『再見！糸高の博物館 part1 古墳時代編』
- (5) 九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室1993『九州大学埋蔵文化財調査報告－九州大学筑紫地区遺跡群－（第二冊）』
- (6) 稲築町教育委員会1989『沖出古墳』稲築町文化財調査報告書第2集
- (7) 佐賀県浜玉町教育委員会1991『史跡谷口古墳保存修理事業報告書』浜玉町文化財報告書第2集

IV 考察

- (8) 佐賀県教育庁文化財課1992『朝日北遺跡』佐賀県文化財調査報告書第110集
- (9) 長崎県教育委員会2005『原の辻遺跡 主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書②』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第29集
- (10) 宇土市教育委員会1978『向野田古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集
- (11) 久住町教育委員会・大分県教育委員会2001『都野原田遺跡』久住町教育委員会・大分県教育委員会
- (12) 賀川光夫1956「大分県（豊後国）竹田市戸上七ツ森古墳－附七ツ森古墳人骨－」『大分県文化財調査報告書（第4集）』大分県教育委員会
- (13) 賀川光夫1983「第4章 古墳文化」『竹田市史・上巻』竹田市史刊行会
- (14) 賀川光夫・小田富士雄1967「野間古墳群調査報告」『野間古墳群・横尾貝塚・小池原貝塚』大分県文化財調査報告第13輯
- (15) 大分県立宇佐風土記の岡歴史民俗資料館1986『免ヶ平古墳 発掘報告書』大分県立宇佐風土記の岡歴史民俗資料館 研究紀要 Vol.3
- (16) 大分県立宇佐風土記の岡歴史民俗資料館1991『免ヶ平古墳 史跡川部・高森古墳群保存修理事業報告書』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
- (17) 小田富士雄1979「猫塚古墳」『九州考古学研究 古墳時代篇』学生社
- (18) 福岡市立歴史資料館1986『早良王墓とその時代－墳墓が語る激動の弥生社会－』福岡市立歴史資料館図録第11集
- (19) 佐賀県教育委員会編2002『佐賀県内遺跡確認調査報告書』20 佐賀県文化財調査報告書第151集
- (20) 宮崎県埋蔵文化財センター2008『板平遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第176集
- (21) 宮崎県埋蔵文化財センター2011『板平遺跡（第3・4次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第199集

【図表出典】

図169：前稿（2009）をもとに筆者作成。腕輪形石製品の記号表記について一部変更を行っている。図170：宮崎県埋蔵文化財センター（2008）より、一部改変。表10：前稿（2009）をもとに筆者作成。

3 筑紫地区遺跡群出土須恵器生産関連遺物の位置づけ

田尻 義了

1. はじめに

筑紫地区遺跡群では、須恵器生産に関連する資料群として既に報告されてる遺物が存在する（横山1987、旧報告書第三冊 p496）。ここでは本報告書刊行のために資料の再調査を通じて判明した新たな所見、またそれに伴う再実測の図面掲載、新資料の報告を行うこととする。なお、ここで報告する木製品は2007年に福岡市埋蔵文化財センターにて保存処理（PEG 処理）を実施している。また、レプリカも作成しており、今後の活用を期待する。

2. 資料の紹介

筑紫地区遺跡群では、旧報告書等にて須恵器生産関連資料として木製当て具（大・小）2点とタタキ板1点、ヘラ状工具2点が報告されている。このうち、ヘラ状工具として旧報告書第三冊第327図1（p503）に掲載されていた先端の尖った資料については、須恵器製作に用いられる道具と判断できなかったためここでは取り上げない。以下では、それぞれの資料ごとに再調査の結果をまとめる。

1) 大型当て具（図171、1）

第45次（高エネ）調査区12K 区 SD623より出土したゴルフクラブ状の大型当て具である。旧報告書第三冊 P497～498の第323図に出土状況のみ報告がある。また、横山1987の第1図2（P130）に相当する。今回の調査で肉眼観察したところ、針葉樹の芯持材を用いていることを確認した。当て具面の同心円は、断面やや「レ」の字状に彫り込まれている。年輪を横断して円弧を描くために細かく刃の向きを変えて彫り込まれており、刃物によって木材の繊維を細かく断ち切られたような痕跡が残る。ただし、今回の観察が保存処理後であるため、繊維の断ち切れは乾燥による細かな割れの可能性もある。柄と当て具面の境付近がよく摩耗しており、柄から当て具にかけてのカーブを利用して大型須恵器甕の製作作業に用いられたことが推定される。柄の当て具の頭部に近い部分や当て具面の裏部分には金属刃物の加工痕が残っており、頭部を作り出す際の痕跡と判断される。柄の断面形は頭部との境においておおむね長方形に近いのに対し、先端にいくにしたがって、丸く細くなるよう加工され、握りやすくなるよう丁寧に加工されている。法量は全長43.3cm、柄長36.2cm、当て具面の長径10.6cmである。

これまで本資料の同心円の彫り込みについて横山1987でも記述されているが、年輪を横切って彫り込まれていることが改めて確認された。また、樹種に関しては分析を行うことができなかった。

2) 小型当て具（図171、2）

第45次（高エネ）調査区12K 区 SD623より出土したキノコ状の小型当て具である。旧報告書第三冊 P502の第326図に既報であり、横山1987の第1図1（P130）に相当する。長さ12.4cm、当て具面の残存径7.0cm、柄長8.5cmをはかる。材は針葉樹の芯持材を用いている。当て具面の同心円は断面V字状に彫り込んで形成されており、材の芯部分と彫り込んだ円の中心はズレている。したがって、年輪とは関係なく同心円が彫り込まれている。なお当て具面は中心部より側縁部（周縁部）が使用により摩

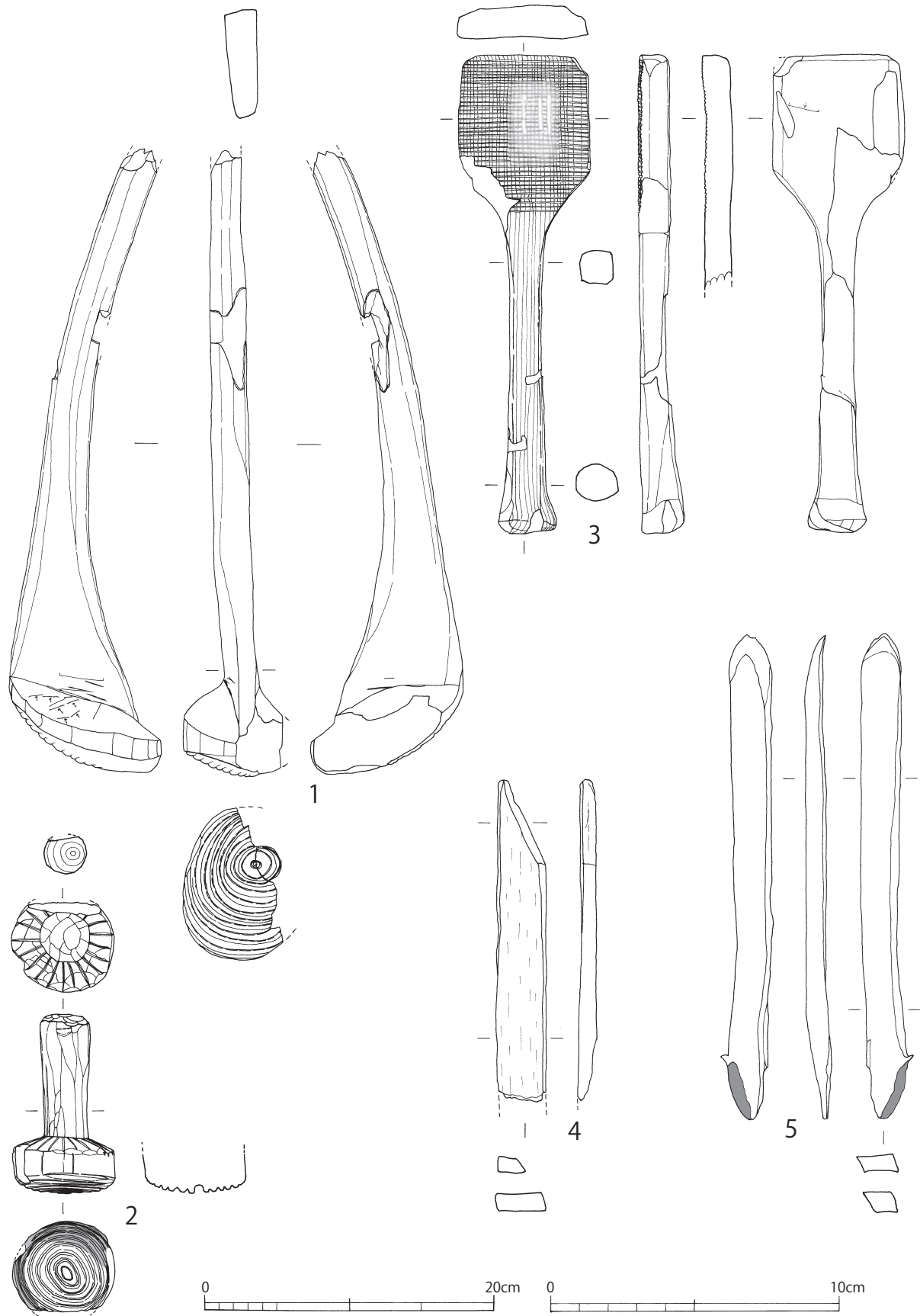


図171 須恵器生産関連木器 (1~3 : S=1/4 · 4·5 : S=1/2)

耗している。また文様として解されてきた当て具の裏側の放射状線は、芯に向かって割れが入ったもので、人為的な彫り込み文様ではない。柄の握り部、および柄の端部は丁寧に面取りされている。

3) タタキ板 (図171、3)

第45次(高エネ)調査区12K区SD623より出土した羽子板状のタタキ具である。旧報告第三冊P502の第326図に既報であり、横山1987の第1図3(P130)に相当する。当時の実測者の平川敬治氏は杉材と判断している。今回の調査で観察をした谷直子氏は針葉樹の追柂目材と判断した。法量は長さ33.2cm、幅9.2cm、厚さ2.2cmである。タタキ具の格子目は、横方向の約2.5mm間隔の人為的な掘り込みと、縦方向の年輪の早材(春材)部分が摩耗して、晩材(夏材)部分が浮き出たことによる凹凸で格子状を呈しており、このタタキ板を用いれば擬格子文となる。格子目部分の中央部は縦6.7cm、横4cmほどの範囲で摩耗している。とりわけ上端面から5cmほどの箇所での摩耗が激しい。柄は全体に丁寧な面取りを行って整形しており、端部はグリップ状に削り出している。また柄の握り部分は、使用痕跡と考えられる摩耗が観察できる。

4) ヘラ状工具 (図171、4)

第45次(高エネ)調査区13K219(本報告ではSX002)出土の刀子状工具である。これまで報告されておらず新資料である。広葉樹の板目板の端部を切り落として刀子状にし、刃部は片刃である。残存長11.2cm、幅1.8cm、厚さ0.6cmをはかる。須恵器製作に用いられたヘラ状工具と推定している。

5) ヘラ状工具 (図171、5)

高エネ調査区13K219⑤層(本報告ではSX002)出土のヘラ状工具である。旧報告第三冊P503の第327図に既報である。広葉樹の板目板の先端をやや反りのあるヘラ状に加工し、下端部は一部炭化している。残存長16.8cm、幅1.4cm、厚さ0.7cmをはかる。須恵器製作の細部に調整に用いられたヘラ状工具と推定している。

3. 出土遺構について

ここで報告した木製遺物は、1984年に実施された高エネルギー物質科学専攻棟の建設に伴って実施された第45次発掘調査で、3点の木製品はSD623溝から出土している。この溝にはⅢB期を中心とした須恵器が数多く出土している。そのうちいくつかは焼きひずみのある変形した蓋坏であり、灰原(SX402)が付近に存在していた可能性がある。当て具とタタキ板、変形した須恵器の共伴関係を根拠に、これらの資料群を須恵器製作関連遺物と位置づけている。筑紫地区遺跡群の南側には牛頸窯跡群が広がることから、遺跡の立地からも肯首できよう。残りの2点はSD623溝へ接続するSX02より出土している。3点とは出土位置が若干離れているが、旧報告書では同一遺構として扱っており一連の溝として捉えることができる。したがって、ヘラ状工具2点も須恵器生産に関連する資料として本報告でも扱うこととする。

4. おわりに

ここで取り上げた資料群は1987年に横山浩一によって紹介され、広く存在が知られた。近年は各地で当て具やタタキ板の出土報告が増加したが、それでも本遺跡出土の資料群は、ヘラ状工具を含む複数の種類の工具がまとまって出土しているという点から重要な資料であろう。時期は共伴した出土須

IV 考察

恵器から6世紀後半から7世紀初頭に位置づけられる。本来であれば付近に須恵器製作工房が存在していた可能性が非常に高いが、九州大学が用地を取得する以前の米軍基地建設造成工事に伴って、遺構は削平破壊されたものとする。

謝辞

木器資料については埋蔵文化財調査室の谷直子氏に実見していただき、所見をまとめていただいた。また、図面のトレースも谷氏による。記して謝意を表したい。

文献

横山浩一1987「須恵器製作用叩き締め道具の新例－九大筑紫キャンパス内出土品－」（岡崎敬先生退官記念事業会編）

『東アジアの考古と歴史』下 同朋舎出版 京都、128-134頁

亀田修一2019「無文当て具に関する覚書」（武末純一先生退職記念事業会編）『福岡大学考古学論集3－武末純一先生退職記念－』武末純一先生退職記念事業会 福岡、301-319頁

4 鉄器からみた筑紫キャンパス遺跡群

宮本 一夫

1. はじめに

『九州大学筑紫キャンパス遺跡群総括報告書1』では、確実に弥生時代の遺構や包含層に属する鉄器を紹介した(宮本2020)。この度の報告書では、古墳時代から中世に属する遺構や包含層で発見された鉄器や、所属時期が不明の鉄器を扱う。しかしながら、形態的な特徴から弥生時代中期～古墳時代初頭に属する鉄製品と考えられるものもあり、前回の報告書分の鉄器も含めて、鉄器からみた筑紫キャンパス遺跡群(御供田遺跡)を評価してみたい。

2. 出土鉄器(図172～175、表11)

1～6は鑄造鉄器である。1～3は鑄造鉄斧の一部である。1は鑄造鉄斧の側面であり、2は同じく鑄造鉄斧の側面であるが、中央に範線である凸線が一部残存している。3は鑄造鉄斧の刃先部分である。1と3はともに弥生時代中期から古墳時代後期の遺構から出土しているが、これら鑄造鉄斧は弥生時代中・後期のものであろう。4・5は鑄造鉄片であるが、表面が段をなしている。ともに弥生時代中期から古墳時代初頭のSD316中層から出土しており、同一個体であった可能性もある。6も鑄造鉄片と考えられるが、腐食が激しく、最終的には金属学的分析によって判断されるべきものである。これら鑄造鉄器は、本来、弥生時代中・後期のものと考えられる。

7～12は、鍛造の板状鉄斧である。7が弥生時代中期から古墳時代後期のSX303出土品である以外、時期が不明である。板状鉄斧は、弥生時代の鉄器であるところから、これらが弥生時代中・後期の板状鉄斧と考えられる。この内、7～9は鉄斧としての刃先が研がれていないところからも、鉄素材である可能性がある。これら7と9は、6～7×2.7cm前後と比較的小振りであり、このような規格の板状鉄斧は、壱岐カラカミ遺跡や糸島地域で発見されており(宮本2016)、福岡平野の出土例はほとんどない。糸島地域から流入した可能性が考えられよう。この点、弥生時代中期ないし後期の土器の中に糸島地域との関係を示す土器が出土していること(石川2020)とも関係し、こうした鉄素材の流入ルートが糸島地域にあることを示しているのかもしれない。一方、10～12は刃先が研がれ片刃状をなすものであり、実用的な鉄斧である。12は11.6×4.2cmと相対的に大きい板状鉄斧であるが、これも鍛冶のための鉄素材である可能性がある。このような規格の板状鉄斧は福岡平野においてよく認められるものである(宮本2016)。これらが鍛冶における鉄素材であるならば、御供田遺跡内の弥生中・後期にも鍛冶施設があった可能性がある。

13～15は鉄鎌である。13は古墳時代後期のSD108上層出土のものであり、その段階のものであろう。根元の折り返し部が突出した状態になり、全体に細身である。一方、14・15の鉄鎌は幅広であり、根元の折り返し部分が明確である。形態的には弥生時代中・後期のものと考えられる。16は横に長く両端が折り曲げられた摘鎌である。川越哲志の分類ではAb類にあたり(川越1993)、弥生時代後期から古墳時代初頭のものであろう。17はU字形鋤先であり、古墳時代後期のSB214出土品である。古墳時代後期の鉄鎌、U字形鋤先という農具のセット関係が明らかとなった。

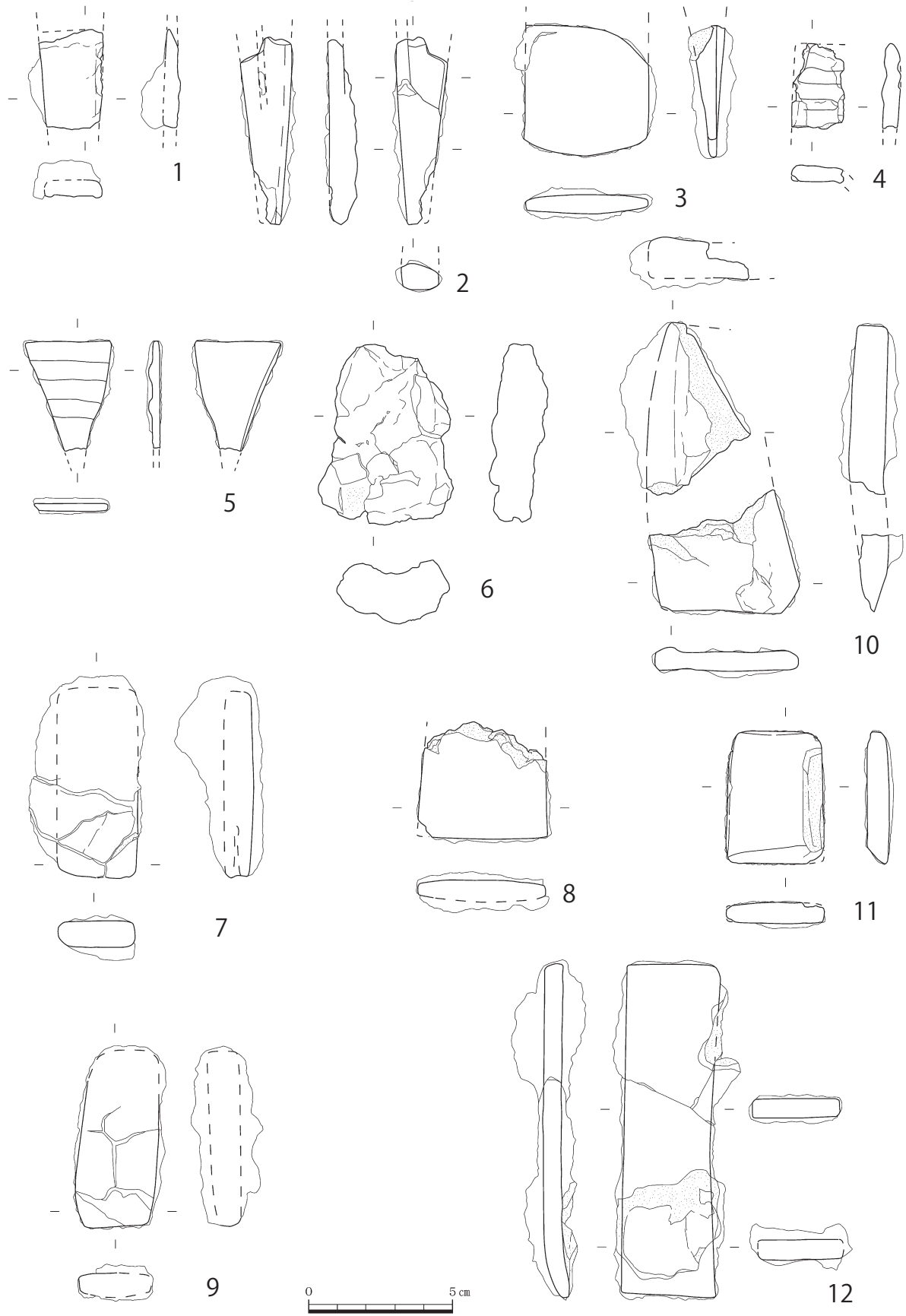


図172 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土鉄器（1）

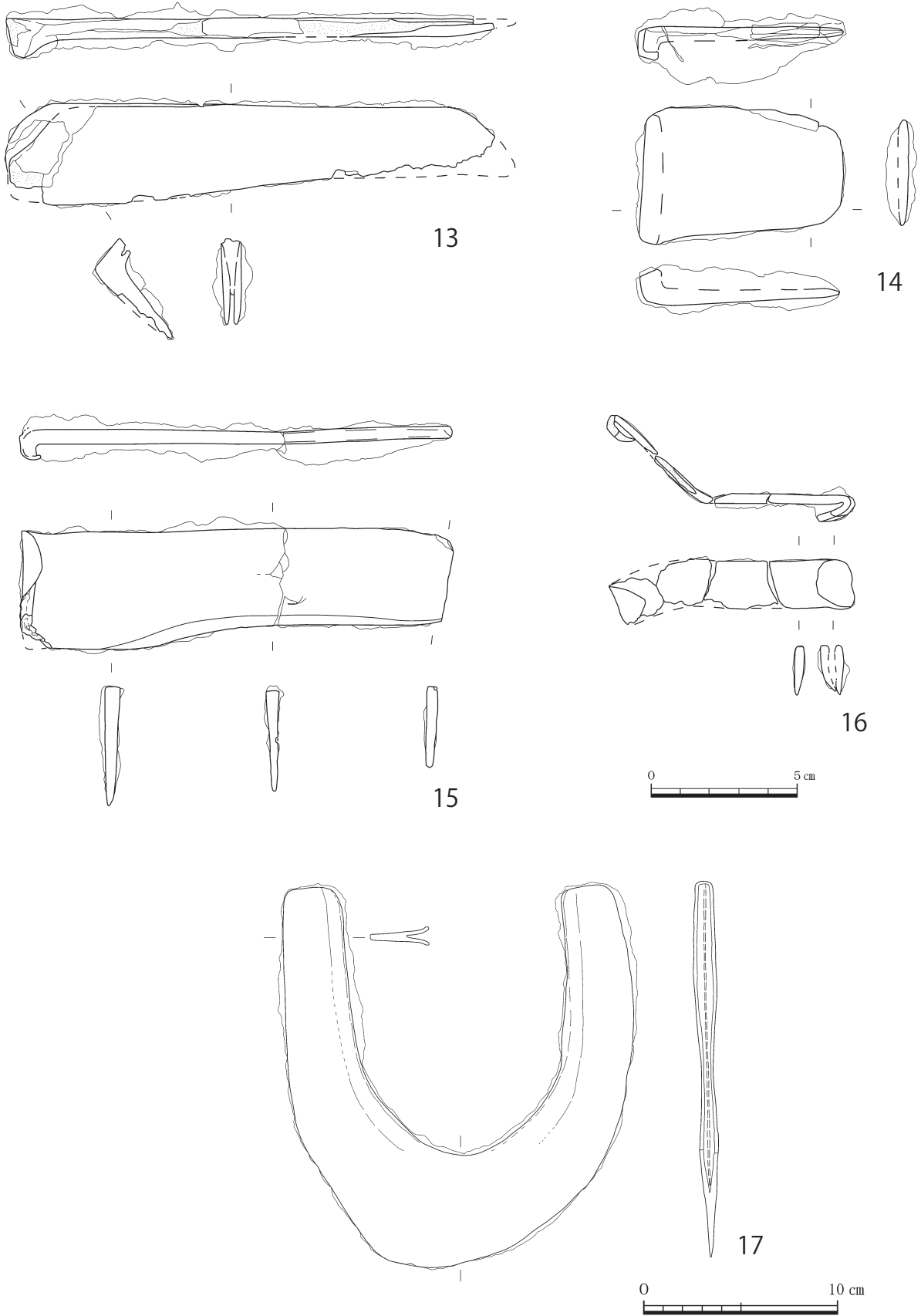


図173 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土鉄器（2）

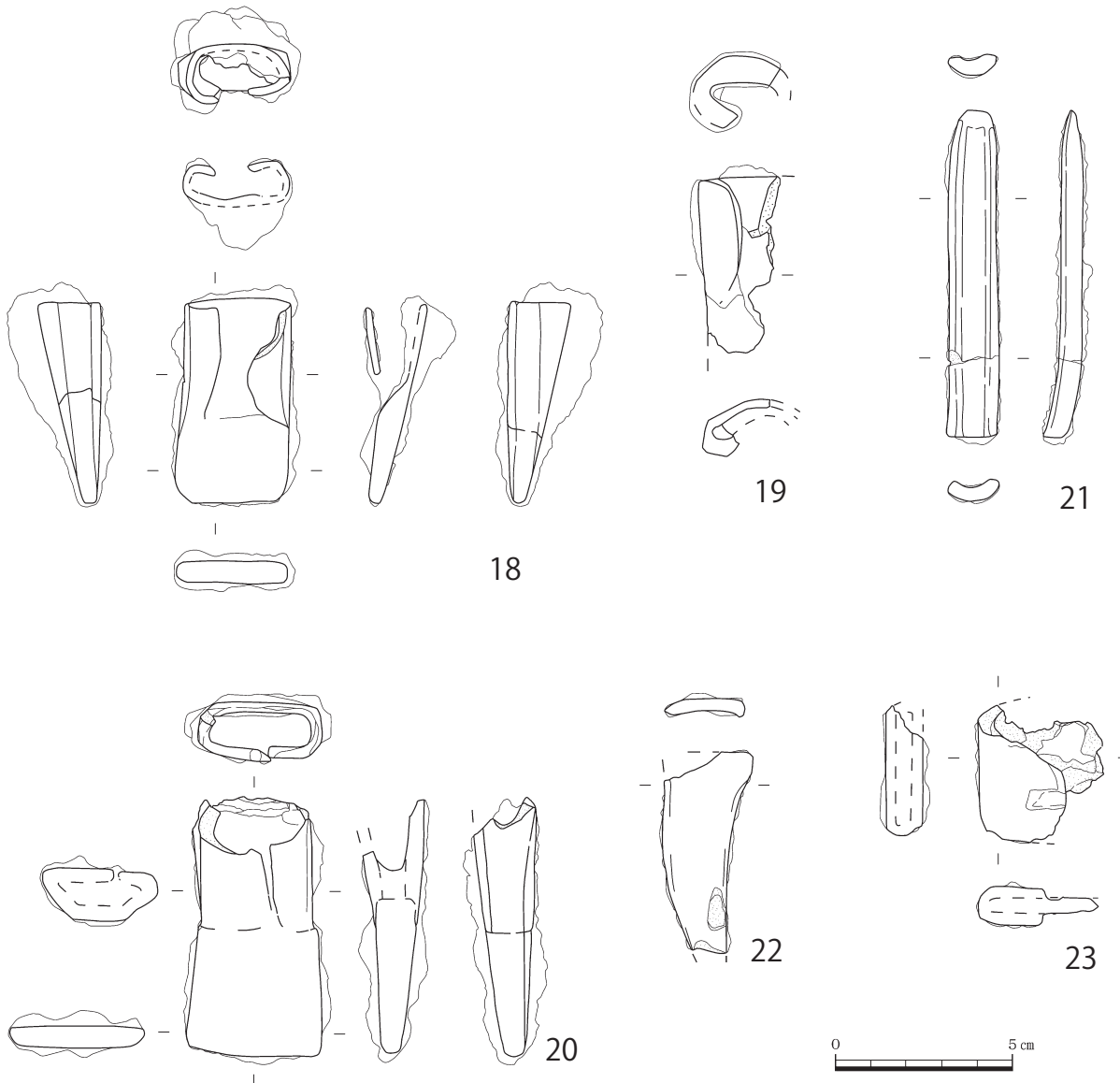


図174 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土鉄器（3）

18～20は、鍛造鉄斧である。18は小型であり、弥生時代中・後期の可能性がある。19は古墳時代初頭のSD316上層から出土しているが、弥生後期に入るものである可能性もある。20は弥生時代中期から古墳時代後期のSX303出土のものであり、弥生時代後期から古墳時代の鍛造鉄斧である。21・22は鉞である。21は断面が湾曲し、刃先がやや内反りになるものであり、弥生時代後期から古墳時代初頭のものであろう。22も断面が湾曲しているところから鉞の可能性はある。23は古代～中世のSD101上層出土の未詳鉄器である。24・25は刀子である。25は古代から中世のSD101から出土している。これら18～25は工具類である。

26は古代～中世の雁又鍬の一部である可能性があるが、釘である可能性もある。27～29は鉄鍬である。27は古代から中世にかけての包含層から出土しているが、柳葉形鍬で10.4cmと大型であるところから古墳時代初頭・前期のもの可能性がある。九州では柳葉式鍬が無茎三角形式鍬に代わり古墳時代初頭から主体になる（大村1986）。28は古墳時代後期の平根式鉄鍬の圭頭式に分類できる（豊島2010）。

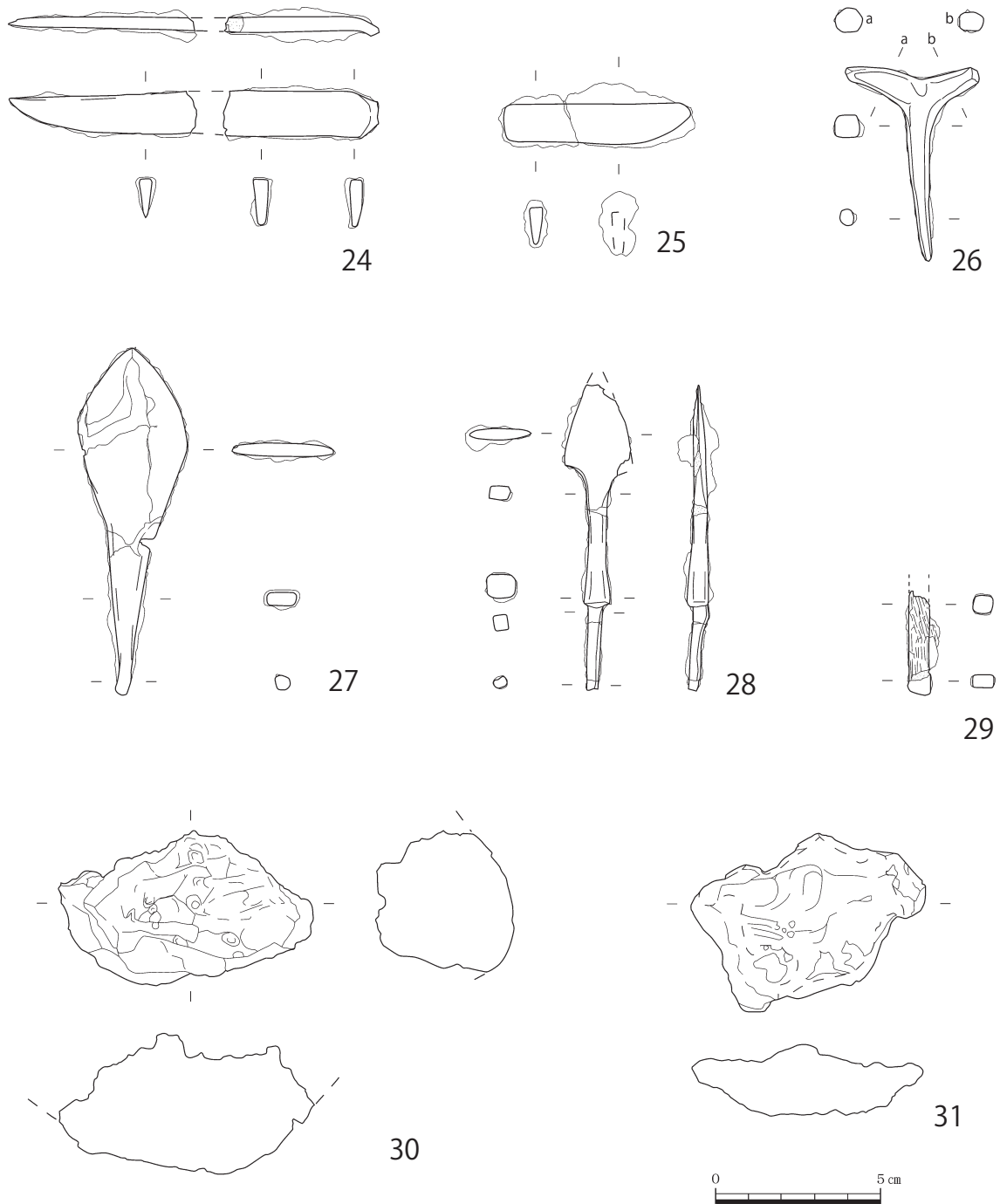


図175 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土鉄器（4）

30・31は椀形滓であり、製鉄遺構に伴うものである。30は古代～中世のSD101から出土している。ともにエリアIから出土したものであり、板状鉄斧の存在からも、弥生時代中期～古墳時代初頭の集落が広がるエリアIに鍛冶遺構が存在した可能性がある。

この他、鉄滓（図177-32～34、図版7-824～826）は、エリアIVの寺院遺構の西側からも大量に出土している。図176に示すように、J13・K13区SX001とK13区SX002の二手に分かれるように斜面に沿って鉄滓の分布の中心が認められる。この間が従来台地をなしており、既に削平されて存在しないが、この台地部に鍛冶遺構が存在していた可能性がある。また、古代の寺院と関係する溝SD701

IV 考察

表11 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土鉄器

| 番号 | 調査年度 | エリア | 調査区 | 出土遺構 | 時期 | 器種 | 最大長 (cm) | 最大幅 (cm) | 最大厚 (cm) | 重量 (g) |
|-------|-------|-----|--------|----------------|---------------|--------|--------------------------|-------------------------------|-------------------------------|--------|
| 1 | 昭和57年 | I | 9D区 | SD316下層 | 弥生時代中期～古墳時代初頭 | 鑄造鉄斧片 | 3.4 | 2.3 | 0.6 | 17.0 |
| 2 | 昭和57年 | I | 9C区 | 下層 | 不明 | 鑄造鉄斧片 | 6.4 | 1.8 | 0.9 | 16.4 |
| 3 | 昭和56年 | I | 9E区 | SX303砂質土 | 弥生時代中期～古墳時代後期 | 鑄造鉄斧片 | 4.5 | 4.3 | 0.6 | 36.0 |
| 4 | 昭和57年 | I | 9D区 | SD316中層 | 弥生時代中期～古墳時代初頭 | 鑄造鉄器片 | 2.9 | 1.8 | 0.6 | 4.4 |
| 5 | 昭和57年 | I | 9D区 | SD316中層 | 弥生時代中期～古墳時代初頭 | 鑄造鉄器片 | 3.8 | 3 | 0.3 | 9.7 |
| 6 | 昭和55年 | II | 7G区 | 覆土中 | 不明 | 鑄造鉄片 | 6.2 | 4.2 | 1.8 | 83.6 |
| 7 | 昭和57年 | I | 8E区 | 沱瀨原砂質土 (SX303) | 弥生時代中期～古墳時代後期 | 板状鉄斧 | 6.6 (復元) | 2.8 (復元) | 1 | 92.4 |
| 8 | 昭和56年 | I | 9D区 | SD321中層 | 不明 | 板状鉄斧 | 4.1 | 4.5 | 0.8 | 31.1 |
| 9 | 昭和56年 | I | 9E区 | 整地層下層 | 不明 | 板状鉄斧 | 7.1 | 2.7 | 1.2 | 62.8 |
| 10 | 昭和55年 | II | 7G区 | 包含層 | 不明 | 板状鉄斧 | 10.0 (復元) | 4.9 | 1.3 | 82.8 |
| 11 | 昭和57年 | I | 9D区 | SD316下層 | 弥生時代中期～古墳時代初頭 | 板状鉄斧 | 4.6 | 3.3 | 0.8 | 32.9 |
| 12 | 昭和56年 | I | 9E区 | 整地層 | 不明 | 板状鉄斧 | 11.6 | 4.2 | 0.6 | 107.5 |
| 13 | 昭和52年 | I | 8C区 | SD108上層 | 古墳時代後期 | 鎌 | 16.5 | 3.6 (刃) 2.4 (基) | 0.6 | 94.1 |
| 14 | 昭和55年 | I | 8E区 | SK11 | 不明 | 鎌 | 6.9 | 4.5 | 0.7 | 96.9 |
| 15 | 昭和55年 | II | 7G区 | 包含層 | 不明 | 鎌 | 14.7 | 3.7 (刃) 4.0 (基) | 0.5 | 95.6 |
| 16 | 昭和57年 | I | 9F区 | 整地層 | 不明 | 摘鎌 | 9.3 (復元) | 1.6 | 0.3 | 8.9 |
| 17 | 昭和55年 | II | 7G・H区 | SB214 | 古墳時代後期 | 鉄製鋤先 | 19.4 | 17.75 | 1.2 | 560 |
| 18 | 昭和56年 | II | 7H区 | P-2 | 不明 | 鍛造鉄斧 | 5.7 | 3.2 (刃) 3.0 (袋) | 0.6 | 56.6 |
| 19 | 昭和56年 | I | 9D区 | SD316上層 | 古墳時代初頭 | 鍛造鉄斧 | 5.3 | 2.4 | 0.7 | 18.2 |
| 20 | 昭和57年 | I | 9E区 | SX303砂質土 | 弥生時代中期～古墳時代後期 | 鍛造鉄斧 | 7.3 | 4.7 (刃) 4.1 (袋) | 1.2 | 74.4 |
| 21 | 昭和55年 | I | 8B区 | SD101M層 (砂質土) | 古代～中世 | 鉈 | 9.2 | 1.4 | 0.5 | 18.6 |
| 22 | 昭和56年 | I | 9E区 | 整地層下層 | 不明 | 鉈 | 5.7 | 2.4 | 0.4 | 12.6 |
| 23 | 昭和55年 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 未詳鉄器 | 3.8 | 3.5 | 1.1 | 18.7 |
| 24 | 昭和55年 | II | 7G区 | 包含層 | 不明 | 刀子 | 11.2 (復元) | 1.6 | 1 | 6.1 |
| 25 | 昭和55年 | I | 8D区 | SD101上層 | 古代～中世 | 刀子 | 5.6 | 1.1 | 0.4 | 16.5 |
| 26 | 昭和55年 | II | 7G区 | SD101上層 | 古代～中世 | 鋸 or 釘 | 5.9 | 4.1 | 0.8 | 9.1 |
| 27 | 昭和56年 | I | 9C区 | SD101覆土排土中 | 古代～中世 | 鋸 | 10.5 | 3.2 | 0.7 | 23.7 |
| 28 | 未詳 | I | 8E区 | SK11 I層 (灰褐色土) | 不明 | 鋸 | 9.2 | 3.0 (刃) 0.8 (頸) 0.5 (茎) | 0.4 (刃) 0.7 (頸) 0.5 (茎) | 9.6 |
| 29 | 昭和55年 | II | 7H区 | SB06 (SB214) | 古墳時代後期 | 鋸茎片 | 3 | 0.7 | 0.6 | 2.3 |
| 30 | 昭和55年 | I | 8D区 | SD101最下層 | 古代～中世 | 椀形滓 | 7.7 | 4.3 | 3.9 | 170.3 |
| 31 | 昭和57年 | I | 9E区 | 旧耕作土 | 不明 | 椀形滓 | 4.9 | 8 | 2.1 | 71.4 |
| 32-34 | 昭和60年 | IV | 13J・K区 | SX001/002 | 古代 | 鉄滓 | 詳細は巻末観察表参照 (遺物番号824-826) | | | |
| 35-37 | 昭和60年 | IV | 13M区 | SD701 | 古代 | 坩堝 | 詳細は巻末観察表参照 (遺物番号777-779) | | | |

から、鑄銅のための坩堝も出土している (図177-35~37)。鉄滓と坩堝の時代は特定できないが、エリアIVからは轡の羽口や炉壁も合わせて出土しているところから、この付近で鉄生産や青銅器生産が行われていたことは間違いない。8~9世紀の寺院が区画溝SD701内部ないし付近に存在したと考えられ、その区画溝SD701の西側でこれら金属器生産に係わる遺物が集中して出土しているところから、寺院に附属した金属製仏具の生産場であったと想定できる。

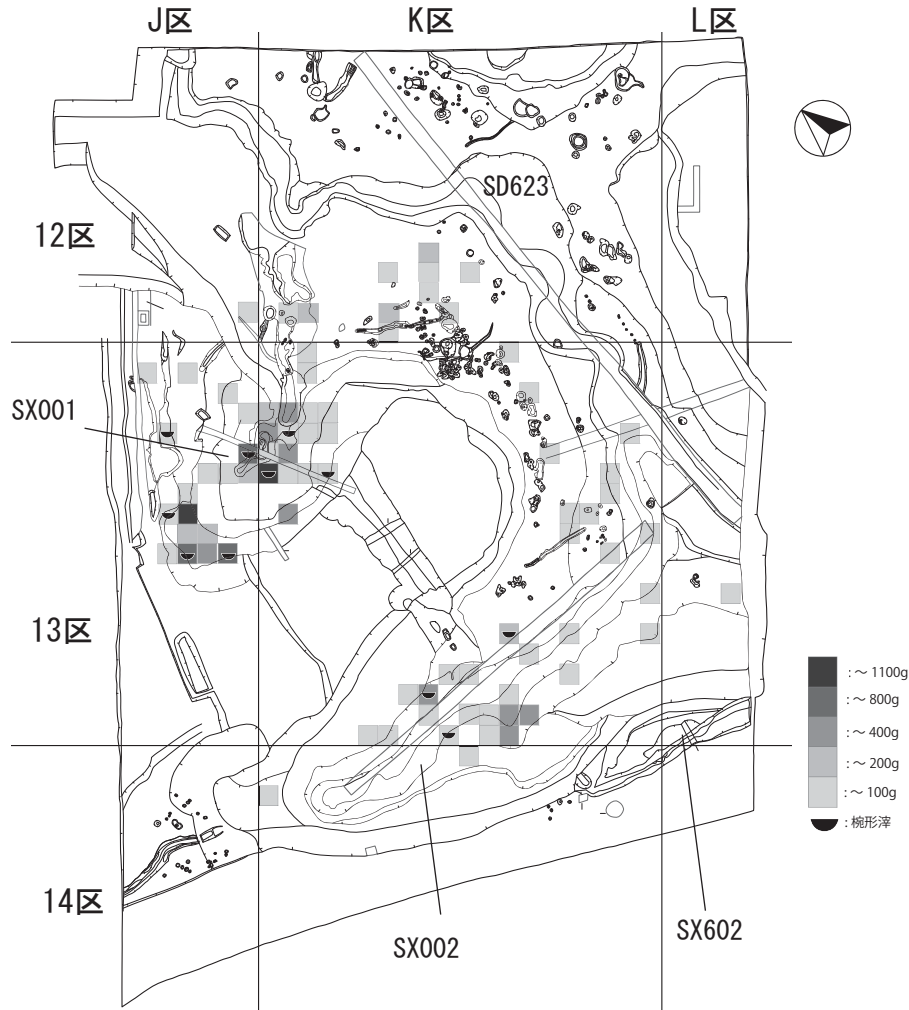


図176 エリアⅣ出土鉄滓分布図

3. 鉄器からみた筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）

以上のように、弥生中期～古墳時代初頭の鑄造鉄器、板状鉄斧、鉄鎌、鉄摘鎌、鉄斧、鉄鉈、鉄鋸などが出土しており、エリアⅠ・Ⅱに広がる集落に伴うものである。『九州大学筑紫キャンパス遺跡総括報告書1』で報告した弥生時代中・後期の鑄造鉄器、鋤先、袋状鉄斧（宮本2020）も、それらの集落に含まれるものである。また、不明鉄製品としたもの（宮本2020、図1-4）は、鳥取県青谷寺地遺跡に出土例のある鑿である可能性もある（鳥取県埋蔵文化財センター2011）。エリアⅠの橢形滓や板状鉄斧の存在は、エリアⅠの弥生中期から古墳時代初頭の集落内で鍛冶生産を行っていた可能性を示している。このように豊富な鉄製品の存在は、御供田遺跡が弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての拠点集落であった様相を示している。須玖遺跡群を核として、その周辺に広がる矢永原遺跡群や雑餉隈遺跡群と同じような衛星集落の一つとして御供田遺跡が存在した可能性がある。

古墳時代の集落はエリアⅡ・Ⅲ・Ⅳに展開する（岩永・田尻編2009）。古墳時代後期の鉄鎌、U字形鋤先の農具のセットが出土しており、鉄鋸とともに古墳時代後期の集落で使用されていた。この段階の須恵器生産道具である叩き板や当て具がエリアⅣから出土しているが、須恵器作りとともに農作業を行った集団の集落がエリアⅡ・Ⅲ・Ⅳに存在していたと想定できる。こうした生産者が牛頸窯跡

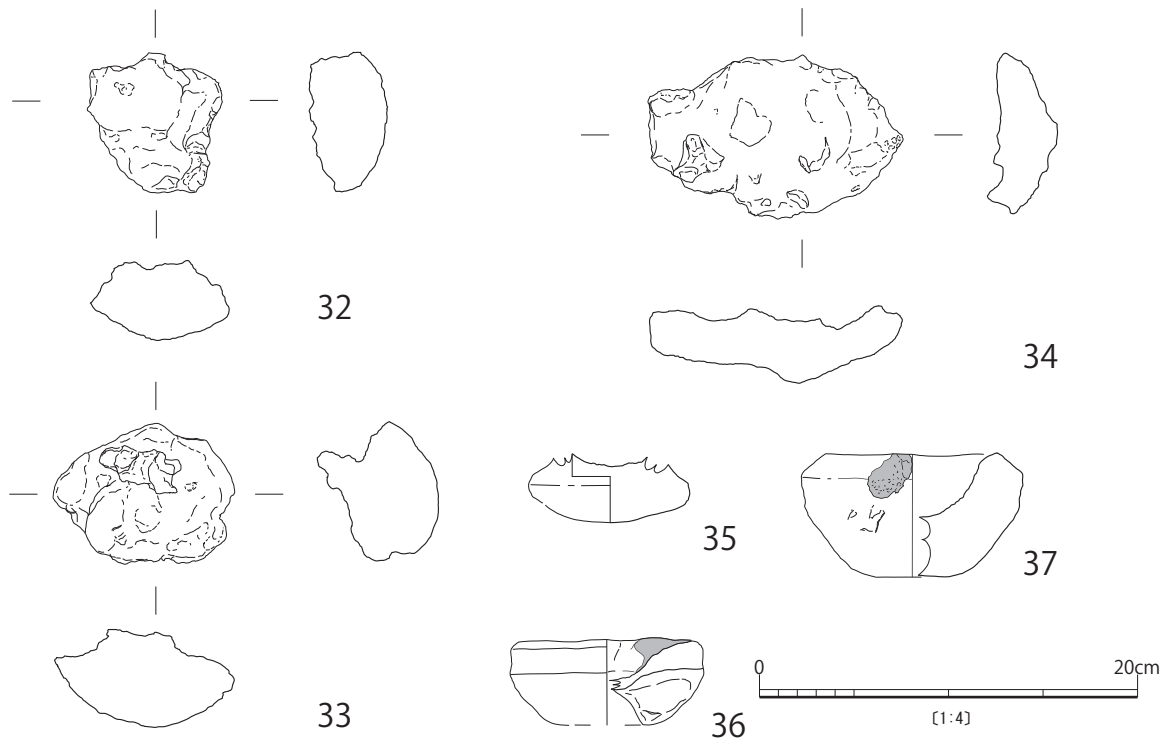


図177 SX001・002出土鉄滓とSD701出土坩堝

で須恵器を焼き上げていたのであろう。

古代・中世も引き続き刀子・鉄鏃などの鉄器が出土している。エリアIVでは多量の鉄滓が出土しているとともに、溝SD701から銅製品鑄造のための坩堝も出土している。これら鉄滓は、8～9世紀の古代寺院と考えられる区画溝の西側で集中して出土している。鍛冶や鑄銅生産などが行われていた可能性がある。年代の特定はできないが、位置からすれば古代寺院の西側で仏具などの金属器生産がなされていた可能性が考えられるであろう。

参考文献

- 石川健2020「弥生時代の遺構の時期と集落の構造」『九州大学筑紫地区キャンパス遺跡群（御供田遺跡）総括報告書1』九州大学埋蔵文化財調査室、157-169頁
- 岩永省三・田尻義了編2009『奴国の南－九大筑紫地区の埋蔵文化財－』九州大学総合研究博物館
- 大村直1986「鉄鏃」（金関恕・佐原眞編）『弥生文化の研究9 弥生人の世界』雄山閣出版 東京、87-91頁
- 川越哲志1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣出版 東京
- 豊島直博2010『鉄製武器の流通と初期国家形成』塙書房 東京
- 鳥取県埋蔵文化財センター2011『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告6 金属器』
- 宮本一夫2016「弥生時代北部九州の鍛冶と交易－カラカミ遺跡の事例を中心に－」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室50周年記念論文集・文集』広島大学大学院文学研究科考古学研究室、213-230頁
- 宮本一夫2020「弥生時代の鉄器と筑紫キャンパス遺跡群」『九州大学筑紫地区キャンパス遺跡群（御供田遺跡）総括報告書1』九州大学埋蔵文化財調査室、180-181頁

5 筑紫キャンパス遺跡群出土文字資料の再検討

坂上 康俊

1. はじめに

本遺跡群では墨書土器67点、ヘラ書き土器1点、木簡2点が出土している。このうち墨書土器66点については、九州大学総合研究博物館『奴国の南 九大筑紫地区の埋蔵文化財』（2009年）所収の山根謙二「筑紫地区出土墨書土器の再検討」（以下、「山根報告」）において、写真・図版を伴う丁寧な解説が施されている。そこで今回は、墨書土器については遺物の番号も含めて山根報告を基本的に踏襲し、必要に応じて補訂を施すことにしたい。ヘラ書き土器は今回新たに紹介するものであり、木簡については既に知られているものではあるが、紹介の過程で出土地点や接合をめぐって混乱もあったため、あらためて確認した結果を報告することにする。

2. 墨書土器（図178～187）

墨書土器は13L・M区の、特に溝状遺構 SD701から集中的に出土している。土器の年代観は、おおむね8世紀後半～9世紀前半とみなされている。以下、判読された文字ごとに紹介しよう。

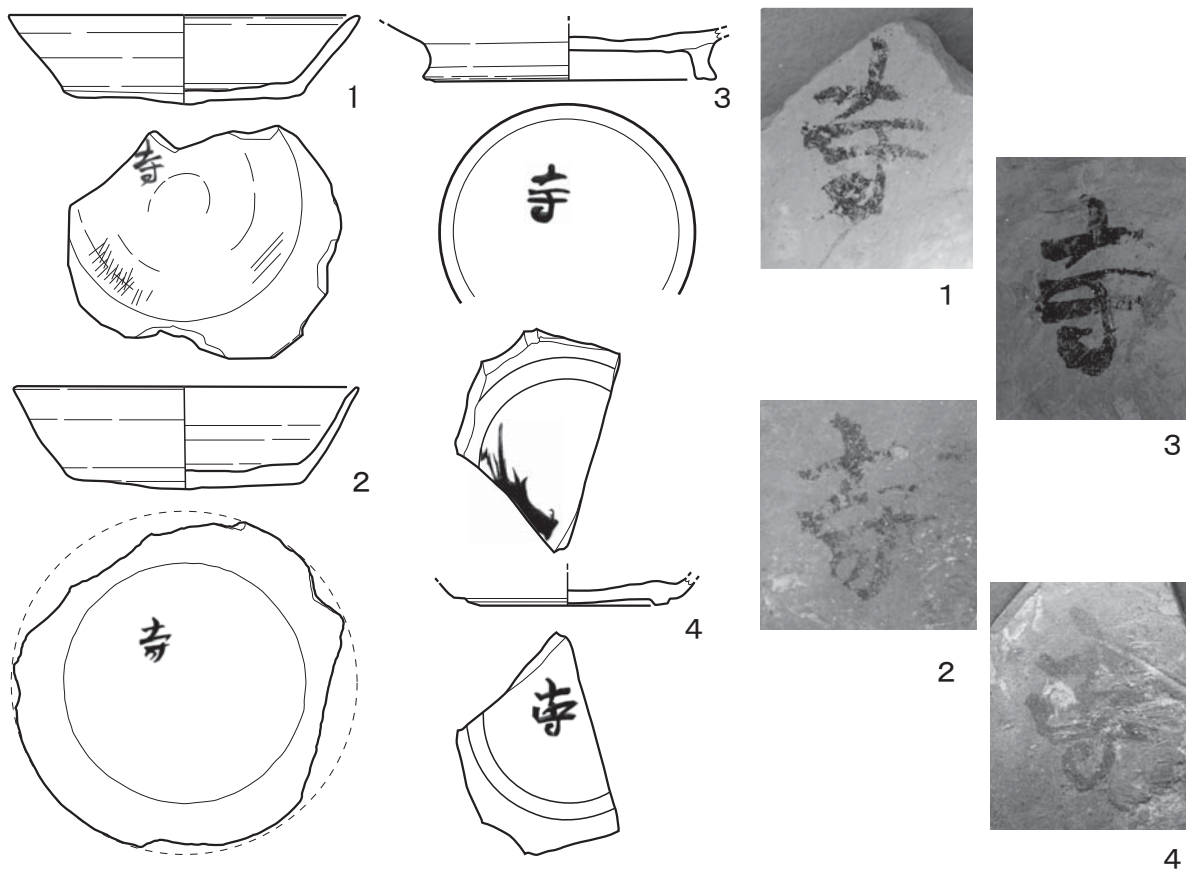


図178 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器（1）（S=1/3，写真は任意）

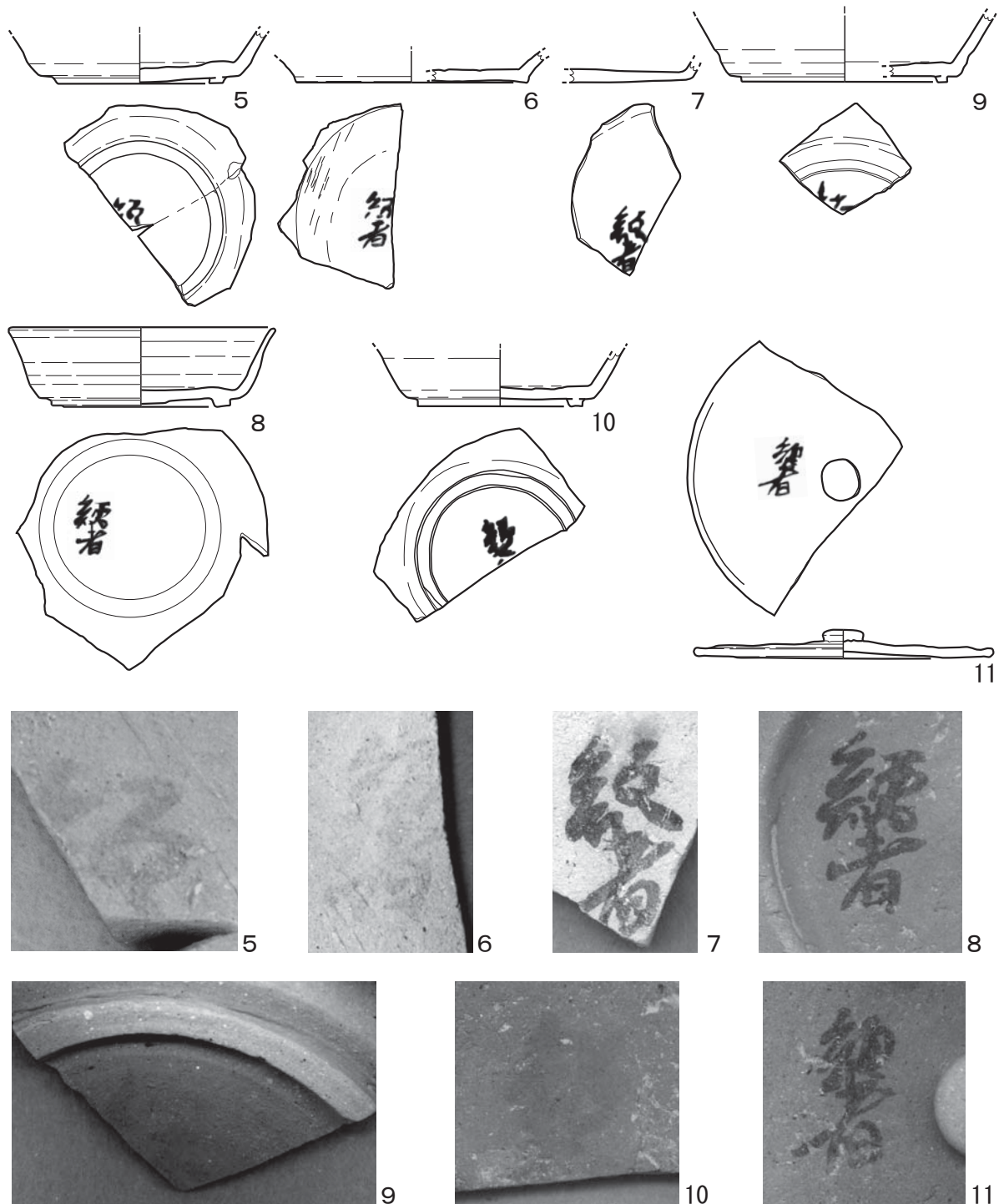


図179 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器 (2) (S=1/3, 写真は任意)

1～4は「寺」と書かれた土器で、4点確認されている。1・2は灰色(5Y5/1)の土師器坏、3はにぶい黄橙色(10YR7/2)の高台をもつ土師器坏、4は灰色(N4/0)の須恵器坏で、2・3ではともに底部外面中央脇に一文字だけ「寺」と記されている。1・4では「寺」の上が失われているため、この上にも文字があった可能性は否定できないが、書かれた位置は2・3と同様に底部外面中央付近なので、おそらく一字のみだったろう。なお、4の底部内面には墨痕がある。

5～11は判読しにくい糸偏の文字が書かれた土器で、7点確認されている。山根報告ではこの文字

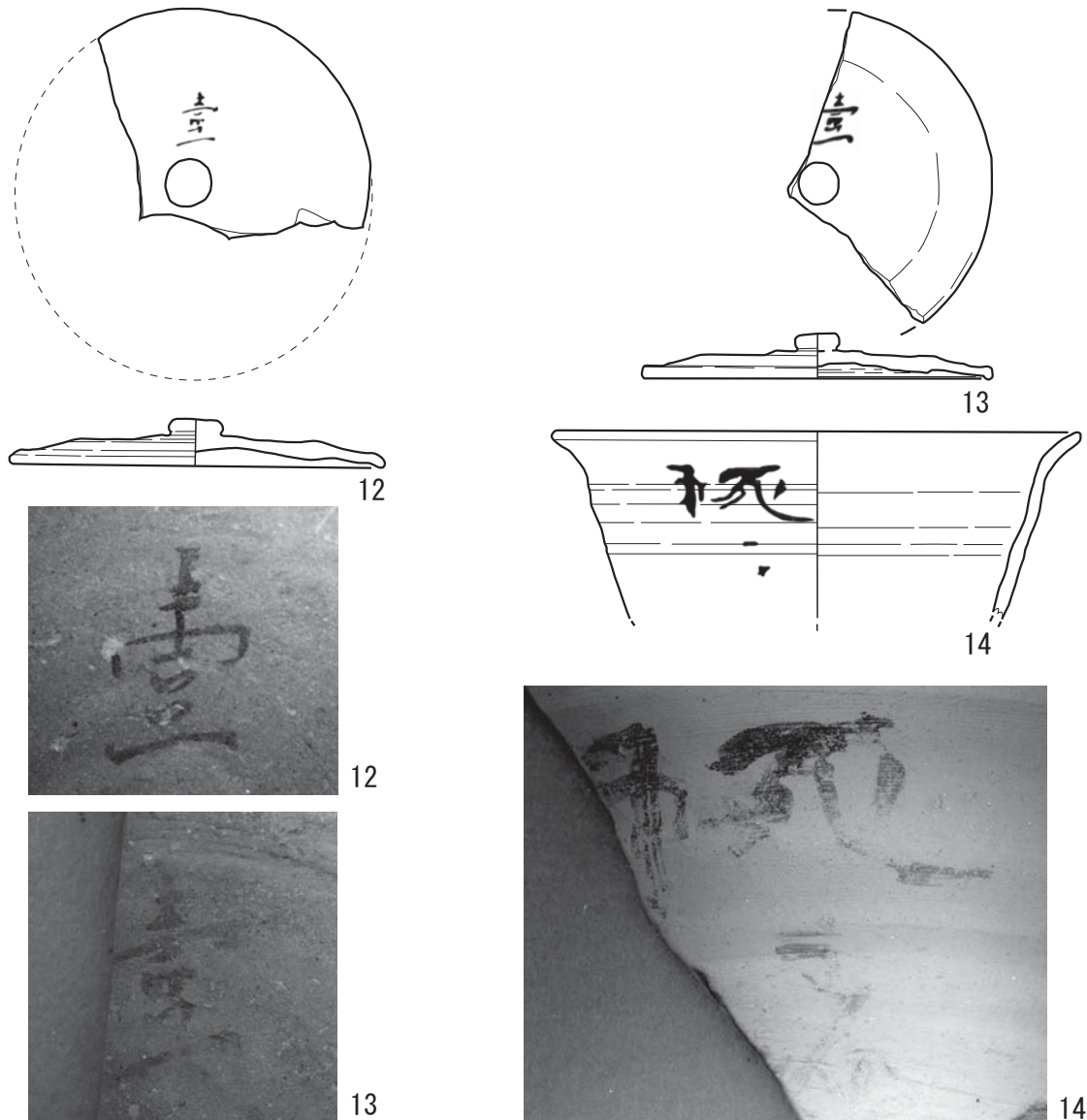


図180 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器 (3) (S=1/3, 写真は任意)

をそのまま「網」と掲示していたが、「網」である可能性が大きい。「網」であれば、古代で寺院の統括にあたる三綱（上座・寺主・都維那）など、「寺」との親近性がある。「網者」は古代の文献には見あたらないようであるが、「綱維」に通じて、「三綱」あるいはこれに相当する役職の僧侶の意と考えられる。5は灰色（N6/0）の須恵器坏で、旁しか残らないが「網」であろう。6は灰黄色（2.5Y 7/2）の須恵器皿で、底部外面中央脇に「網者」と薄く書かれる。7は灰白色（5Y7/1）の須恵器皿、8は灰色（N5/0）の須恵器皿で、2点とも底部外面中央脇にくっきりと「網者」と書かれている。9は灰色（N6/0）の須恵器坏で、墨書は非常に薄く判読しにくいがおそらく「網」であろう。10は灰色（N6/0）の須恵器坏で「網者」と確認できる。11は灰色（N5/0）の須恵器蓋で、つまみの横に明瞭に「網者」と書かれている。なお、5・7・10はいずれも破損しており、「網者」の下に字が続いていた可能性を否定できないが、6・8・11の例に照らして、下に字は続かない。

12~14は「壹」と「椀」を墨書した個体である。12・13はともに灰色（N6/0）の須恵器蓋で、つまみの脇に「壹」と書かれている。「一」と読める墨書土器40・42、及び木簡の「一院」との関連が

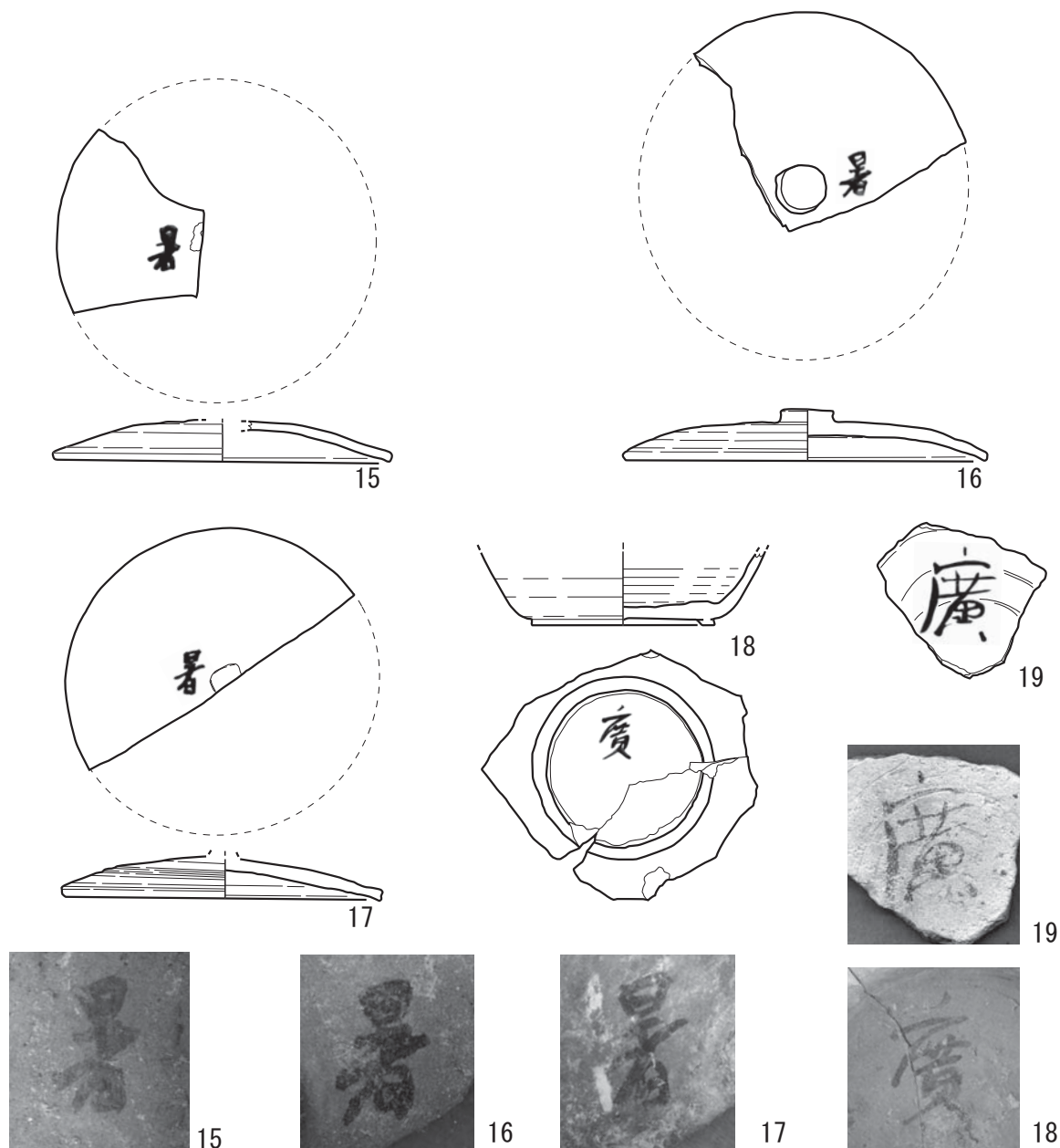


図181 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器（4）（S=1/3，写真は任意）

うかがえる。なお、12の内面は硯として転用されている。14は灰黄色（2.5Y7/2）の土師器鉢で、口縁部外面下に正位で「椀」と墨書されている。山根報告では「死」と読んでいたが、左側に木偏があること、また「死」と墨書する例が稀少であることから、読みを改めた。この下にも文字と思われる墨痕があるが判読できない。

15～19は「暑」（もしくは「署」の異体字）と「廣」を墨書した土器である。15～17は3点とも灰色（N5/0）の須恵器蓋片で、つまみの脇に「暑」（もしくは「署」の異体字）と墨書されている。16・17は「暑」（もしくは「署」の異体字）の下に字が続いていた可能性を否定できないが、15の例に照らして、下に字は続くまい。なお15の内面は硯として転用されている。18は灰色（5Y6/1）の須恵器坏で、底部外面中央脇に「廣」と墨書されている。19は黄橙色（10R6/3）の土師器皿の底部片で、「廣」と墨書されている。その下は破損しているが、18の例に鑑み、下には字は続くまい。

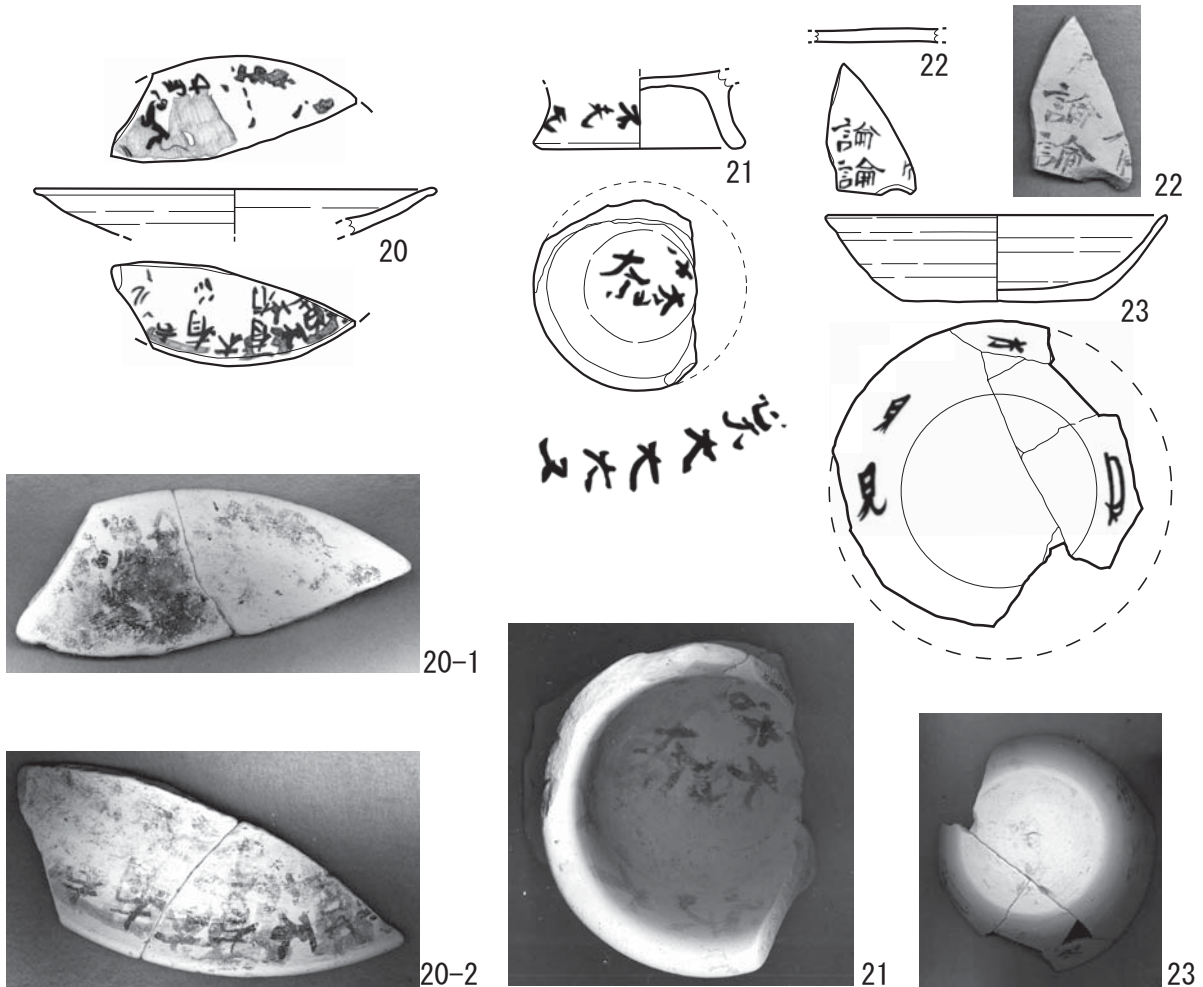


図182 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器 (5) (S=1/3, 写真は任意)

20～23は習書土器である。20は黄灰色 (2.4Y8/1) の土師器皿で、外面縦方向に「謹」や多数の「有」が、横方向に「不」が濃く認められ、他にも墨色が薄く判読できない墨痕が多数残っている。内面にも判読できない文字・墨痕がある。21は灰色 (2.5Y8/1) の土師器鉢で、「大」のような文字 (文様?) を底部外面中央から渦を巻くように書き、その列は高台内面を経て高台外面にまで至る。文字は22個ほど数えられるが、中には「无」「不」のように見える文字も含まれている。なお内面は硯に転用されている。22は灰黄褐色 (10Y R6/2) の土師器皿の底部片で、「論」が2つとその上と右とに文字と思われる墨痕がある。23は黄褐色 (10Y R6/3) の土師器坏で、胴部外面に横向きに「身家」と墨書がある (山根報告では「見」もしくは「泉」を2つ墨書したものと見ていた)。この他に米偏と思われる文字があり、また、底部外面にも薄い墨痕がある。

続いて24～42について。24は灰色 (N6/0) の須恵器坏で、底部外面に「佛進」の墨書があるが、上下が破損しており、前後に文字が続いていた可能性がある。25は灰白色 (7.5Y8/1) の須恵器坏で、底部外面に「廐」と墨書する。宝亀11年 (780) 12月29日「西大寺資財流記帳」には、「馬屋房」との標目のもと、檜皮板倉、檜皮屋、檜皮温屋、草葺屋などと並べて「草葺廐 長九丈 広二丈」という記載があり (山路直充2011 p.209)、また天平勝宝8歳 (756) 6月を上限として天平宝字年間 (757～764) をさほど下らない時期に描かれた大和国平群郡額田部郷の額田部氏の氏寺である額田寺の寺域および周辺の寺領を描いた「額田寺伽藍並条里図」 (山口英男1996、2001) にも、寺域の南西の隅

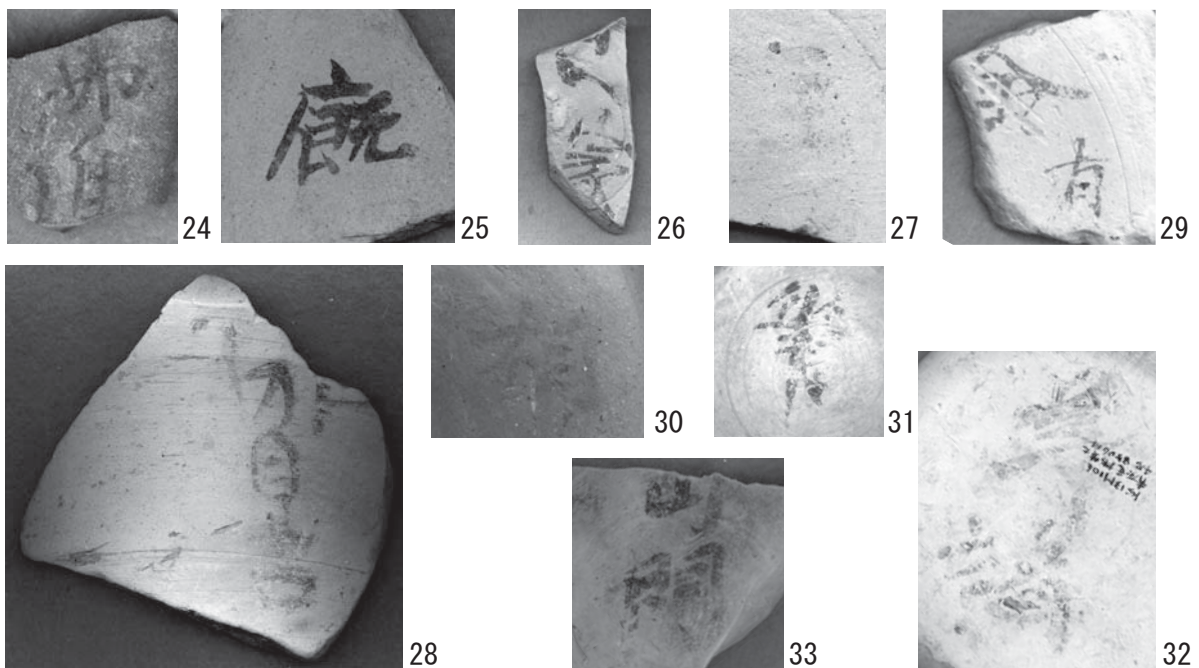
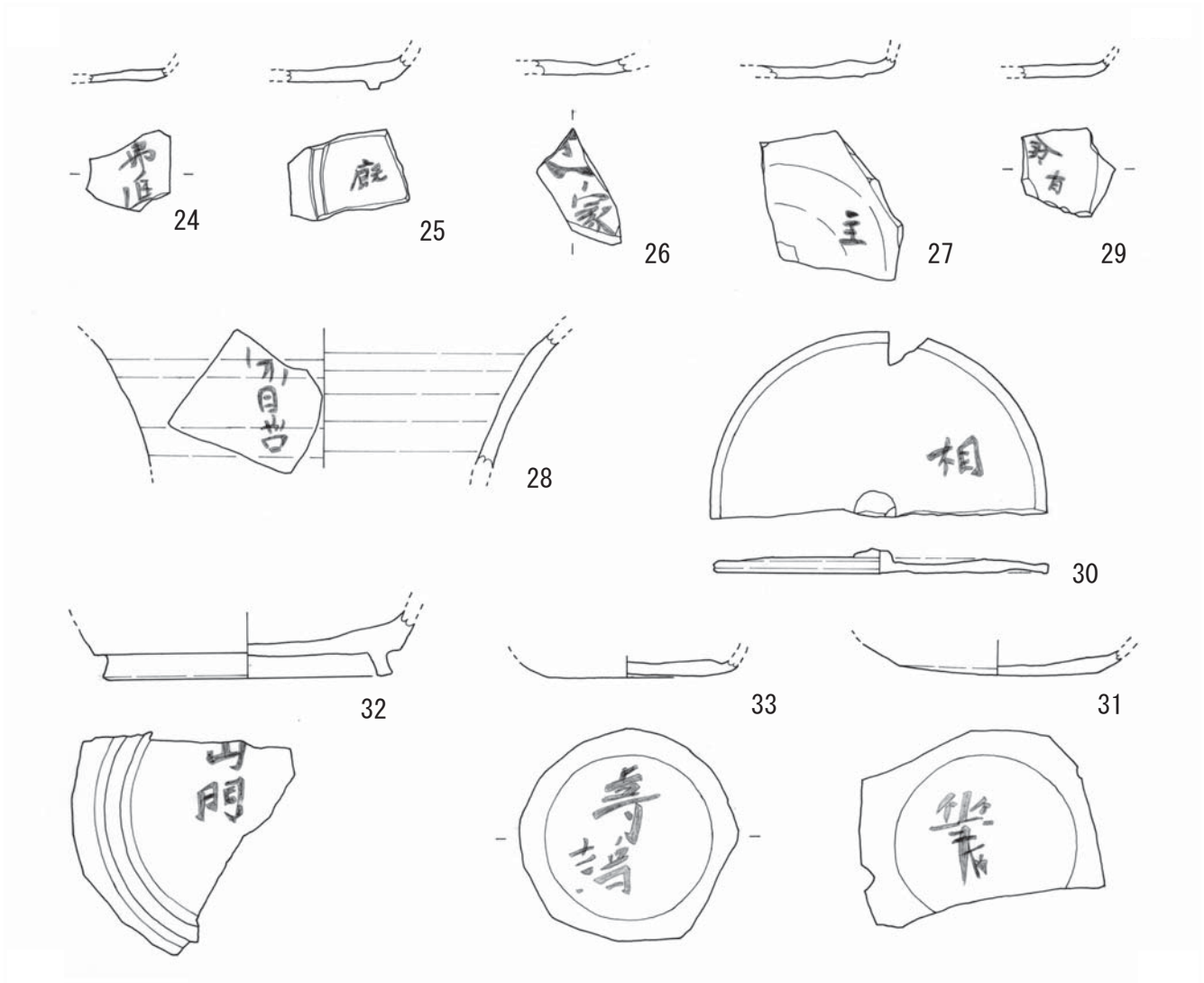


図183 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器 (6) (S=1/3, 写真は任意)

に「馬屋」が描かれているので、当該墨書も寺院に付属する廐を指すと見ることは十分可能である。26は灰白色（7.5Y8/1）の土師器坏で、胴部外面に「□家」と墨書があるが、前後に更に文字が続いていた可能性がある。27は灰白色（5Y7/1）の須恵器坏で、底部へりに「主」と墨書する。28はにぶい黄褐色（10YR7/2）の土師器鉢で、胴部外面に正位で「刀自召□」と墨書があり（山根報告では「刀自古」と読んでいたが、三文字目を改めた）、その周辺にも墨痕がある。29は灰黄褐色（10YR6/2）の土師器皿の小片で、外面に「有」、これと逆向きに「進」のように見える墨書がある。30は灰色（N6/0）の須恵器の蓋で、つまみ横にかなり薄く「相」と墨書する。31は黄色（2.5Y6/3）の土師器坏で、外面は赤みを帯びている。底部外面に墨痕があり、判読はかなり難しいが「卷」である可能性がある。なお、底部の内外面に「×」のヘラ記号がある。32は灰黄褐色（10Y R5/2）の土師器坏で、底部外面中央に「山門」と墨書する。「山」の上が欠けているので、更に文字があつた可能性も否定できないが、「山門」のみであるとすれば、まずは「山門郡」や「山門郷」といった地名との関連が考えられる。『角川日本地名大辞典40福岡』（1988）によれば、古代の筑後国の南部にあった「山門郡」は、矢部川及びその支流飯江川北岸一帯、瀬高の近辺に当たる。初見は続日本紀神護景雲4年5月26日条で、百濟の役に従軍して唐の捕虜となり、40年後に帰国した許勢部形見の本貫「筑後国山門郡」であるが、日本書紀神功元年3月条に皇后が「山門県」に至るといふ記事を載せるので、もし同じ場所を指すとすれば、地名「山門」の起源はかなり古い。10世紀の和名抄によれば、山門郡には大神・山門・草壁・鷹尾・大江の5郷が属していたという。一方、筑前国早良郡の室見川下流左岸、今津湾岸に南北朝～室町期の阿蘇社領荘園名として「山門荘」「山戸荘」が見え、こちらを指す可能性や、他の遺失地名の可能性も残されている。さらに地名ではなく、寺の門の意味で書かれた可能性もあるだろう。「山門」と言えば後世には主に延暦寺を指すようになるが、円仁の入唐求法巡礼行記開成5年（840）5月23日条では仏陀波利が五台山に入ろうとするときに「山門に到る」と記し、遡って最澄の山家学生式（六条式。弘仁9年〈818〉）では比叡山（延暦寺）で修行の間は「山門を出ず」と規定している。当該墨書も、やや離れた地名を指すよりは、多少とも小高い山に設けられた寺院の正面の門の意味で記された可能性を考えた方が良いのではなかろうか。33は灰白色（5Y7/2）の土師器坏で、底部外面に「寺請」と読める墨書がある。34は浅黄色（2.5Y7/3）の土師器坏の底部片で、約半分が失なわれている。底部外面横に「古万」と読める墨書がある。人名「古麻呂」の略記であろう。35は灰白色（5Y8/1）の土師器皿で、口縁部外面と底部外面に墨書があり、このうち口縁部の墨書は「両□」、底部の墨書は縦に「刀自古」と書かれているように見える。36は黄褐色（10Y R6/7）の土師器鉢の胴部の小破片で、外面に「仰」らしい字とその左横に縦に「酉丁」が書かれ、更にその下側にもう1字はあると思われる。37は浅黄色（2.5Y8/1）の土師器皿の小片で、底部外面に「ノ」の字のような墨痕があるが、記号かもしれない。38は灰白色（7.5Y8/1）の須恵器蓋の小破片で、墨書は判読しにくい「郷」の傍のように見え、その右と上にも文字と思われる墨痕がある。39は浅黄色（2.5Y7/3）のほぼ完形の土師器皿で、底部外面には点が4つと四角の枠の墨痕があるが、文字かどうか不明。なお、口縁部内面には外に向かって筆を馴染らした痕跡があり、屈曲部にも広く墨痕が残されている。パレットとして使われたらしい。40は灰色（7.5Y6/1）の須恵器坏底部の小破片で、底部外面に直線上の墨痕がある。後述の木簡に見える「一院」、また先述の12・13の墨書「壹」と通じて、「一」と書いたものである可能性がある。41は黄橙色（10Y R7/3）の土師器皿の小破片で、底部中央に墨痕があるが、文字かどうか不明。42はにぶい黄橙色（10Y7/3）の土師器坏の底部破片で、中央を横切るような直線状の墨痕があり、屈曲部を経て胴部にも少しかかる。これも「一」である可

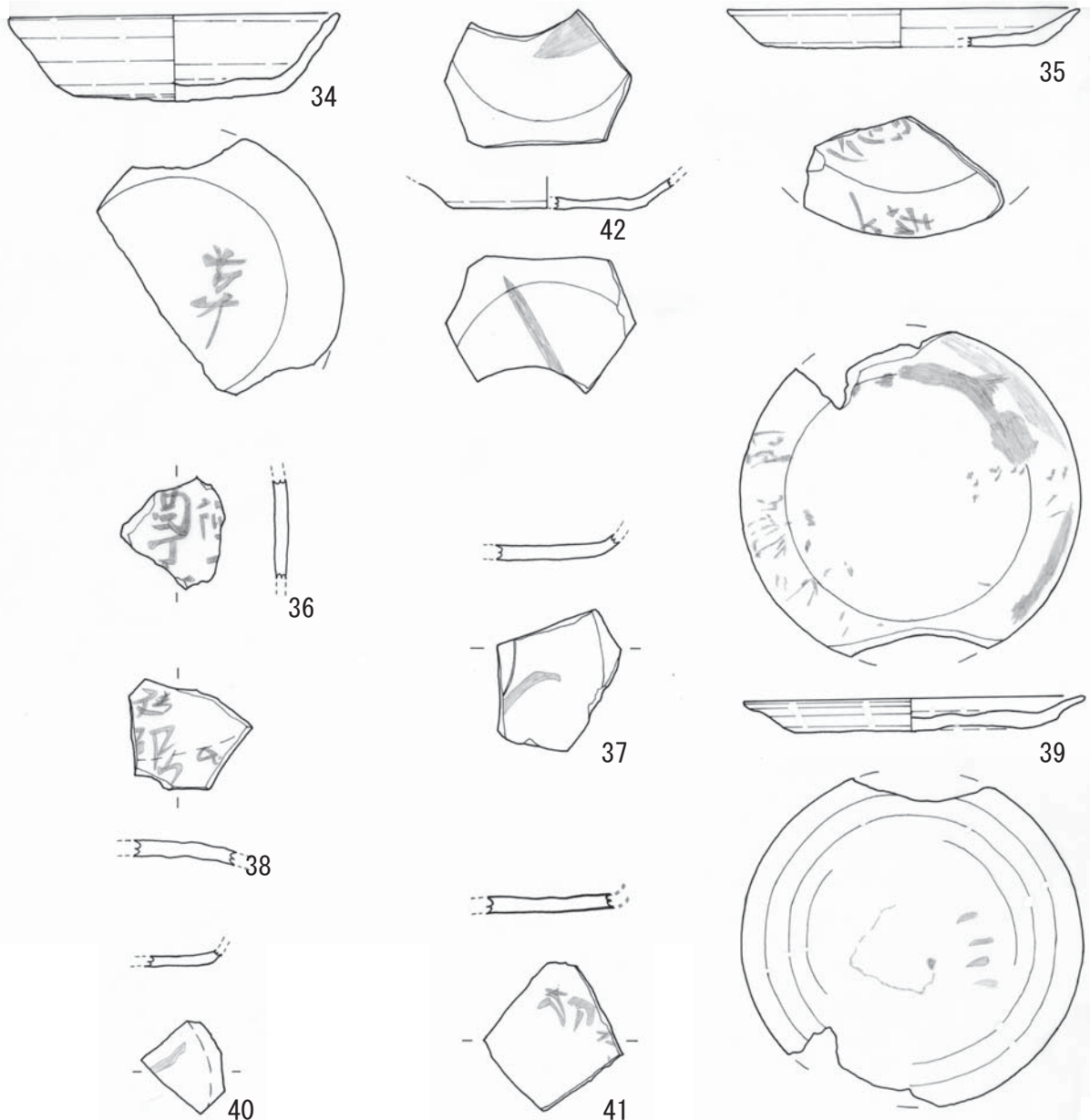


図184 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器（7）（S=1/3）

能性がある。なお、内面にもうっすらと墨痕が残る。

43~54は絵画を含む墨書土器である。43は灰黄色（2.5Y7/2）の土師器坏で、底部内面に広く墨痕があるが、判読不能である。44は灰色（N6/0）の須恵器坏で、内面は硯に転用されている。底部外面に絵画の一部とみられる図形があり、胴部外面にも墨痕がある。45は灰黄色（2.5Y6/2）の須恵器皿で、底部外面横にいわゆる「四つ葉のクローバー」型（花卉状）の文様と、これに隣接して「飛」もしくは「凡」を組み込んだ則天文字のように見える墨痕がある。「四つ葉のクローバー」型の文様は奈良文化財研究所『平城宮跡出土墨書土器集成Ⅱ』（1989年）255号などにも見え、西大寺食堂院跡井戸SE950出土墨書土器では「厨」とこの文様とを連記していることから、「器」と読めるのではないかとする説がある（馬場基2007 p.28）。しかし、本墨書土器では、当該文様の上の文字と「器」とを連ねて有意義になるようには見えない。この文様は、確かに平城京、井相田C遺跡、博多遺跡群

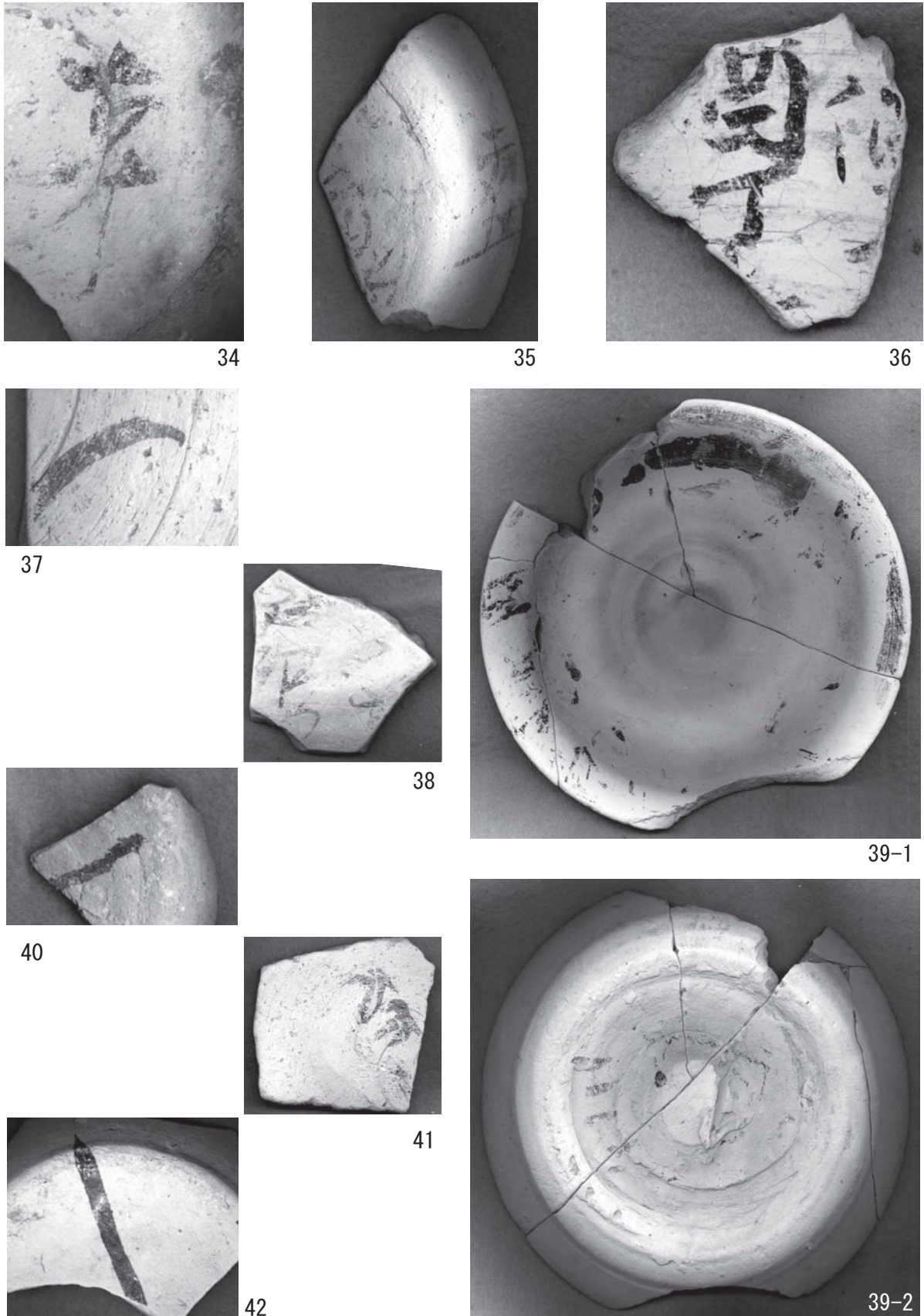


図185 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器 (8) (S= 写真は任意)

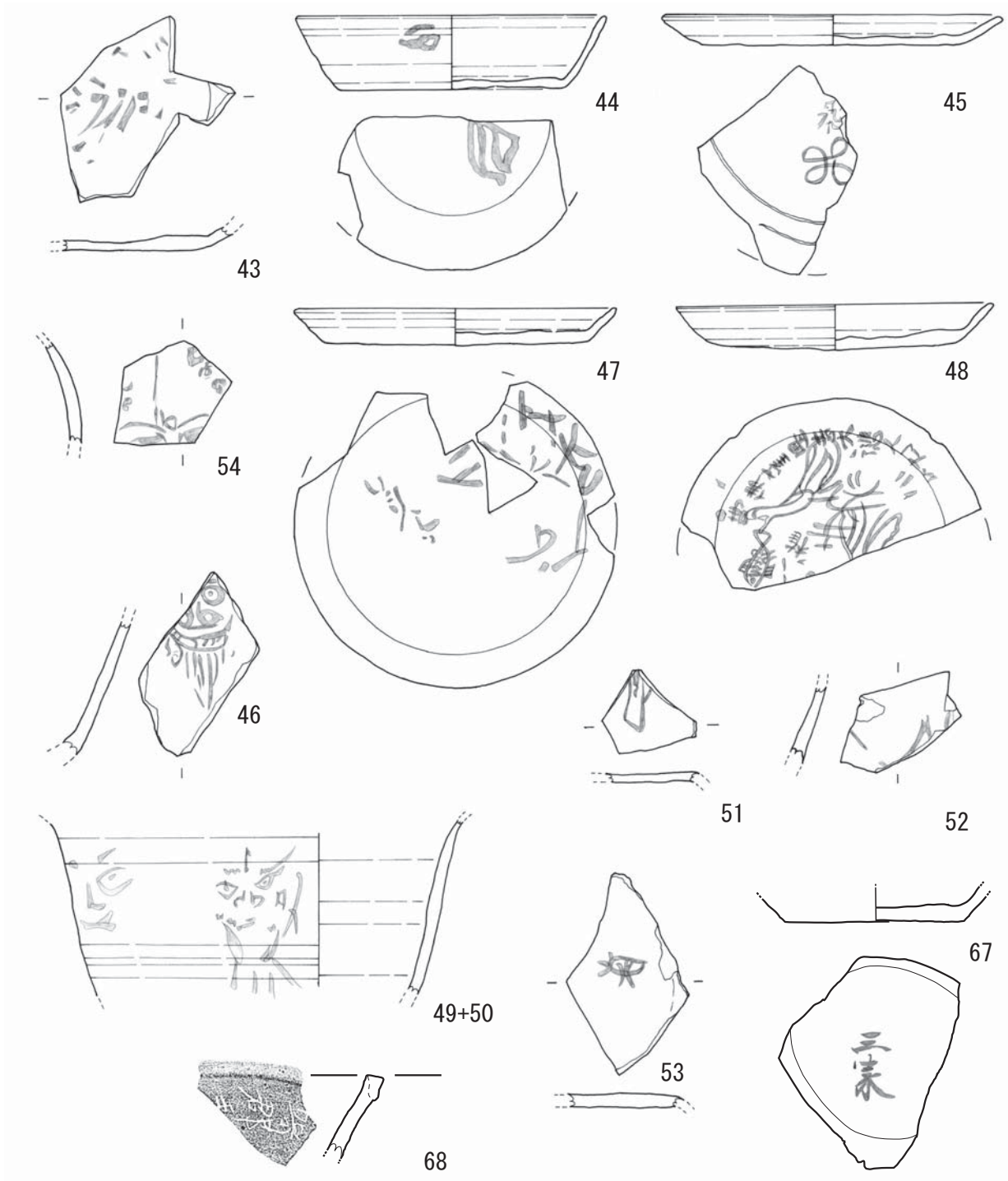


図186 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器 (9)・ヘラ書き須恵器 (S=1/3)

からも出土しているものの、西大寺、長安寺廃寺、宝満山遺跡群、高畑廃寺、豊後国分寺など寺院跡からの出土が目立ち、官衙遺跡からの出土はあまり見られない。蓮華文様、あるいは「佛」を略した「弗」、菩薩（并）など、なんらかの仏教的な意味を持つ文字に由来する記号である可能性がある。46は浅黄色（2.5Y7/3）の土師器鉢で、側面に正位で人面が描かれており、最上部の丸が右目、その下の2つの丸は鼻孔、その下に口と顎髭とを描く。疫神・悪鬼の像とみられ、祓えに用いられたものであろう。47は灰黄色（H2.5Y）のほぼ完形の土師器皿で、口縁部外面に「大」を倒位に書いたよう

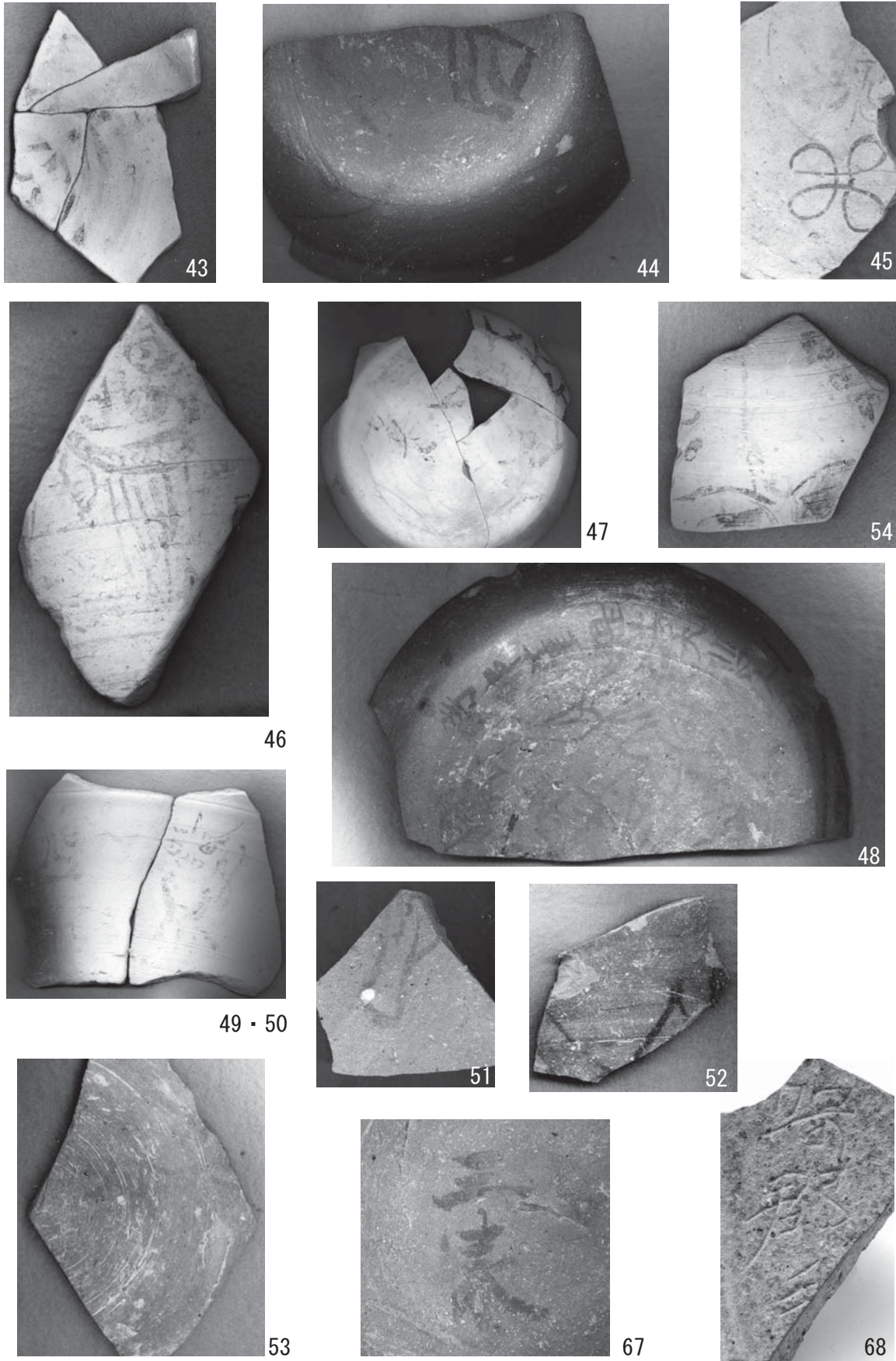


図187 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土墨書土器 (10)・ヘラ書き須恵器 (S= 写真は任意)

な文様がある。底部外面にも薄い墨痕がある。山根報告ではそのうちの一字を「見」と読んでいたが、むしろ「佛身」と読むべきかもしれない。48は灰色（N4/4）の須恵器皿で、硯に転用されている。墨書と絵画とがあるが、半分ほど失われている。底部外面には縁に沿って「時佛薩是（もしくは提）甚（もしくは志）大悲人□□」という文字列がある。底部外面中央には外縁の文字列と同方向の「権」と、墨色は薄いが大きく「寺」という字が書かれている。絵画については、魚とその尾鰭についた紐を持つ人物が描かれている。魚は鰭だけでなく鱗まで精緻に写實的に描かれている。人物の方は、伸ばした手の先に魚を掲げ、肩から胴までが縁から底部中央にかけて描かれており、着衣には襷まで描き込まれている。山根報告では「欠失部分には人物の頭部が描かれていたのであろう」とするが、臂の関節の曲がり具合から判断すれば、むしろ頭部は底面の外になるのではあるまいか。放生の場面か、あるいは魚籃観音のような寓話を表したものであろうか。49+50は、黄橙色（10Y R7/2）の2点が接合する土師器鉢の胴部片である。外面に正位に人面を2面並べて墨書している。左の方は墨が薄く、眉・目・鼻・口を微かに確認できるのみである。右の方は額から角を思わせる縦線が伸び、眦と眉は吊り上がり、右眉は大きく外側に伸び、輪郭も鋭く描かれている。口元下部から縦線が伸びているのは、顎髭と首とを表現したものであろう。2面のうち左の方は吡形、右の方は阿形を示しているように見え、天部（金剛力士）を描いたものである可能性がある。51は灰色（N5/0）の須恵器蓋の小片で、札のような長方形が描かれており、絵画の一部と見られる。52は灰色（N4/0）の須恵器壺の胴部片で、“W”のような文様と直線の墨痕とが認められ、絵画の一部と見られる。53は灰色（7.5Y 6/7）の須恵器蓋の天井部片で、外面の墨書について、山根報告では魚のような絵と見ているが、33の「寺」と似ているようにも見える。54は灰黄色（Hue2.5Y6/2）の土師器瓶の肩部片で、外面に正位で眉と目とが描かれている。額には縦の線が伸びているが、眉間には白毫のような表現があって眉目秀麗の観があり、仏面である可能性が大きい。周囲にも墨痕があるが、判読不能である。

55～66の11点に関しては、小片で、文字が判読できなかった。今回新たに紹介する67は灰色（内面7.5Y5/1、外面7.5Y6/1・N6/0）の杯身で、その底部外面に「三家」と書かれている。「ミヤケ」と読むのであろう。本遺跡群を貫通していた可能性の大きい水城西門ルートを鴻臚館に向けて進んだ先の福岡市南区の旧大字三宅字コクフには、7世紀後半から9世紀代の寺院跡三宅廃寺があり、これまでの5次の発掘調査により、一辺100～110m規模の寺域が想定されている。ここでは奈良時代前半の老司式瓦のほか、「寺」「堂」「中」「造寺」などの墨書土器、「佛」「東」「寺」といったヘラ書き土器、木簡（判読不能）、正倉院宝物に類似する佐波理匙・箸などが出土している。かつてはここが宣化元年の「那津官家」の遺称地とされていたが、現在は比恵遺跡がこれに当たるとされており、呼称の由来については明確ではない。「三家」墨書土器は、寺院同士の交流の結果、本遺跡群に残されたものであろうか。

3. ヘラ書き土器（図186・187）

一点だけ出土しているヘラ書き土器68は、内面が灰色（7.5Y6/1）、外面が灰白色—灰色（7.5Y7/1-6/1）の須恵器甕で、口縁部内面に横向きに「郡那手」と記されている。本遺跡群の南側に延びる丘陵には、牛頸窯跡群と呼ばれる大規模な須恵器生産地があった。その中のハセムシ窯跡や井出 A-3 地区4号窯跡からは、「和銅六年」の年紀と「筑紫前国（もしくは筑前国）奈珂（もしくは仲）郡手東里の調の大甕」との旨がヘラ書きされた須恵器の大甕片多数が出土している¹⁾。この68にも、もと

もと「(那もしくは奈) 笥郡手 (東里)」とヘラ書きされていたものと推測される。ただし、ハセムシでは正位で書かれており、68は横位である点、及びハセムシ出土では「珂」字を用いるが、68では井出 A-3 地区 4 号窯跡出土甕と同様に「笥」と書かれる点が異なる。「手東里」は他の史料に見えず、あるいは和名抄に見える那珂郡「田来」郷のことで、「手来里」(たくのさと) が正しい表記であったかもしれない(中村浩1989)。調の須恵器大甕に記されているのは、須恵器の貢進者の本貫・姓名と年紀であり、筑紫キャンパス遺跡群の中では須恵器を焼いた窯跡として SX402 が検出されている²⁾が、問題のヘラ書き土器は窯跡からの出土ではないので、使用後か、あるいは運搬の途中で壊れて廃棄されたものであろう。

4. 木簡 (図188)

本遺跡群で出土した木簡については、『九州大学埋蔵文化財調査報告—九州大学筑紫地区遺跡群—』第三冊(1994年3月)525~526、541~542頁に、計3点の図版と解説とがあったが、出土遺構との関係がはっきりせず、解説と図版との対応関係も乱れていた。そのうちの2点については、早く『木簡研究』4号(1982年11月)に倉住靖彦氏による報告が掲載されている。ただし、実際には推定寺院跡から2点、推定官道沿いから2点の計4点が出土し、その後、前者は上下に、後者は左右に、それぞれ接合することが確認された。倉住報告は後者を2点として報告したものである。『奴国の南』展図録(2009年1月)において、田尻義了氏によって初めて計2点であることが示され、写真が掲げられた。ここでは倉住・田尻両氏の報告を踏まえて紹介する。

1号木簡 (279) × (40) × 6 081 型式

- ・ □□□見見見見見見見見 □□ ×
- 。 観観観観観観是是是是是是 □□ ×
- ・ 見有有有有 □□ ×
- 。 衆衆衆衆衆□□□衆衆 □□ ×

2号木簡 (175) × (57) × 5 081 型式

- 一院収□□段
- 冊五歩
- 一院□□□田一段百七十歩
- (院カ) 一□□□□

1号木簡は推定寺院跡から出土した習書木簡である。上端は斜めに切断されており、下端はへし折られたようにして欠損している。上端には表から裏に穴を通していた痕跡が残っており、二次利用されていることを示している。仏典ではよく見られるような文字群であり、出土地点付近に寺院があったことを示す一証となっている。

2号木簡は推定官道沿いの溝(側溝?) SD101で出土している。上端は切断されており、下端は左右から挟りが入っている。上端は木簡使用後に廃棄されたときの痕跡であるが、下端は木簡として使



図188 九州大学筑紫キャンパス遺跡群出土木簡 (S=1/3: 写真は任意)

用されたときの成型の痕跡である可能性がある。「一院」ごとの田積が記されているが、どのような性質の「院」であったかは不明である。

参考になるのは下総国分寺跡から「一院」と書かれた墨書土器が出土していることで、これは大衆院を指すらしい(山路直充2019 p.117)。木簡に見える「一院」は、墨書土器の「壹」「一」と繋がるもので、寺院内の建築物、ないしはそこに集う人々のことを指している可能性がある。

5. 考察

本遺跡から出土した文字資料の特徴は、以下のようにまとめられる。

墨書土器はいずれも8世紀後半から9世紀前半にかけての型式を示し、67点すべてがSD701溝から出土している。書かれた内容は「寺」「綱者」「佛薩……大悲」など、寺院・僧侶や仏教経典ないし寓話に縁の深い文字や絵が目立ち、近辺に寺院があり、そこから溝へと流れ込んできた土器群である可能性が大きい。「山門」も筑前・筑後の地名ではなく、寺院の門を指す可能性が出てくるし、「廡」も寺院附設のそれと見る余地が出てこよう。また「四つ葉のクローバー」型文様（花卉状文様）も、何らかの仏教的な意味を持つ記号と見受けられる。人面土器の中にも白毫をもつ仏面や、阿吽形の天部と見られるものがあり、寺院との関わりで描かれた可能性がある。2点の木簡のうち、1号木簡に習書されているのは仏典によく出てくる文字であり、2号木簡の「一院」も大衆院のような寺院の区画あるいは組織を指す可能性がある。

以上、墨書土器・木簡ともに、付近に寺院があったことを反映していると考えられ、更に景観復原という観点から見れば、墨書土器にいう「寺」の中心部分は、官道と通じる小径をたどった先の「山門」を入ったやや小高い丘の上に位置していたと考えられる。「一院」と呼ばれる区画を持っており、「廡」を備えてもいたので、単なる一字の仏堂といったものではない。おそらくは近辺の平地に若干の寺領も展開していただろう。

ただし、髭面の人面土器は疫神を描いたもので、これを祓うための祭祀・習俗の痕跡と見てよいだろう。大宰府周辺では人面墨書土器は、高畑遺跡及び博多区井相田遺跡・大野城市仲島遺跡で集中的に出土している。出土地はいずれも水城の外側で、官道や河川に隣接しており、大宰府に入る穢れを祓う場所ではなかったかとされている（菅波正人2013 p.230）。博多湾岸から大宰府に至る官道は、現在の博多近辺と推定される美野駅から水城東門に走るルートと、鴻臚館から水城西門に走るルートの2本が想定されている。このうち西門ルートは、新羅使の来朝が盛んだった7世紀末～8世紀半ばには、外交使節が往来する大宰府へのメインルートであった。このルートは本遺跡群を貫通しており、髭面の人面土器は、境界祭祀としての祓えに用いられた可能性が大きい。

註

- 1) 他に塚原遺跡群からも「七年」「□（東カ）里大神部得□（身カ）」などとヘラ書きされた須恵器片が9点出土している（大野城市文化財調査報告書81『牛頭本堂遺跡群VII』大野城市教育委員会、2008年）。
- 2) 『九州大学埋蔵文化財調査報告－九州大学筑紫地区遺跡群－』第三冊（1994年3月）492頁。11-I区の中央付近。

参考文献

- 菅波正人2013「律令成立期前後の福岡」（福岡市史編集委員会編）新修福岡市史特別編『自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市
- 馬場基2007「墨書土器の記号」『木簡研究』29号
- 山口英男1996「額田寺伽藍並条里図」（金田章裕・石上英一・鎌田元一・栄原永遠男編）『日本古代荘園図』東京大学出版会 東京
- 同2001「古代荘園図に見る寺域の構成－額田寺の伽藍と寺域－」『古代』110
- 山路直充2011「寺の空間構成と国分寺－寺院地・伽藍地・付属地－」（須田勉・佐藤信編）『国分寺の創建 思想・制度編』吉川弘文館 東京

謝辞 本稿は『奴国の南』展図録（2009年）所収の山根謙二「筑紫地区出土墨書土器の再検討」に多くを負っている

IV 考察

が、その刊行後、特に加藤友康、川尻秋生、黒済玉恵、高島英之、山路直充、矢越葉子、吉村武彦の諸氏から貴重な御示教を頂いた。記して謝意を表します。

6 筑紫キャンパス遺跡群出土瓦の意義

岩永 省三

筑紫キャンパス遺跡群からはまとまった量の瓦が出土しており、遺跡の評価に関わり十分な検討が必要となる。瓦の時期は、大別して奈良時代のものと平安前期のものに分けられ、前者は水城西門から筑紫館（鴻臚館）へ向かう官道の西方約200mにある小寺院に関わる遺構から集中的に出土し、後者は官道の東方100～150mにまとまり官道に関わる施設で用いられたと推定できる。

I. 瓦の時期別概観

まず、瓦を時期別に概観しておく。

A. 7世紀代の瓦

平瓦と丸瓦がある。いわゆる「初期瓦」である。

平瓦は、長方形の粘土板をナデで仕上げたものが5点、凸面に格子叩きを残すものが1点出土した。前者（図59-332～334）は4辺のうち1長辺の端部をへらで切り落とし、その長辺縁が他の部分より分厚くなるという共通性があることから、2枚分の大きさの粘土板を用意し中央をへらで切って2枚に分けて作ったとみられる。後者（図59-331）は凸面に細かい格子叩きを施した後に板で擦り消し、凹面はナデを施す。焼きは須恵質である。

丸瓦は、行基丸瓦（大脇1991）が1点ある（図63-345）。「竹状模骨」で製作され焼きは須恵質である。粘土板巻き付けで成形され、凸面の狭端側には平行線を刻んだ刻線叩き（平行叩き目）が残り、広端側は板で擦過し叩き目を消している。凹面には棒状の側板痕跡が10本ほど観察できるが、ナデ消しされる部分が多く、総本数は不明である。側板を綴じ付けた紐の跡は5条で、紐の間隔は6～8cmである。「竹状模骨」による丸瓦は北部九州では6世紀末～7世紀代に製作された。

B. 奈良時代の瓦

平瓦・丸瓦・面戸瓦がある。

平瓦

すべて凸面に縄叩きを施すもので、凹面に連結枳板痕跡を持つものと持たないものがある。

凹面に連結枳板痕跡を持つもの（図141-784、図144-792・793、図151-811）。連結枳板痕は明瞭であるが、粘土板や布の合わせ目を有す個体がなく、側面が凹凸面に対して鋭角になる（直角にならない）から、桶巻き作りか細板を並べた凸型台を用いた一枚作りか決め手がない。しかし、凸面の縄叩きが縦位でなく、円弧状を呈すので「叩きしめの円弧」とみれば桶巻き作りと認定してよからう。凸面には全面に縄叩き目を残し、凹面は前面に布目が残る。全形を残す1点は、長さ38.5cm、広端幅26.7cm、狭端幅23.5cm、厚は2.0cm前後である。この種の平瓦は、本遺跡で年代決定することはできないが、大宰府政庁での瓦編年（栗原2002）では第1段階から第2段階にみられ、8世紀のものと思われる。

凹面に連結枳板痕跡を持つもので、ごく少数、厚さ3.0cm前後のものがある。この厚さのものを桶巻き作りで作るのは困難と思われるし、他の特徴が凹面に連結枳板痕跡を持たない厚さ3.0cm以上のものと同一であるので、細板を並べた凸型台を用いた一枚作りと認定する。

凹面に連結枳板痕跡を持たないもの。凹面両端を面取りする例が多く布端痕を残す個体はないが、凹面に粘土板や布の合わせ目がなく、側面が凹面に対し鋭角をなすことから、一枚作りと認定できる。凸面には縦位縄叩き目を残す。厚さで3cm未満（薄手）と3.2cm以上（厚手）に大別できる。薄手平瓦が大宰府などで一般的な平瓦であり、厚手平瓦は怡土城で特徴的にみられる特殊なものである。

薄手平瓦（図62-339、図139-780・781、図140-782・783、図141-784・785・786、図142-787、図148-805・806、図149-807・808）は、さらに厚さ1.5~2.5cm、2.8cm前後、に細分可能である。凸面に縦位縄タタキを施し、不調整が多いが、一部をナデ消すもの、離れ砂が付着するものもある。凹面は糸切り痕と布目が残り、両側面はケズリ仕上げし凹面側を小さく面取りする。両端面はケズリ仕上げ。法量は全形を残すものでは長さ36.7cm、広端幅28.5cm、狭端幅22.8cm。この種の平瓦は、本遺跡で年代決定することはできないが、大宰府政庁での瓦編年（栗原2002）では第3段階にみられ、8世紀後半~9世紀いっぱいに見られるが、一枚作りの盛期は8世紀後半とされている。

厚手平瓦（図142-788・789、図143-790・791）は、さらに厚さ3.5cm前後と4.2cm以上に細分可能であり、怡土城などでも両種がある。凸面に縦位縄タタキを施し不調整が多いが、凹面は糸切り痕と布目が残るものとナデ消すものがある。両側面はケズリ仕上げし凹面側を小さく面取りする。両端面はケズリ仕上げ。法量が分かる個体は、長さ39.2cm、広端幅不明、狭端幅27.7cm。怡土城では、厚手平瓦を焼成前に半裁した鬘斗瓦があるが、本遺跡では見つけていない。この種の平瓦は、本遺跡で年代決定することはできないが、怡土城の造営年代が天平勝宝8歳（756）~神護景雲2年（768）であるから、8世紀第3四半期のものとみとておく。

丸瓦（図145-794、図150-809・810、図151-814）

すべて玉縁丸瓦である。凸面に縄目叩きを施した後、縦方向にナデ消すが、わずかに残るものが多い。両側面ともに截面と破面を残す。凹面には糸切り痕と布目が残り、粘土板の合わせ目を残す個体がある。玉縁の成型法は、胴部と玉縁を一体の粘土で作る肩に粘土を多く足すC-1手法である（大脇1991）。一木模骨の肩が撫で肩である。法量が分かる個体では、長さ39.2cm、玉縁長5.8cm、広端幅17.0cm。長さ38.4cm、玉縁長5.6cm、広端幅16.0cm。長さ38.2cm、玉縁長6.0cm、広端幅17.0cm。この種の丸瓦は、本遺跡で年代決定することはできないが、大宰府政庁での瓦編年（栗原2002）では第3段階にみられ、8世紀~9世紀いっぱいに見られるとされるが、当遺跡での平瓦との組み合わせから8世紀後半を主体とするものとみとておく。

面戸瓦（図108-578）

丁寧な造りの蟹面戸が1点だけ出土した。生乾き段階の丸瓦を加工したもので、体部両端が丸瓦の上に乗るT字形を呈する。官道土橋遺構S X302（後述）の西側から出土した。この他に面戸瓦と特定できる個体はないが、丸瓦を打ち欠いて作る割面戸が主だったと推定できる。

C. 平安時代前期の瓦

平瓦・丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦がある。

平瓦（図54-285・286、図61-338、図62-340・341、図98-509・510、図99-516・517・518・519・520・521・522・523、図145-795・796・797、図147-800・801・802・803・804、図151-812・813・815）

凹面に連結枳板痕跡がなく平滑で、一見、一枚作りのように見えるが、側面に截面と破面を残し、桶巻き作りと判明する。凸面には斜格子文叩きを施す。斜格子文は目が細かく文字銘を持つものはない。すべてが小片で法量が分かる個体はない。この種の平瓦は、栗原和彦氏が検討し円筒桶による桶

巻き作りと認定されたものである（栗原1999・2000・2001）。連結枳板からなる開閉式の摸骨桶を用いる場合には、回転台上に直径が大きい方が下に来るように設置し、粘土円筒成形後に桶を崩して粘土円筒から外すが、円筒桶を用いる場合は、直径が大きい方を上に設置し、粘土円筒整形後に桶をそのまま上に引き上げて粘土円筒から分離する。凸面には、木製長手叩打具による斜格子叩き目を残す。この技法は8世紀末に大宰府の瓦工房で始まり、新羅の造瓦工人が渡来し工房に入った結果とみられている（栗原2000・2001）。この種の円筒桶製で斜格子文叩きを持つ平瓦は、本遺跡で年代決定することはできないが、大宰府政庁での瓦編年（栗原2002）では第4段階から第5段階にみられ、8世紀末～11世紀末のものとしてされている。本遺跡の出土品は、斜格子叩き目が比較的細かく、叩きの間隔があまり開かないものが多いことから第4段階（8世紀末～10世紀初）に位置付けておく。

丸瓦（図54-287・288、図61-337、図62-342・343・344、図63-346、図98-511・512・513・514・515、図100-524・525・526・527、図108-579、図146-798・799）

すべて玉縁丸瓦である。凸面に斜格子文叩きを施す。斜格子文は目が細かく文字銘を持つものはない。両側面ともに截面と破面を残す。凹面には糸切り痕と布目が残し、粘土板の合わせ目を残す個体がある。玉縁の成型法は、胴部と玉縁を一体の粘土で作る肩に粘土を多く足すC-1手法である（大脇1991）。一木模骨の肩が撫で肩である。全長が分かる個体はないが、残存長28cm・玉縁長5.0cm・広端幅16.5cm、残存長24cm・玉縁長4.5cm・広端幅16.0cm、残存長24cm・玉縁長4.0cm・広端幅15.0cmのものがある。この種の斜格子文叩きを持つ平瓦は、本遺跡で年代決定することはできないが、大宰府政庁での瓦編年（栗原2002）では第4段階から第5段階にみられ、8世紀末～11世紀末のものとしてされている。本遺跡の出土品は、斜格子叩き目が比較的細かく、叩きの間隔があまり開かないものが多いことから第4段階（8世紀末～10世紀初）に位置付けておく。

軒丸瓦

軒丸瓦2点（図101-528・529）は同一型式で、大宰府史跡出土軒瓦型式番号の066である（九歴2002）。中房に1+7の蓮子を置き、内区に凸線で輪郭を表した倒卵形の素弁を12個配し、外区にはコマ状の尾が付いた珠文36個を巡らし唐草文状を呈する。外縁は低い直立縁である。丸瓦は接合式で胎土は灰白色を呈する。大宰府政庁・観世音寺・蔵司官衙・不丁官衙・筑前国分寺・内山麿寺（竈門山寺跡）などから少量出土している。組み合う軒平瓦は不明である。9世紀の製品であろう。4I区の包含層から出土した。

軒平瓦

軒平瓦①・②・③は、大宰府史跡出土軒瓦型式番号の611である（九歴2002）。左から右に偏行する唐草文で、支葉は8個で巻き込みが強い。上外区は素文、下外区は珠文13個、段顎である。①（図151-816）は左端、②（図151-817）は中央やや右側、③（図151-818）は右端の破片で相互に接合はしない。①②③には平瓦部凸面が残っていないが、他遺跡の出土品では平瓦部凸面に縦位縄叩き、顎に横位縄叩きを施すことから、大宰府政庁での瓦編年（栗原2002）では第3段階に属し、8世紀後半から9世紀のものと思われる。①は12K区の寺院北面を画す溝SD623、②は12K区の「灰原」、③は13K区の包含層から出土した。水城・筑前国分寺からも出土している。

鬼瓦

鬼瓦5点はすべて平安時代のものであろう。

鬼瓦①②③は型作りではなく手づくねである。

鬼瓦①（図101-530）は、鬼面の鼻のみが剥離した11×6cmの破片である。鼻は団子鼻で鼻背が太

く、鼻翼（小鼻）の左右への張り出しがほとんどなく、外鼻孔は小さく鼻柱の根元ではなく鼻背に近い所に穿たれている。鼻背の上側、両目の間に力瘤がある。1995年調査の1区（全体地区割の2I区）2号溝から出土した。

鬼瓦②（図101-531）は、鬼面の右眉のみが剥離した6.5×4.0cmの破片である。端に疎らな頭髪をヘラ描きで雑に表す。1995年調査の1区（全体地区割の2I区）2号溝から出土した。

鬼瓦③（図153-828）は、鬼面の力瘤のみが剥離した9.5×6cmの破片である。右眉上側の額部の力瘤で、端に疎らな頭髪をヘラ描きで雑に表す。力瘤の上側が円弧状となるのは鳥衾のかけりであろう。残念ながら出土地が不明であるが、鬼瓦②と作りが似ており同一個体の可能性がある。

鬼瓦④（図153-827）は、端部で11×9cmの小片である。内区には鬼面（？）の肉の盛り上がりが見え、僅かに残るが剥離しており、界線無しで緩やかに移行する狭幅の外区には竹管押圧で珠文を密に表現する。厚さ3cmで裏面は凹凸がある。側面に逃げをとる。残念ながら出土地が不明である。

鬼瓦⑤（図61-336）は、端部で7×6cmの小片である。両側を凸線で画した外区に残る珠文3個には范傷が目立つ。内区には鬼面（？）の肉の盛り上がりが見え、僅かに残る。頭髪状の凸線があるが范傷の可能性もある。厚さ2.5cmで裏面は平滑である。9B区SD307、すなわち官道側溝SD101の西側にある東西溝から出土した。この溝からは平安前期の瓦が2.5kg出ている。

II. 瓦の地点別出土様相とその評価

筑紫地区では主として2ヶ所から瓦が出土する。水城西門から筑紫館（鴻臚館）へ向かう官道の西方約200mにある小寺院に関わる遺構、および官道の東方100～150mにまとまる（以下「官道東方」とする）。その他の地点では少量しか出土していない。以下、①寺院跡、②官道東方、③官道西方、④7世紀代の瓦の出土地点に分けて検討する。出土量は、破片が多いため点数ではなく重量で示す。

A. 寺院跡

40・45・46次調査区すなわち当地区西端で検出された寺院と推定される遺跡（以下「春日原廃寺」と仮称する¹⁾）を取り巻く溝から、丸瓦・平瓦がまとまって出土した。軒瓦は出土していないが、瓦葺の建物があったとみられる。溝で囲まれた区画の内部は削平され建物遺構が全く残っていないため、溝での出土量から区画内の状況を推定するには難があるが、西面溝SD701から平瓦72.90kg、丸瓦12.86kg、東面溝SD513から平瓦28.85kg、丸瓦11.60kgが出土しており量に差がある。区画内の西方に建物が多かった可能性があるが、西面溝SD701の西隣の一段高い場所に別区画があり、そこから西面溝に流れ込んだ可能性もある。また寺院の北面溝SD623からはほとんど瓦が出土していないが、その北側の南向き斜面にある窪地SX001からも平瓦24.86kg、丸瓦8.22kgが出土している。この斜面にも瓦葺建物があった可能性がある。

瓦の時期別構成比は、平瓦では奈良時代が122.20kg（96.5%）、平安時代が4.41kg（3.5%）、丸瓦では奈良時代が26.96kg（82.5%）、平安時代が5.72kg（17.5%）であり、瓦の使用量は奈良時代を主とし、平安時代はかなり減るが、補修による補足程度の使用量なのかもしれない。奈良時代においても、瓦葺の建物はあったとしても一部であろう。

奈良時代の平瓦の約23.5%、約28.75kgが怡土城で見られる厚手平瓦の類品である点が特筆される。この種の厚手平瓦は、怡土城以外では、前原西町遺跡（前原市教委2003）、波多江遺跡（福岡県教委1982）、元岡・桑原遺跡群第7次調査地（福岡市教委2008）、元岡・桑原遺跡群第20次調査地（福岡市

教委2008)、元岡・桑原遺跡群第31次調査地(福岡市教委2010)、大原D遺跡(福岡市教委1997・2002)、徳永遺跡(福岡市教委1991)、徳永A遺跡(福岡市教委2013・2014)、今宿五郎江遺跡(福岡市教委2012)など怡土城の周囲から出土しているが、いずれも建物遺構に伴うものではなく、怡土城衰退後に屋根葺材ではない土木用材として搬入・再利用されたものがあると推定されている。筑紫地区出土の厚手平瓦は溝や土坑に廃棄されたものではあるが、寺院と推定される施設であるし、薄手平瓦や丸瓦を伴うことから、瓦葺建物に用いられていたと考えられる。

ただし葺き方については問題がある。怡土城では丸瓦が見られず(前原市教委2006)、この種の厚手平瓦・厚手熨斗瓦・鬼瓦のみを用いたようである。板葺ないし檜皮葺で棟だけに平瓦・熨斗瓦を積んだとみられる。平瓦のみでも屋根は葺けるが(上原1997)、平瓦がこれほど厚いと、葺き重ねた時に、丸瓦代わりの平瓦の下にできる隙間が大きくなり、さらに広端幅と狭端幅の差が小さいことから、多量の葺き土で隙間をふさがないと雨漏りが酷くなると思われる。「春日原廃寺」では丸瓦が出ているから通常の本瓦葺きであった可能性はあるが、丸瓦の下にできる隙間が大きくなることには変わりがない。薄手平瓦の方が数は多いが、厚手と薄手を交えてうまく葺けたのか、交えずに葺き分けたのか、厚手を棟に熨斗瓦のように用いたのか、など厚手平瓦の使用法については検討の余地があるが、葺足を示す風化痕を持つものが見当たらない点からすれば、熨斗瓦として用いたとみるべきか。熨斗瓦であれば2枚分を1枚にするだけである。

B. 官道東方

エリアIIの官道の東方約150mの第16・41次調査区と、官道東方約100mの第56次調査区から瓦が出土している。両者をまとめると、奈良時代の平瓦3.95kg、丸瓦3.30kg、平安時代前期の平瓦33.81kg、丸瓦21.44kg、軒丸瓦2点、鬼瓦1点が出土した。遺構は全く不明であるが、特に平安時代の瓦はまとまった量であり、瓦葺建物があったとみて良からう。官道沿いの施設の評価については次項で纏める。

C. 官道西方

エリアIの官道側溝SD101(7-I-B参照)の西方の数か所から瓦が出土している。

官道側溝SD101から奈良時代の瓦が2.30kg、平安時代の瓦が3.36kg出土した。

エリアI北端でSD101の西側で検出したSD307から奈良時代の瓦が0.34kg、平安時代前期の瓦が2.5kg、平安時代の鬼瓦1点が出土した。建物遺構は検出できていないが官道の西側に瓦葺の建物があった可能性はあろう。

エリアI南端のSX303から奈良時代の瓦が2.71kg、平安時代前期の瓦が1.71kg出土した。この遺構は幅が約9~28mある大溝で牛頸川の旧流路とみられる。

エリアIのSD408から奈良時代の瓦が3.86kg、平安時代前期の瓦が3.22kg出土した。この遺構はエリアIの西南隅に当たり、牛頸川の旧流路SX303に沿った細い溝である。

D. 7世紀代の瓦の出土地点

7世紀に遡る粘土板平瓦5点がエリアI SD108から出土し、「竹状模骨」で製作された行基丸瓦1点がエリアIのSX303から出土した。

粘土板平瓦の類例は太宰府市神ノ前2号窯跡(太宰府町教委1979)で類品が出土している。

「竹状模骨」で製作された行基丸瓦は、北部九州では福岡市三宅廃寺(福岡市教委1979・2004、瀧本2004)・福岡市那珂遺跡(比嘉2013)・春日市赤井出遺跡(春日市教委1980)・春日市トバセ遺跡2号住居跡(春日市教委2006)・大野城市月ノ浦1号窯(大野城市1993)・大野城市野添13号窯(大野城

IV 考察

市教委1987)・大野城市小田浦窯跡群79地点1号窯(大野城市教委2007)・大野城市牛頸塚原遺跡群21号住居跡(大野城市教委1994)・小郡市薬師堂東遺跡(福岡県教委1988)などで出土している。これらは、6世紀末から7世紀前半の「初期瓦」に属するものと7世紀後半に下るものがある。

筑紫キャンパス遺跡群は初期瓦を焼成した諸窯から近いが、筑紫キャンパス遺跡群から7世紀の瓦が出土する事情は、残念ながら遺構の状況が不明であるため詳らかにできない。しかし、春日市惣利西遺跡2号住居跡(春日市教委1985)、春日市トバセ遺跡2号住居跡(春日市教委2006)、春日市原ノ口遺跡(春日市教委2002)、大野城市牛頸日ノ浦遺跡群17号住居跡(大野城市教委1995)、大野城市牛頸塚原遺跡群21号住居址(大野城市教委1994)などから少量の初期瓦が出土しており、それらと同様の一般集落から少数出土する事例の同類であろう。福岡市那珂遺跡群のようにまとまった量が出土し建物の葺き材として用いられた例(比嘉2008・2013)とは異なると考えておく。

註

1)「九州大学筑紫キャンパス」は当地区での埋蔵文化財調査が開始された時期には「春日原キャンパス」と呼ばれていたことにちなみ「春日原廃寺」と仮称したい。

参考文献

- 上原真人1997『歴史発掘①瓦を読む』講談社
大野城市教委1987『野添窯跡群』
大野城市教委1993『牛頸月ノ浦窯跡群』
大野城市教委1995『牛頸塚原遺跡群』
大野城市教委2007『牛頸小田浦窯跡群Ⅱ』
大脇 潔1991「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅸ』奈文研学報第49冊、1-56頁
春日市教委1980『赤井出遺跡 福岡県春日市大字小倉所在遺跡の調査』
春日市教委1985『春日地区遺跡群Ⅲ』
春日市教委2002『原ノ口遺跡』
春日市教委2006『トバセ遺跡』
九州歴史資料館2002『大宰府政庁跡』
栗原和彦1999「大宰府出土の9・10世紀の平瓦」『瓦衣千年』、447-457頁
栗原和彦2000「大宰府史跡出土の軒平瓦」『九州歴史資料館研究論集』25：1-46
栗原和彦2001「大宰府出土瓦に見られる朝鮮半島統一新羅時代文化の影響」『九州歴史資料館研究論集』26：1-21
栗原和彦2002「丸瓦・平瓦」『瓦埴類』『大宰府政庁跡』九州歴史資料館、181-208・390-409頁
瀧本正志2004「三宅廃寺出土丸瓦の製作技法再考」『三宅廃寺2』、63-72頁
太宰府町教委1979『神ノ前窯跡』
比嘉えりか2008「初期瓦研究の現状と課題－筑前地域を中心に－」『七隈史学』第9号：152-176
比嘉えりか2013「福岡市那珂遺跡群出土古瓦の検討」『福岡大学考古学論集2』、333-345頁
福岡県教委1988『薬師堂遺跡 小郡市所在薬師堂東遺跡の調査』
福岡県教委 1982『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 糸島郡前原町所在「波多江遺跡」の調査』第6集上巻
福岡市教委 1991『国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ 徳永遺跡』
福岡市教委 1997『大原D遺跡群2－新西部埋立て場建設に伴う大原D遺跡群第4次調査報告－』
福岡市教委 2002『大原D遺跡－大原D遺跡群第5次・第6次調査報告－』
福岡市教委 2008『元岡・桑原遺跡群12－第7次調査の報告－』
福岡市教委 2008『元岡・桑原遺跡群13－第20次調査の報告2－』
福岡市教委 2010『元岡・桑原遺跡群17－第31次調査の報告－』
福岡市教委 2012『今宿五郎江11－今宿五郎江遺跡第10次調査報告(3)－』
福岡市教委 2013『徳永A遺跡5－第5次・第6次・第7次調査の報告(1)－』
福岡市教委 2014『徳永A遺跡6－第5次・第7次調査の報告(2)－』

福岡市教育委員会1979『三宅廃寺』

福岡市教育委員会2004『三宅廃寺2』

前原市教委 2003『前原西町遺跡Ⅱ』

前原市教委 2006『国指定史跡 怡土城跡』

7 官道とその周辺の土地利用

岩永 省三

I. 官道関係遺構

A. 「官道土橋遺構 SX301」(図105)

筑紫地区の東半、第15次調査地では、水城西門から筑紫館（鴻臚館）へ向かう官道の可能性がある盛土遺構が検出された（以下、「官道土橋遺構 SX301」とする）。『九州大学埋蔵文化財調査報告—九州大学筑紫地区遺跡群—（第三冊）』（以下「報告」とする）では遺構の状況を以下のように記す。

①. 南側の丘陵と北側の丘陵との間の谷間を遮断した堤状の遺構で、「版築状遺構」である。基底部の幅が約30mあるが、中世に削られて水田化されたために残存高は95cmに留まる。東側に堀は確認されていない。

②. この遺構の構築前は、樹木が立ち枯れた乾燥した場所と推定され、一次版築として黒色土と赤色粘土が比較的丁寧に互層にして約30cm積まれている。その上は花崗岩の媒乱土を主とするかなり乱雑な土層で、土を運んだ籠ごと投げ込み、籠の痕跡が残された部分も散見された。水城よりはるかに乱雑な土層である。

③. この遺構は12世紀頃に破壊され西側には水田や溝が作られた。

今回、「官道土橋遺構 SX301」の中央部の横断面（東西方向北面）の土層図（以下土層図①とする）・写真をあらためて検討した結果、構築法について新たな所見を得た。

土層図の線引きの細部が、写真から伺える土層の重なりと異なると思える部分が若干あったため、写真を見ながら、土層図上に色鉛筆でできるだけ写実的に色づけ（図189、カラーで示せないのが残念である）したうえで、土の積み上げ手順を検討した。説明の都合上、積み土の西端から東へ4mまでの区間をA区、4～8mをB区、8～12mをC区、12～19mをD区、19～24mをE区、24から30mをF区と呼ぶ。土の積み上げ工程を、第1～第3工程に分けて記述する。

◎第1工程

A・B区に、黒色土のみを5～10cm積む。黒色土の上面は平滑である。C～F区の範囲は、黒色土と黄灰色土を交互に約30cm積み、上面を突き棒で突き固める。突き棒の直径は10～15cmあったようで、表面に深さ10cmほどの穴がたくさんできている。

◎第2工程

A区に、黄灰色土と灰褐色土を互層に積み、中央部で高さ約30cm、周辺に行くほど薄くなるように積む。この積み土が堤状に南北に続くのか土饅頭状なのかが問題だが、土層図①を採った断割トレンチに斜交する土層ベルト部分北面で採った土層図（以下土層図②とする）があり、そこでは堤の西端に積み土の盛り上がりはないため、土層図①A区の積み土は土饅頭状を呈していたと考える。

C区の東半部に、直系30cmほどのラグビーボール状の土塊（土嚢の可能性あり。中の土の色や混ざり具合は単位ごとに異なる。）を40cm以上積み上げ西半部には赤褐色土を4層ほど積み土嚢の縁を固める。

D区の中央に黄灰色土と黒色土を1～2層積んだ後、D区全体に、土塊を積み上げる。西方3分の2はC区と同様な土嚢状を呈し、東方3分の1は直径60cm、高さ15cmほどの山形を呈する。上方が削

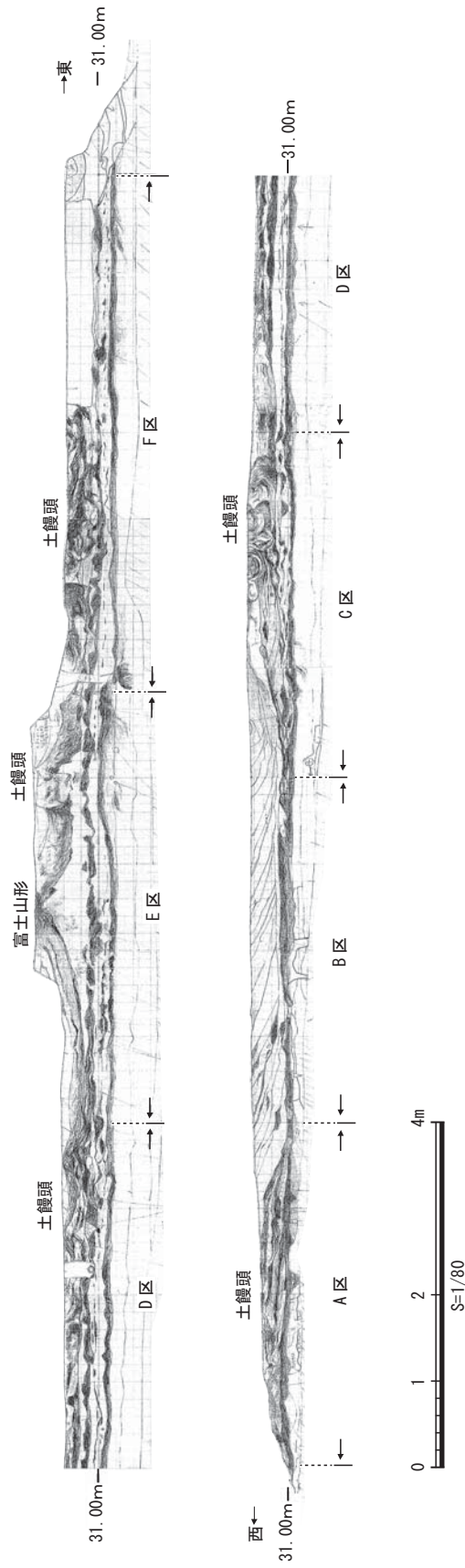


図189 官道土橋遺構 SX301断面図 (S=1/80)

平されているため不確かだが、中央部が高く周辺部が低くなるように積んでいたと推定できる。

E区には、まず黄灰色土を断面富士山形に積む。すなわち中央部が高さ50cmで尖り、周辺部が薄くなる。続いて富士山形の西側には斜面に沿って褐色土と赤褐色土を厚さ20cmほど積む。富士山形の東側には灰褐色土を厚さ30cmほど積むが、よく見ると土塊状の単位が見えるので土嚢の可能性はある。

F区西半は、土嚢状の土塊を40cm以上積み上げる。東半は米軍関係の基礎で攪乱され不明である。

C区・D区・E区・F区で検出した土嚢の山が堤状に南北に続くのか土饅頭状を呈するのかが問題だが、土層図①を採った断割トレンチに斜交する土層ベルト部分で採った土層図②で検討すると、ここでも6箇所土嚢の山が見出されるが、それらの位置は、土層図①C区・D区・E区・F区の土嚢の山の位置を官道の主軸方向に北に延長した線上には乗らない。したがって土層図①・②に掛かっている土嚢の山はそれぞれ土饅頭状を呈していたと考える。

◎第3工程

第2工程で作った土饅頭の間、黄灰色土を入れて平らに均す。A区の土饅頭とC区の土饅頭の間は、土饅頭の頂点間で約8mの距離があり、この間に西から東へ流し込む形で黄灰色土を入れて埋める。C区土饅頭—D区土饅頭の間、D区土饅頭とE区土饅頭の間、E区土饅頭とF区土饅頭の間にも黄灰色土を入れて窪地を埋め立てる。

土層図から判明するのは第3工程までで、C区からF区では、第2工程で約5m間隔に直径約3mほどの土饅頭を作り、第3工程で土饅頭間を埋め立てている。それ以上は削平を受けており不明である。

A区土饅頭はC区以東と距離が離れ、第3工程で、C区土饅頭との間の8m区間を黄灰色土を入れて一気に埋め立てている事から、土層図①近辺では、当初はC区以東の22m幅であったものを、拡幅した可能性がある。

この「官道土橋遺構 SX301」のすぐ南方に位置する大野城市池田遺跡で検出された「土塁」の調査所見（大野城市教委1998）では、絶えず湧水する青灰色砂層の上に積み土が積まれており¹⁾、大きくは6層に分けられ、積み方は特に緻密ではないが、全体的に粘質で締まりは良いとされる。積み土は最も残りの良い部分で厚さ約130cmであった。断面図・写真を見ると、積み土はほぼ水平に積まれており土嚢を積み上げた部分があるようには見えない。筑紫キャンパス内の「官道土橋遺構 SX301」とは全く構築法が異なるようであるが、細かく分かれた工区ごとに造営担当者が異なり、異なった工法で造営したとすれば、あり得ないことではない。

「官道土橋遺構 SX301」が8世紀以降官道として利用されたことは、後述するように春日市先ノ原遺跡（山村1993、渡辺1995）・春日公園内遺跡（渡辺1995）や大野城市谷川遺跡（大野城市教委1998）で発見された官道遺構から推定される官道ルートにほぼ乗っていることから間違いなからう（図190）。問題は最初から官道として造営されたのか否かである。

「官道土橋遺構 SX301」の性格として「報告」では、堤、小水城、古代官道の可能性が考えられていたとし、本来乾燥していた場所に官道を通すためにこのような大掛かりな工事をしたとは考えにくいことから、本来は堤として作られ、この堤を利用して官道が通されたと考えている。

渡辺正気氏は「官道土橋遺構 SX301」が春日公園内の古代官道（幅9m）より異常に広いことから、小水城の上に官道を通したとみている（渡辺1995）。

筑紫野市前畑遺跡の発見後、山村氏は、「官道土橋遺構 SX301」が大宰府羅城の一部をなすという説を提唱し（山村2017）、水城—下大利小水城—大野城市池田遺跡—筑紫地区内遺跡—春日小水城—



図190 九大筑紫キャンパス周辺の関連遺跡

小倉小水城—大土居小水城—天神山小水城という羅城ルートを提唱している。このルートは、阿部義平氏提唱の大宰府羅城ラインより、下大利小水城—春日小水城間および春日小水城—小倉小水城間を北東側に強く突出させるルートとなっている。

「官道土橋遺構 SX301」のすぐ南方に位置する大野城市池田遺跡の「土塁」の報告書（大野城市教委1998）では、①丘陵間の連絡（道路的性格）と②丘陵間の谷部の遮断（小水城的性格）の可能性を検討し、この「土塁」が周辺の官道ラインに乗り、この場所に小水城的盛土を築造し谷部を遮断する蓋然性が乏しいことから、低湿地を土橋状に渡る道路的性格を持ち、かつ官道の一部であると考えている。しかし山村氏は、8世紀の包含層が土塁の裾部を被覆し、中央部で検出された土層の不整合面は天武9（679）年の筑紫地震による破断面との指摘があることから、池田遺跡「土塁」と「官道土橋遺構 SX301」を羅城の一部と考えている（山村2017）。

「官道土橋遺構 SX301」の積み土の状況そのものから谷を遮断する小水城か、谷を渡る道路の基底部か決定はできないが、もともと小水城として作った土塁が、たまたま後に水城西門から筑紫館に至る官道と全く位置と方位が一致したとみるのはやや無理があり、官道整備時ないしそれ以前に、谷筋の軟弱地盤対策で埋め立てた堤状土橋の基底部ゆえ幅広に作ったもので、本来の高さはもっと高く、上方の幅は狭まり、路面そのものの幅は狭かったと考えたい。

「官道土橋遺構 SX301」の造営が7世紀に遡る場合、水城が造営され西門が設けられた時点で、西門から敵軍が上陸する博多湾岸に軍勢を最短距離で急行させる軍用道路が造営され、その時に設けられた土橋が後の官道整備時に踏襲された可能性もあるだろう。

「官道土橋遺構 SX301」を小水城とみる場合のもう一つの難点は、この「官道盛土遺構」の東南側は上大利の独立丘陵で周囲が平坦地となっており、この丘陵の南側の谷を500m遡ると上大利小水城があるので（図190）、「官道土橋遺構 SX301」の裏側に敵に回り込まれないためには上大利独立丘陵の南側の谷を塞ぐ小水城を想定しないといけなくなるが、そのような小水城の存在は知られていない。また山村氏はSX301の基礎に敷粗朶が見られたとし、SX301を小水城とする根拠としている²⁾。しかし敷粗朶工法は河内・狭山池の堤、阿部山田道の基礎（奈文研2008）、あるいは平城京造営時の旧流路の埋め立て工事（奈文研2016）など、軟弱地盤での各種積み土工事に用いられており「小水城」に限ったものではないので、遺構種の特定には使えない。

「小水城」の場合は下手から攻め上る敵を遮断する機能、道路の土橋の場合は人や物資を流通させる機能となる。万里の長城は両機能を兼ねており、水城や大宰府羅城も両機能を兼ねた面はあろうが、「官道土橋遺構 SX301」の場合は、水城西門から直行する軍用道路の一部とみる場合と、水城—上大利小水城—「官道土橋遺構 SX301」というルートの羅城の一部とみる場合は両立しない。ここでは前者の可能性が強いとみておく。

なお山村氏が推定する羅城ルートは、「官道土橋遺構 SX301」のすぐ北側で西へ折れて第2次調査区を通り、大きく南へカーブして第31・43次調査区の間を通り、90度ほど西へカーブして第46・45次調査区の西辺を通り、第50次調査区の南側でまた90度ほど西へ曲がり春日小水城に至るものである³⁾。その根拠は45次調査区の西南部で検出したSX602（図110・130）の評価にある。SX602は、寺院北面の溝SD623に合流する南北溝SD702の西斜面に張り出した南北20m、東西6mほどの突出部で、その西端に幅1.2m、深さ1.3mほどの南北溝がある（写真図版4-9・10）。

山村氏は突出部が人為的積み土であり羅城の一部だと考えている。それは南北溝の壁で検出された築土が壁の奥まで続いていくという所見を調査者から聞かれたからであり、実測図にも「明確ではな

いが、斜面に土を積んで張り出させる工事をしている」という記述がある。写真を確認すると南北溝の東壁には版築状の積土らしき物が見えるのに対し、西壁は地山が露出しているようである。しかし、突出部全体が人為的に積み上げたものか地山削り出しかは断ち割って断面図を作成していないため判断根拠がない。この南北溝は粘質土ないし粘土で埋められており、最上層は厚さ70cmで茶褐色粘質土・灰色粘質土の互層となっている。山村氏は、この溝が筑紫野市前畑遺跡で検出された土塁下の溝と同類のものと考えておられるようである。

かりにこの突出部が人工的積み土だとしても、この地点のすぐ東側は、4本の溝（寺院西面を画する南北大溝 SD701、それに西南方向から合流する大溝 SD702、両者が合流し東北へ流下する SD623、SD701・702の合流点に西北から合流する SX002）が合流する地点であり、この地点のすぐ西側に東南から西北に伸びる尾根の下の低地となっている。羅城なら尾根線の裾の低地に尾根線と並行して通すのは不自然であるし、この地点が谷を塞ぐ小水城であったとも考えられない。突出部の正体は推測するしかないが、寺院は溝をまたいで複数の区画を持つようであるから、区画の周囲を巡る築地塀の基礎の可能性もあるだろう。

B. 官道側溝 SD101

北部地区の東北部（5・26次調査区）で検出された SD101は、幅7.1m、深さ1.27mあり、官道と推定される春日公園内遺跡の官道遺構と「官道土橋遺構」との中間地点に当たり（図190）、春日公園内遺跡の官道遺構と方向が一致していることから、「報告」では官道の側溝、と推定している。ただし、路面やもう一本の側溝は発見されなかった。SD101からは奈良～平安末期の遺物が出土し「報告」では12世紀後半まで官道が踏襲されたとみるが、山村氏は平安に下る遺物が含まれることから、SD101の性格や時期には再考を要するとみる（山村1993）。官道西門ルートのうち水城以南の区間では9世紀に廃絶しており、水城以北についても側溝からの出土遺物が8世紀代に留まる例が多いことに基づく判断であろう。ただし春日市先ノ原遺跡第2次調査の官道の西側溝では12世紀代までの遺物が出土している（山村1993）、官道の廃絶時期についてはさらに検討を要する。なお、SD101から奈良時代の瓦が2.30kg、平安時代前期の瓦が3.36kg出土しており、周囲に瓦を用いた施設があった可能性がある。

「報告」では、5・26次調査区で検出された SD101の南端から約120m南に離れた9次調査区で検出した溝にも SD101という同じ遺構番号を付けている。方向はほぼ一致しており、同一の溝の可能性はあるが、幅は1.0～1.2mと狭い。また溝心々で10m東方の地点に溝の一部らしき遺構が図示されているが対応する側溝であるかどうか定かでない。なお、9次調査区の SD101を官道の西側溝とみる場合の難点は、それをそのままの振れで南方に延長すると、「官道土橋遺構 SX301」の位置では、盛土の範囲よりも東に外れてしまう事である。もっとも、官道が完全な直線ではなく、所々で折れて方向を変えると考えれば難点ではなくなるが。

5・26次調査区と9次調査区と中間の7・35次調査区では SD101とほぼ位置に SD524、その東方7.3～9.3mに SD523、さらにその東方8.7～10.7mに SD522があるが、「報告」では SD524は平安時代前半頃、SD522・523は12世紀頃としており、官道側溝を継承する溝とは見ていない。

C. 他の官道遺跡との比較（図190）

水城西門から筑紫館に至る官道西門ルートに関わる遺構は、北から順に、野間 B 遺跡（吉留2009）春日市先ノ原遺跡（山村1993、渡辺1995）・春日公園内遺跡（渡辺1995）、九大筑紫地区内遺跡、大野城市池田遺跡（大野城市教委1998）、大野城市谷川遺跡（大野城市教委1998）、水城西門から南に向か

うルートでは、大野城市島本遺跡（太宰府市教委1993）、太宰府市前田遺跡（太宰府市教委1999・2000・2002）、大宰府条坊跡第99次調査（筑紫野市教委1997）がある。九大筑紫地区内遺跡と野間B遺跡以外では、側溝心々幅11m前後の道路が検出されている。

九大筑紫地区内では、5・26次調査区のSD101が官道の西側溝と報告されたが幅7.1m、深さ1.27mと異常に大規模で12世紀までの遺物が出土し、東側溝は発見されていない。9次調査区のSD101は、幅が1.0～1.2mで他遺跡の西側溝にむしろ近く、溝心々で10m東方の地点に東側溝の可能性がある遺構もありそうであるが、確定的ではない。5・26次調査区と9次調査区と中間の7・35次調査区で検出したSD524、SD523はそれぞれ官道西側溝・東側溝に近い位置にはあるが、SD524は平安時代前半頃、SD523は12世紀頃と報告されている。以上のいずれの溝も官道側溝と断定はできないが、筑紫地区エリアIは、古代に継続的に生活域として利用されてきたので、官道の溝が浚渫や掘り直しされて利用されていたと考える余地はあろう。

II. 官道東方の施設

官道の東方100～150mに平安時代前期の瓦がまとまって出土する場所がある。官道東方約150mの第16・41次調査区と、官道東方約100mの第56次調査区である。残念ながら建物遺構は全く検出できていないが、両調査区からはまとまった量の瓦が出土した。両地区をまとめると、奈良時代の平瓦3.95kg、丸瓦3.30kg、平安時代前期の平瓦33.81kg、丸瓦21.44kg、軒丸瓦2点、鬼瓦3点である。特に平安時代の瓦はまとまった量であり、瓦葺建物があつたとみて良からう。一般論として官道に近い瓦葺施設としては、駅屋・官衙あるいは寺院（郡寺）などが考えられる。

『日本後記』大同元（806）年五月条には、備後・安芸・周防・長門の駅屋が「瓦葺粉壁」であつたと記され、『延喜式』の記載などから、山陽道諸国の駅屋が「瓦葺粉壁」であつたと考えられている。考古学的にも、山陽道沿線で瓦の出土からかつて寺院と考えられていた遺跡が駅屋遺跡であると判明した例が増えつつある。しかし、全国的には「瓦葺粉壁」型の駅屋はごく一部に留まる（中村2016）。また、山陽道布施駅屋と判明した兵庫県たつの市小犬丸遺跡と隣接して小犬丸中谷廃寺（兵庫県教委2006）があるような例もあり、中枢施設でなく周辺施設のみが検出されている場合、駅屋や官衙か寺院かの判定は容易ではない。

水城東門ルートでは（図190）、福岡市高畑遺跡では8世紀前半から中頃に造営された施設の周辺から瓦（大宰府式鬼瓦含む）や埴が多く出土し「高畑廃寺」（福岡市教委1983）あるいは官衙的施設（移転後の那珂郡衙説あり）と考えられている。寺院説は瓦・埴や墨書土器「寺」の出土や礎石群の存在を根拠とする。絵馬・木製人形の出土を寺院説に不利とみる意見（福岡市教委2001）もあるが、後述するように「春日原廃寺」では、寺院周囲の溝から祓いの祭祀に用いた人面土器が出土しているから、一概に寺院ではないとは言にくい。

粕屋町内橋坪見遺跡の大宰府路に隣接する施設からは、まとまった量の奈良時代の瓦（大宰府式鬼瓦含む）が出土し「夷守駅」と推定されている（西垣2015）。礎石・瓦葺・赤塗・白壁が揃い、寺院関連のものが出土していないという根拠であるが、検出箇所が施設の中枢部ではなく周辺部であるので、「院」「所」などの運営組織に当たるとみられ、糟屋評家・糟屋郡家である阿恵遺跡の近隣であるので郡寺の可能性も残る。

本遺跡の第16・41・56次調査区では、瓦以外にも、SD313から田畑の面積に関する文書木簡が出土

している。文書木簡があることから、事務に携わる人物の執務場所が近所にあったとみられる。以上を総合し、官衙的施設があったと考えたい。

なお「報告」では、第16・41・56次調査区より官道に近い6G区の古代の柱穴から炭化米がまとまって出土したと記されており、付近に倉庫群が存在した可能性を考えたが、今回、炭化米の年代を測定した結果、弥生中期と判明したため、柱穴は古代の遺構から除外する。

Ⅲ. 官道西方の施設

エリアI（北部地区）の「官道側溝」と報告されたSD101から奈良時代の瓦が2.30kg、平安時代の瓦が3.36kg出土した。SD101の西側で検出したSD307から奈良時代の瓦が0.34kg、平安時代前期の瓦が2.5kg、平安時代の鬼瓦1点が出土した。建物遺構は検出できていないが官道の西側に瓦葺の建物があった可能性はあろう。エリアI南端のSX303から奈良時代の瓦が2.71kg、平安時代前期の瓦が1.71kg出土した。この遺構は幅が約9～28mある大溝で牛頸川の旧流路とみられる。エリアIのSD408から奈良時代の瓦が3.86kg、平安時代前期の瓦が3.22kg出土した。この遺構はエリアIの西南隅に当たり、牛頸川の旧流路SX303に沿った細い溝である。

以上のほかに、エリアIの官道推定地の西方の整地土から把手付中空円面硯の把手1点、圈足硯1点が出土した。把手付中空円面硯の類例は7世紀代の北部九州に多い（杉本1987）。同じくエリアIのSD108から7世紀に遡る粘土板平瓦5点が出土し、「竹状模骨」で製作された行基丸瓦1点が牛頸川の旧流路SX303から出土しているの、把手付硯はそれら7世紀の遺物と由来を同じくする可能性があるが、上記の瓦葺施設とは時期が異なり区別する必要がある。圈足硯は8世紀代とみられる（横田1983）。

Ⅳ. 官道西側の寺院（図190）

官道西門ルート周辺には北から順に、井尻廃寺・三宅廃寺・「春日原廃寺」・杉塚廃寺・塔原廃寺がある。井尻廃寺は官道の東側だが、他の寺院は官道の西側の丘陵に位置し官道から近い、あたかも官道に沿って配置したように見える。官道の整備時期については、8世紀代という説が一般的であるが（山村1993）、水城の西門を通る官道西門ルートの整備時期の最上限は水城の造営期に求められる。その場合でも、井尻廃寺・塔原廃寺のように水城の造営より早く創建された寺院もあり、上記のすべての寺院が官道との関係で位置決めされたわけではなからう。

いずれにせよ、「春日原廃寺」は官道の西方約200mにあり、官道との間には丘陵があり官道から直接には見えない。しかも三方に溝をめぐる区画は東北・西北・西南側に丘陵が迫る狭隘な谷間にあり、このような場所を選んだ何らかの事情があったとみられる。西側の溝SD701から多くの瓦が出土したので、西隣の丘陵も寺域に含まれ、建物があった可能性があるものの、小規模な寺院であったことに変わりはない。しかし在地小豪族の零細寺院と片付けられない面を持つ。この問題を白玉帯・木簡・墨書土器・硯・瓦といった遺物から考えよう。

丸鞆（白玉帯） 13L・M区、寺院区画の西を画すSD701の東側の包含層から石英製の丸鞆が出土している（図191：1）。官人の服制として707（慶雲4）年に革帯が採用されたとする史料（『扶桑略記』）があるが、711（和銅4）年からとする説もある。「養老令」衣服令では五位以上の金銀装腰帯、

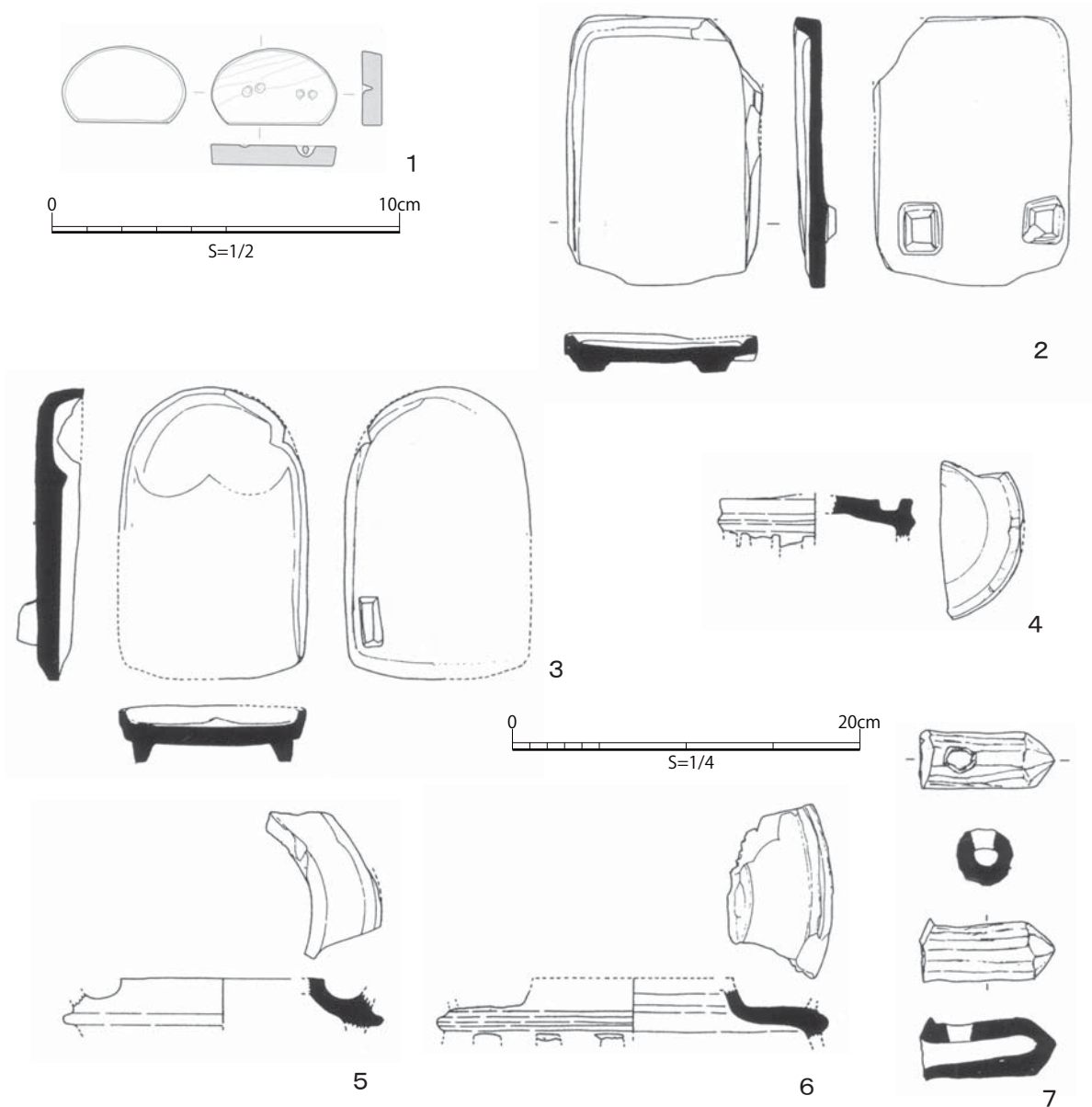


図191 筑紫キャンパス遺跡群出土丸鞆・硯

六位以下の烏油腰帯（銚は銅製黒漆塗り）が規定されたが、長岡京期には石帯が普及しており（木村2002）、796（延暦15）年には銅銚が廃された（『日本後紀』）。807（大同2）年に「雑色腰帯」がいったん禁止され、810（弘仁元）年に再び許された（『日本後紀』）。奈良時代には天皇のみが玉帯を着用したが、平安時代には延暦14（795）年に三位以上と四位の参議に「白玉帯」の着用が認められた（『日本紀略』）。SD701の丸鞆の意義については端野晋平が検討し、色調や材質から「白玉帯」に当たるとみた（端野2009）。平安時代の九州で「白玉帯」の着用が認められたのは、位階が三位以上の大宰帥・大宰権帥、四位以上の大宰大貳に限られ、大宰府の「長官クラス」の人物である。白玉帯の類例は、太宰府市内で4例出土している。観世音寺僧房から鈍尾（九歴1977）、大宰府大楠官衙SD2011から鈍尾（九歴1982）が出土した。大宰府条坊跡第267次調査地で「客館」と認定される遺跡の平安後期の畝溝SD811から丸鞆、表土から巡方が出土し（太宰府市教委2014）、朱雀大路沿いに現地長官の往来があった証拠と評価されている。白玉帯が「春日原廃寺」で出土した事情は、大宰府の

長官クラスの人物が本寺院の造営者や僧侶と交流があった、あるいは来訪する機会があったからであろうか。

木簡・墨書土器・硯 「春日原廃寺」の西を画すSD701から習書木簡が1点、墨書土器が39点、寺院周辺から墨書土器が23点出土した。このうちSD701出土品には「寺」（4点）、「時佛薩是甚大悲人□□ 権寺」、寺院周辺出土品には「佛進」「寺請？」の墨書が見られる。硯は、寺院内外の包含層から平頭風字硯2点・円頭風字硯1点・圈足硯4点（図191：2-7）、須恵器杯蓋の転用硯13点、土師器杯蓋の転用硯1点が出土した。以上の木簡・墨書土器・硯は主として溝や包含層から出土したが、寺務を扱う部署に由来すると思われる、豊富な出土量から寺院としての活動が盛んだったことを伺わせる。

墨書土器には人面土器3点が含まれ、祓いの祭祀が寺院周囲で行われていたことを示し興味深い。人面墨書土器は宮都や地方官衙では、祟り神の祓い去り（水野1978・1982）、疫病や鬼神の追い出し（巽1996）、罪穢の封じ込めと流し（金子1988）、疫神への饗応（水野1982）などに用いたと考えられている。他方、東国の集落遺跡出土品では、国神に対する招福・除災・息災延命祭祀（平川1991・1996）、自己の依り代としての神霊への供献（高島2006）などとされ、西国の例との相違が注目されている。東海以東の集落では、仏面墨書土器もあり、人面墨書土器祭祀から派生した在地村落社会の祭祀形態であり、仏教の儀礼や法会と関わるのみならず、神祇的祭祀・道教的祭祀などと交錯・融合した使用法が想定できるという（高島2006）。下総では寺院・僧が人面墨書土器の祭祀に関与した例があり、人面墨書土器と仏教との関りとして評価する説もある（山路2020）。

「春日原廃寺」出土の人面墨書土器の人面は、西国の都城出土品と同類の鬼神風のものであり、SD701から出土し祓いに用いられたとみて良からう。関東のものとは直接の関係は無いであろうが、寺院・僧が人面墨書土器の祭祀に直接関与したかどうかはともかくとしても、寺院の周囲の溝で祓いの祭祀が行われた意味は何であろうか。都城の場合は宮や京を重層的に囲む地点、地方の場合も行政機関の周辺で祓い—境界で災厄や穢れを攘い去る祭祀—が行われた（金子1985）。しかし、SD701の地点を大宰府を囲む祭場の一つとみるのは無理であろう。ではどう考えるべきか。次項で寺院の性格を合わせて考える。

瓦 「春日原廃寺」には怡土城型の厚い平瓦が一定量供給されている。怡土城に瓦を供給した窯は怡土城の東南方の1.2kmの末永と推定されている（鏡山1937）。「春日原廃寺」出土の厚瓦と怡土城や末永出土の瓦との製作技術や胎土の詳細な比較検討は今後の課題とするが、厚瓦を葺いた寺院が他に知られていないことから、怡土城と同じ供給元からもたらされたものと考えておく。

怡土城と大宰府間の往来には、怡土城から日向峠を通り、「怡土城や主船司への後方中継拠点基地」と評価されている金武青木遺跡（福岡市教委2012）を経て（金武青木遺跡から怡土城型の厚瓦の出土はない）、油山の北麓を通り官道西門ルートに合流するルートが存在したと推定され、この合流点が筑紫キャンパス遺跡群近辺であった可能性も考えられる。

怡土城に近い怡土郡・志摩郡域では怡土城の機能停止後に、屋根葺き材ではない建築材として怡土城の厚瓦が持ち込まれたとみられる遺跡が複数あるが、怡土城から日向峠—油山北麓ルートを辿っても約20km離れた春日原廃寺には、怡土城の廃城前に屋根葺き材として持ち込まれたと考えるべきであって、「春日原廃寺」の造営者は怡土城の造営組織とかかわりがあった可能性が高い。厚瓦が牛頸窯で作られ怡土城に供給された可能性は乏しいであろう。現在までの資料からみて、牛頸窯が瓦生産に関与したのは初期瓦の時期に限られるとみられ、7世紀中葉以降は、ウトグチ瓦窯、三宅瓦窯（三

宅廃寺へ供給)、老司瓦窯(観世音寺へ供給)など牛頸窯以外の場所に瓦窯が設けられたからである。

「報告」では本寺院の造営者を、須恵器や陶硯が多く出土することから「牛頸窯跡群を支配する小豪族」とみている。牛頸窯跡群は、「那津官家」設置後にその管理下に入った諸豪族が経営し、「那津官家」あるいは「筑紫大宰」に須恵器や初期瓦を収め、その後、大宰府に供給したとみられるが、牛頸窯跡群で須恵器生産に携わった集団の集落(塚原遺跡・日ノ浦遺跡・春日平田西遺跡・春日平田遺跡など)や墳墓(中通古墳群・後田古墳群・胴ノ元古墳・春日塚原古墳群など)は、牛頸川上流域にあり(舟山2008b)、九大筑紫地区遺跡群はその北端に当たっている。牛頸窯跡群が分布する地域の中には突出した規模・内容の古墳はなく、窯跡群全体を統括した首長の本拠地や墓をどこに求めるべきかは難問である。

8世紀前半および後半は、牛頸窯跡群の多くの窯が操業していた時期であり(舟山2008a)、大宰府の都市域が整備された。この時期に窯跡群を統括していた首長が、窯跡群の北端、官道に近く窯跡群の入り口に当たる場所に、集団の統合に資する寺院を設けたと評価することは可能であろう。そうすると、SX701から出土の人面墨書土器は、須恵器制作集団の領域の境界で行われた災厄・悪霊の侵入を防ぎ止め、穢れを攘い去る祭祀に用いられたと評価できるのではなかろうか。

註

- 1) 筑紫地区の「官道土橋遺構 SX301」では、「この遺構の構築前は、樹木が立ち枯れた乾燥した場所」であったと記載され、池田遺跡での「絶えず湧水する青灰色砂層の上に積み土が積まれ」という所見と全く異なる。積土最下部の標高が池田遺跡では30.0m、SX301では30.8~31.0mという差があり、地盤の状況が異なっていたと考えることもできるが、SX301の調査時の写真を見ると湧水しており、乾燥した場所であったようには見えない。
- 2) 令和2年11月25日に実施された、大宰府史跡調査研究指導委員会・大宰府外郭線部会の検討会において、山村氏から直接ご教示頂いた。
- 3) 令和2年11月25日の大宰府外郭線部会検討会および令和3年3月3日の現地視察において、山村氏から直接ご教示頂いた。なお、筑紫地区南辺のグラウンドの東辺に土塁状の高まりがあったとのことであるが、これは上大利丘陵の西辺の残丘であって、羅城の土塁とみることはできない。古墳時代の墳墓が発見された第42次調査区の高まりはその一部である。

参考文献

- 大野城市教委1998『谷川・池田・池ノ上遺跡』大野城市文化財調査報告書第51集
 鏡山 猛1937『怡土城趾の調査』(日本古文化研究所報告第6)
 金子裕之1985「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集:219-290
 金子裕之1988『律令期祭祀遺物集成』
 木村泰彦2002「銅銚から石銚へ」『銅銚をめぐる諸問題』、129-140頁
 九州歴史資料館1982「第76次調査」『大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報』、112-144頁
 九州歴史資料館1977「第43次調査」『大宰府史跡昭和51年度発掘調査概報』、80-102頁
 杉本 宏1987「飛鳥時代初期の陶硯」『考古学雑誌』73-2:129-156
 高島英之2006「仏面・人面墨書土器からみた古代在地社会における信仰形態の一樣相」『古代の信仰と社会』六一書房、131-155頁
 太宰府市教委1993『遺跡だより』(島本遺跡)
 太宰府市教委1999『太宰府・佐野地区遺跡群IX前田遺跡第8・9・10・11次調査』
 太宰府市教委2000『太宰府・佐野地区遺跡群X前田遺跡第1次調査(遺構編)』
 太宰府市教委2002『太宰府・佐野地区遺跡群14前田遺跡第4・5・6次調査』
 太宰府市教育委員会2014『大宰府条坊跡44』
 巽淳一郎1996『まじないの世界Ⅱ(歴史時代)』至文堂
 筑紫野市教委1997『大宰府条坊跡第99次発掘調査』

IV 考察

- 中村太一2016「駅屋」『日本古代の交通・交流・情報1 制度と実態』吉川弘文館、186-212頁
- 西垣彰博2015「官道にみる夷守駅と糟屋郡家」『海路』12：82-94
- 端野晋平2009「九大筑紫地区遺跡群13L・M区出土「白玉帯」丸鞆の意義」『奴国の南－九大筑紫地区の埋蔵文化財－』pp.124-128
- 兵庫県教委2006『小犬丸 中谷廃寺・中谷遺跡・中谷古墳』
- 平川 南1991「墨書土器とその字形－古代村落における文字の実相－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集：67-130
- 平川 南1996「“古代人の死”と墨書土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第68集：45-77
- 福岡市教委1983『板付周辺遺跡調査報告書（9）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第98集
- 福岡市教委2001『高畑遺跡17次』福岡市埋蔵文化財調査報告書第676集
- 福岡市教委2012『金武青木－金武西地区基盤整備促進事業関係調査報告－』
- 舟山良一2008b「集落と古墳」『牛頸窯跡群－総括報告書Ⅰ－』、245-257頁
- 舟山良一2008a「窯跡の分布」『牛頸窯跡群－総括報告書Ⅰ－』、29-39頁
- 水野正好1978「まじないの考古学」『季刊どるめん』第18号：6-24
- 水野正好1982「人面墨書土器－その世界－」『古代の顔』福岡市歴史資料館、50-55頁
- 山路直充2020「人面墨書土器からみた下総国府と印旛郡」『千葉史学』第76号：86-95
- 山村信榮1993「大宰府周辺の古代官道」『九州考古学』第68：65-81
- 山村信榮2017「大宰府羅城と通行施設としての古代土塁について」古代山城研究会・西海道古代官衙研究会合同研究会『新発見の古代の土塁を考察する』、42-53頁
- 吉留秀敏2009「鴻臚館から大宰府への道－水城西門ルート福岡市内探索の中間報告－」『市史研究ふくおか』第4号：1-13
- 渡辺正気1995「官道」『春日市史』上、748-751頁

8 筑紫キャンパス出土の木製品

谷 直子

1. はじめに

筑紫キャンパスからは、木製品も多く出土しているが、発掘調査から長いものでは40年ほどの期間が経過し、その間に遺物が乾燥してしまったり、出土地点が分からなくなってしまうものもある。また長期間水漬けのまま、劣化が進んだものも多い。本稿では、木製品のなかで、製品や未製品、遺構からまとまって出土したものを中心に、須恵器生産関連遺物以外の資料の紹介を行う。

なお、本稿で図示している遺物の実測は、筆者のほかに、整理作業の時期に、当時の室員や学生が図化したものも含まれている。これらの実測図をもとに筆者が実見し、必要な部分を加筆・修正した。また、遺物観察表に出土位置や法量とともに、原図の実測者を掲載している（表12）。

2. 木製品資料紹介（図192・193）

1は第45次（高エネ）調査区12・13J～L区SD623の溝出土で、旧報告書第三冊p.499において図示できなかったと報告されている一木長柄鋤の未成品である（西編1994）。未成品の中でも全体を大まかに成形した段階である。樹種はアカガシ亜属で、本来は一個体であったが、現状では把手と柄、身に分かれている。把手部分は、逆三角形で孔が開くタイプと思われるが、成形途中である。柄は断面方形である。刃部は先端を面取りしているが、やはり成形途中である。一木長柄鋤は、北部九州において弥生時代早期以降みられるようになり、又鋤は古墳時代前期の出土例もある（山口2013）。

2は3・4I区の地球大気動態シミュレーション装置設置に関する第56次発掘調査で出土した直柄平鋤である。樹種はアカガシ亜属で、平面形は縦長長方形で、下ぶくれになる。刃部幅が18cmの広鋤タイプである。刃部は作り出されておらず、未成品の可能性が高い。肩部分は少し欠損している。柄を装着する孔は方形で、着柄角度は45°である。朝鮮半島から北部九州に特徴的な鋤で、北部九州においては、弥生時代中期前葉から古墳時代終末期まで形態変化せず、主たる起耕具として7世紀頃まで使用される（樋上2012・山口2013）。

3は第45次（高エネ）調査区出土の組物の一部である。大足などのパーツと思われる。四隅に直角の切れ込みがあり、別のパーツと組み合わせるための粗い加工の可能性が高い。孔は不均一だが方形に開けられており、角度はつかない。①の孔は縦2.4cm・横1.6cm、②の孔は縦2.2cm・横1.8cm、③の孔は縦1.7cm・横1.7cmをはかる。

4は第45次（高エネ）調査区出土である。上部、下部とも折れており欠損が激しいが、石斧の直柄である。装着した石斧と接していた孔の部分は磨耗している。図の表側が斧尻になる。表面、側面とも加工痕が良く残っている。

5～8は網錘である。広葉樹の芯持ち材を使用しており、くびれ部を面取りして整形している。5は第46次（熱エネ）調査区13L区、7は第46次（熱エネ）調査区14L区、6・8は第45次（高エネ）調査区13K区出土である。5はくびれ部分で折れているが、面取りの加工痕が良く残る。6は欠損が激しく、1/3ほどが残存している。加工は不明瞭である。7は全体の残りは良く、一部に面取りの

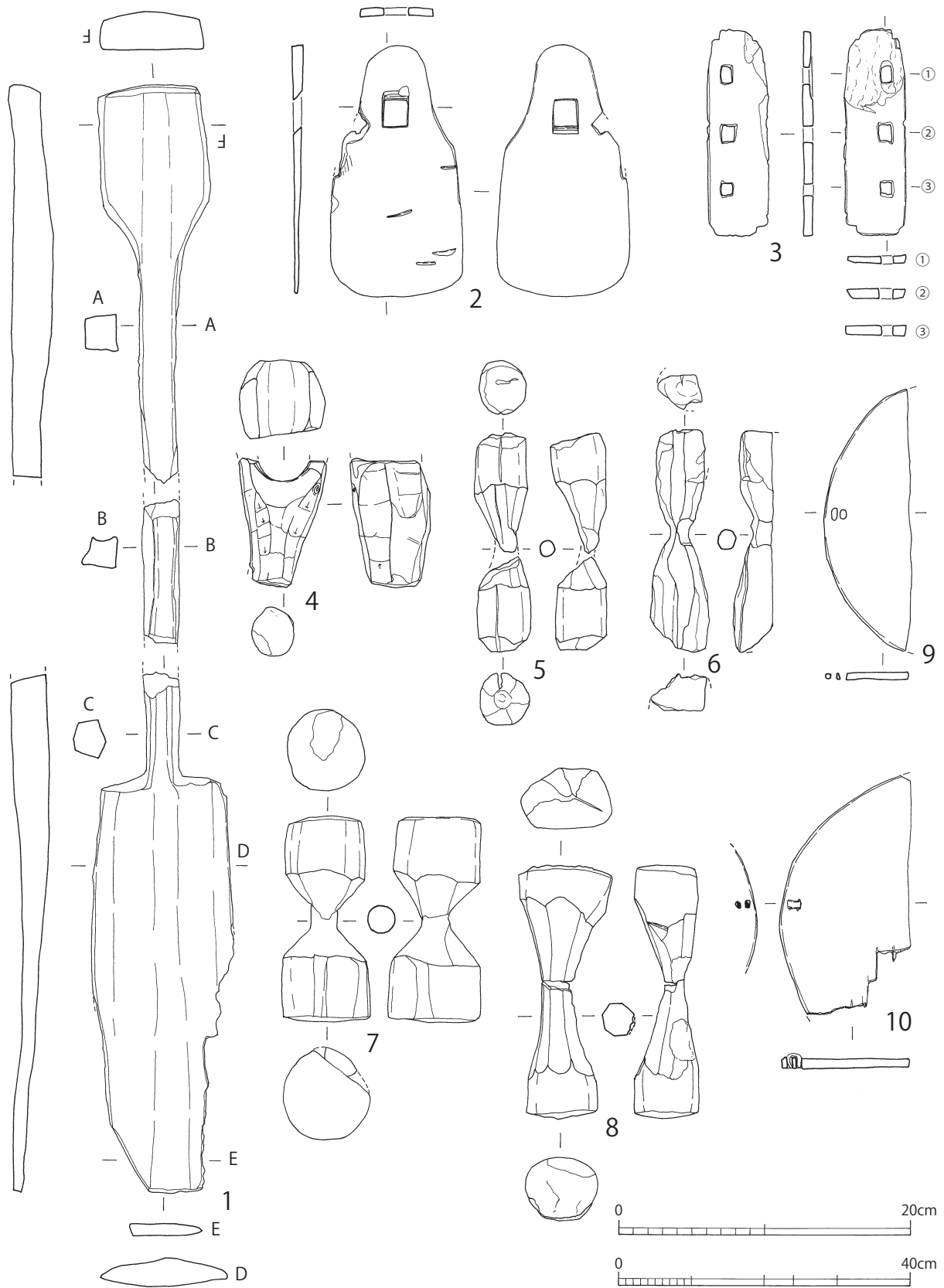


图192 出土木製品 (1) (1~3 : S=1/8 · 4~10 : S=1/4)

加工痕が残る。8は全体に面取りの加工が良く残っており、くびれ部分を八角形に整形している。北部九州の網錘は、弥生時代後期以降、各遺跡で見られるようになる（山口2013）。

9・10は平面形が円か楕円になる曲げ物の底板である。いずれも円形であれば直径21cmほどに復元できる。九州文化財研究所による保存処理の後、観察・実測を行った。9は第45次（高エネ）調査区12K区出土で、全体の1/4ほどが残存しており、少し丸みのある楕円形の孔が二つ開いている。外側が長さ8.5mm・幅4.5mm、内側が長さ7.5mm・幅4.5mmである。板目板で側面は丁寧に加工されており、厚みは4～5.5mmである。10は11I区出土で、全体の1/2弱が残存しており、隅丸長方形で長さ5mm・幅3mmと、不定形で長さ4.8mm幅3.8mmの孔があり、その間に、幅5mmほどの樹皮紐が通されている。

11～13は第45次（高エネ）調査区出土の火錐臼である。11は臼座が4か所あり、いずれも焦げている。棒状で、上端部は粗く面取り加工されている。下部は欠損している。断面形は下面が平坦な楕円形である。12は臼座が2か所残る。1か所は臼の部分に焦げておらず、未使用である。長方形の板状で、上端部は面取りされ一部が直角に切り取られている。下部は欠損している。13は旧報告書第三冊pp.499～503において既報である。臼座は7か所ある。下方は欠損する。

14・15は第45次（高エネ）調査区出土の加工棒材である。14は旧報告書第三冊pp.499～503において既報で、ヘラ状工具として報告されている。しかし、先端部分は、中央がふくらんだ長方形の断面を呈しており、すくったり削ったりするのに向く形状ではない点、表面加工も意図的に削り出した痕跡が判然としない点、中央付近のくびれは両側とも欠損である点から、須恵器製作のためのヘラ状工具とは積極的に判断できなかった。下端部は焼けて炭化している。15は上端部に加工の粗い孔が開いている。断面は菱形である。上端部は土圧などにより曲がっている。下部は木がやせて細くなっており、下端部は焼けて炭化している。

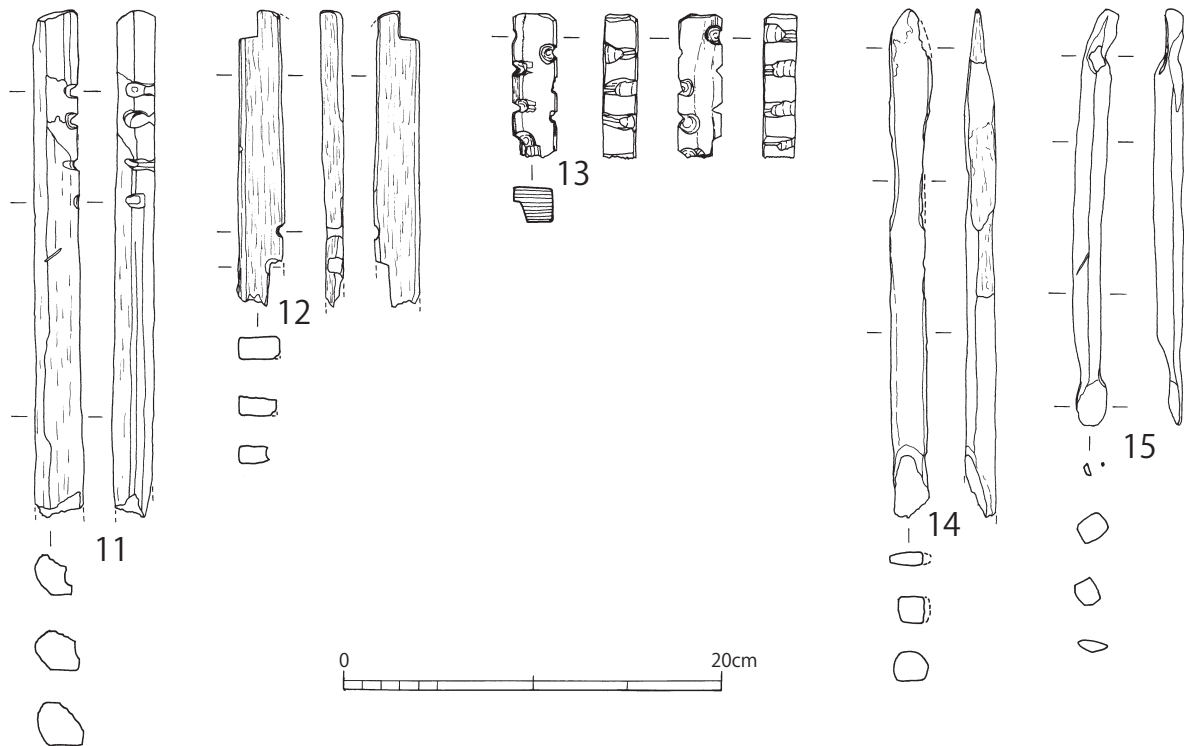


図193 出土木製品（2）（S=1/4）

3. SE401出土の井戸材（図194・195・196）

SE401は10F区で応用力学実験棟調査時に検出されている。遺構としては旧報告書第二冊 pp.329～337に既報である。旧報告書では10F区の北東辺の北角近くから検出され、SX303旧河川のすぐそばにある。出土した瓦器碗などから12世紀中頃前後と判断されている。井戸の本体は素掘りで2か所あり、(A)が浅く(B)が深い。既報では井戸(A)の東側に「L」字形に板材や丸太材等を杭で留めた3段の囲いが設けられており、中には木製の杵が一本使われていた。おそらく水汲みの足場を作ったものとされている(西1993)。

筆者がこの足場とされている木材の出土位置とレベルを、当時の遺構実測図で確認したところ、3段の囲いに高低差はなかった。横木材の幅も出土位置が確実なものは8～12cmほどで、土留めし高低差を作り出すには幅が足りない。また旧河川(SX303)がSE401の東側を流れていることから、この足場とされるものは本来、素掘り井戸(B)の井桁(水を汲む人の安全をはかり、汚水の流入を防ぐため地上に設ける施設(宇野1982))であったが、洪水時などの土砂とともに旧河川からの水に押し流されて、一部壊れながらも杵の形状を保ったまま、検出時の状態になった可能性が高い。

今回以下で報告する加工板材は、この足場あるいは井桁に使用された木材で、井戸材と呼称する。今回の報告では杭材は除外している。また既報で出土したとされている木製の杵は所在不明で報告できなかった。16～31はSE401の井戸材に使用された加工板材で、出土位置が記されているものである。図194に遺構図と対応できたものの出土位置を示した。図195の遺物番号は図194・表12の番号と対応する。遺物ラベルに記されていた取り上げ番号は表12にも示している。

16～20は長方形の加工板材である。16は両側面に面取りの加工が残る。下端部は折れているように見えるが、残りは良い。上端部は欠損が激しい。17は両側面と下端部に面取りの加工が残る。上端部は欠損している。18は両側面の下側にのみ面取りの加工が残る。下端部は折れており、上端部は激しく欠損する。19・20は側面の下側と下端部に面取りの加工が残る。上端部は激しく欠損する。16は遺構図に縦方向に埋もれた状態で図示されており、井桁の横木の固定や裏込めに使用され、上端部の欠損は遺構廃絶後、露出していた時期に生じたと考えられる。17から20も下端部と比較して、上端部が激しく欠損しており、同様に使用されたと判断できる。

21は細長い長方形の加工板材で左側面と両端部が丁寧に加工されている。右側面は欠損している。両端部がよく遺存しており、横木として使用されたものである。

22は長方形の加工板材で、側面と下端部に面取りの加工が残る。上端部は激しく欠損する。これも裏込めなどに使用されたものであろう。

23は長方形の加工板材で、下端部と右側面は丁寧に加工されているが、左側面と右側面の上部・上端部は欠損が激しい。中央部右側に二つ穿孔が見られるが、上の孔は貫通せず、下の孔は貫通する。下端部から20cmのところまで粘土が付着しており、発掘時には下方は土に埋まっており、上部は露出していたと判断される。遺構図からも縦方向に半分埋もれた状態で検出されたと判断でき、井桁の横木の固定や裏込めに使用されている。

24は長方形の加工板材で、側面と下端部に面取りの加工が残る。上端部は割れて摩耗している。遺構図には縦方向に埋もれたように図示されている。

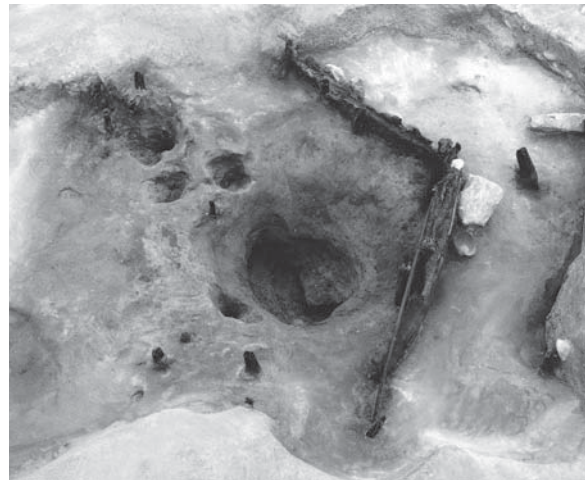
25・26・27は長方形の加工板材で、両側面に面取りの加工が残る。両端部は欠損している。遺構図では25は27の上に重なるように図示されている。27は横木として渡されていたように図示されており、



SE401井戸材出土状況 (S=1/40)



SE401検出状況 (西から)



SE401井戸材 (南から)

図194 SE401井戸材出土状況

出土した当時はもう少し長い材であったようである。

28は長方形の加工板材で、下端部と右側面は丁寧に加工されるが、左側面と上端部は欠損している。遺構図では横木に重なるように図示されている。横木の固定や裏込めに使用されたと考えられる。

29は細長い長方形の加工板材で、表面や側面は丁寧に加工されているのに対し、両端部は粗く切

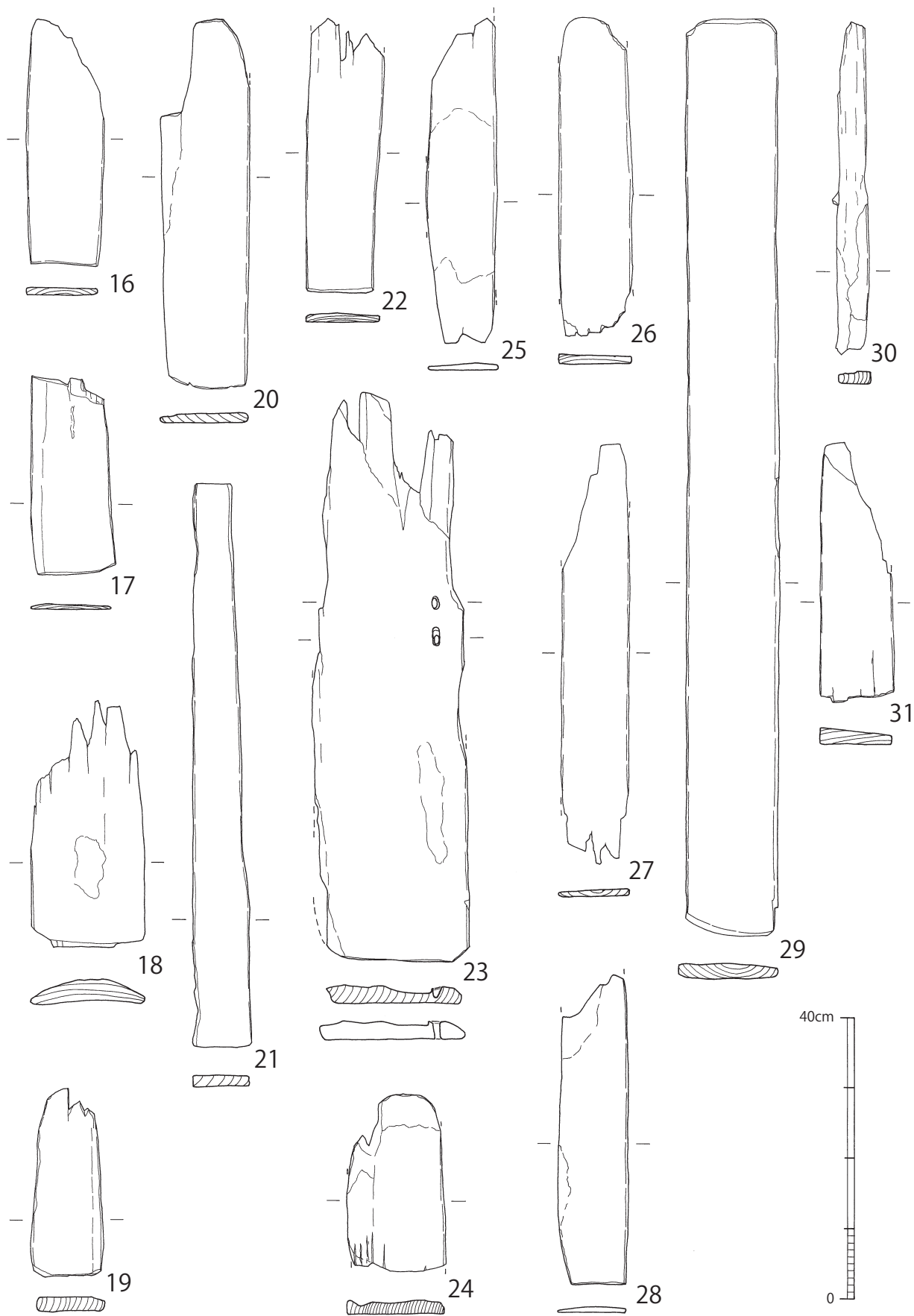


图195 SE401井戸材 (1) (S=1/8)

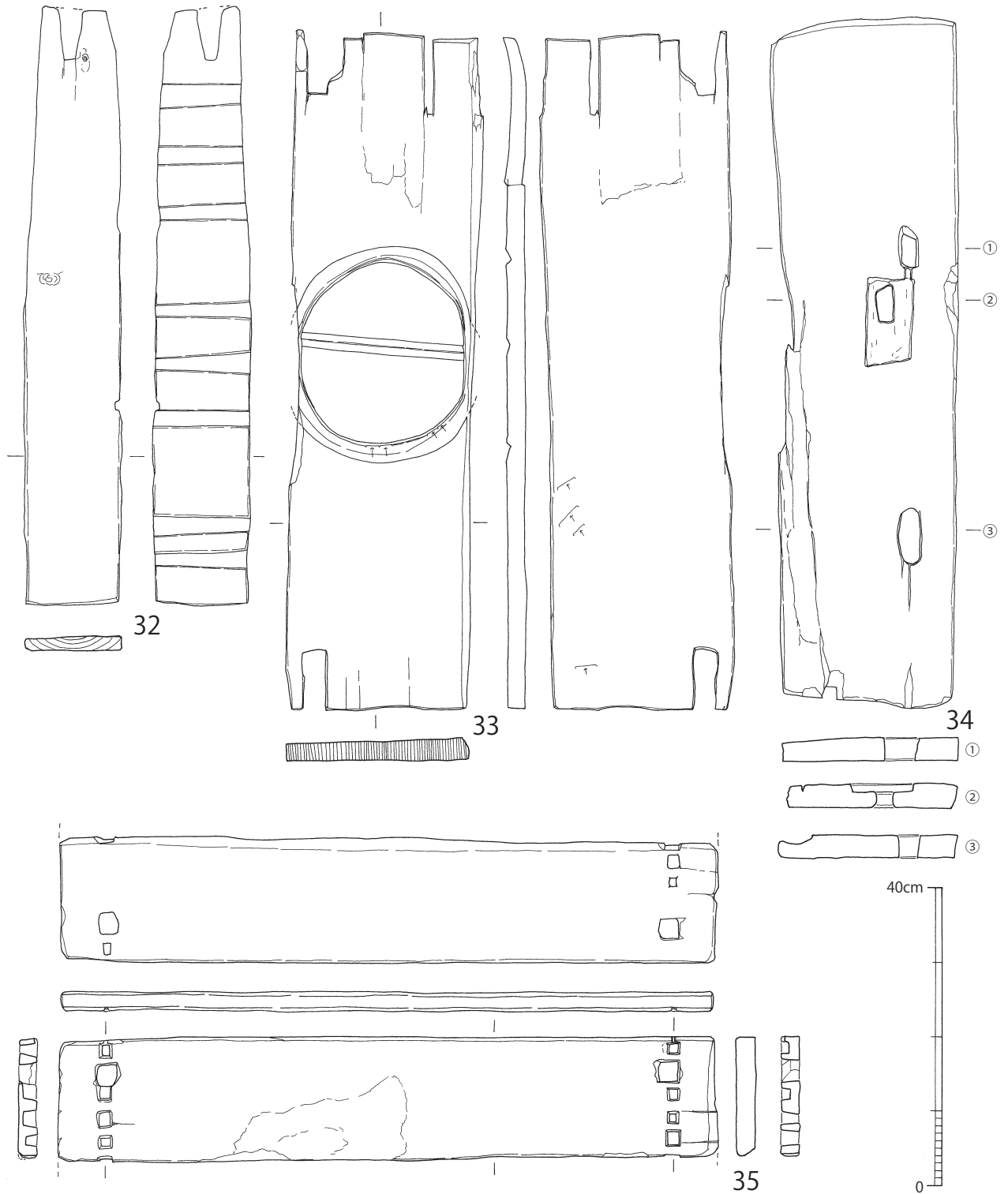


図196 SE401井戸材 (2) (S=1/8)

断・加工している。両端部の加工が粗いことから、井戸材に使用する際に長さを整えた加工と考えられる。板目板で芯材に近い部分を使用している。遺構図には横木として渡されていたように図示されている。

30は細長い長方形の加工板材で、摩耗・欠損が激しい。右側面に少し面取りの加工が残る。遺構図

IV 考察

表12 遺物観察表

| 図 番号 | 出土位置 | | 器種 | 樹種 | 木取り | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 厚さ (cm) | 実測者 | 備考 |
|---------|--------------------------|-----------------------|------------|--------|-----|------------|-----------|------------|------|---------------|
| 1 | 第45次・高工ネ 調査区 SD623 | 12・13J～L区 | 一木鋤 未成品 | アカガシ亜属 | 柾目 | | (15.2) | 5.1 | 渡部芳久 | 折れて3個体になっている。 |
| 2 | 第56次調査・大 気動態実験棟 | Nq294 | 平鋤 (直柄) | アカガシ亜属 | 柾目 | 34.4 | 18.0 | 1.55 | 渡部芳久 | |
| 3 | 第45次・高工ネ 調査区 | W-502 | 加工板材 | | | 28.4 | 8.4 | 1.4 | 山根謙二 | 大足の部材など指物の一部 |
| 4 | 第45次・高工ネ 調査区 | 62 | 石斧柄 | | 追柾目 | (8.9) | 6.0 | (5.4) | 田尻義了 | |
| 5 | 第46次・熱工ネ 調査区 | 13L320 3層 | 網錘 | 広葉樹 | 芯持材 | 15.0 | 3.7 | 3.6 | 田尻義了 | |
| 6 | 第45次・高工ネ 調査区 | 13K277 | 網錘 | 広葉樹 | 芯去材 | 15.2 | (4.0) | (2.5) | 田尻義了 | 直柄 |
| 7 | 第46次・熱工ネ 調査区 | 14L346 3層B | 網錘 | 広葉樹 | 芯持材 | 15.1 | 6.1 | 6.3 | 田尻義了 | |
| 8 | 第45次・高工ネ 調査区 | 13K238 5層 | 網錘 | 広葉樹 | 芯持材 | 17.3 | 6.4 | 4.5 | 田尻義了 | |
| 9 | 第45次・高工ネ 調査区 | 12K318 | 曲げ物の 底板 | | 板目 | (16.3) | (9.0) | 1.0 | 谷 直子 | 処理後実測・孔あり |
| 10 | 第29次・トライ アム実験棟 調査区 | 111区074暗黒 色粘土 RW-1 | 曲げ物の 底板 | 針葉樹? | 柾目 | (18.0) | (6.0) | 0.55 | 谷 直子 | 処理後実測・孔・樹皮紐あり |
| 11 | 第45次・高工ネ 調査区 | W-560 | 火鋸臼 | 針葉樹 | 板目 | (26.8) | (2.6) | 2.2 | 田尻義了 | |
| 12 | 第45次・高工ネ 調査区 | 13K257 | 火鋸臼 | 針葉樹 | 追柾目 | (15.6) | (2.4) | 1.2 | 田尻義了 | |
| 13 | 第45次・高工ネ 調査区 SD623 | 12・13J～L区 | 火鋸臼 | | | (7.5) | 2.1 | 4.6 | 報告書 | |
| 14 | 第45次・高工ネ 調査区 | 63 | 加工棒材 | 広葉樹 | 板目 | (26.8) | 2.2 | 1.6 | 田尻義了 | 一部炭化 |
| 15 | 第45次・高工ネ 調査区 | 試掘第一区 5-3層 | 加工棒材 | 広葉樹 | 柾目 | (22.0) | 1.7 | 1.6 | 田尻義了 | 孔あり・一部炭化 |
| 16 | SE401 T-11 | 10F | 加工板材 | 広葉樹 | 板目 | (35.2) | 11.1 | 1.1 | 谷 直子 | |
| 17 | SE401 T-37 | 10F | 加工板材 | 広葉樹 | 板目 | (28.2) | 11.4 | 0.8 | 谷 直子 | |
| 18 | SE401 T-38 | 10F | 加工板材 | 針葉樹 | 板目 | (35.0) | 16.0 | 3.0 | 谷 直子 | |
| 19 | SE401 T-43 | 10F | 加工板材 | 針葉樹 | 追柾目 | (26.6) | (10.4) | 2.0 | 谷 直子 | |
| 20 | SE401 T-48 | 10F | 加工板材 | 広葉樹 | 柾目 | (52.2) | 12.5 | 1.4 | 谷 直子 | |
| 21 | SE401 T-55 | 10F | 加工板材 | 針葉樹 | 追柾目 | 79.7 | (8.0) | 1.6 | 谷 直子 | |
| 22 | SE401 T-58 | 10F | 加工板材 | 広葉樹 | 板目 | (39.0) | 10.6 | 1.4 | 谷 直子 | |
| 23 | SE401 T-60 | 10F | 加工板材 | 針葉樹 | 追柾目 | (81.0) | 20.6 | 2.5 | 谷 直子 | 孔あり 粘土付着 |
| 24 | SE401 T-63 | 10F | 加工板材 | 針葉樹 | 柾目 | (25.2) | 14.0 | 2.0 | 谷 直子 | |
| 25 | SE401 T-82 | 10F | 加工板材 | 広葉樹 | 板目 | (46.0) | 10.0 | 1.0 | 谷 直子 | |
| 26 | SE401 T-84 | 10F | 加工板材 | 広葉樹 | 板目 | (45.0) | 10.5 | 1.4 | 谷 直子 | |
| 27 | SE401 T-87 | 10F | 加工板材 | 広葉樹 | 板目 | (59.5) | 9.6 | 1.1 | 谷 直子 | |
| 28 | SE401 T-86 | 10F | 加工板材 | 広葉樹 | 板目 | (44.0) | 10.0 | 1.0 | 谷 直子 | |
| 29 | SE401 T-89 | 10F | 加工板材 | 針葉樹 | 板目 | 130 | 13.2 | 2.1 | 谷 直子 | |
| 30 | SE401 T-106 | 10F | 加工板材 | 針葉樹 | 柾目 | (47.4) | (4.5) | 1.8 | 谷 直子 | |
| 31 | SE401 T-108 | 10F | 加工板材 | 広葉樹 | 板目 | (36.8) | 10.5 | 2.3 | 谷 直子 | |
| 32 | SE401? | ラベル無し | 加工板材 | 針葉樹 | 板目 | (80.4) | 13.0 | 2.0 | 谷 直子 | レリーフ状模様あり |
| 33 | SE401? | ラベル無し | 加工板材 | 針葉樹 | 柾目 | 91.0 | 25.5 | 3.1 | 谷 直子 | 円形の模様あり |
| 34 | SE401? | ラベル無し | 加工板材 | 針葉樹 | 柾目 | (93.0) | 25.0 | 3.1 | 谷 直子 | ほぞ穴あり |
| 35 | SE401 | 10F | 加工板材 | 広葉樹 | 柾目 | 88.5 | (16.6) | 2.5 | 谷 直子 | 両端にはぞ穴あり |

() は遺存値を示す。

には横に倒れて図示されている。

31は長方形の加工板材で、両側面に面取りの加工が残る。上部の欠損とは異なり、下端部はまっすぐに折れている。上端部は欠損が激しい。遺構図には横に倒れて図示されている。

32～34はラベルが不明になっているが、長さが80～90cmほどで23・35の井戸材と類似しており、同じ水槽に保管されていたことから、SE401の井戸材と思われる。

32は長方形の加工板材で、両端部及び両側縁は丁寧に面取りされている。上端部は一部欠損している。片面は無文で表面を丁寧に加工している。もう一方の面は、幅2～3cmほどの細長いレリーフ状の模様が施されている。細い帯状の部分が高さ1mmほど浮き出しており、幅広の部分は削り取られている。どちらも表面は平滑に加工されており、意図的に模様を削り出したものである。飾り板として壁などの部材に使用されたものを、井戸材として転用したと考えられる。

33は長方形の加工板材で、両端部及び両側縁は丁寧に面取りされている。両端部の左側に幅2～3cmの欠き込みがあり、本来は貫孔であった可能性もある。井戸の構造とは直接関係はない。表面は平滑に加工され、中央部に円と横線を1条、断面V字状に彫り込む。V字の底には更に刃物で彫り込んだラインが残っており、施文の計画線を深く彫り込んだ可能性がある。円の両端は切れているため、本来は両側にもう少し幅のある部材であったと考えられる。彫り込み自体は5mm程と浅く、飾り板などとして他の部材と組み合わせて使用されたものを、井戸材として転用している。

34は長方形の加工板材で、表面は平滑に加工され、両端部は意図的に切断されている。両側縁部とも面取り加工がされているが、左側の一部は割れて欠損している。3か所に穿孔があり、いずれも孔は粗く開けられている。断面①の孔は、左右側（長辺）は丁寧に削り取られているが、上下部分（短辺）は繊維がちぎれたように削り取られている。②の断面は浅い長方形のくぼみの中に穿孔部分がある。浅い四角形のくぼみは、意図的な加工痕と判断したが、表面の劣化が激しく、割れて表面から剥落しただけの可能性もある。孔は不定形でおおむね長方形を呈しており、粗いが意図的に加工されている。③の穿孔部も不定形でおおむね長方形を呈しており、3か所の穿孔部のなかで、加工が一番粗雑である。これらの加工は井戸の構造とは直接関係はない。建築材など構造部材の一部として使用したものを、井戸材に転用したと考えられる。

35はSE401出土であるが、出土位置は不明である。長方形の加工板材で、表面は平滑に加工され、両端部及び上側面は丁寧に面取りされている。両端部付近にホゾ孔と貫孔がある。上から二番目の貫孔は、左右とも他の孔よりも大きく、ほかの孔とは用途や加工したタイミングが違うかもしれない。一番上のホゾ孔は、右端部はホゾ孔、左端部は貫孔になっているが、本来はどちらも貫通していなかった可能性が高い。上側面に向って小さく溝が彫られている。同様に下側の2か所も左端部はホゾ孔、右端部は貫孔になっているが、本来はどちらも貫通していなかった可能性が高い。また下側面には、左右とも加工痕があり、ホゾ孔は貫孔があったと思われる。本来は下端部側にもう少し幅広い材であったものを、割って井戸材に転用したと考えられる。こうしたホゾ孔や貫孔の加工は井戸の構造とは直接関係がない。指物や建築材などの部材の一部として使用したものを、井戸材に転用したと考えられる。

4. おわりに

筑紫キャンパスの発掘調査で出土した木製品は、ほとんどが第45次（高エネ）調査区・第46次（熱エネ）調査区の一連の溝から検出されており、弥生時代から古墳時代を中心とした時期の、工具柄・農具・編み具、火鉢白などの生活用具全般が出土している。これらは弥生時代から古墳時代にかけての木製品加工技術や農具の生産と流通などを知る手掛かりとなる。また、12世紀中頃の井戸材が出土しており、中世の井戸の状況を知るうえで興味深い。

九州における中世の井戸は素掘り井戸のほかに、削り抜き井戸・曲げ物井戸・板組井戸などがある。特に板組井戸は、宇野隆夫氏の分類による「縦板組隅柱横棧どめ井戸」が北九州市の中村遺跡で検出されている（川上2002）。樹種同定により使用材がシイ属主体であることが判明しており、遺跡が製塩に関わる専業集落である可能性があることから、井戸材の調達・加工・構築作業を外注した可能性が高いと指摘されている（佐藤2012）。

一方で、本稿の井戸材は素掘り井戸の井桁部分と考えられ、転用材が含まれている。多くが建築材など別の構造物の材として使用されていたものであり、再利用できる材を組み合わせて井桁を構築している。こうした井戸本体の形状の違いや、井戸構築に用いる材の再利用の状況、建築材など井戸材として再利用される前の、本来の構造物材としての形態や加工の状況は、中世における井戸の構造のほかに、建物などの構造、木材の加工技術やリサイクル、木材の流通などを考えるうえで重要である。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、石川健氏、田尻義了氏には、遺物の資料化・遺構図の作成・出土位置などの確認に際し、大変お世話になりました。また石井若香菜氏には図194の作成にあたりお手を煩わせました。学生の時に木製品の実測に当たられた山根謙二氏、渡部芳久氏には、当時の実測図を使用させていただきました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- 伊藤隆夫・山田昌久編2012『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社 大津
- 岩永省三・田尻義了編2009『平成20年度公開展示・九州国立博物館トピック展示 奴国の南－九大筑紫地区の埋蔵文化財－』九州大学総合研究博物館
- 宇野隆夫1982「井戸考」『史林』65巻5号：623-661
- 川上秀秋編2002『中村遺跡－市民福祉センター建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書－』北九州市埋蔵文化財調査報告書第278集 財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
- 佐藤浩司2012「V遺跡出土木製品の種類と地域性 26章 九州・沖縄（2）－中・近世－」（伊藤他編）『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社 大津、312-320頁
- 西健一郎編1993『九州大学埋蔵文化財調査報告 九州大学筑紫地区遺跡群（第二冊）』九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室
- 西健一郎編1994九州大学埋蔵文化財調査報告 九州大学筑紫地区遺跡群（第二冊）九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室
- 樋上昇2012「弥生～古墳時代における「地域型」鋳の出現と展開」『平成24年度夏季特別展 穂落とし神の足跡 農具でひもとく弥生社会』大阪府立弥生文化博物館 和泉、100-109頁
- 山口讓治2013「九州における木製品研究の現状と課題」『木製品から見た古代の暮らし』鳥根県古代文化センター 松江、77-91頁

9 瓦器焼成遺構関連遺物について

石川 健

1. はじめに

九州大学筑紫キャンパス遺跡群からは、瓦器および棒状土製品といわれる土製品が多く出土している。また、これらの遺物のうちとくに棒状土製品は、キャンパス遺跡群内のエリアⅢやエリアⅣなどの範囲からも散発的に出土しているが、瓦器とともにエリアⅠからの出土量が最も多い。これら瓦器の中には焼成時の焼け歪みによって器形が大きくゆがんだものなどもかなり含まれている。瓦器焼成時に窯道具としての使用が推測されている棒状土製品が多く出土していることから、本キャンパス遺跡群内で瓦器などの土器の焼成遺構が存在した可能性が高いと考えられる。しかし、調査時に土器焼成窯は残念ながら検出されていない。後世の削平や1970年代末から80年代を中心に調査が行われたことにより検出できていない可能性があるが、以下ではこれらの出土遺物の特徴を検討することによって、本遺跡群における古代末から中世にかけての土地利用の一端について考えてみたい。

本遺跡群出土の瓦器焼成窯関連の遺物について検討するに先立ち、まず瓦器の焼成遺構についての既存の調査事例をみると、近隣の北部九州域では北九州市徳力遺跡（宇野1991）・森山遺跡（梅崎1994）、福岡市上月隈遺跡群（榎本2000）、春日市大南遺跡（井上2004）などを挙げることができる。また、岡山市三手向原遺跡では、土師器焼成窯の調査から窯内の窯道具の使用方法的復元が行われている（岡山市教育委員会2001）。

このような調査・研究成果の蓄積を参考として、本遺跡群出土の土器焼成遺構に関連すると考えられる遺物を検討することにより遺跡群内での土器焼成に関わる遺物について論じることとしたい¹⁾。

2. 土器焼成に関連する遺物と遺構の分布

瓦器の焼成において使用されたと考えられる窯道具の一つが棒状土製品といわれる土製品である。この棒状土製品はキャンパス内遺跡群の中で広く出土しているが、その大部分はエリアⅠで出土している。今回エリアⅠで把握できた棒状土製品は合計143点であるが、そのエリア内での分布をみると、エリアⅠ西部の10・11-E・F・G区の微高地上、さらにこの微高地とエリアⅣの丘陵部に挟まれた旧河川SX303周辺の標高の低い場所に大部分の棒状土製品を出土した遺構が分布している（図197）。とくにSE401とSD511など微高地南東部の低い場所に集中している（図198上）。また、上記の範囲に位置する棒状土製品を出土した遺構における他の遺物の様相をみると瓦器に加え土師器の杯や小皿が伴うという共通性がある。これらに加え、数こそ限られるものの二次的被熱を受けた器台あるいはその脚部片や大形の円柱状の支脚、被熱による表面の劣化が著しい円柱状土製品などが出土している（図198下）。以下これらの遺物の特徴を概観したうえで、上述の三手向原遺跡出土の遺物との比較を行い窯道具として使用された可能性を検討する。

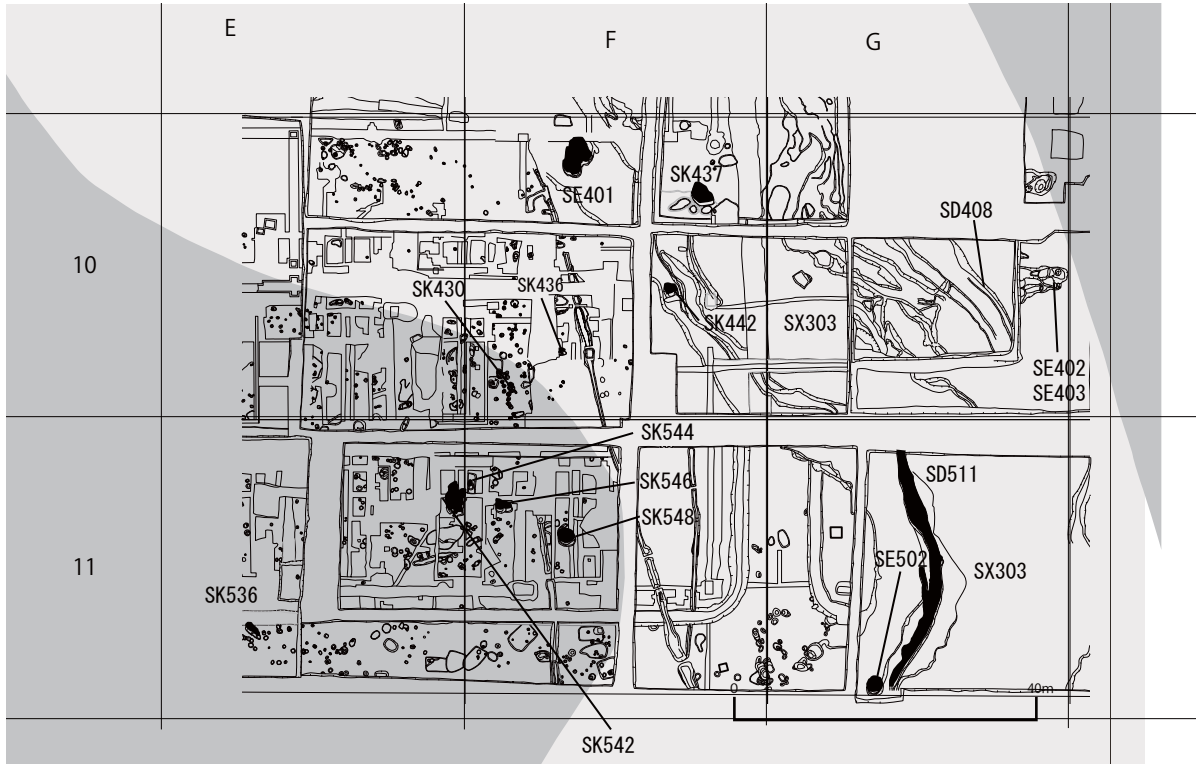
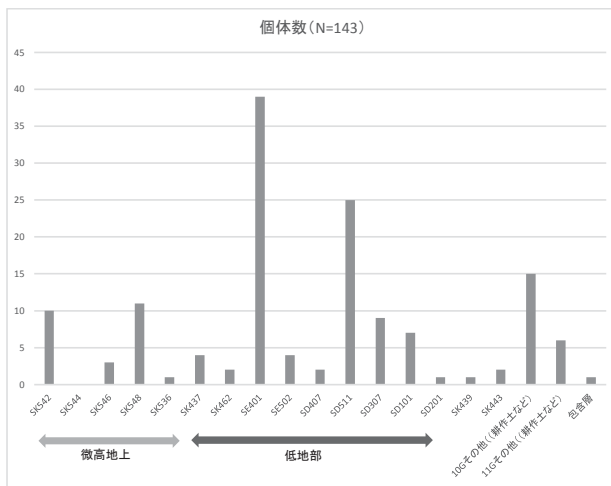


図197 10・11-F・G区 瓦器焼成窯道具出土遺構 (S: 1/1000)



| 遺構名 | 瓦器 | 棒状土製品 | トチン状土製品 | 大形円柱状土製品 | その他 |
|-------|----|-------|---------|----------|------|
| SD101 | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| SE401 | ○ | ○ | ○ | ○ | 分焼柱? |
| SK548 | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| SK542 | ○ | ○ | ○ | | |
| SE502 | ○ | ○ | | | |
| SK437 | ○ | ○ | | | |
| SK439 | ○ | ○ | | | |
| SK443 | ○ | ○ | | | |
| SK462 | ○ | ○ | | | |
| SK536 | ○ | ○ | | | |
| SK546 | ○ | ○ | | | |
| SK544 | | | ○ | | |
| SK549 | | | | | 分焼柱? |

図198 エリアIにおける棒状土製品出土傾向 (上) と遺構内出土遺物の組合せ (下)

3. 筑紫出土の土器焼成遺構に関連する出土資料

1) 棒状土製品 (図199): これらの土製品については、端部がすぼまる形態が多くみられ、長さも長短あるが、幅と厚みからみると幅に対して厚みがうすい扁平な断面形のもの、幅と厚みにさほど差がみられない方形に近い断面形を呈するものの2群に大きくは分けられるようである。さらに長軸方向の断面形状に注目すると形態に湾曲のみられない一群とアーチ状の断面形態をとる2つの群に分けることができる。

このような製作時の変異に加え、使用時の痕跡についてみると、一つは棒状土製品の表面が二次被熱のため著しく劣化しているという点を挙げることができるが、加えて表面にススが付着している場合が多々みられる点も使用方法を示す痕跡といえるであろう。さらに破損した断面にススの付着した資料などもみられる (SE401出土・図46: 224・図199-3 断面、同2写真)。中でも破損した断面に円形にススが

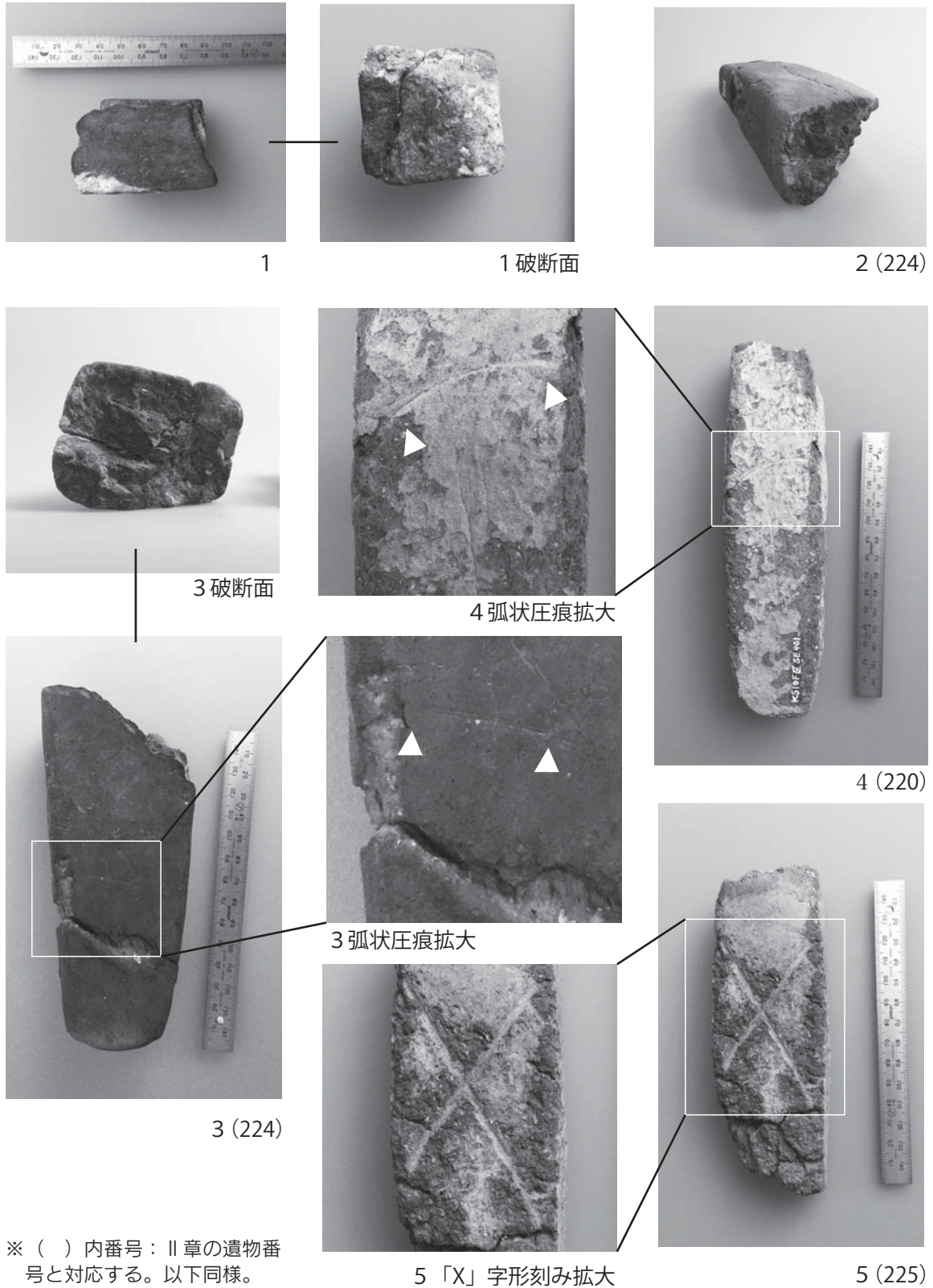


図199 土器焼成遺構関連遺物 (1) 棒状土製品

附着する例 (図199-1) などは、どのように土器の窯詰めの際に使用されたのかを考えるための参考となると考えられる。そのほかにも棒状土製品の表面に円弧状の圧痕の残る事例が認められる (SE401出土資料図199-3、図45:220・図199-4)。このような圧痕がみられるのはアーチ状の形

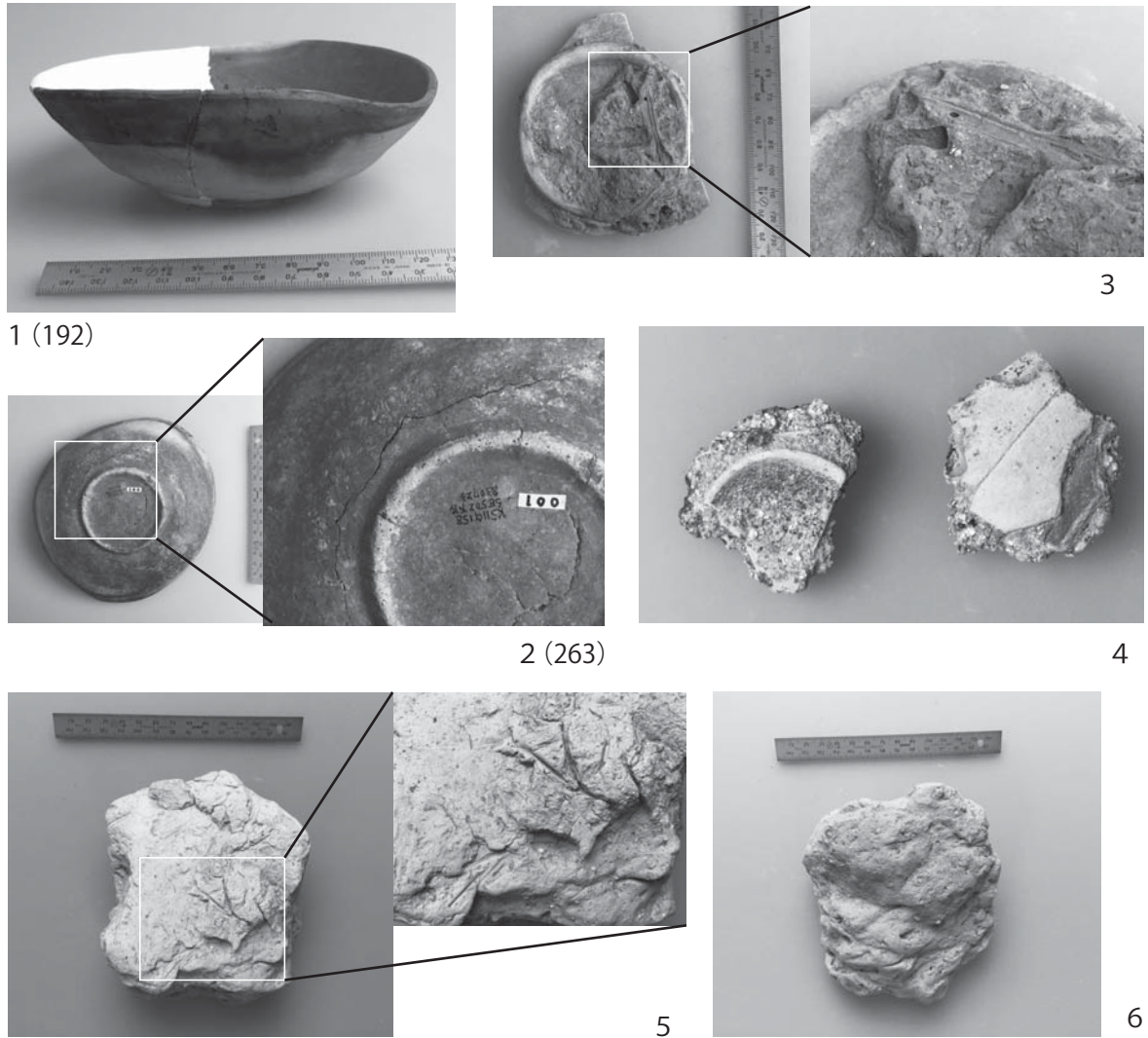


図200 土器焼成遺構関連遺物 (2) 焼け歪み瓦器碗 (1・2)・熔着土器片 (3・4)・焼成粘土塊 (5・6)

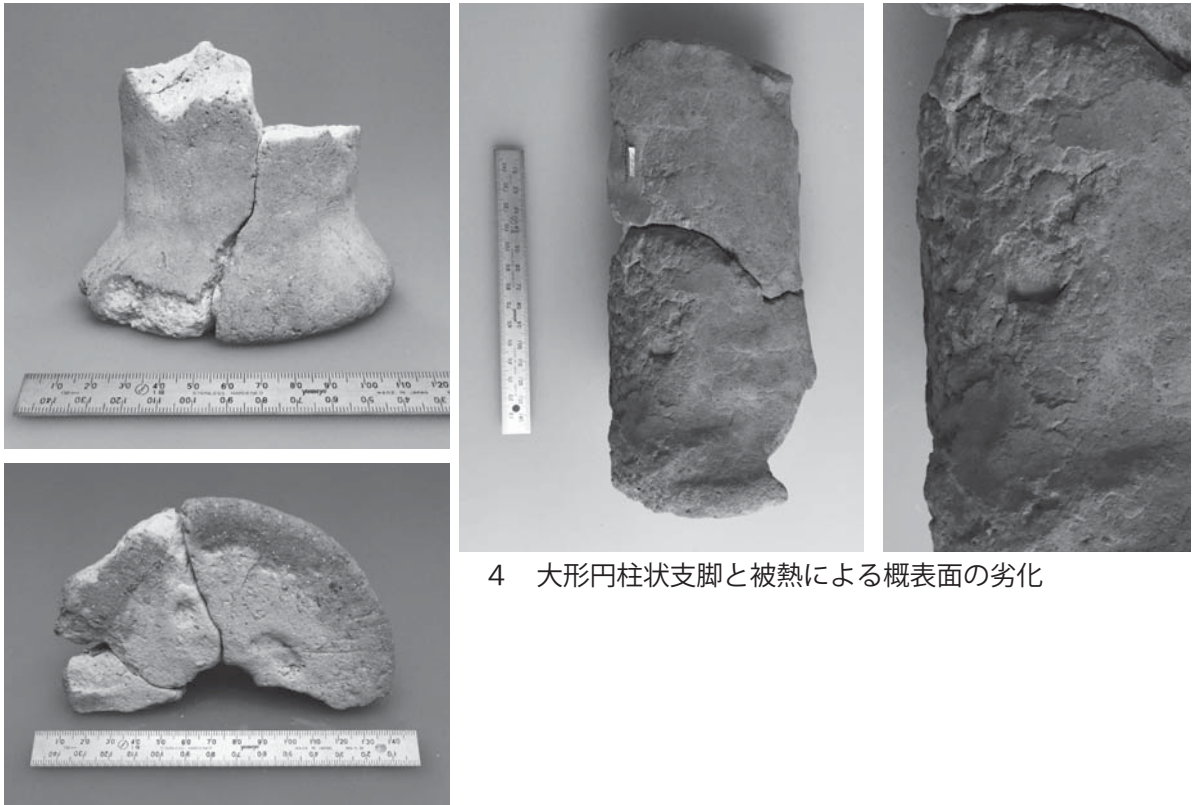
態をした棒状土製品で、アーチ状の上面に圧痕がみられる。このような円弧状の圧痕は棒状土製品が未焼成の段階で円形の物体をのせた、あるいは円形の物体の上に棒状土製品を置いたことによる圧痕であろう。アーチ状の上面に圧痕がみられることから、棒状土製品が下でその上に弧状の圧痕を残しうる物体をのせた可能性が高い。円形の物体については推測の域を出ないが、土器が最もありうるものと考えられる。土器の口縁部ないしは底部の圧痕がついているのであろう。このような圧痕が、土器製作のどの段階でついたのかは不明であるが、候補としては①土器の半乾燥のための仮置き、②土器を窯詰めする前の仮置き、③窯内で焼成段階に置台として用い土器を上に乗せた際、などが考えられるであろう。いずれの工程においてついたものか絞り込むことはできないが、瓦器、土師器ともに底部外面に板状の圧痕が認められる個体が少なくない。この点をふまえると、①や②の可能性よりは③の可能性が高いものと考えられる。今後類例の増加が期待される。また、本遺跡群出土の棒状土製品のなかでは1点のみ認められたが、棒状土製品の表面に「X」字形の刻みを入れたものが存在する (SE401出土・図46:225・図199-5)。どのような機能あるいは意味でこのような刻みが入れているのか、類例を知らないこともあり不明といわざるを得ない。類例の増加を待ちたい。

2) 焼け歪み資料 (図200): エリア I の瓦器が集中して出土する土坑や井戸からは焼け歪みによっ



1 二次被熱を受けた器台 1 (99)

2 二次被熱を受けた器台 2 (211)



3 大形円柱状支脚と被熱痕

4 大形円柱状支脚と被熱による概表面の劣化

図201 土器焼成遺構関連遺物 (3) 再利用器台・大形円柱状支脚

て器形が変形した土器が散見される。また、変形すると同時に粘土接合部などを中心に器壁の一部が断裂あるいは亀裂の入るものも認められる (SE502出土・図51:263・図200-2)。さらにこのような窯での焼成時の焼け歪みは瓦器のみに限られるわけではなく、これらの遺構から伴出する土師器にも数は多くはないものの認められる (SK546出土土師器:図34:107・108など)。

3) 熔着資料 (図200): 土器自体が焼け歪んで変形している場合に加え、スサあるいは窯壁が土器に熔着した場合もみられる。SK548出土の瓦器底部片にはスサが熔着しており (図200-3)、植物の圧痕が残っている。また、包含層出土ではあるものの複数の土器が熔着したのも認められる (図200-4)。とくに底部の高台周辺にスサを含む土が熔着した資料などは、窯内での土器焼成時にどのような道具を使用して窯詰めしているのかを考えるうえで重要な資料である。

4) 再利用器台 (図201) : 二次被熱によりススが付着した器台が2点ほど出土している。数は少ないものの、いずれも受け部ないしは脚裾部が被熱しており、脚部の中位はそれほど被熱していない (図201-1・2)。また、後述する大形の支脚ほど表面が被熱によって劣化していない点も特徴の一つといえるであろう。器台という器種の性格上二次的な被熱を通常の使用によって受けることはあまりないと考えられる点や、瓦器や窯道具と考えられる棒状土製品と伴出していることから土器の焼成時にトチンなどの窯道具として再利用されていた可能性が高いものと考えられる。

5) 大形支脚 (図201) : 出土している個体数が少なく形態的にも変異が認められるが、一つは円柱状の体部に脚裾部あるいは支持部が外側に円形に張り出す形態のものである (SD511出土・図201-3)。この形態に類似した資料が他にも数点みられるが (SE401出土・図44:212)、中心部分に上下貫通する円孔がみられる場合が多い。また、SK548から出土の図201-4のようにやや細身の体部に不均等な張り出しを脚裾部に持つ形態もみられる。

これらの大形円柱状支脚には二次被熱痕や被熱による外表面の劣化などが認められる。図201-3のように脚裾部あるいは受け部の縁辺部が被熱し表面の変色を生じているものや、図201-4に顕著であるが、被熱によると思われる外表面の劣化などが認められる。

一方で、棒状土製品の出土量と比べると、大形円柱状支脚は出土数が非常に少ない。今回すべての資料を網羅的に把握できているわけではないので、検討対象とした資料が実際出土量を忠実に反映しているわけではないが、大勢は大きく変わらないであろう。そのように考えるならば、この種の遺物の出土量の少なさは、窯での使用方法を考える際に一つの特徴として考慮する必要があるだろう。

4. 窯道具の使用法

本遺跡群では焼成遺構が把握されていないため、上でみた各種遺物がどのように窯跡で使用されていたのかという点について、出土状況などから把握することはできない。そのため、関連する遺物に

みられる諸特徴に基づき類推せざるを得ない部分が多くなる。しかし、これまでの他遺跡における調査成果によって棒状土製品などはその使用方法の一つの在り方を想定することができる。岡山市の三手向原遺跡1号窯 (図202) では円柱状の窯道具を窯内の床面に立て、その上に棒状土製品と類似するが厚みがやや薄い板状窯道具を井桁状に並べたロストル状の構造が復元されている (岡山市教育委員会2001)。類似の構造は西山1-1号窯においても認められる。この窯跡では、円柱状の焼台の上にブロック状の焼台が一部で重なって出土していることから、ブロック状焼台を円柱状焼台の上に並べて上部の床面としていたものと復元されている (大阪大学大学院考古学研究室2015, pp.10-11)。

大形円柱状支脚や再利用器台などについては

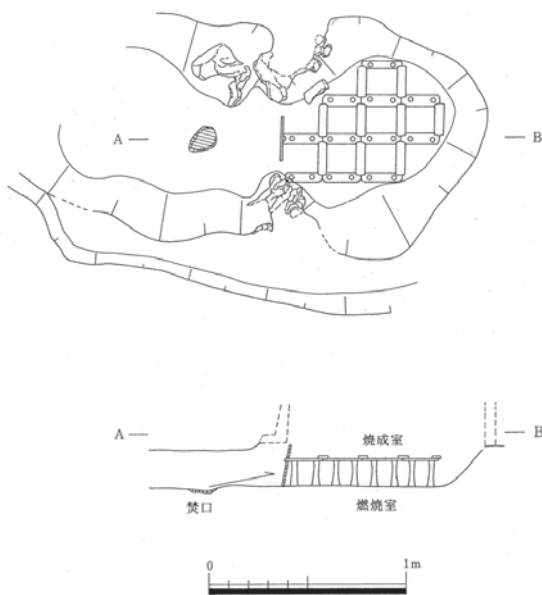


図202 岡山市三手向原遺跡1号窯復元図
(岡山市教育委員会2001より転載)

支脚として用い、その上に棒状土製品を並べるといのように、三手向原遺跡同様の使用方法をしていた可能性が想定できるであろう。その一方で、先にみた出土遺物にはスサを含む土が熔着した土器片などがみられることから、大形円柱状支脚に粘土などをのせた上に未焼成の土器を積み上げ焼成した可能性もある。このような大形の円柱状の支脚の上に土器を積み重ね焼成した例は、篠窯跡群の西長尾5号窯（（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター1984）などで調査されている²⁾。本遺跡群では上記の熔着土器の他にも、土器の圧痕など明瞭な痕跡は残っていないもののSK542からは焼成粘土塊が出土しており（図200-5・6）、土器に熔着したスサ混じりの土と同様のスサの混入がみられるものがある（図200-5）。大形円柱状支脚は出土数が少ないため、焼成時における使用方法としてロストルの支持台とするには数が少ない印象がある。窯内の火の回り具合などの関係で、窯の特定の位置での焼成のために後者のような使用をした可能性が高いであろう。また、棒状土製品については直接窯内の床面に並べて土器焼成の置台として使用した可能性（高尾・馬場2003；長安2016）も否定できない。

土器焼成のための窯道具として使用された各種遺物については、このように複数の使用方法を想定することができる。今後、出土遺物の詳細な観察と使用痕などのパターン化がさらに必要と思われるが、1種類の遺物について複数の使用方法があることも想定する必要があるだろう。先に破損した棒状土製品の断面にもスサが付着している点を見た。このことは破損した窯道具を継続的に窯での焼成作業に用いていた可能性があることを示す。小規模な窯の中で効率的に土器の焼成を行うために、火の回り具合が必ずしも均一ではない窯内で歩留まりよく生産を行うため、破損した窯道具なども併用しつつ各種窯道具を様々に使用していたことが想定される。

5. 瓦器生産と周辺の遺跡

本遺跡群は牛頸窯跡群（牛頸須恵器窯跡）の北端部分に位置する遺跡であり、須恵器生産が古墳時代から古代にかけて行われていた痕跡がみられる点はすでにV-1で述べた。牛頸窯跡群での操業が終焉したあとから連続しているわけではないが、本遺跡群周辺でも小水城周辺遺跡（舟山1995）、上園遺跡（舟山2017）、牛頸本堂遺跡群（石木2008）などの遺跡で棒状土製品が出土しており、土器生産の可能性が指摘されている（舟山1995：2017）。これら至近の諸遺跡と同様に本遺跡群でもエリアIの微高地周辺を一つの主要な場として、土器、おそらく瓦器を中心とした製品の焼成を行っていたものと考えられるであろう。

牛頸窯跡群での須恵器の生産は6世紀中ごろから9世紀中頃まで継続されるが、牛頸山から派生する丘陵の先端部から操業が開始されることがこれまで明らかにされている（舟山2008）。その後、7世紀中葉を境として個々の窯の規模縮小・窯数の増加とともに丘陵の南側へと主たる窯場が移るといった傾向が指摘されている（副島他編1980；舟山2008）。そして、このような窯跡の立地の変遷には須恵器生産の燃料として不可欠な森林資源の枯渇との関連が指摘されている（林2007）。

牛頸窯跡群での須恵器生産の立地変遷と操業の終焉といった過程、またその後の時間経過の中でどのような形で森林相の復元が進んでいったのか不明であるが、本遺跡群および周辺の諸遺跡で出土する窯道具から示唆される土器焼成あるいはその生産には、ある程度の森林資源の存在が必要であるものと考えられる。今後は、このような周辺の環境も含めた土器生産の具体像とその背景の解明がまたれる。

IV 考察

註

- 1) 以下は2018年度九州考古学会での発表をもとにしている。発表時には太宰府市教育委員会中島恒次郎氏及び大野城市教育委員会上田龍児氏より多くの御教示をいただいた。記して深謝申し上げます。
- 2) 岡山理科大学亀田修一先生には土器の熔着資料をご覧いただき、窯での焼成方法などについて参考となる篠窯跡群の事例・文献とともに貴重なご教示をいただきました。記して深甚の感謝を申し上げます。

文献

- 石木秀啓・久住愛子・北川貴博・上田龍児・大里弥生（編著）2008『上大利北土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 牛頸本堂遺跡群Ⅵ』（大野城市文化財調査報告書第80集）大野城市教育委員会
- 井上義也2004『大南遺跡 B 地点』（春日市文化財調査報告書第38集）春日市教育委員会
- 梅崎恵司1994『森山遺跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第154集）（財）北九州市教育文化事業団
- 宇野慎敏1991『徳力遺跡第6地点』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第111集）（財）北九州市教育文化事業団
- 榎本義嗣2000『上月隈遺跡群2第2次調査報告』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第633集）福岡市教育委員会
- 大阪大学大学院文学研究科考古学研究室編2015『西山1号窯：篠窯跡群における瓦陶兼業窯の調査』大阪大学考古学研究室 豊中
- 岡山市教育委員会2001『三手向原遺跡－中世土師器窯と集落遺跡の発掘調査報告－』岡山市教育委員会
- 窯跡研究会（編）1997『古代土師器生産と焼成遺構』真陽社 京都
- 佐藤一郎1988『田村遺跡Ⅴ』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集）福岡市教育委員会
- 佐藤浩司1997「各地域の土師器生産と土師器焼成遺構 九州北部－北海道豊前国、北九州市域を中心として－」（窯跡研究会編）『古代土師器生産と焼成遺構』真陽社 京都、43－71頁
- 副島邦弘・舟山良一1980『牛頸中通遺跡群 福岡県大野城市大字牛頸字中通所在遺跡調査報告』（大野城市文化財調査報告書第4集）大野城市教育委員会
- 高尾栄市・馬場克幸2003『小山田・スルメ田遺跡』（築城町文化財調査報告書第9集）築城町教育委員会
- 長安慧2016「棒状土製品からみた中世の窯業」『七隈史学』第18号：118－105
- 林潤也2007『牛頸小田浦窯跡群Ⅱ－79地点の調査－』（大野城市文化財調査報告書第73集）大野城市教育委員会
- 舟山良一1995『小水城周辺遺跡』（大野城市文化財調査報告書第45集）大野城市教育委員会
- 舟山良一・石川健2008『牛頸窯跡群－総括報告書Ⅰ－』（大野城市文化財調査報告書第77集）大野城市教育委員会
- 舟山良一2017『上園遺跡6－第10次調査－』（大野城市文化財調査報告書第160集）大野城市教育委員会
- （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター編1984『篠窯跡群1』（京都府遺跡調査報告書第2冊）京都府埋蔵文化財調査研究センター

V 調査の成果と課題

昨年度に筑紫キャンパス遺跡群総括報告書1として縄文時代から弥生時代にかけての調査成果について報告した。この総括報告書1と今回刊行した本報告書からみた縄文時代以降古代末から中世にかけての調査成果と課題についてまとめておく。

縄文時代については本キャンパス遺跡群の北西部において溝状遺構などが検出されたが住居跡や土坑などは発見されなかった。しかし、後期中葉以降晩期までの比較的まとまった土器が出土しており、周辺でこのような遺跡がほとんどみられないことをふまえると一つの大きな成果といえる。とくに、包含層や旧河川からの出土でありかつ点数こそ2点と少ないものの鐘崎式土器が出土している点は、近隣遺跡での出土例がほとんどないため縄文時代後期中葉における人間活動がこの牛頸川流域の河岸段丘上で営まれていたことを示す貴重な資料である。また、続く太郎迫式期以降は精製器種を中心に粗製土器も多く出土している。そして後・晩期を前後する時期の土器群は、北部九州の土器様式構造を考えるうえで重要な資料と考えられる。従来から北部九州では中九州などの地域に比べ土器様式構造の一部を構成する深鉢形土器で粗製化が早く進むことが指摘されていた。当該時期の本遺跡群出土資料では本来精製器種である一部の鉢形土器で作りが粗い点などがうかがわれ、上記のような北部九州地域における粗製化の動向を考えるうえで重要な特徴がみられた。このように当時の土器様式構造の諸側面を考える上でも本遺跡群出土土器群は重要な意義を持つものである。ただし、出土状況や周辺遺跡における状況を把握できるわけではないため、今後の調査事例の増加が待たれる。

弥生時代になると中期初頭頃から住居跡や土坑などの遺構を数多く把握でき、集落像をある程度復元可能であった。戦後、米軍キャンプ用地として利用されたため旧地形が大きく削平・改変されており、遺構の残存状況は必ずしも良好なものではなかった。しかし、キャンパス敷地内という広範囲の発掘調査であったため、本遺跡群がその一部を構成する御供田遺跡内での遺構の通時的な展開過程の一端を把握できた。弥生時代の遺構の時期的推移によると、中期初頭頃からキャンパス内北西部の河岸段丘面の比較的平坦な部分で遺構が認められるようになる。その後中期後半まで住居跡や土坑が数多く形成される。この間の遺構分布からはキャンパス北西部の東西両側のやや標高の高いと推定される部分に遺構が多くみられるのに加え、南から延びる丘陵の西側斜面を中心に生活の痕跡が残されていた。このような遺構分布と時期の推移を隣接する春日高校におけるこれまでの調査成果などと合わせて考えると、居住域と墓域によって構成される単位が複数存在することが想定できた。そして、続く後期になると居住生活の範囲がやや狭くなり、現大野城駅近くの丘陵裾部に住居跡や土坑がみられることが明らかとなった。このように中期初頭以降後期後半あるいは一部古墳時代初頭まで、キャンパス内の北西部を中心に遺構が展開しており、とくに中期における集落構造の一端を明らかにすることができた。また、エリアⅡの柱穴から出土した炭化米のDNAおよび年代測定の結果から、当初古代と想定していたのに反し、弥生時代中期の年代がえられた。DNA分析は資料中のDNAの劣化により結果をえられなかったが、形態の比較検討によって本遺跡群の近くを流れる御笠川流域の板付遺跡出土資料と同じ形態的パターンを持つ点、形態的な均質性から形質のそろった稲が栽培されていた可能性などが明らかとなった。今後の資料の増加に期待したい。

さらに、本遺跡群からは青銅器鋳型や青銅製鋤先など青銅器生産に関わる遺物も出土している。鋳

型の検討からは青銅器生産の行われていた他遺跡からの流入品である可能性が指摘された。また、青銅製鋤先の元素組成に関する分析の結果、合金化が十分ではないことが判明し、今後の弥生時代の青銅器生産技術の水準を検討する上で非常に重要な成果といえる。一方、石器に関する分析・考察からも重要な知見が得られた。石庖丁や武器形石製品の詳細な検討の結果、筑豊地域や肥前地域あるいは対馬に産地の求められる石材あるいは製品が入ってきている点などが明らかにされた。さらに太形蛤刃石斧の石材に関する地球科学的高精度分析の結果、岩石組織や全岩化学組成などの諸点で今山産玄武石材であることが明らかとなった。このような石器器種による石材供給地の多様な様相に加え、出土土器の地域的特徴をみると糸島や筑後地域などとの関係も垣間見ることができた。さらに本報告での鉄器の検討によれば、鉄素材の可能性の高い鉄器が出土していることが明らかとなり、かつその一部は糸島方面から流入してきているものである可能性が示された。このように本遺跡から出土した多様な遺物の検討から他地域との複層的な関係が明らかとなった。三郡山地と背振山塊に挟まれた二日市地峡帯という立地環境のもと、本遺跡群が九州北部の物資や人の流れの一つの結節点となっていたことをうかがわせる大きな成果といえよう。

古墳時代においては前期の溝から出土した石釧について、他遺跡での出土事例との詳細な比較検討に基づき集落内における廃棄事例との評価がなされ、古墳時代前期における一つの在り方である点が明らかとなった。今回の報告では詳しく報告することはできなかったものの古墳時代前期までは溝や旧流路を中心としてこの時期の遺物が出土しており、当遺跡群内における人々の活動が弥生時代以来連綿と継続していたことがうかがわれる。今後、当該時期における周辺の集落遺跡も含めたなかで本遺跡群の性格を解明するうえで、本石釧がどのような経緯で入手され廃棄されるに及んだのかという点が課題となるであろう。

古墳時代後期になると、とくに6世紀後半から7世紀初頭前後までの住居跡がキャンパス敷地内の複数個所にまたがって認められた。調査区による制約や後世の削平によって、本来存在していたすべての居住施設が調査されているわけではなく、また今回報告した住居跡や住居跡群すべてが同時に併存していたわけではないであろう。しかし、牛頸窯跡群において須恵器生産が開始されたのち、窯数や窯の分布範囲が拡大してゆく6世紀後半から7世紀初頭頃に本遺跡群内で須恵器が多く出土する住居跡が多数認められることは、須恵器生産に関わる集団との関連を示すものと考えられることができる。また、エリアⅡ・Ⅲ・Ⅳと旧地形によって区分されるエリアに分散して住居跡ないしは住居跡群が分布しているという点は、窯を操業する社会集団を考えるうえで重要である。というのもこれまで宗像地域の須恵須賀浦遺跡や他地域の横穴墓群の検討から、2-3程度の横穴墓により構成される小群として現れている社会集団ないしは家族集団が窯を操業するうえでの基礎的な単位である可能性が指摘されている(岡田2004)。そしてこのような複数の横穴墓による小群は、集落における複数住居のまとまりと対応する可能性が高いものと考えられている(岡田2004; 田中1995)。牛頸窯跡群では6世紀中頃前後の操業以降7世紀前半頃までは全長10mを超える大型の窯で須恵器の焼成が行われる。上記の諸研究を参考にすれば、本遺跡群内エリアⅡ西部やエリアⅣ南部などに分布する住居群は、この時期の大型の窯を操業する主体を考える際に重要な意味を持つものといえるであろう。さらに本遺跡群ではこのような須恵器生産に関わる遺物として須恵器製作の際に用いられたと考えられる木製タタキ板・当て具・ヘラ状工具などがまとまって出土した点も、貴重な成果といえるであろう。この木製工具と同様にエリアⅣを中心とした範囲で出土した多くの木製品についても考察が行われた。その結果、弥生時代から古墳時代後期までの工具・農具・編み具、火錐臼などの生活用具全体にわたる木製

品が多く出土していることが明らかとなった。今後、弥生時代から古墳時代にかけての木製品加工技術やその生産と流通等多岐にわたる問題について研究するうえで重要な成果であろう。また、このエリアⅣから出土した木製品の一部に対しては、九州文化財研究所の協力のもと新たな保存方法を試す機会を持つことができた。対象資料を発掘調査後水に浸した状態で長期間冷蔵保管したことにより資料がかなり劣化していた。そのため、今回の試験の結果には脱色やべたつき等の問題がみられた。このような結果から本遺跡群で出土した木製品の保存処理方法として活用することには課題が残るものであった。しかし、本遺跡群出土資料を今回のような形で活用できたのは、木製品の新たな保存技術の開発・改良に貢献するという点で重要な意義を持つものである。このほか本遺跡群出土土器の胎土分析も行われた。弥生土器と須恵器の胎土の比較では分析した元素のいずれにおいても差が認められ、粘土の採取地の相違や、生産の集約化の違いなどの可能性があることが示された。分析サンプル数が今後増加することによって、遺跡周辺の地質環境の相違や須恵器の場合であれば窯間での胎土組成の相違など様々な研究課題に取り組むことができるものと考えられる。

7世紀中葉から8世紀前半にかけては遺構の存在が希薄であるが、8世紀後半以降については、官道の東西における景観の一端が明らかにされたものと考えられる。残念ながら、瓦や墨書土器その他の遺物が出土した溝以外明確な建物に関わる遺構は検出されていない。しかし、瓦を中心とする遺物の緻密な分類と分布の綿密な把握によって、官道西側のエリアⅣにおいて従来からその存在が推定されていた寺院跡の範囲がより鮮明にされたことは大きな成果といえる。また、墨書土器や木簡の検討からこの寺院跡との関連が明らかにされ、官道の丘陵側における景観の一端が明らかになった点も大きな成果である。さらに、この寺院跡周辺では製鉄や銅製品の鑄造に関わる遺物が出土していることから、寺院周辺での活動の一端も明らかになったものといえる。また、この寺院跡周辺では多量の奈良時代の瓦が出土したことは考察で明らかにされているが、中でも厚さ4cm前後の平瓦については怡土城で使用されていた瓦との関連が明らかにされた。それと同時に、糸島と本遺跡群との関係の背後にある交通路についても官道とは別のルートが提示されており、当時の多様なネットワークの一端が明らかになったものといえる。このような糸島地域と本遺跡群との関連性について、弥生時代における鉄素材や石器・石材および土器など多層的な物資を媒介として明らかになったことは総括報告書1および本報告においてすでに述べたとおりである。このような糸島地域との先史時代までさかのぼる交渉関係が古代においてもうかがえる点は、本遺跡群の立地および周辺の地理的環境が大きく作用していることを示す証左といえるであろう。

一方、官道東側においても平安前期を中心とした瓦がエリアⅠおよびエリアⅡでまとまってみられ、かつエリアⅡからは田畑の面積に関する文書木簡も出土している。これらのことから、官衛的施設の存在していた可能性が示された。さらにエリアⅠの官道西側においても奈良時代から平安時代前期の瓦および平安時代の鬼瓦が出土していることから、瓦葺の建物が存在していた可能性が指摘された。8世紀代には至近の位置にある本堂遺跡群において寺院の可能性のある建物跡の調査が行われている。このような周辺施設との関係も含めた官道沿いの景観あるいは土地利用の様相を今後解明してゆく上でも大きな成果といえるであろう。

古代末から中世にかけてはエリアⅠに遺構分布が集約しているが、旧流路沿いに場所を少しずつ変えながらも古墳時代以降連綿と中世まで井戸が作られる。本報告ではこの井戸から出土した井戸枠をはじめとする木製品、部材などの詳細な検討から、これまで井戸の足場とされてきた井戸材が、井桁でありすぐわきを流れる旧流路の氾濫などによって一部が流された結果である点が明らかとなった。

また、この井戸の井桁に用いられた板材には転用材が多く使用されている点も詳細な観察によって明らかとなった。今後、木材の再利用状況、転用前の本来の構造材としての形態や加工の状況などを検討することにより、建物など構造物や木材の加工技術、さらには過去のリサイクルの様相や木材の流通など多角的な問題にアプローチすることが可能であり、出土木材研究の可能性を考えるうえで重要な知見がえられたものとする。

また、この旧流路の北側の微高地周辺において瓦器や土師器の焼成が行われていた可能性が示されたのはこの時期の遺跡の評価をするうえで重要な知見であろう。近隣の上大利小水城周辺遺跡や本堂遺跡群などにおいてもこのような土器の焼成に関わる窯道具が散発的に認められることから、今後はこのような周辺遺跡も含めた包括的観点による土器生産活動の具体的様相の解明が課題となるであろう。

これまでのべてきたように、御供田遺跡の一部を構成する本遺跡群は縄文時代以来、古代末・中世まで連綿と人間活動が営まれていたことがわかる。また、その内容も集落、須恵器生産の場、官道とその沿道の寺院や官衙的施設、あるいは瓦器を中心とした土器生産の場というように時代とともに変遷をとげる。しかし、すでに述べたように、本遺跡群を規定する一つのファクターとして二日市地峡帯という立地環境が大きな歴史的意義を持っていたものといえ、このような環境のもと弥生時代以降古代にかけて九州北部における人や物の移動・流通の一つの結節点となっていたということができよう。

以上本遺跡群に関する総括報告書の成果と課題について述べてきたが、総括報告書1・2の考察においては文理融合研究に基づく新たな分析・研究が少なからず含まれており、それぞれに貴重な成果をえることができた。このような新たな研究を含め、本遺跡群出土資料が今後ますます活発に活用されることが望まれる。

文献

岡田裕之・原俊一2004「古墳時代の須恵器製作者集団－福岡県宗像市須恵須賀浦遺跡の研究－」『日本考古学』第17号：25-42

田中良之1995『古墳時代親族構造の研究－人骨が語る古代社会－』柏書房 東京

| 図番号 | 遺物番号 | 西報告・掲載図番号等 | 出土地点・遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|-----|------|------------|-----------|-----------|------|---------------------------|-------------|----------|---|------------------|----------|----------------------|
| 図6 | 1 | | 8C SB106 | 弥生土器 | 甕 | ②4.0+ a | 1-2mm砂粒多く含む | 良 | 内・外：にぶい橙色(7.5YR7/4)-橙(7.5YR7/6) | 不明 | 不明 | |
| | 2 | | 8C SB106 | 弥生土器 | 甕 | ②3.0+ a | 白色粒子含む | 良 | 内：にぶい黄褐色10YR7/2-3・外：にぶい黄褐色10YR7/4 | ハケ・ナデ | ナデ | |
| | 3 | | 8C SB106 | ミニチュア土器 | | ②5.7+ a ③4.6 | 1-2mm砂粒多く含む | 軟 | 内：灰白色2.5Y8/2・外：灰白色2.5Y8/1-8/2 | ナデ | ユビオサエ・ナデ | |
| | 4 | | 8C SB106 | 土師器 | 椀 | ①13.3②5.1 ③3.0 | 1-2mm砂粒多く含む | 良 | 内：淡黄色2.5Y8/4・外：灰白色(2.5Y8/2)-淡黄色(2.5Y8/3) | ナデ | ナデ | |
| 図8 | 5 | | 8D SB109 | 弥生土器 | 甕 | ②1.8+ a | 細砂粒・長石含む | 良 | 内・外：にぶい黄褐色10YR5/4 | 不明 | ヨコナデ | |
| | 6 | | 8D SB109 | 弥生土器 | 甕 | ②2.7+ a | 微細雲母多く含む | 良 | 内・外：浅黄褐色(10YR8/4)にぶい黄褐色(10YR7/3) | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 7 | | 8D SB109 | 弥生土器 | 甕 | ②5.0+ a | 細砂粒・微細雲母含む | 良 | 内・外：灰白色2.5Y8/2 | ヨコナデ | 不明 | |
| | 8 | | 8D SB109 | 弥生土器 | 壺 | ②5.4+ a | 細砂粒多く含む | 良 | 内・外：浅黄褐色7.5YR8/3 | 不明 | 不明 | |
| 図10 | 9 | | 10F SB409 | 須恵器 | 杯蓋 | ②1.3+ a | 精良 | 良 | 内外：青灰色5PB6/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 10 | | 10F SB409 | 須恵器 | 杯蓋 | ②1.4+ a | 石英含む | 良 | 内：オリープ灰色2.5GY5/1・外：明赤褐色5YR5/6 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 11 | | 10F SB409 | 須恵器 | 杯蓋 | ②0.7+ a | 精良 | 良 | 内：灰白色5Y7/1・外：灰白色N7/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 12 | | 10F SB409 | 須恵器 | 杯蓋 | ②1.1+ a | 細砂粒わずかに含む | 良 | 内外：灰色10Y6/1 | ヘラケズリ後ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 13 | | 10F SB409 | 須恵器 | 杯身 | ②1.2+ a | 精良 | 良 | 内外：灰白色N7/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 14 | | 10F SB409 | 須恵器 | 杯身 | ②1.6+ a | 精良 | 良 | 内：灰色5Y6/1・外：黄灰色2.5Y6/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 15 | | 10F SB409 | 須恵器 | 小形甕 | ②2.2+ a | 精良 | 良 | 内：灰白色2.5Y7/1・外：灰白色5Y6/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 16 | | 10F SB409 | 須恵器 | 脚部 | ②1.7+ a | 精良 | 良 | 内：灰白色2.5Y7/1・外：灰色7.5Y4/1 | ナデ | ナデ | |
| | 17 | | 10F SB409 | 須恵器 | 脚部 | ②1.5+ a | 精良 | 良 | 内外：にぶい黄褐色10YR6/4 | ナデ | ナデ | |
| | 18 | | 10F SB409 | 土師器 | 椀 | ②4.6+ a | 石英含む | 良 | 内外：にぶい橙色5YR6/4 | ヘラケズリ後ナデ | ヨコナデ | |
| 図12 | 19 | | 8E SK205 | 土師器 | 杯 | ①13.2 ②3.5 ③8.2 | 精良 | 良 | 内外：橙色7.5YR6/6 | ヨコナデ・回転ヘラケズリ | ナデ | 底部外面板状圧痕 |
| 図14 | 20 | | 9C SK224 | 弥生土器 | 甕 | ①(35.6) ②7.9+ a | 3mm大砂粒多く含む | 良 | 内：明褐色7.5YR5/6・外：にぶい黄褐色10YR5/3-5/4 | 口縁部ヨコナデ | ナデ | |
| | 21 | | 9C SK224 | 弥生土器 | 壺 | ②6.6+ a ③頸部径(17.8) | 砂粒多く含む | 良 | 内・外：浅黄色・にぶい黄色2.5Y7/3-6/3 | 不明 | 不明 | |
| | 22 | | 9C SK224 | 須恵器 | 杯身 | ①(13.8) ②3.5+ a | 精良 | 良 | 内・外：灰色N6/0-7.5Y6/1 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| | 23 | | 9C SK224 | 須恵器 | 杯身 | ①(13.8) ②4.2+ a | 精良 | 良 | 内・外：灰色7.5Y6/1 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| | 24 | | 9C SK224 | 須恵器 | 杯身 | ①(10.4) ②3.8+ a | 精良 | 良 | 内・外：灰色10YR6/1 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| | 25 | | 9C SK224 | 須恵器 | 杯身 | ②1.5+ a ③(7.8) | 黒色粒子含む | 良 | 内：灰色5Y5/1・外：灰白色N5/0 | 回転ヘラ切・回転ナデ | 回転ナデ | |
| | 26 | | 9C SK224 | 土製品 | 鞆羽口 | ①残存長3.4 ②残存幅4.6 | 白色粒子含む | 良 | 内：浅黄褐色10YR8/3・外：灰色5Y6/1 | ナデ | ナデ | |
| | 27 | | 9C SK225 | 弥生土器 | 甕 | ②4.8+ a | 白色粒子含む | 良 | 内・外：にぶい黄褐色10YR7/4 | ハケメ後ナデ | ナデ | |
| | 28 | | 9C SK225 | 弥生土器 | 甕棺 | ②5.4+ a | 白色粒子含む | 良 | 内・外：浅黄褐色10YR8/3 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 29 | | 9C SK225 | 土師器 | 皿 | ②1.5 | 精良 | 良 | 内・外：にぶい橙色-橙色7.5YR7/4-7/6 | 底部回転ヘラ切 | 不明 | |
| | 30 | | 9C SK225 | 土師器 | 杯身 | ②3.9+ a | 微細砂粒・雲母含む | 良 | 内・外：橙色7.5YR7/6 | ヘラケズリ・ナデ | ヘラケズリ・ナデ | 内面に工具痕 |
| | 31 | | 9C SK225 | 須恵器 | 杯身 | ②2.2+ a ③(7.8) | 精良 | 良 | 内：にぶい黄褐色10YR7/3-7/4・外：灰白色5Y7/1-7/2 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| | 32 | | 9C SK225 | 須恵器 | 杯身 | ②3.0+ a ③(7.8) | 白色粒子含む | 良 | 内・外：灰色N6/0/6 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部外面板状圧痕 |
| | 33 | | 9C SK225 | 須恵器 | 杯身 | ①(14.8) ②3.0 ③9.3 | 精良 | 良 | 内・外：灰白色7.5Y7/1 | 底部ヘラ切・胴部ナデ | ナデ | 底部外面板状圧痕 |
| | 図16 | 34 | 157図-1 | 10D SK303 | 弥生土器 | 器台 | ②4.0③(12.4) | 1mm大砂粒含む | 良 | 内外：にぶい黄褐色10YR7/3 | ナデ | ナデ |
| 35 | | | 10D SK303 | 土師器 | 椀? | ②2.7 | 石英多く含む | やや軟 | 内：灰白色2.5Y8/2・外：淡黄色(2.5Y8/3)-灰黄色(2.5Y7/2) | 不明 | ハケ後ナデ | |
| 36 | | 157図-2 | 10D SK303 | 瓦器 | 椀 | ②4.0③8.0 | 精良 | 良 | 内：灰白色5Y8/1・外：灰白色2.5Y8/2 | ハラナデ | ハラミガキ | 底部外面付近糸切り痕 |
| 図18 | 37 | | 10F SK430 | 瓦器 | 椀 | ①15.0②3.6 ③7.2 | 精良 | 良 | 内外：灰白色10YR8/2 | 口縁部ヨコナデ | 口縁部ヨコナデ | 底部外面板状圧痕 |
| 図20 | 38 | 204図-10 | 10F SK436 | 土師器 | 椀 | ①14.2②5.6 ③6.2 | 精良 | 良 | 内：にぶい橙色5YR7/4・外：灰白色10YR8/2 | ユビオサエ・ヨコナデ | ナデ | 高台部焼き歪み顕著 |
| | 39 | 204図-12 | 10F SK436 | 土師器 | 椀 | ②2.3③8.7 | 精良 | 良 | 内外：灰白色10YR8/2 | 不明 | ヨコナデ | |
| | 40 | 204図-11・13 | 10F SK436 | 瓦器 | 椀 | ①(15.0)②5.4 ③6.4 | 精良 | 良 | 内外：灰白色10YR8/2 | ヨコナデ | ハラミガキ | |
| | 41 | 204図-14 | 10F SK436 | 土師器 | 風炉 | ②7.8 | 細砂粒・石英含む | 良 | 内：浅黄褐色10YR8/3・外：灰白色2.5Y8/2 | ナデ? | ハラミガキ後ナデ | |
| 図22 | 42 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ①(16.0)②4.6 ③(6.2) | 精良 | 良 | 内：黒色(7.5Y2/1)-橙色(5YR7/6)・外：にぶい橙褐色5YR7/8-7/6 | ナデ | ミガキ | 外面高台上部指圧痕 |
| | 43 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ①(16.7)②4.4 ③(7.0) | 精良 | 良 | 内外：灰白色2.5Y8/1-7/1 | 不明 | 不明 | |
| | 44 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ①(17.0)②4.6 ③(7.0) | 精良 | 良 | 内：灰白色2.5Y8/1・外：灰黄色2.5Y7/2 | 不明 | 不明 | |
| | 45 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ①16.3②5.0 ③6.5 | 精良 | 良 | 内：灰白色2.5Y7/1・外：黄灰色2.5Y5/1 | ヨコナデ | 不明 | 底部下半部に粘土接合痕残り・外面炭素吸着 |

| 図 番号 | 遺物 番号 | 西報告・ 掲載図 番号等 | 出土地点・ 遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|---------|----------|--------------------|--------------|------------------|--------------------------------|-----------------------------------|-----------------|--------------------------------|--|----------------------|----------------------|--|
| | 46 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ①(16.0)②4.8 ③(7.1) | 精良 | 良 | 内:灰白色5Y8/1・ 外:灰白色(5Y8/1)-灰色(5Y4/1) | ヨコナデ | ヘラミガキ | 底部外面板状圧 痕?外面・内面口 縁部周辺および底 部外面炭素吸着 |
| | 47 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ①(16.5)②5.0 ③(7.3) | 精良 | 良 | 内外:灰白色2.5Y7/1 | ヨコナデ | ヨコナデ・ ミガキ | 胴部下半部放射状 指圧痕・底部外面 板状圧痕 |
| | 48 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ①(16.1)②5.0 ③(7.5) | 精良 | 良 | 内:灰黒色5Y4/1・ 外:灰黄色2.5Y7/2 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 胴部下半部放射状 指圧痕 |
| | 49 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ①16.4②5.0③ 7.4 | 精良 | 良 | 内外:黄灰色2.5Y4/1 | ケズリ後ナ デ・ミガキ | ヘラミガキ | |
| | 50 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ①(17.7) ②4.2+ a | 精良 | 良 | 内:黒色(2.5Y2/1)-灰色(5Y5/1)・ 外:黒色2.5Y2/1 | ナデ | ナデ | |
| | 51 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ①(16.1)②5.0 ③(7.2) | 精良 | 良 | 内外:にぶい黄橙色10YR7/2 | ナデ | ヘラミガキ | 底部外面板状圧痕 |
| | 52 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ①(17.4)②5.5 ③(6.2) | 精良 | 良 | 内・外:淡黄色2.5Y8/3 | ナデ | ナデ | 胴部外面中位放射 状指圧痕 |
| | 53 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ①(16.6)②5.3 ③8.4 | 精良 | 良 | 内:浅黄色2.5Y7/3・ 外:淡黄色2.5Y8/3 | ナデ | ナデ | 胴部下半部放射状 指圧痕・底部外面 板状圧痕 |
| | 54 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ①(16.1) ②3.8+ a | 精良 | 良 | 内・外:灰黄色-黒褐色2.5Y4/1-3/1 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 内外面炭素吸着 |
| | 55 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ①(16.6)②4.4 | 精良 | 良 | 内:灰白色2.5Y8/1・ 外:灰色5Y4/1 | 不明 | 不明 | 口縁部内面・外面 炭素吸着 |
| | 56 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ②2.3+ a ③(7.4) | 精良 | 良 | 内・外:灰白色2.5Y7/1 | ナデ | ヘラミガキ | 高台上部放射状に 指圧痕 |
| | 57 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ②2.7+ a ③(7.2) | 精良 | 良 | 内外:浅黄橙色10YR8/3 | 不明 | 不明 | |
| | 58 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ②2.5+ a ③7.4 | 精良 | 良 | 内:灰黒色-灰白色2.5Y8/1-7/1・ 外:灰白-灰黒色2.5Y8/1-7/1 | 不明 | 不明 | 内面炭素吸着・見 込みには炭素吸着 せず |
| | 59 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ②3.3+ a ③7.4 | 精良 | 良 | 内外:にぶい黄橙色10YR7/4 | ヨコナデ | ヘラミガ キ? | 底部外面板状圧痕 |
| | 60 | | 10F SK442 | 瓦器 | 椀 | ②3.7+ a ③(6.9) | 精良 | 良 | 内外:灰黄色2.5Y7/2 | ミガキ | ミガキ | 底部外面板状圧痕 |
| | 61 | | 10F SK442 | 土師器 | 杯 | ①(14.0) ②4.8+ a | 精良 | 良 | 内:にぶい黄橙色10YR7/3-7/4・ 外:にぶい橙色7.5YR8/4 | ナデ | ミガキ | 焼け歪み |
| | 62 | | 10F SK442 | 土師器 | 杯 | ①16.6②5.8 | 精良 | 良 | 内外:灰白色-にぶい黄橙色 10YR8/2-7/2 | ナデ | ヘラミガキ | 高台剥離 |
| | 63 | | 10F SK442 | 土製品 棒状土 製品 | ①残存長12.4 ②最大厚3.3 ③最大幅5.2 | 1-3mm砂粒含む | やや 不良 | 褐灰色(7.5YR6/1)-明褐灰色 (5YR7/2) | ユビオサエ・ ナデ | | | |
| 図24 | 64 | | 11E SK533 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(10.3) ②1.9+ a ③受 部径(12.8) | 精良 | 良 | 内:橙色5YR6/6・ 外:明赤褐色5YR5/6 | 回転ナデ | ナデ | |
| | 65 | | 11E SK533 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(11.4) ②2.0+ a ③受 部径(14.0) | 精良 | 良 | 内・外:灰白色2.5Y8/1 | ナデ | ナデ | |
| | 66 | | 11E SK533 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(13.4)② 2.3+ a ③受部 径(16.0) | 1mm以下白色粒子含 む | 良 | 内:にぶい灰褐色7.5YR4/2・ 外:にぶい褐色7.5YR5/3 | ナデ | ナデ | |
| | 67 | | 11E SK533 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(11.6) ②2.4+ a ③受 部径(14.4) | 精良 | 良 | 内・外:灰白色(2.5Y7/1)-灰色 (5Y6/1) | ヘラケズリ・ ナデ | ナデ | |
| | 68 | | 11E SK533 | 土師器 | 高杯 | ②6.2+ a | 精良 | 良 | 内:灰白色7.5YR8/2・ 外:浅黄橙色7.5YR8/6-8/3 | ナデ | ナデ | |
| 図26 | 69 | 197図-32 | 11E SK534 | 須恵器 | 杯蓋 | ①12.0 ②2.7 ③受部径14.8 | 精良 | 良 | 内:灰白色2.5Y8/1・ 外:灰白色2.5Y7/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 天井部外面板状圧 痕・ヘラ記号 |
| | 70 | 197図-30 | 11E SK534 | 須恵器 | 小形壺 | ②4.0 ③2.5 ④胴部最大径 6.5 | 石英わずかに含む | 良 | 内・外:灰色7.5Y6/1 | ケズリ後ナ デ | 不明 | |
| | 71 | | 11E SK534 | 須恵器 | 不明 | ②3.0 ③2.5 | 精良 | 良 | 内:灰色N5/0・ 外:灰色7.5Y4/1 | 底部ヘラケ ズリ・ナデ | ナデ | |
| | 72 | 197図-31 | 11E SK534 | 須恵器 | 壺 | ②4.9 ③3.3 | 精良 | 良 | 内:灰白色2.5Y7/1・ 外:灰色5Y6/1 | 回転ヘラケ ズリ・カキメ | ヨコナデ | |
| 図28 | 73 | | 11E SK535 | 須恵器 | 甕 | ①(23.8) ②3.4+ a | 精良 | 良 | 内・外:浅黄橙色(5YR7/8)-橙色 (7.5YR8/6) | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| 図30 | 74 | | 11E SK542 | 弥生土器 | 小形壺 | ①(11.2+ a) ②12.6 ③6.6 | 砂粒多く含む | 良 | 内:にぶい黄橙色10YR7/3・ 外:浅黄橙色10YR8/3 | 部分的にヨ コナデ残る | ユビオサ エ・詳細不 明 | |
| | 75 | 204図-28 | 11E SK542 | 土師器 | 皿 | ①10.2 ②1.2 ③8.0 | 細砂粒わずかに含 む | 良 | 内外:浅黄橙色10YR8/2 | 回転ヘラ切・ 回転ナデ | 回転ナデ | |
| | 76 | 204図-29 | 11E SK542 | 土師器 | 皿 | ①10.6 ②1.0 ③8.0 | 石英含む | 良 | 内外:にぶい黄橙色10YR7/2 | ユビオサエ・ ナデ | ナデ | |
| | 77 | | 11E SK542 | 土師器 | 皿 | ①(13.6) ②1.2 ③(11.0) | 砂粒多く含む | 良 | 内外:橙色7.5YR7/6 | 不明 | ナデ? | |
| | 78 | 204図-30 | 11E SK542 | 土師器 | 皿? | ①(14.1) ②2.2 ③8.5 | 白色砂粒含む | 良 | 内:にぶい黄橙色10YR7/2・ 外:にぶい橙色(7.5YR7/4)-灰白色 (10YR8/2) | ナデ | ユビオサ エ・ナデ | 底部外面板状圧痕 |
| | 79 | 204図-18 | 11E SK542 | 瓦器 | 壺 | ①16.2 ②5.8 ③6.3 | 精良 | 良 | 内:灰白色(N8/0)-灰色(N6/0)・ 外:灰白色(N8/0)-灰色(N6/0) | ナデ | ナデ後ミガ キ | 底部付近外面糸切 痕残る |
| | 80 | | 11E SK542 | 瓦器 | 壺 | ①(17.0) ②5.6 ③(6.7) | 精良 | 良 | 内:灰白色(5Y8/1)-灰色 (7.5Y5/1)・ 外:灰色(5Y6/1)-黒色(7.5Y2/1) | ヨコナデ後 ヨコ方向ミ ガキ | ヨコナデ後 ヨコ方向ミ ガキ | 口縁部内外面付近 炭素吸着 |
| | 81 | 204図-16 | 11E SK542 | 瓦器 | 壺 | ①(16.8) ②6.0 ③7.3 | 精良 | 良 | 内外:灰色5Y6/1-5Y5/1 | ヨコナデ後 ヨコ方向ミ ガキ | ナデ後ミガ キ | 底部外面板状圧痕 |
| | 82 | 204図-17 | 11E SK542 | 瓦器 | 壺 | ①16.8 ②5.2 ③7.5 | 精良 | 良 | 内:灰白色5Y8/1・ 外:灰白色5Y7/1 | ヨコナデ後 ヨコ方向ミ ガキ | ヨコナデ後 ヘラミガキ | 底部付近外面糸切 痕残る |

| 図 番号 | 遺物 番号 | 西報告・ 掲載図 番号等 | 出土地点・ 遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|---------|----------|--------------------|--------------|------|-----|------------------------------|-------------------|---------|---|-------------------------|------------------------|---------------------------------------|
| | 83 | | 11E SK542 | 瓦器 | 塊 | ①(16.0) ②4.9 ③7.6 | 精良 | 良 | 内外: 灰白色7.5Y8/1 | 不明 | ミガキ | |
| | 84 | 204図-21 | 11E SK542 | 瓦器 | 塊 | ①17.0 ②5.7 ③6.1 | 精良 | 良 | 内: 灰色(7.5Y5/1)-灰白色 (2.5Y7/1)・ 外: 黄灰色2.5Y6/1 | ヨコナデ | ヨコ方向ミ ガキ | 底部内面重ね焼高 台痕 |
| | 85 | 204図-22 | 11E SK542 | 瓦器 | 塊 | ①(17.1) ②5.5 ③6.5 | 精良 | 良 | 内: 黄灰色2.5Y6/1・ 外: 灰白色5Y7/1 | ヨコナデ後 ヨコ方向ミ ガキ | ユビオサ エ・ナデ後 ヘラミガキ | 底部付近外面糸切 痕残る |
| | 86 | 204図-23 | 11E SK542 | 瓦器 | 塊 | ①(17.0) ②5.5 ③6.7 | 精良 | 良 | 内: 灰白色7.5Y7/1・ 外: 灰白色5Y7/1 | 不明 | 不明 | 内面全面・外面口 縁部付近炭素吸着 |
| | 87 | | 11E SK542 | 瓦器 | 塊 | ①(17.4) ②5.5 ③6.6 | 精良 | 良 | 内外: 灰白色2.5Y8/1 | ヨコナデ後 ヨコ方向ミ ガキ | ヨコ方向ミ ガキ | 底部付近外面糸切 痕残る |
| | 88 | 204図-20 | 11E SK542 | 瓦器 | 塊 | ①(17.4) ②6.3 ③(7.2) | 精良 | 良 | 内: 黄灰色2.5Y6/1・ 外: 灰白色5Y7/1 | ヨコナデ後 ヨコ方向ミ ガキ | ヨコナデ後 ヨコ方向ミ ガキ | 底部付近外面糸切 痕残る |
| | 89 | 204図-15 | 11E SK542 | 瓦器 | 塊 | ①(17.6) ②5.8 ③(7.4) | 精良 | 良 | 内: 灰白色5Y8/1・ 外: 灰白色5Y7/1 | ヨコナデ後 ヨコ方向ミ ガキ | ヨコナデ後 ヨコ方向ミ ガキ | |
| | 90 | 204図-24 | 11E SK542 | 瓦器 | 塊 | ①17.7 ②6.0 ③7.2 | 精良 | 良 | 内: 灰黄色2.5Y7/2・ 外: 灰白色2.5Y7/1 | ヨコナデ後 ヨコ方向ミ ガキ | ヨコナデ後 ヨコ方向ミ ガキ | |
| | 91 | 204図-25 | 11E SK542 | 瓦器 | 塊 | ①(17.8) ②5.7 ③6.6 | 精良 | 良 | 内: 灰白色5Y8/1・ 外: 灰色5Y4/1 | 不明 | ミガキ | 外面全面・内面口 縁部付近炭素吸 着・底部外面板状 圧痕 |
| | 92 | 204図-32 | 11E SK542 | 青磁 | 碗 | ①(16.0) ②4.5+ α | 精良 | 良 | 内外: 灰白色5Y8/2 | 施釉 | 施釉 | |
| 図32 | 93 | 206図-1 | 11F SK544 | 瓦器 | 塊 | ①16.4 ②4.6 ③7.2 | 精良 | 良 | 内外: にぶい黄橙色10YR7/2 | ヨコ方向ミ ガキ | ヨコ方向ミ ガキ | |
| | 94 | | 11F SK544 | 瓦器 | 塊 | ①16.7 ②5.6 ③7.0 | 精良 | 良 | 内: 灰色7.5Y6/1・N4/0 外: 灰白色(7.5Y8/1)-灰色 (7.5Y6/1・N4/0) | ナデ・ミガキ | ミガキ | 外面胴部下端部糸 切り痕 |
| | 95 | 206図-2 | 11F SK544 | 瓦器 | 塊 | ①17.0 ②5.0 ③6.6 | 精良 | 良 | 内外: 黄灰色2.5Y6/1 | ヨコナデ後 ヨコ方向ミ ガキ | ヨコナデ後 ヨコ方向ミ ガキ | 底部外面付近糸切 り痕 |
| | 96 | 206図-3 | 11F SK544 | 瓦器 | 塊 | ①(16.2) ②5.1 ③6.8 | 精良 | 良 | 内外: 褐色10YR6/1 | ナデ | ナデ | |
| | 97 | 206図-4 | 11F SK544 | 瓦器 | 塊 | ①16.6 ②5.1 ③7.0 | 精良 | 良 | 内: にぶい黄橙色10YR7/2 外: にぶい黄橙色10YR7/3 | ヨコナデ | ヨコナデ後 ヨコ方向ミ ガキ? | 底部外面付近糸切 り痕 |
| | 98 | | 11F SK544 | 弥生土器 | 甕 | ②8.4+ α ③(8.2) | 1mm以下白色粒子含 む | 良 | 内: 明褐色7.5YR7/1-7/2 外: 褐色7.5YR6/6 | ハケメ・底面 ナデ | ナデ | |
| | 99 | 206図-5 | 11F SK544 | 土師器 | 器台 | ②19.3 | 精良 | 良 | 内外: 浅黄橙色7.5YR8/4 | ユビオサエ・ ナデ? | ナデ | 受部・脚部スス付 着 |
| 図34 | 100 | 206図-17 | 11F SK546 | 土師器 | 皿 | ①8.8 ②1.2 ③6.5 | 精良 | 良 | 内: 浅黄橙色10YR8/3 外: 灰白色10YR8/2 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | 底部外面板状圧痕 |
| | 101 | 206図-18 | 11F SK546 | 土師器 | 皿 | ①8.9 ②1.25 ③6.9 | 精良 | 良 | 内外: にぶい黄橙色10YR7/2 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 102 | 206図-19 | 11F SK546 | 土師器 | 皿 | ①8.9 ②1.4 ③6.8 | 精良 | 良 | 内: 浅黄橙色10YR8/3 外: にぶい黄橙色10YR7/3 | ヨコナデ | ヨコナデ | 底部外面板状圧痕 |
| | 103 | 206図-20 | 11F SK546 | 土師器 | 燈明皿 | ①(9.8) ②2.3 ③5.7 | 1mm以下の赤褐色粒 子含む | 良 | 内: にぶい橙色7.5YR7/4 外: にぶい橙色7.5YR7/3 | ヨコナデ | ナデ | 底部外面板状圧痕 |
| | 104 | | 11F SK546 | 瓦器 | 小皿 | ①10.0 ②2.1 ③3.3 | 精良 | 良 | 内: 灰色(N4/0)-灰白色(7.5Y8/1) 外: 灰色N4/0-5/0 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 内外炭素吸着 |
| | 105 | | 11F SK546 | 土師器 | 杯 | ①(15.0) ②3.3 ③(6.4) | 精良 | やや 軟 | 内・外: 灰白色5Y7/1 | ナデ | ナデ | |
| | 106 | | 11F SK546 | 土師器 | 杯 | ①(16.3) ②3.5 ③(6.8) | 精良 | 良 | 内: 灰白色5Y7/1 外: 灰白色(5Y7/1)-灰オリーブ色 (5Y6/2) | 回転ヘラ切 ナデ | ナデ | |
| | 107 | | 11F SK546 | 土師器 | 杯 | ①(16.0) ②3.8-4.5 | 精良 | 良 | 内: 灰色5Y5/1-4/1 外: 灰色5Y6/1-5/1 | ユビオサエ・ ナデ | ナデ | 胴部下放射状指 圧痕 |
| | 108 | 206図-16 | 11F SK546 | 土師器 | 皿 | ①(16.8) ②5.21 ③11.5-12 | 1mm程の砂粒が少量 混じる | 良 | 内外: 浅黄橙色10YR8/3 | ヨコナデ | ヨコナデ | 器形が大きく歪む |
| | 109 | 206図-8 | 11F SK546 | 瓦器 | 塊 | ①(15.6) ②4.8 ③(7.2) | 精良 | 良 | 内: 浅黄橙色10Y3/3 外: 灰黄色2.5Y7/2 | ヨコナデ・ヨ コ方向ミガ キ | ミガキ | 高台・板状圧痕 |
| | 110 | 206図-13 | 11F SK546 | 瓦器 | 塊 | ①(16.4) ②5.2 ③7.6 | 精良 | 良 | 内外: 灰白色2.5Y7/1 | 指押さえ・ナ デ・ヨコ方向 ミガキ | ヨコナデ後 ミガキ | 炭素吸着内面口縁 部・外面口縁部～ 底部 |
| | 111 | 206図-7 | 11F SK546 | 瓦器 | 塊 | ①16.6 ②4.7 ③6.8 | 精良 | 良 | 内: 灰色7.5Y5/1 外: 灰白色7.5Y7/1～灰色7.5Y5/1 | 器面荒れのため 不明 | 器面荒れのため 不明 | 内外面炭素吸着 |
| | 112 | 206図-10 | 11F SK546 | 瓦器 | 塊 | ①(16.7) ②4.8 ③(7.2) | 精良 | 良 | 内: 灰黄色2.5Y7/2 外: 灰白色2.5Y7/1 | 指押さえ・ナ デ・ミガキ | 指押さえ・ 板状工具によ るナデ | 炭素吸着不良・底 部外面板状圧痕 |
| | 113 | 206図-6 | 11F SK546 | 瓦器 | 塊 | ①(16.4) ②5.1 ③(7.4) | 精良 | 良 | 内外: にぶい黄橙色10YR7/2 | ヨコナデ後 ヨコ方向ミ ガキ | 指押さえ・ ナデ・ミガ キ | |
| | 114 | 206図-12 | 11F SK546 | 瓦器 | 塊 | ①16.7 ②6.2 ③6.9 | 精良 | 良 | 内: 灰色5Y5/1 外: 灰白色5Y7/1～灰色5Y5/1 | ヨコナデ・ヨ コ方向ミガ キ | ヨコ方向ミ ガキ | 炭素吸着内面全 面・外面口縁部 |
| | 115 | 206図-14 | 11F SK546 | 瓦器 | 塊 | ①(17.2) ②4.6 ③7.5 | 精良 | 良 | 内: 灰白色10YR8/2 外: にぶい黄橙色10YR7/2 | 指押さえ・ナ デ・ヨコ方向 ミガキ | ヨコナデ | |
| | 116 | 206図-9 | 11F SK546 | 瓦器 | 塊 | ①(17.2) ②5.5 ③(8.4) | 精良 | やや 軟 | 内: 灰黄色2.5Y7/2 外: 灰白色2.5Y7/1 | ナデ? 器面 荒れのため 詳細不明 | 器面荒れのため 不明 | 炭素吸着せず土師 器的・底部外面 板状圧痕 |
| | 117 | 206図-11 | 11F SK546 | 瓦器 | 塊 | ①(17.9) ②5.5 ③7.4 | 精良 | 良 | 内: 灰色5Y5/1 外: 灰白色5Y7/1 | ヨコナデ・ミ ガキ | ミガキ | 炭素吸着内面全 面・外面口縁部・底 部外面板状圧痕 |

| 図 番号 | 遺物 番号 | 西報告・ 掲載図 番号等 | 出土地点・ 遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|---------|----------|--------------------|--------------------|------|-----------|---|-------------------|----|---|------------------|----------------|-------------------------------|
| | 118 | 206図-21 | 11F SK546 | 土製品 | 棒状土 製品 | ①残存長16.8 ②最大幅5.9 ③最大厚5.1 | 砂粒多量に含む | 普 | 黄灰色(2.5Y6/1)-灰黄色(2.5Y6/2) | 指押さえ・ナ デ | | |
| | 119 | | 11F SK546 | 土製品 | 棒状土 製品 | ①残存長5.4+ a ②最大幅 5.0③最大厚 4.0 | 1-2mm砂粒含む | 良 | 灰黄色(2.5Y7/2)-浅黄色(2.5Y7/3) | ユビオサエ・ ナデ | | |
| | 120 | | 11F SK546 | 土製品 | 棒状土 製品 | ①残存長 11.0+ a ②最 大幅4.4 ③最 大厚4.0 | 1mm大砂粒少量含む | 良 | 灰白色(N7/0)-灰色(N5/0)-黒 N3/0) | ナデ | | |
| 図36 | 121 | 208図-19 | 11F SK548 | 土師器 | 小皿 | ①9.3 ②1.3 ③5.0 | 精良,雲母含む | 良 | 内・外: にぶい橙色7.5YR7/4 | 底回転ヘラ 切・ヨコナデ | ナデ | 底部外面板状圧痕 |
| | 122 | 208図-20 | 11F SK548 | 土師器 | 小皿 | ①9.5 ②1.3 ③4.0 | 精良 | 良 | 内・外: にぶい橙色7.5YR7/4 | ナデ | ヨコナデ | |
| | 123 | 208図-16 | 11F SK548 下面 | 土師器 | 小皿 | ①(9.2) ②1.1 ③(4.0) | 精良 | 良 | 内・外: にぶい黄橙色10YR7/2 | ナデ | ナデ | |
| | 124 | 208図-15 | 11F SK548 | 土師器 | 小皿 | ①(9.4) ②1.1 ③(5.5) | 精良 | 良 | 内・外: にぶい黄橙色10YR7/4 | ナデ | ナデ | |
| | 125 | 208図-17 | 11F SK548 | 土師器 | 小皿 | ①(9.0) ②1.4 ③(6.0) | 精良 | 良 | 内・外: にぶい黄橙色10YR6/3,7/3 | ナデ | ナデ | 底部外面板状圧痕 |
| | 126 | 208図-21 | 11F SK548 | 土師器 | 小皿 | ①10.1 ②1.6 ③5.8 | 精良 | 良 | 内・外: にぶい黄橙色7.5YR7/4 | ナデ | ユビオサ エ・ナデ | |
| | 127 | 208図-27 | 11F SK548 | 土師器 | 杯身 | ①(15.4) ②3.5 | 精良 | 良 | 内・外: にぶい黄橙色10YR7/4 | ナデ | ナデ | 底部外面板状圧痕 |
| | 128 | 208図-28 | 11F SK548 | 土師器 | 杯身 | ①16.3 ②3.7 | 精良 | 良 | 内: にぶい橙色7.5YR7/4・ 外: 橙色7.5YR7/6 | ナデ | ナデ | |
| | 129 | 208図-26 | 11F SK548 | 土師器 | 杯身 | ①(15.1) ②4.4 | 精良,雲母含む | 良 | 内: にぶい黄橙色(10YR7/3)-灰黄 褐色(10YR5/2)・ 外: にぶい黄橙色(10YR6/3) | ヘラ切・ナデ | ナデ | |
| | 130 | 208図-9 | 11F SK548 | 瓦器 | 椀 | ①(16.2) ②4.7 ③(7.0) | 精良 | 良 | 内・外: 灰色5Y6/1 | ナデ | ヘラミガキ | 底部外面板状圧痕 |
| | 131 | 208図-11 | 11F SK548 | 瓦器 | 椀 | ①16.7 ②4.6 ③7.2 | 精良 | 良 | 内・外: 灰黄色2.5Y7/2 | ナデ・ミガキ | ミガキ | 胴部外面下半放射 状指圧痕 |
| | 132 | 208図-10 | 11F SK548 | 瓦器 | 椀 | ①(15.2) ②4.8+ a | 精良 | 良 | 内・外: 灰色5Y5/1 | ナデ・ヘラミ ガキ | ヘラミガキ | |
| | 133 | 208図-24 | 11F SK548 | 瓦器 | 椀 | ①(15.7) ②5.1 ③(6.2) | 精良,雲母含む | 良 | 内: にぶい黄橙色10YR6/3・ 外: 浅黄色2.5Y7/3 | ナデ・ミガキ | ナデ? | 外面下半部条切り 痕・底部外面板状 圧痕 |
| | 134 | 208図-8 | 11F SK548 | 瓦器 | 椀 | ①(15.8) ②5.2 ③(7.2) | 精良 | 良 | 内・外: 灰黄色5Y7/1 | 底ナデ・胴ミ ガキ | ミガキ | |
| | 135 | 208図-4? | 11F SK548 下面 | 瓦器 | 椀 | ①(16.7) ②5.1 ③(7.0) | 精良 | 良 | 内: オリーブ黒(5Y3/1)-灰色 (5Y4/1) 外: 灰(5Y6/1)-灰白色(5Y7/1) | 底ナデ・胴ヘ ラミガキ | ヘラミガキ | |
| | 136 | 208図-5 | 11F SK548 | 瓦器 | 椀 | ①(16.6) ②5.0 ③6.9 | 精良 | 良 | 内: 褐色10YR6/1・ 外: 灰白色5Y8/1-7/1 | 丁寧なナデ | ミガキ | |
| | 137 | 208図-2? | 11F SK548 | 瓦器 | 椀 | ①(17.0) ②5.0 ③(7.3) | 精良 | 良 | 内・外: 灰白色(2.5Y7/1) | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 底部外面板状圧痕 |
| | 138 | 208図-6 | 11F SK548 | 瓦器 | 椀 | ①(16.7) ②5.3 ③6.8 | 精良 | 良 | 内・外: 灰(5Y6/1)-灰白色(5Y7/1) | 底ナデ・胴ヘ ラミガキ | ヘラミガキ | |
| | 139 | 208図-3 | 11F SK548 | 瓦器 | 椀 | ①(16.7) ②5.4 ③(7.2) | 精良 | 良 | 内: 灰黄色2.5YR7/2・ 外: 灰白色5Y7/1 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 底部外面板状圧痕, 胴部外面下半放射 状指圧痕 |
| | 140 | 208図-7 | 11F SK548 | 瓦器 | 椀 | ①(17.1) ②5.9 ③(6.8) | 精良 | 良 | 内: 褐色10YR5/1・ 外: 黄橙色(10YR7/3)-灰黄褐色 (10YR6/2) | ユビオサエ・ ナデ | ミガキ | 胴部外面下半放射 状指圧痕 |
| | 141 | 208図-1 | 11F SK548 中面・下面 | 瓦器 | 椀 | ①16.0-18.0 ②5.0-5.9③6.9 | 精良 | 良 | 内・外: 灰白色(5Y7/1)-灰色 (5Y6/1) | ナデ | ヘラミガキ | 焼け歪み |
| | 142 | | 11F SK548 | 瓦器 | 椀 | ①16+ a ②5.5 ③6.9 | 精良 | 良 | 内・外: 灰(5Y5/1,6/1)-灰白色 (5Y7/1) | 底ナデ・胴ヘ ラミガキ | ヘラミガキ | 焼け歪み |
| | 143 | | 11F SK548 | 瓦器 | 椀 | ③7.4 | 精良 | 良 | 内・外: 灰色5Y5/1,6/1 | 底ナデ・胴ヘ ラミガキ | ヘラミガキ | 底部外面板状圧痕, 焼け歪み |
| | 144 | 208図-12 | 11F SK548 | 瓦器 | 椀 | ②2.3+ a ③7.0 | 精良 | 良 | 内: 灰白色5Y7/1・ 外: 灰白色(5Y7/1)-灰色(10Y6/1) | ナデ | ナデ | |
| 図37 | 145 | 208図-29 | 11F SK548 | 土製品 | 棒状土 製品 | ①残存長16.1 ②最大幅5.3 ③最大厚3.6 | 砂粒・炭化物多く含 む | 普 | 灰白色・黄灰色2.5Y7/1-6/1,5/1 | | | |
| | 146 | 208図-30 | 11F SK548 | 土製品 | 棒状土 製品 | ①残存長20.3 ②最大幅7.0 ③最大厚4.0 | 砂粒・炭化物多く含 む | 普 | 黄灰色2.5Y6/1-5/1 | | | |
| 図39 | 147 | | 8C SE101- 上層 | 弥生土器 | 甕 | ②4.3+ a | 1-2mm大砂粒含む | 良 | 内: 橙色7.5YR7/6・ 外: にぶい橙色7.5YR6/4 | ナデ | ナデ | |
| | 148 | | 8C SE101- 上層 | 弥生土器 | 甕 | ②2.5+ a | 1mm大白色粒子・砂 粒含む | 良 | 内: 橙色5YR6/8・ 外: にぶい橙色7.5YR7/4 | ナデ | ナデ | |
| | 149 | | 8C SE101- 上層 | 弥生土器 | 高杯? | ②3.7+ a | 1mm大砂粒少量含む | 良 | 内・外: 浅黄橙色7.5YR3/8 | ナデ | ナデ | 丹塗り |
| | 150 | | 8C SE101- 上層 | 弥生土器 | 甕 | ②4.5+ a ③(7.0) | 1-2mm大砂粒含む | 良 | 内: 灰白色10YR8/2・ 外: 淡赤橙色2.5YR7/4 | ハケメ後ナ デ | ナデ | |
| | 151 | | 8C SE101- 上層 | 弥生土器 | 甕 | ②5.8+ a ③(9.7) | 1mm大長石多く含む | 良 | 内: 灰白色10YR8/2・ 外: 橙色5YR7/6 | ユビオサエ・ ナデ | ナデ | |
| | 152 | | 8C SE101- 上層 | 縄文土器 | 深鉢 | ②3.7+ a ③(9.2) | 2mm大砂粒含む | 良 | 内: 灰白色2.5YR7/1・ 外: にぶい黄橙色10YR7/2 | ケズリ後ナ デ | ユビオサ エ・ナデ | |
| 図41 | 153 | 201図-16- 17 | 8E SE301- 上層 | 土師器 | 盤 | ①(34.8) ②21+ a | 細砂粒・雲母少量含 む | 良 | 内・外: にぶい橙色7.5YR7/4 | 回転ヘラケ ズリ・ナデ | ミガキ様の 丁寧なナデ | |
| | 154 | 201図-1 | 8E SE301- 最下層 | 土師器 | 壺 | ①(13.0) ②9.1+ a ③胴 部最大径 (17.4) | 1-3mm大程の砂粒含 む | 良 | 内: にぶい褐色7.5YR5/3・ 外: にぶい褐色(7.5YR5/3)-褐色 (7.5YR5/1) | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 155 | 201図-15 | 8E SE301- 上層 | 土師器 | 高杯 | ②5.8+ a ③杯 接合部径5.5 | 0.1mm大細粒多く含 む | 良 | 内・外: 橙色7.5YR7/6 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 156 | 201図-8 | 8E SE301- 最下層 | 土師器 | 把手 | ②6.6+ a | 砂粒多く含む | 良 | 内・外: にぶい橙色7.5YR7/4 | ハケ・ユビオ サエ・ケズリ | ケズリ? | |

| 図 番号 | 遺物 番号 | 西報告・ 掲載図 番号等 | 出土地点・ 遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|---------|----------|--------------------|------------------|-----------|-------------------|---------------------------------|------------|--|---|---|--------------------------|-------------------------------|
| | 157 | 201図-7 | 8E SE301・ 最下層 | 土師器 | 甕 | ①13.0 ②14.4+ a | 1mm大砂粒多く含む | 普 | 内：浅黄橙色10YR8/3・ 外：浅黄橙色7.5YR8/4 | ナデ | 口縁部ヨコ ナデ・胸部 縦方向ケズリ | |
| | 158 | 201図-4・5 | 8E SE301・ 最下層 | 須恵器 | 杯身 | ②2.7+ a ③10.3 | | 良 | 内：灰色7.5Y6/1・ 外：灰色5Y4/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | 器面発泡する |
| | 159 | 201図-3 | 8E SE301・ 最下層 | 須恵器 | 杯身 | ②2.3+ a ③11.7 | 細砂粒多く含む | 良 | 内：灰色N6/0・ 外：灰色N5/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | 底部外面ヘラ記号 |
| | 160 | 201図-6 | 8E SE301 | 須恵器 | 小形壺 | ②10.0+ a ③胴部最大径 12.2 | 1.3mm大砂粒含む | 良 | 内：灰色7.5Y5/1・ 外：灰色7.5Y5/1-N6/0 | 胴部上半カ キメ・胴部下 半ヨコナデ・ 底部ヘラ切 後粗いナデ | ヨコナデ | |
| | 161 | 201図-2 | 8E SE301・ 最下層 | 須恵器 | 短頸壺 | ②7.1+ a ③胴 部最大径 (20.5) | 細粒含む | 良 | 内：灰白色N7/0・ 外：灰白色(N7/0)-灰色(5Y4/1) | 胴部上半ヨ コナデ・胴部 下半ヘラケ ズリ後ヨコ ナデ | ヨコナデ | |
| | 162 | 201図-11 | 8E SE301 | 須恵器 | 短頸壺 | ②13.5+ a ③9.0④胴部 最大径19.5 | 3mm大砂粒多く含む | 良 | 内：オリーブ黒色7.5Y3/1・ 外：灰色(N4/0)-灰白色(7.5Y7/1) | 胴部上半ヨ コナデ・胴部 下半回転ヘ ラケズリ | ヨコナデ | |
| | 163 | 201図-9・ 10 | 8E SE301 | 須恵器 | 短頸壺 | ②13.8+ a ③10.5④胴部 最大径20.5 | 0.1mm大細粒含む | 良 | 内：にぶい橙色7.5YR7/4・ 外：橙色5YR6/6 | ヘラケズリ 後ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 164 | 201図-12 | 8E SE301 | 須恵器 | 長頸壺 | ②13.6+ a | 細砂粒含む | 良 | 内：灰色N5/0・ 外：灰色(N4/0)-灰白色(N7/0) | シボリ・ナデ | ナデ | |
| | 165 | 201図-13 | 8E SE301 | 須恵器 | 長頸壺 | ②11.1+ a ③9.3④胴部 最大径19.2 | 白色砂粒含む | 良 | 内・外：灰白色10Y7/1 | 胴部上半ヨ コナデ・胴部 下半回転ヘ ラケズリ | ヨコナデ | |
| | 166 | 201図-14 | 8E SE301 | 須恵器 | 鉢 | ②11.9+ a ③16.2 | 精良 | 良 | 内・外：灰色N6/0 | 胴部タキ 後ヨコナデ・ 底部タキ・ ヘラケズリ 後ナデ | ヨコナデ | |
| 図43 | 167 | 212図-33 | 10F SE401 | 土師器 | 小皿 | ①(8.6)②0.9 ③(7.0) | 精良,雲母含む | 良 | 内・外：灰白色10YR8/2 | ナデ | ナデ | 底部回転系切り |
| | 168 | 212図-34 | 10F SE401 | 土師器 | 小皿 | ①(9.8)②0.8 ③(6.3) | 精良,雲母含む | 良 | 内・外：にぶい橙色7.5YR7/3 | ナデ | ナデ | 底部外面板状圧痕 |
| | 169 | 212図-35 | 10F SE401 | 土師器 | 小皿 | ①8.6②1.4 | 精良 | 良 | 内・外：灰白色5Y7/2 | ヨコナデ | ヨコナデ | 底部外面板状圧痕 |
| | 170 | 10F SE401 | 土師器 | 小皿 | ①(9.3) ②1.4+ a | 精良,雲母含む | 良 | 内・外：灰黄色2.5Y7/2 | ナデ | ナデ | | |
| | 171 | 211図-26 | 10F SE401 | 瓦器 | 小皿 | ①9.4②1.2 ③6.0 | 精良 | 良 | 内：灰色5Y5/1・ 外：灰色5Y4/1 | ヘラ切・ヘラ ミガキ後ヨ コナデ | ヨコナデ | |
| | 172 | 211図-29 | 10F SE401 | 瓦器 | 小皿 | ①10.0②2.0 | 精良 | 良 | 内：灰色N4/0・ 外：灰白色N8/0 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 内面刻線 |
| | 173 | 212図-45 | 10F SE401 | 瓦器 | 小皿 | ①(11.2)②1.5 ③(6.0) | 精良 | 良 | 内・外：灰白色5Y8/1 | ナデ | ナデ | 底部回転系切り・ 口縁部外面炭素 吸着 |
| | 174 | 211図-30 | 10F SE401 | 瓦器 | 小皿 | ①10.2②2.2 ③4.0 | 精良 | 良 | 内・外：灰色N4/0 | 口縁部・胴部 ヘラミガキ・ 底部ナデ | ヘラミガキ | |
| | 175 | 211図-28 | 10F SE401 | 瓦器 | 小皿 | ①(11.1)②1.9 ③(5.7) | 精良 | 良 | 内・外：灰白色2.5Y8/1 | ナデ | ナデ | 底部外面板状圧 痕・胴部最下部 糸切り痕 |
| | 176 | 211図-34 | 10F SE401 | 瓦器 | 小皿 | ①(11.0)②2.0 ③(4.1) | 精良 | 良 | 内：灰白色5Y7/1・ 外：灰色7.5Y4/1 | ナデ | ナデ | |
| | 177 | 211図-32 | 10F SE401 | 瓦器 | 小皿 | ①(9.5) ②2.5+ a | 精良 | 良 | 内：灰色N4/0・ 外：オリーブ黒色5Y3/2 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 外面炭素吸着 |
| | 178 | 212図-44 | 10F SE401 | 土師器 | 高台付 皿 | ①9.1②2.4 ③5.4 | 精良,雲母含む | 良 | 内・外：灰黄色2.5Y7/2 | ナデ | ナデ | |
| | 179 | 212図-5 | 10F SE401 | 土師器 | 高台付 皿 | ①(10.3)②2.1 ③(6.5) | 精良,雲母含む | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/3 | ナデ | ナデ | |
| | 180 | 212図-29 | 10F SE401 | 土師器 | 杯身 | ①14.9②3.6 ③6.5 | 精良 | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/2 | ナデ | ナデ | 底部外面板状圧 痕・内面工具痕? |
| | 181 | 212図-20 | 10F SE401 | 土師器 | 杯身 | ①(15.4)②3.0 ③(6.0) | 精良 | 良 | 内：にぶい橙色7.5YR7/4・ 外：にぶい黄橙色10YR7/4 | 回転ナデ | 丁寧なナデ | 底部外面回転系切 り痕 |
| | 182 | 10F SE401 | 土師器 | 杯身 | ①(15.0)②3.0 | 0.5mm以下砂粒・雲 母含む | 良 | 内・外：浅黄橙色10YR8/3 | ナデ | ミガキ | 胴部中に粘土接 合痕 | |
| | 183 | 212図-26 | 10F SE401 | 土師器 | 杯身 | ①(15.7)②3.0 ③(6.1) | 精良 | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/4 | ナデ | ナデ | 胴部中に段 |
| | 184 | 212図-25 | 10F SE401 | 土師器 | 杯身 | ①(17.3)②3.4 ③(7.4) | 精良 | 良 | 内・外：灰白色10YR8/2 | ナデ | ナデ | 胴部外面下半部放 射状指圧痕 |
| | 185 | 212図-6 | 10F SE401 | 黒色土器 A | 椀 | ②3.9+ a ③(8.5) | 精良 | 良 | 内：オリーブ黒色7.5Y3/1・ 外：灰白色2.5Y7/1 | 不明 | ミガキ | |
| | 186 | 211図-1 | 10F SE401 | 瓦器 | 椀 | ①(16.1)②5.2 ③6.2 | 精良 | 良 | 内：にぶい黄橙色10YR7/2・ 外：灰白色7.5YR8/1 | ヘラミガキ・ ナデ | ミガキ | |
| | 187 | 211図-16 | 10F SE401 | 瓦器 | 椀 | ①17.6②5.5 ③6.0 | 精良 | 良 | 内：暗灰色N3/0・ 外：灰白色N7/0 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 口縁部外面炭素吸 着 |
| | 188 | 211図-15 | 10F SE401 | 瓦器 | 椀 | ①(17.1)②5.2 ③7.2 | 精良 | 良 | 内：暗青灰色5PB4/1・ 外：灰白色5Y7/1 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 内面・外面上半部 炭素吸着・底部外 面板状圧痕 |
| | 189 | 211図-7 | 10F SE401 | 瓦器 | 椀 | ①17.4②5.4 ③6.0 | 精良 | 良 | 内：灰色(N4/0)-暗オリーブ色 (2.5GY4/1)・ 外：灰色7.5Y7/1-8/1 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 内面・外面口縁部 炭素吸着 |
| | 190 | 211図-5 | 10F SE401 | 瓦器 | 椀 | ①16.6②5.3 ③8.0 | 精良 | 良 | 内：灰白色5Y8/1・ 外：灰色(7.5Y6/1)-黒色(7.5Y2/1) | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 底部内面に重ね焼 きの痕跡 |
| | 191 | 10F SE401 | 瓦器 | 椀 | ①16.6②6.6 ③5.2 | 精良 | 良 | 内：灰白色7.5Y7/1・ 外：灰白色(7.5Y7/1)-黒色(N2/0) | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 底部外面板状圧痕 | |

| 図 番号 | 遺物 番号 | 西報告・ 掲載図 番号等 | 出土地点・ 遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|---------|----------|--------------------|--------------|------|-------|--------------------------------|-----------|------|---|------------------------|--------|---|
| | 192 | | 10F SE401 | 瓦器 | 椀 | ①(16.9)②4.2 ③(7.6) | 精良 | 良 | 内:暗灰色(N3/0)-黒色(N2/0)・ 外:灰色(7.5Y5/1)-暗灰色(N3/0) | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 胴部外面下半部放射状指圧痕 |
| | 193 | | 10F SE401 | 瓦器 | 椀 | ①(16.0)②4.8 ③(7.8) | 精良 | 良 | 内:灰白色(7.5Y7/1)-灰オリーブ 色(7.5Y4/1)・ 外:灰オリーブ色(7.5Y4/1)-灰白 色(7.5Y7/1) | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 外面上半部炭素吸着 |
| | 194 | | 10F SE401 | 瓦器 | 椀 | ①(16.1)②4.8 ③(7.6) | 精良 | 良 | 内:黒(N2/0)・ 外:黒(N2/0)-暗灰色(N3/0)・灰 色(5Y6/1) | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 外面炭素吸着 |
| | 195 | | 10F SE401 | 瓦器 | 椀 | ①(16.8)②5.0 ③8.0 | 精良 | 良 | 内:灰色7.5Y5/1・4/1・ 外:灰白色(N8/0)-灰色(N4/0) | 胴部上半ヘ ラミガキ・下 半ナデ | ヘラミガキ | 口縁部外面・内面炭素吸着 |
| | 196 | | 10F SE401 | 瓦器 | 椀 | ①(17.4)②6.0 ③7.6 | 精良 | 良 | 内:灰色N5/0・ 外:黄灰色2.5Y6/1・4/1 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 高台上部糸切り 痕・内面炭素吸着 |
| 図44 | 197 | 211図-19 | 10F SE401 | 瓦器 | 椀 | ①16.3②5.8 ③7.5 | 精良 | 良 | 内:暗灰色N3/0・ 外:灰色5Y6/1 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 焼け歪みにより器 形ゆがむ |
| | 198 | 211図-6 | 10F SE401 | 瓦器 | 椀 | ①16.6②5.4 ③6.5 | 精良 | 良 | 内:灰白色10YR7/1・ 外:にぶい黄褐色10YR7/2 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 胴部外面下半部放射状指圧痕 |
| | 199 | 212図-4 | 10F SE401 | 土師器 | 椀 | ①(15.2)②5.6 ③6.7 | 精良 | 良 | 内・外:にぶい黄褐色10YR7/2 | 不明 | ナデ | |
| | 200 | | 10F SE401 | 瓦器 | 椀 | ①14.6②6.4 ③6.4 | 精良 | 良 | 内:暗灰色(N3/0)-黒(N2/0)・ 外:灰色(N5/0)-黒(N2/0) | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 焼け歪み・内外面炭素吸着 |
| | 201 | 211図-10 | 10F SE401 | 瓦器 | 椀 | ①(15.2)②5.1 ③(6.8) | 精良・雲母含む | 良 | 内・外:にぶい橙色2.5YR6/4 | ナデ | ヘラミガキ | |
| | 202 | 211図-13 | 10F SE401 | 瓦器 | 椀 | ①(16.2)②5.4 ③6.4 | 精良 | 良 | 内:灰白色N8/0・ 外:灰色N4/0 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 底部外面板状圧痕・外面炭素吸着 |
| | 203 | | 10F SE401 | 瓦器 | 椀 | ①(17.1)②5.8 ③6.8 | 精良 | 良 | 内:灰白色(5Y8/1・7/1)-灰オリーブ 色(5Y6/2)・ 外:灰白色5Y7/1 | ナデ | ヘラミガキ | 高台周辺部外面糸 切り痕 |
| | 204 | 211図-8 | 10F SE401 | 瓦器 | 椀 | ①(17.8)②6.1 ③(7.4) | 精良 | 良 | 内・外:暗灰色N3/0 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 胴部下半部糸切り 痕・内面ヘラ痕跡・ 高台板状圧痕 |
| | 205 | 212図-50 | 10F SE401 | 白磁 | 椀 | ①(17.5) ②1.7+ a | 精緻 | 良 | 内・外:灰白色10Y8/1 | | | |
| | 206 | 212図-51 | 10F SE401 | 白磁 | 椀 | ②3.1+ a | 精緻 | 良 | 内・外:黄褐色2.5Y7/2 | | | |
| | 207 | 212図-52 | 10F SE401 | 白磁 | 椀 | ②5.0+ a | 精緻 | 良 | 内・外:灰白色5Y7/1 | | | |
| | 208 | 212図-53 | 10F SE401 | 白磁 | 椀 | ②3.0+ a | 精緻 | 良 | 内:灰白色2.5Y8/1・ 外:灰白色5Y7/2 | | | |
| | 209 | 212図-1 | 10F SE401 | 土師器 | 甕 | ②4.0+ a ③(13.2) | 砂粒多く含む | 良 | 内:灰黄褐色10YR5/2・ 外:にぶい黄褐色10YR7/2 | ケズリ後ナ デ | ナデ | |
| | 210 | | 10F SE401 | 土師器 | 脚部 | ②残存高7.0 | 1-2mm砂粒含む | やや軟 | にぶい黄褐色10YR7/2 | ヘラによる ケズリ・ナデ | | |
| | 211 | | 10F SE401 | 土師器 | 器台 | ②残存高8.5+ a | 精良 | やや軟 | 内:灰黄褐色-灰白色(10YR5/2- 8/2)・ 外:浅黄褐色7.5YR8/4 | ユビオサエ・ ナデ | | 受部表面二次被熱 |
| | 212 | | 10F SE401 | 土製品 | 大形支脚 | ②残存高8.3 ③脚部径 (17.4) | 1-5mm砂粒含む | やや不良 | 内:灰白色10YR8/2・ 外:にぶい橙色7.5YR7/3 | ユビオサエ・ ナデ | | |
| | 213 | | 10F SE401 | 土製品? | 分楯柱? | ②残存高6.1 ③最大幅10.4 | | 二次被熱 | 内:褐色10YR4/1・ 外:明赤褐色5YR5/8 | | | |
| | 214 | | 10F SE401 | 土製品 | 棒状土製品 | ①残存長6.3 ②最大幅3.3 ③最大厚2.9 | 1mm砂粒含む | 良 | 灰白色10YR8/2 | ユビオサエ・ ナデ | | 表面スス付着 |
| | 215 | | 10F SE401 | 土製品 | 棒状土製品 | ①残存長7.8 ②最大幅3.9 ③最大厚3.4 | 2-3mm砂粒含む | やや不良 | 暗灰色N3/0 | ユビオサエ・ ナデ | | 表面スス付着 |
| 図45 | 216 | | 10F SE401 | 土製品 | 棒状土製品 | ①残存長6.5 ②最大幅5.6 ③最大厚4.2 | 2-5mm砂粒含む | 良 | 灰色(10Y4/1)-暗灰色(N3/0) | ユビオサエ・ ナデ | | 表面に粘土継ぎ目・表面スス付着 |
| | 217 | | 10F SE401 | 土製品 | 棒状土製品 | ①残存長9.0 ②最大幅4.6 ③最大厚4.3 | 1-3mm砂粒含む | 良 | 灰白色10YR7/1,8/1 | ユビオサエ・ ナデ | | 表面に粘土継ぎ目・円弧状圧痕 |
| | 218 | | 10F SE401 | 土製品 | 棒状土製品 | ①残存長14.8 ②最大幅5.4 ③最大厚4.8 | 2-3mm砂粒含む | 良 | にぶい黄橙(10YR7/2)-褐灰色 (10YR5/1) | ユビオサエ・ ナデ | | 表面スス付着 |
| | 219 | | 10F SE401 | 土製品 | 棒状土製品 | ①残存長12.4 ②最大幅5.4 ③最大厚5.2 | 1-5mm砂粒含む | やや不良 | にぶい黄橙10YR7/2 | ユビオサエ・ ナデ | | 表面に粘土継ぎ目・表面と端部破 損面スス付着 |
| | 220 | | 10F SE401 | 土製品 | 棒状土製品 | ①残存長19.6 ②最大幅5.5 ③最大厚4.6 | 2-5mm砂粒含む | やや不良 | 灰白色5Y8/1 | ユビオサエ・ ナデ | | 表面に粘土継ぎ目・円弧状圧痕 |
| | 221 | | 10F SE401 | 土製品 | 棒状土製品 | ①残存長11.9 ②最大幅5.0 ③最大厚4.3 | 1-2mm砂粒含む | やや不良 | 灰白色10YR7/1 | ユビオサエ・ ナデ | | ヘラ状工具痕・表 面スス付着 |
| 図46 | 222 | | 10F SE401 | 土製品 | 棒状土製品 | ①残存長11.0 ②最大幅6.0 ③最大厚3.1 | 1-2mm砂粒含む | 良 | 灰白色7.5Y8/1-7/1 | ユビオサエ・ ナデ | | 表面に粘土継ぎ目 |
| | 223 | | 10F SE401 | 土製品 | 棒状土製品 | ①残存長14.1 ②最大幅6.0 ③最大厚4.1 | 2-3mm砂粒含む | やや不良 | 灰黄色2.5Y7/2 | ユビオサエ・ ナデ | | 工具痕・表面スス 付着 |
| | 224 | | 10F SE401 | 土製品 | 棒状土製品 | ①残存長15.8 ②最大幅6.8 ③最大厚5.0 | 1-2mm砂粒含む | 良 | 褐灰色(7.5Y6/1)-灰色(N4/0) | ユビオサエ・ ヘラ状工具 でナデ | | 表面に粘土継ぎ目・ヘラ状工具 によるキズ・表面と 破断面にスス付着 |
| | 225 | | 10F SE401 | 土製品 | 棒状土製品 | ①残存長15.2 ②最大幅5.3 ③最大厚3.6 | 2-5mm砂粒含む | やや不良 | 灰白色7.5Y7/1 | ユビオサエ・ ナデ | | [X]字形の刻み・ 表面に粘土継ぎ目 |
| | 226 | | 10F SE401 | 土製品 | 棒状土製品 | ①残存長7.8 ②最大幅6.4 ③最大厚4.1 | 1-5mm砂粒含む | 良 | 灰褐色5YR6/2 | ユビオサエ・ ナデ | | 表面に粘土継ぎ目 |
| | 227 | | 10F SE401 | 土製品 | 棒状土製品 | ①残存長8.3 ②最大幅6.5 ③最大厚4.0 | 1-5mm砂粒含む | やや不良 | 灰白色-灰色5Y7/2-7/1 | ナデ | | 表面スス付着 |

| 図番号 | 遺物番号 | 西報告・掲載図番号等 | 出土地点・遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|-----|------|-----------------|------------------|------|-----------------------|-------------------------------|-----------------|---|--------------------------------------|-------------------|------------|----------------------|
| 図48 | 228 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 杯蓋 | ②2.2+ a | 精良 | 良 | 内・外：灰色N5/0 | ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 229 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(17.6)②1.7 ③つまみ径1.8 | 白色細粒含む | 良 | 内・外：灰色N6/0 | 回転ヘラ切・ナデ | ナデ | |
| | 230 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(17.0)②1.8 ③つまみ径1.9 | 1-3mm砂粒含む | 良 | 内：灰色N6/1・ 外：灰色N6/1 | ヘラ切・ナデ | ナデ | |
| | 231 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 杯B身 | ②2.4+ a ③(6.4) | 1mm以下砂粒含む | 良 | 内・外：灰色7.5Y6/1 | 底ヘラケズリ・胴ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 232 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 杯B身 | ②2.3+ a | 0.5mm以下の砂粒 | 良 | 内・外：灰色N5/0 | 底ヘラケズリ・胴ヨコナデ | ヨコナデ | 焼け歪み |
| | 233 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 杯B身 | ②2.7+ a | 1mm砂粒含む | 良 | 内・外：灰色N5/0 | ナデ | ナデ | |
| | 234 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 杯B身 | ②2.1+ a ③(9.2) | 精良1mm大白色粒子含む | 良 | 内：灰白色7.5Y7/1・ 外：灰色10Y6/1 | 底回転ヘラ切・胴ナデ | ナデ | |
| | 235 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 杯B身 | ①13.0②3.6 ③7.8 | 1-3mm大白色砂粒含む | 良 | 内・外：青灰色5PB4/1 | 底ヘラ切・胴ヨコナデ | ナデ | 底部外面ハケ目状工具痕 |
| | 236 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 杯B身 | ①13.2②4.1 ③7.2 | 1mm大黒色・白色粒含む | 良 | 内：青灰色5PB6/1・ 外：灰色N5/0 | ナデ | ナデ | 焼け歪み、焼け膨れ |
| | 237 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 杯B身 | ①(12.0)②3.4 ③(6.8) | 1mm大砂粒含む | 良 | 内：灰色7.5Y7/1・ 外：灰色10Y6/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 238 | | 10G SE402 | 須恵器 | 杯B身 | ①(13.2)②4.0 ③7.4 | 微細白色粒含む | 良 | 内：灰色N6/0・ 外：灰色N6/0・4/0 | 底ヘラ切・胴ヨコナデ | ナデ | |
| | 239 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 杯B身 | ②1.8+ a | 精良 | やや軟 | 内・外：浅黄橙色10YR8/3 | 底ヘラケズリ・胴ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 240 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 杯B身 | ②1.3+ a | 木炭粉含む | 良 | 内：灰色7.5Y6/1・ 外：灰色N5/0 | ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | 焼け歪み |
| | 241 | | 10G SE402 | 須恵器 | 杯A身 | ①(13.4)②3.5 ③8.5 | 1-2mm大砂粒含む | 良 | 内・外：青灰色5B6/1 | 底回転ヘラ切・胴ナデ | ナデ | |
| | 242 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 杯A身 | ①(12.6) ②3.5+ a ③(7.8) | 0.5mm以下2mm以上の砂粒 | 良 | 内・外：灰色7.5Y6/1 | 底ヘラ切・胴ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 243 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 杯身 | ①(13.8) ②5.1+ a | 2mm大の砂粒多く含む | 良 | 内・外：灰色7.5Y5/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 244 | | 10G SE402 | 須恵器 | 杯A身 | ②2.7+ a ③(8.2) | 精良 | 軟 | 内：灰白色2.5Y8/2・ 外：灰黄色2.5Y7/2 | 不明 | 不明 | |
| | 245 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 皿 | ②2.0+ a | 砂粒多く含む | 良 | 内・外：灰色N5/0 | 底ヘラケズリ・胴ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 246 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 皿 | ①(13.0) ②1.8+ a ③(10.0) | 0.5mmの砂粒わずかに含む | 良 | 内・外：灰色N4/0 | 底ヘラケズリ・胴ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 247 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 盤 | ①(14.4)②1.6 ③(11.0) | 1mm大砂粒わずかに含む | 良 | 内：灰色7.5Y6/1・ 外：灰色(N6/0)・灰白色(N7/0) | ナデ | ナデ | |
| | 248 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 盤 | ①(19.0)②1.9 | 0.5mm砂粒含む | 良 | 内・外：灰色N6/0 | 底ヘラケズリ・胴ヨコナデ | ヨコナデ | 底部外面に糸切り痕様の調整痕 |
| | 249 | | 10G SE402 下層 | 須恵器 | 盤? | ①(17.2)②3.2 | 微細黒色・白色粒含む | 良 | 内・外：青灰色5B6/1 | 底ケズリ・ナデ・胴ナデ | ナデ | 胴部に糸切り痕様の痕跡 |
| | 250 | | 10G SE402 | 須恵器 | 盤 | ①19.6②2.8 ③15.3 | 1-3mm大白色砂粒含む | 良 | 内・外：灰白色7.5Y7/1 | ナデ | ナデ | 底部外面板状圧痕、焼け歪みによる器面亀裂 |
| | 251 | | 10G SE402 | 須恵器 | 鉢 | ②10.5 | 1-5mm石英粒含む | 普 | 内：灰色10Y5/1・ 外：灰色5Y6/1 | 回転ヘラケズリ→タタキ・ヨコナデ | ヘラケズリ・ヨコナデ | |
| | 252 | | 10G SE402 下層 | 土師器? | 杯蓋 | ②2.4+ a | 精良 | 良 | 内：浅黄褐色2.5Y7/3・ 外：灰色5Y5/1 | 不明 | 不明 | 器面内外炭素付着 |
| | 253 | | 10G SE402 下層 | 土師器 | 杯身 | ②2.9+ a | 0.5mm以下砂粒、雲母含む | 良 | 内・外：橙色7.5YR7/6 | 底回転ヘラ削り・胴ヘラミガキ | ヨコナデ・ミガキ | |
| | 254 | | 10G SE402 下層 | 土師器 | 杯身 | ①17.7②6.0 ③(9.4) | 精良、雲母少量含む | 良 | 内：にぶい黄褐色10YR7/2・ 外：淡赤褐色2.5YR7/4 | 底回転ヘラ切・胴ナデ | ヨコナデ | |
| | 255 | | 10G SE402 下層 | 土師器 | 杯身 | ②4.7+ a | 0.5mm以下の砂粒 | 良 | 内・外：橙色7.5YR6/8 | ヨコナデ | ヨコナデ | 高台底面に板状圧痕 |
| | 256 | | 10G SE402 下層 | 土師器 | 盤 | ①(20.0) ②1.7+ a ③(16.3) | 雲母含む | 良 | 内：浅黄褐色7.5YR8/4・ 外：浅黄褐色10YR8/3 | ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | |
| 257 | | 10G SE402 下層 | 土師器 | 杯身 | ①(17.2) ②2.8+ a | 雲母含む | 良 | 内：にぶい橙色7.5YR7/4・外：橙色(5YR6/6)～明黄褐色(5YR5/6) | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | | |
| 258 | | 10G SE402 下層 | 土師器 | 杯身 | ①14.6 ②2.9+ a | 0.5mm細粒わずかに含む | 良 | 内・外：にぶい橙色7.5YR7/3 | 底回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | | |
| 259 | | 10G SE402 | 黒色土器A類 | 杯身 | ①(16.1)②3.1 ③(8.0) | 1mm大砂粒含む | 良 | 内：黒色7.5YR2/1・ 外：にぶい黄褐色10YR7/4 | 底回転ヘラ切・胴ナデ | ヘラミガキ | 内面炭素吸着 | |
| 図49 | 260 | | 10G SE403 | 土師器 | 杯身 | ①13.5②3.5 ③7.8 | 細砂粒・雲母含む | 良 | 内：浅黄褐色7.5YR8/4・ 外：にぶい橙色7.5YR7/4 | ヨコナデ | ヨコナデ | 底部外面板状圧痕 |
| | 261 | | 10G SE403 | 須恵器 | 水瓶 | ②22.4③10.4 ④胴部最大径16.1 | 精良 | 良 | 内・外：にぶい赤褐色5YR5/4 | タタキ後ナデ・底部ヘラケズリ | ヨコナデ | SD408出土片と接合 |
| 図51 | 262 | 352図-18 | 11G SE502・ 下層 | 土師器 | 杯身 | ①15.0②3.7 | 雲母少量含む、精良 | 良 | 内・外：にぶい橙色7.5YR7/4 | 回転ヘラケズリ後ヨコナデ | ヨコナデ | 内面工具痕残る |
| | 263 | 352図-19 | 11G SE502・ 下層 | 瓦器 | 椀 | ①17.6(16.2-18.0)②4.8 ③6.6 | 精良 | 良 | 内・外：黄灰色2.5Y5/1 | 口縁部・胴部横方向ミガキ・底部ナデ | ミガキ | 焼け歪み顕著 |
| | 264 | | 11G SE502・ 上層 | 瓦器 | 椀 | ②4.0+ a | 精良 | 良 | 内：灰色7.5Y5/1・ 外：灰白色5Y7/1 | ヨコナデ | ミガキ | |

| 図 番号 | 遺物 番号 | 西報告・ 掲載図 番号等 | 出土地点・ 遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|---------|----------|--------------------|-------------------------|-----------|-----|--|------------------|---------|---|---|------------------------|-----------------|
| | 265 | 352図-20 | 11G SE502・ 中層 | 石製品 | 石鍋 | ②5.3+ a ③ 21.5 | | | | ノミによる ケズリ | ノミによる ケズリ | 滑石裂 |
| 図53 | 266 | 163図-5 | SD101 | 須恵器 | 杯蓋 | ②2.8+ a ③つ まみ径(2.7) | 1mm大砂粒含む | 良 | 内・外：灰色10Y5/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | |
| | 267 | 162図-16 | SD101 | 須恵器 | 杯蓋 | ②1.3+ a | 細砂粒少量含む | 良 | 内・外：灰色7.5Y5/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 268 | 162図-17 | SD101 | 須恵器 | 杯A身 | ①(13.0)②3.0 | 細砂粒わずかに含 む | 良 | 内・外：灰色N5/0 | ヨコナデ・ナ デ | ナデ | |
| | 269 | 162図-12 | SD101 | 須恵器 | 杯B身 | ②2.6+ a ③(10.3) | 石英・長石含む | やや 軟 | 内・外：淡橙色5YR8/4 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 270 | 163図-8 | SD101 | 須恵器 | 杯B身 | ②2.6+ a ③(8.5) | 石英・長石含む | 良 | 内・外：浅黄橙色10YR8/4 | ヨコナデ | 不明 | |
| | 271 | 162図-13 | SD101 | 須恵器 | 杯B身 | ②3.1③9.2 | 細砂粒多く含む | やや 軟 | 内：灰黄色2.5Y7/2・ 外：灰オリーブ色5Y6/2 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 272 | 163図-7 | SD101 | 須恵器 | 杯B身 | ②2.7+ a ③(8.6) | 精良 | 良 | 内：灰色N6/0・ 外：灰白色N7/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 273 | 162図-15 | SD101 | 須恵器 | 杯B身 | ②2.5+ a ③(9.2) | 細粒含む | 良 | 内・外：オリーブ灰色10Y5/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 274 | 162図-11 | SD101 | 須恵器 | 杯B身 | ②3.9+ a ③(9.1) | 細粒含む | やや 軟 | 内：灰白色5Y7/2・ 外：灰色10Y6/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 275 | 162図-14 | SD101 | 須恵器 | 杯B身 | ①(18.0)②5.6 ③(11.6) | 細砂粒含む | 良 | 内・外：灰色5Y6/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 276 | 162図-19 | SD101 | 須恵器 | 高杯 | ②4.1+ a ③脚 部径(10.5) | 砂粒含む | 良 | 内・外：灰色N5/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 277 | 162図-22 | SD101 | 須恵器 | 横瓶 | ①7.1②15.8 ③7.0④胴部 最大径(18.0) | 精良 | やや 軟 | 内・外：灰白色10YR7/1 | 口縁部・頸部 回転ナデ・胴 部上半カキ メ後ナデ・胴 部下半ナデ・ 底部ケズリ・ ナデ | 回転ナデ | |
| | 278 | 162図-10 | SD101 | 須恵器 | 甕 | ①(21.0) ②3.5+ a | 砂粒わずかに含む | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 279 | 162図-21 | SD101 | 須恵器 | 甕 | ①(23.0) ②3.3+ a | 細粒含む | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR6/4 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 280 | 163図-4 | SD101 | 土師器 | 把手 | ②4.1+ a | 1mm大砂粒含む | 良 | 外：浅黄橙色7.5YR8/3 | ユビオサエ | | |
| | 281 | 162図-24 | SD101 | 黒色土器 A | 椀 | ②2.3+ a ③(7.1) | 精良 | 良 | 内：灰色5Y5/1・ 外：灰白色5Y7/2 | ナデ | ミガキ | |
| | 282 | 163図-9 | SD101 | 黒色土器 A | 椀 | ②2.6+ a ③(7.2) | 精良 | 良 | 内：灰白色2.5Y8/2・ 外：灰色5Y4/1 | 不明 | ミガキ | |
| | 283 | 162図-25 | SD101 | 白磁 | 椀 | ①(16.0) ②4.4+ a ③9.0 | 精緻 | 良 | 内外：施釉 | | | |
| | 284 | 163図-6 | SD101 | 青磁 | 椀 | ②2.4+ a ③9.0 | 精緻 | 良 | 内：施釉 | ヘラケズリ | | |
| 図54 | 285 | | エリア I 官 道側溝 SD101 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長 15.5+ a ②残 存幅19.6+ a ③最大厚2.2 ④重量810 | 1-2mm大砂粒含む | 良 | 凹面：灰色N5/0 凸面：灰白色・灰色5Y7/1-6/1 | 凹面：すり消 し | 凸面：格子 目叩き・すり 消し？ | 円筒桶・狭端面糸 切り痕 |
| | 286 | | エリア I 官 道側溝 SD101 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長 10.2+ a ②残 存幅10.9+ a ③最大厚2.2 ④重量220 | 1mm以下白色粒子含 む | やや 軟 | 凹面：灰白色2.5Y8/1-8/ 凸面：灰白色2.5Y8/1 | 凹面：布目圧 痕・すり消し | 凸面：格子 目叩き | 円筒桶 |
| | 287 | | エリア I 官 道側溝 SD101 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長 15.2+ a ②残 存幅10.8+ a ③最大厚1.6 ④重量451 | 2mm大砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色5Y7/1 凸面：灰白色・灰色5Y8/1-7/1 | 凹面：布目圧 痕 | 凸面：格子 目叩き | 側面分割面 |
| | 288 | | エリア I 官 道側溝 SD101 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長 12.2+ a ②残 存幅8.2+ a ③最大厚2.4 ④重量260 | 2-3mm大砂粒含む | 良 | 凹面：にぶい黄橙色10YR7/2-6/3 凸面：灰白色2.5Y8/2-8/1-7/1 | 凹面：布目圧 痕 | 凸面：格子 目叩き | 側面分割面 |
| 図56 | 289 | 153図-4 | 8C SD108 | 土師器 | 小形甕 | ①(14.0) ②3.7+ a | 細砂粒含む | やや 軟 | 内・外：灰黄褐色10YR6/2 | ユビオサエ・ ヨコナデ | ユビオサ エ・頸部ヘ ラケズリ | |
| | 290 | 153図-3 | 8C SD108 | 土師器 | 小形甕 | ①(15.7) ②5.5+ a | 1-3mm大砂粒多く含 む | 良 | 内・外：橙色5YR6/8 | 不明 | ヘラケズリ | |
| | 291 | 153図-5 | 8C SD108 | 土師器 | 小形甕 | ①(13.2) ②5.7+ a ③(12.2) | 砂粒多く含む | 良 | 内：にぶい黄橙色10YR7/3・ 外：褐灰色10YR4/1 | ハケメ | ハケメ | |
| | 292 | 153図-8 | 8C SD108 | 土師器 | 甕 | ①(19.6) ②7.0+ a ③(18.4) | 砂粒多く含む | 良 | 内：にぶい橙色7.5YR7/4・ 外：にぶい黄橙色10YR6/4 | 不明 | ヘラケズリ | |
| | 293 | 153図-9 | 8C SD108 | 土師器 | 甕 | ①(24.0) ②5.9+ a | 砂粒少量含む | 良 | 内：橙色5YR7/6・ 外：浅黄褐色7.5YR8/4 | 口縁部ヨコ ナデ・胴部ハ ケメ | 口縁部ナ デ・胴部ケ ズリ | |
| | 294 | 153図-11 | 8C SD108 | 土師器 | 甕 | ①(13.7) ②9.6+ a | 石英含む | 良 | 内・外：明赤褐色5YR5/8 | 口縁部ナデ・ 胴部ハケメ | 口縁部ナ デ・胴部ケ ズリ | |
| | 295 | 154図-1 | 8C SD108 | 土師器 | 甕 | ①(24.7) ②29.5 ③(17.7) | 砂粒多く含む | 良 | 内・外：にぶい赤褐色5YR5/4 | ハケメ | ヘラケズリ | |
| 図57 | 296 | 151図-23 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(10.4)②4.0 | 精良 | 良 | 内・外：黄灰色2.5Y6/1 | 回転ヘラケ ズリ・ナデ | 回転ナデ | |
| | 297 | 151図-3 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯蓋 | ①10.2②3.7 | 砂粒多く含む | 良 | 内・外：灰白色2.5Y7/1 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | 天井部外面ヘラ記 号 |
| | 298 | 151図-2 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯蓋 | ①9.9②3.2 | 砂粒少量含む | 良 | 内・外：にぶい黄色2.5Y6/3 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | 天井部外面ヘラ記 号 |
| | 299 | 151図-19 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯身 | ②(3.0) | 精良 | 良 | 内・外：灰色N5/0 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | 焼け歪み |

| 図 番号 | 遺物 番号 | 西報告・ 掲載図 番号等 | 出土地点・ 遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|---------|----------|--------------------|--------------|-----|-----|--|---------------|---------|--|---|-------------------------------|----------------------------|
| | 300 | 145図-14 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯身 | ①(8.5)②3.1 ③受部径 (10.3) | 石英含む | 良 | 内: 灰色7.5Y5/1-4・ 外: 灰色N5/0 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 301 | 151図-20 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯身 | ①(4.4)②3.0 ③受部径 (10.6) | 細粒わずかに含む | 良 | 内: 灰白色5Y8/1・ 外: 灰黄色2.5Y7/2 | ヨコナデ | ヨコナデ | 底部外面ヘラ記号 |
| | 302 | 145図-17 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯身 | ①(8.8)②2.4 ③受部径 (10.4) | 砂粒少量含む | 良 | 内: にぶい褐色7.5YR5/4・ 外: 灰色10Y5/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 303 | 145図-11 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯蓋 | ②1.8③受部 径9.5-10.1 | 砂粒少量含む | 良 | 内・外: 灰色N5/0 | ヘラ切・ヨコ ナデ | ヨコナデ | 天井部外面ヘラ記 号 |
| | 304 | 151図-10 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯蓋 | ①8.3②1.8 ③受部径 (10.0) | 砂粒含む | 良 | 内・外: 灰色N6/0 | ヘラ切・ヘラ ケズリ・ヨコ ナデ | ヨコナデ | |
| | 305 | 145図-2 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(8.0) ②(2.1)③受 部径(10.0) | 細粒含む | 良 | 内・外: 灰白色5Y7/1 | 不明 | ヨコナデ | |
| | 306 | 145図-9 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(8.2)②2.2 ③受部径 (10.4) | 細粒少量含む | 良 | 内・外: 暗赤灰色5R4/1 | ヘラ切・ヨコ ナデ | ヨコナデ | 天井部外面ヘラ記 号 |
| | 307 | 151図-12 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(8.0)②2.8 ③受部径 (10.4) | 砂粒多く含む | 良 | 内: 灰色N6/0・ 外: 灰色7.5Y5/1 | ヘラ切・ヨコ ナデ | ヨコナデ | |
| | 308 | 151図-5 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(8.0) ②(2.6)③受 部径(10.4) | 砂粒少量含む | 良 | 内・外: 橙色5YR6/6 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 309 | 145図-10 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯蓋 | ①7.4②2.9 ③受部径9.4 | 砂粒少量含む | 良 | 内・外: 灰色N5/0 | ヘラ切・ヨコ ナデ | 不明 | 天井部外面ヘラ記 号 |
| | 310 | 145図-6 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(8.2)②2.6 ③受部径 (10.0) | 砂粒多く含む | 良 | 内・外: 灰色7.5Y5/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 311 | 145図-7 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(8.0)②2.5 ③受部径 (9.8) | 砂粒少量含む | 良 | 内・外: 灰色N5/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | 天井部外面圧痕と ヘラ記号 |
| | 312 | 151図-24 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯身 | ①(10.0)②3.0 | 細粒少量含む | 良 | 内・外: 橙色7.5YR7/6 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | 底部外面ヘラ記号 |
| | 313 | 145図-1 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯身 | ①10.1②3.4 | 石英少量含む | 良 | 内・外: 灰白色2.5Y7/1 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | 底部外面ヘラ記号 |
| | 314 | 145図-18 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯身 | ①(9.4)②4.0 | 砂粒含む | 良 | 内: 灰色N4/0・ 外: 灰色N6/0 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | 灰被り |
| | 315 | 145図-20 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯身 | ①(11.0)②3.3 | 細粒少量含む | 良 | 内・外: 灰白色2.5Y7/1 | ヘラ切・回転 ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 316 | 151図-18 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯蓋 | ①12.0②2.7 ③受部径14.2 ④つまみ径 2.6 | 砂粒少量含む | 良 | 内: 灰色7.5Y5/1・ 外: 灰色N4/0 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | |
| | 317 | 151図-6 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(11.8)②2.0 ③受部径 (14.6) | 細粒含む | 良 | 内・外: 灰白色5Y8/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | 天井部外面ヘラ記 号 |
| | 318 | 151図-16 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯蓋 | ①14.2②2.5 ③受部径17.8 | 砂粒少量含む | 良 | 内: 灰色5Y5/1・ 外: 灰色10Y6/1 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 319 | 151図-36 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯B身 | ②2.5+ a③(8.9) | 細粒多く含む | 良 | 内: 灰色7.5Y5/1・ 外: 灰色N6/0 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | 底部外面ヘラ記号 |
| | 320 | 145図-22 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯B身 | ②2.5+ a③8.6 | 細砂粒わずかに含 む | やや 軟 | 内・外: にぶい黄褐色10YR7/4 | ヨコナデ | ヨコナデ | 底部外面ヘラ記号 |
| | 321 | 151図-35 | 8C SD108 | 須恵器 | 杯B身 | ②2.2+ a③(9.2) | 1mm大砂粒含む | 良 | 内: 青灰色5PB6/1・ 外: 灰色N4/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | 底部内面ヘラ記号 |
| | 322 | 151図-28 | 8C SD108 | 須恵器 | 盤 | ①(17.1)②2.4 ③(12.0) | 砂粒少量含む | 良 | 内: にぶい赤褐色2.5YR6/4・ 外: 灰色5Y5/1 | ヨコナデ | ナデ・ヨコ ナデ | |
| | 323 | 151図-27 | 8C SD108 | 須恵器 | 盤 | ①(20.0)②3.5 ③(17.0) | 砂粒少量含む | 良 | 内: 暗灰黄色2.5Y5/2・ 外: 灰オリーブ色5Y6/2 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | |
| 図58 | 324 | 152図-1 | 8C SD108 | 須恵器 | 無形壺 | ①(6.1)②5.2 ③胴部最大径 (9.4) | 砂粒わずかに含む | 良 | 内・外: 灰褐色7.5YR5/2 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 325 | 152図-8 | 8C SD108 | 須恵器 | 小形甕 | ①(12.4) ②3.1+ a | 1mm大砂粒含む | 良 | 内・外: 灰黄色2.5Y7/2 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 326 | 152図-3 | 8C SD108 | 須恵器 | 瓶 | ②6.8③(7.2) | 精良 | 良 | 内: 灰白色5Y7/1・ 外: 灰色5Y6/1-5/1 | 回転ヘラケ ズリ | 回転ヘラケ ズリ | |
| | 327 | 152図-2 | 8C SD108 | 須恵器 | 瓶類 | ②12.4+ a③(12.0)④胴 部最大径19.0 | 精良 | 良 | 内・外: 灰色10Y5/1 | 胴部上半カ キメ後ナデ・ 胴部下半カ キメ・ケズリ 後ナデ | 回転ナデ | |
| | 328 | 152図-6 | 8C SD108 | 須恵器 | 平瓶 | ①8.7②17.4 ③9.7④胴部 最大径21.1 | 精良 | 良 | 内・外: 青灰色5PB5/1 | 口縁部ヨコ ナデ・胴部カ キメ後ナデ・ 底部平行タ タキ | ナデ・ヨコ ナデ | 底部外面指圧痕多 数とヘラ記号 |
| | 329 | 152図-9 | 8C SD108 | 須恵器 | 甕 | ①(25.9) ②2.7+ a | 細粒多く含む | 良 | 内・外: にぶい黄色2.5Y6/3 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 330 | 152図-10 | 8C SD108 | 須恵器 | 甕 | ①(20.4) ②15.0+ a | 細粒多く含む | 良 | 内・外: 灰色N4/0 | 口縁部-頸 部ヨコナデ・ 胴部タタキ | 口縁部-頸 部ヨコナ デ・胴部当 て具痕 | |
| 図59 | 331 | 145図-21 | 8C SD108 | 瓦 | 平瓦? | ①最大長 10.4+ a②最大 幅8.5+ a③最大 厚1.4 ④重量210 | 3mm大砂粒含む | 良 | 凹面: 灰色N4/0 凸面: 灰色N4/0 | 凹面: 粗い ナデ | 凸面: タタ キ後ナデ | 端部ケズリ、瓦? |
| | 332 | 154図-3 | 7B SD108 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長21.8 ②最大幅17.7 ③最大厚1.9 ④重量1180 | 2mm大砂粒含む | 良 | 淡黄色(2.5Y8/3-8/4)-灰オリーブ色 (5Y6/2-5/2) | 凹面: ナデ | 凸面: ナデ | 側面ケズリ・面取 り、ユビオサエ・ナ デ |

| 図 番号 | 遺物 番号 | 西報告・ 掲載図 番号等 | 出土地点・ 遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 | |
|---------|----------|--------------------|-----------------|-----|-----|--|------------------------|---------|--|----------------------------------|----------------------------------|---------------------------------|----------|
| | 333 | | 7B SD108 | 瓦 | 平瓦 | ①残存長18.1 ②最大幅18.6 ③最大厚2.7 ④重量1200 | 1-3mm大砂粒含む | 良 | 灰色(5Y5/1)・灰オリーブ色 (5Y6/2)・灰黄色(2.5Y7/2)・灰色 (5Y5/1)・灰黄色(2.5Y7/2) | 凹面：ナデ | 凸面：ナデ | 側面ケズリ・ヘラ 状工具痕残る・粘 土縊様の単位有 | |
| | 334 | | 7B SD108 | 瓦 | 平瓦 | ①残存長 19.61②最大 幅15.4③最大 厚2.0④重量 815 | 1-2mm大砂粒含む | 良 | 凹面：褐色(7.5YR4/6)・褐灰色 (10YR5/1-4/1) 凸面：褐色(7.5YR4/6)・褐灰色 (10YR4/1) | 凹面：ナデ | 凸面：ナデ | 側面ケズリ・凹面・ 凸面とも糸切り 痕？残る | |
| 図60 | 335 | 138図 | SD316 | 石製品 | 石鈷 | ①長径7.8 ②高さ1.9cm ③重量57.4 | | | | | | 緑色凝灰岩 | |
| 図61 | 336 | 159図-7 | 9B・SD307 下層 | 瓦 | 鬼瓦 | ①最大長6.3+ a②残存幅 7.8+a③最大 厚2.7④重量 157 | 1mm大砂粒含む | やや 軟 | 灰白色7.5Y8/1 | | ナデ | | |
| | 337 | 159図-6 | 9B・SD307 下層 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長 10.4+a②残 存幅10.2+a ③最大厚2.0 ④重量217 | 1mm以下白色粒子含 む | 良 | 凹面：灰白色・褐灰色10YR7/1-6/1 凸面：灰白色10YR8/1 | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：格子 目叩き | 粘土縊目あり | |
| | 338 | 159図-3 | 9B・SD307 下層 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長 15.2+a②残 存幅14.6+a ③最大厚2.2 ④重量550 | 1mm大砂粒含む | 良 | 凹面：褐色にこぶい黄橙色 10YR6/1-5/1-7/2 凸面：灰白色10YR7/1 | 凹面：布目 圧痕・一部す り消し | 凸面：格子 目叩き・一 部すり消し | | |
| 図62 | 339 | | エリア I SD408 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長35.9 ②残存幅 14.8+a③最 大厚2.1④重 量1554 | 1mm以下白色粒・2mm 大赤色粒含む | 良 | 凹面：暗灰色N3/0 凸面：灰白色7.5Y7/1 | 凹面：糸切 り痕・布目圧 痕 | 凸面：糸切 り痕・縄目 叩き | | |
| | 340 | | 10GH・ SD408 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長9.9+ a②残存幅 10.6+a③最 大厚2.6④重 量340 | 精良 | 良 | 凹面：灰色7.5Y6/1-5/1 凸面：灰色N4/0 | 凹面：布目 圧痕・すり消 し？・粘土縊 き目？ | 凸面：格子 目叩き | 円筒桶か？ | |
| | 341 | | 10GH・ SD408 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長 12.1+a②残 存幅18.4+a ③最大厚2.2 ④重量585 | 2mm大白色砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色・灰色N7/0-5/0 凸面：灰白色・灰色N8/0-5/0 | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：格子 目叩き・す り消し | 円筒桶か？ | |
| | 342 | | 10GH・ SD408 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長 11.4+a②残 存幅5.1+a ③最大厚1.4 ④重量120 | 精良 | 良 | 凹面：灰白色2.5Y8/1-8/2 凸面：灰白色5Y8/1 | 凹面：布目 圧痕・すり消 し | 凸面：平行 叩き | 側面分割面 | |
| | 343 | | 10GH・ SD408 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長 13.4+a②残 存幅9.5+a ③最大厚2.0 ④重量385 | 1-3mm大砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色N7/0 凸面：灰白色N7/0 | 凹面：布目 圧痕・一部す り消し | 凸面：格子 目叩き | 側面分割面 | |
| | 344 | | 10GH・ SD408 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長 11.2+a②残 存幅11.1+a ③最大厚1.9 ④重量395 | 精良 | やや 軟 | 凹面：浅黄橙色10YR8/3 凸面：浅黄橙色10YR8/3 | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：格子 目叩き・一 部すり消し | 側面分割面 | |
| 図63 | 345 | | エリア I SX303 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長40.8 ②残存幅 18.2+a③最 大厚2.4④重 量2712 | 1mm大の白色粒含む | 精良 | 凹面：灰色N4/0 凸面：灰色N4/0 | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：糸切 り痕・縄目 叩き | 行基 | |
| | 346 | | エリア I SX303 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長 27.6+a②残 存幅16.3+a ③最大厚2.4 ④重量1595 | 1mm大の白色粒・石 英含む | 精良 | 凹面：灰白色7.5Y8/1 凸面：灰白色 7.5Y8/1 | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：格子 目叩き・一 部すり消し | 両側面分割面 | |
| 図66 | 347 | 292図-13 | 7G SB204 (A) | 土師器 | 椀 | ①(12.6)②4.5 | 精良 | 軟 | 内・外： 橙色7.5YR6/6 | 不明 | ヨコナデ | | |
| | 348 | 292図-11 | 7G SB204 (A) | 土師器 | 甕 | ①(30.4) ②12.7+a | 石英・長石粒多く含 む | 良 | 内・外： にぶい黄橙色10YR7/4 | 不明 | 口縁部付近 横方向ケズ リ・胴部縦 方向ケズリ | ヨコナデ・ ナデ | |
| | 349 | 292図-12 | 7G SB204 (A) | 土師器 | 甕 | ②6.5+a | 石英・長石粒多く含 む | 良 | 内・外： にぶい黄橙色10YR7/4 | 不明 | 縦方向ケズ リ | ヨコナデ | 348と同一個体 |
| 図68 | 350 | | 7G SB205 (B) | 須恵器 | 杯蓋 | ②1.6+a | 砂粒含む | 良 | 内： 青灰色5PB6/1・ 外： 灰白色5Y7/1 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ・ ナデ | | |
| | 351 | | 7G SB205 (B) | 須恵器 | 杯蓋 | ②1.8+a | 砂粒含む | 良 | 内・外： 灰黄色2.5Y7/2 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | 内面当て具痕 | |
| | 352 | | 7G SB205 (B) | 須恵器 | 杯蓋 | ②2.8+a | 砂粒多く含む | 良 | 内： 灰色N6/0・ 外： 灰色(N6/0)・暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | | |
| | 353 | | 7G SB205 (B) | 土師器 | 小形甕 | ②7.2+a | 砂粒多く含む | 良 | 内： にぶい黄橙色10YR7/4・ 外： にぶい黄橙色10YR7/3 | タテハケ後 ナデ | ケズリ | | |
| | 354 | | 7G SB205 (B) | 白磁 | 椀 | ②1.8+a | 蜜 | 良 | 内・外： 灰白色7.5Y7/2 | 施釉 | 施釉 | | |
| 図70 | 355 | 292図-1 | 7G SB210 | 須恵器 | 杯身 | ①(10.3)②3.4 ③(13.2) | 精良 | 良 | 内： 紫灰色5P6/1・ 外： 灰白色(5Y7/1)・灰色(N4/0) | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | | |
| | 356 | 292図-2 | 7G SB210 | 須恵器 | 杯身 | ①(10.6) ②3.6+a ③(4.6) | 砂粒含む | 良 | 内・外： 灰白色7.5Y7/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | | |
| | 357 | | 7G SB210 | 須恵器 | 杯身 | ①(12.0) ②2.8+a ③(14.0) | 精良 | 良 | 内・外： 灰白色N7/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | | |

| 図番号 | 遺物番号 | 西報告・掲載図番号等 | 出土地点・遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|-----|------|------------|----------|------|------|--|----------------|-----|---|-------------------|------------------|---------------------------|
| | 358 | | 7G SB210 | 須恵器 | 甕 | ①頸部最大径(17.0) ②7.8+ a | 細砂粒・白色粒子多く含む | 良 | 内：灰色7.5Y4/1・外：灰白色(N7/0)-オリーブ黒(7.5Y3/1) | 頸部ヨコナデ・胴部タタキ | 頸部ヨコナデ・胴部当て具痕 | |
| 図72 | 359 | | 7G SB212 | 弥生土器 | 甕 | ②5.2+ a | 長石・雲母含む | 良 | 内：橙色5YR7/6・外：橙色5YR6/6-6/8 | ヨコナデ | ナデ | 外面丹塗 |
| | 360 | | 7G SB212 | 弥生土器 | 甕 | ②3.0+ a ③(81) | 石英粒含む | 良 | 内：にぶい黄橙色(10YR7/4)-黄灰色(2.5Y4/1)・外：橙色5YR6/6 | ハケメ | 不明 | |
| | 361 | | 7G SB212 | 弥生土器 | 壺 | ②2.3+ a ③(92) | 砂粒多く含む | 軟 | 内：浅黄橙色10YR8/3・外：浅黄橙色7.5YR8/3 | 不明 | 不明 | |
| | 362 | | 7G SB212 | 土師器 | 椀 | ②4.8+ a | 2-3mm砂粒含む | 良 | 内：にぶい黄橙色10YR7/3・外：浅黄橙色7.5YR8/3 | 不明 | 丁寧なナデ | |
| | 363 | 292図-7 | 7G SB212 | 土師器 | 椀 | ②4.2+ a | | 良 | 内・外：浅黄橙色7.5YR8/3 | 不明 | 不明 | |
| | 364 | 292図-6 | 7G SB212 | 土師器 | 椀 | ①13.5②5.6 | 石英細粒含む | 軟 | 内・外：橙色(5YR6/6)-にぶい橙色(5YR7/4) | 不明 | 不明 | |
| | 365 | | 7G SB212 | 土師器 | 小形甕 | ①11.5 ②5.1+ a | 1mm大砂粒含む | 良 | 内：にぶい褐色(7.5YR6/3)-にぶい橙色(7.5YR6/4)・外：にぶい橙色5YR7/3-7/4 | ナデ | ヨコナデ | |
| | 366 | 292図-4 | 7G SB212 | 土師器 | 小形甕 | ①(11.6) ②6.1+ a | 1-2mm大砂粒含む | 良 | 内：明褐色(7.5YR7/2)-にぶい橙色(7.5YR7/3)・外：橙色5Y6/6 | 口縁部丁寧なナデ・胴部ナデ | 口縁部丁寧なナデ・胴部ナデ | |
| | 367 | | 7G SB212 | 土師器 | | | | | | 胴部上半ナデ・下半タタキ | タテ方向ケズリ | 366と同一個体 |
| | 368 | 292-9-10 | 7G SB212 | 須恵器 | 甕 | ①(11.2) ②11.4③胴部最大径11.8 | 精良 | 良 | 内・外：灰色N6/0 | 口縁・胴部上半ナデ・胴部下半タタキ | 口縁・頸部ナデ・胴部下半当て具痕 | |
| | 369 | | 7G SB212 | 土師器 | 甕 | ①(27.6) ②7.8+ a | 1-2mm大砂粒含む | 良 | 内：灰白色7.5Y8/2・外：にぶい黄橙色10YR7/3 | ナデ | ケズリ | |
| | 370 | | 7G SB212 | 土師器 | 甕 | | | | | | | 369と同一個体 |
| | 371 | | 7G SB212 | 土師器 | 把手 | ②4.8+ a | 1-2mm大砂粒含む | 良 | 内：にぶい黄橙色10YR7/2-7/3・外：褐色10YR6/1 | ケズリ・面取り・ナデ | 丁寧なナデ | |
| | 372 | 292図-3 | 7G SB212 | 土師器 | 甕 | ①(25.4) ②11.0+ a | 石英・長石粒含む | やや軟 | 内・外：にぶい黄橙色(10YR7/3)-褐色(10YR6/1) | ヘラ状工具による擦過 | ヘラケズリ | |
| 図74 | 373 | | 7G SB215 | 土師器 | 杯身 | ②2.6+ a | 精良 | 良 | 内・外：灰白色2.5Y8/2 | ヨコナデ・ヘラケズリ | ヨコナデ | |
| | 374 | | 7G SB215 | 土師器 | 不明 | ②1.2+ a ③10.6 | 細砂粒わずかに含む | 良 | 内・外：灰黄色2.5Y7/2 | 不明 | ナデ? | |
| | 375 | | 7G SB215 | 土師器 | 壺 | ②1.6+ a ③6.4 | 細砂粒わずかに含む | 良 | 内・外：灰黄色2.5Y7/2 | ヘラケズリ・ナデ | 丁寧なナデ | |
| | 376 | | 7G SB215 | 土師器 | 小形甕 | ②8.2+ a | 砂粒多く含む | 良 | 内：灰黄色(2.5Y7/2)-黄灰色(2.5Y5/1)・外：灰黄色2.5Y7/2 | タテハケ | 胴部上半ケズリ?・下半ナデ? | |
| | 377 | 282図-12 | 7G SB215 | 須恵器 | 杯身 | ①(13.6)②4.4 ③高台径(10.1) | 砂粒少量含む | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ナデ | ナデ | |
| 図76 | 378 | 282図-1 | 7G SB216 | 弥生土器 | 甕 | ①(13.9) ②7.0+ a | 細砂粒含む | 軟 | 内：にぶい黄橙色10YR7/4・外：橙色7.5YR7/6 | 不明 | 不明 | |
| | 379 | 282図-3 | 7G SB216 | 弥生土器 | 甕 | ①(26.0) ②5.6+ a | 石英・長石粒含む | 良 | 内・外：橙色5YR7/6 | ハケメ・ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 380 | 282図-2 | 7G SB216 | 弥生土器 | 甕 | ②3.1+ a | 石英・長石粒含む | 良 | 内・外：にぶい褐色7.5YR5/3 | ヨコナデ | 不明 | |
| | 381 | 282図-4 | 7G SB216 | 弥生土器 | 甕 | ②7.5+ a ③(7.0) | 1-3mm大砂粒多く含む | 良 | 内：灰色7.5Y4/1・外：橙色5YR6/6 | タテ方向ハケメ | ユビオサエ・ナデ | |
| | 382 | 282図-5 | 7G SB216 | 弥生土器 | 壺 | ②3.8+ a ③(82) | 石英・長石粒含む | 良 | 内：橙色7.5YR7/6・外：にぶい褐色7.5YR7/4 | 丁寧なナデ? | ユビオサエ・ナデ | |
| | 383 | 282図-6 | 7G SB216 | 弥生土器 | 壺 | ②5.3+ a ③(6.4) | 石英わずかに含む | 良 | 内：浅黄褐色7.5YR8/4・外：浅黄褐色10YR8/3 | ミガキ | ナデ | 外面丹塗 |
| | 384 | 282図-8 | 7G SB216 | 土師器 | 小形甕? | ①(14.6) ②3.6+ a | 細砂粒含む | 軟 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/4 | ユビオサエ | ユビオサエ | |
| | 385 | 282図-11 | 7G SB216 | 須恵器 | 杯蓋 | ①14.8②4.7 | 細砂粒わずかに含む | 良 | 内：灰黄色2.5Y7/2・外：にぶい黄褐色10YR7/3 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 386 | 282図-10 | 7G SB216 | 須恵器 | 杯身 | ①(15.0)②3.5 | 精良 | やや軟 | 内：灰白色2.5Y8/2・外：淡黄色2.5Y8/3 | ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | 内面当て具痕・外面板状圧痕 |
| | 387 | | 7G SB216 | 石器 | 砥石 | ①残存長5.3 ②最大幅1.5 ③最大厚0.6 ④重量11.2 | | | | | | |
| 図78 | 388 | 282図14 | 7G SB217 | 弥生土器 | 高杯 | ②4.7+ a | 精良・雲母含む | やや軟 | 内：灰白色10YR8/3・外：にぶい黄褐色10YR7/3 | 不明 | 不明 | |
| | 389 | | 7G SB217 | 弥生土器 | 甕 | ②2.1③10.4 | 0.2mmの石英・長石粒含む | 良 | 内：褐色・黒褐色7.5YR4/1-3/1・外：褐色・明褐色7.5YR6/6-5/6 | 不明 | 不明 | |
| | 390 | 282図-23 | 7G SB217 | 須恵器 | 杯蓋 | ①10.3②3.4 | 1-2mm大砂粒含む | 良 | 内：灰色N5/0・外：灰白色(7.5Y7/1)-暗灰色(N3/0) | ヘラケズリ・ナデ | ナデ | 焼け歪みにより器面に亀裂 |
| | 391 | 282図-19・20 | 7G SB217 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(13.5) ②3.7+ a | 砂粒含む | 良 | 内・外：灰白色5Y7/1 | ヘラケナデズリ・ナデ | ナデ | |
| | 392 | 282図-22 | 7G SB217 | 須恵器 | 杯蓋 | ①14.2②4+ a | 細粒含む | 良 | 内・外：灰白色5Y7/1 | ヘラケズリ・ナデ | ナデ | |
| | 393 | 282図-21 | 7G SB217 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(14.7) ②4.2+ a | 2-3mm大砂粒含む | 良 | 内：灰白色7.5Y7/1・外：灰白色・灰色7.5Y7/1-6/1 | 回転ヘラケズリ・ナデ | ナデ | |
| | 394 | | 7G SB217 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(15.0)②5.0 | 精良 | 良 | 内：灰黄色2.5Y6/2・外：灰白色・灰黄色2.5Y7/1-7/2 | 回転ヘラケズリ・ナデ | ナデ | |
| | 395 | 282図-15 | 7G SB217 | 須恵器 | 杯身 | ①11.4②3.8 ③6.0 | 5mm大砂粒含む | 良 | 内：灰白色N7/0・外：灰白色N7/0-5Y7/2 | 回転ヘラケズリ・ナデ | ナデ | 受部は打ち欠きのためか1/6のみ残存・外面ヘラ記号 |
| | 396 | 282図-16 | 7G SB217 | 須恵器 | 杯身 | ①12.7②3.9 ③受部径15.0 | 石英粒少量含む | 良 | 内・外：灰色N6/0 | 回転ヘラケズリ・ナデ | ナデ | 焼け歪み顕著・内面当て具痕 |
| | 397 | | 7G SB217 | 須恵器 | 杯身 | ①12.5②4.1 | 2-5mm大砂粒含む | 良 | 内・外：暗灰色・黒色N3/0-2/0 | 回転ヘラケズリ・ナデ | ナデ | 胴部外面熔着片 |

| 図 番号 | 遺物 番号 | 西報告・ 掲載図 番号等 | 出土地点・ 遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|---------|----------|--------------------|--------------|-----|---------------------------|--|----------------|---|---|----------------------|--------------------|------------------|
| 図80 | 398 | 282図-26・ 27 | 7G SB217 | 須恵器 | 高杯 | ①(12.3) ②11.1+ <i>a</i> ③受部径14.7 | 1mm大砂粒含む | 良 | 内：灰色N6/0・ 外：灰色7.5Y6/1 | 回転ヘラケ ズリ・ナデ | ナデ | |
| | 399 | | 7G SB217 | 須恵器 | 甕 | ②22.1+ <i>a</i> | 1mm大白色粒子含む | 良 | 内：灰色N4/0・ 外：灰色-暗灰色N4/0-3/0 | タタキ | 当て具痕・ 一部ナデ | |
| | 400 | 292図-19 | 7H SB208 | 土師器 | 椀? | ②5.4+ <i>a</i> | 細砂粒・赤色粒子含む | 良 | 内：橙色7.5YR7/6・ 外：橙色5YR6/6 | 不明 | 不明 | |
| | 401 | 292図-18 | 7H SB208 | 土師器 | 甕 | ②4.3+ <i>a</i> | 細砂粒多く含む | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/4 | 不明 | 不明 | |
| | 402 | 292図-17 | 7H SB208 | 土師器 | 甕 | ①(16.2) ②5.0+ <i>a</i> | 細砂粒多く含む | 良 | 内・外：にぶい橙色7.5YR7/4 | ハケメ・ヨコ ナデ | 不明 | |
| | 403 | | 7H SB208 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(13.0) ②3.7+ <i>a</i> | 黒色粒子わずかに 含む | 良 | 内：明紫灰色5P7/1・ 外：灰色5Y6/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 404 | 292図-23 | 7H SB208 | 須恵器 | 杯蓋 | ①13.2②4.6 | 細砂粒わずかに含 む | 良 | 内：灰色N5/0・ 外：灰色N4/0 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 内面当て具痕 |
| | 405 | 292図-24 | 7H SB208 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(14.0) ②4.5+ <i>a</i> | 白色粒子含む | 良 | 内：褐色灰色10YR5/1・ 外：黄灰色2.5Y6/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ナデ | |
| | 406 | | 7H SB208 | 須恵器 | 杯蓋 | ②3.1+ <i>a</i> | 黒色粒子わずかに 含む | 良 | 内・外：灰白色N7/0 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 407 | | 7H SB208 | 須恵器 | 杯身 | ②2.6+ <i>a</i> | 1mm大砂粒少量含む | 良 | 内・外：灰色7.5Y5/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 408 | 292図-21 | 7H SB208 | 須恵器 | 杯身 | ①(11.0) ②4.3+ <i>a</i> | 1mm大白色粒子含む | 良 | 内・外：灰白色N7/0 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | |
| | 409 | 292図-22 | 7H SB208 | 須恵器 | 杯身 | ①(11.8) ②4.2+ <i>a</i> ③受 部径(14.0) | 1mm大白色粒子含む | 良 | 内・外：灰白色N7/0 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 410 | | 7H SB208 | 須恵器 | 高杯蓋 ? | ②1.9+ <i>a</i> | 雲母細粒含む | 良 | 内・外：にぶい橙色7.5YR7/4 | カキメ?ナ デ? | 不明 | |
| 411 | 292図-25 | 7H SB208 | 須恵器 | 高杯 | ①13.3 ②4.2+ <i>a</i> | 細砂粒わずかに含 む | 良 | 内：灰色7.5Y5/1・ 外：灰白色(2.5Y7/1)-灰色 (10Y5/1) | カキメ・ヨコ ナデ | ヨコナデ | 受部に熔着片 | |
| 412 | 292図-26 | 7H SB208 | 須恵器 | 高杯 | ②1.6+ <i>a</i> ③(13.4) | 砂粒多く含む | 良 | 内：灰黄色2.5Y6/2・ 外：灰色5Y5/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | | |
| 図82 | 413 | 292図-16 | 7H SB209 | 須恵器 | 甕 | ①(13.8) ②2.5+ <i>a</i> | 精良 | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 414 | 292図-15 | 7H SB209 | 土師器 | 小形甕 | ①(13.4) ②5.1+ <i>a</i> | 細砂粒含む | 良 | 内：淡赤橙色(2.5YR7/4)-明褐色 (7.5YR7/2)・ 外：淡橙色5YR8/4 | ヨコナデ | ユビオサ エ・ナデ | |
| | 415 | | 7H SB209 | 土師器 | 把手 | ②8.2+ <i>a</i> | 大粒砂粒含む | 良 | 内・外：灰黄色(2.5Y7/2)-黄灰色 (2.5Y6/1) | ケズリ・ハケ | 粗いケズリ | 外面ハケメ後把手 貼付け |
| 図84 | 416 | 287図-22 | 7H SB213 | 土師器 | 椀 | ②4.2+ <i>a</i> | 精良 | やや 軟 | 内：褐色灰色10YR5/1・ 外：にぶい黄橙色(10YR7/3)-にぶ い橙色(7.5YR7/4) | 不明 | 一部ヨコナ デ | |
| | 417 | | 7H SB213 | 土師器 | 杯蓋 | ②4.4+ <i>a</i> | 細砂粒わずかに含 む | やや 軟 | 内：灰白色(10YR8/2)-褐色 (10YR5/1)・ 外：浅黄橙色7.5YR8/3 | 不明 | 不明 | |
| | 418 | 287図-18 | 7H SB213 | 土師器 | 杯身 | ①(13.8)②5.2 ③(7.9) | 石英含む | 軟 | 内：にぶい黄橙色10YR7/3・ 外：にぶい黄橙色10YR7/2 | ケズリ・ヨコ ナデ | ナデ? | 底部外面剥落 |
| | 419 | 287図-20 | 7H SB213 | 土師器 | 高杯 | ②9.8+ <i>a</i> ③脚部径12.8 | 微細雲母含む | やや 軟 | 内・外：橙色7.5YR7/6 | 不明 | シボリ痕・ 詳細不明 | |
| | 420 | 287図-21 | 7H SB213 | 土師器 | 高杯 | ②10.6+ <i>a</i> ③脚部径12.6 | 精良 | 軟 | 内・外：浅黄橙色10YR8/4 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 421 | | 7H SB213 | 土師器 | 高杯 | ②13.0+ <i>a</i> ③脚部径14.4 | 砂粒・微細雲母含む | やや 軟 | 内・外：にぶい橙色7.5YR7/4 | 不明 | シボリ痕・ ヨコナデ? | |
| | 422 | 287図-10 | 7H SB213 | 土師器 | 鉢 | ①13.5②7.5 ③8.2 | 細砂粒・雲母含む | やや 軟 | 内：灰黄色2.5Y6/2・ 外：にぶい黄橙色(10YR7/3)-黄灰 色(2.5Y6/1) | 不明 | ユビオサ エ・ナデ | |
| | 423 | 287図-11 | 7H SB213 | 土師器 | 鉢 | ①14.4②9.3 ③7.6 | 細砂粒少量含む | 軟 | 内：浅黄橙色10YR8/3・ 外：にぶい橙色(7.5YR7/4)-にぶ い黄橙色(10YR7/2) | 不明 | 不明 | |
| | 424 | 287図-5 | 7H SB213 | 土師器 | 小形甕 | ①(13.6) ②3.6+ <i>a</i> | 石英含む | 良 | 内：浅黄橙色10YR8/2・ 外：にぶい橙色7.5YR7/3 | ユビオサエ・ 詳細不明 | ユビオサ エ・詳細不 明 | |
| | 425 | 287図-3・4 | 7H SB213 | 土師器 | 小形甕 | ①12.7②11.5 ③胴部最大径 11.2 | | やや 軟 | 内：にぶい褐色7.5YR5/4・ 外：にぶい褐色(7.5YR5/3)-赤褐色 (5YR4/6) | タタキ?詳 細不明 | 胴部ケズリ | |
| | 426 | 287図-8 | 7H SB213 | 土師器 | 壺 | ②13.0+ <i>a</i> ③胴部最大径 (19.1) | 大粒砂粒多く含む | やや 軟 | 内：黒褐色2.5Y3/1・ 外：橙色5YR6/6 | ハケメ | ヘラケズリ | |
| | 427 | 287図-1 | 7H SB213 | 土師器 | 甕 | ①(25.0) ②4.4+ <i>a</i> | 細砂粒少量含む | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/4 | 不明 | 不明 | |
| | 428 | 287図-6 | 7H SB213 | 土師器 | 把手 | ②8.4+ <i>a</i> | 4mm大砂粒含む | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/3 | ハケメ | ケズリ | |
| | 429 | 287図-14 | 7H SB213 | 須恵器 | 杯蓋 | ①13.6②3.9 | 細砂粒含む | 良 | 内：灰白色7.5Y7/6・ 外：灰白色5Y7/2 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | | |
| | 430 | 287図-16 | 7H SB213 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(15.6) ②3.9+ <i>a</i> | 大粒砂粒含む | 良 | 内：灰色10YR5/1・ 外：オリープ黒色7.5Y3/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 431 | 287図-17 | 7H SB213 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(14.0) ②3.8+ <i>a</i> | 精良 | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/2 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 432 | 287図-15 | 7H SB213 | 須恵器 | 杯蓋 | ①14.0②5.2 | 砂粒・石英多く含む | 軟 | 内：灰白色2.5Y6/2・ 外：浅黄橙色7.5YR8/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | 丁寧なヨコ ナデ | 焼け歪みにより器 面に亀裂 |
| | 433 | 287図-13 | 7H SB213 | 須恵器 | 杯身 | ①12.4②4.5 ③受部径14.2 | 精良 | 良 | 内・外：灰白色5Y7/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ユビオサ エ・ヨコナ デ | 底部外面ヘラ記号 |
| | 434 | 287図-12 | 7H SB213 | 須恵器 | 杯身 | ①11.8②4.5 ③受部径13.9 | 精良 | 軟 | 内・外：灰白色5Y8/1 | 回転ヘラケ ズリ | 不明 | |
| | 435 | 287図-19 | 7H SB213 | 須恵器 | 高杯 | ①(16.0) ②5.0+ <i>a</i> | 細砂粒少量含む | やや 軟 | 内：にぶい黄橙色(10YR7/2)-褐色 (10YR6/1)・ 外：にぶい黄橙色10YR7/2 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | |

| 図番号 | 遺物番号 | 西報告・掲載図番号等 | 出土地点・遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|-----|----------------|---------------|---------------|---------------|--------------------------------------|---|-----------------------|--|---|--------------------------|---|---------------------------|
| 図86 | 436 | | 7G・H SB214 | 土師器 | 椀 | ①(13.4) ②5.1+a | 細砂粒含む | 良 | 内: 橙色7.5YR6/6・ 外: にぶい褐色7.5YR5/4 | 胴部上半ヨ コナデ・胴部 化半ケズリ | 丁寧なナデ | SB228出土破片と 接合 |
| | 437 | 284図-2 | 7G・H SB214 | 土師器 | 甕 | ①(18.2) ②12.2+a ③胴部最大径 21.1 | 細砂粒多く含む | 良 | 内: 浅黄褐色(10YR8/4)-にぶい黄 褐色(10YR5/3)・ 外: にぶい黄褐色10YR6/4 | 胴部ハケ・ナ デ消し | 胴部ケズリ? | |
| | 438 | 284図-1 | 7G・H SB214 | 土師器 | 甕 | ①22.1 ②21.8+a ③22.0 | 大粒砂粒多く含む | 良 | 内: 橙色5YR7/6・ 外: にぶい橙色7.5YR7/4 | 口縁ナデ・胴 部ハケ | 口縁部ナ デ・頸部ハ ケ・胴部ケ ズリ | |
| | 439 | 284図-8 | 7G・H SB214 | 須恵器 | 杯蓋 | ①13.0②3.6 | 砂粒多く含む | 良 | 内: 灰色7.5Y6/1・ 外: 灰色N7/0 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | |
| | 440 | 284図-7- 14 | 7G・H SB214 | 須恵器 | 杯蓋 | ①13.4②4.2 | 細砂粒わずかに含 む | 良 | 内: オリーブ黒色5Y3/1・ 外: 灰色(7.5Y4/1)-黄灰色 (2.5Y6/1) | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 焼け歪み顕著・焙 着 |
| | 441 | 284図-6・9 | 7G・H SB214 | 須恵器 | 杯蓋 | ①13.6②4.7 | 大粒砂粒含む | 良 | 内: オリーブ灰色5GY6/1・ 外: 灰色10Y6/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 焼け歪み顕著 |
| | 442 | 284図-4 | 7G・H SB214 | 須恵器 | 杯身 | ①(12.8)②4.0 ③受部径 (15.0) | 砂粒含む | やや 軟 | 内・外: 灰白色5Y7/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | |
| | 443 | 284図-5 | 7G・H SB214 | 須恵器 | 杯身 | ①(12.5)②4.1 ③受部径 (14.3) | 細砂粒含む | 軟 | 内・外: 灰白色5Y8/1 | 不明 | 不明 | |
| | 444 | 284図-11 | 7G・H SB214 | 須恵器 | 高杯 | ②6.3③脚部 径(11.5) | 石英含む | 良 | 内: 黄灰色2.5Y6/1・ 外: 灰色(N6/0)-(N5/0) | ヨコナデ・杯 部一部カキ メ | ナデ | |
| | 445 | 284図-10 | 7G・H SB214 | 須恵器 | 高杯 | ①(11.7)②9.4 ③脚部径10.7 ④受部径 (13.9) | 砂粒少量含む | 良 | 内: 灰オリーブ色5Y6/2・ 外: 灰白色7.5Y7/2 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | |
| 446 | 284図-12- 13 | 7G・H SB214 | 須恵器 | 長頸壺 | ①(11.0) ②13.5+a ③胴部最大径 14.0 | 砂粒わずかに含む | 良 | 内: 灰色N6/0・ 外: 灰色(N4/0)-灰白色(5Y7/1) | 口縁部・胴部 下半ヨコナ デ・底部付近 カキメ | ヨコナデ | | |
| 図88 | 447 | | 7H SB228 | 土師器 | 椀 | ②3.6+a | 砂粒含む | 良 | 内・外: 橙色7.5YR7/6 | 不明 | ヨコナデ | |
| 図90 | 448 | 299図-18 | 8H SB203 | 土師器 | 高杯 | ①(21.0) ②13.2+a | 1mm大砂粒・雲母少 量含む | 良 | 内: 橙色7.5YR7/6・ 外: 橙色7.5YR6/6 | ヨコナデ | ヨコナデ・ 脚部紋り | |
| | 449 | 299図-17 | 8H SB203 | 土師器 | 小形甕 | ①13.0 ②6.6+a | 1mm大砂粒含む | 良 | 内・外: にぶい黄褐色(10YR7/3)- 明褐色(7.5YR7/2) | 頸部ヨコナ デ・胴部タテ ハケ | 頸部ヨコナ デ・胴部ケ ズリ | |
| | 450 | 8H SB203 | 土師器 | 小形甕 | ②3.8+a | 細砂粒含む | 良 | 内: にぶい黄褐色10YR7/3・ 外: にぶい灰黄褐色10YR6/2 | ハケ | ユビオサエ | | |
| | 451 | 8H SB203 | 土師器 | 把手 | ②6.8+a | 細砂粒含む | 良 | 内・外: にぶい橙色7.5YR7/3 | ハケ・ナデ | タテ方向ケ ズリ | | |
| | 452 | 8H SB203 | 須恵器 | 杯蓋 | ②3.7+a | 精良 | 良 | 内: 灰白色7.5Y7/1・ 外: 灰色7.5Y6/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | | |
| | 453 | 299図-19 | 8H SB203 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(15.4) ②4.6 | 1mm大砂粒含む | やや 軟 | 内・外: 灰白色5Y7/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | |
| | 454 | 8H SB203 | 須恵器 | 杯身 | ②3.3+a | 1mm以下白色粒子含 む | 軟 | 内・外: 灰白色5Y8/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | | |
| | 455 | 299図-20 | 8H SB203 | 須恵器 | 脚部 | ②2.5+a ③脚 部径(13.0) | 0.5mm大砂粒少量含 む | 良 | 内: 灰白色5Y7/1・ 外: 灰色(5YR6/1)-黒色(7.5Y2/1) | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 456 | 8H SB203 | 須恵器 | 小形甕 | ②2.0+a | 精良 | 良 | 内: 灰色7.5Y6/1-5/1・ 外: 灰色7.5Y5/1-4/1 | ナデ | ナデ | | |
| | 図92 | 457 | 299図-6 | 7/8H SB207 | 手づくね | 小形椀 ? | ①(5.2) ②4.1 ③(4.4) | 石英・長石細粒含む | 良 | 内・外: にぶい黄色2.5Y6/3 | ヨコナデ | ユビオサエ |
| 458 | | 299図-1 | 7/8H SB207 | 土師器 | 甕 | ①(14.6) ②10.5+a | 1-2mm砂粒含む | 良 | 内: にぶい黄褐色10YR7/2-7/3・ 外: にぶい橙色-褐色7.5YR6/4- 4/1 | ハケメ後ナ デ | 口縁部ナ デ・胴部ケ ズリ | |
| 459 | | 299図-2 | 7/8H SB207 | 土師器 | 甕 | ①(20.0) ②6.9+a | 1mm大砂粒多く含む | 良 | 内・外: 橙色7.5YR7/6 | ナデ | 口縁部ナ デ・胴部ユ ビオサエ・ ヘラケズリ 後ヨコナデ | |
| 460 | | 299図-4 | 7/8H SB207 | 土師器 | 把手 | ②8.7+a | 1-3mm大砂粒含む | やや 軟 | 内: 黄褐色10YR7/4・ 外: 橙色7.5YR7/4 | ハケメ後ナ デ | 縦方向ヘラ ケズリ | |
| 461 | | 299図-3・5 | 7/8H SB207 | 土師器 | 甕 | ①(20.5) ②13.0③6.0 | 1-5mm大砂粒多く含 む | 良 | 内: 明黄褐色-黄褐色10YR7/6-7/8 外: 灰白色-浅黄褐色10YR8/2-8/3 | 粗いナデ | 口縁部・胴 部上半粗い ヨコナデ・ 胴部下半ユ ビオサエ・ 横方向ケズ リ | |
| 462 | | 299図-14 | 7/8H SB207 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(13.5) ②3.5+a | 1mm大白色粒子含む | 良 | 内・外: 灰白色7.5Y7/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ナデ | |
| 463 | | 299図-13 | 7/8H SB207 | 須恵器 | 杯蓋 | ①14.5 ②4.6 | 2mm大砂粒含む | 良 | 内: 褐色10YR6/1・ 外: 灰白色2.5Y7/1 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | 口縁部外面にヘ ラ傷が廻る |
| 464 | | 7/8H SB207 | 須恵器 | 杯身 | ①(12.6) ②3.3+a ③受 部径(14.5) | 精良 | 良 | 内: 灰色N5/0-4/0・ 外: 灰色N4/0 | 回転ヘラケ ズリ・ナデ | ナデ | | |
| 465 | | 299図-12 | 7/8H SB207 | 須恵器 | 杯身 | ①(13.0) ②4.0+a ③受 部径(15.8) | 細砂粒わずかに含 む | 良 | 内・外: 灰色N6/0 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 底部外面ヘラ記号 |
| 466 | | 299図-8 | 7/8H SB207 | 須恵器 | 杯身 | ①(11.4) ②3.8 ③受部 径(14.0) | 精良 | 良 | 内・外: 灰白色N7/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ナデ | 一部焼け歪みによ り器壁窪み・亀裂 有 |

| 図 番号 | 遺物 番号 | 西報告・ 掲載図 番号等 | 出土地点・ 遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|---------|----------|--------------------|---------------|------|----------|--|-------------------------|----------|--|------------------------------------|-------------------------------|----------------------|
| | 467 | 299図-7 | 7/8H SB207 | 須恵器 | 杯身 | ①(12.0) ②3.4+ a ③受 部径(14.4) | 1mm大白色粒子含む | 良 | 内: 灰色N6/0・ 外: 灰色5Y6/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ナデ | |
| | 468 | 299図-10 | 7/8H SB207 | 須恵器 | 杯身 | ①(12.4) ②4.2+ a ③受 部径(15.0) | 細砂粒わずかに含 む | やや 軟 | 内・外: 灰白色5Y8/1 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 469 | 299図-11 | 7/8H SB207 | 須恵器 | 杯身 | ②3.7+ a ③受 部径(15.2) | 細砂粒少量含む | 良 | 内・外: オリーブ灰色2.5GY6/1 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 470 | 299図-15 | 7/8H SB207 | 須恵器 | 杯身 | ①(11.5-13.0) ②4.2 | 精良 | やや 不良 | 内・外: にぶい黄橙色10YR7/2 | 回転ヘラケ ズリ・ナデ | ナデ | 内面当て具痕 |
| | 471 | 299図-9 | 7/8H SB207 | 須恵器 | 杯身 | ①(12.2) ②4.1③受部 径(14.8) | 細砂粒少量含む | 良 | 内・外: 灰白色7.5Y7/1-7/2 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 472 | 299図-16 | 7/8H SB207 | 須恵器 | 甕 | ①(19.0) ②10.3+ a | 1-2mm砂粒少量含む | 軟 | 内: 灰白色5Y8/2・ 外: 灰白色5Y8/1 | 口縁部・頸部 ナデ・胴部タ クキ後カキ メ状のナデ | 口縁部・頸 部ヨコナ デ・胴部当 て具痕 | |
| 図94 | 473 | | 8H SB225 | 弥生土器 | 甕 | ①(31.6) ②5.5+ a | 細砂粒多く含む | 良 | 内・外: にぶい橙色7.5YR7/4 | 不明 | 不明 | |
| | 474 | 303図-5 | 8H SB225 | 弥生土器 | 支脚 | ②8.0+ a ③9.9 | 2mm大砂粒多く含む | 良 | 内・外: 橙色5YR6/6 | ユビオサエ 詳細不明 | | |
| | 475 | | 8H SB225 | 土師器 | 杯身 | ②3.6+ a | 細粒含む | 良 | 内: 浅黄橙色10YR8/3・ 外: 灰白色10YR8/2 | 不明 | 不明 | 底部外面板状圧痕 |
| | 476 | | 8H SB225 | 土師器 | 小形甕 | ②4.8+ a | 砂粒・長石含む | 良 | 内: にぶい黄褐色10YR5/3・ 外: 橙色5YR6/6 | 不明 | 不明 | |
| | 477 | 303図-3 | 8H SB225 | 土師器 | 甕 | ②6.1+ a | 2mm大砂粒含む | 良 | 内: にぶい橙色7.5YR7/4・ 外: 橙色7.5YR6/6 | ハケ | ヘラケズリ | |
| | 478 | 303図-4 | 8H SB225 | 土師器 | 把手 | ②7.0+ a | 1mm大砂粒含む | 良 | 内: 橙色7.5YR7/6・ 外: 橙色5YR6/6 | ヘラケズリ | ヘラケズリ | |
| | 479 | 303図-2 | 8H SB225 | 土師器 | 甕 | ①(20.2) ②12.6+ a | 2mm大砂粒含む | 良 | 内・外: にぶい橙色7.5YR7/4 | 口縁部ナデ・ 胴部縦方向 ハケ | 口縁部ナ デ・胴部ケ ズリ | |
| | 480 | 303図-10 | 8H SB225 | 須恵器 | 杯蓋 | ②3.4+ a | 精良 | 良 | 内: 灰色N6/0・ 外: 灰色N5/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 481 | 303図-8 | 8H SB225 | 須恵器 | 杯蓋 | ②3.3+ a | 1mm以下白色粒子少 量含む | 良 | 内: 灰色N5/0・ 外: 灰色10Y4/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 482 | 303図-6 | 8H SB225 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(13.0) ②4.3 | 1mm以下砂粒含む | 良 | 内: 灰白色10Y6/1・ 外: 灰白色10Y7/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 天井部外面ヘラ記 号・内面当て具痕 |
| | 483 | | 8H SB225 | 須恵器 | 杯蓋 | ①10.4-14.6 ②5.0 | 砂粒わずかに含む | 良 | 内: 灰白色N7/0・ 外: 灰白色(N8/0)-灰色10Y5/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 焼け歪み顕著 |
| | 484 | 303図-7 | 8H SB225 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(15.8) ②3.4+ a | 1-2mm白色粒子含む | 良 | 内: 灰色N6/0・ 外: 灰白色10Y7/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 485 | 303図-9 | 8H SB225 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(14.0) ②3.5+ a | 細砂粒含む | 良 | 内: 灰色N6/0・ 外: オリーブ灰色5GY6/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | |
| | 486 | 303図-11 | 8H SB225 | 須恵器 | 高杯 | ②9.5+ a | 0.5mm大砂粒含む | 軟 | 内: にぶい橙色7.5YR6/4・ 外: にぶい黄褐色10YR5/3 | ヨコナデ | ユビオサ エ・ヨコナ デ | |
| | 487 | | 8H SB225 | 石器 | 石庖丁 | ①残存長3.9+ a ②幅3.7 ③最大厚0.6 ④重量11.4 | | | | | | 凝灰岩 |
| | 488 | | 8H SB225 | 石器 | 石庖丁 | ①残存長5.6+ a ②幅4.0 ③最大厚0.55 ④重量20.4 | | | | | | 凝灰岩 |
| 図96 | 489 | | 8H SB226 | 土師器 | 碗 | ①(13.3)②5.3 | 精良 | 良 | 内・外: 橙色7.5YR6/8 | ハケ・ヘラミ ガキ | ヨコ方向ミ ガキ | |
| | 490 | | 8H SB226 | 土師器 | 碗 | ①14.0②6.0 | 砂粒含む | やや 軟 | 内・外: 明赤褐色5YR5/8 | ハケ・ヘラミ ガキ | ヘラミガ キ? | |
| | 491 | | 8H SB226 | 土師器 | 碗 | ①13.4②5.6 | 精良 | 良 | 内・外: 明褐色7.5YR5/8 | 丁寧なナデ | ナデ | 底部外面ヘラ記号 |
| | 492 | | 8H SB226 | 土師器 | 碗 | ①12.1②6.4 | 1-2mm砂粒含む | 良 | 内・外: 褐色10YR6/6 | ヨコハケ・ナ デ | ナデ | 底部外面ヘラ記 号? 工具痕? |
| | 493 | | 8H SB226 | 土師器 | 小壺 | ①(10.7) ②8.6+ a ③胴部最大径 (11.0) | 精良 | 良 | 内: 明茶褐色(10YR7/6)-黄橙色 (10YR7/8) 外: 黄橙色10YR7/8 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | |
| | 494 | | 8H SB226 | 土師器 | 小壺 | ①(10.0)②8.9 ③胴部最大径 (12.9) | 精良 | 良 | 内: 浅黄橙色(7.5YR8/4)-橙 (7.5YR7/6)・ 外: 橙色7.5YR7/6 | タキキ・横方 向ヘラミガ キ・ナデ | 当て具痕・ ヘラミガキ | 内外面化粧土施す |
| | 495 | | 8H SB226 | 土師器 | 壺 | ①(17.4) ②6.5+ a | 1-2mm白色粒子・3mm 以下砂粒含む | 良 | 内・外: 灰白色(10YR8/2)-浅黄橙 色(10YR8/3) | ヘラ状工具 による擦過 ナデ | ユビオサ エ・ナデ | |
| | 496 | | 8H SB226 | 土師器 | 壺 | ①(11.6) ②8.0+ a | 1-2mm砂粒多く含む | 良 | 内: 浅黄橙色10YR8/3 外: 明黄褐色10YR6/6 | ハケ・ナデ | 口縁部ハ ケ・ナデ・ 胴部ケズリ ・ナデ | |
| | 497 | | 8H SB226 | 土師器 | 小形甕 ? | ②7.7+ a | 1-3mm大砂粒多く含 む | 良 | 内・外: 橙色(7.5YR7/6)-黄橙色 (7.5YR7/8) | 丁寧なナデ | ユビオサ エ・ナデ | |
| | 498 | | 8H SB226 | 土師器 | 甕 | ①(17.0) ②17.0+ a ③胴部最大径 (16.4) | 1mm大白色粒子含む | 良 | 内・外: 淡黄褐色10YR8/3 | 不明 | 胴部下半ケ ズリ | |
| | 499 | | 8H SB226 | 土師器 | 甌 | ①(20.8) ②7.8+ a | 5mm以下の砂粒多く 含む | 良 | 内: 浅黄褐色(10YR8/4)-黄褐色 (10YR8/6) 外: 明黄褐色(10YR7/6)-黄褐色 (10YR7/8) | 横方向ケズ リ・ナデ | 横方向ケズ リ・ナデ | |
| | 500 | | 8H SB226 | 土師器 | 甌 | ①(26.0) ②12.0 | 5mm大石英粒多く含 む | 良 | 内: 浅黄色2.5Y7/3・ 外: 浅黄色(2.5Y7/3)-灰黄色 (2.5Y6/2) | ハケ・一部ヨ コナデ | ヘラケズ リ・一部ヨ コナデ | |
| | 501 | | 8H SB226 | 土師器 | 把手 | ②5.2+ a | 砂粒わずかに含む | 良 | 内・外: 橙色7.5Y7/6 | 不明 | 不明 | |

| 図番号 | 遺物番号 | 西報告・掲載図番号等 | 出土地点・遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|-----|------|------------|------------|------------|----|--|--|-------------|--|--|-----------------|-----------------|
| 図98 | 502 | | 8H SB226 | 土師器 | 把手 | ②7.2+ a | 白色砂粒多く含む | 良 | 内・外：橙色7.5Y6/6 | ヘラケズリ・ナデ | ヘラケズリ | |
| | 503 | | 8H SB226 | 土師器 | 甌 | ②5.3+ a | 砂粒多く含む | 良 | 内：淡黄橙色10YR8/3 外：にぶい黄橙色10YR7/3 | ハケ・ナデ | ユビオサエ・ナデ | |
| | 504 | | 8H SB226 | 須恵器 | 杯蓋 | ②2.8+ a | 砂粒含む | 良 | 内：灰色N6/0・ 外：灰色7.5Y6/1 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 505 | | 8H SB226 | 須恵器 | 杯身 | ①(10.0) ②2.8+ a ③受部径(12.8) | 砂粒含む | 良 | 内・外：灰色7.5Y5/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 506 | | 8H SB226 | 須恵器 | 杯身 | ①(12.8) ②3.0+ a ③受部径(15.1) | 細砂粒含む | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | 胴部焼成時に変形 |
| | 507 | | 8H SB226 | 須恵器 | 杯身 | ①(14.0) ②3.4+ a ③(10.6), 受部径(16.4) | 1-2mm砂粒含む | 良 | 内：灰色N6/0 外：灰白色(N7/0)-灰色(N6/0) | 回転ヘラケズリ・ナデ | ヨコナデ | 胴部外面熔着片有 |
| | 508 | 303図-1 | 8H SB226 | 須恵器 | 甌 | ①(10.2) ②10.2③胴部最大径10.7 | 0.1mmの細粒含む | 良 | 内：灰色5Y6/1・ 外：灰色(5Y4/1)-黄灰色(2.5Y6/1) | ヘラケズリ・ヨコナデ | 頸部ヨコナデ・胴部下半当て具痕 | |
| | 図99 | 509 | | 2I区 溝 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長19.8+ a ②残存幅12.4+ a ③最大厚2.4 ④重量585 | 1-2mm白色粒子含む | 良 | 凹面：灰白色N6/0 凸面：灰白色N8/0-7/0 | 凹面：布目圧痕・一部すり消し | 凸面：格子目叩き・一部すり消し |
| 510 | | | 2I区 溝 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長9.5+ a ②残存幅10.9+ a ③最大厚1.6 ④重量167 | 1-3mm白色砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色N8/0-7/0 凸面：灰白色N8/0-7/0 | 凹面：布目圧痕 | 凸面：格子目叩き・一部すり消し | 円筒桶・分割突帯?・側面分割面 |
| 511 | | | 2I区 溝+包含層 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長11.5+ a ②残存幅9.0+ a ③最大厚2.2 ④重量360 | 1-3mm砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色-灰色7.5Y7/1-6/1 凸面：灰白色5Y8/1-7/1 | 凹面：布目圧痕 | 凸面：格子目叩き | 側面分割面 |
| 512 | | | 2I区 溝+包含層 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長23.5+ a ②残存幅5.4+ a ③最大厚2.0 ④重量690 | 1-3mm砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色-灰黄色2.5Y7/1-7/2 凸面：灰白色5Y8/1-8/2 | 凹面：布目圧痕 | 凸面：格子目叩き・粗いナデ | 分割突帯?・側面分割面 |
| 513 | | | 2I区 溝+包含層 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長12.4+ a ②残存幅10.5+ a ③最大厚1.5 ④重量220 | 1-2mm砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色2.5Y7/1 凸面：灰白色2.5Y7/1 | 凹面：布目圧痕・すり消し | 凸面：格子目叩き・一部すり消し | |
| 514 | | | I区大溝・2号溝 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長10.1+ a ②残存幅8.3+ a ③最大厚2.1 ④重量180 | 1mm以下白色粒子多く含む | 良 | 凹面：灰白色N7/0 凸面：灰白色N8/0-7/0 | 凹面：布目圧痕 | 凸面：格子目叩き | 側面分割面 |
| 515 | | | I区大溝・2号溝 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長9.0+ a ②残存幅9.8+ a ③最大厚1.9 ④重量250 | 1-2mm大砂粒多く含む | 良 | 凹面：灰色7.5Y5/1 凸面：灰色7.5Y5/1 | 凹面：布目圧痕 | 凸面：格子目叩き | |
| 図99 | | 516 | | H.7調査 I区 溝 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長12.9+ a ②残存幅12.8+ a ③最大厚1.8 ④重量340 | 1-2mm大砂粒含む | 良 | 凹面：灰色-オリーブ黒色10Y4/1-3/1 凸面：灰白色-灰色5Y7/1-5/1 | 凹面：布目圧痕 | 凸面：格子目叩き |
| | 517 | | H.7調査 I区 溝 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長14.0+ a ②残存幅9.4+ a ③最大厚1.6 ④重量270 | 1-2mm大砂粒含む | 良 | 凹面：黒褐色-黒色2.5Y3/1-2/1 凸面：灰白色-灰色7.5Y8/1-5/1 | 凹面：布目圧痕 | 凸面：格子目叩き | 円筒桶・分割突帯・側面分割面 |
| | 518 | | H.7調査 I区 溝 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長20.0+ a ②残存幅14.0+ a ③最大厚2.1 ④重量580 | 砂粒多く含む | やや軟 | 凹面：灰白色2.5Y8/1-7/1 凸面：灰白色2.5Y8/1 | 凹面：布目圧痕 | 凸面：格子目叩き | 円筒桶・粘土継ぎ目 |
| | 519 | | H.7調査 I区 溝 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長14.5+ a ②残存幅11.3+ a ③最大厚1.8 ④重量340 | 1-6mm大砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色(10Y7/1)-灰色(N5/0) 凸面：灰白色N7/0 | 凹面：なで | 凸面：格子目叩き | 円筒桶・側面分割面 |
| | 520 | | H.7調査 I区 溝 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長15.0+ a ②残存幅14.0+ a ③最大厚2.1 ④重量400 | 1-2mm大砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色2.5Y8/1 凸面：灰白色2.5Y8/1-8/2 | 凹面：布目圧痕 | 凸面：格子目叩き | 円筒桶・粘土継ぎ目・側面分割面 |
| | 521 | | 4I区 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長20.2+ a ②残存幅16.2+ a ③最大厚2.1 ④重量810 | 5mm以上の砂粒少量, 1-2mm砂粒多く含む | 良 | 凹面：灰白色N8/0-7/0 凸面：灰白色-灰色N8/0-5/0 | 凹面：布目圧痕 | 凸面：格子目叩き・一部すり消し | 円筒桶・側面分割面 |
| | 522 | | 4I区 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長8.0+ a ②残存幅5.3+ a ③最大厚1.5 ④重量300 | 1-3mm砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色N7/0 凸面：灰白色N7-灰色7/0-6/0 | 凹面：布目圧痕 | 凸面：格子目叩き | 円筒桶・分割突帯・側面分割面 |
| | 523 | | 4I区 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長9.2+ a ②残存幅12.8+ a ③最大厚2.1 ④重量300 | 砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色N7/0 凸面：灰白色N7/0 | 凹面：すり消し | 凸面：格子目叩き・一部すり消し | 円筒桶・側面分割面 |

| 図番号 | 遺物番号 | 西報告・掲載図番号等 | 出土地点・遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|------|------|------------|----------|-----|-----------------------|--|------------------------|-------------------------|--|----------------|-------------|-------------------|
| 図100 | 524 | | 4I区 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長24.0+ <i>a</i> ②残存幅14.8+ <i>a</i> ③最大厚2.0 ④重量990 | 1-3mm白色砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色-灰色7.5Y7/1-5/1 凸面：灰白色-灰色7.5Y7/1-5/1 | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：格子目叩き | 側面分割面 |
| | 525 | | 4I区 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長13.7+ <i>a</i> ②残存幅15.1+ <i>a</i> ③最大厚1.5 ④重量600 | 1-2mm砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色N7/0-8/0 凸面：灰白色N7/0-8/0 | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：格子目叩き | 側面分割面 |
| | 526 | | 4I区 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長19.5+ <i>a</i> ②残存幅13.1+ <i>a</i> ③最大厚1.7 ④重量550 | 白色粒子多く含む・ 2mm大砂粒含む | やや軟 | 凹面：灰色N5/0-4/0 凸面：灰白色-灰色N8/0-6/0 | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：格子目叩き | |
| | 527 | | 4I区 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長7.2+ <i>a</i> ②残存幅8.6+ <i>a</i> ③最大厚1.9 ④重量250 | 1mm大砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色(N8/0)-灰色(N4/0) 凸面：灰白色(N8/0)-灰色(N6/0) | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：格子目叩き | 分割突帯・側面分割面 |
| 図101 | 528 | | 4I区 | 瓦 | 軒丸瓦 | ①最大長13.2+ <i>a</i> ③最大厚4.0 ④重量456 | 1-2mm白色粒子含む | 良 | 灰白色10Y8/1 | | 指押さえ・ ナデ | |
| | 529 | | 4I区 | 瓦 | 軒丸瓦 | ①最大長15.0+ <i>a</i> ③最大厚4.8 ④重量435 | 1mm第砂粒少量・1mm以下白色粒子含む | 良 | 灰白色7.5Y8/1-7/1 | | ナデ | |
| | 530 | | I区2号溝 | 瓦 | 鬼瓦 | ①最大長11.0+ <i>a</i> ②残存幅8.4+ <i>a</i> ③最大厚6.1 ④重量358 | 1-2mm砂粒含む | 良 | 灰白色-灰色N7/0-6/0 | ナデ | | 鼻 |
| | 531 | | I区2号溝 | 瓦 | 鬼瓦 | ①最大長6.4+ <i>a</i> ②残存幅4.2+ <i>a</i> ③最大厚2.8 ④重量56 | 1-2mm大砂粒少量・1mm以下白色粒子含む | 良 | 灰白色N7/0.7.5Y8/1-7/1 | ナデ | | 眉 |
| 図104 | 532 | 310図-8 | 6L SB001 | 須恵器 | 杯蓋 | ①11.5-12.8 ②3.8 | 精良 | 良 | 内・外：灰色7.5Y5/1 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ナデ | 外面ヘラ記号・焼け歪み顕著 |
| | 533 | 310図-9 | 6L SB001 | 須恵器 | 杯蓋 | ①10.4-13.0 ②4.0 | 精良 | 良 | 内・外：灰色N5/0 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ナデ | 外面ヘラ記号・焼け歪み |
| | 534 | 310図-10 | 6L SB001 | 須恵器 | 杯蓋 | ①13.3②3.8 | 精良 | 良 | 内：灰白色 2.5Y7/1・ 外：灰白色5Y8/1 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ナデ | |
| | 535 | 310図-3 | 6L SB001 | 須恵器 | 杯身 | ①10.9②3.8 ③受部径12.9 | 4mm大石英粒含む | 良 | 内：灰色7.5Y5/1・ 外：灰白色5Y7/1 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | 底部外面ヘラ記号 |
| | 536 | 310図-5 | 6L SB001 | 須恵器 | 杯身 | ①11.0②4.2 ③受部径13.0 | 砂粒をわずかに含む | 良 | 内・外：オリープ灰2.5GY6/1 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | 底部外面ヘラ記号 |
| | 537 | 310図-4 | 6L SB001 | 須恵器 | 杯身 | ①11.2②3.9 ③受部径13.5 | 精良 | 良 | 内・外：オリープ灰色2.5GY6/1 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | 底部外面ヘラ記号 |
| | 538 | 310図-6 | 6L SB001 | 須恵器 | 杯身 | ①11.5②4.2 ③受部径13.6 | 砂粒含む | 良 | 内：オリープ灰2.5GY6/1・ 外：オリープ灰2.5GY5/1 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | 底部外面ヘラ記号 |
| | 539 | 310図-7 | 6L SB001 | 須恵器 | 杯身 | ①11.5②4.1 ③受部径13.9 | 細粒含む | 良 | 内：明オリープ灰2.5GY7/1・ 外：オリープ灰2.5GY6/1 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 540 | 310図-11 | 6L SB001 | 須恵器 | 高杯蓋 | ①14.4②4.5 ③つまみ径2.5 | 精良 | 良 | 内：灰色N5/0・ 外：灰色7.5Y5/1 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 541 | 310図-12 | 6L SB001 | 須恵器 | 高杯蓋 | ①14.4②4.5 ③つまみ径2.7 | 長石粒わずかに含む | 良 | 内・外：灰色N5/0 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 542 | 310図-13 | 6L SB001 | 須恵器 | 椀 | ①11.6-12.6 ②10.6 | 細砂粒含む | 良 | 内・外：灰色N4/0 | 丁寧なヨコナデ | 丁寧なヨコナデ | 底部外面ヘラ記号・楕円形に焼け歪む |
| | 543 | 310図-1 | 6L SB001 | 土師器 | 小甕 | ①14.8②16.2 ③胴部最大径14.8 | 良 | 良 | 内・外：橙色7.5YR6/6 | ハケ | ケズリ | |
| | 544 | 310図-2 | 6L SB001 | 土師器 | 甕 | ①19.0②37.4 ③胴部最大径28.0 | 1-2mm石英粒含む | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/3 | ハケ | ヘラケズリ | |
| 図106 | 545 | 60 SX302B | 須恵器 | 杯蓋 | ①14.7②1.8 ③つまみ径2.4 | 0.1mm大の白色砂粒多く含む | 良 | 内・外：灰白色N7/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | | |
| | 546 | 60 SX302B | 須恵器 | 杯蓋 | ①16.3②2.8 ③つまみ径2.6 | 砂粒わずかに含む | 良 | 内・外：灰色N6/0 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | | |
| | 547 | 60 SX302B | 須恵器 | 杯B身 | ②3.1+ <i>a</i> ③(9.8) | 0.1mm大の白色砂粒含む | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | | |
| | 548 | 60 SX302B | 須恵器 | 杯B身 | ①(13.1)②4.1 ③(8.2) | 0.1mm大の白色砂粒含む | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | | |
| | 549 | 60 SX302B | 須恵器 | 杯A身 | ①13.3②4.0 ③8.0 | 精良 | 良 | 内：灰白色5Y8/1・ 外：灰色N5/0 | 回転ヘラ切・ ナデ | ナデ | | |
| | 550 | 60 SX302B | 須恵器 | 盤 | ①(16.6)②2.0 ③(12.0) | 0.1mm大の白色砂粒含む | 軟 | 内・外：灰白色5Y7/1 | ナデ | ヨコナデ | | |
| | 551 | 60 SX302B | 須恵器 | 壺 | ②4.3+ <i>a</i> | 良 | 良 | 内・外：灰色N5/0 | ヘラケズリ・ ナデ | 回転ヘラケズリ・ ナデ | | |
| | 552 | 60 SX302B | 須恵器 | 甕 | ②5.7+ <i>a</i> | 精良 | 良 | 内：灰色N7/0・ 外：灰色N4/0 | タタキ・ナデ | ユビオサエ・ ナデ | 外面ヘラ記号 | |

| 図番号 | 遺物番号 | 西報告・掲載図番号等 | 出土地点・遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|------|------|------------|-----------|-------|----------------------------------|--|-----------------------|----------------------------------|--|---------------------------------------|-----------------------------|--------------|
| 図107 | 553 | | 60 SX302B | 瓦器 | 椀 | ①(17.0)②4.8 ③6.1 | 精良 | 良 | 内：灰色N6/0・ 外：灰色N4/0 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | |
| | 554 | | 60 SX302B | 瓦器 | 椀 | ①(15.8)②4.4 ③(7.6) | 精良 | 良 | 内：灰色7.5Y4/1・ 外：灰白色5Y8/1 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 内外面とも炭素吸着 |
| | 555 | | 60 SX302B | 瓦器 | 椀 | ①(17.6)②6.3 ③6.9 | 精良 | 良 | 内：灰白色5Y8/1・ 外：灰色N4/0 | 底回転ナデ | 器面荒れ不明 | 底部外面板状圧痕 |
| | 556 | | 60 SX302C | 須恵器 | 杯蓋 | ①(14.5)②2.6 ③つまみ径(1.6) | 精良 | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ヘラケズリ・ ナデ | ナデ | |
| | 557 | | 60 SX302C | 須恵器 | 杯蓋 | ①(15.5)②2.4 ③つまみ径3.0 | 細かい砂粒含む | 良 | 内：灰色N6/0・ 外：灰色N5/0 | 回転ヘラケズリ・ ナデ | ナデ | |
| | 558 | | 60 SX302C | 須恵器 | 杯蓋 | ①(15.3) ②1.3+a | 0.1mm大の白色砂粒含む | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 559 | | 60 SX302C | 須恵器 | 杯蓋 | ①(15.0) | 1-2mm砂粒含む | 良 | 内：紫灰色5P6/1・ 外：紫灰色5PB6/1 | ナデ | ナデ | 焼け歪み著しい |
| | 560 | | 60 SX302C | 須恵器 | 杯蓋 | ①(19.6)②1.8 | 0.1mm大の白色砂粒含む | 良 | 内・外：灰白色2.5Y7/1 | ヨコナデ | ナデ | |
| | 561 | | 60 SX302C | 須恵器 | 杯B身 | ①19.8②4.3 ③9.9 | 1-2mm砂粒やや多く含む | 良 | 内・外：オリープ灰色5GY6/1 | 底部回転ヘラ切・ ナデ | ナデ | |
| | 562 | | 60 SX302C | 須恵器 | 杯B身 | ①(16.0)②6.1 ③(11.2) | 0.1mm大の白色砂粒含む | 軟 | 内・外：にぶい黄褐色10YR7/3 | ヨコナデ | ナデ | |
| | 563 | | 60 SX302C | 須恵器 | 杯B身 | ①(12.2)②4.1 ③(8.0) | 精良 | 良 | 内：青灰色5PB5/1・ 外：灰色N6/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 564 | | 60 SX302C | 須恵器 | 杯B身 | ①(13.2)②4.1 ③8.3 | 精良 | 良 | 内：灰色N5/0・ 外：灰白色2.5Y7/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 565 | | 60 SX302C | 須恵器 | 杯身 | ①(13.8) ②4.0+a | 砂粒含む | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 566 | | 60 SX302C | 須恵器 | 盤 | ①(17.4)②2.9 ③(14.0) | 0.1mm大の白色砂粒わずかに含む | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 567 | | 60 SX302C | 須恵器 | 高杯 | ②4.4③7.4 | 1mm以下白色粒子含む | 良 | 内・外：灰色N5/0 | ナデ | ナデ | |
| | 568 | | 60 SX302C | 須恵器 | 高杯 | ②4.7+a ③(14.0) | 0.1mm大の白色砂粒含む | 良 | 内・外：灰黄褐色10YR6/2 | ヨコナデ | ナデ | |
| | 569 | | 60 SX302C | 須恵器 | 高杯 | ①(15.2)②7.5 ③9.9 | 砂粒多く含む | 良 | 内・外：灰白色5Y7/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 570 | | 60 SX302C | 須恵器 | 甕 | ②14.0+a ③3.5 | 良 | 良 | 内・外：青灰色5PB5/1 | 底部・胴下半 回転ヘラケズリ・ 同上半ナデ | 絞り痕・ ナデ | 底部外面ヘラ記号 |
| | 571 | | 60 SX302C | 須恵器 | 瓶類 | ①8.4 ②8.9+a | 石英少量含む | 良 | 内・外：灰色10Y5/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 572 | | 60 SX302C | 須恵器 | 瓶子 | ①8.2 ②8.2+a | 砂粒含む | 良 | 内・外：青灰色5PB6/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| 573 | | 60 SX302C | 須恵器 | 把手付甕? | ②7.4 | 黒色砂粒含む | 良 | 内：灰白色N7/0・ 外：灰色N6/0 | タタキ | 当て具痕 | | |
| 574 | | 60 SX302C | 須恵器 | 甕 | ①(10.8) ②17.8③胴部 最大径(17.0) | 0.1mm大の白色砂粒含む | 良 | 内・外：灰色N4/0 | 口縁・胴上半 ヨコナデ・ 胴部下半 タタキ | 口縁部・ 胴部上半 ヨコナデ・ 胴部下半 当て具痕 | | |
| 575 | | 60 SX302C | 須恵器 | 甕 | ②11.5+a | 0.1mm大の白色砂粒含む | 良 | 内・外：灰色N4/0 | ヨコナデ | 頸部ヨコナデ・ 胴部当て具痕 | | |
| 576 | | 60 SX302C | 土師器 | 皿 | ①(14.0)②3.6 | 0.1mm大の白色砂粒含む | 軟 | 内：にぶい橙色5YR7/4・ 外：浅黄褐色7.5YR8/4 | 摩擦のため 不明 | ヨコナデ | | |
| 577 | | 60 SX302C | 瓦器 | 椀 | ①(16.7)②4.9 ③(7.8) | 精良 | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 口縁部内外面炭素吸着・ 底外面接地のため器面荒れ | |
| 図108 | 578 | | 60区 SX302 | 瓦 | 面戸瓦 | ①最大長6.9+a ②残存幅9.8+a ③最大厚1.5④重量100 | 1-2mm大白色粒子・5mm大砂粒少量含む | 良 | 凹面：暗灰色(N3/0)・ 灰色(N6/0) 凸面：暗灰色(N3/0)・ 灰色(N6/0) | 凹面：布目圧痕・ 端面面取り | 凸面：縄目叩き・ 一部すり消し | |
| | 579 | | 5N区 整地層 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長12.5+a ②残存幅9.7+a ③最大厚1.9④重量238 | 1mm以下白色粒子含む | やや軟 | 凹面：灰白色5Y7/1 凸面：灰白色5Y7/1 | 凹面：不明 | 凸面：格子目叩き | |
| 図112 | 580 | 303図-12 | 12H SB413 | 土師器 | 小形甕 | ①(11.5)②7.3 ③胴部最大径(11.4) | | 良 | 内・外：明赤褐色2.5YR5/8 | 頸部ハケ・ ナデ消し・ 胴部ナデ | 頸部ハケ・ ナデ | |
| 図114 | 581 | 303図-19 | 12H SB414 | 土師器 | 椀 | ②4.9 | 1-2mm砂粒含む | 良 | 内：灰白色10YR8/2・ 外：浅黄褐色10YR8/3 | ナデ? | ナデ? | SB413出土土器と接合 |
| | 582 | 303図-18 | 12H SB414 | 土師器 | 椀 | ①12.6②6.2 | 1mm大砂粒少量含む | 良 | 内・外：明赤褐色5YR5/6 | 口縁・胴部 ナデ・ 底部ヘラケズリ | ユビオサエ・ ナデ | |
| | 583 | 303図-3 | 12H SB414 | 土師器 | 椀 | ①13.0②5.1 | 細砂粒わずかに含む | 良 | 内：橙色(7.5YR6/6)・ 外：橙色5YR6/6 | ミガキ? | 不明 | |
| | 584 | 303図-17 | 12H SB414 | 土師器 | 椀 | ①14.8②5.7 | 精良・1mm大砂粒わずかに含む | 良 | 内・外：明赤褐色5YR5/6 | 口縁・胴部 ナデ・ 底部ヘラケズリ | ナデ | |
| | 585 | 303図-16 | 12H SB414 | 土師器 | 小形甕 | ①(14.0)②8.7 ③胴部最大径(12.8) | 砂粒多く含む | 良 | 内：橙色5YR7/6・ 外：橙色5YR6/6 | 口縁部ヨコナデ・ 胴部 タテハケ | ナデ | |
| | 586 | 303図-13 | 12H SB414 | 土師器 | 甕 | ①18.8②30.2 ③胴部最大径24.0 | 1-3mm大砂粒多く含む | 良 | 内・外：橙色7.5YR7/6 | 口縁部ユビオサエ・ ナデ・ 胴部ハケ | 口縁部ヨコナデ・ 胴部 ケズリ | |
| | 587 | 303図-14 | 12H SB414 | 土師器 | 甕 | ②17.5③胴部 最大径(32.0) | 3mm大砂粒多く含む | 良 | 内・外：橙色7.5YR6/6 | ハケ・ ケズリ・ ナデ | ナデ | |
| | 588 | 303図-15 | 12H SB414 | 土師器 | 甕 | | 良 | 内・外：橙色7.5YR6/6 | | | | 587と同一個体 |

| 図 番号 | 遺物 番号 | 西報告・ 掲載図 番号等 | 出土地点・ 遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 | |
|---------|----------|--------------------|--------------|-----------|----------|-----------------------------------|-------------------|-----------------|--|---|--|---|--|
| 図116 | 589 | | 13N SB701 | 須恵器 | 杯蓋 | ②3.5+ a | 長石・石英少量含む | 良 | 内：灰色7.5Y5/1・ 外：灰色(7.5Y4/1)-黄灰色 (2.5Y6/1) | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | | |
| | 590 | 313図-3 | 13N SB701 | 須恵器 | 杯身 | ①(11.3)②4.1 ③受部径13.8 | 1-2mm砂粒含む | 良 | 内：黄灰色2.5Y6/1・ 外：黄灰色(2.5Y6/1)-暗黄灰色 (2.5Y5/2) | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | | |
| | 591 | | 13N SB701 | 須恵器 | 杯身 | ①(9.9)② 2.2+ a ③受部 径(12.0) | 長石含む | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | | |
| | 592 | | 13N SB701 | 須恵器 | 杯身 | ①(10.9)②3.1 ③受部径13.6 | 長石含む | 良 | 内・外：灰色5Y6/1 | ヘラケズリ・ ヨコナデ | ヨコナデ | | |
| | 593 | | 13N SB701 | 須恵器 | 椀 | ①(9.5)②5.3 | 長石・石英少量含む | 良 | 内：灰色5Y6/1・ 外：灰色(5Y6/1)-灰オリーブ色 (5Y6/2) | 底部ヘラ切・ ヘラケズリ・ 口縁部ヨコ ナデ | ヨコナデ | | |
| | 594 | 313図-4 | 13N SB701 | 須恵器 | 高杯 | ①14.1 ②19.3+ a ③ 受部径16.2 | 1-2mm大砂粒を含む | 良 | 内・外：灰色7.5Y7/1 | 杯部ヘラケ ズリ・ヨコナ デ・脚部カキ メ・ヨコナデ | ヨコナデ | | |
| | 595 | 313図-5 | 13N SB701 | 須恵器 | 甕 | ①22.0 ②8.0+ a | 1mm大砂粒を含む | やや 軟 | 内・外：灰色N5/0 | 口縁部ヨコ ナデ・胴部擬 格子タタキ | 口縁部ヨコ ナデ・胴部 当て具痕 | | |
| | 596 | 313図-1 | 13N SB701 | 土師器 | 甕 | ②8.8+ a ③胴 部最大径11.4 | 石英・長石多く含む | 良 | 内：にぶい黄橙色10YR7/4・ 外：にぶい黄橙色(10YR7/4)-橙色 (5YR6/6) | 不明 | ケズリ | | |
| 図118 | 597 | | 13N SB702 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(12.9) ②1.6+ a | 石英含む | 良 | 内・外：灰色5Y6/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | | |
| | 598 | | 13N SB702 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(13.6) ②2.5+ a | 石英含む | 良 | 内：灰色5Y5/1・ 外：灰色5Y4/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | | |
| | 599 | | 13N SB702 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(15.6) ②2.9+ a | 石英・長石含む | 良 | 内・外：黄灰色2.5Y6/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | | |
| | 600 | | 13N SB702 | 土師器 | 小形甕 | ①(13.0) ②12.0③胴部 最大径11.4 | 1mm大白色粒子・砂 粒含む | 良 | 内：暗黄灰色(2.5Y4/2)-黒褐色 (2.5Y3/1・ 外：黄灰色(2.5Y4/1)-暗黄灰色 (2.5Y5/2) | 口縁部ヨコ ナデ・胴部以 下ハケメ | 口縁部ヨコ ナデ・胴部 以下ケズリ | | |
| 図120 | 601 | | 13N SB703 | 須恵器 | 平瓶 | ①(9.5) ②4.4+ a | 長石含む | 良 | 内・外：灰色7.5Y6/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | | |
| 図122 | 602 | 313図-6 | 13N SB705 | 土師器 | 小形甕 | ③胴部最大径 11.6 | 砂粒多く含む | 不良 | 内・外：橙色7.5YR6/4 | 不明 | ケズリ | | |
| | 603 | 313図-8 | 13N SB705 | 須恵器 | 杯蓋 | ①12.7②4.1 | 1-2mm大砂粒含む | 良 | 内・外：灰色5Y6/1 | 回転ヘラケ ズリ・回転ヨ コナデ | 回転ヨコナ デ | 天井部外面ヘラ記 号 | |
| | 604 | 313図-9 | 13N SB705 | 須恵器 | 杯蓋 | ①13.7②4.7 | 石英・長石含む | 良 | 内：灰オリーブ色5Y5/2・ 外：暗黄灰色2.5Y5/2 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 天井部外面ヘラ記 号・焼け歪みによ り器壁一部断裂 | |
| | 605 | | 13N SB705 | 須恵器 | 杯蓋 | ①12.7②4.7 | 石英・長石含む | 良 | 内・外：浅黄色(2.5Y7/4)-明黄褐色 (2.5Y7/6) | 回転ヘラケ ズリ | 不明 | 天井部外面ヘラ記 号 | |
| | 606 | 313図-10 | 13N SB705 | 須恵器 | 椀 | ①(16.0) ②6.6+ a | 精良 | 良 | 内・外：灰色5Y5/1 | 口縁部・胴部 上半カキメ・ 胴部ヘラケ ズリ・ナデ | ナデ | | |
| | 607 | 313図-7 | 13N SB705 | 須恵器 | 甕 | ①23.4②19.5 ③7.4 | 石英・長石少量含む | 良 | 内・外：灰色7.5Y6/1 | 口縁部ナデ・ 胴部上半ハ ケメ後ナデ・ 胴部下半タ タキ・ナデ | ナデ | 口縁部外面下位に カキメ・焼け歪み により器形大きく ゆがむ | |
| | 608 | 313図-11 | 13N SB705 | 須恵器 | 甕 | ①(21.2) ②20.9+ a | 砂粒含む | やや 軟 | 内・外：灰白色・浅黄色5Y7/2-7/3 | 口縁部ユビ オサエ・ナ デ・胴部タ タキ | 胴部中位にヘラ記 号・頸部屈曲部外 面にハケメ工具の 当たった痕跡 | | |
| | 図124 | 609 | | 11I SX402 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(14.8)②3.5 | 1mm以下白色粒子含 む | 良 | 内：灰白色2.5Y7/1・ 外：灰白色2.5Y8/1 | 回転ヘラケ ズリ・ナデ | ナデ | |
| 610 | | | 11I SX402 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(11.6)②4.9 | 1-2mm砂粒少量含む | 軟 | 内：灰白色5Y8/1・ 外：灰黄色(2.5Y6/2)-灰白色 (5Y8/1) | 回転ヘラケ ズリ・ナデ | ナデ | | |
| 611 | | | 11I SX402 | 須恵器 | 杯蓋・ 身 | ①杯蓋14.5 ②蓋・身7.2 ③杯身5.7 | 2-4mm大砂粒少量含 む | 良 | 内：灰白色N7/0・ 外：灰色(N8/0)-暗灰色(N3/0) | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | 杯身底部内 面に圧痕 | 杯蓋・身が熔着・全 体に灰被り | |
| 612 | | | 11I SX402 | 須恵器 | 杯身 | ①(12.4)②4.5 ③受部径 (15.0) | 1mm大白色粒子含む | 良 | 内：灰色N6/0・ 外：灰白色5Y6/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ナデ | 内面発泡・外面熔 着片 | |
| 613 | | | 11I SX402 | 須恵器 | 杯身 | ①12.3②4.8 ③受部径14.9 | 2mm大砂粒含む | 良 | 内・外：褐色10YR5/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ナデ | 焼け歪み | |
| 614 | | | 11I SX402 | 須恵器 | 杯身 | ①(13.6)②3.6 ③受部径 (15.0) | 2-3mm砂粒少量含む | 良 | 内：灰色N5/0・ 外：灰色7.5Y5/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ナデ | 外面熔着片 | |
| 615 | | | 11I SX402 | 須恵器 | 杯身 | ①(14.5)②4.0 ③受部径 (15.8) | 1mm白色粒子含む | 良 | 内：灰白色N7/0・ 外：灰色N4/0 | ナデ | ナデ | | |
| 616 | | | 11I SX402 | 須恵器 | 杯身 | ①(13.5) ②4.2+ a ③受 部径(15.6) | 1mm以下黒色粒子含 む | 良 | 内：黄灰色2.5Y6/1・ 外：黄灰色2.5Y5/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | 回転ヘラケ ズリ・ヨコ ナデ | 底部外面ヘラ記号 | |
| 617 | | | 11I SX402 | 須恵器 | 蓋杯・ 甕 | ①杯蓋口径 (13.0)②甕口 径(16.3) | | 良 | 蓋杯・内外：灰色7.5Y4/1・ 甕・内外：青灰5B5/1 | | | 自然釉・灰被り | |
| 618 | | | 11I SX402 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(14.3) ②2.0+ a | 精良 | 良 | 内：灰白色N7/0・ 外：灰色N6/0 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ナデ | 焼け歪み | |
| 619 | | | 11I SX402 | 須恵器 | 杯蓋 | ①14.6②2.7 ③つまみ径2.5 | 1mm大砂粒含む | やや 軟 | 内・外：浅黄色2.5Y7/3 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ナデ | 外面ヘラ記号 | |

| 図番号 | 遺物番号 | 西報告・掲載図番号等 | 出土地点・遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|------|------|------------|-----------|-----|------|----------------------------------|--------------------|----|--|----------------------|--------------------|-------------------------------------|
| | 620 | | 111 SX402 | 須恵器 | 杯蓋 | ①14.5②1.4 ③つまみ径2.9 | 1-2mm大砂粒含む | 良 | 内：灰色N5/0・ 外：灰白色N7/0 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ナデ | 焼け歪み・外面熔着片 |
| | 621 | | 111 SX402 | 須恵器 | 杯蓋 | ①14.6②1.0 ③つまみ径2.7 | 精良 | 良 | 内：灰色N6/0・ 外：灰色N5/0 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ナデ | 焼け歪み顕著 |
| | 622 | | 111 SX402 | 須恵器 | 杯B身 | ①(13.4)②4.9 ③(9.6) | 1-2mm砂粒含む | 良 | 内：灰白色2.5Y7/1・ 外：灰白色2.5Y8/1 | 不明 | ナデ | |
| | 623 | | 111 SX402 | 須恵器 | 杯B身 | ②4.2+a ③(10.7) | 1mm以下白色粒子含む | 良 | 内：灰白色2.5Y7/1・ 外：灰黄色2.5Y6/2 | ナデ | ナデ | |
| | 624 | | 111 SX402 | 須恵器 | 杯B身 | ①(12.8)②3.9 ③(8.6) | 1mm以下黒色粒子含む | 良 | 内：黄灰色2.5Y6/1・ 外：灰色N6/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 625 | | 111 SX402 | 須恵器 | 杯B身 | ②3.1+a ③(10.7) | 1mm以下白色粒子含む | 良 | 内・外：灰白色N7/0 | ナデ | ナデ | |
| | 626 | | 111 SX402 | 須恵器 | 蓋 | ①(8.6)②4.5 ③つまみ径(3.0) | 5mm大砂粒少量含む | 良 | 内：灰色N6/0・ 外：青灰色10BG5/1 | 回転ヘラケズリ・ナデ | ナデ | |
| | 627 | | 111 SX402 | 須恵器 | 高杯蓋? | ②4.3+a | 1mm大砂粒少量含む | 良 | 内：灰白色N7/0・ 外：灰色5Y6/1 | カキメ・ナデ | ナデ | |
| | 628 | | 111 SX402 | 須恵器 | 高杯蓋 | ②3.7+a③つまみ径3.0 | 1-2mm砂粒含む | 良 | 内・外：灰色N5/0 | カキメ・ナデ | ナデ | 焼け歪み |
| | 629 | | 111 SX402 | 須恵器 | 高杯 | ②9.4+a | 精良 | 良 | 内：灰色7.5Y5/1・ 外：灰色(5Y6/1)-オリーフ黒(5Y3/1) | ナデ | シボリ痕 | 焼け歪み・自然釉かかる |
| | 630 | | 111 SX402 | 須恵器 | 高杯 | ②10.6+a ③(12.7) | 1-2mm白色粒子含む | 良 | 内：灰白色N7/0・ 外：灰色N6/0 | カキメ・ナデ | シボリ痕・ナデ | 脚端部焼け歪み |
| | 631 | | 111 SX402 | 須恵器 | 高杯 | ②15.3+a ③(15.1) | 精良 | 良 | 内：灰白色N7/0・ 外：灰色N4/0 | 脚部下半カキメ・他はナデ | シボリ痕・ナデ | |
| 図125 | 632 | | 111 SX402 | 須恵器 | 提瓶 | ①(5.0)程 ②4.8+a | 1-5mm砂粒1mm以下白色粒子含む | 良 | 内：灰白色2.5Y7/1・ 外：灰白色2.5Y8/1 | ナデ | ナデ | 外面自然釉・灰被り |
| | 633 | | 111 SX402 | 須恵器 | 短頸壺 | ①(8.2) ②4.0+a | 1-2mm砂粒含む | 良 | 内：黄灰色2.5Y4/1・ 外：灰白色(2.5Y8/1)-黄灰色(2.5Y4/1) | ナデ | ナデ | |
| | 634 | | 111 SX402 | 須恵器 | 不明 | ②3.5+a | 1mm大砂粒少量含む | 良 | 内：黄灰色2.5Y6/1・ 外：灰白色N8/0 | ナデ | ナデ | |
| | 635 | | 111 SX402 | 須恵器 | 横瓶 | ①(10.7) ②23.4③肩部最大幅(20.6) | 1-2mm白色粒子含む | 良 | 内：灰黄色2.5Y7/2・ 外：灰白色(5Y8/1)-オリーフ黒(5Y3/1) | 丁寧なナデ | ナデ | 熔着片あり |
| | 636 | | 111 SX402 | 須恵器 | 鉢 | ①(18.1)②8.2 ③(9.0) | 精良 | 良 | 内：紫灰色5P6/1・ 外：青灰(5PB6/1)-白色(5Y8/1) | ナデ | ヨコナデ | 口縁部内面熔着片・外面底部付近焼成やや軟・白色→重ね焼きの痕跡? |
| | 637 | | 111 SX402 | 須恵器 | 甕 | ②8.5+a | 2-3mm砂粒少量含む | 良 | 内・外：灰色N4/0 | ナデ | ナデ | 沈線文間に波状文施す |
| | 638 | | 111 SX402 | 土師器 | 杯身 | ②3.4+a ③7.7 | 1mm以下白色粒子含む | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/2 | ナデ | ナデ | |
| | 639 | | 111 SX402 | 土師器 | 杯身 | ②4.6+a ③(11.5) | 1-2mm白色粒子・雲母含む | 良 | 内：灰黄褐色10YR6/2・ 外：黒色(10Y2/1)-灰色(5Y4/1) | ナデ | ナデ | |
| | 640 | | 111 SX402 | 土師器 | 脚部 | ②7.0+a | 1-5mm大砂粒多く含む | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/2 | 縦方向ケズリ後ナデ | 脚端部横方向ケズリ・上部縦方向ケズリ | 移動式カマド脚部の可能性 |
| | 641 | | 111 SX402 | 土師 | 支脚 | ②11.2+a ③脚部径(14.5) | 1-3mm砂粒多く含む | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/2 | シボリ痕・ナデ | 脚端部ハケ後ナデ・脚部ナデ | |
| | 642 | | 111 SX402 | 須恵器 | 杯片 | ②1.3③残存部幅8.6 | 1-2mm白色粒子含む | 良 | 内・外：灰白色2.5Y8/1 | 回転ヘラケズリ | ナデ | 端部に切痕・切削物 |
| 図126 | 643 | | 111 SX402 | 須恵器 | 甕 | ②14.7 | 1-2mm砂粒多く含む | 良 | 内：灰色N5/0.4/0・ 外：暗灰色N3/0 | ナデ | ナデ | 頸部中位に円錐形の横走突起列。口縁部・頸部内面に土器片熔着・外面灰被り |
| | 644 | | 111 SX402 | 須恵器 | 甕 | ①(43.6) ②14.2+a | 1-2mm砂粒多く含む | 良 | 内：灰色N5/0.4/0・ 外：暗灰色N3/0 | カキメ・ナデ | ナデ | 頸部中位に円錐形の横走突起列 |
| | 645 | | 111 SX402 | 須恵器 | 甕 | ①(42.2) ②17.2+a ③頸部径(30.4) | 砂粒多く含む | 良 | 内：灰色N5/0.4/0・ 外：灰白色(N7/0)-暗灰色・黒(N3/0-2/0) | 頸部カキメ・ナデ、胸部タタキ | 頸部ナデ、胸部当て具痕 | 頸部中位に円錐形の横走突起列 |
| 図127 | 646 | | 111 SX402 | 須恵器 | 甕 | ①(52.2) ②14.3+a | 1-3mm砂粒多く含む | 良 | 内：灰色・灰色・暗灰色N8/0.4/0.3/0・ 外：灰色・暗灰色N6/0.3/0 | ナデ | ナデ | |
| | 647 | | 111 SX402 | 須恵器 | 甕 | ①(48.5) ②18.5+a | 1-2mm砂粒多く含む | 良 | 内：灰色・暗灰色N6/0.3/0・ 外：灰白色・灰色N7/0.6/0 | 頸部ユビオサエ・カキメ・ナデ、胸部タタキ | 頸部ナデ、胸部当て具痕 | 焼け歪み顕著 |
| 図129 | 648 | 324図-13 | SD623 | 須恵器 | 杯蓋 | ①12.5-13.5 ②3.8 | 精良 | 良 | 内・外：灰色5Y5/1 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | 天井部外面ヘラ記号・天井部内面当て具痕・焼け歪み |
| | 649 | | SD623 | 須恵器 | 杯蓋 | ①13.9②4.4 | 白色粒子含む | 良 | 内・外：灰色5Y7/2 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | 天井部外面ヘラ記号 |
| | 650 | 325図-2 | SD623 | 須恵器 | 杯蓋 | ①13.3②4.1 | 砂粒少量含む | 良 | 内：灰色5Y5/1・ 外：灰色5Y6/1 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 651 | 324図-18 | SD623 | 須恵器 | 杯蓋 | ①14.1②4.5 | 細砂粒含む | 良 | 内：灰白色5Y7/2・ 外：灰黄色2.5Y7/2 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | 天井部外面ヘラ記号・天井部内面当て具痕 |
| | 652 | 324図-16 | SD623 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(14.7)②4.4 | 2mm大砂粒含む | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR6/3 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | |

| 図 番号 | 遺物 番号 | 西報告・ 掲載図 番号等 | 出土地点・ 遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|---------|----------|--------------------|--------------|-----|-----------|--|------------------|----|--|--|-------------------------------|------------------------------|
| | 653 | 324図-4 | SD623 | 須恵器 | 杯身 | ①121②5.1 ③受部径14.5 | 精良 | 良 | 内・外：灰黄色2.5Y7/2 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ナデ | 底部外面ヘラ記号 |
| | 654 | | SD623 | 須恵器 | 杯身 | ①12.0②3.9 ③受部径14.7 | 1-2mm大白色粒子含 む | 良 | 内・外：灰色10Y5/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | |
| | 655 | 324図-7 | SD623 | 須恵器 | 杯身 | ①(12.6)②4.0 (14.6) | 石英粒含む | 良 | 内・外：灰色7.5Y5/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 底部外面ヘラ記 号・底部内面当て 具痕 |
| | 656 | | SD623 | 須恵器 | 杯身 | ①12.7②4.2 ③受部径14.6 | 石英少量含む | 良 | 内・外：灰白色5Y8/1 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部外面ヘラ記号 |
| | 657 | 324図-2 | SD623 | 須恵器 | 杯身 | ①(12.0)②3.0 ③受部径 (13.8) | 精良 | 良 | 内：黄灰色2.5Y5/1・ 外：黄灰色(2.5Y5/1)-灰白色 (2.5Y7/1) | ナデ | ナデ | |
| | 658 | 324図-5 | SD623 | 須恵器 | 杯身 | ①(12.3)②3.7 ③受部径 (14.6) | 精良 | 良 | 内：灰黄色2.5Y7/2・ 外：灰色10Y6/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ナデ | |
| | 659 | 324図-8 | SD623 | 須恵器 | 杯身 | ①12.4②3.7 ③受部径14.9 | 石英含む | 良 | 内：灰黄色2.5Y7/2・ 外：灰白色2.5Y7/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ナデ | 底部外面ヘラ記号 |
| | 660 | 325図-7 | SD623 | 須恵器 | 横瓶 | ①(7.9) ②5.2+ a | 石英・長石含む | 良 | 内・外：にぶい橙色7.5YR6/4 | ヨコナデ | ヨコナデ | 頸部外面ヘラ記号 |
| | 661 | | SD623 | 須恵器 | 甕 | ①(23.7) ②4.5+ a | 長石少量含む | 良 | 内：灰色N6/0・ 外：灰色N4/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 662 | 325図-11 | SD623 | 須恵器 | 甕 | ①(21.7) ②7.2+ a | 長石・石英含む | 良 | 内・外：灰色10Y6/1 | 口縁部・頸部 ナデ・胴部タ タキ | 口縁部・頸部 ヨコナ デ・胴部当 て具痕 | 頸部外面ヘラ記号 |
| | 663 | | SD623 | 須恵器 | 甕 | ①(53.7)②8.1 | 石英少量含む | 良 | 内：灰色7.5Y5/1・ 外：明紫灰色(5P7/1)-灰白色 (N8/0) | ハケメ後ヨ コナデ | ハケメ後ヨ コナデ | |
| | 664 | | SD623 | 須恵器 | 甕 | ①(56.7) ②7.3+ a | 長石・石英多く含む | 良 | 内：オリーブ灰色(2.5GY5/1)-灰白 色(10Y7/1)・ 外：青灰色5PB6/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| 図131 | 665 | 328図-4 | SD702 | 須恵器 | 杯蓋 | ①12.5②4.1 | 精良 | 良 | 内：灰色N6/0・ 外：灰色(5Y4/1)-灰色(N6/0) | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 焼け歪み・天井部 外面ヘラ記号 |
| | 666 | 328図-7 | SD702 | 須恵器 | 杯蓋 | ①13.5②4.0 | 石英若干含む | 良 | 内：浅黄色2.5Y7/3・ 外：灰黄色2.5Y7/2 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 天井部外面ヘラ記 号有 |
| | 667 | 328図-9 | SD702 | 須恵器 | 杯蓋 | ①13.9②3.7 | 石英若干含む | 良 | 内：灰色7.5Y5/1・ 外：黒色(10Y2/1)-灰色(5Y6/1) | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 焼け歪み |
| | 668 | 328図-8 | SD702 | 須恵器 | 杯蓋 | ①14.0②4.8 | 精良 | 良 | 内：灰白色2.5Y7/1・ 外：灰白色7.5Y7/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | |
| | 669 | 325図-21 | SD702 | 須恵器 | 杯身 | ①(11.9)②3.3 ③受部径 (14.1) | 精良 | 良 | 内：灰白色7.5Y7/1・ 外：灰色N6/0 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 底部外面ヘラ記号 有 |
| | 670 | 328図-14 | SD702 | 須恵器 | 杯身 | ①14.0②3.2 | 微細雲母わずかに 含む | 軟 | 内：浅黄橙色10YR8/3・ 外：浅黄色2.5Y8/3 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ナデ? | |
| | 671 | 325図-19 | SD702 | 須恵器 | 杯身 | ①12.4②5.0 ③受部径15.6 | 砂粒含む | 良 | 内：にぶい黄橙10YR7/3・ 外：にぶい褐色7.5YR6/3 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 底部外面ヘラ記号 |
| | 672 | 325図-24 | SD702 | 須恵器 | 杯身 | ①(12.0)②4.5 ③受部径 (14.5) | 石英含む | 良 | 内・外：灰色10YR5/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | |
| | 673 | 328図-2 | SD702 | 須恵器 | 杯身 | ①(13.4)②4.0 ③受部径 (15.5) | 石英含む | 良 | 内：灰白色5Y7/1・ 外：灰白色7.5Y7/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 底部外面ヘラ記号 有 |
| | 674 | 329図-7 | SD702 | 須恵器 | 小形短 頸壺 | ①4.3②6.4 ③胴部最大径 7.5 | 石英若干含む | 良 | 内：灰色N6/0・ 外：灰色7.5Y5/1 | 底部回転ヘ ラケズリ・口 縁・胴部ヨコ ナデ | ヨコナデ | 底部外面ヘラ記号 有 |
| | 675 | 328図-27 | SD702 | 須恵器 | 甕 | ①11.8②13.8 ③胴部最大径 9.2 | 精良 | 良 | 内：灰白色N8/0・ 外：黄灰色2.5Y6/1 | 口縁部・胴部 上半ヨコナ デ・胴部下半 回転ヘラケ ズリ | ヨコナデ | 口縁部・胴部焼け 膨れ有 |
| | 676 | 328図-12 | SD702 | 須恵器 | 高杯蓋 | ①14.8②5.0 ③つまみ径2.6 | 精良 | 良 | 内：灰色7.5Y4/1・ 外：灰色N5/0 | カキメ・ヨコ ナデ | ヨコナデ | |
| | 677 | 328図-25 | SD702 | 須恵器 | 高杯 | ②8.0+ a ③脚 部径(16.0) | 精良 | 良 | 内：灰白色N7/0・ 外：灰色N6/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | 脚部中位外面ヘラ 記号有 |
| | 678 | 331図-1 | SD702 | 石器 | 砥石 | ①残存長 12.7+ a ②残 存幅12.0+ a ③最大厚5.1 | | | | | | 花崗岩 |
| 図132 | 679 | 339図-49 | SD701 | 土師器 | 杯蓋 | ①16.0②2.1 | 石英・雲母含む | 良 | 内：にぶい黄橙色10YR7/2・ 外：にぶい橙色5YR7/4 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 680 | 336図-15 | SD701 | 土師器 | 杯A身 | ①(13.1)②3.2 | 精良 | 良 | 内・外：浅黄橙色7.5YR8/4 | ヨコナデ | ヨコナデ | 内面複数ヶ所にス ス附着・燈明皿と して使用 |
| | 681 | | SD701 | 土師器 | 杯A身 | ①(13.0)②3.2 ③8.2 | 輝石・雲母含む | 良 | 内：浅黄色2.5Y7/3・ 外：淡黄色2.5Y8/3 | ヨコナデ・ナ デ・底部ヘラ 切後ナデ | ナデ | 口縁部・胴部内面 にスス附着 |
| | 682 | | SD701 | 土師器 | 杯A身 | ①(14.2)②3.2 ③(9.5) | 精良 | 良 | 内：にぶい黄橙色10YR7/2・ 外：灰白色10YR8/2 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 外面全体にスス付 着・内面に墨痕 |
| | 683 | 336図-13 | SD701 | 土師器 | 杯A身 | ①(14.6)②3.5 ③8.0 | 精良 | 良 | 内・外：橙色5YR7/6 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | |
| | 684 | 336図-23 | SD701 | 土師器 | 杯A身 | ①15.3②3.6 ③9.2 | 精良 | 良 | 内・外：橙色5YR7/6 | 回転ヘラ切 ヨコナデ | ナデ | |

| 図 番号 | 遺物 番号 | 西報告・ 掲載図 番号等 | 出土地点・ 遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|---------|----------|--------------------|--------------|-----|-----------|---|--------------------|---------|-------------------------------------|--|---------------------------------|--|
| | 685 | 336図-24 | SD701 | 土師器 | 杯A身 | ①15.1②3.5 ③8.4 | 精良 | 良 | 内・外：橙色5YR7/6 | ヘラ切・ヨコ ナデ | ヨコナデ | |
| | 686 | 336図-35 | SD701 | 土師器 | 高台付 皿 | ①8.9②2.5 ③5.2 | 石英・雲母少量含む | 良 | 内・外：橙色5YR7/6 | ナデ | ナデ | |
| | 687 | | SD701 | 土師器 | 高台付 皿 | ①13.0②3.1 ③6.9 | 1mm以下赤色粒子・ 雲母含む | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/2 | 口縁部ナデ・ 胴部ヘラケ ズリ後ナデ・ 底部ヘラ切 後ナデ | ナデ | |
| | 688 | 336図-38 | SD701 | 土師器 | 高台付 皿 | ①(16.0)②3.3 ③8.5 | 精良 | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/3 | ヨコナデ | ヨコナデ | 内外面スス付着 |
| | 689 | 336図-36 | SD701 | 土師器 | 高台付 皿 | ①16.2②3.8 ③8.4 | 長石・石英含む | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR6/3 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 690 | | SD701 | 土師器 | 高台付 皿 | ①(21.0)②5.2 ③9.1 | 精良・雲母多く含む | 良 | 内・外：にぶい橙色7.5YR7/4 | 口縁部・胴部 ナデ・胴部下 端部回転ヘ ラケズリ・底 部回転ヘラ 切後ナデ | ナデ | |
| | 691 | | SD701 | 土師器 | 高台付 鉢 | ①(27.0) ②11.5 ③(10.6) | 精良 | 良 | 内：にぶい橙色7.5YR7/4・ 外：浅黄橙色7.5YR8/4 | 口縁部ヘラ ナデ・胴部ヘ ラケズリ・底 部回転ヘラ ケズリ? | ヘラナデ | |
| | 692 | 340図-6 | SD701 | 土師器 | 高台付 鉢 | ①(31.2) ②11.6 ③(10.2) | 精良 | 良 | 内・外：にぶい橙色5YR7/4 | 口縁部ナデ・ 胴部上半ヨ コナデ・下半 回転ヘラケ ズリ | ヨコナデ | |
| | 693 | 340図-5 | SD701 | 土師器 | 鉢 | ①(31.0) ②7.2+ a | 精良 | 良 | 内・外：浅黄橙色10YR8/3 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 694 | | SD701 | 土師器 | 小形皿 | ①7.9②1.9 ③7.2 | 精良 | やや 軟 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/3 | ヨコナデ・底 部ヘラ切後 ナデ | ヨコナデ | |
| | 695 | | SD701 | 土師器 | 燈明皿 ? | ①(6.4) ②3.2+ a | 精良 | 良 | 内：にぶい橙色7.5YR7/3・ 外：にぶい橙色7.5YR6/4 | ナデ | ナデ | |
| | 696 | | SD701 | 土師器 | 不明 | ①(6.0+ a) ②6.0+ a ③7.8 | 精良 | 良 | 内・外：にぶい橙色7.5YR7/4 | ヨコナデ・ナ デ | ヨコナデ | |
| | 697 | 336図-34 | SD701 | 土師器 | 盤 | ①(17.2)②1.5 ③(14.1) | 石英少量含む | 良 | 内・外：橙色5YR7/6 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | |
| | 698 | | SD701 | 土師器 | 盤 | ①(27.5)②3.5 ③(21.0) | 精良 | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/2 | 底部回転ヘ ラケズリ・胴 部ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 699 | 340図-16 | SD701 | 土師器 | 不明 | ②5.0+ a ③9.2 | 長石・石英含む | やや 軟 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/4 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | |
| | 700 | | SD701 | 土師器 | 大形脚 付鉢 | ②5.5+ a ③(19.5) | 精良 | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/3 | ヨコナデ | ヘラケズリ 後ナデ | |
| | 701 | | SD701 | 土師器 | 三足土 器 | ②12.8+ a | 精良・雲母多く含む | 良 | 橙色5YR7/6 | ケズリ後ナ デ | ヨコナデ | |
| 図133 | 702 | 340図-12 | SD701 | 土師器 | 小壺 | ①5.8②5.2 ③5.0 | 精良 | 良 | 内：にぶい橙2.5YR6/4・ 外：橙色2.5YR6/6 | 不明 | 不明 | |
| | 703 | 340図-4 | SD701 | 土師器 | 鉢 | ①(17.6) ②14.5③12.8 | 精良 | 良 | 内・外：にぶい橙色7.5Y7/4 | 口縁部ヨコ ナデ・胴部回 転ヘラケズ リ | 口縁部ヨコ ナデ・胴部 回転ナデ | 内外面スス付着 |
| | 704 | 335図-15 | SD701 | 土師器 | 甕 | ①(14.4) ②8.8+ a | 石英多く含む | 良 | 内：にぶい黄橙10YR7/3・ 外：灰黄褐色10YR5/2 | ハケメ | ヘラケズリ | |
| | 705 | 335図-16 | SD701 | 土師器 | 甕 | ①20.0 ②8.8+ a | 石英含む | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR6/3 | 口縁部・胴部 上半ヨコナ デ・胴部下半 回転ヘラケ ズリ | ヨコナデ | |
| | 706 | 335図-12 | SD701 | 土師器 | 甕 | ②11.4+ a | 細砂粒・微細雲母多 く含む | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/3 | 口縁部ナデ・ 胴部タテ方 向ハケメ後 ナデ | 口縁部ユビ オサエ後ハ ケ・胴部ヘ ラケズリ | |
| | 707 | 335図-18 | SD701 | 土師器 | 把手付 甕 | ②5.8+ a | 長石・雲母多く含む | 良 | 内・外：にぶい黄色2.5Y6/3 | 口縁部ヨコ ナデ・胴部縦 方向ハケメ | 口縁部擦過 痕・胴部ケ ズリ | |
| | 708 | 335図-10 | SD701 | 土師器 | 甕 | ①(31.6) ②20.8+ a ③胴部最大径 (26.9) | 石英・雲母含む | 良 | 内・外：浅黄橙色10YR8/3 | ユビオサエ・ ハケメ | 口縁部ハケ メ・胴部ケ ズリ | |
| 図134 | 709 | 337図-25 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①13.4②3.6 | 精良 | 良 | 内：浅黄橙色10YR8/3・ 外：にぶい黄橙色10YR7/2 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 天井部外面ヘラ記 号 |
| | 710 | 335図-5 | SD701 | 須恵器 | 杯身 | ①10.9②3.6 ③受部径13.5 | 石英少量含む | 良 | 内：灰白色2.5Y7/1・ 外：褐灰色10YR5/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 底部外面ヘラ記 号・焼け歪みにより 器表面に亀裂 |
| | 711 | 335図-6 | SD701 | 須恵器 | 杯身 | ①10.4②4.2 ③受部径13.0- 14.0 | 砂粒少量含む | 良 | 内：明青灰色5PB4/1・ 外：灰色N6/0 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 焼け歪みにより器 形ゆがむ |
| | 712 | 339図-21 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①12.6②2.5 ③つまみ径 1.6 | 石英含む | 良 | 内・外：灰色N5/0 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | |
| | 713 | 339図-46 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①13.5-14.0 ②2.6③つま み径1.8 | 砂粒少量含む | 良 | 内・外：灰色N5/0 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 焼け歪み |
| | 714 | 339図-44 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①12.4②3.2 ③つまみ径2.0 | 砂粒少量含む | 良 | 内・外：灰色N5/0 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | 回転ナデ | 内外面に重ね焼き 痕跡・天井部内面・ 口縁部周辺外面粘 土熔着 |

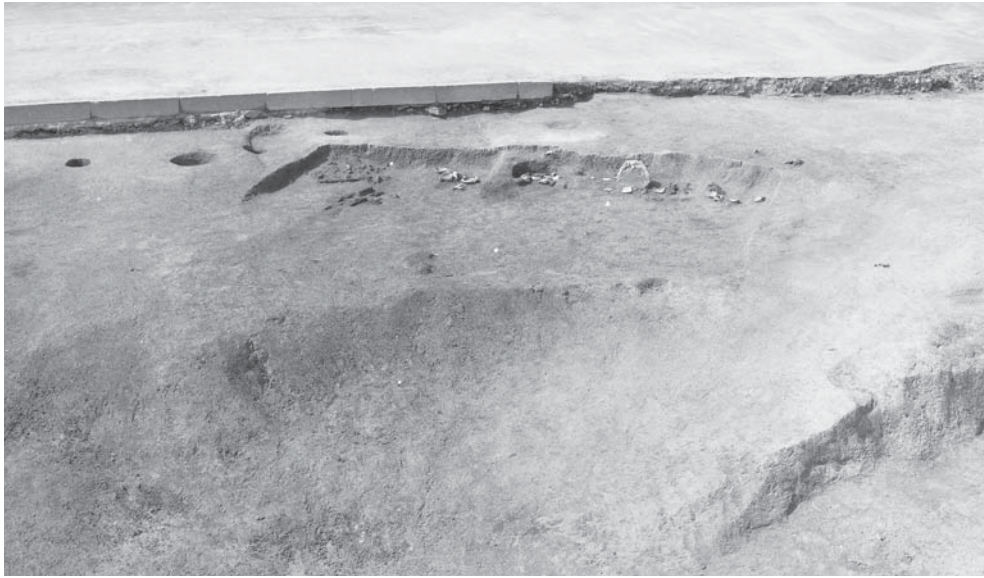
| 図 番号 | 遺物 番号 | 西報告・ 掲載図 番号等 | 出土地点・ 遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|---------|----------|--------------------|--------------|-----|-----|------------------------------|-----------------|----|--------------------------------|-----------------------|-------------|--|
| | 715 | 339図-43 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①122②30 ③つまみ径1.3 | 精良 | 良 | 内・外：灰色N6/0 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ・ ナデ | |
| | 716 | 339図-23 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①138②36 ③つまみ径1.9 | 精良 | 良 | 内・外：灰色N5/0 | 回転ナデ | ナデ | 内面に重ね焼き痕 跡・粘土熔着 |
| | 717 | 339図-14 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①166②21 ③つまみ径3.0 | 2mm大砂粒含む | 良 | 内・外：灰白色5Y7/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ・ ナデ | |
| | 718 | 339図-3 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(15.3)②19 ③つまみ径2.5 | 石英少量含む | 良 | 内：灰白色7.5Y7/1・ 外：灰色10Y6/1 | ケズリ・ヨコ ナデ | ヨコナデ・ ナデ | |
| | 719 | 339図-13 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①16.0②3.0 ③つまみ径2.1 | 石英少量含む | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ヨコナデ | ヨコナデ・ ナデ | |
| | 720 | 339図-12 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①(16.5)②23 ③つまみ径1.8 | 石英少量含む | 良 | 内：浅黄橙色10YR8/3・ 外：灰色2.5Y8/1 | ケズリ・ヨコ ナデ | ヨコナデ・ ナデ | |
| | 721 | 339図-54 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①16.0②2.8 ③つまみ径1.4 | 精良 | 良 | 内：黄灰色2.5Y5/1・ 外：灰色10Y5/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ・ ナデ | |
| | 722 | 339図-33 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①14.4②2.3 ③つまみ径2.1 | 石英少量含む | 良 | 内・外：灰色7.5Y5/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ・ ナデ | |
| | 723 | 339図-31 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①14.5②2.3③ つまみ径1.5 | 石英少量含む | 良 | 内・外：灰色N6/0 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ・ ナデ | |
| | 724 | 339図-52 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①15.0②1.5 ③つまみ径： 剥離 | 石英少量含む | 良 | 内・外：灰色N5/0 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ・ ナデ | 外面板状圧痕 |
| | 725 | 339図-9 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①14.6②1.4 ③つまみ径2.0 | 砂粒少量含む | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ケズリ・ヨコ ナデ | ヨコナデ・ ナデ | 外面板状圧痕 |
| | 726 | 339図-20 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①10.5②1.7 | 石英少量含む | 良 | 内・外：褐色5YR5/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ・ ナデ | |
| | 727 | 339図-7 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①14.0②1.2 | 石英含む | 良 | 内・外：灰白色N7/0 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 焼け歪み |
| | 728 | 339図-18 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①19.2②1.8 | 長石・石英含む | 良 | 内・外：橙色7.5YR7/6 | ナデ | ナデ | |
| | 729 | 339図-58 | SD701 | 須恵器 | 杯蓋 | ①23.5②2.2 | 石英含む | 良 | 内・外：灰白色5Y7/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ・ ナデ | |
| 図135 | 730 | 338図-8 | SD701 | 須恵器 | 杯B身 | ①(10.3)②4.4 ③高台径 (5.7) | 砂粒含む | 良 | 内：にぶい黄橙色10YR7/4・ 外：橙色5YR6/6 | ケズリ・ヨコ ナデ | ヨコナデ | |
| | 731 | 338図-9 | SD701 | 須恵器 | 杯B身 | ①11.1②3.6 ③高台径6.7 | 1mm大砂粒含む | 良 | 内・外：灰色7.5Y6/1 | ヨコナデ | ナデ | 内面スス付着・燈 明皿として使用 |
| | 732 | 338図-11 | SD701 | 須恵器 | 杯B身 | ①11.5②3.9 ③高台径6.7 | 精良 | 良 | 内・外：灰白色N7/0 | ヨコナデ | ナデ | |
| | 733 | 338図-19 | SD701 | 須恵器 | 杯B身 | ①13.0②3.7 ③高台径8.9 | 精良 | 良 | 内・外：灰色N5/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | 焼け歪みのため器 壁裂ける |
| | 734 | 338図-29 | SD701 | 須恵器 | 杯B身 | ①(13.1)②4.2 ③高台径8.9 | 1mm以下白色粒子含 む | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ナデ | ナデ | 高台底面に圧痕・ 焼け歪み |
| | 735 | 338図-24 | SD701 | 須恵器 | 杯B身 | ①13.3②4.3 ③高台径8.0 | 精良 | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 736 | 338図-27 | SD701 | 須恵器 | 杯B身 | ①(13.3)②4.3 ③高台径8.5 | 1mm以下白色粒子含 む | 良 | 内・外：灰色N5/0 | ナデ・底部回 転ヘラ切後 ナデ | ナデ | 焼成時の焼け歪み により器壁一部断 裂 |
| | 737 | 338図-30 | SD701 | 須恵器 | 杯B身 | ①14.0②3.2 ③高台径8.4 | 石英多く含む | 良 | 内・外：灰色N5/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 738 | 338図-31 | SD701 | 須恵器 | 杯B身 | ①15.0②4.1 ③高台径10.8 | 石英含む | 良 | 内・外：にぶい黄橙色10YR7/2 | ケズリ・ヨコ ナデ | ヨコナデ | 外面スス付着 |
| | 739 | 338図-32 | SD701 | 須恵器 | 杯B身 | ①15.4②5.8 ③高台径8.9 | 1mm大白色粒子含む | 良 | 内：灰白色5Y7/1 外：灰色7.5Y6/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 740 | 338図-33 | SD701 | 須恵器 | 杯B身 | ①16.5②6.3 ③高台径9.6 | 精良 | 良 | 内・外：灰色10Y5/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | 底部外面板状圧痕 |
| | 741 | 338図-35 | SD701 | 須恵器 | 杯B身 | ①16.9②5.6 ③高台径9.4 | 精良 | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | 内面底部に熔着片・ 焼け歪みのため器 壁一部裂ける |
| | 742 | 338図-36 | SD701 | 須恵器 | 杯B身 | ①17.4②5.2 ③高台径12.0 | 2-3mm大砂粒含む | 良 | 内・外：灰黄色2.5Y7/2 | ヘラ切・ヨコ ナデ | ヨコナデ | |
| 図136 | 743 | | SD701 | 須恵器 | 碗 | ①(7.5)②2.9 ③(5.4) | 精良 | 良 | 内：灰色N5/0・ 外：灰白色2.5Y7/1 | 底部回転ヘ ラ切・胴部ナ デ | ナデ | |
| | 744 | | SD701 | 須恵器 | 碗 | ①(10.6)②3.5 ③(8.0) | 精良 | 良 | 内・外：灰白色N8/0 | 底部ヘラ切・ 胴部ヨコナ デ | ヨコナデ | 焼成時の焼け歪み により器壁一部破 断・内面口縁部付 近スス付着・燈明 皿として使用 |
| | 745 | 337図-3 | SD701 | 須恵器 | 杯A身 | ①(10.4)②2.5 | 長石含む | 良 | 内・外：灰色N5/0 | 体部ヨコナ デ・底部ケズ リ | ナデ | |
| | 746 | 337図-6 | SD701 | 須恵器 | 杯A身 | ①10.8②3.0 ③8.4 | 精良 | 良 | 内：灰色N5/0・ 外：灰色7.5Y6/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | 底部外面板状圧痕 |
| | 747 | 337図-11 | SD701 | 須恵器 | 杯A身 | ①11.5②2.9 ③6.8 | 精良 | 良 | 内・外：灰色N5/0 | 回転ヘラ切・ ヨコナデ | ヨコナデ | 複数ヶ所にスス付 着・燈明皿として 使用 |
| | 748 | 337図-27 | SD701 | 須恵器 | 杯A身 | ①12.4②3.6 ③7.4 | 白色粒子含む | 良 | 内・外：灰色N6/0 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ナデ | 底部外面圧痕 |
| | 749 | 337図-16 | SD701 | 須恵器 | 杯A身 | ①12.7②3.6 ③8.0 | 精良 | 良 | 内・外：灰白色2.5Y7/1 | 回転ヘラケ ズリ・ヨコナ デ | ヨコナデ | 内面スス付着・燈 明皿として使用・底 部外面板状圧痕 |
| | 750 | 337図-28 | SD701 | 須恵器 | 杯A身 | ①13.8②3.7 ③9.6 | 長石含む | 良 | 内・外：灰色N8/0 | ヨコナデ・底 部粗いナデ | ヨコナデ | 2ヶ所にスス付着・ 燈明皿として使用 |

| 図番号 | 遺物番号 | 西報告・掲載図番号等 | 出土地点・遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|------|------|------------|----------|-----|------|--|--------------------|----|--|--|--------------------|---------------------------------------|
| | 751 | 337図-22 | SD701 | 須恵器 | 杯A身 | ①13.0②4.6 ③9.3 | 石英・雲母少量含む | 良 | 内・外：灰白色7.5Y8/1 | ナデ・ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 752 | 337図-37 | SD701 | 須恵器 | 盤 | ①13.3②2.1 ③10.5 | 精良 | 良 | 内・外：灰色7.5Y6/1 | 回転ヘラ切・ヨコナデ | ヨコナデ | 焼け歪み |
| | 753 | 337図-42・44 | SD701 | 須恵器 | 盤 | ①14.4②1.8 ③10.0 | 精良 | 良 | 内：黄灰色2.5Y6/1・ 外：灰白色2.5Y8/1 | 回転ヘラ切・ヨコナデ | ナデ | |
| | 754 | | SD701 | 須恵器 | 盤 | ①14.2②2.2 ③11.4 | 精良 | 良 | 内・外：灰色5Y6/1 | ナデ | ナデ | 焼成時の焼け歪みにより器壁一部断裂 |
| | 755 | 337図-46 | SD701 | 須恵器 | 盤 | ①17.8②1.6 ③14.6 | 砂粒わずかに含む | 良 | 内・外：灰白色2.5Y8/1 | 回転ヘラ切・ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 756 | 337図-48 | SD701 | 須恵器 | 盤 | ①(18.4)②2.5 ③(14.0) | 精良 | 良 | 内・外：灰白色7.5Y7/1 | ケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 757 | 338図-4 | SD701 | 須恵器 | 盤 | ①19.3②2.0 ③16.1 | 長石含む | 良 | 内・外：灰白色5Y8/1 | 回転ヘラ切・ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 758 | 338図-5 | SD701 | 須恵器 | 盤 | ①19.8②3.5 ③16.1 | 長石含む | 良 | 内：灰色N5/0・ 外：灰色N6/0 | ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | 焼け歪み |
| | 759 | 338図-37 | SD701 | 須恵器 | 高台付盤 | ①20.6②3.7 ③高台径15.7 | 石英若干含む | 良 | 内・外：灰白色2.5Y8/1 | 回転ヘラ切・ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 760 | | SD701 | 須恵器 | 鉄鉢 | ①(17.3)②7.7 | 精良 | 良 | 内：浅黄色2.5Y7/3・ 外：灰黄色2.5Y7/2 | 口縁部・胴部上半部ナデ・胴部下半部回転ヘラケズリ | ナデ | |
| | 761 | 340図-8 | SD701 | 須恵器 | 鉄鉢 | ①(20.5) ②12.4+ <i>a</i> ③(22.4) | 長石含む | 良 | 内・外：灰色10Y6/1 | 口縁部ヨコナデ・胴部ケズリ | 口縁部ヨコナデ・胴部ケズリ | |
| | 762 | 341図-4 | SD701 | 須恵器 | 甌 | ①28.5②22.8 ③18.5 | 1mm以下白色粒子含む | 良 | 内：灰色N6/0・ 外：灰色N5/0 | 口縁部・胴部上半部ナデ・胴部下半部ケズリ | ケズリ後ナデ | |
| 図137 | 763 | 340図-11 | SD701 | 須恵器 | 小形壺 | ①5.5②3.7 ③6.2 | 精良 | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 764 | 341図-7 | SD701 | 須恵器 | 燈明皿 | ①(6.0)②3.6 ③(6.4)④最大径(11.6) | 石英・長石少量含む | 良 | 内・外：灰白色N7/0 | ヘラケズリ・ヨコナデ | シボリ痕・ヨコナデ | |
| | 765 | 341図-6 | SD701 | 須恵器 | 燈明皿 | ①7.8②3.4 ③(4.4) | 石英・長石多く含む | 良 | 内・外：灰オリーブ色5Y5/2 | ナデ | ナデ | |
| | 766 | 340図-1 | SD701 | 須恵器 | 高杯 | ①10.9 ②2.2+ <i>a</i> | 精良 | 良 | 内・外：灰色N6/0 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 767 | 340図-2 | SD701 | 須恵器 | 高杯 | ①(18.9) ②8.1+ <i>a</i> ③(11.7) | 精良 | 良 | 内：灰色N5/0・ 外：灰色N6/0 | 回転ヘラケズリ・ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 768 | 340図-14 | SD701 | 須恵器 | 長頸壺 | ①7.2②14.1 ③8.2 | 精良 | 良 | 内・外：灰色5Y6/1 | 口縁部・頸部ヨコナデ・胴部上半部ナデ・胴部下半部回転ヘラケズリ | ヨコナデ | 内外面に自然釉かかる・熔着片あり |
| | 769 | 340図-15 | SD701 | 須恵器 | 長頸壺 | ①12.0②20.0+ <i>a</i> ③胴部最大径(19.9) | 長石含む | 良 | 内・外：灰白色7.5Y7/1 | ヨコナデ | ヨコナデ | |
| | 770 | 340図-13 | SD701 | 須恵器 | 短頸壺 | ①(11.0)②15.2 ③(11.3) | 精良 | 良 | 内：灰色N4/0・ 外：灰色10Y6/1 | 胴部ナデ | ナデ | 外面肩・高台に熔着片 |
| | 771 | 340図-9 | SD701 | 須恵器 | 瓶子 | ①5.0②10.1 ③5.5 | 1mm以下白色粒子少量含む | 良 | 内・外：灰白色N8/0 | 口縁部・胴部上半部ヨコナデ・胴部下半部ケズリ後ナデ | ヨコナデ | 底部外面板状圧痕 |
| | 772 | 340図-10 | SD701 | 須恵器 | 瓶子 | ①3.8②9.3 ③6.2 | 石英含む | 良 | 内・外：灰白色N7/0 | ヨコナデ・底部ケズリ・ナデ | ヨコナデ | |
| | 773 | 341図-3 | SD701 | 須恵器 | 瓶子 | ①肩部径(11.0) ②16.0+ <i>a</i> ③(7.5) | 長石多く含む | 良 | 内・外：灰色N5/0 | ナデ・ヨコナデ | ナデ・ヨコナデ | 指ナデで胴部に面を形成している |
| | 774 | | SD701 | 須恵器 | 瓶子 | ②18.8+ <i>a</i> ③(10.4) | 1-2mm,5mm大砂粒含む | 良 | 内・外：青灰色5PB6/1 | 回転ヘラケズリ後ナデ・底部ナデ | ナデ | 底部内面に熔着片・底部外面板状圧痕 |
| 図138 | 775 | | SD701 | 須恵器 | 甕 | ①(20.9) ②7.0+ <i>a</i> | 1-2mm砂粒少量含む | 良 | 内：にぶい橙色7.5YR7/4・ 外：橙色5YR7/6 | 口縁部・頸部ナデ・胴部タキ後ナデ | 口縁部ナデ・頸部ケズリ・胴部当て具痕 | |
| | 776 | | SD701 | 須恵器 | 甕 | ②26.6+ <i>a</i> ③胴部最大径(43.6) | 精良・1mm大白色粒子含む | 良 | 内：灰色N6/0・ 外：灰白色(N7/0)-黒(N2/0) | 平行叩き | 当て具痕 | 器壁最大厚0.7cm |
| | 777 | | SD701 | 土製品 | 埴塼 | ②3.7+ <i>a</i> ③最大幅7.8 | シルト様微細砂粒・炭化物わずかに含む | 軟 | 外：灰白色(7.5Y7/1)-オリーブ黄色(5Y6/3) | ナデ | | 底部外面器面に多くの亀裂・内面滓付着 |
| | 778 | | SD701 | 土製品 | 埴塼 | ①(10.0) ②4.5+ <i>a</i> | シルト様微細砂粒 | 軟 | 内：二次被熱により青灰・赤紫・ 外：灰白色(5Y7/1)-にぶい黄色(2.5Y6/3) | ナデ | | 底部中央部は大きくくぼむが、本来充填されていた粘土が脱落したためなのか不明 |
| | 779 | | SD701 | 土製品 | 埴塼 | ①(9.0)②6.5 | 1-5mm砂粒多く含む | 普 | 外：灰色・灰白色(7.5Y7/16/1)-灰オリーブ色(5Y6/16/2) | 不明 | | 上半部を中心に器面の劣化激しく亀裂や剥落箇所多い |
| 図139 | 780 | | SD701 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長36.8 ②残存幅28.6 ③最大厚1.7 ④重量1650 | 1mm大砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色-灰色N7/0-6/0 凸面：灰白色-灰色N7/0-6/0 | 凹面：糸切り痕・布目圧痕・一部粗いナデ 凸面：糸切り痕・縄目叩き後一部ナデ | | 一枚作り |

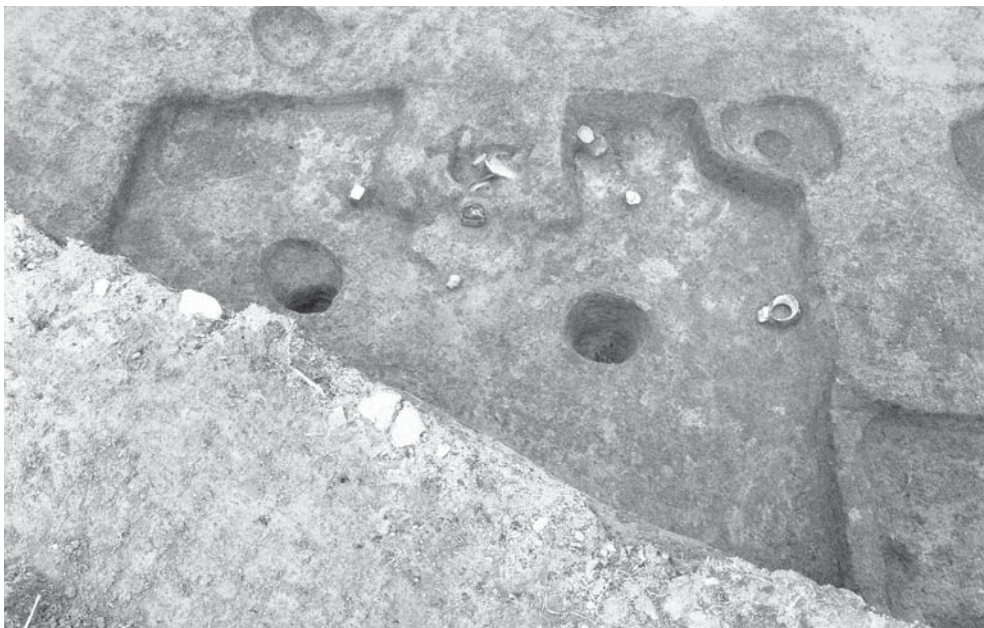
| 図 番号 | 遺物 番号 | 西報告・ 掲載図 番号等 | 出土地点・ 遺構等 | 種類 | 器種 | 質量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|---------|----------|--------------------|----------------|----|----|---|--------------------------|---------|---|----------------------------------|--|---------------|
| | 781 | | SD701 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長 27.7+ <i>a</i> ②残 存幅27.4+ <i>a</i> ③最大厚2.4 ④重量2070 | 1-2mm大砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色5Y7/1-7/2 凸面：灰色5Y6/1-5/1 | 凹面：糸切 り痕・布目圧 痕 | 凸面：縄目 叩き | 一枚作り |
| 図140 | 782 | | SD701 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長37.2 ②残存幅 23.5+ <i>a</i> ③最大厚2.3 ④重量2235 | 1mm大砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色(5Y8/1-7/1)-灰/オ リーブ黒色(7.5Y4/1-3/1) 凸面：灰白色-暗灰色N8/0.5/0.3/0 | 凹面：糸切 り痕・布目圧 痕・端部一部 ナデ | 凸面：縄目 叩き後一部 指圧痕 | 一枚作り |
| | 783 | | SD701 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長38.5 ②最大幅 14.9+ <i>a</i> ③最大厚2.1 ④重量2540 | 1-3mm大砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色5Y8/1 凸面：灰白色5YR8/1 | 凹面：糸切 り痕・布目圧 痕 | 凸面：糸切 り痕・縄目 叩き | 一枚作り |
| 図141 | 784 | | SD701 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長 20.6+ <i>a</i> ②残 存幅27.5 ③最大厚3.1 ④重量2515 | 2-3mm大砂粒を少量 含む | やや 軟 | 凹面：灰白色-浅黄橙色7.5YR8/2- 8/4 凸面：灰白色(7.5YR8/1)-浅黄橙色 (10YR8/2) | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：縄目 叩き | 一枚作り |
| | 785 | | SD701 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長35.5 ②残存幅22.9 ③最大厚2.4 ④重量3465 | 精良 | 良 | 凹面：灰色-黒色N7/0.5/0.3/0.2/0 凸面：暗灰-黒色N4/0-2/0 | 凹面：糸切 り痕・布目圧 痕・一部ナデ | 凸面：縄目 叩き | 一枚作り |
| | 786 | | SD701 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長 14.3+ <i>a</i> ②残 存幅15.1+ <i>a</i> ③最大厚3.0 ④重量730 | 1-3mm大砂粒含む | 良 | 凹面：暗灰色-黒色N3/0-2/0 凸面：灰(N5/0-4/0)-黒色(N2/0) | 凹面：丁寧 なナデ | 凸面：縄目 叩き | 一枚作り |
| 図142 | 787 | | SD701 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長41.8 ②残存幅 19.7+ <i>a</i> ③最大厚2.9 ④重量2715 | 5mm以下砂粒多く含 む | 良 | 凹面：灰色(N5/0)-にぶい黄橙色 (10YR7/4) 凸面：灰白色-灰色N7/0-4/0 | 凹面：糸切 り痕・布目圧 痕 | 凸面：縄目 叩き | 一枚作り |
| | 788 | | SD701 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長 20.0+ <i>a</i> ②残 存幅14.3+ <i>a</i> ③最大厚3.9 ④重量2165 | 1mm以下白色粒子多 く含む | 良 | 凹面：暗灰色-黒色N3/0-2/0 凸面：暗灰色-黒色N3/0-2/0 | 凹面：布目 圧痕・丁寧な ナデ | 凸面：縄目 叩き | 一枚作り |
| | 789 | | SD701 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長 20.0+ <i>a</i> ②残 存幅13.0+ <i>a</i> ③最大厚4.0 ④重量1655 | 1mm以下白色粒子多 く含む | 良 | 凹面：黒色5Y2/1 凸面：橙色(5YR6/6)-灰褐色 (7.5YR5/1) | 凹面：布目 圧痕・部分的 にナデ消し | 凸面：縄目 叩き | 一枚作り |
| 図143 | 790 | | SD701 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長37.4 ②残存幅 16.5+ <i>a</i> ③最大厚3.7 ④重量2965 | 1mm以下白色粒子少 量含む | 良 | 凹面：灰白色(N8/0)-黒色(N1.5/0) 凸面：灰白色(N8/0)-黒色(N1.5/0) | 凹面：布目 圧痕・ナデ | 凸面：縄目 叩き・部分 的にナデ | 一枚作り |
| | 791 | | SD701 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長38.3 ②残存幅29.1 ③最大厚2.9 ④重量5145 | 1mm以下白色粒子少 量含む | 良 | 凹面：灰白色7.5Y7/1 凸面：灰白色7.5Y7/2 | 凹面：糸切 り痕・布目圧 痕・端部に指 頭圧痕 | 凸面：縄目 叩き・部分 的にナデ | 一枚作り |
| 図144 | 792 | | SD701 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長26.7 ②残存幅26.0 ③最大厚2.1 ④重量2110 | 1-2mm白色粒子含む | 良 | 凹面：淡橙色-にぶい橙色5YR8/3- 8/4.7/3-7/4 凸面：浅黄橙色7.5YR8/3 | 凹面：横骨 痕・布目圧痕 | 凸面：縄目 叩き・広端 面・側面付 近粘土継ぎ 目? | 横骨桶 |
| | 793 | | SD701 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長38.9 ②残存幅26.4 ③最大厚2.0 ④重量2450 | 1-2mm大砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色5Y8/2-7/2 凸面：灰白色7.5Y7/1 | 凹面：横骨 痕・布目圧 痕・ナデ | 凸面：縄目 叩き | 横骨桶 |
| 図145 | 794 | | | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長39.4 ②残存幅 16.7+ <i>a</i> ③最大厚2.5 ④重量2040 | 1mm大白色粒・2mm大 灰色粒含む | 良 | 凹面：灰色7.5Y7/2 凸面：灰色7.8Y7/2 | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：縄目 (圧痕があ るが判然と せず) | |
| | 795 | | SD701 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長 10.3+ <i>a</i> ②残 存幅13.0+ <i>a</i> ③最大厚1.8 ④重量231 | 1mm大白色粒・2mm大 灰色粒含む | 良 | 凹面：灰白色N8/0 凸面：灰白色N8/0 | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：格子 目叩き | |
| | 796 | | SD701 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長 13.9+ <i>a</i> ②残 存幅13.8+ <i>a</i> ③最大厚2.0 ④重量453 | 1mm大白色粒・2mm大 灰色粒含む | 良 | 凹面：灰白色5Y8/1 凸面：灰白色5Y8/1 | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：格子 目叩き | 円筒桶・側面分割 面 |
| | 797 | | SD701 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長 10.2+ <i>a</i> ②残 存幅9.1+ <i>a</i> ③最大厚2.5 ④重量194 | 石英含む | 良 | 凹面：灰白色5Y7/2 凸面：灰白色5Y7/2 | 凹面：布目 圧痕・ナデ | 凸面：格子 目叩き | 円筒桶 |
| 図146 | 798 | | SD701 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長 23.0+ <i>a</i> ②残 存幅14.2+ <i>a</i> ③最大厚1.9 ④重量771 | 1mm大白色粒・石英 含む | 良 | 凹面：灰白色N8/0 凸面：灰白色N8/0 | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：格子 目叩き | |
| | 799 | | SD701 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長 24.2+ <i>a</i> ②残 存幅16.6+ <i>a</i> ③最大厚2.1 ④重量1389 | 1mm大白色粒・石英 含む | 良 | 凹面：灰色7.5Y6/1 凸面：灰白色7.5Y7/1 | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：格子 目叩き | 側面分割面 |
| 図147 | 800 | | 14G/H SD417 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長 10.3+ <i>a</i> ②残 存幅13.1+ <i>a</i> ③最大厚1.5 ④重量200 | 2mm大砂粒・1mm以下 黒色粒子多く含む | やや 軟 | 凹面：灰白色 N8/0 凸面：灰白色 N8/0 | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：格子 目叩き | 円筒桶・側面分割 面 |

| 図番号 | 遺物番号 | 西報告・掲載図番号等 | 出土地点・遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|------|------|------------|------------------|-----|----------|--|------------------------|---------|--|--------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|
| | 801 | | 14G/H SD417 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長 20.2+ a ②残 存幅13.5+ a ③最大厚2.2 ④重量570 | 1-2mm大砂粒多く含 む | 軟 | 凹面：灰白色 7.5Y8/1-7/1 凸面：灰白色-灰色 7.5Y7/1-5/1 | 凹面：不明 | 凸面：格子 目叩き・す り消し | 円筒桶・広端面糸 切り痕・側面分割 面 |
| | 802 | | 14G/H SD417 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長7.5+ a ②残存幅 8.2+ a ③最大 厚1.7④重量 150 | 1-2mm大砂粒含む | 良 | 凹面：灰白色N7/0 凸面：灰白色-灰色 N7/0-6/0 | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：格子 目叩き | 円筒桶 |
| | 803 | | 14G/H SD417 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長 11.0+ a ②残 存幅13.0+ a ③最大厚2.5 ④重量380 | 1-5mm大砂粒多く含 む | 良 | 凹面：灰黄色(2.5Y7/2)-暗灰黄色 (7.5Y5/2.4/2) 凸面：灰白色-灰色 7.5Y8/1.4/1 | 凹面：不明 | 凸面：格子 目叩き | 円筒桶 |
| | 804 | | 14G/H SD417 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長 12.4+ a ②残 存幅7.9+ a ③最大厚2.0 ④重量240 | 砂粒多く含む | やや 軟 | 凹面：灰黄褐色10YR6/2 凸面：灰白色-褐灰色10YR8/1-6/1 | 凹面：不明・ 分割突帯 | 凸面：格子 目叩き | 円筒桶・分割突帯・ 側面分割面 |
| 図148 | 805 | | 11M | 瓦 | 平瓦 | ①最大長37.8 ②残存幅27.4 ③最大厚2.4 ④重量3147 | 1mm大白色粒・石英 含む | 良 | 凹面：白色N9/0 凸面：灰白色N8/0 | 凹面：糸切 り痕・布目圧 痕 | 凸面：糸切 り痕・縄目 叩き | 一枚作り |
| | 806 | | 11M | 瓦 | 平瓦 | ①最大長37.4 ②残存幅28.5 ③最大厚2.0 ④重量3086 | 1mm大白色粒含む | 良 | 凹面：灰色7.5Y8/1 凸面：灰色7.5Y8/2 | 凹面：糸切 り痕・布目圧 痕 | 凸面：糸切 り痕・縄目 叩き | 一枚作り |
| 図149 | 807 | | 11M | 瓦 | 平瓦 | ①最大長37.4 ②残存幅 17.4+ a ③最大厚2.4 ④重量1475 | 精良 | 良 | 凹面：灰白色(5Y8/1)-灰色(N7/0- 5/0) 凸面：灰白色5Y8/1 | 凹面：糸切 り痕・布目圧 痕・一部指圧 痕 | 凸面：糸切 り痕・縄目 叩き後一部 ナデ | 一枚作り |
| | 808 | | 11M | 瓦 | 平瓦 | ①最大長37.1 ②残存幅 22.6+ a ③最大厚2.3 ④重量2145 | 砂粒含む | 良 | 凹面：灰色・暗灰色N3/0-4/0 凸面：灰白色7.5Y8/1.5Y8/1 | 凹面：糸切 り痕・布目圧 痕・一部ナデ | 凸面：縄目 叩き後一部 ナデ | 一枚作り |
| 図150 | 809 | | 11M | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長38.5 ②残存幅17.4 ③最大厚1.5 ④重量1947 | 2mm大白色粒含む | 良 | 凹面：灰白色N8/0 凸面：灰白色N8/0 | 凹面：糸切 り痕・布目圧 痕 | 凸面：縄目 叩き・すり 消し | 両側面分割面 |
| | 810 | | 11M | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長36.8 ②残存幅16.2 ③最大厚1.5 ④重量1558 | 2mm大白色粒・2mm大 石英含む | 良 | 凹面：灰色7.5Y7/1 凸面：灰色7.5Y7/1 | 凹面：糸切 り痕・布目圧 痕 | 凸面：縄目 叩き・すり 消し | 両側面分割面 |
| 図151 | 811 | | 高エネ | 瓦 | 平瓦 | ①最大長9.1+ a ②残存幅 16.0+ a ③最大厚3.1 ④重量959 | 2mm大白色粒・石英 含む | 軟 | 凹面：にぶい橙色5RY6/4 凸面：灰色N/ | 凹面：模骨 痕・布目圧痕 | 凸面：縄目 叩き後一部 ナデ | 模骨桶 |
| | 812 | | 高エネ /13K150 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長9.6+ a ②残存幅 7.5+ a ③最大 厚2.0④重量 155 | 1mm大砂粒含む | 良 | 凹面：灰色 N5/0-4/0 凸面：灰白色-灰色N8/0-6/0 | 凹面：糸切 り痕・布目圧 痕 | 凸面：格子 目叩き | 円筒桶・分割突帯・ 側面分割面 |
| | 813 | | 高エネ/試掘 谷 | 瓦 | 平瓦 | ①最大長 11.7+ a ②残 存幅13.0+ a ③最大厚1.7 ④重量343 | 1mm大白色粒子少量 含む | 良 | 凹面：灰色 N6/0 凸面：灰白色-灰色N7/0-6/0 | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：格子 目叩き | 円筒桶・分割突帯・ 側面分割面・粘土 継ぎ目 |
| | 814 | | 高エネ | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長 40.6+ a ②残存幅17.6 ③最大厚1.5 ④重量2519 | 1mm大白色粒含む | 良 | 凹面：灰白色7.5Y7/1 凸面：灰白色7.5Y7/1 | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：縄目 叩き後ナデ | |
| | 815 | | 高エネ/試掘 谷 | 瓦 | 丸瓦 | ①最大長8.2+ a ②残存幅 6.2+ a ③最大 厚1.8④重量 180 | 1-2mm大砂粒少量含 む | 良 | 凹面：灰白色-灰色 7.5Y7/1-6/1 凸面：灰色7.5Y6/1 | 凹面：布目 圧痕 | 凸面：格子 目叩き・す り消し | 側面分割面 |
| | 816 | | 高エネ /12KSD623 | 瓦 | 軒平瓦 | ②残存幅8.2+ a ④重量140 | 1mm大砂粒・1mm以下 白色粒子含む | 軟 | 灰白色-浅黄褐色(10YR8/3)-灰白色 (10YR8/2) | 凹面：不明 | 凸面：不明 | 表面の風化激しい |
| | 817 | | 高エネ /12K・灰原 | 瓦 | 軒平瓦 | ①最大長9.2+ a ④重量228 | 2-4mm砂粒多く含む | 軟 | 灰白色2.5Y8/1-8/2 | 凹面：不明 | 凸面：不明 | 表面の風化激しい |
| | 818 | | 高エネ /13K197 | 瓦 | 軒平瓦 | ①残存長12.0 ②残存幅12.0 ④重量458 | 2-3mm砂粒含む | 軟 | 浅黄褐色10YR8/3 | 凹面：不明 | 凸面：不明 | 表面の風化激しい |
| 図152 | 819 | | 高エネ地区 12K | 土製品 | 権杖製 品 | ①花弁部下端 最大幅3.1 ②高さ3.7 ③榫部幅2.1 ④重量36.2 | 精良 | 良 | 笠部：灰白色N7/0 脚部：灰色N6/0 | 笠部ナデ・脚 部面取り、底 面丁寧なナ デ | | |
| | 820 | | 高エネ地区 12K | 土製品 | 輪羽口 | ①残存長5.7+ a ②残存幅 3.5+ a ③最大 厚2.2 | 1mm大白色粒・1-2mm 大砂粒含む | 良 | 内：灰白色(5Y8/1)-にぶい黄色 (2.5Y6/3)・ 外：灰白色-灰色N7/0-6/0 | ユビオサエ・ ナデ | ナデ | 端部付近外面二次 被熱により表面に 亀裂 |
| | 821 | | 高エネ地区 13L | 土製品 | 輪羽口 | ①残存長4.9+ a ②残存幅 3.8+ a ③最大 厚1.8 | 1-3mm大砂粒多く含 む | 良 | 内：灰白色-灰色7.5Y8/2.7/1-6/7・ 外：灰色7.5Y6/1 | ユビオサエ | ナデ | 端部外面二次被熱 により劣化・すわ ずかに付着 |
| | 822 | | 高エネ地区 13M | 土製品 | 輪羽口 | ①残存長6.0+ a ②残存幅 4.0+ a ③最大 厚2.4 | 1mm大白色粒含む | 良 | 内：灰白色-灰色N8/0-6/0・ 外：灰白色-灰色N8/0-6/0・浅黄色 2.5Y7/3 | 不明 | 不明 | 端部付近内外面と も青灰色 |

| 図 番号 | 遺物 番号 | 西報告・ 掲載図 番号等 | 出土地点・ 遺構等 | 種類 | 器種 | 法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 調整(外面) | 調整(内面) | 備考 |
|---------|----------|--------------------|---------------|-----|-----|---|--------------------------|---------|--|--------|--------|--------------------|
| | 823 | | 高エネ地区 13K | 土製品 | 輪羽口 | ①残存長3.3+ a ②残存幅 3.0+a ③最大 厚1.6 | 大粒砂粒多く含む | 良 | 内：にぶい褐色7.5YR6/3・ 外：灰白色-灰色5Y7/1-6/1先端部： 灰オリーブ色7.5Y6/2-5/2 | 不明 | ナデ | 外面に砂粒・滓付 着・内面赤化 |
| | 824 | | 高エネ地区 13J区 | 鉄滓 | 椀型滓 | ①残存長7.4+ a ②残存幅 7.1+a ③残存 高4.2④重量 247.5 | | | | | | 磁性有(弱) |
| | 825 | | 高エネ地区 13J区 | 鉄滓 | 椀型滓 | ①残存長9.5+ a ②残存幅 7.3+a ③残存 高6.4④重量 360.7 | | | | | | 磁性有(弱) |
| | 826 | | 高エネ地区 13K区 | 鉄滓 | 椀型滓 | ①残存長23.5 ②残存幅8.6+ a ③残存高 4.1④重量363 | | | | | | 磁性有(弱) |
| 図153 | 827 | | 不明 | 瓦 | 鬼瓦 | ①最大長 11.0+a ②残 存幅8.7+a ③最大厚3.9 ④重量275 | 砂粒少量含む | やや 軟 | 灰白色7.5Y8/1-7/1 | | ナデ | |
| | 828 | | 不明 | 瓦 | 鬼瓦 | ①最大長7.9+ a ②残存幅 8.7+a ③最大 厚4.5④重量 185 | 2mm大砂粒少量・1mm 以下白色粒子含む | 良 | 灰白色-灰色N8/0-6/0 | | | |



1 6L区 SB001 (東から)



2 8H区 SB203 (南東から)



3 7G・H区 SB214 (南西から)



4 11I区 SX402 (東から)



5 エリアⅢ SX301 (西から)

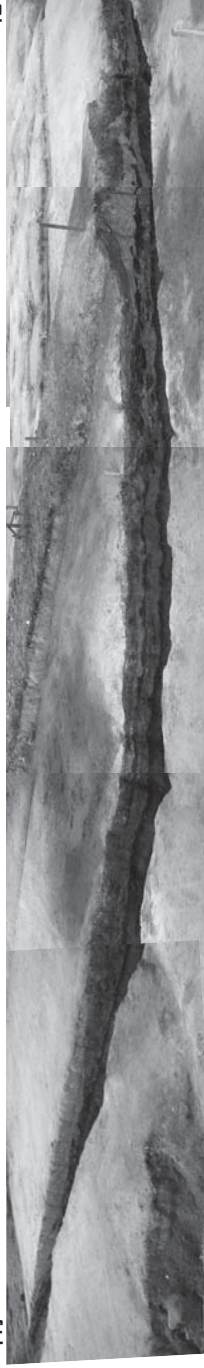


6 エリアⅢ SX301 (北から)



SX301 版築土層断面①(北より)

南

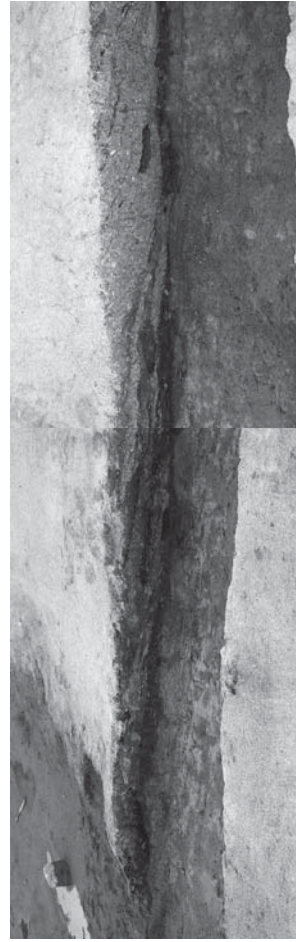


版築土層断面①・西壁全景(東から)

北



版築土層断面①・西壁北半—中央部(東から)



版築土層断面①・西壁南端部(東から)



版築土層断面①・西壁南部(東から)

7 SX301 版築土層断面①



8 13L・M区 SD701



9 13・14K・L区 SX602 遠景（東から）



10 13・14K・L区 SX602 近景（南東から）



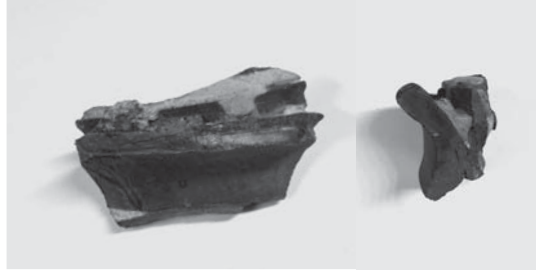
11 SD316 出土石釧



12 SB214 出土鉄器



611



617



620



642

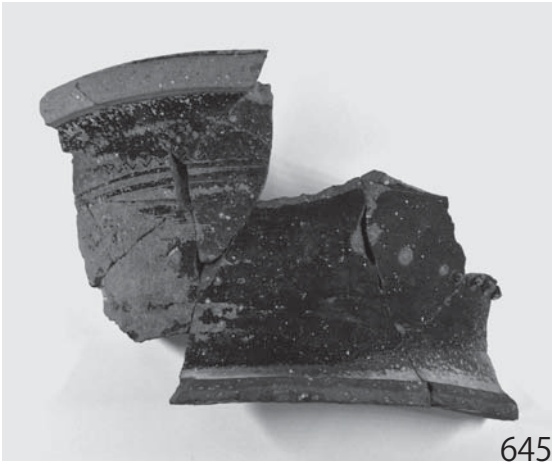


643

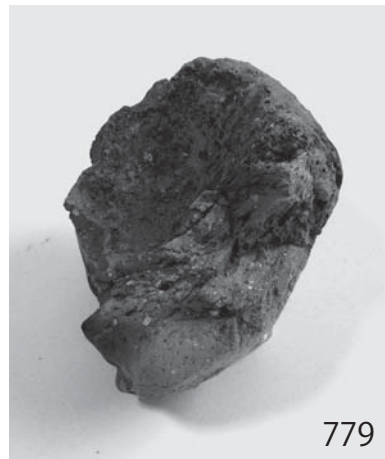
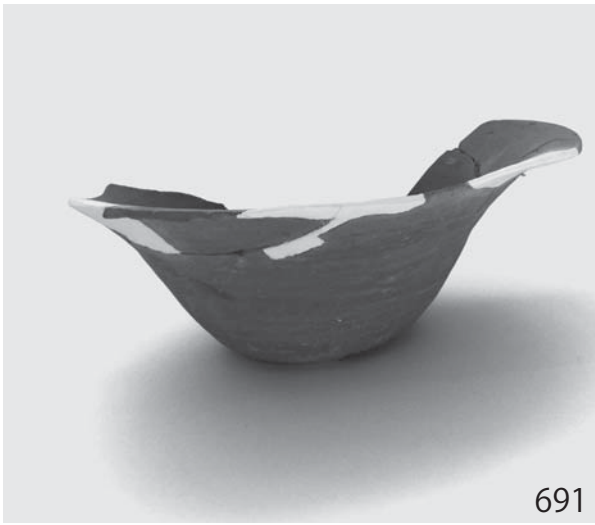


644

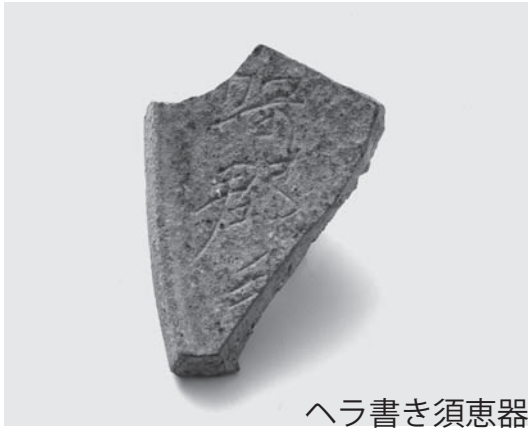
13 SX402 出土遺物 (1)



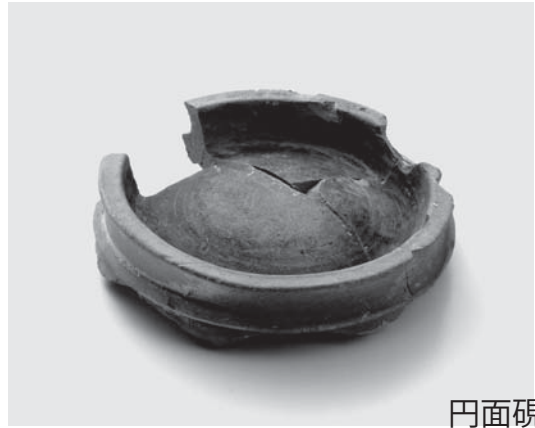
14 SX402 出土遺物 (2)



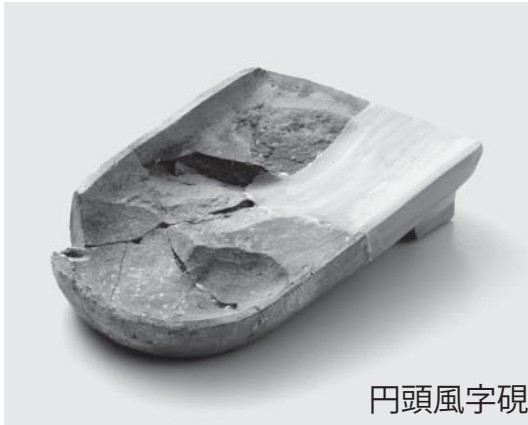
15 SD701 出土遺物



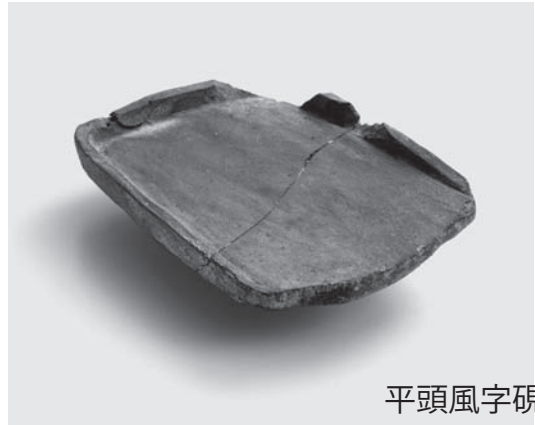
へら書き須恵器



円面硯



円頭風字硯



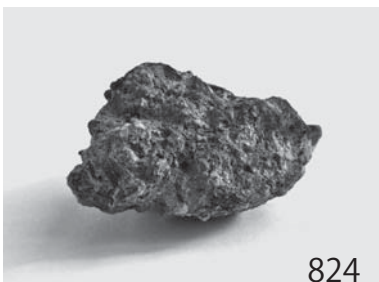
平頭風字硯



「白玉帯」丸鞆



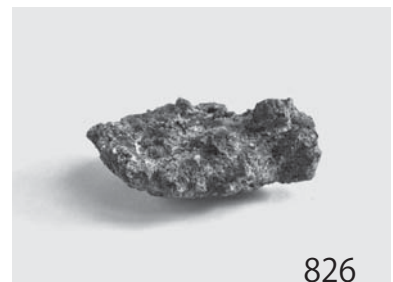
819・権状製品



824



825



826

鉄滓



17 出土瓦

報告書抄録

| ふりがな | きゅうしゅうだいがくちくしきやんぱすいせきぐん（ごくでんいせき）そうかつほうこくしょ2-こふんじだい・こだい・ちゅうせいへん- | | | | | | | |
|-----------------------|--|-----------------|----------|-------------------------------|--------------------|----------------------------|------|---------|
| 書名 | 九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）総括報告書2-古墳時代・古代・中世編- | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 九州大学埋蔵文化財調査室報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第6集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 石川 健（編）・石田智子・上條信彦・田中克典・伊藤 茂・安 昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadze・九州文化財研究所・辻田淳一郎・田尻義了・宮本一夫・坂上康俊・岩永省三・谷直子 | | | | | | | |
| 編集機関 | 九州大学埋蔵文化財調査室 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒816-8580 福岡県春日市春日公園6丁目1 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2021年3月25日 | | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 発掘期間 | 発掘面積 | 発掘原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡） | 春日市春日公園6丁目 | 40218. 40219 | | 33° 31′ 24″ | 130° 28′ 37″ | 1978.11.27 ～ 1998.9. | | キャンパス新営 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| 九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡） | 集落跡・古代官道 | 古墳時代・古代・中世 | 住居跡・土坑・溝 | 須恵器・土師器・瓦器・瓦・鉄器・木製品・木簡・硯・墨書土器 | 古代官道と推定される土橋状遺構の発見 | | | |
| 要約 | <p>1978年から1998年まで九州大学筑紫キャンパス用地における建物新営などの施設整備のため発掘調査を行った。その結果、縄文時代から中世までの遺構を検出した。また縄文土器、弥生土器の他、須恵器や瓦器等が出土している。このうち古墳時代以降古代末から中世にかけての遺構・遺物について、古墳時代では堅穴住居跡・土坑・井戸・溝状遺構、古代では官道と推定される土橋状遺構、土坑、溝などを検出した。古代末から中世にかけては焼け歪んだ瓦器や土師器とともに土器の焼成に使用されたと考えられる棒状土製品をはじめとする窯道具が伴出する土坑・井戸などを検出した。遺物は古墳時代は前期の石劔が溝から分割された状態で出土した。後期は須恵器および土師器が住居跡や溝、灰原の可能性のある遺構などからまとまって出土した。古代官道と推定される土橋状遺構を挟む東西の各調査範囲からは奈良時代および平安時代前期の瓦が溝などから多量に出土した。奈良時代の瓦を多く出土する溝からは硯・墨書土器・燈明皿・木簡なども出土した。このことから官道西側の丘陵上に寺院跡が存在した可能性が明らかとなった。また、官道東側の調査域からも奈良時代の瓦に加え、平安時代前期を主とする瓦が溝や包含層から多く出土しており、かつ木簡も出土している。そのため、瓦葺きの官衙的施設が官道東側に存在していたことが明らかとなった。古代末から中世にかけては焼成不良の瓦器・土師器とともに土器焼成のため窯で使用されたと推定される各種窯道具が出土していることから、瓦器を中心とする土器の焼成が本遺跡群内で行われていたことが明らかとなった。</p> | | | | | | | |

九州大学筑紫キャンパス遺跡群（御供田遺跡）

総括報告書2 ー 古墳時代・古代・中世編 ー

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第6集

2021(令和3)年3月25日

発行 九州大学埋蔵文化財調査室
春日市春日公園6丁目1

印刷 有限会社 九州コンピュータ印刷

